

マギレコRTA ワルプルギス撃破ルート脳筋傭兵チャート

スパークリング

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

レギュレーション

- ・本編開始1年前スタート
- ・ゲーム難易度はハード
- ・ニューゲームと同時に計測タイムスタート、ワルプルギスの夜を撃破時にタイムストップ

(淫夢要素は) ないです。

完走しました。

淫夢語録の使い方を掲載しています。参考までに、どうぞ。 <https://syosetu.org/?mode=kappa|view&kid=250815&uid=72176>

よもぎもぎ様より本作主人公、星奈百恵の素敵な支援絵を頂きました！ ありがとうございます！

<https://img.syosetu.org/img/us>

<https://img.syosetu.org/img/us>

<https://img.syosetu.org/img/us>

<https://img.syosetu.org/img/us>

## 目次

ほんへ

RTAパート1	ニューゲーム	1
Side	八雲みたま 傭兵と調整屋	12
RTAパート2	第一次みかづき荘解散(前篇)	25
Side	七海やちよ 力の化身	35
RTAパート3	第一次みかづき荘解散(後篇)	59
Side	七海やちよ 魔法少女の真実	70
RTAパート4	踊る組長大捜査線	87
Side	胡桃まなか 第一回料理教室	99
RTAパート5	組長と兎と傭兵	113
Side	常盤ななか 交渉人	126
RTAパート6	魔法少女育成計画	146
Side	御園かりん わたしは『傭兵』	157
RTAパート7	バイバイ、また明日	178
RTAパート8	魔法少女好感度調整	192
Side	七海やちよ 崩壊の足音	203
Side	八雲みたま 異変の正体	219
RTAパート9	そしてアザレアの花咲く	233
Side	遊佐葉月 神浜最強と最古参	245
Side	遊佐葉月 つつじの家	260
RTAパート10	CROSS CONNECTION	274
Side	静海このは しずみんクッキング	283
RTAパート11	散花愁章(前篇)	297
Side	更紗帆奈 混沌の幕開け	310

	Side.	更紗帆奈	混沌の裏側	324
	Side.	更紗帆奈	最凶と最強	341
	RTAパート12	散花愁章（後篇）		364
	RTAパート13	マギウスの翼		378
	Side.	更紗帆奈	独り立ちの日	393
	Side.	梓みふゆ	希望の星	412
	RTAパート14	マギウス		434
	Side.	梓みふゆ	希望の赫怒	447
	RTAパート15	はじまりのいろは		469
	Interlude.	嵐の前の		477
	RTAパート16	神浜うわさファイル		498
	Side.	七海やちよ	絶望	508
	Side.	七海やちよ	タイムリミット	524
	RTAパート17	ウワサの守り人		542
	Side.	七海やちよ	真実を知る者 待ち続ける者 立ち向かう者	556
	RTAパート18	真実を語る記憶		571
	Side.	七海やちよ	彼女はなんのために	584
	RTAパート19	楽園行き覚醒前夜		599
	Side.	梓みふゆ	墮とされた希望	614
	Side.	七海やちよ	集結する魔法少女	640
	Side.	八雲みたま	助けたい人のために	652
	Side.	胡桃まなか	神浜最強のウワサ	666
	Side.	遊佐葉月	地下聖堂に続く階段	679
	Side.	静海このは	ウワサの神浜最強	693

	S i d e . 更紗帆奈 のぼしたてのひら	708
	H u n d r e d R e c o l l e c t i o n s (前篇)	721
	H u n d r e d R e c o l l e c t i o n s (中篇)	736
	H u n d r e d R e c o l l e c t i o n s (後篇)	755
	S i d e . 常盤ななか 再起の鼓動	768
	R T A パート20 浅き夢の暁	786
	S i d e . 御園かりん 先輩と先生	799
	S i d e . アリナ・グレイ ベストアート	810
	S i d e . 御園かりん 似た者同士	823
	R T A パート21 L a s t M a g i a	835
	S i d e . 七海やちよ 神浜最強	846
	おま○け	
	※ネタバレ注意 設定資料集※	859
番外編	S i d e . 八雲みたま 怪談白物語	875

ほんへ

## RTAパート1 ニューゲーム

はい、よいスタート。

何番煎じかは知らんけどクソレス魔境都市神浜を全力ダツシユするRTAはーじまーるよー。

早速ニューゲームをポチツとな、それと同時にタイマスター！  
漢ほんは黙もって難易度ハード。え？ ルナティックじゃないのかつて？ あんなんじゃゲームになんないよく（棒読み）。

気を取り直しまして難易度を選んだらお次はキャラクター制作です。ここ←重要ですよ！

なんてつたつて今回のRTAの目標はワルプルギスの夜を討伐ですからね！ エンブリオ・イブに喰わせるとかじゃなくてちゃんと倒しますよ！ 難易度ノーマルまでなら原作通りの面子を揃えていればワルプルギスの夜を倒すことができますが、今回はハードモードですのでそう簡単には問屋が卸してくれません。裏で手を回してソシャゲと全く同じ展開に持ち込むという没企画がありましてですねえ、黒羽根として原作キャラと極力接触せずに奔走して「(あとは)どうかしろ(無責任)。じゃあ俺、タイムもらって帰るから」って家に帰って暢気に寝ていたら神浜が地図から消えていました。ワルプルギスの夜に挑むルートで走るときは他人任せにはいけない(戒め)。ということだね、真面目にキャラクリして参りましょう。

今回調教する魔法少女は、前衛型。積極的にワルプルギスの夜を殴り続けるアタッカーを作っていきたいと思います。なんでかって？ そりゃあアタッカーが強ければ倒す速度も上がるからだよ(脳筋)。ただし本格的に作らないと使い魔に踊り頃される(3敗)のでいつも以上に気合いを入れてキャラクリしないといけません。

そういえばRTAなのにこんなにダラダラ喋喋っていいのかって？ 大丈夫ですよ。だって今絶賛リセマラ中なんですからね！

いやですねく、実はこのゲーム。初期ステが完全ランダム仕様なん

ですよ。魔法少女のステータスは《魔力》《攻撃》《防御》《速度》《経験》《精神》の6つの要素によって構成されています。初期数値は全て1〜100で、《攻撃》《防御》《速度》《経験》《精神》は戦闘をこなして見たままさんの靴を舐めれば上がりますが《魔力》だけは固定値です。そして《魔力》が高ければ高いほど、戦闘できる時間が長くなっていきます。つまり《魔力》が高くないと、神浜がドンパチ賑やかになるワルプルギスの夜との長くなるであろう戦闘を持続できません。すぐにソウルジエムが濁ってしまうので、ドツペルを出しまくって精神崩壊したり状態異常になったりしてしまいます（4敗）。だから頑張って高い《魔力》が出るまでリセマラする必要がありますね。

あ、でも《魔力》が高くても他がクソザコナメクジなら前衛に出られないのでそれもダメです。特に《精神》。これは《魔力》の次に重要な項目です。これがママさんレベル（40）だと魔法少女の真実を知った瞬間発狂します。30以下はもはや精神異常者です。50以上はないとダメです、安心して走れません。あと《魔力》が高すぎるのもダメです。変な因果が付けられてガバリまくります（6敗）。

よってこちらとしては《魔力》70〜80、《精神》50以上を狙ってリセマラを続けています。ちよつとくらい、時間かけてもバレへんか……。でも早く本編に行きたいからなく。頼むよ。

さあ、なんやかんやでリセマラ5週目にイキますよ〜イキますよ〜イクイク……ヌツ！（結果が）で、出ますよ……。

《魔力》90！ 高スギイ！ こいつはリセマラ続行のニオイがプンプンするぜ！ はい次

《精神》56！ うん、まあまああの及第点。これで《魔力》がもうちょい低ければなあ……。これはリセマラ続行ですかね、はい次。

《攻撃》……100。 ファツ!? ひゃくう!?! なんやこの脳筋！  
初めて見たぞおまつ！

他のステは……《防御》23、《速度》68、《経験》31……当たらなければどうということはないな！ 《魔力》が少し高すぎる事が唯一の懸念点ですが、それ以外の項目がこのRTAにピッタリな性能をしているのでこれで行こうと思います。おまえのことが好き

だったんだよ！（手のひらドリル）

というわけでしょうやつとりセマラしゅーりよー！ お次は名前と

『願い事』の内容を決めていきましよう！

まずは名前です。「ほも」は置いてきた。名前が「ほも」とかただの虐待だからね仕方ないね（レ）。（児童虐待は）まずいですよ！

まあでもりセマラで結構ロスが発生してしまいましたので、ぱっと思いついた『星奈<sup>ほしな</sup> 百恵<sup>ももえ</sup>』にします！ レアな100なんてステが来てくれたんですからね、それにちなんだ名前にしてみました！ 蛇足なんですが苗字と名前の頭文字で略すとホモになります。やつぱりホモじゃないか（憤怒）。まあさすがにホモちゃんホモちゃん言うのは可哀想なので百恵ちゃんと呼びますけどね。なぎさちゃんの苗字と名前が被っていますですが漢字が違いますし、そもそもなぎさちゃんは出てこない（断言）ので大丈夫です。

そして肝心の『願い事』！

今回は戦闘特化のキャラに仕上げますからね、当然願いもそれに寄せていきます。

願い事一覧表に則るか自由入力で決めるかの選択ですが、今回は一覧から選びましよう。百恵ちゃん好みじゃないかなあつて思いますよ。

ずばり『力が欲しい』です！ シンプル・イズ・ベスト！ 脳筋に相応しい素晴らしい願いですね。

初期ステを強化できる願い事のひとつで、この願いは純粹な戦闘能力の向上に特化しています。幻覚やら拘束やら時間操作やらの変則的な固有魔法を獲得しない代わりに、『魔力』以外の5つのステータスに50ポイント好きなように振り分けることができます。うん、おいしい！

とりあえず『経験』に30ポイント、『精神』に20ポイント割り振りましよう。経験豊富だと戦闘中に相手の動きや特徴をある程度読めるようになります。それで回避すればダメージを負わずに済むって算段です。『防御』なんか必要ねーんだよ！

さらに『精神』が高いとどんな状況でも冷静に動くことができるの



で、自然と合理的で理性的な性格のキャラを作ることができます。こういった初期ステータスの組み合わせを覚えておくと自分に合ったキャラが作りやすくなるからいいゾ〜コレ。

さて、名前も『願い事』も決めましたし、あと大事なのはスタート時期と年齢と住所です。

スタートは本編開始一年前です。本編が始まる前に原作キャラとの関係性を確認、調整をしつつ魔女狩りをしてステータスアップを図ると同時に、本編が始まるまでに起き得る致命的なシナリオ崩壊を防止します。

かなえやメルがご存命だったり(3敗)、更紗帆奈さらさほんなが適切に対処されていないかったり(8敗)、「あ、あやめーっ!」になっていたり(6敗)、ネームドキャラが魔法少女スレイヤースレイヤーに札害しやくがいされていたり(12敗) etc…と挙げていつてはキリがありません(計31敗)。これらの不安要素を消すためにもしっかき一年前から対処しなければならぬいんですね。

年齢は18歳です。本編開始で19歳になるのでYC YしよーやMFYみふゆさんと同い年になります。大学生はいいゾ〜。時間が確保しやすいのでお勧めです。

魔法少女歴は初期ステの数値の合計で決定します。この場合は確定でベテランです。このステのルーキーだったらかなりヤヴァイですからね。自動的に三年以上で設定されます。ここはランダムでいいです。

最後に住所です。ランダムにお任せすることもできますが、神戸市以外になると後述する『交友関係』というシステムの旨味が薄れる上に恐ろしいことが起こる可能性があるのです。しっかき住所は神戸市にします。見滝原市や風見野市ならともかく、あすなる市とかホオズキ市とかになっちゃったらあーもうめちやくちやだよ(2敗)。

神戸を選択した場合次に出てくるのは西と東の選択ですが、ここは迷わず西を選びます。大抵の重要なキャラが西側に集結しているの  
で西を拠点にするのが無難です。最後に具体的にどこの区なのか、どこの学校に通っているか選択できますが、どこでもいいので選びませ

ん。自動ランダム機能くんにお任せします。

ということで大らかな大らかなキャラクリ終わり！ 閉廷！ 以上！  
みんな解散！ あとは全部ランダムでいいよランダムで！ いやあ、リセマラは強敵でしたねえ。キャラクリだけで大分タイム使っちゃいましたけど収穫はありました。ここから充分に巻き返すことは可能でしょう。

キャラクリが終わったのでいつもの無限ループOPが始まりました。このOPが流れている間にこちらが設定したキャラをコンピュータが物語に組み込んでくれています。今回は『願い事』を一覧から選んでいますし、ランダム設定も多いのでロードの時間はそんなにかからないでしょう。当然ですが凝って作れば作るほどロードに時間がかかります。

さて、丁度いいのでここで今回のチャートについての説明をしましょう。

今回の最終目標は冒頭でも説明した通りワルプルギスの夜を打倒することです。ということ、『マジウス』の皆さんに、何が何でもワルプルギスの夜を神浜に呼んでもらわなければなりません。

ノーマルまではワルプルギスの夜は確実に同じタイミングで来てくれますが、ハードになると来てくれない場合があります。

みかづき荘メンバーがウワサを上手く対処できずにマジウスたちにワルプルギスの夜がいらないと判断されてしまったり(5敗)、逆に上手くいきすぎてワルプルギスの夜が呼ばれる前に完全決着したり(9敗)、なぜか早くエンカウントしたいろはちゃんが頃されて本編が始まらなかつたり(3敗) e t c . . . これらのシナリオ崩壊のせいで来てくれない場合があるんですよ(計23敗)。

なので極力原作通りの展開になるように誘導しつつ、マジウスたちに危機感を持たせるためにウワサ絶対傾すウーマンになって無理矢理にでもワルプルギスの夜を神浜に来させます。ただし呼ぶのが早すぎると神浜魔法少女の団結が間に合わずただただ蹂躪されて終わる(2敗)ので、ほどほどにウワサを駆除します。基本的にみかづき荘のメンバーと同行して出てきたウワサを全部退治すれば条件達成

なので、正統派のチームみかづき荘ルートで走っていきます。調査はみかづき荘組に任せて、戦闘するときだけ呼んでもらえるように振舞いましょう。

そのためにも第一次みかづき荘入りだけは避けないとダメですね。加入していたら一緒に調査するのを手伝うことになってタイムロスしますし、下手するとチーム解散がなくなる可能性があります（1敗）。

……つと、おっ？ ロードが終わりました！

ゲームスタートですね！

こ→こ←は……自宅のようですね。天井を見上げているところとは寝ていたみたいです。そしてけたたましいスマホのアラームが鳴っています。うるさいんじゃない！（アラーム消し）

ふう、とりあえず第一リセットポイントであるみかづき荘スタートじゃなくて安心安心。どこかのマンションの一室ですね。ひとり暮らしをしているみたいです。現在時刻は午後6時半の日曜日。なんでもない日常の夕方からスタートしました。

メニュー開いて現状確認をしましょう。名前があって次に年齢・身長・体重・スリーサイズ……。なんか百恵ちゃん、すんごいちんまいっすね。身長が143センチしかありません。みゃーこ先輩以下とか……あ、でも胸で勝っているから威厳は保てていそう（ギリCカップ）。とかそんなことはどうでもいいんですよ。ここからが本番なのです。

魔法少女歴は……五年。五年!? ということは本編が始まったら六年目に突入ってことですね、みゃーこ先輩より歴が長い相当のベテラン魔法少女です。これは《経験》に相当なボーナスが付きますね。魔法少女歴×5ポイントのプラス補正がかかるので25ポイントですか。合計86ポイント……はえ〜すっごい。こりゃあ勘だけで不意打ちにも対応できますね。間違いない戦闘力だけで見ると私

史上最強の魔法少女です。肉体労働以外の応用性がないのが致命的ですが。

所属校は神戸市立大附属学校。やっちゃんと同じ学校ですね。これでやっちゃんと同わりがなければアン○ヤツシユばりのすれ違い現象が起こっているとしたら考えられません。

そんでもって……最後の難関、『交友関係』です。もうね、説明不用のリセポイントです。いったい何人の先駆者兄貴たちを初期画面まで回れ右させてきたのかわからない期待と恐怖の入り混じったステータスです。

頼む、アリナは嫌だ……アリナは嫌だ……。愉快で素敵なアートのされる（12敗）……うっかり頃すとシナリオ壊れちゃう（7敗）。あと異常に交友関係が少ないのもアウトだったりします。更紗帆奈の暗示がかかっている可能性が高いです。シナリオ崩壊不可避（3敗）。それから七瀬ゆきか！ 君もダメ！ 余計なトラブル持ってきてタイム壊れちゃう（2敗）。

……と、いうことでマジ震えてきやがりましたが見ていきましよう。今回交友関係を持っているのはっ！

七海やちよ

梓みふゆ

都ひなの

八雲みたま

和泉十七夜

御園かりん

その他モブ魔法少女多数

こ、この配分は……やっただぜ。百恵ちゃん、傭兵稼業をしていますよ。

やっちゃん、みゃーこ先輩、なぎたん、そしてモブ魔法少女多数。この四連コンボがあると傭兵稼業をしていることが確定します。これはチャートの大きなアドバンテージですよ。

傭兵稼業をやっているならみかづき荘からこっちに戦闘の増援要員として呼ばれるでしょうから、こっちはたまに顔を出すだけでシナ

リオに巻き込まれます。タイムを圧縮圧縮ウ！そして当初予定したチャートがいい意味で崩れそうです。より早く、より確実にワルプルギスの夜を対処できるので、色々と仕込んでおかないとなあ。

傭兵稼業をしているのにフェリシアの名前がないということは師弟関係ではないようです。よかったです。これで師弟として好感度が高かったらフェリシアが第二次みかづき荘にメンバー入りしない可能性がありました。

というか今回のネームドは大物ばかりなので若干困っちゃいますね。知り合いだと本当に便利なキャラクターたちなのですが、基本みんな忙しいので意外とエンカウントできないんですよ。電話すれば一発ですけど直接会った方が話しやすいですし、好感度も操作しやすいですからね。とつかかりができるような、丁度いいネームドキャラがないのが残念です。

かりんちゃんとは学校が違いますし……下手をするとクレイジーサイコアーティストがいついてくる可能性があるので積極的には会いに行きたくありません。向こうから来るのは大歓迎ですが。

みたまさんも絡みやすいですけど基本中立で踏み込んだことは滅多なことじゃないと教えてくれませんか。そのみたまさんの好感度が地味に一番高いのですがそれはそれ。公私混同しない中立の鑑。

あつ、そうだ(唐突)。今が何月なのか、ちゃんと確認しなきゃ(使命感)。

今は……6月の後半！ということは『呼び水となりて綻び』が終わった後みたいです。安心しました。スタートが6月なら無事に事件が解決しています。もしスタートが6月以前の場合だと『呼び水となりて綻び』が終わっていません。しかもかなえが何故か生存しているってシナリオブレイクしている可能性もあります。やつちゃんにはかなえとメルを乗り越えてもらわないと困りますので、なにがなんでも犠牲になっていただきます(人間の層)。

さて、ここまですべて条件ヨシ！(現場猫) それではチュートリアルに入りましょう。調整屋に向かいます。そしてそのついでに道中

に強制エンカウントする魔女を倒します。え？　みたまが調整屋を始めるのは『バイバイ、また明日』以降じゃなかったかって？　このゲームの仕様です……と。そんなこと言っているうちに来てくれましたね。画面がぐんにやりと歪みます。

チュートリアルの魔女さんオッスオッス！　今回は砂場の魔女さんですね！　砂のお城、見事なもので……あつ、壊しちゃった。（その出来栄えじや）ダメみたいです。というわけで初魔女戦じゃーい！　イクゾオー！　デツデツデデデデ！　（カーン）

さあさ、変身ですよ変身！　百恵ちゃん、君の魔法少女衣装見せてちょうだい！

ふむふむ……胸のところに申し訳程度の小さな銀色の鎧があるだけで動きやすそうな和服の戦闘着、そして履物は足袋と草鞋。なかなかおしやれです。それで肝心の武器は……明らかに百恵ちゃんの身長以上にでかい両刃剣。それを百恵ちゃんは右腕一本で構えています！　はえ〜すつごい。幼女が2メートルはある大剣を片手で振り回してるよ。さすが攻撃100。武器からして破壊力拔群だ。

さて、服装と武器はよしとして次に確認すべきはソウルジェムの位置です。えつと……あつ、これかあ！　銀色の小物の風車、これがソウルジェムみたいです。普通に戦闘していれば問題ないですね。ソウルジェムをブランブランさせてる歩<sup>七瀬</sup>くトラブル<sup>ゆきか</sup>や素手で戦っているのに籠手にソウルジェムがあるトラブル<sup>志伸</sup>シューター<sup>あきら</sup>みたいな激ヤバ仕様じゃなくて本当に良かったです。

さあ戦闘です。武器からして近接型なのでまず近づいていきましよう。

いやあ、さすがベテラン魔法少女です。向かってくる使い魔に目をくれずとも的確に切り裂きながら魔女に急接近。そしてその勢いのまま飛び出して……ギョングンと大剣を回転させながら魔女を挽肉にしてみました。戦闘終了です。

……百恵ちゃん強すぎィ！　文章にしてほんの数行で戦闘が終わってしまいました。というか本当に脳筋ですね。一切の芸無し手加減無しの無慈悲な一撃で魔女を叩き潰しました。魔力の消費もほ

ぼなし。変身して剣作ってオラアしただけだもんね。

なるほど。変な技を使う魔女もそんなの関係ねえ（K J M Y S O）  
と言わんばかりの先手必勝で狩り続けていたんですね。R T A 的にも素晴らしいです。大幅なタイム短縮に繋がります。これって、勲章ですよ……。

そして粗挽き肉と化した砂場の魔女さんが完全に消えると……出てきました、グリーンフィードです。グリーンフィードをドロップしない魔女の屑もいますが、チュートリアルの魔女さんは必ずドロップしてくれます。戦闘によって得られる経験値も割高です。やっぱ……チュートリアルの……魔女を……最高やな！ みんなも感謝しながら倒して差し上げましょうね！

チュートリアルも終わったところで、改めて調整屋にレッツラゴー！

「いらっしやうい♪ あら、モモちゃん。入って入って♪」

ここがあの女のハウスね……。

調整屋さん

というわけでやってまいりましたレズ風俗です。初回なので店主であるみたままさんによるチュートリアルを受けることになります……なんと二週目以降かつ交友関係を事前に築いている場合に限りスキップすることができます！ 走者に優しい店主の鑑。

でもちよつと近くないですか？ 愛称で呼んでいますし、これは思った以上に親密な間柄ですね。いいことです。オッス、（調整）お願いしまーす。

さて調整が終わったら……やってきました最初のセーブポイントです！ ぬわあああああん疲れたもおおおん！ チカレタ……ようやつとセーブできますよ！ じゃけんセーブしましょうね。（もうリセマラはやりたく）ないです。

ちなみに魔女との戦闘によって発生した経験値は《魔力》《経験》以外の四つに割り振れます。《魔力》は前に話した通り固定で変動なし、

《経験》は戦闘を終了する毎に1ポイント獲得できます。

今回獲得していた経験値は……5ポイント！ 初回で色付けているのに5ポイントですよ奥さん！ しょぼいですがこれがベテラン魔法少女の欠点です。貰える経験値がしょっぱいんじゃないやあ。

ちなみに魔法少女歴一年未満のルーキーだったら30ポイント、一年から二年の経験者なら10ポイント獲得した状態でゲームスタートです。まあその分、ベテランに比べて全体的に初期ステータスが低いんですけどね。

とりあえず今回は《攻撃》に3ポイント、《速度》に2ポイント割り振りましょう。

さて、セーブも終わったし調整も終わったので帰りましょう。お代の新鮮なグリーンフシードだ受け取れえい！

「お代はいらないわよ〜」

え、いいんですか？（素） 調整のお代無料なんて初めてなんですけど……まあいいか！ タダで調整ありがとナス！ 経験値稼いだらまた来るんだぜ！

「あ、そうそう。はい、モモちゃん。無理はしないでね〜」

なんか紙切れを渡されましたね。

これは……仕事じゃな！ 受けます受けます（食い気味）。

どうやら調整屋が百恵ちゃんの仕事の窓口になってくれているみたいですね。毎日来ないのですが調整するためにわざわざ足を運ぶ手間も省けますし、特に問題はないですね！ 紹介料の千円をみたまさんの手に握らせてお店から出ましょう。

さて、セーブを終えて仕事ももらったところで今回はここまでにしましょう。

ご視聴ありがとうございました！



## Side. 八雲みたま 傭兵と調整屋

彼女との出会いは、先生との出会いに次いで衝撃的なものだった。「八雲、グリーンフシード調達の件だが……さすがに厳しくなってきた」わたしこと八雲みたまが魔法少女になつて数ヶ月が経とうとしていたそんなある日の夕方、新西区郊外にあるわたしが拠点になっている廃墟になった映画館『神浜ミレナ座』で苦しい顔をした親友から告げられた。それは、いつの日にか、それも近いうちに言われるだろうなと薄々感じていた言葉だった。

先生と仰いでいる人から調整の技術を授かつて味方の魔法少女を強化する術を手に入れたわたしだったが、先生と違ってわたしには魔女相手に戦う術がなかった。あるにはあつたけれど、圧倒的に手札が少なすぎたし使い勝手もそう良くはない。本当に戦いには向いていない魔法少女の典型例、それがわたしだった。

そんなわたしを助けてくれたのが親友、和泉十七夜だった。十七夜はわたしの調整の力を受ける代わりにグリーンフシードを融通してくれていた。学業は勿論のこと、東の魔法少女のまとめ役として色々な魔法少女から相談を受け、家事をし、バイトをして、魔法少女としての本業もこなす。いつも忙しい立場だった。だから……遅かれ早かれ、ふたり分のグリーンフシードを確保し続けることが困難になることは想像できていた。

わたしも腕を上げて、調整だけでなく魔法少女のための便利アイテムの開発を進め、いよいよ独り立ちをしようと思っていた、そんな矢先の告白だった。

「そう……でも、仕方ないわあ。わたしは大丈夫よ。調整屋さんとしてデビューしようとしていたところだったし、平気よ」  
半分は強がりだった。

調整の腕には絶対の自信があるし、作ったアイテムだつて十七夜の太鼓判をもらえるほどのクオリティにまで昇華することができた。店として提供するサービスに問題はない。この廃墟を拠点にするつもりだし、家財道具も一通り揃えたから場所も問題ない。

でも……問題は信用だった。

いきなり「あなたを強くできるからソウルジェムを貸して？ 代わりにグリーンフィードをもらうけどね」なんて言う人が出てきたら誰でもあろうが絶対に警戒する。ソウルジェムがないと魔法少女に変身できないし、グリーンフィードは魔法少女の生命線。そのふたつを一気に寄越せなんて言われて「はいどうぞ」と手渡す人間はまずいない。だからもう少し顔を広くしてある程度の信用を得てからから開店させたかったのだけど……こうなっては仕方ない。

これ以上十七夜に迷惑はかけられないし、地道に信用を勝ち取ろうと腹を括ろうとしたとき、十七夜は続けて言った。

「待て、話はまだ終わっていない。安心してくれ。新しい伝手を見つけてある」

新しい伝手？ わたしにグリーンフィードを渡してくれる人の？

そんな都合の良い人がいるのかを口に出そうとしたとき、閉まっていた廃墟の扉が開かれる音がした。

「来たようだな。時間は……丁度か、相変わらず律儀なやつだ」

どこか安心したように笑いながらスマホを見ている十七夜。いつも相談事を持ち掛けられ、色んな魔法少女を心配している十七夜のこんな安心しきった表情は珍しかった。

小さな足音がこつちに向かってくる。まっすぐに、ぶれずにここにわたしたちがいることがわかっているかのように。そして……。

「来てやったぞ。久しいのうお主」

古風な口調の穏やかな表情で笑う女の子がやってきた。

ぴよんと飛び出た一本のアホ毛に左肩に乗せた黒髪のしつぽへアー、青みのかかった瞳を持つ女の子。

……でも、その……すごく小さい。

身長的にはやや小柄な十七夜よりも彼女は小さかった。145センチ……もないのかもしれないくらいに小さい。……え？ 小学生？

彼女はしばらく十七夜と言葉を交わしていた。連絡は仕事以外に

も寄越せとか、どうせ仕事絡みだろうとかそんな小言を言った後、そのクリクリとした瞳を私に向け、人懐っこい笑顔を花咲かせると……  
「して、此奴の言う私の客とやらは……お主で間違いないのかの？」  
「かつ……かつわいいっ！」  
「うにゃーっ!？」

こてんと首を傾げた彼女を見たわたしは自分の欲望に勝てず、初対面であるのにもかかわらず彼女を抱きしめてしまった。んもう、最高にかわいい！ なんなのこの子！

こんな小さいのにおばあちゃんみたいな話し方をするギャツプといい、愛らしい仕草や表情といい、かわいい女の子が大好きなわたしにとってはまさに天使のような子だった。……ん？ 意外と胸があるわね？ 最近の小学……いえ、中学生は発育が良いのねえ。

「離せ！ 離すのじゃ！」

わたしの腕の中でジタバタもがく彼女を無視して堪能していると、嘆息した親友の声が耳に届いた。

「八雲。言っておくが、彼女はお前よりも年上だ」

「えっ」

え？ 年上？ ワタシヨリモトシウエ？

啞然として力が抜けたわたしの腕からすり抜けるように逃れた少女はパンパンと制服を正す。冷静になって彼女を見て遅れて気付いたけど、着ている制服は神浜市立大附属学校のものだった。

「仕切りなおすぞ。八雲、彼女は星奈百恵。お前の新しい武器だ。そして星奈、彼女が八雲みたま。お前の新しい客だ」

咳払いをした後に要点を絞ったシンプルすぎる十七夜の紹介に彼女は溜息を吐き、改めてわたしに自己紹介をしてきた。

「星奈百恵、なのじゃ！ こんななりでも高校三年生、つまりお主の先輩ということになるのう？ もちろん魔法少女としてもじゃ！ じゃからもつと敬ってもよいのじゃぞ？ いや敬うがよい！」

そしてふんすと地味に大きい胸を張りながらどや顔で先輩アピールをしてきた。

……………。

「……ねえ、十七夜。その……大丈夫なの？」

「無視された上に残念そうに見られとる!？」

急に不安になったわたしの反応にシヨックを受けたらしく、肩を落としてしょんぼりしていた。アホ毛も元気なく萎れてしまっている。見た目もそうなのだけど、言動や仕草のせいで背伸びしている子供のようにしか見えない。先輩としての威厳がまるで感じられず、頼りになるとは思えなかった。むしろこっちが手助けしてあげたくなくなっちゃうくらいよ。

「まあ、最初はそうなるだろうな。だがその意識はすぐに改められるだろう——こいつの魔女退治を見ればな」

十七夜は落ち込んでいる彼女の機嫌を直すと、わたしたちはそのまま夜の神浜に繰り出した。

新興都市神浜。

数ヶ月前までは減少傾向だった魔女も今では異常なまでに増え、東と西の確執があるものの、それでも縄張り争いがほとんど起こらないくらい魔女で溢れている、魔法少女の間では割と有名な魔境都市だ。魔法少女であるわたしたちにとってはもはや日課である夜のパトロール。ほとんど十七夜と一緒に回っていたからか、他の魔法少女を加えた三人でパトロールするのは新鮮な気持ちだった。その人が鼻歌を歌っていてまるで緊張感がなかったからかしらね。

歩くことしばらくして、ふらふらとした足取りでどこかに向かう人々を見つけた。目は明後日の方向に向いていて、「ああすれば、こうすれば」と呟きながら廃墟のビルの階段を上っていく。……明らかに魔法の口付けを受けていた。

彼らを追うことでわたしたちは魔法の結界を突き止めた。階段を上った先に辿り着く屋上に出る錆びた鉄製の扉。それを開けた先にまたひとつ扉があった。ただし、周りには鍵を持った指のような形の使い魔が無数に存在する。そして、扉までの距離が長い。……魔法少女になって日が浅いとはいえこれはわかる。

口付けされた人の人数は見かけただけでも二十を優に超えていたし、この大量の使い魔に広い空間の結界。ここから導かれる結論は。

「ほう……かなりの力を付けた魔女のようだな」

十七夜が言う通り、ここの魔女が強い部類に入る大物ということだった。

こんな風に十七夜が強いと判断した魔女は、わたしが調整したとしても時間をかけなければいけないレベル。そして十七夜以下の実力の魔法少女ならば……チームで相手をしないと勝つのは絶望的なレベル。だけど。

さつきまで暢気に鼻歌を歌っていた彼女が一步、なにも躊躇うこともなく足を踏み出した。なぜだろうか。小さい彼女の背中が異様に大きく見える気がした。

「八雲、自分たちは見学だ。お前の調整なしのこいつの実力をよく見ておくといい。星奈、お前の力を見せられる絶好の相手だ。全力でやってくれ」

「元からそのつもりじゃとも、抜かりはせんよ。どんな時でも油断大敵じゃ」

につこり笑った彼女は白い光に包まれると……魔法少女に変身していた。

白をベースとした紫や青などの寒色系の色彩の模様が所々に散りまかれた和服の戦闘着。銀色の小さな鎧が胸をぐるりと回り、左肩にかかるしっぽヘアーを銀の風車の小物が付いた簪が纏めている。

そしてその手に持つのは……先がふたつに分かれている大剣。しろがねいろ白銀色と黒銀色の二匹の龍の紋様が刻まれている左右対称に分かれた刃の部分だけでも小柄な彼女の身長・肩幅並の巨大なもの。使い手とはアンバランスな武器だけど、それを彼女は片手で軽々しく担いでいる。

魔法少女に変身したことで漏れ出た魔力に使い魔が反応し、突進してきたり鍵を投げてきたりするけど、彼女は特に慌てもしなかった。

「やて……ゆくぞ」

そのまま大剣を手の上で回し……向かってきた使い魔たちへ横一線に薙ぐ。

風を切る音を耳にした時には目の前に迫ってきていた使い魔のお

およそ半分が両断され、投げってきた鍵が吹き飛ばされている。

仕留めそこなった使い魔たちを確認した彼女はようやくその場から動き、次々と使い魔たちを両断していく。

「魔力を込めていない剣圧だけでこれか……。久々に見るが、凄まじい力だ」

油断大敵と言っているけど全力で戦っているわけでもない。けれどそれでもこの破壊力を誇る彼女の攻撃。魔力を上乗せして放ったならどんな威力になるのか、考えたくもない。

「何者なの、彼女」

「……この街には西と東に溝がある。それは八雲も痛いほど理解していると思う」

それはもう……。わたしが魔法少女になったのもこの確執のせいだし、本当に今思い出してもやり場のない怒りが沸いてくるほど、下らない東西事情だった。

「星奈は唯一、西でも東でも魔女狩りを許されている特別な魔法少女だ。理由は……。彼女がどこにも属していない傭兵だからだ」

「傭兵？」

「ああ、傭兵だ。……世の中にはまともに戦うことができない魔法少女がいる。だがそれは大きく分けてふたつのタイプに分別される。ひとつは単純に、能力が戦いに向いていないタイプだ」

主に強化魔法や治癒魔法、または搦手などの戦闘以外の能力が特化しているサポートタイプ……。わたしのことだ。でもそれだけなら実はこの神浜じゃそこまで問題がない。

神浜は魔女が多いうえに一体一体が強い傾向にあるからチームを組んで互いに助け合うことができれば、たとえ戦闘に向いていなかったとしても重宝される。だからわたしは十七夜に迷惑はかけていたと思うけど、足を引つ張っていたとは思っていなかったし、十七夜もわたしのことを悪くは思っていないと確信できる。

「だが、問題なのはふたつ目だ。……魔女と戦うことが怖くて戦うことができないタイプ」

魔法少女はたったひとつの願いに全てをかけ、死と隣り合わせの

日々を送る。そういう職業だ。

でも『なんでも願いが叶う』『君には素質がある』という甘言に誘われて、それに気が付かずに契約してしまう子もいる。魔法の恐ろしさを知らずに目先の夢の為だけに契約してしまった子は……よほど強い心を持たない限りは戦うことなんてできない。死ぬかもしれないという恐怖で動けなくなってしまう。そういうタイプの魔法少女は……言い方は悪いけど救いようがない。

魔女と戦うことを引き換えに願いが叶う。それが魔法少女の契約なのだから、願いが叶った以上は魔女と戦わなければならない。これは魔法少女の鉄則だ。願いを叶えてもらってはいいおしまい、そんな都合のいい話はない。

魔法少女とは現金なもので戦いの中で背中を任せられる、またはなにかメリツトがあるなら手を取り合えるけど、任せられないしメリツトもないなら手を差し伸べない。だから、戦うことを恐れる弱い魔法少女は誰にも見向きもされないし、自分から助けてと声を出すこともできない。

「やつはそういった弱い魔法少女たちの希望の星だ。料金は取るが、グリーンシードを融通してくれる。グリーンシードが出なかった場合は出るまで魔女を狩り続けてくれる。だから星奈は東西両方の土地で魔法少女としての活動が認められている。より多くの魔法少女たちの助けになるように。そして星奈自身のためのグリーンシードを集めやすくするために。魔法少女歴五年。神浜では西の統括である七海やちよに次ぐ大ベテラン。どこの組織にも属さず、差別せず、垣根も作らない完全中立の傭兵、それが星奈百恵という魔法少女だ。……自分が尊敬する、数少ない存在でもある」

十七夜が締めくくったまさにその時、小さいながらも大きな傭兵は最後の使い魔を消滅させた。

戦闘開始して数分と経たずにここら一帯を支配していた五十を超える使い魔たちを全滅。チームを組んだ魔法少女でもこの短時間で同じことはできないでしょう。恐るべき実力の持ち主だった。

あつけらかなとした様子の彼女は使い魔が落とした鍵を使って結

界の最深部に続く扉を開く。そこにいたのは片足を縛り付けられた無数のバルーンで構成された魔女。

ふわふわと漂っている魔女はわたしも見たことがあるタイプだったけど、大きさが比じゃない。バルーンの数や体長を考慮しても二倍……もしくは三倍くらいは強さに膨れ上がった大魔女だ。

そのあまりにも禍々しい魔力と力強さに顔が引きつる。十七夜も汗を一滴頬に伝わせているあたり目の前の存在がいかに強大なものなのかを物語っている。

「こんなになるまで放置されておったとは、寂しかったであろう？  
じゃが安心せい。今楽にしてやるからの」

魔女を憐れむように、しかしどこか優しく語り掛けた彼女は駆け出す。魔女も複数のバルーンを使って迎撃するけど小柄で素早い傭兵はすいすいとすり抜け、どうしようもない時は大剣で両断しながら魔女の足元まで辿り着くと――魔女目掛けて一気に大剣を振り上げた。剣圧による衝撃波だけで遠方の使い魔を一掃した彼女の一振りを、至近距離からまともに受けた魔女がどうなるか。結果は目の前にあった。左右で綺麗に真っ二つになった魔女。さらにそこに追い打ちをかけるかのように、振り上げられた右腕を横に一閃。見事に魔女の上半身と下半身を両断した。四等分にされた魔女はそのまま塵と成って消えていく。

「許してくれるな。呪うなら私だけでよい」

塵の中から出現したグリーンフィードを彼女が手に取ると結界が消え、景色が元の廃ビルに戻る。

……強い。あれだけの魔女を十分もかけずに一方的に倒すなんて。しかもわたしが調整する前でこの力。もしわたしが調整したら……彼女はどこまで強くなれるのだろうか。

変身を解除した彼女はパパパパと小動物のごとくこつちに駆け寄ってきてわたしを見る。そしてなにかを期待しているかのようにアホ毛がみよんみよん動いていた。さっきまで容赦ない戦闘をしていた人とは思えないほどかわいらしい。

「どうじゃ？ 凄かったじゃろう？ 敬う気になれたかの？」



……その問いの答えは、わたしにはひとつしか思い浮かばない。

「御見それ致しました。その……バカにしてごめんなさい」

「わっはっは。苦しゅうない、面を上げい！ わかれば良いのじゃよわかればー！」

うんうんと首を縦に振って上機嫌になっていた。……わかつていたことだけど確定した。

この人は先輩扱いか、わかる形で敬う気持ちさえ見せれば機嫌がよくなる。子供扱いするのは絶対のNG。あと多分本心から尊敬されているかどうかも見抜ける。上辺だけの言葉では彼女は見破ってしまうでしょう。

「してどうじゃ？ 私はお主の武器にふさわしいかの？」

「……料金プランはどうなっているのかしら？」

「グリーンシードひとつにつき三千元。これが基本料金じやの」

三千元でグリーンシード……高いように見えてかなり安い。命がけで入手する必要があつて、しかも絶対に魔女が落としてくれるとは限らないものだもの。冷静に考えるなら万単位にはなる。

「じゃが十七夜から話を聞いておる。お主は素晴らしい術を持っておるのだろう？」

「調整、のことかしら？」

「うむ、その調整とやらじゃ。それで手を打とうではないか。私がお主にグリーンシードを提供する代わりに、お主は私を調整し強化する。ギブ&テイクは成立しておるし、問題はあまい」

「……あなたと会ったのは今日が初めてよ？ 大事なソウルジエムを初対面の人に任せられる？」

「なんじゃ、お主は私のソウルジエムに変な細工でもするのかの？」

「そんなことをするようなやつには見えんのじゃがの？」

「いや……しないけど」

「それでは問題あるまい！ せっかくじゃ。その調整とやらをやってみてくれるかの？」

あつさりとわたしを信用して待機状態である指輪を渡してきた。……とりあえずいつも十七夜にやっている方法で調整するとしてま

しよう。

でもこんなところで調整するわけにもいかないのです、場所を移すことに。始まりの場所……神浜ミレナ座に戻る。同じ廃墟でもここには調整屋をする上での必要なものが揃っている。部屋の真ん中にある寝台に横になつてもらつてリラックスしてもらおう。

指輪から透き通った銀色のソウルジエムに変えてもらつて手を触れ……あ、そうだ。

「注意事項があるわあ。調整する際、わたしはソウルジエムを通してその人の過去を見えちゃうの。願い事の内容もね」

「……あいわかった。じゃが少し覚悟しておくことを推奨しておくぞ？」

最後の了承を得た。それじゃあ、やりますか。最強の魔法少女の調整を。

「いつもありがとうなのじゃ。ほれみたま、グリーンフシードじゃ」

朗らかな笑顔で彼女はグリーンフシードを差し出した。

あれから数ヶ月。調整屋さんは無事オープンし高い評判を得ている。

彼女は……モモちゃんは依頼通り、わたしの武器になってくれた。魔法を倒すための剣は勿論のこと、調整屋の広告塔としてもその『力』は絶大だった。

傭兵としての依頼を受ける際、モモちゃんはいつもわたしを同行させてくれた。そして客である他の魔法少女の前で調整を行うことで安全性と効力を保証する。大ベテランの魔法少女であるモモちゃんの発言力は凄まじく、すぐに魔法少女のネットワークを通じて調整屋であるわたしの存在を広めてくれた。

そしてもうひとつ、モモちゃんは調整屋を……わたしを売り込む出来事を起こしてくれた。

もともとモモちゃんは依頼者である弱い魔法少女たちに戦闘に関

する手ほどきをしていた。といつても彼女は特別、武器や能力の使い方を教えていない。使い魔の効率的な捌き方、攻撃を仕掛けるときのポイント、敵の動きの見極め方……などなどの基本的な魔女との戦い方についてだけを徹底して教えていた。そしてそれを実践で叩き込もうとしていた。

結構なスパルタ方式で渋る子も多かったけど、「魔女が怖いなら私とスパーリングするかの？」と聞かれると迷わず魔女と戦うことを選んでいた。……確かにモモちゃんとは戦うくらいなら魔女と戦った方がはるかにマシね。

どこかで自分に自信を持っていない、かつ魔女の恐怖に耐えられないこと。それが自分の意志で戦えない弱い魔法少女たちの共通点だった。だからこそモモちゃんは傭兵として活動をしていた。

単に魔法少女を助けるだけならグリーンフィールドを直接渡して現金を受け取るだけがいい。しかし彼女がわざわざ傭兵として現地調達していたのは、客である魔法少女に自分が戦っている姿を見せて少しでも魔女に対する恐怖を克服させ、自立させるためだった。

料金が三千元と絶妙に高い金額だったのは、『自由に使えるお金を増やすため』という名目で独り立ちを目指せるように促すためだと教えてくれた。年頃の女の子ですもの。価値的に三千元のグリーンフィールドが安いのは承知でも、渡されるお小遣いで考えるなら厳しいものだったに違いない。

だけど、それだけじゃダメだった。自立できた魔法少女は片手で数えるほどしかいなかった。魔女の恐怖に克服できたとしても碌に魔法を使って戦ったことのない彼女たちは経験が圧倒的に不足していたし、なにより魔力をうまくコントロールできず効率の悪い戦い方をしてしまう魔法少女が多かった。そこにわたしが現れた。

わたしはソウルジェムの調整をすることで魔力の循環を良くし、魔法少女の地力を底上げすることができる。わたしの調整を終えた後の彼女たちは明らかに体の動きが良くなって、漲る力が身体に染み渡っていく感覚を味わう。そこで思うのだ。「今のわたしなら戦えるかもしれない」と。彼女たちが自分に自信を持つきっかけはそれで充

分だった。

そして……モモちゃんは最後の一押し of 言葉をかける。

「しっかり見ていてやるからの。じゃから思い切りやってくるがよい」

これでもう彼女たちに迷いはなくなった。見事に自分の力だけで……自分ひとりの力だけで、恐れていた魔女を倒した。それでどれだけ自信が付いただろうか。自分に希望を持てただろうか。

晴れやかな表情でわたしたちに礼を言った彼女たちは、もうモモちゃんを雇うことはなくなった。でも、調整は継続させるためわたしの店には定期的に顔を出してくれている。

こうして、調整屋さんは大繁盛している。今ではモモちゃんの仕事の窓口にもなっていて、わたしを通じてモモちゃんを雇えるように手も回して、紹介・仲介料ということでモモちゃんから千円を受け取っている。いらないうって断るんだけど「いいからいいから」と笑顔でごり押しされては断り切れない。本当、おばあちゃんみたい。だから……。

「お代はいらないわよ〜」

モモちゃんの調整に代金は取らないし、必要ならアイテムだって無料で支給する。

最初は申し訳なさそうで意地でもグリーンシードを渡そうとしてきた彼女だけどわたしの意思を尊重してくれてか、結局折れてくれた。といつても調整するたびに渡そうとしてくるんだけどね。やっぱりおばあちゃんみたい。

「そうか……。じゃが困ったらすぐに私を頼るのじゃぞ?」

苦笑いしながら取り出したグリーンシードをしまいつつ、そして次の仕事を引き受けたモモちゃんはひらひらと手を振りながら調整屋から出ていった。

「もう……本当、おばあちゃんみたいなんだから……」

カウンターに寄りかかりながら今日何度目かになるつつこみを口に出す。

ありがとう、モモちゃん。でも、困ったときはお互い様よ。もしそ

れで、わたしの掲げる中立が傾いても構わない。わたしだって……モ  
モちゃんのおかげで、こうして自立することができたんだから。

「いらっしやうい♪ 調整屋さんへ、ようこそ♪」

今日も調整屋には、たくさんの魔法少女が訪れる。

## RTAパート2 第一次みかづき荘解散（前篇）

お仕事頑張るRTAはーじまーるよー。

無料で調整してくれた挙句仕事までプレゼントしてくれる  
レズ風俗店主マジ天使。というわけでね、さっそく仕事をこなしに参  
りましょう。

一年前スタートは本編までの地盤固めが命ですのでやることは山  
積みですが、

傭兵ルートですと難易度ハードでも意外となんとかなったりしま  
す。なぜかというと、仕事の都合上様々な魔法少女と自然とコネを作  
れる、また向こうから積極的に会いに来てくれるので、こちらから出  
向かずとも目的のキャラに接触できる可能性が高くなるからです。

6月以降は『第一次みかづき荘解散』、『バイバイ、また明日』、『そ  
してアザレアの花咲く』、『散花愁章』の順番にイベントが発生し、そ  
れらがすべて終わったのちメインストーリーである『はじまりのいろ  
は』が始まります。メインまでが長い（小並感）。

第一イベントの『第一次みかづき荘解散』が起こるのは7月です。  
発生時期はまちまちなのですが、すでにやっちゃんのみつふが知り合  
いなのでいつ起こるかを把握できるので問題ありません。そして次  
の『バイバイ、また明日』が始まるのは3月になってからです。ま  
だ半年以上も時間があります。それだけ時間があれば重要キャラと  
交流ができるでしょう（3敗）。まあ、勿論デメリットもあるんですけ  
どね。

つと、現着しました。名もなきモブ魔法少女さんオツスオツス。お  
まえ魔女退治は初めてか？ 力抜けよ。え？ 魔女が怖い？ 大丈  
夫だつて安心しろよ。へーキへーキ、へーキだから。ということ  
で二回目の魔女退治イクゾォー！ デツデツデデデ！（カーン）

今回調教する魔女は……子守！ 多くのマギレコプレイヤーにト  
ラウマを与えた魔女です。設定がヤバい。見た目もヤバい。声もヤ  
バい。演出もヤバい。倒したのに赤ちゃんの泣き声流し続けるのヤ  
メロオ！ こんな魔女見たら確かに戦うの怖くなっちゃいますよ。

臆病な魔法少女の八割くらいは初戦でこの魔女と遭遇したからでしょうね間違いない。とか言いつつかなり性格の悪い手下共をバツサバツサ斬り裂いていきます。

依頼主のモブ魔法少女も変身していますがマジで弱いのでたとえば使い魔であっても取りこぼしは厳禁です。モブ魔法少女はノーマルまでは使い魔相手ならそこそこ戦えるスペックがあるのですが、ハードになると怖がって使い魔にすら腰を抜かすクソザコナメクジになり果てます。はあくつつかえ、辞めたらこの仕事。魔法少女（辞められ）ないです。

そして傭兵業は依頼主の安否がかなり重要です。氏なせるなんてもってのほか(2敗)、全く依頼主を考慮しない戦い方をすると評判が悪くなって誰にも雇ってもらえなくなります(3敗)。そんなことになったらチャートが壊れちゃうから丁寧にこなしていく必要があるんですけどですね。RTAだからってなんでもかんでも時間重視で戦ってはいけません。逆にタイムロスになる場合もありますので、適切に善処していきましょう。

さてさて、とりあえず見える範囲の使い魔は全滅していますね。さすがベテラン。被ダメなし、依頼主もノーダメで第一ステージクリアです。まあ、攻撃が当たるとんでもないことになりそうなスペックなので慎重にプレイしていただけですけどね。

よし、じゃあ(魔女戦に)ブチ込んでやるぜ。最深部に続く扉の向こうに突入しましょう。警察だ！(大嘘)

第二ステージは魔女と愉快的仲間たちです。相変わらず酷い見た目をしていやがるぜ……ってだから嗚咽するのヤメロオ！(建前)ヤメロオ！(本音)

さて、魔女戦ですが難易度ハード傭兵ルートの鬼門でもあります。さつき話したデメリットってやつですね。

いやですねえ、難易度ハードだとね……普通に魔女が強いですよ。ノーマルまでなら余裕のよっちゃんなのにハードになると攻撃力が増したり耐久力が上がったたりして途端に面倒臭くなります。経験値を上げるためにノーマルまでの感覚で適当に突入したりすると

呆気なく氏んでしまうこともあります（8敗）。というかノーマルまでならいきなり魔女が出迎えてくれるので第二ステージとかないのですが、ハードになると前座として使い魔を一定数倒さないと魔女が来てくれません。しかも時間をかけすぎると逃げてしまうので徒労に終わる可能性もあります。チュートリアルは魔女さんがどれだけ優しかったか身に沁みますね。です。で魔女戦は難易度ハードにおいてではできるだけ避けるべきなのですが、傭兵ルートではほぼ毎日何体もの魔女を狩り続けることになります。チャートが脳筋以外でRTAするなら傭兵ルートを引いた瞬間にリセした方がいいです。タイムロスに繋がりますし、何敗するかもわかりませんしね。

とかなんとか喋っているうちに終わりましたね。神浜で量産されている魔女としては最高クラスの子守の魔女もたった二回の攻撃で撃沈しました。《攻撃》100オーバーの一撃は凄く……大きいです。

さて経験値は……3！。しよっぱ！。グリーンシードは……よかったです、ありました。ないと仕事が終わりませんので気軽に魔女狩りができません。依頼主が邪魔すぎるんじゃないやあ。グリーンシードひとつで、3000！。毎度あり！。君もう帰っていいよ！。

さて、仕事が終わりましたので時間ギリギリまで魔女狩りするつもりでしょう。しよっぱくても経験値は欲しいですし、グリーンシードもストックしておきたいです。あとたまにネームドの魔法少女と遭遇して交流を深めることもできます。

魔女戦はできるだけ避けるべきだと言ったな。あれは嘘だ。やっぱり魔女退治はお得です（手の平クルー）。みんなもきちんと退治してあげような！。だからしつかりキャラクリしろよ！。

じゃあ、流しますね（倍速）。

おはよーございまーす！。

あれから六回戦まで行ったんですがネームドキャラと会うことができますでした（憤怒）。神浜は広いからね仕方ないね（レ）。とい



うことで今日は月曜日です、学校へ行こう（V6）。

「おはよう、百恵」

やちよさんが笑顔で迎えてくれました。おまえら同じクラスだったのかよお！（歓喜） しかも結構親し気です！ オッハー、やっちゃん！ 土日はなにしてたん？

「チームの五人で魔女退治と特訓、あと勉強も手伝ってもらったわ。受験が近いもの」

ふむ、すっかり第一次みかづき荘が結成されているようだなにより。え？ チームに入らないかつて？（入ら）ないです。そんなことしたらお宅のメルちゃんがスムーズに魔女にならないじゃないか（人間の屑）。

「ふふつ、やっぱりつれないわね。じゃあ放課後、予定空いているかしら？ あなたを私のチームのみんなに紹介したいのよ。それにちよつと付き合ってほしい子がいてね……」

あ、いいつすよ（快諾）。

これやちよさんの好感度イベントのひとつで、こんな風に誘われた場合は第一次みかづき荘メンバー全員の好感度を上げることができま

す。  
特にグンと上がるのは鶴ピーこと由比鶴乃です。付き合ってほしい子、というのが鶴乃ちゃんだからですね。百合百合しい光景を頭に思い浮かべたその君、付き合ってほしいってそれ特訓に付き合ってほしいってどういう意味ですよ？ いいね？

話を戻しましょう。えー、この特訓イベントを真面目にこなすと鶴乃ちゃんの好感度が爆上がりするうえに、鶴乃ちゃんとプレイヤーカーラの戦闘能力が向上します。場合によってはやちよしよーに次ぐししよーとして師事してくれます。今回はこれを有効に使いましよう。

というわけで放課後まで流しますね（倍速）。

「じゃあ百恵、行きましようか」

行きます行きます（食い気味）。

ホイホイついて行きますして、やってまいりましたみかづき荘レズパレスです。はえ〜すつごい大きい……。お邪魔しまーす。

面子はすでに揃っていますね。ふむ、しつかり第一次みかづき荘のメンバーでなによりです。たまに誰かがモブ魔法少女になつていたりする悪質なドツキリが仕掛けられていることもあります（1敗）ので一安心です。

みふゆさんがつこりと笑顔を向けてくれますが、他の三人は「なんだこの幼女!?(驚愕)」って感じの顔をしています。そんな彼女たちにやちよさんは百恵ちゃんを紹介してくれています。みふゆとは顔見知りですので簡単な挨拶だけ。ももこ、メルと自己紹介して……

「由比鶴乃だよ！ 最強の魔法少女を目指しているんだ！」

かゝわゝいゝいゝなゝあゝつゝるゝのゝちゝやゝん。

マグレコトツプクラスのかわいいキャラクター、由比鶴乃ちゃんです！ ソシヤゲでは本当にお世話になりました。自称じゃなくて真面目に最強の魔法少女です。ワンキル系魔法少女ってなんやねん。ワンキル抜きでも☆5実装時にミラーズや周回にかなりの影響を与えた魔法少女です。無課金の星であり希望の魔法少女でした。

人柄も素晴らしく、メイנסトーリーではムードメーカーでありながら戦闘でも頼りになる万能キャラで数々の名言を残しています。特に第7章『楽園行き覚醒前夜』16話での鶴乃ちゃんの独白は必見です。笑顔の裏で「自分は最強」と鼓舞してひとりで頑張り続けた鶴乃ちゃんの健気な姿は涙がで、出ますよ……。

「鶴乃、彼女を連れてきたのはあなたの特訓に付き合ってもらったためよ。……神浜最強の傭兵の胸を借りなさい」

「！ も、百恵さん、いいの？ わたしに稽古つけてくれる？」

もちろんSA！（DNLD）おまえを最強に仕立てや……仕立てあげてやんだよ。おまえを最きゅ……強にしたんだよ！ おまえを最強にしてやるよ（小声）。ということ鶴乃ちゃんとの戦闘開始です。

いやあ、やつぱり強いです鶴乃ちゃん。巨大な鉄扇でダイレクトア

タック（物理）をするもよし、炎を飛ばして中距離を狙うもよし。だけど防御には向いていませんね。攻撃をいなされた後の隙が大きすぎます。ソシヤゲ通りの性能。忠実な原作再現いいゾ〜これ。

まあ、強いと言っても魔法少女になって一年足らずでは五年以上魔法少女やっている百恵ちゃんには及ばないんですがね。パパパツて……近づいて終わり！そして経験値5ポイントゲットだぜ！うん、おいしい！これから毎日、特訓しようぜ？

「はあ……わかりやすく手加減しているわねあなた。武器を使わないなんて」

武器？ 大剣あんなもんなんてブン回してうっかり斬りつけちゃったら鶴乃ちゃん氏んじやうダルルオ!? 明確な敵じゃない限りあんな危なっかしい武器を向けたりしません。一突きで上半身と下半身がグツバイしてしまいますよアレ。

あ、手加減されてボロ負けしたことに鶴乃ちゃんが落ち込んでいますね。しよげている鶴乃ちゃんもかわいいですが、アフターフォローはちゃんとしなきゃです。百恵ちゃん渾身のエールを送ってやるぜ。頑張れ頑張れできる絶対できる頑張れもつとやれるって！やれる気持ちの問題だそこだ！そこで諦めるな絶対に頑張れ積極的にポジティブに頑張る頑張る！

……え？ 武器が見たい？ 見たけりや見せてやるよ（震え声）。百恵ちゃんのシークレットソード（意味深）を見てくれ。コイツをどう思う？

「すっごーい……おつきいし、かつこいい。……百恵さん、これからもわたしの特訓に付き合ってもらってよろしいでしょうかあ！」

落ちたな（確信）。意外と早く堕ちたな〜（嬉しい誤算）。いいよ！こいよ！ 師匠と呼んで師匠って！

「百恵ししよー！」

あああ〜鶴乃ちゃんかわいいんじやあ〜。素直で元気な子がかわいいってこれ一番言われているから。これで百恵ちゃんのスケジュールに『鶴乃ちゃんとの特訓』が追加されます。週に一回、鶴乃ちゃんと特訓、もしくは鶴乃ちゃんを連れて魔女退治することができ

ます。仕事にはさすがに連れていきません。公私混同はしない(傭兵の鑑)。そして今の鶴乃ちゃんとの戦闘でももことメルの好感度が上がります。ああ、くうめえなあ！

「随分懐かれちゃったようね。でもチームに入らないんでしよう?」  
「当たり前だよなあ? とういかどんだけ勧誘しとんねんこいつ。倍速にしていたけどどこ→ここ←に来るまでの道中でも勧誘していたの見たぞ。」

「冗談よ。あなたはそういうひとだもの」

「そうだよ(肯定)。だからもう誘ってくれるなよ。あ、でも客がいたら紹介してくれよ!」

「おっと長居してしまいました。そろそろお暇して調整屋に行って仕事がないかチェックしましょう。」

「あばよ、みかづき荘のみんな! たのもー、みたまさん! 仕事入っているかい?」

「あら〜モモちゃん。今日は仕事入ってないわよお?」

「あ、そつかあ(痴呆)。がーんだな……出鼻をくじかれた。じゃあ俺、調整してもらって帰るから。獲得した23ポイントを防御以外のステータスに割り振ります。お代のグリーンフシードは……やつぱり受け取ってくれません。いいねえ、ありがとう、やったぜ。」

「今回のみたまさんはやたら親切ですぞ。大丈夫か? 経営難になつたら言えよ! おまえ(グリーンフシード)を回してやるよ。」

「それじゃあ本日も魔女狩り……はしません! 家に帰ります。」

「ただいまー! 手を洗ってうがいして、飯を作る作るぞー! 飯を作るぞー!」

「さあ、ショータイムだ。倍速倍速ウ! 点数は……56、普通だな!」

「キッチンの雰囲気や食器の数、冷蔵庫の中身からして自炊できることとはなんとなく察していましたが、腕前は並なご様子。仕事優先であり家事できてないせいですね。こらあかん、ステ上げしなきゃ(使命感)。」

「料理は割と重要なスキルです。招いて振舞えばそのキャラの好感

度を上げられます。手軽に好感度を稼げてかなりお得です。特に料理と関係が深いキャラ……鶴乃ちゃんや胡桃くるみまなか、佐倉杏子さくらきょうこに至っては一気にドンと上げることが出来ますし、万々歳やウォールナッツでのバイトがしやすくもなります。今回はやりませんけどね。ただしみたまさんや静海しずみこのはは、振舞うのはいいですが作らせるのはNGです。

残さず綺麗にいただきまして……御馳走様！  
ごちそうさま

素晴らしい漢字四文字ですよね『御馳走様』。RTA走者ならきつとみんな大好きな四文字でしょう。なにせ『馳』『走』という走る意味を持つ漢字二文字を、『御』『様』という尊敬の意味を持つ漢字がサンドイッチにしているのですから。

食材を調達するために買い物に走る、その食材を作るためのものを調達するために走る、そして美味しくいただくために料理に走る！

おいしいご飯が食卓に並べられるのは家族や料理人、農家の人や食品開発のエンジニア、それを売り込む営業の人達の日々の走りがあつてこそのものであり、その走り全てに敬意を払うべきである。そんな意味がギュツと詰められた四文字です。やっぱり日本人は最高だぜ！

だから食べ物は粗末にしちやいけないぞ！ 八雲みたまあ、おまえに言つてんだよ！ とりあえず絵具とか明らかに食べ物じゃないやつ混入するのヤメロオ！（2敗）

と、こんな感じでべらべら喋っている間になにしているのかつて？ 片付けを済ませて勉強をしているのですよ（真面目）。

いやですねえ、重要なんですよ勉強。だって百恵ちゃん、大学受験をしますからね。高校または大学受験、これ難易度ハードでは地味に大事なイベントだったりします。

受験は一年前スタートで年を越して中学生から高校生、高校生から大学生になるキャラを作った場合に発生する難易度ハード限定の強制イベントです。2月に入学試験を行い合格か不合格かの判定をするのですが、実は簡単に合格できます。

一週間に6時間以上勉強すると合格が確定し、8時間勉強すると首席で合格します。こんとんじよのいこ（ENR）。インテリ魔法少女

を作り上げた先駆者兄貴に感謝感謝です。

で、面倒かつRTAするのにいらなさそうに見えるイベントですが、このイベントの最大のメリットは勉強をされていて出席日数が足りていれば学校に行く必要がなくなるということ。つまり自由登校が解禁されます。一年生や二年生は基本的に学校に行かないといけません。が、三年生になると自由登校ができるので他の魔法少女との交流はもちろん、バイト、魔女退治などの他のことに手を付けられたり、あるいはなにもせずその日自体をスキップしたりとやりたい放題できます。

だからこうして週に三回、2時間は勉強に回します。主席になるつもりはないので6時間で充分です。土日に一気にしないのかつて？土日は他のキャラの好感度上げに奔走するので基本的にやりません。ただやっちゃんに誘われたりしたらやります。あとは放課後に傭兵のお仕事埋まっちゃった場合も引き籠って勉強します。まあ、その場その場でいいんですよ（走者の屑）。

じゃあ今日は英語を勉強して寝るとしましょう！ おやすみなさーい！

おはよーごいまいす！

ふう、昨日はよく勉強したぜ。顔洗ってえ、服替えてえ、朝ごはん作ってえ（60点）、学校に行きましょう！ イテキマース！

「おはよう、百恵。昨日はありがとうね」

今日も笑顔のやちよさんが教室でお出迎え。オッスオッス。

というわけで倍速です。（学校でやることは）ないです。一気に放課後にすっ飛ばしましょう。

……ヨシ（現場猫）。特になにもなかったということはガバっていませんね。

というわけで放課後です。調整屋に行きましょう。百恵ちゃんがあ、調整屋さんにい、く↓るうく→（ZKYM）

「いらつしやうい、モモちゃん♪」

「先生！ 待っていたの！」

……ファツ!? アイエエエツ!? かりんちゃん!? かりんちゃん  
ナンデ!?

これはなにかのイベントの予感。アリナは嫌だ……アリナは嫌だ  
……!

「今日はわたしも仕事に同行するの！ ご教授、お願いするの！」

……こつ、これ、これは……! やったぜ。かりんちゃんも傭兵  
ルートに足を突っ込んでいますよこれ!

普通なら強そう（強いとは言っていない）な魔法少女からグリーンフ  
シードを強奪して、弱い魔法少女（決めつけ）に配るといっても  
ない存在であるかりんちゃん。走っている時に何回強奪されて慌て  
ふためいたことか……。

そんなかりんちゃんは途中で自分が間違ったことをしていること  
に気が付くと、奪うのではなく自らを鍛えて自力でグリーンフシードを  
調達し無料で配る違う意味でとんでもないやつに変貌します。つま  
り業界の敵です。<sup>傭兵</sup>

このゲームに於いてかりんちゃんは色んな可能性を秘めています。  
原作通りのルートに、大魔法少女かりん様ルート、やさぐれた強奪か  
りんちゃんルートなんてものもありますが、今回は傭兵ルートみたい  
でにっこり。

かりんちゃんは交流が深いと同じ傭兵仲間として活動したり、先生  
と仰いでついてくることができますのできつとその影響でしょう。  
今回は後者だつたみたいですね。手段はどうあれ、やろうとしていた  
ことは百恵ちゃんと大体同じですからね。つまりこのかりんちゃん  
はかわいいかわいい後輩です。だからもちろん連れていきますよ!  
魔改造してスーパーかりんちゃんを爆誕させてやるからなあ?  
見とけよ見とけよ。

ということできりがいいので今回はここまでにしましょう。

ご視聴ありがとうございました!

## S i d e . 七海やちよ 力の化身

魔法少女になって三年が経ち、ベテランと呼ばれる領域に足を踏み入れた夏休みのある日のこと。

私——七海やちよの耳にある噂が入ってきた。

——縄張りを持たず、

——誰ともチームを組まず、

——東西関係なく神浜各地に現れ、

——苦戦する魔法少女を見つけ手助けをし、

——なにも見返りを要求せずに立ち去る。

そんな魔法少女の噂を。

現在神浜で西側、東側、そして中央の三つのエリアに分かれている。ベテランとして西の魔法少女たちの顔になりつつある私は、相方の魔法少女梓みふゆとともに東と中央の魔法少女たちと協定を作り、神浜の魔法少女たちによるいざこざを解決する立場になりつつあった。

最近ではなりたてながらもかなりの実力と人望を併せ持つカリスマ、和泉十七夜が頭角を現し、東の魔法少女を束ね始め、中央区では相談役として窓口を開いている都ひなのが水面下で私たちとコンタクトを取り始めたので、神浜の東西そして中央の魔法少女同士の争いは次第に沈静化していった。

そんな時期に入ってきたみふゆが仕入れてきたこの噂は、魔法少女たちの間で大いに盛り上がった。

始めは私やみふゆ、和泉十七夜、都ひなの誰かだと思われていたらしい。

ベテラン勢がそういった活動をすることで東西の諍いを消し、融和を図ろうとした——なんて情報が魔法少女たちのネットワークを通じて大盛り上がりしているらしい。

……冗談じゃなかった。

もちろん私は違う。みふゆもだ。おそらく和泉十七夜も違うでしょう。

私たちの共通しているのは互いのテリトリーから出ずに統括する



こと。相手側の陣地に入って魔女狩りなんてそんな争いの種になるようなことはしない。

都ひなのも違うと断言できる。

なにせこの噂をみふゆに伝えたのが彼女だからだ。相当お疲れの様子で抗議の連絡を入れてきたらしい。

それではいったい誰がそんな真似をしているのかという話になる。今のところ問題は起こっていないけど、将来なにが起こるかはわからない。

もしこのまま放置しておくとせつかく纏まっていた西と東、中央の魔法少女たちが無断で相手側のテリトリーに侵入して魔女を狩ってしまう可能性がある。そんなことが起こったら大問題だ。

魔法少女は縄張り意識が強い。当然だ。

ある程度のグリーフシールドを確保できなければ魔女と戦うことが困難になる魔法少女にとって、魔女は敵であり自らの生命線でもあるのだから、そんな貴重な存在を横取りされてしまつては堪ったものではない。文字通りの死活問題なのだ。満身に魔女と戦うことができずに戦死してしまうリスクが高まる。

それに勝手に相手の縄張りに侵入したということは、自分の縄張りに勝手に侵入されても文句を言うことはできない。先に破つたのは自分だからだ。

自分の縄張りを乗っ取られて狩場から追い出されても誰も助けはくれない。そうなつてしまつたらもうお終いだ。

故に暗黙の了解として、魔法少女の縄張りは絶対であり無断で侵入するのは御法度なのだ。例え無償で助けたとしてもそれは変わらない。

縄張りとしても大問題に発展しかねないが、それ以上に問題になるかもしれないのが、その魔法少女の正体だ。

流浪の魔法少女で、ふらつと偶然神浜に立ち寄っただけならまだいい。本人を見つけ出して公式に発言してもらえればそれで丸く収まる。

だけど同じ神浜の魔法少女ならばそうはいかない。

渦中の人物が善意で人助けをしているのか、はたまたまにかを企んでいるのか、それすらも分からない状態なのだ。

もし悪意を以って行動を起こしているのだとしたら……神浜で魔法少女同士の戦争が起こる。

「……すぐに噂の魔法少女を突き止める必要があるわね」

「ええ……それが一番ですね。やっちゃん」

私とみふゆは行動を開始した。

やることは夜のパトロールの強化。

幸い私たちは西側のまとめ役である都合上、西のエリア全域での活動が容認されている。

だから、二手に分かれて魔女退治をしながら噂の魔法少女についての情報を集めることにした。

一週間が経って日曜日のみかづき荘にて。

ある程度の情報は仕入れることはできたものの、渦中の魔法少女と出会うことはなかった。

・かなり小柄である。

・一薙ぎで使い魔を殲滅し、二振りで魔女を屠る大剣を武器にしている。

・かなり特徴的な口調で喋る。

・穏やかでお人好しな性格らしく、求めるなら次の魔女戦でも同行してくれる。

・グリーンシードは絶対に取らない。

他にも天使やら魔法少女の妖精やら意味不明なものもあったけれど、情報を整理するに大きく取り上げるならこの五つだった。

少なくとも悪人ではなさそうではとす。

グリーンシードに執着せずに人助けを優先し、縄張り意識が低い……ここから導かれる結論は――。

「ねえ、みふゆ。噂の魔法少女なんだけど……新入りの可能性がないかしら？」

「やっぱり……やっちゃんもそう思います?」

新しい魔法少女はルールに疎い。

だからこうした掟破りなことができるし、グリーンシードの大切さがわからないからあつさり他人に譲ってしまう。

……だけど。

「でもそれにしても手際が良すぎる気がしますね……」

そう。目撃した魔法少女たちが口を揃える恐ろしい戦闘能力。

魔女がなにかをする余裕を与えず、先手必勝と言わんばかりのスピードで瞬殺する。

素早さと攻撃力の高さを併せ持つ魔法少女特有の戦法だけど、この戦い方を実践するには一定の魔女との戦闘経験を積んでいる上に、一切の無駄な動きを省かなければいけない。

近づいて斬るのシンプルな戦法だけど、実際にやるとなると意外と難しい上級者向けの戦術なのだ。

そしてそれを実践したとしても……たった二回の攻撃で魔女を沈めてしまうのは、明らかに異常。とても初心者にできる芸当ではない。みふゆの言う通り、手際が良すぎるのだ。

行動は新入りのそれなのに、実力はベテランクラス……。渦中の魔法少女はかなりチグハグしている存在だった。

そして、そんな魔法少女は私が知りうるどの魔法少女にも該当しない。

結局一週間で得られた情報では、どんな魔法少女かを少なからず知ることができるでも正体を突き止めることはできなかった。

探そうにも目的の人物はどこに出現するかわからない。東や中央に出るようなら手は出せない。偶然出会う、くらいしか現実的な手は残されていない。

軽く途方に暮れていたその時だった。みかづき荘のベルが鳴ったのは。

魔法少女歴の長い私の家であるみかづき荘は西側の魔法少女のほとんどもが知っている。

だからたまたまに悩みを抱いた魔法少女が直接会いに来て相談を持ち

掛けてくることがある。今日もその類だろう。

簡単に返事をして、玄関に向かった。

扉の向こうに立っていたのは……小学生くらいの子だった。

一本のアホ毛と左肩に乗る黒い後ろ髪を束ねたしっぽヘア、青い瞳が特徴的なかわいらしく将来有望な女の子。

意外な人物に動揺したけど、その左手中指に魔法少女の証である指輪があるのを確認して、この子が魔法少女であるということはわかった。

小学生から魔法少女って……キュウベえも人間を選ばないわね。

きつと上辺だけの希望に魅入られて魔法少女になってしまったのでしよう。

それで途方に暮れて、どこかの伝手を使ってここに来た、そういうことでしょうね。可哀想に。

「あなた、お名前は？ お姉さんに教えてくれるかしら？ 大丈夫、お姉さんがきつと、あなたの悩みを解決してあげるから」

腰を下げて目線を合わせ、できるだけ安心させられるような穏やかな表情を作って話しかけた。すると彼女はぷるぷると肩を震わせる。

……いろいろな溜まっていたものがあるのでしょうかね。

もしかしたら魔女と初めて戦ったのかもしれない。怖かったことでしょう。

そんな彼女の頭に手をのせ、優しく撫でる。……すると。

「七海やちよ……」

私の名前を呼んできた。

「うん。私が七海やちよ。一応西の魔法少女のリーダーみたいなことをしているの」

「……七海やちよ15歳、魔法少女歴三年の中学三年生……」

「？ ええ、そうよ」

なんでそんなことを言い始めたのか、わからずに首を捻る。

すると――

「私は魔法少女歴二年じゃし、お主と同じ来年高校生じゃ！ 子供扱

いするでないわ、失敬な！」

——私の時間が、止まった。

「ごほん、先程は怒鳴ってすまなかったの。」

私は星奈百恵という。こう見えてもお主らと同じ年の中学三年生じゃよ」

「えっ」

リビングにて、玄関から戻ってこない私を心配してきたみふゆによつて再起動した私は、とりあえず幼女、もとい星奈さんを家に招き入れた。

同じ年を強調する自己紹介にみふゆが素で驚いている。だって……ねえ？

とてもそうは見えないもの……。

「して、お主らであろう？ 私のことを探している西のベテランというのは」

「……ちよつと待ってくれるかしら。落ち着かせてちようだい」

そしてあっさり私たちの悩みの種だった渦中の魔法少女だったことをカミングアウト。あまりの情報量の多さに処理できず注いだ麦茶を飲む。

丁度よい喉ごしと冷たさでなんとか冷静になれた私たちは星奈さんから詳しい話を聞くことにした。

星奈さんは十日前（丁度騒ぎが起こり始めた日）に神浜に引っ越してきて、狩場を探するために神浜中を転々としていたらしい。

そこで出会った魔法少女にテリトリーに無断で足を踏み入れてしまったことにお詫びの気持ちで共闘し、その戦闘で入手したグリーンフシードを渡していたとのこと。

だけどそれまで退治した魔女のグリーンフシードはこっそり懐に入れているあたりちやっかりしている。

衝撃的な見た目と圧倒的な実力、そして偽りのない親切心で、出会う前までに魔女を倒したかもしれないという考えに至らせないようにする。伊達に二年も魔法少女をやってはいない。

見た目に見合わない狡猾な処世術を身に着けていた。

「魔法少女はの、世渡り上手なやつほど長生きするものじゃよ」

呆れている私を見て、星奈さんはカラカラと笑っていた。とてもいい性格をしている。

だけどとりあえず事情は理解した。

彼女は悪意を以って神浜中を移動していたわけではなく、ただトリートリーを探していただけだった。

助太刀していたのもトリートリーに侵入したお詫びであり、結果的に魔法少女を助ける活動をしてしまったにすぎないこと。

引越してきたばかりの彼女が神浜の東西中央の魔法少女の關係を知っているはずもなく、本人にとっては普通だと思っていたことが神浜に混乱を齎していたことを噂を通じて知って、私に謝りに来てくれたらしい。

「すまなかつたの。知らなかつたとはいえ、私はお主たちに迷惑をかけてしまうた」

立っていたアホ毛が萎れてしまっている。

……まあ、本人に非が全くないわけではないけどこうして謝りに来てくれたわけだし、大問題に発展する前に解決できてよかったので、大目に見るとしましょう。

「かたじけない。それで、折り入って相談があるのじゃが……はて、おかしいのう？ 私は一応、連絡先を出会った子たち全員と交換していいのじゃがの。」

中にはまた一緒に狩りをしてくれって頼んでくれた子もいるのじゃがの？」

薄く笑いながら彼女は言う。

……なるほど、道理で情報が少なすぎたわけだわ。

おそらく私たちに星奈さんのことを話してくれた子たちは、最低限の情報しか渡してくれなかつたのでしよう。

西のベテランといっても具体的なフォローは最低限にとどめていた私たちよりも、テリトリーを探している実力者の星奈さんの方が頼りになるし……利用しやすい。

またお願いすれば一緒に魔女退治をしてくれるだろうから楽をできる。自分のテリトリーで魔女退治をしているのだから、グリーンシードを自分に融通してくれる。

そんな打算があったからこそ、星奈さんを隠して得をしようとした。

しかし……星奈さんの様子からしてそんな浅はかな考えは見抜かれていた。

そして星奈さんからしたら彼女たちの魂胆はともかく内容だけなら決して悪い話ではなく、逆に利用しようとしていたのだろう。

テリトリーに困っているのは本当だったからわざわざ呼んでくれるのは都合がいいし、獲得したグリーンシードを全て渡す道理もない。「助けを呼んでおいて見返りはないのか？」と訊いてしまえば一発だ。

呼ばれた間はサボって、別れた後にこっそり魔女退治をしてしまう手も使える。

「帰る途中で偶然見つけたから」「先にテリトリーに招き入れたのはそちらだ」「別れはしたけどまっすぐ帰るとは言っていない」、言い訳なんていくらでも思いつく。

そしてそれを利用して神浜各地でコネを作れば、星奈さんは自分のテリトリーがなくとも安定した魔女退治ができる。

見かけはwin-winでもよくよく考えると圧倒的に星奈さんが得をしている。

……おそらく彼女は、そこまでのことを考えてこの十日間活動していたのでしよう。

魔法少女は世渡り上手な方が生き残りやすい、か。確かにそうね。

「はあ……理解したわ。あなたもなかなかやるわね」

「まさか、そんな手を使ってテリトリーを確保しようとするなんて」  
みふゆも同じ結論を導けたらしい。

さつきまでのかわいい子供を見る目はもうない。あるのは……得体のしれないものを見る畏怖の感情が込められた目だった。

「はて、なんのことか？ 私はちよいと頭こぶを使っただけじゃし、もうお主らが考えておるような狡こすい手を使う気もないぞ」

最初はその手を使って神浜で活動しようとした。しかし事情が変わった、ということでしょう。

神浜の東西中央の問題、そしてその地域ごとの顔や統括、相談役がいると知った以上、新参者である自分が好き勝手するのは得策ではないと判断した。

もしこのまま活動を続けていたら神浜は大混乱に陥り……最悪の場合は神浜の魔法少女全ての信用を失う可能性がある。だからこうして謝りに来た、というわけだ。

叩き上げの腕だけで勝負するよりも、街のリーダーと懇意にした方が絶対に得をする。そう判断したのでしよう。

「それで……その折入っている相談というのはなんなのかしら？」

彼女がここに来た本来の目的は最初からこれだったというわけだ。

少し目を吊り上げて私は警戒すると、星奈さんはにこにこ笑ったまままゆつたりと構える。

「そんなに怖い顔して身構えずとも良い。少しはリラックスせんかい」

「それができるとでも？」

「思わぬのう」

「困った困った」とこちらが出した麦茶を口に含んで一拍開けた彼女は、世間話をするような感覚で口を開く。

「まあ、そんなに警戒することはない。極めて単純な話じゃよ。して、相談事というのはの——」

「——あなたのテリトリー、についてかしら？」

「……ほう？」

彼女の台詞を遮ると、朗らかだった彼女の笑顔が消える。

その代わり、面白そうなものを見るような笑顔に変わった。……アタリのようなね。



今までの会話の内容や仕込んでいた手口からして、彼女の行動は一貫していた。

自分の魔法の狩場を確保する。ただこれだけの為に行動している。そして今、本気で困っていることなのでしょう。

ようやく……ようやく立場が逆転した。問題を解く側から問題を出す側になった。

まだ手札はあるのでしようが、交渉事に於いて立場をはつきりさせ、会話の手綱を握ることはなによりも先に成し遂げなければならぬ。

そして今、それを突き付けた。

おまえは頼む側で、こちらは聞いてやる側だと。

そして彼女は認めた。

「話が早くて助かるの。お主の言う通りじゃ」

この神浜は広大な土地だけど、それに比例するように魔法少女の数も多い。街を適当に歩くだけでも魔法少女があちこちにいる。

わざわざ転々と距離を開けて西から東に移動していたのは、過疎化した土地がないかを探すため。でもご生憎様、そんな土地は神浜にはない。

「正直に言っただけで神浜で活動すると、他の魔法少女と遭遇することが多い。そしてそれはトラブルの素になる。私もそんな面倒事を起こす気はないのじゃ」

「そうね。だからこうして私を頼りにしたんでしよう？」

「そうじゃ。新西区に越ってきて西の魔法少女になった私が頼れるのは現状お主だけじゃからの」

「……もう自分がしたいことは決まっているのでしよう？ 答えを言いなさい」

彼女は頭の回転が速い。おそろくすでに結論は出ていて、出すタイミングを伺っているのでしょう。だからすぐに口に出すように促す。今この私が上にいる状況で聞き出す。

さあ……どうするのかしら？

「……まず、自分で言うのもなんじゃがの、私は強い魔法少女じゃ」

「知っているわ」

「即答かの？ お主の前では力を見せたことはないと思うのじやがの？」

「あなたの情報をくれた魔法少女たちの反応を見れば一目瞭然よ」

「多分、先程星奈さんを利用しようと考えている魔法少女は全体の一握りほどでしょう。」

「天使やら妖精やと言う子もいるほどだ。彼女を本気で慕う魔法少女の方が多いうように私は感じた。」

「だから間違いなく、彼女は強い。世渡りが上手いだけでは魔法少女は務まらない。」

「二年も魔法少女を続けるということは相当な腕の持ち主である証拠だ。」

「……おそらく、私やみふゆと同等かそれ以上の力を持っていると見て間違いはないでしょう。」

「西のリーダー殿に実力を買ってもらえるのは嬉しいのう。ああ、そんなに焦るでない。ちゃんと話すとも。今のは偽りのない素直な喜びじゃよ」

「一タリアクションをしてくるあたりがやりづらい。」

「けどまだ私が手綱を握っている。」

「この神浜の魔法少女たちの配置は完璧じゃ。神浜全土に最低人数いることで一般人を魔女の被害から守っておる。同時に安定した狩場があることで、そこに住む魔法少女たちも活動しやすい。まさに一石二鳥、という言葉が相応しいのう」

「なにが言いたいのかしら？」

「要するにの、そこに私の付け入る隙はないということじゃよ。意図してこうなったのか、はたまた偶然の産物かどうかは知らぬが、結果的に神浜での魔法少女同士の縄張り争いが起こりにくくなっておる」

「……ということとは、テリトリーに関して諦めつつあるということかしら？」

「でもそうなる彼女の悩みは何も解決されていない。」

「魔法少女は魔女を狩らなければ満足に魔法が使えないのだから。」

このままでは魔法少女の責務を果たせず、碌に力を引き出せずに魔女に殺されてしまう可能性がある。

「そこでじゃ、やり方を当初のものに戻そうと思うのじゃよ。各地を渡り歩いて他の魔法少女にくっついてそのテリトリーから魔女を融通してもらおう方法にの」

「そんな寄生虫のようなやり方を私たちが許すとても——」

「——思わぬのう。言ったであろう、狡い手は使わぬと。じゃからしっかりとした大義名分を掲げることにした」

「大義名分？」

「うむ。ここに来る前に共闘した魔法少女のほとんどが、また一緒に戦ってほしいと私に頼ってきた。そう話をしたの？」

「……ええ」

「じゃからの。そういった魔法少女たちの声があるとすれば——大義名分が作れる。そうは思わぬかの？」

「！」

それは……！ まさか！

「そこでじゃ、折り入って相談したいことがある」

にっこりと、朗らかな表情に戻った彼女はついに本題を口にした。

「私は『傭兵』として、この神浜で活動することにする。今日はその許可をいただきに参ったのじゃ」

『傭兵』……神浜以外の大都市で聞いたことがある魔法少女の一種の生き様だ。

魔法少女を完全にビジネスのシステムとして捉え、金品やグリーンシードを対価に魔女を狩る魔法少女。

テリトリーに縛られず、あらかじめ了承を得てから狩りを始めるためテリトリー内を活動する魔法少女とのトラブルになることもない。テリトリーに困っている魔法少女たちが行きつくひとつの終着点が『傭兵』だ。

ただし、誰でも簡単に『傭兵』になれるわけではない。雇うに相応

しい実力と、高い信頼が必要となる。

お金やグリーンフシード、そして命まで絡んでいる以上、半端者を雇うことなど誰もしないし、この仕事は評判が命なのだ。

失敗は許されないし、依頼主を魔女に殺されるなんて真似は一回でもできない。

彼女が『傭兵』になるに至って、実力に関しては言うことなくクリアしている。

この十日間で東西中央様々な魔法少女と関わり、助け、連絡先を交換していることでコネもすでに出来上がっていることでしょう。そこから派生していけば……より多くの信頼を獲得することができる。

よってなにも問題なく、彼女は『傭兵』として神浜で活動することはできる。

……でも彼女はそれだけでは満足しないらしい。

私たちは争いの種になることに関しては干渉するけど、それ以外の魔法少女の活動に関しては一切口出しをしない。

だから『傭兵』をやるだけなら私たちに謝った後に「傭兵として活動することにする」と言えばお終いなのだ。

許可なんて必要ない。

でも彼女はわざわざこうして許可を求めてきた。

なぜか。理由はひとつしかない。

彼女の相談事……という名の要求を噛み砕くなら——

——西<sup>私</sup>のリーダー<sup>とみ</sup>格<sup>ふ</sup>のネームバリュー<sup>ゆ</sup>をよこせ。

ということだ。

西のリーダー格が容認した傭兵。その肩書が欲しいのでしよう。それさえあれば少なくとも西側での彼女の生活は安泰だ。

しかも東や中央でも知り合いがいるみたいだし、西で名が轟けば自然と中央、東と活動範囲を広めることができる。

結果、誰とも争うことなく、極めて平和的にこの神浜全土が彼女のテリトリーになる。

……冗談じゃない。

「無理な相談ね。そもそも私は今日、あなたと初めて会ったのよ？」

「同意です。あなたが相当のやり手なのは認めますが、名前を貸すわけにはいきません」

「まあそうなるのう」

私たちの強い拒絶にあっけらかんと納得する彼女に、私たちは唾然とする。

私たちが拒否することも織り込み済みだったっていうこと？

じゃあどうしてこんな要求をしてきたの？

疑問符を頭の中に浮かべていると「ところでのう」と話題を変えてきた。

「お主らはこの神浜に何人の魔法少女がいると思う？」

なんだこの質問は。

当然のように「知らない」と答えた。

神浜に存在する魔法少女の具体的な人数なんてわかるわけがない。

「では、この神浜に存在する魔法少女は、お主らが把握している魔法少女の人数より多いと思うかの？」

その質問に対しては「イエス」と答えた。当たり前だ。

私が知らない魔法少女の方が多いに決まっている。

「まあそうじゃの。当たり前前のことを訊いて済まぬな。」

……これまた話は変わるがのう、私が北養区でテリトリーを探していた時の話じゃ。

偶然魔女の結界を見つけての、そこで苦戦しているひとりの魔法少女がおったのじゃ。

弓という遠距離武器を持っているのになぜか魔女に必要以上に接近する。攻撃力重視でないことは傍目でもわかるのに、たったの一発しか放っていないのに通用していないと愕然とする。そしてあろうことか、魔女に背を向けて逃げ出す。

そんな、突っ込みどころ満載の危なっかしい戦い方をする魔法少女じゃ。

これはいかんと思った私はすぐに使い魔を一掃して魔女を倒した。

結界が消えて緊張から放たれてへたり込んだ彼女のソウルジエムは案の定、もう真つ黒に濁り切っておった。到底戦うことなんてできないような状態まで追い詰められておったよ。

幸いにも倒した魔女からはグリーンフシードが出た。

どんな状態であれ譲ろうと思っていたから、そのグリーンフシードで浄化して事なきを得たが、もし私が通りかかっていたら間違いなく戦死していた、そんな弱い弱い魔法少女。

話を聞いてみるとう。

彼女は三ヶ月前に魔法少女になり願いを叶えたが、いざ魔女に挑むと恐怖のあまり動けなかったらしい。

魔女の猛攻を潜り抜けてなんとか逃げ切った彼女は魔女が怖くて戦えず、誰にも相談できずに不安を隠して日常生活を送っていた。

じゃがのう、そんな生活をしているだけでもソウルジエムに穢れが貯まっていく。それはお主らも知っておろう？

そしてそれを浄化するには当然グリーンフシードがなければならぬ。じゃがそのグリーンフシードを手に入れるには魔女を倒さなければならぬ。

ソウルジエムは濁れば濁るほど体に悪影響を及ぼす。

強い倦怠感や脱力感、そして溜まっていくストレスに、彼女は焦った。

そして……その日、魔法少女になって三ヶ月にして二回目の魔女との戦いを挑むことにした。

結果は話した通りじゃよ。

緑に経験も積まず、度胸もなく、万全の状態でもなかった彼女はあっさりと魔女に背中を見せた。

これではまた逃げ切ったとしても、全く意味がないというののう。

七海やちよ、そして梓みふゆよ。

お主らは強い魔法少女じゃ。それは誇ってもよい。

じゃがのう……世の中にはそれはそれは弱い魔法少女もおる。

頭では理解していようが、実際に会ったことはあるまい？

——なにせ彼女たちは相談に来ることすら、出来ぬのじゃからの」  
星奈さんが紡ぐ言葉の数々に私たちは黙り込むしかなかった。  
全く以ってその通りだったのだから。

なぜかそれほどまでに弱い魔法少女に私たちは出会ったことがないのか。

答えは、弱い魔法少女はもともと度胸のない内気な性格な少女が大半だからだ。

彼女たちは誰にも相談することができず、自分の中で全て抱え込んで……そしてひとり静かに朽ちていく。

だから数多くの魔法少女と会ったことのある私でもそこまで弱い魔法少女と会ったことはなかったのだ。

「……その話を聞かせてなにか言いたいのかしら？　あなたはその弱い魔法少女を盾にして、交渉を迫るつもり？」

「その通りじゃ。これが私の切り札じゃからの。さて——改めてお願いするぞ、西のリーダー殿。私の『傭兵』としての活動を認め、許可をしてほしい」

「ぐっ……！」

やられた……！

ここで拒否することは簡単。

だけど……それは、私がこの街に住む弱い魔法少女を切り捨てると言い放つことと同義。

彼女が盾にしてきた大義名分はあまりにも大きく、そして強烈な切り札だった。

……どうする？　どう返せばいい？

隣に座るみふゆに目を向けるも、もはや人質と言ってもいい彼女の  
大義名分の前にやられてしまったらしい。視線が泳いでしまっていた。  
た。

彼女の要求を断ることはできない。だけど、そのまま受け入れることもできない。

こっちは西のリーダーなのだ。プライド云々でなく、このまま新参者の魔法少女にいいようにされてしまっっては西の魔法少女たちの面

目は丸潰れになる。そうなってしまつてはせつかく足並みが揃つていた今の神浜の均衡が崩れかねない。

どうすれば……。

「——誓おう。私はこの神浜の弱い魔法少女たちの味方になってみせよう」

頭をフル回転させて打開策を模索していた私の耳に強い誓いの言葉が入ってきた。

ハツとして前を見ると……そこには私に難題を持ち掛けてきた策略家の彼女はいなかった。

自分の力に対する絶対の自信に満ち溢れ、それに酔うことなく、溺れることもなく、振るうこともせず、ただ静かに私たちに見せつける……『力』の化身がそこにいた。

「どんな時でもすぐに駆けつけてみせよう。」

最強の武器になってみせよう、希望になってみせよう、星になってみせよう！

傭兵故に多少の見返りは求めるが、グリーンフィードは融通してみせよう！」

繰り出される力強く心に響く誓いの言葉の数々。

これは間違いなく、嘘ではない。本気で言っていると感ぜられる。……。

……傭兵として彼女が活動するなら、どんな形であろうと名が売れる。

そしてそれは評判という形となって私たちの耳に届くでしょう。

評判が悪ければ傭兵業は廃業し、彼女はまたテリトリーを探して彷徨うことになる。しかも今度は私たちを後ろ盾に使うことができな

い。

神浜の……少なくとも西の魔法少女の敵になるし、残る中央と東の魔法少女たちも良い感情は持たないでしょう。

だけど評判が良好ならば……彼女は今まで救われることのなかった弱い魔法少女たちに手を伸ばす唯一の存在になる。

そんな存在を私たちが事前に認めたとすると、間違いなく私たちの



影響力が西に根付く。

足並みが揃っている魔法少女たちをさらに纏め上げ、いつか実現させるべき目標——東西融和の足掛かりにもなる。

わかっている。

これはwin-winに見せかけた彼女の処世術だ。

この話で一番得をするのは他でもない彼女なのだ。

……でも。

それでも惹かれてしまう。

「私はこれより、中立の存在になつてみせよう。

誰ともチームを組まず、差別もせず、西も東も中央も関係なく分け隔てなく平等に接すると宣言し、実現してみせよう」

その小さい体、幼い声で発せられたとは思えないほどの強い『力』を、私は感じた。

なぜだろうか、胸の中の震えが止まらない。

………。

「……詳しく話を聞きましたようか。あなたの言う多少の見返りはなに？」

気が付くと私は、彼女にそう問いかけていた。これでは半ば容認しているようなもの。

でも彼女の話は聞くべきだと、判断した。

彼女はただただ柔らかく笑う。

「現金じゃの、それが一番わかりやすい。そうじゃの……30000円でグリーンシードひとつじゃ」

30000円のグリーンシード……。

はつきり言いますよ。安い。

私なら迷わず買う。あの辛い魔女との命を懸けた戦いをして、そして手に入るかわからないものが30000円なら、買う。

「もちろん、グリーンシードが出るまで魔女は狩り続ける。料金は変わらず30000円じゃ。ただし、魔女との戦いには同行させる」

「？ なぜですか？」

「私の魔女と戦う姿を見せるためじゃ。多少は恐怖を克服できるじゃ

ろう」

「……なるほど、自立を促すのですね」

「うむ」

そうでないという意味があるまいと彼女は続けた。やることのスケールが大きすぎる。

傭兵として魔女を狩り、そして依頼主の自立を促す。

欲を張りすぎだ。

いつかきつと、いや絶対に破綻するでしょう。……でもなぜだろうか。

彼女ならやりきってしまう感じがした。

「……その戦いに同行させた魔法少女の安全は保証できるのかしら？」

そう無意識に感じてしまう私の最後の抵抗で、意地悪な質問をする。

普通の人なら「確かに」などの肯定の言葉や「多少の危険はあるが」などの前置きの言葉が出てくるでしょう。

でもきつと彼女なら――

「当たり前であろう？ 私は強いんじゃない」

——やっぱり、ね。

私の期待通り、強い『力』のある言葉を笑顔で返してくる。

……はあ。

「……参ったわ。私の負けよ」

両手を上げて降参した。

結局、主導権なんていつでも奪い返せるように仕組んであったということか。

きつと最初から落としどころはここだったのでしよう。そしてまんまと私は誘導されてしまったのだ。

彼女の話を耳を傾けてしまった時点で……いえ、それ以前に彼女にテリトリーをどうするのかを訊いてしまった時点で私の敗北が決定

していた。

もし私が普段縄張りに行っている地域を使っているといいと前以て提案していればこうはならなかったでしょう。だけどそんなものは結果論でしかない。

それほどもまでの彼女が持つてきた解決方法がぶっ飛んでしまっていたのだから。

「……あなた、本当に私と同じ年なの？」

「失敬な！ 私は真正正銘の15歳じゃ！ 今はまだこんなんじゃないが、来年こそピッチピチでボンキュッボンでグラマーでセクシーなJKになるのじゃよ！」

「ぶっ」

みふゆが嘔き出していた。

なによそのピッチピチでボンキュッボンでグラマーでセクシーなJKって……。

頑張つて流行の言葉を覚えようとしたけど全部死語だった時のおばあちゃんみたいよあなた。あと……その四つはどれも無理でしょう。悲しいことに。

今の彼女は先程までの溢れる力の化身ではない。そして策略家の彼女でもない。

このみかづき荘に訪れた当初の、とても同い年とは思えない見た目をした子供扱いされるとぶんすか怒る、お人好しな性格の彼女だった。

それからほとんどん拍子に話が進んでいき……三日後。

私とみふゆは彼女……星奈百恵を、傭兵魔法少女として活動することを正式に認めた。

結果は大成功。

有言実行。彼女はこの夏休みの間に各地で結果を残し、実績を積んだ。

たったひとりとはいえ、弱かった魔法少女を自立させることにも成功していた。

そしてその名は中央区に届き……都ひなのの立会いの下、パスを取

得した彼女は現在では西と中央ふたつを掛け持ちしている。

東からの依頼は、彼女の知り合いからの伝手で度々届いているようにけど、正式には決まっていない。けれど……これは時間の問題でしょう。

西に住んでいながら東に対する差別意識がなく、基本的に温厚で面倒見の良いお人好しな性格、そして一部の間で大ウケのその容姿（本人は納得していない）の彼女は人気者になりつつある。ここまで辿り着くために私とみふゆに見せた、老獪で狡猾な恐ろしい顔など誰も知る由もない。

彼女は狙い通り、神浜の魔法少女としての己の立ち位置を獲得したのだった。

そして夏休みが明け……神浜市立大附属学校中等部にて。

「初めましてなのじゃ。私は星奈百恵とい……ってなんでざわついておるのじゃあ！

そこのお主よ、聞えておるぞ！ 飛び級ではないわ、失敬な！ 同い年じゃ！

それからそこのお主い！ ペドと言うなせめてロリと言えい!!」

表と裏のギャップの差が恐ろしい神浜最強の傭兵が、私のいるこのクラスにやってきた。

クラスメイト達に囲まれ、なにかと理由を付けられては頭を撫でられてぶんすか怒る彼女はもはやマスコットか珍獣扱いだった。とても来年、彼女が目指すセクシーなJKとやらにはなれそうにない。

そんな彼女を放課後、屋上に呼び出す。

「新西区に引越してきた以上、ここに通うことになるかと予想してはいたけど……まさか同じクラスになるなんてね」

「そうじゃのう。それに関しては私もびっくりじゃ」

この学校のおすすめスポットだとか、学食の人気メニューの話だとか、どの先生の評判がいいかとか。なんでもない会話から始まった。

そして……やがて話題は私と彼女が初めて会った日のものに変わ

る。

「あなた……私を見極めようとしていたでしょう?」

「当たり前であろう?」

即答だった。……やっぱりそうよね。

今日一日クラスメイト達と触れ合う彼女は怒っていないながらも本当に楽しそうだったし、質問にはすべて愛想よく答えていた。少し声が小さい子の声もしっかり耳に入れて返事をしていた。

本来はこれが彼女の素なのでしょう。

それなのにあんな牙を隠し持っているのだから未恐ろしい。

そんな彼女があの日、私とみふゆを挑発するように接してきたのは、私たちが西のリーダーとして相応しいかを見極めるため。

ほんの少しの言葉の使い方や言い回しで自分の真意や目的に気が付くか、そしてその後どのような対応をするのかを見ていたのかもしれない。

「私はこう見えて負けず嫌いなんじゃないよ。私よりも優秀でない人間をリーダーとして崇め奉る趣味はないのじゃ」

「……もし私たちがあなたのお眼鏡に適っていなかったら?」

「そうじゃの。わざと持ち上げて人形にするか、その席を譲ってもらうかのどちらかはしていたかの」

「成り替わるのは確定していたのね」

「無能はなにをやらせても無能じゃ。そして害悪でしかない。そんな輩にこの街の顔など務まるはずがなからう。それならばいっそ、排除した方がこの街の為になるというものじゃ」

とはいってもこの街の魔法少女たちからの評判や統治の仕方を見て、問題ないとは思っていたがの。と続けた。

「だったらなんであんなに挑発したのよ」

「いやあ、張り合いのある連中だったから楽しくての。つつい張り切っってしまうたのじゃ。すまんのう」

「……笑い事じゃないわよ」

そっちのお遊びに付き合わされた私たちがどれだけ胃が痛くなっただことか……。

「すまんすまん、悪かったのう」と悪びれた様子もなくカラカラ笑う彼女は本当に憎めない性格をしている。

でもそんな彼女だからこそ、今の神浜は良い方向に進んでいける。

中立を維持し、誰の相談にも応じるのも、打算があるとはいえ性分でもあるのでしよう。それはとてもいいことだと思う。

……だけど。

敢えてスルーしたけれど……先程見せた彼女の真顔。

間違はなく、そこになにかがある。気を許してくれている証明なのでしよう。

一瞬とはいえ、彼女の闇が見えたような気がした。

「ねえ、百恵」

「む、なんじゃ?」

あなたは強い。

自分ひとりの力だけでどんなことでも解決できるのでしよう。

世渡り上手なあなたは誰かの元に近づくことがあっても、その輪の中に入ることはきつとないのでしよう。

でも私は……誰でもいいから、私にでもいいから、もっと他人に頼ってほしいなと感じてしまう。

魔法少女として頼る相手がみふゆしかいなかった私にとって……あなたが来てくれたことで大きな荷物が肩から降りて、とても身軽になれた気がするのよ。

でもあなたは基本的に誰にも頼らない。

いつも会う度に平気そうな顔で笑っているけど……傭兵としての仕事に加え、魔法少女としての自分の職務、さらに生活まで自分ひとりで回してしまいうあなたが、周りに人がいっぱいいるけど、どこか距離を取っているあなたが私は心配で仕方がない。

だから――

「私とチームを組まない?」

断られるとわかっていても、私は言い続けよう。

もっと頼ってほしい。私は応えられるから。

そんな私の本心を隠したこのセリフを。

## RTAパート3 第一次みかづき荘解散（後篇）

前回に引き続きお仕事頑張るところからスタートするRTAはー  
じまーるよー。

今回もお仕事ですが、頼もしいアシスタントがついています。

はい、そのお方はですね、傭兵ルートに足を踏み入れたかりんちゃん  
んでございます！

そして仕事の依頼数は……三件だよ三件。大分溜まってんじやん  
アゼルバイジャン（激寒）。

一気に三件のオーダーですか。これは最初の二回は百恵ちゃんが  
やって、最後はかりんちゃんにお願いすることにしましょう。

全部百恵ちゃんがやってもいいのですが、やらせてあげること  
かりんちゃんの好感度とステータスが上がりますので一回は譲って  
あげます。

ただし無責任に放っておくとかりんちゃんが失敗して大惨事を引  
き起こす可能性があります（2敗）ので、ちゃんと後ろで見守って  
てあげましょう。

おまたせ！ 最後の仕事しかなかったけど、いいかな？

「わかったの！ 先生の戦い方を見てから実践してみるの！」

じゃけん仕事行きましようね。

かりんちゃんを連れて現場に向かいます。おつ、揃ってんじや  
ん。三人は、どういう集まりなんだっけ？

ふんふむ、なるほど。

偶然調整屋でばったり会って、目的も同じ（傭兵依頼）でそのまま  
意気投合したと。いいことです。三人バラバラよりも三人一緒の方  
が移動に時間がかかりませんからね。なんてRTAに優しいお客様  
なんでしょう。

というわけで仕事開始です。

あつ、魔女の結界見つけ！（経験値）いただきまーす！

突入する前にコンディションを確認しましょう。

全員変身、オーケー！ グリーフシードのストック、オーケー！



ソウルジエム……オールクリア！（青野）

ということで魔女戦二連続イクゾオー！ デッデッデデデデ！  
（カーン）

……終わりました！ 見所さん!?なんて、ないです。

なので戦闘シーン演出OFF & 倍速安定です。魔女や使い魔の攻撃パターンは全部覚えていきますからね。それに対応し続けられればいいだけです。

もはや作業ゲーになってしまつて悲しいですが、これも全部攻撃100オーバーなうえに固有魔法がないからなんや。イレギュラーがない限りは大体二回攻撃で沈みます。本来見せ場のはずの戦闘シーンを丸ごと削ってしまうのはゲーム実況としてはあんまりですがこれはRTAだからね仕方ないね（レ）。

まあ、百恵ちゃんの魔女退治なんて前座もいいところなんですよ。大切なのはかりんちゃんですかりんちゃん。

しばらく歩いていると流れるように三つ目の結界が見つかりました。ちよつと歩いただけで魔女に会えるとかこんな町絶対に住みたくないですね。

さあかりん、どうにかしろ（無責任）。

「じゃあ行ってくるの！ パワーアップしたハロウインが生んだ魔法少女の力、見せてあげるの！」

おう、打ってこい打ってこい。

まずは定石通り、こちらに向かつてくる使い魔を相手にしていますね。客のことを考えているみたいでなによりです。客の安全を確保しないとお話になりませんからね。

しかもかりんちゃんはクツソ有能な固有魔法、『窃盗』を持っています。文字通り相手の持つているものを盗み取る能力ですね。かりんちゃんはこの魔法を駆使して遠距離からグリーンフシードを奪い取っていたわけです。しかし……この『窃盗』には別の使い道があります。さつきから元気に動き回っているかりんちゃんに対して使い魔の動きが鈍くなっています。

何が起こっているのかというと……なんとかりんちゃん、使い魔か

ら魔力を奪い取って自分の力にしているのです。

……つてあ、かりんちゃんが最後の使い魔を倒しました。第一ステージクリアですね。魔女戦に行きましょう。で、先程のかりんちゃんの魔法に関する解説の続きをします。

『窃盗』とはモノならなんでも盗むことができる魔法です。

さすがに記憶や命といったものは盗めませんが、ほとんどのものを盗み取れます。これで敵の魔力を盗み取って自分の魔力に変換しているわけですね。

『窃盗』の魔法を使うのに魔力は使いますが、それで盗んだ魔力の方が高いからとってもエコロジー。魔女のみならず対魔法少女戦でも一級の強さを誇るチート魔法です。他にも色々使い道があります……応用が少し難しいんですよ。

一度思いついたのが敵周辺の酸素を盗んで窒息させようという物騒極まりない使い方です。

実際にアドバイスしてやらせてみたところ……盗んだ酸素を全て吸い取ってしまった結果、酸素中毒になって氏にかけていました。かなり焦りましたがなんとか息を吹き返してくれました。

しかし魂に損傷を負ったらしく満足に動けない体にさせてしまい……激昂したアリナにアートのにされたことがあります。甘んじて受け入れました。ごめんよあの時のかりんちゃん。

だからもう二度と変な魔法の使い方を教えません。……と言いつつもひとつ、この魔女戦前にこっそりアドバイスしています。ホモは嘘つき、はつきりわかなだね。

でも大丈夫です。検証の結果、それは安全であることが保障されていますからね。……お、丁度いいのが飛び込んできました。

かりんちゃんが魔女を相手している間にすり抜けた使い魔が一匹こちらに向かってくる。百恵ちゃんが迎撃してもいいんですが、今回はかりんちゃんの実践訓練です。ノーガードで構えていきましょう。え？ かりんちゃんがしくじったら？ 大丈夫でしょ（1敗）。

つて、ああん？ お客さん？（レ） なんて迎撃する必要なんかあるんですか（無茶苦茶）。そんなことしなくていいから（良心）。まあ、見

ていなさんな。……ほい来た。

気がついたら全員、かりんちゃんの乗る大鎌の上に仲良く座っています。

なにが起きたかと言いますとですね。

かりんちゃんは百恵ちゃんたち全員を盗むイメージをして魔法を使ったんですね。だから百恵ちゃんたちはかりんちゃんのところに移動盗まれたしたということです。つまり擬似的なテレポートです。

「はあ……はあ……」

おっと、息が上がっていますねかりんちゃん。

四人同時にテレポするのはさすがにきつかったみたいです。ソウルジェムも濁ってしまっています。実戦訓練はここまでにしておきましょう。

よしよし、よく頑張ったねかりんちゃん。ほら、ストック分のグリーフシールドあげるからあとは百恵ちゃんに任せてそこでゆっくり休んでいなさい。

というわけでボタンタッチです。

おうおう魔女さんよお、うちの後輩かわいがってくれたみたいじゃないかあ？　じゃあ今までのちかえしをたっぷりとさせてもらおうじゃないか。もう許せるぞオイ！　もう許さねえからなあ？　（豹変）

金！（使い魔全滅） 暴力！（魔女に一撃） SEX！（とどめの一撃）（グリーフシールド）落ちろ！……落ちたな（確認）。

はい、仕事終わり！ 閉廷！ 以上！ みんな解散！ 君たちもう帰っていいよ！

あつ、そうだ（唐突）。おまえら三角形になって三人でチーム組まねえか？　ひとりでやるより効率的だしおすすめだぞ！　というわけであばよ！

「先生……その、ごめんなさいなの」

途中でばてちゃっていることを気にしている様子のかりんちゃん。自分には体力がないから向いていないかもって？　えっ、そんな関係ないでしょ（正論）。

しっかりとフオローしてあげましょう。

諦めんなよ！ 諦めんなよおまえ！ どうしてそこでやめるんだ、そこで！ もう少し頑張ってみろよ！ ダメダメダメ！ 諦めたら！ 周りのこと考えよ、応援している人たちのこと思ってみろって！ あともうちよつとのところなんだから！ 百恵ちゃんだってこのRTAの中タイムがトウルルって頑張ってたんだよ！ ずっとやってみる！ 必ず目標を達成できる！ だからこそ、Never Give Up!!

「……そうなの！ わたしだって、みんなの力になりたいの！ だからもつと頑張るの！」

ふう、やれやれだぜ。

これにて仕事はおしまいです。かりんちゃんの信頼度が上がって、かりんちゃんの戦闘能力も上がり次のフェイズに移ります。あと数回一緒に仕事をこなしましょう。

今日の所はかりんちゃんを送り届けて帰って寝ましょう。おやすみなさーい！

おはよーございまーす！

さてさて、家事をしつかりやってから学校に行きましょう。

そんなゆつくりしていて大丈夫かって？ 大丈夫です。ここはゆつくりすべきポイントですよ。

「おはよう、百恵」

いつも通り挨拶してくるやちよさん。しかしどこか緊張した感じですね。……来たつ。来た。来たなあっ!!?

「ねえ。あなた放課後、用事あるかしら？」

「ここで『ある』と答えましょう。」

実際今日は調整屋に行つて仕事があるならやるし、ないなら家で家事と勉強をするつもりです。だから用事はありません。嘘は吐いていない、オーケー？ オツケイ！ズドンツ

「そう……わかったわ。いえ、なんでもないのでよ」

すまんやつちゃん。心苦しいが必要な犠牲なんや。許せ。

さて、ここまでの流れで察している人が多いと思いますが、今日が『第一次みかづき荘解散』のきっかけとなる事件——安名メル魔女化イベント当日です。

やちよと知り合いだ、イベント当日にこうして話を持ち掛けてこようとしています。まさか7月に入った途端に発生するとは……いいじゃないかいじゃないか。

このイベントは回避可能なイベントです。

みかづき荘のメンバーたちと行動を共にしたり、メルに用事を持ち掛けて引き抜く、もしくは東から流れてきた魔女を先回りして倒したりすれば、メルを魔女化せずに生存させることが可能です。しかし、あなたには氏んでいただきます（無慈悲）。

ここでメルが魔女化せずに生存していた場合、やちよたちは魔法少女の真実に気が付くことはありません。そしてチームも解散せずにメインストーリーを迎えることとなります。

そうなるともう百恵ちゃんはガバのガバいばあちゃんになってシナリオブレイクからのチャートブレイクに繋がって時間遡行リセットしてしまいます。なのでこ→こ←はスルーする（激ウマギャグ）のが得策です。

授業も終わりましたし調整屋に向かいます。

仕事は……入ってないですね。よかったです。もし入っていたらばったり現場で遭遇する可能性があります。

では家に帰って家事して勉強して寝ましょう。そして明日も笑顔でやっちゃんとおはよう」するんです（人間の屑）。

というわけでおやすみなさい！

おはよーございまーす！ うーん、清々しい朝だあ。

仕事と家事を交互にやっているおかげで、家事スキルも地味ながらも着実に上がっていていいゾーこれ。

さあ、朝ごはんも食べたし、学校に行きましょう！

ちわあーす、三河屋でーす（大嘘）。

「……おはよう、百恵」

おう、どうしたんだいやちよチャン！ そんなしけた面しちやつて Sa!

「……放課後、みかづき荘に来てくれるかしら？ お問い合わせから」

あ、いいつすよ（快諾）。行きます行きます（食い気味）。

……ヨシ！（現場猫）ちゃんとイベントが行われたようですね。放課後まで倍速倍速ウー！

「……百恵」

ということで放課後、やつちゃんに連れられてみかづき荘に向かいます。

みふゆとももこがやちよ同様、かなり暗い顔でお出迎え。鶴乃ちゃんはやつちゃんたちから連絡を受けていないため来ていないようです。

あれ？ おかしいねメルがないね（すつとぼけ）。

「百恵、魔法少女の秘密……って知ってる？」

ん？ 等速に戻りました。

ということはテンプレじゃなくてオリジナルの展開になっているみたいですね。

ふむふむ……おや、百恵ちゃん知っているみたいですね魔法少女の秘密。

まあ、伊達に5年も魔法少女やっていませんし、むしろ6年経っても知らなかったやちよやみふゆが例外な気がします。

「そう……そうなのね」

おつ、倍速にできますね。ここからテンプレに戻ります。

というわけで飛ばしていきましよう！ 詳しく見たい人はゲームをやろうな！

選択肢は全部プラスになるものばかりを選びます。みかづき荘の皆さんとは今後もいい関係を築いていきたいですからね。……ただし。

「魔法少女って……弱体化したりとかはするんですか？」

はいきましたみふゆのこの質問。

みふゆさんは魔法少女の真実を知っている人に必ずこの質問をします。自分の力が衰えているのは、錯覚ではなく本当のことだと勘づいているからですからね。そうだよ（肯定）。

しかしここは『聞いたことがない』と返しましょう。

他にも『肯定する』『知らないふりをする』という選択肢がありますが、『聞いたことがない』を選ぶと百恵ちゃんはその事実を知らないということになります。これは後に重要になるので、しっかり選んでおきましょう。

「……そうですか」

おっと、みふゆさんは帰っちゃうみたいですね。じゃあな！ 気を付けて帰れよ！

あとはなんだかヤバい状態になっているももことやちよのソウルジエムをストックしていたグリーンフシードで浄化して……はい！

これで第一イベント『第一次みかづき荘解散』は終了です！

ここから3月までイベントらしいイベントはありませんので、好感度を上げたり、魔女と戦って経験値を稼いだりと自由に時間が使えます……なのですが！

百恵ちゃんの場合は仕事の都合で平日は自由に動けません。これも傭兵ルートの弱点だったりします。

まともバイトができませんし、行動もある程度制限されています。あと危険と隣り合わせで氏にやすいです。

まあ、それがあから東西やちよ、みふゆ、十七夜、みやこ先輩と中央の重鎮たちと知り合いかつ好感度高めなんていう滅茶苦茶な交友関係でスタートできるんですけどね。

自由なプレイをしたいなら傭兵ルートは回避した方がいいです。意外と上級者向けのチャートなんですよ。

さて、そんな多忙な百恵ちゃんの仕事のスケジュールを確認したところ、土曜日と日曜日の午前中は休業（ただし緊急時是对応）らしいので、そこだけは自由に行動できます。ネームド魔法少女と交友関係を広めるならタイミングはここですね。

経験値は仕事やそのあとの魔女狩り、チームが解散したとしても続けられる鶴乃ちゃんとの特訓で稼げますので問題はありますが、交

友関係はそうはいきません。

いくら傭兵ルートで遭遇率が高くなっているからって放置しておくとも重要なキャラと知り合えずに終わってしまうので、ある程度はこちから動く必要があります。

ということでもそろそろ目的の人物を探しに行きましょう。

おそらく先駆者兄貴たちのRTAもご覧になさっているであろう皆さんには、誰が目的の人物なのかおわかりですね？

そうです。なかなか組の組長、常盤ときわななか氏です。

いやですねえ、彼女は絶対に会っておくべきキャラなんですよ。一年前スタートは特に。

この後控えている超重要イベントである『そしてアザレアの花咲く』『散花愁章』の主役キャラで、交流を深めておくとこちらに救援要請依頼を持ち込んでくれます。そうすると好感度やら解決に向けての方針やらを自由に操作することができますのでとっても便利。

しかしながらその便利さゆえか、彼女とばったり出くわすのは非常に難しいです。

活動範囲が広いですし、彼女自身も多忙な身ですのでエンカウントし辛いんですよ。

彼女個人で直接コネを作るなら、キャラメイク時に彼女と同じ学校である参京院教育学園を選択することが確実かつ手っ取り早い手段です。

ただ今回は設定からしてこちらは来年大学生、ななかは来年中学三年生（↑うつそだろおまえ!）なんで、どうやっても同じ学び舎に通うことはできません。

じゃあどうやって会うのかというと、様々な伝手を使って他のなか組のメンバーである志伸しのぶあきら、夏目なつめかこ、純美雨チユンメイユイの内の誰かと知り合い、そこから紹介してもらおうように頼むのが一般的です。

例えば、エミリーこと木崎衣美里きさきえみりの相談所に行つて、そこで助手をしているあきらくんと出会う、とかですね。

ちなみにエミリーのお悩み相談所に行く手立てとして自害竜城明日香ちゃんやドS騎士美風ささらに頼るのもいいです。れん五十鈴れんはすとり綾野梨花かつぺの尊いおふた



りからでも最終的にはななか様に辿り着きます。

このように一定のキャラの好感度を上げつつ目的の人物を見つけ出すことができるのもこのゲームの楽しいところですね。

ランダム決定される交友関係をしっかりと確認した方がいいと言ったのは、アリナやゆきかといった地雷を回避するだけでなく、自分がかかりたいキャラととつかかりができるキャラがいないかを確認するためでもあるわけです。

まあ、そんなキャラはいなかったんですけどね！ 傭兵ルートだからね仕方ないね（レ）。

ということでも常盤ななか組長の搜索は土日に戻すとして、やってまわりました調整屋さんです。

やつほーみたま！ 仕事入ってるかあ〜？

「いらっしや〜い♪ 今日もお仕事入っているわよ〜」

やったぜ。ステ上げの意味でも仕事はあったほうがいいですからね。

ということでもいつもの作業に入るので、早送りでお送りします！

……ふう、ようやつと仕事が終わったぜ。

今日は厄日です。

一件しか仕事が入っていないのになかなか魔女がグリーンフシードを落とさず五回戦まで突入。いつも以上の連戦にさすがの百恵ちゃんのスウルジエムも少し濁っちゃっています。本当、グリーンフシードをストックしていて正解です。

まだまだストックがあるとはいえグリーンフシードは使わずに放置しておくとも魔女を孵化してしまいますので、古いやつは未使用であっても処理しなければなりません。

いやあ、昔そのことを失念していてですnee、家に古いグリーンフシードを置いたまま出かけて帰ったら部屋中魔女まみれになっていたことがあります。

グリーンフシードが魔女になる ↓ 魔女が呪いを振りまく ↓

呪いを吸収したグリーンフシードが魔女を生み出す、という悪循環が働いたせいで家の中があーもうめちやくちやだよ。

ストックしていたグリーンフシードがない、そして部屋の中には大量の魔女の群れ……あとはわかるな？

ほむらちゃんを見習って時間遡行リセットしました。みんなはグリーンフシードの管理を怠っちゃいけないぞ！

さてさて、こちらの失敗談を語っている間にもですね、こうして早送りで三体目の魔女を狩り終えます。

今日獲得したグリーンフシードはふたつ。そして消費したグリーンフシードは三つですので損してしまっていますが、非常に新鮮で……非常においしいグリーンフシードに変わったと思えば許せます。

まあ、こんな日もあります。しょうがないね。経験値はごつつあんです。

ということですね、少し早いですがキリがいいので今回はここまでにしましょう！

ご視聴ありがとうございます！

## Side. 七海やちよ 魔法少女の真実

今日は、私の人生最悪の日だ。

昨日、中央の都ひなのからある要請を受けた。

大東区から流れてきた魔女を倒してほしい。そんな要請を。

その魔女は今日に至るまで東の魔法少女たちは勿論のこと、中央の魔法少女たちも対応した。

比較的新しいチームから中堅クラスのチームまで、数多くの魔法少女たちがその魔女に挑んだ。だけど誰ひとり、どのチームもその魔女を倒しきることができなかった。

それが意味しているのは、この魔女が相当の力を蓄えた大魔女だということだった。

数ある神浜の魔法少女のチームを撃退してきたその魔女は大東区から工匠区、中央区、そして水名区と神浜を横断し、遂に最果ての西区まで流れついてしまった。

だから西の統括である私のチームに緊急要請が来た、ということである。

この新西区で狩らなかった場合、魔女は神浜を出てしまう。

そうなってしまうはその魔女によってさまざまな人が呪われる可能性が高く、しかも私たちが手を出すことができなくなる。

神浜で生まれ出た魔女は神浜の魔法少女が倒す。

私を含め縄張り意識の強い魔法少女たちにとって、これは矜持であり意地でもあった。

だからこそ、私たちが動く。

西のまとめ役であり最後の砦でもある私が率いるチームが、その大魔女を倒す必要があった。

そして今朝、そんな重要案件に頭を悩ませつつ、みかづき荘の帳簿にとらめっこをしていた。

ももこと鶴乃はうるさいわ、みふゆは役に立たないわでいつまでたっても家計簿が進まずに頭を抱えていると……。

「七海先輩！ 今日ボクは冴えてるですよ！」

またやかましいのが来た。

しかも禁止していた占いまでやっているし……。メルメの占いは占った結果の未来になるように誘導する能力を持っている。

今回は偶然ラッキーデイを引き当てたようだけれど……心臓に悪いからやめてほしいというのが本音だった。

でもメルは魔法少女になる理由になるほどの占い好きだったし、禁止と言ったのはむやみやたらに占いまくってとんでもないことにならないようにするためであり、たまにやる程度なら仕方ないと思っていた。むしろ今日まで我慢できたのだから、褒めてあげるべきでしょう。

まあ、どんな未来になるかは見させないけどね。

とはいえ、東から流れてきた大魔女の討伐、レシートやらなんやらと照らし合わせても計算が合わない家計簿、そして禁止していたメルの占いと、立て続けに良くない出来事が重なったことで今の私は少し憂鬱だった。

家を出て学校に向かうもその足取りは重い。

帰ったらすぐに大魔女を討伐して、また家計簿とにらめっこする作業に戻らなければならぬ。

せめてどちらかでもなんとかできたら……ふと頭にそんなことを浮かべてしまうほど、今の私の機嫌は優れていなかった。

家計簿は私以外にできないから、魔女の討伐は誰か代わりにやってくれないだろうか。でもさすがに他のチームのみんなだけを向かわせるわけにもいかないし……。

誰か、頼りになる強力な魔法少女がいないだろうかと考えていると……。

「おはようなのじゃー……む。どうしたのじゃお主よ、難しい顔をして」

挨拶されてようやく、適任者がいることに気が付いた。

そうだ。彼女がいた。

私の親友であり切り札でもある神浜最強の傭兵、星奈百恵が。

こんなに身近にいる神浜最強の存在に今の今まで気が付かないほど、私は疲れていたらしい。

百恵に任せておけば大丈夫だと断言できる。

いくら力を付けた大魔女であろうと、魔法少女歴五年と私に次ぐ長い時を生きた魔法少女としての経験と、持ち前のその破壊力でこれまで何十……いや、何百という魔女を屠ってきた彼女ならば、単騎で勝利することができるでしょう。

「おはよう、百恵」

「うむ、おはようなのじゃ」

「ねえ、あなた放課後用事あるかしら？」

挨拶をせずに、食い気味に私は百恵に今日の予定を聞いた。

……だけど。

「すまぬが……今日は無理じゃ。そろそろ本格的に勉強しなくてはならなくての」

申し訳なさそうな顔で百恵は断ってきた。……そう、よね。

こうなるのは覚悟していたことだった。百恵だって、多忙な身だもの。

傭兵として多くの魔法少女たちを助け、グリーンフシードをストックするために魔女を狩り、それでいて大学に行くための勉強もする。

奇しくもそのルーティンは私と同じだった。だから、わかる。

「そう……わかったわ。いえ、なんでもないのよ」

笑顔を作って私は百恵に返事をした。

……大丈夫。

だって、メルのお占いの結果は『今日はラッキーデイ』。

メルのお占いの力は本物なもの。だからきつと大丈夫。

私は自分を奮い立たせた。

迎えた放課後、私たちチームみかづき荘は、東から流れてきた魔女の討伐に向かった。

でも鶴乃は途中で用事があるのを思い出して慌て始めた。

話を聞くとどうしても外せない用事らしく帰らせた。そんな用事を普通に忘れてしまう辺りがなんとも鶴乃らしかった。

鶴乃を帰らせて暫くして……河川敷で、その魔女を見つけた。

その魔女は神浜では見慣れた魔女……砂場の魔女だった。

全ての距離の攻撃に優れた、万能型の魔女だ。

そして……今回はその上位個体。相当の数の人間を犠牲にして手に入れたであろう、その魔力は重く、禍々しく、魔女の全長も通常の二倍はあるでしょう。かなりの大物だった。

東、中央と魔法少女たちと戦い続けてここまで来ただけあって、魔女も消耗しているみたいだけど、まだまだ余力があるのでしよう。

周りで群がっている大量の使い魔たちを見ればわかる。

「ここは、私が囷になるわ」

もしかしたらいつも二振りで魔女を沈めていた百恵でさえ、それ以上斬りこまないと勝てないかもしれないほどまで成長した魔女。そして消耗したメルを見て、正攻法では絶対に勝てないと私は見切りをつけた。

スピードとテクニクに自信がある私が注意を引き付けている間に、幻覚で相手を惑わすみふゆが隙を作り、私ともこが大技を繰り出して魔女を倒す作戦に切り替える。

みふゆが心配してくるけど大丈夫。経験年数だけなら私は最強の傭兵である百恵以上なのだ。

何回もこのタイプの魔女と戦っているから、攻撃パターンもしっかり抑えている。引き付けるだけならば私ひとりで充分、自信を持って言えた。

でも、それは私の驕りだった。

「!? しまった！」

いつも通りの安全圏に着地しようとしたところで……狙っていたかのように使い魔たちが襲い掛かってきた。

そうだった。この魔女は伊達に東から西にやってきたわけではなかった。

これだけ成長できたということは……この魔女もまた、多くの戦闘

経験が積んできたということ。魔女だって生物なのだ。学習能力がないはずがない……。

使い魔法たちの奇襲に面食らいながらもなんとか流しきることはできた……けど。

気が付いた時にはもう遅かった。

目の前には巨大な魔女の拳が迫ってきていたのだから。

「七海先輩!!」

しかしその拳が私に直撃しようとしていた刹那、背中に小さな衝撃を感じると私の身体は前に投げ出されていた。

そして振り返るとそこには……安心したような表情を浮かべるメルが、魔女の一撃を食らっていた。

「——メル!!!」

頭の中が真っ白になった。メルが……メルが魔女の拳の下敷きに!

すぐに助け出そうと体を動かそうとするもあまりのショックからか、情けなくも腰を抜かしてしまっているらしく動けない。

すぐに異変に気が付いたみふゆとももこの一撃を受け、怯んだ魔女は分が悪いと判断したのか、言葉にならない悲鳴を上げつつ逃げていった。

結界は消え、元の河川敷に戻る。

行動し始めたのは夕方だったはずなのに、もう辺りはすっかり真っ暗闇に包まれている。

「……メル?…メル!」

ようやく体を動かせるようになった私はメルの元に向かう。

力なく倒れているメルの身体は傷だらけで……

「メル……あなた……ソウルジェムが……」

ソウルジェムがどす黒く濁り切ってしまったていた。

ソウルジェムが魔法少女の魂そのものであることは、以前の仲間である雪野かなえの一件ですでに判明している。

そのソウルジェムがこんなに濁り切るということは……もう満足に体を動かすこともできないし、回復することすらままならない。

そして、そんな状態のソウルジエムを浄化するアイテムであるグリーフシードは、今現在誰の手の中にもなかった。

今からでも魔女を探して狩ってこようと私の手を、メルは掴んだ。

「メル、離して……。すぐにグリーフシードを……」

「ううん……。もうだめボク分かるから……」

どんどんね、冷えてく……。感じが……。す……。るです。

力なく、途切れ途切れにしゃべる彼女を見て……。私も確信してしまった。

メルの目はもう焦点が合っていない。辛うじて私は見えているのでしようけど、もう死期が近づいてきている。そう思ってしまった。

なにが……！

「なにがラツキーデイよ……。最悪じゃない……」

もし鶴乃がいて五人体制だったら、もし百恵に予定が入っていないくてフリーだったら、もしグリーフシードのストックがあったら。

今更ながらそんな、あったかもしれない未来の可能性を思い浮かべてしまつて、悔しくて、私はそんな言葉を零す。

でも……。

「……………いす……………です」

メルは幸せそうな、満面の笑顔で何かを呟く。

「なに言ってるの……！」

「ぐっ、ううう!!」

「メル……」

それからは……。私は、私たちはただ見ていることしかできなかつた。

呆然と、なにもできず、ただただ見ているだけ。

そして……。すべてが終わつた。

「な、んだよこれ……」

ももこのその言葉は、私と……。多分みふゆも真つ先に出したかった言葉だつたでしょう。

だつて……。

「どうして……」



だってメルから……魔女が生まれてしまったのだから。

結局、メルから生まれた魔女と戦う気力も余力も残っていないかった私たちは撤退し、みかづき荘に戻った。

「……このマグカップも、持ち主を失ってしまったわね……。くっ……メル……」

突然の親友の死。

私にとつては二回目でも、やっぱりすんなりと受け入れることはできなかつた。

どうして……メルが……。

「ダメだアタシ……信じられない……」

なにかに耐え切れなくなつたのか、今までずっと口を閉ざしていたももこが感情的に叫ぶ。

「だってあれが本当ならさ……。アタシらが倒してたのって魔法少女ってことだろ!!」

それは今日……メルの死に続いて受け入れがたい真実だつた。

「ももこさん！　みなまで言わないでください！」

考えたくもなかつたことを言葉に出されて、みふゆも叫ぶ。

私も叫びたい。けれど……そんなことをしてもなにも解決しない。

だから我慢することにした。我慢しようとした

「だつてみふゆさん！　願いを叶えた結果——アタシらは人殺しになるんだろ？」

そのももこの言葉が耳に入った瞬間、口よりも手が先に動いてしまつていた。

乾いた音と同時に右手に嫌な感触が伝わると、私に横顔を見せるももこがいた。その左頬は私の平手打ちを受けて少し赤くなっている。仲間に暴力なんて絶対に振るわないと心に誓っている私だけど、今の発言は許容できるものではなかつた。

だつてそれは、今日まで精一杯生きて、共に戦つてきた大切な仲間であるメルへの侮辱に値するものだつたからだ。

平手打ちされて少し冷静になったらしいももこは謝罪してくれたけど、なにも解決していない。

もしこれが事実なら……私たちも遠かれ遅かれ魔女になってしま  
う。

「あの人は……」昨日やちよさんが連れてきたあの人は、このことを知っているのか？」

ももこがふと、そんな質問をしてきた。

あの人というのは……。

「百恵……」

私とみふゆに次ぐ大ベテラン、星奈百恵。

……確かに、彼女なら知っている可能性がある。

魔法少女が魔女になる。

そんなキュウベえが私たちに隠していた魔法少女の真実を。その  
全てを……。

「明日、百恵を連れてくるわ。知っているなら……詳しく聞かないと  
いけないし、知っていないなら彼女に話すべきことだから」

「……そうですね。でも鶴乃さんには」

「秘密にすべきよ。鶴乃に……余計な心配をしてほしくないもの」

「……そうだな。このことはアタシらの中に留めておいた方がいい。  
あまりにもショックが大きすぎる」

その日はそう纏まったところでお開きとなった。

そして、翌日。

「……おはよう、百恵」

「おはようなのじゃ……ってどうしたお主よ!?!」

いつも通りに挨拶をしたつもりだったが、私の顔を見た百恵は仰  
天した。

そしてすぐに真剣な顔になる。

「どうした？ いったいなにがあった？」

「……放課後、みかづき荘に来てくれるかしら？ お願いだから」

「……あい、わかった。今はなにも聞かんし、話しかけもせん。放課後ゆつくり、聞かせてもらうからの」

昨日と違って異常事態だと察してくれたりらしい百恵は二つ返事をして、それからはそつとしておいていてくれた。

その気遣いが今の私にとってはなによりもありがたく、そしてつらかった。

「うっ……うっ……」

机に突っ伏して、私は涙を流す。

隣にいる親友は気付いていないのか、それとも気付いていて放っておいてくれているのか。

先程の言葉通り、百恵は放課後になるまで私に話しかけてくることはなかった。

「邪魔をするぞ。……って、これはまあ、悲惨じやのう」

放課後。みかづき荘に来た百恵は顔を顰める。

学校からすぐに戻ってここに来たらしい浮かない顔をしたももと、昨日のシヨックから立ち直れず学校を休んだみふゆ、そして朝から負のオーラをまき散らしている私。

一昨日訪れた時の賑やかなみかづき荘とは思えず、まるで別の場所に來たと錯覚しているでしょうね。

……私も正直、昨日の騒がしい朝みたいな日常が一日経つだけでこんな風が変わってしまうなんて、思ってもみなかったもの。

「して……他のふたりはどうした？」

「鶴乃は来ないわ。あの子には聞かせられない話をするのだもの」

「ふむ、そうか。それでは……安名メル、とやらになにがあった？」

聡い彼女のことだ。

おそらく本題はそこここにいないメンバーだにあるということとは、今のみかづき荘……いえ、今朝の私の様子を見た時からすぐにわかったのでしょう。

そして私が鶴乃のことだけを答えたのを見て、残ったメルの身になにかが起こったのだと確信した。相変わらず、理解が早い。

「百恵、魔法少女の秘密……って知ってる？」

「……なるほど」

それを聞いた百恵は「それは残念であったな」と目を閉じた。

……やっぱり。

「……やっぱり知っていたのね」

「伊達に五年も魔法少女をやっとらんからの」

……私とみふゆは六年、もう少しで七年やっているはずなのだけ  
ど、ね。

「どこから話せばよい？」

「あなたの知っていること、その全てを教えてちょうだい」

「……よかろう」

みかづき荘のソファに百恵は座り、語った。

「まずは私が魔法少女になった経緯を手短に話そうかの」

今から五年前のこと、百恵は神浜から少し離れた土地に暮らして  
た。

詳しくは教えてくれなかったけど、百恵は特殊な環境で生活してい  
たらしい。

百恵はその場所を忌み嫌っており、なんとかして脱却を図ろうとし  
ていた。

そんなときだった。

「やあ、キミは星奈百恵だね」

キユウベえが現れたのは。

当時13歳。

小学校から上がりたてとはいえ頭の回転が早かった百恵はキユウ  
ベえの言葉を一切信用していなかった。

『どんな願い事も叶える』というフレーズが大嫌いだったらしく、そ  
んな都合のいい話があるかと聞く耳を持たなかった。

「じゃがのう、そう言ってはいられないような事件が起こってしまった  
のじゃよ」

百恵を取り巻く環境が、彼女の我慢の限界を超えたらしい。とうとう彼女は最後の手段として——キュウベえの話に乗ることにした。

「その時に根掘り葉掘り聞いたのじゃよ」

キュウベえは嘘を吐かない。しかし、本当のことを全て話すわけでもない。

その性質を、執拗に契約を迫ってくるキュウベえの様子から見抜いていた百恵は魔法少女になるうえでメリット、デメリット、行きつく先、キュウベえの目的に至るまで全て、余すことなく聞き出した。すると目論見通り、あっさりとその答えを返してきたらしい。

「ここからは心して聞くのじゃ。さもなくば死ぬと思え。心弱き者に、この話は聞かせられぬ。最終通告じゃ。興味本位で聞いている者がいるのならば、今すぐこの場から立ち去るがよい」

……。

誰ひとりとして、静かなリビングから去る者はいなかった。

もう私たちは知らなければよかった現実の一片を見せられている。

だから……百恵を招き入れ、彼女が真実を知っていることを確認した時から、諦めにも近い覚悟は決まっていた。

「……結構。では、本題に入ろう」

魔法少女に変身するためのソウルジェム。

それは、その名の通り自分の魂そのものが結晶化した宝石。

即ち、自分自身の命そのものであることを言い放った。

私とみふゆはともかく、そのことすら初耳だったももこは愕然としている。

百恵は指輪を銀色に輝くソウルジェムへと変える。

「はつきり言ってしまうおう。私たちはもはや、魔法少女という名前の石ころじゃ。これが砕け散った時、私たちは事切れる。

そしてこれが肉体から百メートル以上離れた場合、肉体は機能を停止する。

つまり、うつかり待機状態の指輪を紛失させたり、誰かに盗まれてしまうともうおしまいじゃ。魂は生きているのに、肉体はすでに死ん

でいるのじゃからな」

……まだ序章だというのに残酷すぎる真実を突き付けてくる。

「そして、これの輝きは私たちの魂の輝きじゃ。」

魔法を使う、日常生活で体を動かす。単純なエネルギーの消費量を表すメーターならまだかわいものよ。

これの恐ろしいところは感情さえも、この輝きに影響を及ぼすことじゃ。

ほら、思い浮かぶ出来事はないか？

例えば嫌な目に遭った時にふとソウルジェムを見たら、綺麗だったはずなのに少し濁っていたりしていた、なんてことが」

……ある。

六年も魔法少女を続けていれば必然と、自分にとってマイナスの出来事とも遭遇する。

そんなときに魔法少女に変身して魔女と戦いソウルジェムを見ると、そこまで魔法を使っていないのにやけに濁っていると感じたことは何回もあった。

「人間の感情は恐ろしいものじゃ。特に私たち、思春期の者たちにとってはこのこと。」

少しのことで感情的になり、少しのことで落ち込む。それに反応してこれの輝きはどんどんと失っていき、次々と体に悪影響を及ぼす。

強い倦怠感、脱力感、無気力感、ストレスの増加、ヒステリックな行動、一時的な偏執症などが主な症状かの？」

全部心当たりがある症状だった。

今までの経験がすべて、百恵の言葉によって関連性が裏付けられていく。

「そして……完全にソウルジェムが濁りきった時。それは即ち、その魔法少女としての魂が尽きた時じゃ。」

単純に生命力が消えるか、完全に心が折れ絶望に染まった時——ソウルジェムはグリーンフィードに変わり、魔法少女は魔女に成長する。

これが、お主らが知りたがっていた、魔法少女の真実じゃ」

手に置いていたソウルジェムを指輪に戻し、目を瞑って話を締めく

くった。

「そう……そうなのね」

……百恵の最終通告にあった「死ぬと思え」の意味をこれでもかと理解する。

この残酷すぎる真実を聞いて絶望してしまえば……  
魔女魔女になるの  
それでおしまいだから。

「……アンタはさ、平気なのかよ」

いつも以上の低い声で、ももこは百恵を睨みつけていた。

「平気とは？」

「アンタはさ、確かに凄い人なんだろうさ。他の魔法少女たちを助けて、そして頼られる人なんだろうさ。でも……結局、アンタは魔法少女だったモノで商売をしているんだろ？」

精神的に不安定になっているからか、いつもは絶対に言わないはずのとんでもない暴言をももこは口走ってしまった。圧倒的に格上の大先輩に向かってだ。

叱ろうと口を動かそうとする——前に百恵が「耳が痛くてしようがないのう」と優しく、それでいて悲しく笑った。

「お主の言う通りじゃ、十咎ももこよ。私は、私たち傭兵は元私魔法少女たちの同僚の命を金に換えておる。じゃがのう所詮、魔法少女は魔法じゃ。もはやそれは人間であるどころか、魔法少女ですらない。世の中に災いを齎すバケモノじゃ」

「だからって……そんな簡単に割り切って納得できるわけが——!？」

ももこの言葉が遮られた。

ゆつくりソファから立ち上がり近づいてきた百恵に、抱き着かれたからだ。

身長差ゆえに座っているももこよりも背の低い百恵だけど、背伸びをしてただただ優しくももこを抱きしめ、その小さな手で頭を撫でていた。

「そう、自分を追い込むでない」

「なにを……」

「よい。強がらないでよいのじゃ。悲しい出来事が起きて、知りたく

もなかった真実を知って、自分が手をかけてきたものたちの正体を知って、つらかったであろう?」

「……っ」

ももこの肩が震える。……そうか。

思えば昨日ももこが気にしていたことは、自分たち魔法少女の魔女化についてじゃない。自分たちが倒した魔女が元魔法少女だったことについてだった。

そして、今のももこの八つ当たりはその罪悪感の裏返しだったのでしよう。

「優しい子じゃのうお主は。自分の訪れる運命よりも、自分が手をかけた存在を真っ先に思いやることができる、とつてもとつても優しく強い子じゃ。良い子をチームに入れたのう」

私に笑いかけながら、百恵は懐から取り出したグリーンフシードをももこの右手に翳した。

ももこの指輪……ソウルジエムから黒い靄が立ち上り、それはグリーンフシードに吸い込まれていく。

「あ……」

「全くこんなになるまで自分を追い込みおって。

安心せい。お主はなにも悪いことをしとらんよ。

魔法少女が魔女を狩る。それは当たり前のことであり、世の中の役に立つ素晴らしい行いのじゃ。

正体がどうか、そんな下らんことを気にする必要はない。そしてそれをすぐに納得する必要もない。

ゆつくりでよい。ゆつくり受け入れるのじゃ。

少なくとも、私はお主の味方じゃからの」

その言葉で、ももこは崩れ落ちた。

小さくも大きな百恵に抱き着いて泣きじゃくれる。

「ごめん……ごめんなさい、百恵さん……」

「よいよい。私はなーんにも気にしてはおらんよ。よく、頑張った。頑張って正気を保てたの。お主は偉いのう」

「ぐっ……ううっ……」



……多分、今一番欲しかった赦しの言葉だったのでしよう。  
ずっと溜め込んできた罪悪感を流すように、ももこは百恵に抱き着いて泣いていた。

普段は抱き着かれると逃れようとする百恵だけど、今回は気にした様子もなくそれを受け入れている。

「あの……ひとついいですか、モエちゃん」

「ん？ なんじゃ？」

「魔法少女って……弱体化したりとかはするんですか？」

みふゆがそんな質問を百恵にした。正直、よくわからない質問だった。

そして百恵もまた、すぐに戻ったとはいえ一瞬だけ、真顔になっていたのを私は見逃さなかった。

「……魔法少女の弱体化？ それは聞いたことがないのう？」

「本当ですか？ その……モエちゃんは、ここ最近自分の力が衰えたと感じたことはありませんか？」

「私の力が？ うんにや、そんなことはないのう？ むしろ漲っているぞ。私の願いのせいかもしれぬがの？」

「……そうですか」

それだけ聞いて、みふゆはまた暗い顔に戻ってしまった。

……なに？ 今のはなんの意味のある質問だったの？

「みふゆ……」

「やっちゃん……すみません。今日はこれで帰らせてもらいます」

「え……」

「モエちゃん、知っていること話していただいてありがとうございます  
でした。それじゃあ、失礼します」

「う、うむ。気を付けて帰るのじゃぞ？」

足早に、みふゆはみかづき荘から出ていく。

ももこもひとしきり泣いた後、気持ちの整理を付けるために帰っていった。

残るは私と百恵だけ。

……。

「百恵」

「なんじゃ？」

「私ね……チームを解散させたいと思うの」

「……とりあえず、理由を聞こうか」

「……私は、ももことみふゆの気持ちを、考えを理解してあげられなかった」

近くにいたはずなのに、私はももこの苦しみを理解してあげられなかった。さっきのみふゆの質問の意図も察せてあげられていない。

チームのリーダーとして、私はふたりの求めていることができないでいた。

それに……

「……それは建前であろう？ 人の気持ちを全て理解することなんてできん。私は論理的に紐解いてたまたま彼女の真意を当てたにすぎぬよ。じゃから本当の理由を話してはくれぬかの？」

相変わらず、百恵は聡い。すぐに本音と建前を見抜いてきた。でも……。

「ごめんなさい……それは言えないわ」

だって……口に出したら、もう後戻りできないじゃない。

昨日のメル犠牲は……誰でもない私のせい。

私を庇って、メルは魔女になった。

そして、かなえも私たちを……私を助けるために魔女に特攻して命を落とした。

このふたつの出来事が偶然でなく、私の願いが原因だとしたら？

もしそれが真実だったら……！

「やちよっー」

「……は」

珍しく『お主』ではなく名前で呼んできた百恵の声に我に返った。

いつの間にか取り出していた、ふたつ目のグリーンフィードを私の指輪に当てている。

「無理に聞こうとしてすまなかった。もう聞かんし、お主のチームじゃ。リーダーのお主の好きにするといい」

「百恵……」

「じゃがの、これだけは覚えておれ。私は常に中立じゃ。八方美人と呼ばれてしまうかもじゃが、私は私の知る神浜の魔法少女全員の味方じゃ。勿論、お主もの。じゃから……どうしても耐えられなくなったら、私を呼べ。よいな？」

それだけ言つて百恵はみかづき荘から出ていった。

……まったく。

「ずるいのよ、あなたは……」

弱いところばかり攻めてきて……それでいて最後は優しく包み込んでくるんだから。

でも、少しは気持ちが悪くなった気がする。

チームを解散させたとしても百恵だけは、私の切り札である百恵だけは、そばにいてくれる。

そう思えるようになったのだから。

数日後、私たちは遊園地に出かけた。

つい先日メルが死んだことを伝えた鶴乃も連れて、四人でしばしの現実逃避にも等しい時間を過ごして……。

私たちのチームは、解散した。

## RTAパート4 踊る組長大捜査線

組長探して三千里奔走するRTAはーじまーるよー！

さあさ、今回は土曜日からのスタートです。

金曜日？ 第一次みかづき荘が順調に解散する動きなのを確認したのでそのまま流しました。仕事もありませんでしたし、勉強と家事しか碌に動いていなかったから多少はね？

勉強もすっかり8時間やりこみましたし、これで土日を自由に過ごせます。

ちなみにこの裏ではやちよさんたちが遊園地に行っています。金曜日にやちよさんから聞きました。解散確定演出です。(情報提供) ありがとナス！

というわけで早速ね、組長こと常盤ななかを探しに行きましょう。どこだあ？ 探すぞお。

しかしながら本人をダイレクトに見つけるのは至難の業なので、彼女と接点のある他のななか組の組員たちを頼りに取り次いでもらうとします。

ちなみに百恵ちゃんの名前を使って呼び出すという力技はできません。当たり前だよなあ？

いくら名が売れている傭兵と言っても名指しで魔法少女を呼び出せるような権限はありません。というかそんな権限はやちよさんにもありません。知り合いなら話は別でしょうが。

そもそも話、百恵ちゃんはななか様のこと知りませんしね。

だってななか様、ああ見えて魔法少女になってまだ一年どころか一ヶ月も経っていないですから。それであの強さ、あの貫禄である。はえ〜すつごいカリスマ……。

なのでそんな新人魔法少女のことなんて知る由もない百恵ちゃんは地道に目的の人物を求めて動くしかないのです。

まずは調整屋に向かいます。

みたまさんはほとんどの魔法少女と面識があり、調整の都合上、その人の事情や過去を知っています。

中立故に多くのことを語りませんが、ちよつとした情報なら事前交友関係になくても教えてくれます。事前交友関係にあると、さらにそれ以上の情報を提供してくれる場合があります。そして百恵ちゃんとおみたまさんはめちゃくちゃ仲がいいです。……あとわかるな？

「いらつしやうい。あら、モモちゃんじゃない♪」

早速お出迎え。なんか今日はすつごく機嫌がいいつすね。

「丁度朝ご飯作ろうと思っていたところなのよ。わたしの新作よ」

「フアツ!？」

みたまっ!? 何してんすか、やめてくださいよ本当に！（朝からテロは）まずいですよ！

これはなんとしても阻止しましょう。

みたまの料理あんな劇物を食べさせられてしまったら、せつかくの土曜日が丸々潰れてしまう可能性があります。貴重な自由時間をこんなことで潰すわけにはいきません。

ということ、ここは百恵ちゃんが代わりに料理するように誘導しましょう。

みたまさんの料理を回避する手段として一番効果的なのは、自分が代わりに作ることです。そのための料理、料理……あと、そのための家事？

「モモちゃんが作ってくれるの？ じゃあお言葉に甘えちゃおうかしら」

「そうだよ（肯定）。やったぜ。」

そしてミニゲーム開始です。

R T A 的には連打しまくって失敗安定のゲームですが、料理スキルを身に付けていると手際よく料理できるので連打したとしても失敗しません。普通か成功のどちらかになります。

今回は……はい、成功ですね。美味しい朝ごはんが出来上がりました。

「美味しいわあ、モモちゃん」

これにはみたまさんにもっこり笑顔。

(好感度が上がるのが) 見える見える。

「そうだ。今日料理教室に行こうと思っていたんだけど、モモちゃんも行かない?」

あ、いいつすよ (快諾)。

これはみたまの好感度イベントとウォールナッツの料理教室イベントの複合形ですね。

ここから胡桃くるみまなかと知り合えるのはいいことです。しかもウォールナッツは他の魔法少女たちも利用する名店なので、そこで誰かと接触できる可能性があります。

みたまの料理を回避できる、好感度も稼げる、イベントでネームドキャラとお近づきになれる。やっぱ……料理の……スキルを……最高やな!

みたまさんから情報を引き出そうと思いましたが、渡りに船なイベントが起こってくれたのでやめにします。無理して聞き出して困らせると好感度に影響が出ますからね。

というわけでウォールナッツにイキますよ〜イキますよ〜イクイク……ヌツ!

「八雲みたまに……星奈百恵!?!」

「こ、これは凄い人たちが来ました……!」

なんと! 料理教室に参加していたのは美風みなぎささらと竜城たつきあ明日香のコンビでした!

エミリーの魔法少女ストーリーでこのふたりがウォールナッツの常連だということが明かされていましたが、こんなタイミングよく出会うことができるとは!

このふたりは前回お話しした通り、ななか様と会うための起点になるネームド魔法少女です。エミリーのお悩み相談所を作り上げたのは他でもないこのふたりですからね。

ここで好感度を稼いでエミリーのお悩み相談所に連れて行ってもらいましょう。それであきらくんと知り合ってななか様に辿り着く。

完璧なシナリオです！

みたまさん、(誘ってくれて) ありがとナス！

「時間になりましたので始めましょうか」

まなか先生オツスオツス！

彼女は今後ともお世話になる魔法少女です。

この料理教室のミニゲームで成功すると料理スキルが大きく上がります。ここですっかりと料理好きをアピールして、料理教室を開くたびに電話してもらおうように頼んでおきましょう。そうすればぐんぐん料理スキルが上がります。

さて始まりました、料理教室のお時間です。オツス、(指導) お願いしまーす。

連打なんてしません。ガチで取りに行きます。

ミニゲームイクゾオー！ デツデツデデデ！ (カーン)

……F○○→(成功) ……F○○→(成功) ……F○○→気持ちい

〜 (大成功)。

はい、ミニゲーム終わり！ 閉廷！ 以上！ やっぱ……百恵ちや

んの……評価を……最高やな！ 料理スキルがメキメキ上がっていいゾ〜これ。

「これは凄い逸材です……」

「凄い……神浜最強の傭兵は料理の腕も最強なの……!?!」

「あの手際の良さといいこの味といい、感服いたしました……!」

ヨシ！ (現場猫) 他の三人も順調に好感度が上がっていますね。

まなかとは料理の師弟関係っぽいものに、お笑いコンビ騎士と牛にはエミリーの相談所への案内人になっていただきますから、好感度は高いに越したことはないです。

「そして……こつちもある意味凄い逸材ですね……」

あ、みたまさんは自動的に大失敗、評価は最低です。

みたまさんはまなかの指示通りのやりかたで料理していたはずなんです……なぜか大失敗に終わります。(食材のチョイス) ミスが多すぎんだよね、それ一番言われてるから。

みんなでおムライスを作っていたはずなのに、みたまさんのオムラ

イスだけ卵が緑色に染まっています。チキンライスは紫色です。冗談はよしてくれ（料理人の威厳）。

でもこれはチャンスです。

みたま特製オムライス(!?)はまなかが責任をもって全て食べさせてくれるのですが、ここは百恵ちゃんに食べてもらいます。自分から食べにいくのか……（困惑）。

ですがそうするとあら不思議、この場にいる全員の好感度を上げることができます。見え透いたトラップに挑む勇者に見えますからね。ですからこれが一番、好感度の上がり幅が大きい選択肢なのです。だから食べてもらいます。

選択肢を選ぶと心なしか百恵ちゃんのセリフが震え声になっている気がするのですが、ここは体を張るところです。普段はなにがあっても回避すべきみたまの料理を口にする唯一の機会です。

覚悟決める？（まなか）先生がビクビクでいらっしやるよ、食って差し上げる（名言）。

というわけでいただきまーす。

ンンツ……マ。ツ！ア。ツ！→（断末魔）

あ、百恵ちゃん気絶しちゃいましたね。でもすぐにまなかに起こされます。……よかった。この程度で済みました。

料理教室でのみたまの料理は比較的マシな部類に入ります。絵具とか入れませんかね。

見た目はアレですが、一応全て食べ物で構成されているのでダメージは少なく済みます。例えるならこののは料理の悪い意味で上位互換ですね。これはひどい。

料理教室以外でみたまの料理を食べるとガチで一日眠りっぱなしになる上に一定時間デバフがつくので本当におすすめしません。興味本位でも口にはいけない（戒め）。

あ、ちなみにこの後、まなかが特製のオムライスを提供してくれたので、みたまの料理による精神ダメージは実質プラマイゼロになりました。やったぜ。

「あの、百恵さん。この後予定とかありますか？」



お？ ささらちゃんからお誘いが来ました。

これはもしかして……もしかするかもしれないませんよ……？

「実は水徳商店街で相談所を開いてもらっている魔法少女がいるんですけど、できれば会っていただきたいなど」

あ、いいつすよ（快諾）。

このふたりは宣伝係ですから、好感度が低くない限りこのようにエミリーのお悩み相談所に招待してくれます。

そしてこの勧誘でエミリーの元に向かった場合、確定でエミリーが待っていてくれます。タイムに繋がる素晴らしい案内人です。これって……勲章ですよ。

それではここでみたまさん、まなか先生とはお別れです。

みたま、明日も来るぜ！ 先生、料理教室あったら連絡してくださいよな！

じゃけん相談所行きましょうね。

「おつす、あすきさんとささらんじゃん！ あれ？ そつちの子は？

妹？」

このお方が、コミュニケーションの権化こと木崎衣美里先生です。

なんか今日は先生とばつか会っている気がするなあ。

りかつぺこと綾野梨花ちゃんあやのりかとれんぱすこと五十鈴れんいすずもいますね。梨花れんはいいゾ。

あつ、くねくねした動きがかわいいはるな春名このみさんもおるやんけ！

このみさん。なんでしよう。なんか妙に親近感を覚えます。なぜかさん付けしてしまう不思議な人です、このみさん。

えつと、それから……それから……。

……あれ？ おかしいねあきらがないね。

「あきらっちは今日来れないんだってさー」

「最近忙しくて外せない用があるんだってね」

……なんで？ ふざけんな！（声だけ迫真）

「ここまで順調に来たはずなのに肝心なところで空振るとは……こ

れは屑運ですね間違いない。なぜ最後の最後で挫くのか。

ま、まあええわ。

とにかくこれで百恵ちゃんをあきららくんの存在を知り得ました。

しかもこのみさんと知り合ったことでブロッサムでかこちゃんと会える可能性が出てきましたので、それだけでも充分でしょう。

しやーない、今回はこれくらいで勘弁したる。

さて、それでは適当にしゃべってこの場にいる全員との好感度を上げましょう。それが終わったら魔女狩りです。

なんだかんだでもう夕方ですし、さすがに今からあきららくんを探すのは厳しいので、ここは先日消費してしまったグリーンフィードをストックしつつ経験値を稼ぐとしましょう。明日の昼過ぎには調整屋のところに行きますしね。

偶然ななか組と魔女戦でエンカウントする可能性も若干ですが期待しています。なので魔女狩りをするのが一番です。

じゃあ、流しますね（倍速）。

おはよーございまーす！

いやあくなんですかね〜？

七回も魔女と戦ったんですけど一回もネームド魔法少女と会えませんでした。悲しいなあ……。

その代わりにグリーンフィードは六個も手に入りましたし、経験値も結構稼げたので良いんですけどね。

さて今日も予定は入っていませんので、午前中はななか組の搜索です。

ただ時間的に9時以降でないとほとんど意味がないので、しばらくは家事をしましょう。

家事をしている間に午前中の搜索プランをお話します。

エミリーのお悩み相談所が一番の近道なのは説明しましたが、それでは次に効果的な方法は何かというとフラワーシヨップ、ブロッサムです。

ブロッサムではこのみさんがバイトしていますが、たまにカモレ組の秋野かえでとかこちゃんが一緒に働いていることがありますので、それを狙っていきましょう。

このみさんと知り合っていて宣伝もされたので、百恵ちゃんはブロッサムに足を運ぶことができます。

というわけでブロッサムに突撃じゃーい！

「あら、百恵さん！ 昨日ぶりですね。来てくれたんですかあ」

か「わいっいっいなあこのみさん」。

花咲く笑顔でこのみさんがお出迎え！ そんなくねくね動いちやつて……マジでかわいいじゃねえか。

かこちゃんがいなくて悲しいけど、かわいいこのみさんを見れたから今回はこれで許したる。

ついでに花も買っていきましょう。今日はね、百恵ちゃんの凄いで……大切な友達の……お誕生日会なんで（大嘘）。

「わかりました！ 少々お待ちくださいね！」

というわけで目的は果たせませんでしたがこのみさん特製の花束をいただくことができました。一回家に帰って飾りましょう。

一応これも家事スキルに影響します。部屋を綺麗にすると判定されるためですね。

さて、エミリーのお悩み相談所がダメ、ブロッサムもダメ……となるともう最後の手段しかありません。ファミレス巡りです。

ななか組の会合は、西側のファミレスで行われていることが多いので、軽く歩き回って店内を覗いてみましょう。ただどこにいるかは本当にわかりません。

メンバーが北の参京院教育学園、西の神戸市立大附属学校、中央の中央学園とバラけてしまっているため、予想が難しいんですよ。

商店街の近くのファミレスが気持ち遭遇率が高い気がします……正直当てになりません。

まあ、もう残された自由時間でできることはこれしかないので、

サッー！（迫真）とファミレスチェックと参りましょうか。入店するとタイムロス&お金の浪費に繋がりますので、本当に外から見ただけです。

センスが光る花束も飾り終わりましたし、ファミレス巡りイテキマース！

……結論。全然ダメでした。

二桁目のファミレスに訪れてもなかなか組の姿はどこにもありません。

結局百恵ちゃん、人のお食事の光景をチラチラ見ているだけでした。ただのやべーやつじゃないか（憤怒）。

ああ（時間から）逃れられない！（カルマ） もうお昼じゃないか。しようがないのでこのファミレスでお食事して調整屋に行きましよう。多分休日だし、仕事いっぱいあるだろうなあ。

仕方ないのでなかなか組の搜索は来週に回すようにしましょう。

アザレアイベントがある来年の6月までに知り合えばいいですし、まだ猶予があります。気を取り直して構えていきましょう。

オッス、みたままさん！ 仕事だ！ 仕事を超越せ！

「いらっしや〜い♪ あ、モモちゃん。今日はモモちゃんにお客様たちが来ているわよ〜」

お？ これは通常の仕事ではありませんね。とりあえず調整してから会うことにしましょう。

そして調整している間に解説を。

傭兵業は仕事がある場合は窓口となっている魔法少女（今回はみたままさん）の伝手で発注されることがほとんどで、基本的に現地で合流するのですが、こうして客として待機していることもあります。

この違いは単純明快、依頼主の違いです。

前者はモブの魔法少女、後者はネームド魔法少女です。つまり今回のパターンはアタリです。

傭兵ルートならではのネームドキャラと交流手段であり、ネームド

キャラとの遭遇率が高くなっている理由のひとつです。

持ちかけてくる仕事をこなして成功すれば簡単に好感度が上がりますし、そのネームドキャラと関わりのある他のネームドキャラとの交流も楽になります。

ただし失敗すると悪い噂が流れてしまつて、全ての魔法少女からのこちらの信頼がガクツと下がる大きなデメリットも抱えているので一長一短。

今回はしっかりとキャラメイクしているので大体大丈夫ですが、中途半端なステで傭兵ルート引いちまつたら迷わずリセしような！

さつて依頼主は誰でしょうか。「たち」っていうことは複数人ですね。

楽しみに思う反面恐怖を抱いています。

だって……百恵ちゃん、かりんちゃんと師弟関係にあるんですけど。

つまりそこから広げると……必然的にアリナがエンカウントしてくる可能性もあるわけで。

いや、本来ならばアリナが魔法少女になるのは10月なのですが、このゲームはなんとすでに契約済みになっている場合があります。

さらに言うとマジウスまで組織されている可能性もあるのです。(時系列が) あーもうめっちゃくちゃだよ。

マジウスが本格的に始動しマジウスの翼が組織され始めるのは、ドッペルシステムを完成させる来年の5月以降。

そこに至るまでの間にマジウスに目を付けられるのはシナリオが崩壊する可能性があるのです、現時点ではマジウスと関わらないのが得策です。

里見灯花と柊ねむはドッペルシステムが完成するまではエンカウントしないので、残る懸念はアリナということになります。

アリナが動くということは……必然的に灯花とねむもついてくる可能性があるわけ。

そして、百恵ちゃんは有名な傭兵です。つまり勧誘される可能性が非常に高いです。凄く面倒くさいうえにタイムロス、そしてガバにも

繋がりがねないのでやめていただきました。

……さて調整が終わりました。というわけで、依頼人の登場です  
(IMD)。

頼む、マジウスは嫌だ……マジウスは嫌だ……！

「えつと……んんっ、失礼。『傭兵』、星奈百恵さん、で間違いありませんね？」

……は？ (語録無視)

この声……いやいや……は？ (思考停止)

「……失礼。名乗るのが遅れました。——お初にお目にかかります。私は常盤ななか、と申します。神浜最強の傭兵と名高いあなたに相談、そして仕事の依頼を受け付けていただきました。この場に参らせていただきました」

ええ!? ええ……うおお、え？ (セリフ忘れ)

……。

……。

……フアツ!?

アイエエツ!? ななか様!? ななか様ナンデ!?

何故ななか様がここに!? まさか自力で脱出を!?

ということはお客様達って……。

うわあ……これは志伸あきらですね。これは夏目かこで、ああ、こっちは純<sup>チユンメイユウ</sup>美雨ですね。間違いない。なんだこれは……たまげたなあ。

昨日から今日までの必死の疾走はいつたいなんだったのか、あつさりと目的の人物たちと遭遇することができました。

なるほど、こちらがななか様たちを探していたと同じように、向こうも百恵ちゃんを探していたのでしょう。

多分昨日あきらくんがお悩み相談所にいなかったのは、ななか様たちと会合をしていたからです。で、かこちゃんが今日ブロッサムにいなかったのは調整屋<sup>こ</sup>さん<sup>こ</sup>でスタンバっていたからだ。納得しま

した。

まあ、なんだっていいです！

無事にななか様と出会えてお話もしました！ おまえのことが好きだったんだよ！

相談？ 聞きます聞きます。依頼？ 受けます受けます。今後ともご鼻屑に、仲良くしましょうや。いいだろおまえ成人の日だぞ（意味不明）。

組長と知り合ったところで今回はここまでです！

ご視聴ありがとうございました！

## Side. 胡桃まなか 第一回料理教室

ウォールナッツは今日も忙しい。

魔法少女になって、まなかこと胡桃まなかの家でもある洋食の名店『ウォールナッツ』をみんなに知ってもらうチャンスを見事に掴み、忙しい日々を送っていました。

このウォールナッツが提供する料理は正當に評価され、父親は出張の毎日。

そしてまなかも父親譲りの腕でウォールナッツを切り盛りしつつ、出張料理人としての仕事もこなし、お昼の弁当販売もやっています。

当初は本当に叶えたかったこと——このレストラン『ウォールナッツ』にたくさんのお客様が来てほしいという願いと相反する結果になってしまったことから畳もうとしていた弁当販売と出張料理人の仕事でしたが……まなかのお弁当を求めて、泣いて喜んで食べてくれるちよつと変わったお客様を見て、続ける気になりました。

残念なことには変わりありませんが……それでも、本当に大切なのはウォールナッツという場所ではなく、そこにあった歴史のある素晴らしい料理だということに気づかされたまなかは、新たな試みとして料理教室を開くことにしました。

味や技術は評価されるも、時代が変わり、かつ神浜の北の奥地という立地もあまりよろしくないウォールナッツに直接訪れるお客様は少なくなりましたが、代わりとして同じ魔法少女の溜まり場にもなってきました。

一見すると値段が張りそうな店構えですが、価格はリーズナブルなものに落ち着かせているので、懐事情の厳しい魔法少女の皆さんにとっては嬉しいものだったのでしょう。

そんな魔法少女の皆さんに、そしてあわよくば一般の皆さんにも料理をする楽しさとウォールナッツの味を知ってもらおうための試みとして、料理教室を開くことを決意したんです。

そして訪れた当日。



来てくれた人は四人。第一回目としてはまずまずな結果でしょう。その内のふたりは常連さんである魔法少女の美凧ささらさんと竜城明日香さん。

前々からウォールナッツを鼻屑にしてくれて、普通に料理もするらしい彼女たちが来てくれるのは予想こそしてはいましたが、それでも嬉しいものでした。

ただ……あとのおふたりがVIP中のVIPでした。

「立派なお店ね〜」

「うむ、なかなか良い雰囲気のお店じゃのう」

神浜の魔法少女ならば知らない人がいないほどに有名な『中立』の二大巨頭……『調整屋』八雲みたまさんと、『傭兵』星奈百恵さんだったのですから。

魔法少女としても単純に先輩としても絶対に頭が上がりない大物ふたりがウォールナッツに来てくれました。

これはチャンスです。大、大チャンスです。

この超有名人たちに手解きをして料理の腕を上げるだけじゃなく、最後にこのまなかの、ウォールナッツの料理を振舞い、それを宣伝してもらえば……魔法少女だけでなく、その親御さんに。そしてそこから話を膨らませて伝播することができれば、もつともつとウォールナッツの味を広めることができる。

「時間になりましたので始めましょうか」

そんな夢の広がる未来が見え、気合を入れて第一回料理教室が始まりました。

おっと、その前にですね。

「あの、星奈さん？」

「むっ？」

「えっと、失礼を承知ですが、これを使いますか？」

持ってきた踏み台を星奈さんに見せます。

話には聞いていましたけどその……まなかよりも低い身長 of 彼女では料理するのに支障が出そうなので、一応声をかけてみます。

すると星奈さんはきよんとした後、笑顔で受け取ってくれまし

た。

「ありがたく使わせていただくとするかのう！ 氣遣つてくれてありがとうなのじゃ！」

……よし。とりあえず掴みはばっちりです。

印象は大事です。特に色んな魔法少女と接してきた大ベテラン相手なら余計に。

今日作る料理はオムライス。

このウォールナッツの看板であり一番人気であり伝統もある料理です。調理も奥深いですし、簡単すぎず難しすぎないいい塩梅の料理なので、料理教室で教える題材としてピッタリ。

是非とも皆さんにはこの自慢のオムライスを作っていただいて、おいしく召し上がっていただきましょう。

……ここまでは良かったんですよ。ここまでは。

ささらさんと明日香さんに関しては問題ありません。

ふたりとも普段から料理をやっているようですし、若干不器用な部分こそありますが、味などに支障が出ない程度のもので普通に指導することができます。

星奈さんも問題ありません。というか手馴れていました。

付け合わせの野菜の皮は鼻歌を歌いながら綺麗に剥けていましたし、テキパキ動いてくれるので無駄が少なく他の皆さんよりも綺麗に、そしてコンパクトに場所を使っていました。

加減や調味料の配合などをちよくちよく聞いてきて熱心に、そして楽しく料理をしてくれました。

……正直、育てたらかなり伸びそうですし、本人も料理が好きらしいので、アルバイトでもいいからここで働いてくれないかどうかを訊こうか真剣に考えています。多分傭兵の仕事やらなんやらで無理なんでしょうけど。

ここまでは良いんです。

この三人だけなら楽しい料理教室で終われたんですよ。はい。

……問題は最後の人でした。

「うーん……みんなと同じじゃ面白くないわよねえ」

「同じで良いんですよ!? って、ああ!」

なにやらいろんな調味料を調合している問題児がいました。

おかしいんですよ、みたま<sup>こ</sup>さん<sup>人</sup>!

包丁の使い方とかはできているのに、なんでまなかの言う通りに料理をしてくれないのか。

これは料理教室ですので、皆さんが同じものを作っている都合上、なるべく同じにならないといけないのに勝手にレンジを入れているんです。しかも悪い方に。

最初は失敗から学ぶこともあるかと思つて大目に見ていましたが、少し目を離れた隙に悪化していくその惨状に我慢ができずつい口を挟んでしまいました。

こっ、これは……!?!

「みたまさん、これはなんですか?」

「うっふふ、卵に決まっているじゃないか!」

「卵は緑色になったりしませんよ!?!」

いったい何を入れたらこんな色に!?

そもそもこんな色になるような食材、ここになかったはずですよ!?!  
「オムライスの卵つて甘い方がいいじゃない? だからあ、これを使ったのよお?」

「ど、どこからメロンソーダを……!」

「ここに来る途中の自販機でね。喉が乾いちやつて」

まさかの食材持ち込み! しかも飲みかけ!

「みたまさん。料理教室に食材の持ち込みはしちゃいけません。次からはここにあるものだけを使ってくださいね」

「うーん? わかったわあ」

不思議そうな顔で了承してくれるみたまさんに危機感を覚えつつ、全員の進捗を確認。

とりあえずできていることを確認してから、次の指示を出します。

「先生、ちよつとよろしいかの?」

「はい、今行きます」

今やその容姿と素直に楽しんで料理してくれる姿を合わせてまな

かの癒しになっっている星奈さんから声をかけられたので向かいます。今作ろうとしているのはチキンライスですので、火加減のやり方を見たいとのことです。

確かにこれは言って聞かせるよりもやって見せた方がいいかもしれません。

一旦作業を止めてもらって、まなかのところに皆さんを呼び出し、少し難しいところを説明します。

「わかりやすかったのじゃ！ やってみるから見ていてくれないかの？」

ふたつ返事をして星奈さんのところに向かい、彼女の動きを見ます。

やっぱり早いですし、正確です。まなかの言う通りに料理してくれています。

そして上手くできたかどうかキラキラした瞳で見つめてきます。アホ毛も左右に揺れています。

なんででしょうか、この可愛い小動物は。

失礼に当たるので頭を撫でるようなことはしません、とつてもほっこりしました。さっきまでの惨劇を忘れてしまうほどに。

とりあえずしつかりできていることをまなか星奈の癒しさんに告げ、他の人の元に向かいます。

ささらさんはほとんど完璧です。

ちよつと火加減で慌てていましたが、最初はみんなそうなので慣れていけばできるようになります。

明日香さんも大丈夫そうです。

ただ正確にやろうとしていて気を張りすぎていますね。もつとりラックスして料理をするようにだけ言っておきましょう。疲れてしまいますから。

……そして。

「み、みたまさん……」

みたまさんのフライパンの上を見て……おそらくまなかは人生初めて、料理という分野において恐怖に歪んだ顔をしたと思います。

他の人達は多少の差異はあれど綺麗なオレンジ色のチキンライスがフライパンの上にあります。

ですが……みたまさんのものは紫色です。

チキンライスが、紫色です。黒味の強い、紫色です。

……なんで!?

「こ、これはいったい……。……はっ!」

さっきの持ち込み食材を確認します。

……やっぱり! 減っています! とうか空になっています!

メロンソーダが!

この人またメロンソーダを混入させています! しかもよりもよってチキンライスに! 卵だけなら……。一万歩くらい譲っても「甘いから」で済ませられたかもしれないのに!

これはとんでもないものが出来上がってしまうのでは?

とりあえず……。火加減の仕方や調理器具の使い方は完璧にできていますので問題ないです。はい。できているんですよそこは。

あとは素直に材料を使えば美味しいオムライスができるのに……。なぜそこで致命的なアレンジを入れてしまうのでしょうか。

これはもう、みたまさんは置いておくとします。

本当に危ない——すでにいろんな意味で危険ですが——事故に繋がらないかどうかだけを心配するとしみましょう。

それからもしばらく料理教室は続き……。やってきました。というよりやってきてしまいました、評価の時間です。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

参加者四人の内ひとりには笑顔でいますが、残り三人がある一点を見て顔を真っ青にしています。まなかも正直、三人と同じ心境です。

そしてまなかは……。まなかは……!!

「え、えーと。皆さんお疲れ様でした。それでは皆さんのオムライスを少しずつ小皿に移してですね、このまなかが評価していきたいと思

います。皆さんもしよろしければ、それぞれ作ったオムライスを試食してみてください」

しばらくは他三人の料理で時間を稼ぎます。その間に覚悟を決めるとしましょう。

大丈夫です。きつと、うん、大丈夫です！

まずはささらさんのオムライスから。

見た目は良好です。盛り付けもきれいに整えられています。

味は……うん。うん、なるほど。少し卵に火が通りすぎていますが、ほとんど問題ないです。

ケチャップが気持ち多い気がします、それも個人差が出ると思いますし、本人の好みの影響もあると思いますので良しとしましょう。

総合的に見て、若干癖はありますが、好きな人は好きなオムライスに仕上がっていると思います。まなかも好きな方です。

次に明日香さんのオムライス。

見た目は……少しきつちりとしすぎていますね。真面目な明日香さんらしいですが、もう少し崩した方がよりおいしそうに見えると思います。

味は……問題ないですね。ほとんど再現できています。

ですが、少しおこげが気になりますね。火加減に集中しすぎてフライパンの中身を少し疎かになってしまったのでしょうか。

もっと料理に慣れて気楽になれたらきつと素晴らしい料理上手になれます。

お次は……星奈さんのオムライスです。……おお！

まず見た目は完璧ですね。盛り付け方がうまいです。しっかりと主役のオムライスを前面に出しつつ、デミグラスソースも卵の黄色い部分を八割以上残しながら、オムライスの前半部分にかけられています。食欲を刺激させられる盛り付け方の基本を押さえています。

付け合わせの野菜が星形になっているあたり洒落が効いていますし、余裕も感じられます。

そして肝心の味は……こ、これは……！

「これは凄い逸材です……」

ほとんどまなかの作るオムライスと同じでした。

卵の口溶け感、広がる香り、そして各種調味料の配合。すべてが似ています。

唯一違うところはお米が少し硬めなところですが、これは相当のグルメやセレブの方ではないと見抜けないレベルです。

「これがウォールナッツのオムライス」として出しても普通の人はわからないほどの完成度でした。

「凄い……神浜最強の傭兵は料理の腕も最強なの……!?!」

「あの手際の良さといいこの味といい、感服いたしました……!」

これにはささらさんも明日香さんも笑顔で褒め称えています。

ささらさんはこのウォールナッツで舌が肥えていますし、明日香さんに至っては家が名家な都合上、上質な料理を食べるのが当たり前です。

そんな人たちが認めるということは、相当の腕前ということですよ。

とてもただの料理好きなの腕じゃありません。

「大袈裟じゃよ、そう褒めるでない。照れるではないか」

頬を少し赤らめながら照れている星奈さん。

食べた人を笑顔にさせ、幸福を感じさせる料理。それこそ最高の料理だとまなかは思います。

ですから真面目に、そして楽しみながら料理をしてくれた星奈さんは間違いなく料理人の才能があります。

これは本格的にここの就職を考えてもらいたいですね。

少なくとも本人が料理の道に進もうとするのなら、真っ先にここに連絡してもらえるようにしていただかないと。他の店に行ってしまうとなると困ります。

とにかく星奈さんの料理は素晴らしいの一言に尽きます。

これからも料理教室を開くことがあったら是非通っていただいて腕を上げてほしいです。

……さて。

「最後はわたしのオムライスねえ」

食・ベ・て♪

かわいく言っていますが……悪魔の声にしか聞こえません。  
ついに恐怖の時間がやってきてしまいました。

他の皆さんもこれまではお互いの料理を小皿に取り分けて意見を  
出し合いながら美味しい美味しいと食べていましたが……これに  
至ってはまなか以外、取り分けようとしていません。

皆さん若干腕を伸ばしている辺りチャレンジしようとしてくれて  
いるのはわかりますが……その一步が踏み出せないのでしょうか。わ  
かりますよ。まなかだって逃げ出せるのなら逃げ出したいのですか  
ら。

ですが、まなかには開催者としての責任があります。

すっかり仕事を果たさないといけないという矜持がありますし、相  
手は神浜魔法少女の重鎮のひとりである八雲みたまさんです。

なんとしてでも乗り切らないといけません。

まず見た目。……とりあえず盛り付けだけ見てみましょう。

完璧です。盛り付け方は星奈さんと同じくらい上手です。

みたまさんも料理することは好きなようですし、そののセンスに関  
しては問題ないのでしよう。……しかし。

その素晴らしい盛り付けを台無しにするオムライスと付け合わせ  
の見た目が最悪です。

オムライスはなぜか卵が緑色、チキンライスは紫色になってしまっ  
ています。これだけ見せられてオムライスと言われても「!?」という  
リアクションになること間違いなしです。そもそも、これが食べ物で  
あることを理解できるかすら怪しいなにかがお皿の上に鎮座してい  
ました。

付け合わせの野菜たちも、本来は綺麗な葉っぱ色やオレンジ色だっ  
たはずなのになにかに漬けておいたのか、黄色くなっていたり赤く  
なっていたり、もうわけのわからないことになってしまっていました。

「で、では……いただきます」

覚悟はもうできています。

意を決して一口サイズ分のオムライス(?)を取り分け、口の中に



入れます。

ささらさんが口に手を上げながら小さく悲鳴を出したり、明日香さんがおろおろしていたり、星奈さんの顔が引きつっていたりしていますがもうどうにでもなれです。

卵の部分とチキンライスの部分、両方しっかりと放り込みました。

「?!?!? うぐつ……?!?!」

な、なんですかこの……味と味のぶつかり合いは……!!

全部の味の自己主張が強すぎです。主に調味料とメロンソーダの。卵とご飯の味はどこに行ったのでしょうか。

つて、冷静に味わっている場合ではありません。

まなかの口がこれを胃の中に入れることを拒否し始めています。

それはつまり……。

そ、それだけは！ それだけはできません！

料理人のまなかが食材(?)を粗末にすることなど許されないんです！

もはや意地と、プライドで、口の中のモノを一気に胃の中に押し込みました。

もう体調が最悪です。冷や汗が止まりませんし、寒気までしてきました。鳥肌も立っています。

「こ、これはとても……斬新な味ですね。さ、参考に、させてもらいます、ので、まなかが全部食べちゃいますね」

これはとても他の人には食べさせられません。

ですのでここは星奈さんにこのまなかの雄姿を見てもらって、ウォールナッツの宣伝をしてもらえるように取り計らってもらいましょう。その広告料と考えれば……安いもの、です！ きつと！

ええいままよ！ まなか、逝きます！

目をかつ開いてこの劇物を一気に平らげてしまおうと動いた時――その皿が隣から伸びた手に奪われてしまいます。まなかの握るスプーンが空振りしました。

「えっ？」

「よく、頑張ったのう。もうよい」

その皿を握っている人……星奈さんは優しく笑いながら、まなかを見ていました。

ですが顔色が悪く、手も震えてしまっています。

……まさか。

「誘われたとはいえ、みたまを連れてきたのは私じゃ。……責任は私  
が取ろう。——いざ！」

吐き捨てるように、そして気合を入れるように呟いた瞬間——星奈  
さんはみたまさん特製オムライス(?)を一気に掻き込んでいきます  
!

もうそれはそれはすごいスピードです。

がつがつと勢いのままにオムライス(?)を口の中に消していきま  
す!

「か、神浜最強の傭兵は料理の腕どころか胃まで最強だっていうの!」  
「な、なんと! なんとという豪気、そしてなんとという覇気! これが神  
浜最強の傭兵の底力……!」

これにはさすがのふたりもびつくりです。

唯一みたまさんだけがにこにこ嬉しそうに、オムライス(?)を  
平らげていく星奈さんを見つめています。

やっぱり悪魔です。

星奈さんは三十秒ほどでオムライス(?)を食べつくしました。

野菜(?)も米粒(?)一粒残さずぺろりと全て。

食べ終え、皿とスプーンを静かに机に置いた星奈さんは……。

「きゅう……」

目をぐるぐる回しながら倒れてしまいました! あ、危ない!……  
セーフです。

なんとか頭が床にぶつかるまえにささらさんが星奈さんを支えて  
くれました。こ、これは相当無理していましたね。

顔色が最悪ですし、目がバツテン印になってしまっています。ぴん  
と立っていたアホ毛も萎れてしまっています。

たった二回の攻撃で魔女を倒すと評判の破壊力を誇る神浜最強の  
傭兵すらも撃沈させるほどの破壊力とは……八雲みたま、恐るべしで

す。

当の本人は「お腹いっぱい寝ちゃったの？」と見当はずれな心配をしています。

「なんていう無茶を……」

せつかく足を運んでくれたのに……ほとんどまなかのせいではないとはいえ、これはあんまりです。

ウォールナッツの思い出をこんな形で締めさせたくないと思ったまなかは、気絶した星奈さんをソファに寝かせて厨房に行きます。

感謝と謝罪の気持ちを込めて、まなかは腕を振るいます。

そして完成したのは、いつもここで提供している特製オムライスです。

……うん、いい出来です。

出来るだけ美味しい状態で食べてほしかったまなかは静かに星奈さんの体をゆすります。

するとまるで悪夢から覚めたように「はっ！」と星奈さんは上体を起こしました。

「い、今私の死んだ祖父母と姉妹が川の向こうで手を振っていたような気がするのじゃが……」

「生きてます！ 星奈さんはまだ生きてますよ！」

「お、おお……！ お？ ああ、そうか。思い出したのじゃ」

記憶が飛んでしまったらしいです。

……それくらいのインパクトは確かにありましたよね、アレには。

一口とはいえ口にしたまなかにはわかります。

「星奈さん、先程はありがとうございました」

「む？ ああ、よいのじゃよ。みたまの料理の腕がアレなのは知っておったからもう。まさか、ここまでとは思ってもよらなかったかの」

「その……これはまなかからの感謝の気持ちです。どうぞ、ご賞味ください」

星奈さんの前にオムライスを置く。きつとお腹いっぱいだと思います。

試食の時も食べていましたし、アレも結構なボリュームでしたか

ら。

でも、そうだとしても食べてほしいと思いました。

「では、いただくのかの」

星奈さんは嫌な顔どころか、一切の躊躇いもなくまなかのオムライスを口に入れてくれます。その仕草は先程の勢いに任せたものとは程遠く、まるで良家のお嬢様のように品のあるものでした。

星奈さんがオムライスを口にしたとき、萎れていたアホ毛がピンと伸びてみよんみよんと動き始めました。

「！これはお主が作ったのかの!?!」

「え、ええ、まあ。お味はいかがでしょうか?」

「文句なぞあるわけなからう!」

満面の笑顔でまなかを称賛した星奈さんは、そこで言葉を中断させてオムライスを味わって食べ始めました。そして十分も経たないうちに、ぺろりと食べ終えました。

ただただオムライスを食べていただけですが、あまりにも美味しくうに食べてくれるものですから見ていて飽きなかったですね。料理人冥利に尽きます。

隣の席に座っている他の参加者三人も笑顔で咀嚼する星奈さんを微笑ましく見ていました。

「御馳走様なのじゃ! とても美味しかったぞ!」

「……ありがとうございます」

そしてその言葉は、料理人として感無量に尽きる言葉でした。

残さず綺麗になったお皿、「御馳走様」の挨拶、そしてシンプルながらも最高の感想。

これがあるだけでも、料理を作り続けようと思うことができます。

「お主は凄いのう! まだ幼いのにこんなにも美味しい料理が作れるとはの! 今後、料理教室を開くのならば是非とも呼んでほしいのう。私はお主に、先生に料理を教わりたいのじゃ」

「! は、はい! もちろんです!」

……やった! やったやったやった!

神浜魔法少女の重鎮に認められた上に、今後通うと言ってくれま

した。

連絡先まで交換できましたし、仕事の際にこのウォールナッツのことも話題に出すとも言ってくれました！ 大成功です！

「あら〜。じゃあ私もまた来ようかしらあ〜」

そんな最高の気分のまなかに水を差す悪魔みたまさんの声。

星奈さんはこっそりと口元に人差し指を立てていました。内緒にするから呼んでほしい、と言っているみたいです。

是非、お願いします。

お互い、もうあんなものを食べたくありませんもんね。

波乱万丈はありましたが……第一回料理教室は大成功を収めました。

料理教室は今後も続けていきます。

ウォールナッツの料理教室の名物が、とある界限では有名人でもある、おばあちゃんのような小さな少女になる日が訪れるのはそう遠くない未来の話です。

## RTAパート5 組長と兎と傭兵

一気に不安が解消されたRTAはーじまーるよー！

ウォールナッツに行ったりエミリーのお悩み相談所に行ったりブルッサムに行ったりファミレス巡りをしたりと、前は神浜の魅力的なスポットを存分に堪能することができましたね。まあ全部組長さんと常盤ななかを探していただけなんですけど。

で、その肝心な組長は百恵ちゃんに仕事の依頼をするために普通に調整屋で待機していたというオチ。自分から会いに来てくれたのか……（困惑）。

しかしだからと言って昨日の努力は無駄ではありません。かなり人数のネームド魔法少女と知り合えましたし好感度も上がりました。

特にまなか先生と知り合えたのはかなりでかいです。料理スキルも上がりましたし、仕込みも済ませておきました。

仕込みというのは、ウォールナッツの宣伝です。

百恵ちゃんは仕事をするたびにウォールナッツのことを客である魔法少女に雑談交じりに話します。すると百恵ちゃん経由でウォールナッツを訪れる客が増えるため、仕事をするだけでまなか先生の好感度を上げることができます。やったぜ。

おっと選択肢が出てきましたね。ななか様たちの対応をしていきますよ。

しつかり好感度を上げる必要がありますので、丁寧にやっていますよ。

ななか組はあきらくんとかこちゃんはともかく、ななか様と美雨メイユイはなかなか好感度を上げてはくれません。ですので正解の選択肢を選び続けてタイムを早めると同時に速やかに好感度を稼いでいきますよ。

ということで早速場所を変えましょう。

調整屋でもいいのですが、もっと好感度を上げやすい場所があるのでそこでゆつくりとお話しをします。

ななか組の皆さん、なんか腹減らないっすか？ 腹減ったなあ（自演）。北養区にい、うまい洋食のレストラン、あるらしいんすよ。じゃけんウォールナッツ行きましようね。

「いらっしやいませ、って星奈さん？」

まなか先生オツスオツス！ 昨日ぶりっすね！

早速お客様を連れてきたぜ。一番いいのを頼む。

「わつかりました！ すぐにご用意しますので少々お待ちくださいね！」

ヨシ！（現場猫）

というわけでななか組の皆さんをウォールナッツへご招待。

こ→こ←のメニューにハズレはありませんので、連れてきてなにか食べさせれば一定の好感度を稼げます。といってもななか様と美雨には効かないんですがね。……ただし。

「これは……素晴らしいオムライスです」

「うん。これは美味しいヨ」

唯一、一番人気であるまなかの特製オムライスだけは、どんな相手でも食べさせると一回限りとはいえ好感度が上がるチートアイテムなのです。凄いぞまなか先生。一生ついて行きます。

ということとで美味しい料理を御馳走したところで本題に入りましょう。

四人は、どういう集まりなんだっけ？

「私たちはとある魔女を追っています。その魔女は——」

多分それ更紗帆奈ってやつのはずだと思うんですけど（名推理）。

あ、もう事情は知っているので飛ばしちゃいます。次の選択肢まで倍速しましょうね。

とまあこんな感じで質問を繰り返していきます。

ななか様が自主的にプレイヤーに協力関係を持ち掛けてきた場合、『詳しく聞く』『本題に入る』のふたつの選択肢が三回まで挙げられます。

RTA的にはさつきと本題に入った方が早いのですが、実は『詳しく聞く』を三回連続で選ぶのが正解です。ななか組全員、特にななか様と美雨の好感度が上がります。

「ずばりお伺いします。私たちのチームに加わってはいただけませんか？」

あ、それは（加わら）ないです。即答しましょう。

ここでチームに加わるとななか組の皆さんと行動を共にすることが多くなってしまう。それにプラスして傭兵としての他のお仕事や家事、勉強、鶴乃ちゃんやかりんちゃんとの特訓をこなすのは不可能です。

スケジュール的にもそうですが、ななか組の皆さんとの好感度が上がりすぎるのもいただけません。毎回会合に呼び出されたり変なイベント引っ提げてきたりとタイムロスが頻発します。

なのでここははつきりと拒絶しましょう。

「……なるほど。本当に噂通りの方なのですね」

そうだよ（肯定）。

あつ、おい待てい（江戸っ子）。まだ肝心なところ話し忘れてるゾ。チームには加わらないと拒絶しましたが協力しないとは言っていません。しっかりと協力する旨は伝えておきましょう。そうするとななか様は重要な案件が発生した場合に限って、百恵ちゃんに連絡してくれます。

これで団地とアザレイイベントを乗り切ろうという算段です。

「わかりました。こちらの依頼を引き受けていただけただけなこと、感謝します」

おう、アザレアの時は頼みましたぜ組長！ あと普通に困っていそうな魔法少女がいたら紹介してくれよな！

にしてもななか様、結構ご機嫌ですね。勧誘を断られたのに嬉しそうに笑ってましたし……まいつか！

すっかり好感度が上がったようですねによりです。

「あ、あの星奈さん……」

おや、このタイミングでかこちゃんが話しかけてきました。珍しい



ですね。

うんうん、どうしたんだい？ 百恵ちゃんに言ってるらん？

「実は星奈さんと同じ傭兵の魔法少女の子がいるんですけど……」

あっ……（察し）。

これは深月<sup>みつき</sup>フェリシアのことですね。間違いない。

フェリシアはすぐに解雇されるとはいえほぼ確定でななか組に雇われますが、この世界軸では最古参の傭兵である百恵ちゃんがいます。そのため雇われていない可能性もありましたが、しっかり雇われていたようです。まあでも、やっぱりすぐに解雇されちゃったみたいですがね。

にしてもよかった。ちゃんと雇ってくれていたことが確認できました。

フェリシアがななか組に雇われていないと、かこちゃんがフェリシアのやべー過去（激ウマギャグ）をキュウベえから聞きだすことができます。そうなるのとアザレアの時に支障が出ます。13歳トリオが結成されなくなっちゃいますからね。

うっかりそれを忘れるとアザレア組は神浜から出て行ってしまう（1敗）ので、雇っていない場合はどうにかしてフェリシアと会わせる必要があったのですが、この様子だとフェリシアの過去をキュウベえから聞いたようです。

「その、もし彼女と出会うことがあったら……どうか話をしてあげてくれませんか？」

やゝさゝしいゝなゝあゝかゝこちゝゃん。

元からフェリシアとは仲良くなるつもりでしたし、かこちゃんの好感度もおいしくいただけのでもちろん引き受けましょう！

え？ なんだってななかさん。同じ傭兵だから商売敵じゃないかって？ えっ、そんな関係ないでしょ（正論）。

好感度と経験値のためなら助けるのは当然ですぜ！

「そうですか。……彼女のこと、私からもお願いします」

おう、任されたぜ。

さて、もう話すことはないので帰るとしましょう。

それじゃあな組長！ 団地とアザレアの時には絶対に連絡くれよ！ 待っているからな！

それからこの支払いは結構だぜ、百恵ちゃんの奢りや。ケーキとジュースも味わってくれよ！ だからウォールナッツのことも臍屢にしてやってくれよな！

というわけで連絡先を交換してななか組の皆さんに別れを告げて立ち去るとしましょう。

あばよ！

いやあ、今日は実にいい日でしたね。

おそらく今までプレイした中で最速でななか様と出会うことができました。向こうから会いに来てくれるのは中々レアですしね。

なんだかんだで夕方ですし、もう家に帰るとしましょう。あく今日も一日楽しかったなく、早く帰って家事と勉強しなきゃ。

なんで等速に戻す必要があるんですか？

え、なんかのイベントでしょうか。

ちよつと水名区に続く裏路地に入ってしまったますが、奥の方に魔女の反応があるんですけど……まあ、ええか。経験値になっていただきましょう。パパパツて……倒して終わり！

というわけで突撃じゃーい！

お？ 先客がいるようです。どうやらネームド魔法少女との遭遇イベントのようですね。

ふむふむ。赤のチェック柄のタイツに、どこかのカジノのディーラーみたいな格好に、バニーガールのようなぴよこんと伸びた二本の真つ赤なりボン。ハート形の赤い石の付いたネックレスをプランプランさせちゃって、誘っているのでしょうか？

「あっ!? えっと……え、子供……!?!」

……ウオワアアアアアアアアアア!!?!

こいつ七瀬ゆきかやないかい！

神浜のやべーやつトップスリーにも入るガバの温床、チャートブレイカーの七瀬ゆきかと遭遇しちゃったぞおい！ どうしてくれんのかこれ！ つてもう（魔女戦）始まつてる!? 使い魔戦はどこいったよ!? あーもうめちやくちやだよ。

とりあえず魔女を瞬札します、話はそれからです。

ゆきかが戦っているということは結構強い部類に入る魔女ですが、すでに攻撃150オーバーになっている百恵ちゃんの破壊力に抗う術はありません。いつも通り二回攻撃で撃沈させました。

グリーンシールドは……出ないんかい！

出たとしてもゆきかに渡すつもりでしたが、こんな強い魔女倒したに出ないとかしょっぱいにも程があります。

「あ、あのっ！ さつきはごめんさい。それから助けてくれてありがとうございます」

ああ、うん。いいんだよ、うん。

地雷だとかやべーやつとか散々なことを言っていますけど、ゆきか自身はほかのやべーやつらことアリナ・グレイや更紗帆奈とは違って根っからの善人で、どっかの作品のヒロインや主人公をやれそうな性格をしています。

しかしながら彼女の体質に問題が山盛りです。

ゆきかは魔法少女になる際の願いのせいで、歩くだけでトラブルに見舞われる質の悪いトラブル体質になってしまっています。

そして、その影響は周りにも及ぼし、彼女の近くにいるだけでトラブルに巻き込まれやすくなってしまいます。予測不能回避不可能の為、タイムを重視するRTA走者にとっては最悪の天敵です。こっちの事情も考えてよ。

「あつ、ま、また……！」

つてほら、次の魔女がやってきました。

間も置かずに連戦とかこれもうわかんねえな。やめてくれよ……

（絶望）。

面倒ですので瞬札です。戦闘シーンOFF&倍速で乗り切ります。

……はいしゅーりよー！ またグリーンシールド落ちないんかい！

「す、すごい強い……って、ああ！」

倒したそばからまた別の魔女がやってきました！

あゝあゝあゝもゝおゝおゝおゝやゝたゝあゝあゝあゝあゝ!!

もはや神浜の魔女の大半はカモでしかないですがこれはいくらなんでも時間の無駄です！

にやー！ ゆきかちゃん許して！ タイム壊れちゃうー！ グ

リーフシードのストックも壊れるー！ ゆきか、(その体質)どうにかしろ(無責任)。って無責任でもなんでもねえ！

こんなんじやRTAになんないよ。

はい、魔女討伐完了！ やっぱリーフシードは落ちません！  
なんでや！

さて……もう魔女はエンカウントしてこないですね。ようやつと戦闘終了です。すつげえキツかったゾ。

ソウルジエムは……全然濁っていないですね。全力で戦っていますし、特別魔法を使っていないので燃費が良いんですね。固有魔法がないだけなんだよなあ。

まあでも一応ストックしておいたグリーンシードで綺麗にしておきましょう。そしてゆきかちゃんのソウルジエムも一緒に綺麗にしてあげます。

百恵ちゃんが来てからはほぼ全部一方的に百恵ちゃんが倒しちやいましたけど、来る前はひとりで頑張っていたらしく大分濁っちゃっていますからね。

「あ……ふー、ごめんなさい、ありがとうございます！」

ええんやで。

というわけでスタコラサツサだぜ！

「あ、あの……！」

なんか言いたそうですが無視です無視。

下手に好感度を上げるとエンカウントする可能性が跳ね上がるので無視するのが安定です。

！  
というわけじゃあな！ 出来れば二度と会わないことを祈るぜ

あばよ！

ふう、逃げ切つてやったぜ。

これからは水名に向かうのは危険ですね。

ゆきかと知り合つてしまった以上、エンカウントする確率が上がつてしまいました。他にも知り合いになつておきたいキャラが水名にいますが、エミリーのところにいることもあるのでそこに期待するとうましよう。チャートの的に最悪知り合わなくても最終的にどうにかなるので、のんびり構えて大丈夫です。

それでは今度こそ、本当に家に帰るとします。おやすみなさーい！

おはよーございまーす！

今日は月曜日、つまり学校です。いつもの家事をこなして学校に行きましょう。

さて、ここからは特に積極的に動くことはありません。

知り合うべきキャラ全員と出会うことができましたので、学校に行く、仕事をする、魔女を狩る、家事をする、勉強をするの繰り返し作業が続いていきます。

なにかイベントが来るまで倍速しましょう。

そしてそんな倍速作業に退屈するであろうみくなくさくまくのくたくめくにいーく。

今ここで、このチャートの説明をしていこうと思います。え？ 最初にやったじゃないかつて？ まあ都合が変わったんですよ。

実際にゲームをスタートさせて百恵ちゃんの立ち位置を確認したところ、もつと確実にタイムが縮まるチャートを思いついたのでそれを決行していきます。

第二次みかづき荘と一緒に原作通りの展開になりつつ素早くウワサを倒し続けてマギウスの危機感を煽り、ワルプルギスの夜を呼び出すと言ったな？ あれは嘘だ。

大幅に変更しまして百恵ちゃんには『マギウスの翼』に入っていたできます。正確に言うなら雇ってもらいます。

そして『楽園行き覚醒前夜』後に、ワルプルギスの夜が来ることが確定した瞬間に『マギウス』を裏切つて、そのままやってきたワルプルギスの夜を倒します。

所謂『裏切り者』ルートに変更します。

理由は先ほどお話しした通り百恵ちゃんの立ち位置にあります。

百恵ちゃんは基本的に誰からの依頼も受け付ける有名な傭兵です。しかも本編開始時魔法少女歴6年の大ベテランで人脈が広いです。

ですので『マギウスの翼』に入ってしまった梓みふゆや大半のモブ魔法少女（ついでに七瀬ゆきか）と接点を持っている以上、勧誘される可能性が非常に高いんですね。

勿論断ることもできるんですが、雇われたと言つても百恵ちゃんはリーダー格になりやすく指揮権も手に入れやすいので、逆に乗ってしまった方がコントロールしやすいんですよ。

わざとウワサの周りを手薄にして倒させたり、見逃してあげたり、情報を勝手に喋って流したりとか、色んなことができます。早い話『マギウスの翼』という組織を乗っ取ります。

さらに現在、鶴乃ちゃんと師弟関係を築きあげています。

このまま特訓に付き合つて鶴乃ちゃんのステータスを強化してウワサを倒しやすくさせたり、鶴乃ちゃんを安心状態になるまで甘やかしてそれとなく第二次みかづき荘メンバーに伝えたりと大幅なタイム短縮を図ることができます。

そしてここで注意したいことは、あくまで『マギウスの翼』に雇ってもらっているのであつて『マギウス』に雇われるのはNGです。

百恵ちゃんは仕事に対してぶれないので、ほぼ確実に依頼主の意向に沿った行動をします。なので『マギウス』に雇われてしまうと、シナリオのコントロールができなくなってしまうんです。

ですが『マギウスの翼』に雇われたのなら話は別です。

雇われたのはあくまで『マギウスの翼』であつて『マギウス』ではなく、さらに雇われているだけであつて『マギウスの翼』に所属しているわけではないので『マギウス』の命令を聞く必要がなくなり自由に行動することができますね。

よって今後もアリナと接触することは避けなければなりません。接触したら諦めましょう（23敗）。

勧誘はおそらく、みふゆさんから連絡が来ると思われますので気長に待ちます。

解散前にみふゆさんの魔法少女の弱体化についての質問に対して『聞いたことがない』と答えたのは確実に『マギウスの翼』に入ってもらうためです。あそこでももこやちよにしたときと同じような対応をしてしまうと『マギウスの翼』に入らない可能性がありますので、少し素っ気ない対応をしました。

すまんあの時のみふゆさん。連絡くれたら雇われてあげるから堪忍してや。

つと、おや？ 倍速が止まりましたね。なにかのイベントみたいです。

一気に飛んで金曜日の夕方。

いつものように調整屋でみたまさんの靴を舐めようとしていたんですがなんだか険しい表情のみたまさんがお迎え。

ちよつと機嫌が悪そうですが……どうしたんや？ なにがあつたん？

「モモちゃん、モモちゃんにお客様が来ているけど……」

このみたまさんの言い方からしてネームド魔法少女のようです。やったぜ、大当たり。

え？ 追い出してもいいかって？ めっちやブチギレてるじゃないっすかみたまさん！

誰が来たんだよ！

「おい、オマエか！ 傭兵の星奈百恵ってやつ！」

……この声は、もしかして……もしかするかもしれないよ？

「オレは深月フェリシア！ オマエと同じ傭兵やってんだ」

フェリシア！ フェリシアじゃないっすか！ オッスオッス！

フェリシアは普通に強い魔女を単騎で倒せるほどの一級品の実力を持つていますが、傭兵としては最悪です。 魔女への憎しみのあまり依頼主のことを一切考えずに突撃するんですもん。

おまえ一番態度悪いって（ななか様に）言われてるぞ。

「オマエがいるとオレに誰も仕事持つてこないんだ！ だから勝負しろ！」

あ、いいつすよ（快諾）。

ここは勝負を受けて立ちましよう。下手に断ると好感度が上がりにくくなりますし、これからもいい関係でいたいですからね。本人のやりたいようにさせておきましょう。

「モモちゃん……いいの？」

大丈夫だつて安心しろよく。ヘーキヘーキ、ヘーキだから。じゃけん外に出ましようね。

ここら辺は廃墟が多いので勝負するにはもつてこいのエリアです。近くに調整屋もありますし、鶴乃ちゃんと訓練するときもここら辺を利用するといいです。ただし建物の中は控えましよう。勢いあまつて衝撃で崩れたら大惨事です（2敗）。

「そんじゃあ、行くぞー！」

ワオ！ いきなりそんなでつかいハンマー振り回しちゃって！

まあ百恵ちゃんは武器なんて使いませんけどね！ 魔法少女歴5年の力、舐めてもらつては困ります。

フェリシアの武器の威力は半端ないですが、大振りですし洗練されていなのですぐに見切ることができません。しかも成り立てということのでフェリシアはまともに魔法を使った戦い方ができていません。付け入る隙が多すぎるんじゃあ。

パパパツて……終わり！

「勝負あり。モモちゃんの勝ちね」

完全中立の審判役を務めてくれたみたまさんマジ感謝！（視線が）アツウイ！

「くつそ……オレは、オレが魔女を全部倒さないといけないのに……！」

おっと、フェリシアちゃんのメンタルケアをしないとイケないですね。

よしよし、百恵ちゃんが話を聞いてあげるから話してみなさい。



ふむふむ、両親を魔女に傾されたと、そしてその魔女を倒すと、でもその魔女がわからないから片っ端から魔女を倒すと。

……多分ご両親は魔女に傾されてないと思うんですけど（名推理）。まあそれはともかくです。ここでフェリシアも百恵ちゃんの弟子にしちやいましょう。

フェリシアもいつかウワサに立ち向かっていただきまますので、チャートのために強化させておくに越したことはありません。

ただし鶴乃ちゃんと違って必要以上に甘やかしたりしません。あくまで強力な傭兵として育てるように接します。かりんちゃんのちよいきつい版といったところででしょうか。

ただし、根は素直ですが少しひねくれちゃっているフェリシアに対して普段通りに手を差し伸べるのは絶対にやってはいけません。好感度が上がらないどころか逆に下がってしまう罠です。

かこちゃんやあやめがフェリシアに通じたのは同い年というアドバンテージがあったからで、普通に年上の百恵ちゃんには心を開いてくれません。よって、違う切り口で心を開かせます。

そしてその切り口とは。

「アンタが、オレを……雇うだって？」

そうだよ（肯定）。

このように傭兵扱いしてあげて雇ってあげる形で近づくのが正解です。警戒しているみたいですが大丈夫です。百恵ちゃんの巧みな話術で言いくるんでしましましょう。

おまえを傭兵に仕立てや……仕立てあげてやんだよ。おまえを傭ひえ……兵にしたんだよ！ おまえを傭兵にしてやるよ（小声）。

「……わかった。そーゆーことなら、雇われてやるよ」

意外と早く堕ちたな（嬉しい誤算）。堕ちたフリしてるだけじゃねえのかあ？（懐疑）

まあ、まだ完全には落ちきって来ていません。他人の家に預けられた猫のように警戒しています。

というわけで百恵ちゃんの家にご招待して、まなか先生に認められた料理スキルで懐柔してしましましょう。つべこべ言わずに来いホ

イ。

フェリシア、百恵ちゃんのお家ごとく。入って、どうぞ。  
さして、腕を振るうとしましょう。

まなか先生の料理教室に通ってからも料理スキルを磨いていた  
ので、ボタン連打でも成功は確定です。

ただし今回はフェリシアを完全に落とすため、真面目に料理をして  
大成功を叩き出します。

(ミニゲーム) ほらいくどー。……F o o → 気持ちいく (大成功)。  
うん、おいしい! (味見) しっかり飲み物も注いであげてつと。

さあ、じゃあ飲んでもらおうかね、ちゃんと食べてもらおうね!

おら、落ちろ!

「……うめえ! これすっげえうまいぞ!」

……落ちたな (確認)。

正解の選択肢を全て選びつつ胃袋をがちりつかんだので、これで  
フェリシア攻略完了です。

これで百恵ちゃん、鶴乃ちゃんにかりんちゃん、フェリシアと将来  
有望株の魔法少女三人を弟子にしました。

さすがにもう弟子は増やしません。この三人を徹底的に鍛え上げ  
てメインストーリー『はじまりのいろは』に突入させます。

注意したいのは鶴乃ちゃんとフェリシアを絶対に会わせないこと  
です。

ここで面識を持たせるとメインストーリーでガバが発生し  
ます。同じ師匠の下で育てられた、という共通の話題を持たせて第二  
次みかづき荘に参入させるつもりです。これでタイムを圧縮できま  
す。

途中でばったり会っちゃったら? お代わりだ! (12敗)

フェリシアを籠絡することに成功したところで今回は終わりにし  
ましょう!

ご視聴ありがとうございました!

## S i d e . 常盤ななか 交渉人

「まあ、随分ご機嫌を損ねてしまったみたいですね」「うるせー！ バーカバーカ！」

走り去っていく金色の影が見えなくなるまで、私は静かに見届けました。

深月フェリシア……非常に強い力を持つ魔法少女だけに、突き放すには惜しい人材でした。

報酬さえ支払えばこちらの意向通りに動いてくれる『傭兵』という便利な肩書きも良かったのですが……。

「……ななかさん、私、なんだか彼女、心配です……」

チームの最年少の夏目かこさんが元気なく話しかけてきます。

おそらくこの四人の中で一番優しく穏やかな性格をしているかこさんにとって、先程の私のフェリシアさんへの対応は少し厳しく映ったのかもしれない。

「そうですね。危なっかしくて心配なのは確かです。でも、一緒に戦えば危険を呼び込むのも確か。今のフェリシアさんとは組めない。……それが結論です」

ドライだと思われても、冷たいと思われても、それがチームのために必要ならば喜んで私は憎まれ役に徹しましょう。

それがチームを率いていくリーダーの役目であり、志が同じとはいえ根底は私情で動いている私のわがままに付き合わせている皆さんへの、私なりの感謝と謝罪の気持ちなのですから。

あくまで客観的な論理の元で私の出した結論に納得してくれたかこさんでしたが、その表情は晴れないままです。

それでも申し訳ございませんが、あの傭兵に手は差し伸べられませんか、向こうもこちらの手を取ろうとはしてくれないでしょう。

「それにしてもこれでまた四人に戻っちゃったね。あのフェリシアつて子、強いことは間違いなかったのにな……」

彼女が立ち去った後、少し寂しそうに志伸あきらさんが肩を落とします。

なんだかんだで、あきらさんはフェリシアさんと気が合いそうでした。フェリシアさんはフランクで気の良い性格をしていましたからね。

魔女との戦い方がアレでなければ、個人的な付き合いにもなれたかもしれないんじゃないでしょうか。

「そうですね。どうしましょう。また振出しに戻っちゃいました……」

現在私たちのチームは即戦力となる魔法少女を探していました。

その条件は私たち四人と同じように例の魔女と因縁のありそうな魔法少女、または、誰ともチームを組んでいない強力な魔法少女です。

フェリシアさんは後者にあたり、条件としてはかなりの優良物件でした。

今のままのチームでも充分機能はしていますが、四人のうちの私も含めて三人がまだ魔法少女になって一年も経っていない新人です。

対する私たちが追いかけている敵は何年にもわたって神浜に厄災を振りまいている魔女。間違いなく厄介な敵です。

ですからあとひとり、非常勤でもいいのでいざというときに力になってくれるような魔法少女を私は欲しました。

「……それなら、『大鉾』おおほこに頼ってみるか？」

もう少しで魔法少女歴二年であり、高校二年生とこのチームの最年長でもあるベテラン魔法少女、チユンメイユイ純美雨さんが口を開きました。

『大鉾』……ですか？』

聞いたことのない名前です。あきらさんもかこさんも首を傾げています。

私たちの反応を見た美雨さんはこの神浜に何人もいる魔法少女の中でも、とりわけ有名な六人の重鎮たちの話をしてくれました。

魔法少女歴六年という神浜の魔法少女の中で最も長い戦いの時を生きた、西の魔法少女のリーダー、七海やちよ。

最近になって行方を晦ましたものの、七海やちよに次ぐ経歴を誇る西のナンバーツー、梓みふゆ。

魔法少女歴は二年と短いものの、その強さと人柄から東の魔法少女

の長として君臨するカリスマ、和泉十七夜。

魔法少女歴四年のベテランで、西と東の情勢を常に監視している中央の魔法少女たちの相談役、都ひなの。

西も東も中央も、市外の魔法少女ですらお構いなしの完全中立の調整屋、八雲みたま。

……そして、最後のひとり。

『傭兵』『神浜最強』『小さき大星』『七海やちよの切り札』……等の数々のふたつ名を持つ魔法少女歴五年の大ベテラン。

一振りを使い魔を一掃し、二振りですんなり魔女も殲滅する大剣を操る完全中立の大傭兵、星奈百恵。

美雨さん曰く、彼女の武器であるその規格外な大きさの刃の厚みと長さ、重量を誇る大剣は、どちらかというところと鈍に近い武器らしく、その武器から敬意を払って『大鈍』と呼んでいるらしいです。

「今言った六人の魔法少女は皆強いネ……。だけどその中でも『大鈍』は他の五人を凌駕する別次元の戦闘能力を持っているヨ」

魔法少女特有の固有魔法を持っていない代わりに、その全てを肉体に還元された超戦闘特化型の魔法少女、それが星奈百恵という傭兵らしいです。

傭兵……ですか。

先程のフェリシアさんを思い出しますが、美雨さん曰くフェリシアさんは『傭兵』を自称しているだけであり、この神浜の『傭兵』と言ったら間違いなく星奈百恵さんが先に連想されるとのこと。それくらい有名な人らしいです。

そういえば、傭兵を雇うことにしたと美雨さんに伝えた時かなり驚いているようでしたし、そのあとにフェリシアさんを見た時は？マークが飛び交っているような表情をしていましたね。

きっと自分が思い浮かべていた人物と違って困惑していたのでしょう。

『大鈍』は誰でも平等に仕事を受け付けてくれるし、力にもなってくれるヨ」

ただし彼女は誰のチームにも入らないし、ひとつのところに留まる

こともしない。

攻撃力の高さから単体で魔女を倒すことに長けているため、チーム戦にもあまり向いていないらしいです。

フェリシアさんと同類かと思いきや、顧客に対する安全性は保障しているらしく、彼女と同行した魔法少女たちに傷ひとつ付けさせることなく仕事を完了させる。相当な腕の持ち主です。

しかも彼女は唯一、神浜全土を縄張りとしている魔法少女で、どこで活動したとしても黙認される存在らしいです。西と東、中央の重鎮三人が公式に認めた完全中立だからこそ出来る芸当ですね。

この神浜の東西の問題をもともしないとはなるほど、『神浜最強』のふたつ名は伊達ではないということでしょう。

「問題なのは、彼女は多忙なことだけだネ」

そしてそんな、最強の存在を欲している魔法少女が私たちだけであるはずがない。

彼女は神浜の魔法少女……その中でも弱い部類に入る魔法少女たちに頼られ、学校が終わった後の放課後はほとんど仕事をしていません。

星奈さんのメイン窓口になっているみたまさんは優先順位をつけて仕事を回しているようですし、他の重鎮三人も緊急時以外は連絡をすることはほとんどないらしいので、普通に仕事を申し込もうとしても待ち続ける羽目になるとのこと。

……なるほど。美雨さんがこのタイミングまで彼女を頼ろうとしなかった原因がわかりました。

つまり戦力としても実績としても信頼としても名前通り百点満点な彼女は非常に多忙な身で、仕事を断られる可能性の方が高いということでしょう。しかしながら、上手く行けば一番手っ取り早い方法でもあるので提案してくれた、そういうことでしょう。

……一か八かですか。

「それでは……その星奈百恵さんに会いに行きましょう」

平日の放課後に会うのは困難ですし、時間も取りづらいでしょう。ならば休日……日曜日の午後、傭兵としての仕事が始まる少し前に

調整屋で待機しコンタクトを取るとしましょう。多少強引になつてしまいますが、そうでもしないと取り次いでもらえなさそうなので致し方なしです。

今後の方針である仲間の勧誘の話が纏まったところで、今日はお開きになりました。

そして迎えた日曜日。

12時前から私たちは調整屋に訪れていました。

「いらつしやうい♪ あら、ななかちゃんたちじゃなくい♪」

いつもの調子でみたまさんが出迎えてくれます。

「みたまさん、私たちに傭兵を紹介していただけませんか？」

直球で聞いてみます。

変に回りくどい聞き方をするよりも快く返してくれますし、ダメならダメで次にいつ会えるかを尋ねることができます。こちらも時間は惜しいので手短かに用件だけを伝えました。

「モモちゃんのこと？ いいわよ〜」

あつさりと笑顔で了承してくれました。

今日は偶然にも依頼がない日だったそうで、先着順で私たちが先に案内してくれるとのことでした。

星奈さんは決まって12時半に調整屋に来るということで、少し待っていれば会えます。

美雨さん曰く、かなり運が良いらしいです。お客が少なくなったのでしょうか？

「最近では自立したりチームを組んだりする子が多くなったし、モモちゃんの弟子の子に仕事をお願いしたいっていう子も出てきたからかしらね。そこまで忙しくなくなつちやつたのよ」

……なるほど。そういうえば魔法少女の自立させる活動もしていると言っていましたね。その影響で彼女を必要としている魔法少女が減っているのですね。

そして……おそらくフェリシアさんでない彼女のお弟子さんも

育つてきているから、相対的に彼女への仕事が少なくなっていたと。

これはこちらにとってはチャンスかもしれない。

ここまで彼女の仕事が減ったのなら、チームに勧誘しても加入していただける可能性があります。ほとんどないとはいえ、可能性を見つけたのは喜ばしいことです。

それからは星奈さんが来るまで調整屋の奥の控え室で待機することにしました。

途中でみたまさんがお昼ご飯を御馳走してくれると誘ってくれましたが、なぜか私の固有魔法に反応があったので遠慮しておきました。

普段のみたまさんには反応しないのに……なんだったのでしょうか。

「待たせてすまぬのう。お主らが、私の客かの？」

時間は12時半ぴったり。

人懐っこそうな笑顔を浮かべた少女が私を見てやってきました。

「えつと……」

一瞬困惑してしまいましたが、隣に立つ美雨さんが私の背中を突き、そして彼女に目を閉じて軽く礼をしていることで思い出ししました。

古風な口調、整っているものあまりにも小さすぎる容姿、左肩にかかるしっぽヘアとアホ毛……軽くですが昨日美雨さんが仰っていた通りの、星奈さんの特徴です。

私としたことが……とんだ失態です。

「んんっ、失礼。『傭兵』、星奈百恵さん、で間違いありませんね？」

そしてまた美雨さんに背中を突かれてしまいました。

「うむ、いかにも私が星奈百恵じやの。して、お主らは誰かの？ おそらく初対面じゃったと思うのじやが……」

……私としたことが！

ほんの数秒前の私を殴りに行きたい衝動に駆られます。まさか名乗ることを忘れるとは。しかも最初の彼女の質問に答えることなく、



こちらから質問を投げかけてしまっています。

思った以上に、動揺しているようです。だとしても、とんでもない失態を犯してしまったのは事実。

「……失礼。名乗るのが遅れました。——お初にお目にかかります。私は常盤ななか、と申します」

深く頭を下げつつ名乗ります。

それに続いてあきらさんが、かこさんが、最後に美雨さんが頭を下げて挨拶をします。

「よいよい、楽にせい」

そんな朗らかな声を聴いて私たちは頭を上げて再び星奈さんを見ます。

改めて見ると……不思議な方でした。

見た目は小学生に見えてしまうほど幼くかわいらしいものですが、纏う穏やかな雰囲気完全に大人のそれです。強者が放つ静かな力、というものを感じます。

当然ですが私の魔法も一切反応しません。噂通りの善人と見て間違いなさそうです。

そんな星奈さんはなにかを待つように笑顔で私を見ています。

……………

「神浜最強の傭兵と名高いあなたに相談、そして仕事の依頼を受け付けていただきたく、この場に参らせていただきました」

彼女の最初の質問である、私たちが客であることをお答えします。

正直、この時点でこの人を見た目で判断してはいけないということが理解できました。

人を見る目があるばかりか、結構頭の回転が速いです。

思えばここにやってきたときも、彼女が見て最初に話しかけてきたのは私でした。この中で一番年上な美雨さんではなく私がこのチームの代表であるとわかったからこそ出来ることです。

「ほう、相談と仕事の依頼か。話を聞く……その前にじゃ。みたまから聞いているが、12時前から待っていてくれたのであろう？」

「ええ」

「ならば場所を変えよう。私が絶賛している洋食屋さんがあるのじゃ。そこでゆつくり話を聞くとするかの」

「どうやらこちらを気遣ってくれているらしいです。」

重要な人物と会うということでも忘れていましたが、今はお昼時です。私はともかく、他の皆さんのお腹が空いていてもおかしくありません。

……と言っていますが、お昼時なのを思い出して私も少しお腹が空いてきました。

星奈さんのご厚意に甘えて、私たちは調整屋を出て北養区に訪れていました。

その道中で星奈さんはこちらの仕事の話を切り出さず、代わりに自分の話や世間話ばかりを話していました。他の初対面の魔法少女たちにも自分のことを知ってもらうために積極的に話しかけているらしく、もはや癖のようなものになっているのだとか。

「やっぱり油断できない人です。」

いきなり本題を切り出さず、こちらの心を開かせて背景を見ようとしていることがわかります。

あきらさんとかこさんは早々に彼女と仲良く話すようになっていきますし、話の流れで私や美雨さんが答えなければいけないこともあります。こうして全員の性格や癖などを見ながら対応しようとしているのでしょう。

「着いたぞ、ここじゃ」

そして辿り着いたのは『ウォールナッツ』と看板が立っている立派なお食事処でした。

ここは食べに来たことはありませんが聞いたことはあります。裕福な人たちの舌を唸らせる名店、そう亡くなった私のお父様が言っていました。

「安心するとよい。ここのお値段はリーズナブルなものじゃからの」  
主にあきらさんとかこさんに向けての発言だったのでしよう。

その言葉は、いかにも高級店みたいな外装のレストランに圧倒されていた私たちにとっては嬉しいものでした。なんだかんだで、私の懐

事情は少し寂しいものです。

「いらつしやいませ、つて星奈さん？」

出迎えてくれたのは料理人の格好をした少女でした。

彼女、胡桃まなかさんも私たちと同じ魔法少女かつこの料理人です。その年で料理人とは、凄いものです。本人も自信があるらしく誇らしそうにしています。

ふたりはここで開催された料理教室で知り合った仲なんだとか。

そして早速、太鼓判を押したこの料理を広めるために私たちを連れてきた、と。

「このオムライスは絶品なのじゃ。苦手な人はいるかの？」

誰ひとりとして挙手しませんでした。

万人受けする料理と言っても過言ではないオムライスを苦手とする人は稀ですし、それは私たちも例外ではありませんでした。

確認を取った星奈さんは「特製オムライス五つ」とオーダーを取ります。

「わつかりました！　すぐにご用意しますので少々お待ちくださいね！」

嬉しそうな顔で胡桃まなかさんは私たちを席に案内し、お水を人数分用意したのち厨房に行つてしまいました。

なるほど。なにがあつたのかはわかりませんが、胡桃まなかさんも星奈さんに心を開ききつているようです。

つまり私たちは場所こそ変わったものの、星奈さんのホームに連れてこられてしまったみたいです。さりげなくマウントを取ってくるあたり抜け目のない人です。

席順は私とかこさん、向かいに美雨さんとあきらさんが座り、世間一般に言うお誕生日席に星奈さんが座りました。当然、私と美雨さん側のです。

打算もあるのでしようが、話を聞こうとしている気持ちが伝わります。

そして待つこと五分も経たず、私たちの目の前に綺麗なオムライスが運ばれてきました。

早速頬張りだしたのはあきらさんで、それに続くようにかこさんも食べます。

「すっごい！　これかなり美味しいよ!？」

「卵がふわふわとろとろしています……!？」

そして一口で落とされていました。

さすが神浜最強の傭兵は他人の料理すらも自らの武器として自在に操れるということでしょうか。

では私も一口……!　こ、これは!

「これは……素晴らしいオムライスです」

「うん。これは美味しいヨ」

私に続いてオムライスを食べた美雨さんも感嘆の声を出していました。

少し声のトーンが上がっているのです、お世辞抜きで言っていることがわかります。

いや、しかしこの味は素晴らしいです。

デミグラスソースが卵の香りを殺していませんし、チキンライスもくどくないので飽きることがありません。かかっている卵やソースの量を変えたりしながら味わうと楽しいです。多すぎず、少なすぎずのボリュームも絶妙ですね。ちょうど腹八分で止められる量です。

なるほど。これほどのオムライスが作れるのなら胡桃まなかさんのあの自信にも納得がいきます。尊敬すべき料理の腕の持ち主です。「そうであろうそうであろう!　まなか先生のオムライスは最高なのじゃ!」

自分のことのように喜びつつ星奈さんもオムライスを頬張っています。

先生と呼んでいるあたり、彼女も胡桃まなかさんのことを尊敬しているのでしょうか。

そんな楽しくも幸せな時間はあっという間でした。

十分も経たずに全員がオムライスを完食し、お水を飲んでほっと一息ついたところで星奈さんが口を開きました。

「さて、腹も膨れたし用件を聞こうかの。相談と依頼であったな?」

このタイミングで仕掛けてきましたか。なかなか意地の悪いお人です。

こちらが美味しい料理を味わって丁度良くお腹がいっぱいになった気分のいいところで聞いてくるとは……。

対応は丁寧で、人柄も良く、美味しい料理を紹介してくれた。

この時点でこちらは星奈さんに対して良い印象しか持っていないません。

一方の星奈さんは私たちに施し、さらにこれからも施そうとする側、つまり与える側です。

元々の立ち位置でも上なのに、心理的印象も上に持っていていかれてしまいました。

おそらくこれは無意識ではなく、あの人懐っこい笑顔の裏で計算しながらやっていることなのでしょう。そして、それが本人の性分でもあるのでしょうか。

計算しているくせに演技でなく素でやっているから質が悪いです。おかげで憎むことができませぬ。見た目に見合わないとんでもない策略家です。

伊達に魔法少女を五年もやっていない、ということでしょう。

「詳しく聞かせてもらおうかの。お主らはチームで組んでいるようじゃが、どういう繋がりがあるのかの？」

私たちは現在全員制服で来ています。

私とあきらさんが同じ参京院ですが、美雨さんとかこさんは学校がバラバラです。しかも決して近い位置にある学校ではありません。加えて、私たちの年齢はまちまちです。

ですから最初にこの質問をしてきたのでしょうか。

……これは参りました。

この質問を真つ先にしていくということは、彼女は私たちの関係こそ本題に繋がっていると見抜いています。

そして本気で私たちから情報を聞き出して助けになろうとされているのでしょうか。それと同時に今後の活動に有効活用するための材料にするためにか、徹底的に情報を絞りつくそうとしています。

ここは正直に話すべきです。

嘘を吐くのは論外。誤魔化したりぼやかしたりすれば、その時点で見切りをつけてくるでしょう。そうなると困るのはこちらです。

主導権が向こうにある以上、こちらは今ある情報をすべて開示すべきですし、そうして得られるリターンが星奈さんの獲得ならば安いものです。

「私たちはとある魔女を追っています」

彼女の目論見通り観念して洗いざらい、全て話すことにしました。私は実家のことを話します。

『華心流』。

知る人ぞ知る華道の宗家だった実家が、目先の派手さに目が眩んだ弟子たちによって潰されかけ、病床に伏せていた私の父は失意のままに亡くなったこと。私は父の遺言通り、一門の誇りであった真の『華心流』を取り戻すべく、その原因となった敵に復讐するために魔法少女になったこと。

私が魔法少女になった理由を話し終わると、次に美雨さんが、そしてかこさんが続き、あきらさんがそんな私たち共通の敵と一緒に倒すためにチームに加入している旨を伝えます。

「そうか。それでは次の質問じゃ。その復讐すべき、お主らの敵とやらは見つかったのかの？」

二段階目の質問でさらに踏み込んできました。その質問にもしっかりと答えます。

一度は見つけ、倒すことに成功しているものの、それは魔女の分離体……成長した使い魔に過ぎず、大本の魔女はまだ見つかっていないということ。

そしてこの際です。その魔女についても話すことにします。

人々の心を喰らい尽くして滅茶苦茶にした上で、魔女に成長間近の使い魔を残して移動する習性があるので、その魔女に居座られた土地は魔法少女が対処しない限り復興することすらできないということ。そして移動した先の場所でも同じことを繰り返し、移動し続けるため被害が尋常ではないこと。

このひとつの場所を大群で喰らい尽くしながら移動を繰り返し、別の場所も食料のみならず家までも奪う習性が、生物災害の一種である『蝗害』に似ていることから――

「――私たちはこの魔女を『飛蝗』と呼称しています」

これが、私たちが倒すべき復讐相手。

『飛蝗』、この魔女を倒さない限り、私たちの戦いは終わることがありません。

「それは……とんでもない魔女がいたものじゃの」

事情が事情なだけに星奈さんも険しい表情になっています。

今この瞬間にも、その魔女が他の土地で被害を出している可能性がある以上、ベテランとして看過できないのでしょう。

策士以前に善人である星奈さんに、その魔女が忌むべき相手であることを強調できたではないでしょうか。

「それでは最後の質問じゃの。それを私に伝えた上で、お主たちは私になにを願う？」

なにを願う……ですか。

広い意味の質問が最後に飛んできました。

その魔女を見つけ出して退治してほしいのか、それともその魔女を見つけ出すだけでいいのか、それともこちらの活動を邪魔しないように根回しすればいいのか……色々な質問を短く凝縮させた薄いようで内容の濃い質問です。

そしてそれは文字通り、「そちらの望むことはなんだ？」という用件を聞くものでもあります。

ここで本音を見せなければ、仮に引き受けてくださったとしてもそれ以上の見返りは期待できないでしょうし、信用されることもなく距離を置かれてしまうでしょう。だからと言って無理な願いを言っても断られてしまいます。

どこまでも意地悪な方です。

ですが、それはこちらも想定済みです。

だからこそ『相談と仕事の依頼』という言い回しをしたのですから。私の取るべき行動は、しっかりと本音を言いつつ、次にランクを下げ

た本題を切り出し、それを星奈さんに受理していただくことです。そして、星奈さんも私がそう動くことを分かった上で聞いているでしょう。あの時に聞き返してきましたからね。

この最後の質問は、大きな案件を持ち掛けてきた私たちに対する最終試験、と見て間違いのないです。

……ふう。

私は小さく息を吐いて、相談します。

「ずばりお伺いします。私たちのチームに加わってはいただけませんか？」

ギョツとした目で美雨さんが、あきらさんがかこさんが私を見てきます。

あまりにも直球かつ無理な相談に驚いたことでしょう。しかしこれが私の本音であり、ギリギリで言える無理な願いなのです。

要は、それくらいこの魔女に執着している。それくらいの意気込みを見せつけなければこの小さな策略家を動かすことができないと判断しました。

「ふむ、申し訳ないがそれはできない相談じゃの。私は常に中立じゃ。どこのチームに加わるようなことはしないのじゃよ」

その回答はわかりきっていたことです。

大切なのは、これが依頼内容ではなくただの相談だと伝えられたかどうかです。そして、星奈さんは「できない相談」と返してきました。つまりこちらの意図は伝わってくれています。だから次は――。

「……なるほど。本当に噂通りの方なのでですね。残念です。それは、連絡先を交換していただけないでしょうか？」

連絡先の交換、これが本題です。

今日のために星奈さんについて調べた結果、実は彼女の連絡先を知る魔法少女はかなり限定されていることがわかりました。

仕事で知り合った魔法少女たちは、基本的に星奈さんの連絡先を知りません。

なぜかというと、基本的に星奈さんへの仕事の依頼は調整屋のみたませんか、西と東、中央の重鎮たちを通す必要があり、本人に直接連



絡するのはNGとされているからです。

よって星奈さんの連絡先を知り、連絡を取り合っているのはプライベートで彼女と親密な関係を持つ者だけ、ということになります。少なくとも、仕事だけの関係で話を進めようとしている私が彼女の連絡先を手に入れることはできません。

ですが、私はそれが欲しいのです。

都合の良い時に連絡を取り、即座に対応してくれるフットワークの軽い傭兵。それが私の欲するものであり、私が星奈さんに求めるものです。

……さあ、どうでしょうか？

NGの境界線につま先をギリギリまで近づけているような要求です。

跳ね返される可能性も充分にあり得ますが、これが私が望むことなのです。こちらも後には引けません。ですので攻めます。

私の切り出した本題を聞き、瞑目した星奈さんはすぐになっこりと笑顔になりました。

……なぜでしょうか。まだ答えを聞いていないのに、安心感や達成感が胸の中に広がっていきます。

星奈さんはバッグの中から……スマートフォンを取り出しました。取り出していただけました。

と、いうことは……。

「あい、わかった。お主の依頼を受けよう。事態が進展し、どうしても私が必要になるのならば、連絡してくるとよい。すぐに駆けつけて力になってみせるからの」

……。……。ふう……。

「わかりました。こちらの依頼を引き受けていただけただけなこと、感謝します」

思わず私も微笑みつつ、スマートフォンを取り出します。そしてしっかりと連絡先を交換したのち、握手をしました。

交渉成立です。やりきりました。

臨時、限定的とはいえ、神浜最強の戦闘能力の持ち主が、私たちの

味方になってくれることが確約されました。

私の、私たちの悲願達成に向けて大きく前進することができました。

「あ、あの星奈さん」

と、ここで隣に座っていたかこさんが星奈さんに声をかけます。

珍しいですね、意外と社交的であることは知っていましたが、こういう緊張した場でかこさんが自分から人に声をかけるのは。

これには星奈さんも驚いているようです。てっきり私か美雨さんくらいしかこの話し合いで声をかけてこないだろうと思っていたのでしよう。

ですが驚いた顔をしたのは少しだけ。

すぐに優しそうに目尻を下げた穏やかな表情になります。

私と交渉している時の策略家の顔はどこにいつてしまったのでしょうか。

「どうしたのじゃ？」

そして声の質まで変わっています。

まるで孫の言うことを聞いてあげようとしているおばあちゃんのような、安心感を抱かせる声色です。……………。

このひと、裏の顔と表の顔の差が激しすぎです。

その、私にももう少し、優しくしていただきたかったのですが……まあ仕方のないことでしょう。

私はこのチームのリーダーで、かこさんはその一員、来年は中学生とはいえまだ小学生なのですから、対応が違ってもおかしくありません。

「実は星奈さんと同じ傭兵の魔法少女の子がいるんですけど……。その、もし彼女と出会うことがあったら……。どうか話をしてあげてくださいませんか？」

これは……。かこさんはフェリシアさんのことを話していますね。

そしてフェリシアさんのことは星奈さんも知らなかったらしく「ほう」と興味深そうにしていました。

「よいぞ。私も興味があるし、優しそうなお主が気にかけているとい

うことはきつと訳ありな子なのじゃな。ならば手を差し伸べるまでじゃ」

「よろしいのですか？ 一応、あなたの商売敵になるのでは？」

まあ、アレでは敵になるならない以前の問題だと思えますが。

「そんなことは関係なからう。私は常に中立。商売の敵であろうがなんだろうが関係はないのじゃよ。私はこの神浜の魔法少女たち全員の味方なのじゃ。それに……私の後継者は多いに越したことはないからの」

にっこりと笑う星奈さん。

ですが、その笑みは今まで見たどの笑顔とも違っていました。

どこか少し寂しそうな、諦めているような、そんな笑顔のように見えませんでした。

「そうですか。……彼女のこと、私からもお願いします」

とりあえず見なかったことにしようと思えます。

踏み込んだとしても間違いなく誤魔化されますし、依頼を取り下げられはしないでしょうが、微妙な関係になっても困ります。よって、この話はこれで終わりにします。

もっと彼女と、腹を割って話せるような関係になれば、先程の笑顔について聞いてみるのもいいかもしれませんね。

そんな日がいっつ訪れるのかはわかりませんが。

「話はこれで終わりの？」

かこさんの話を聞き届けた星奈さんはぐるりと私たちを見渡しします。そして誰も声を上げることはありません。交渉はすでに成立しているのですから。

先程のかこさんのような、個人的なお願いがいいのかどうかだけを確認しているのでしょうか。

「それでは私はこれで失礼するかの。報酬は次に呼んでくれた時で結構じゃよ」

特にないことを確認した星奈さんは笑顔で去っていきました。

多忙な身の彼女です。次の仕事を受けに行ったのか、帰って勉強をしているのか。どうかは知りませんが、どこか急いでいるような様子

でした。

「……ふう、上手く行きましたね。おっとつと」

「な、ななかさん!」

「ななか大丈夫!?!」

力が抜けて思わず体勢を崩してしまった私を、かこさんとあきらさんが心配してくれます。

本当にいい人たちを仲間にできました。

「大丈夫です。少し、疲れただけですのぞ」

「ななか……無理しすぎヨ……」

そして、ようやく一息出来た私を正面の席に座る美雨さんが労わってくれます。

本当に……疲れました。

交渉事が得意と言っても、こちらの動きをすべて読んだ上で試練を与えてくるような相手と相對したことはありませんでした。

結局私はずっと彼女の掌の上にいたのでしょうか、それでも星奈百恵という切り札を得たのは大きいぞ。ハイリスクハイリターンの交渉でした。

頭を使ったからでしょうか。

なにか、甘いものが食べたいぞ。それから喉も乾きました。

「お待ちせしました。ウォールナッツケーキぞ」

と、そんなことを考えながらゆっくりしていますと、胡桃さんがケーキを持ってやってきました。

しつかり四つ、人数分ぞ。

「失礼、注文していませんのぞが……」

「星奈さんから皆さんにとのことぞ。支払いはすませていらつしやるので結構ぞ。あとそれからこれを常盤ななかさんにと。えつと……」

「私ぞ」

胡桃さんから小さなメモ用紙を受け取ると、そこには「楽しかったからお礼じや」と書かれていました。

こつちは本気だったというのに楽しんでいるとは……本当に人が

悪い。それでいて憎めない人ですね、あの人は。

「それからドリンク代もいただいているのですが、なにか注文なされますか?」

ケーキだけでなく飲み物まで……私が考えていたことは丸わかりですか。

悔しいですが、完敗ですね。

「ええ……それはなんか、悪いなあ」

「はい……」

「でも頼まないは無駄になってしまうネ」

「……そうですね。それではご厚意に甘えるとしましょう」

それでもってこちらが断れないことも織り込み済みですか。

どこまで見越していることやら……。

「じゃあ、このイチゴミルクを」

「はい」

「わ、私はオレンジジュースを」

「はい」

「私は紅茶がいいネ。このケーキと合うものを頼むヨ」

「はい」

「私はメロンソーダをいただきましたでしょうか」

「うっ……はい。かしこまりました」

「? どうしましたか?」

「い、いえ、なんでもないんですよ。アハハ……」

「?」

なぜか私の注文を聞いて胡桃さんが顔が引きつっていましたね。

「メロン……料理教室……不審者……うう、頭が……」と言いながら厨房に行ってしまうました。どうしたのでしょうか?

疑問に感じつつケーキをいただきます。

ふんわりと口の中にとろけるスポンジ生地、クルミの上品の香りが広がっていきます。付け合わせのお塩を少しかけると味が引き締まり、シナモンで味がガラリと一新されて面白いです。飽きることがありません。

「全く……この街は、私たちを飽きさせてはくれないみたいですね」  
きつといういろいろな厄介な事件が起こることでしょう。

私たちの悲願が達成されるのも、もう少し先の出来事になるでしょう。そして、それを解決したとしても、私たちは新たな戦いに身を投じることになるでしょう。

でも、そうだとしても、今の私たちなら乗り越える気がします。

だって私たちの背後には……神浜最強の傭兵がついているのですから。

## RTAパート6 魔法少女育成計画

愛弟子たちを手塩にかけて育てていくRTAはーじまーるよー！  
皆さんご無沙汰しております。魔法少女専属調教師（本職は傭兵）の星奈百恵と申します。

前回のマギレコRTAはいかがでしたでしょうか？

本マギレコRTAでは比較的オーソドックス（大嘘）なRTAプレイが沢山取り上げられていたと思います（取り上げられているとは言っていない）。

これからお見せするRTAも基本的なRTAをお見せしたいと思います。ほんとお？（狂気）

今回調教する魔法少女は、鶴乃っ！

元気で明るくまっすぐな性格と、均整のとれた体（嫉妬）。

まだ16歳のこの少女は、百恵ちゃんの調教に耐えることができるでしょうか？

それでは、ご覧ください。

「百恵ししよー！ よろしくお願いしますー！」

ということとで現在鶴乃ちゃんと一緒に特訓中です。

いやあ、本当に強いです鶴乃ちゃん。

最初こそ速攻でケリをつけることができましたが、今や百恵ちゃんもガチモードじゃないと対応できないほど強くなっていますよ。と言ってもやっぱり武器は使いませんけどね。

直接あたらなくても剣圧だけで使い魔を真っ二つにしたり吹き飛ばしたりするヤベー武器ですもん。軽く一振りしてうっかり斬っちゃったら危ないですから（1敗）。

そして実は鶴乃ちゃんと特訓するのはこれで五回目です。

え？ それまでの四回はどうしたんだって？ こまけえこたあい  
いんだよ！

重要なのはこの五回目なんですから倍速してすっ飛ばしました。

（RTAなんだから）当たり前だよなあ？

「ちやーらー！」

あつぶえっ!? そんなことを言っている内に鶴乃ちゃんの炎が百恵ちゃんを襲う!

育てていくと弱点だった攻撃後の隙も小さくなっていきますし、中距離どころか遠距離の攻撃まで覚え始めます。

近距離だと普通に鉄扇での物理攻撃を、中距離で炎を飛ばし、遠距離で炎を流星群のごとく乱れ打ちをします。

距離が開けば開くほど魔力を使う欠点がありますが、戦闘面においての弱点がないと言っても過言ではないオールラウンダーに育て上げることができるんですね。

全距離対応型魔法少女ってなんだよ。

一方武器を使わない百恵ちゃんは、近づいて殴る蹴るなどの暴行を加えることしか能のない脳味噌筋肉娘です。悲しいなあ。

まあ武器を持つていない分、素早さが上がるんですけどね。それでも炎の壁の前では沈黙するしかないわけで。

特訓とはいえ割とガチな戦闘なのでこちらからも仕掛けていきます。

手加減しているとはいえ真面目にやってあげないと、手を抜かれている、相手にされていないと判断されて好感度が落ちて特訓が打ち切られる可能性があります(2敗)ので、しっかり戦ってあげましょう。

鶴乃ちゃんの攻撃を……はい、躲して近づいてパンチ、パンチ!

しかし身軽な鶴乃ちゃんに即座に対応できてしまいます! 動くとき当たらないだろ? 動くとき当たらないだろオ!? そして距離を取られて炎を飛ばしてきます。

さて、この攻撃ですがあえて受けましょう。

……アツウイ! グワーツ! アバーツ!

「!? し、ししよー!」

はい、火達磨になった百恵ちゃんを見て鶴乃ちゃんが顔色変えて飛んできました。

百恵ちゃんは紙装甲ですからね、一発でも攻撃を受けてしまうとほぼ戦闘不能になります。

お互いに《速度》が高く、泥仕合になりそうな予感がするときはこの



の手を使って強制的に特訓を終わりにしましょう。いずれにせよ五回目は勝たせてあげるつもりでしたので一石二鳥です。

え？ でもそのせいで氏にかけているって？（ソウルジェムが無事なら問題）ないです。

経験値をもらって戦闘終了です。

そして鶴乃ちゃんは、武器を使っていないとはいえ性能的に格上の百恵ちゃんに勝利したということとで倍以上の経験値を獲得していますね。うんうん、順調に育っているようで嬉しいです。

「ごめんししょー……その、加減ができなくて……」

謝ってくれつつわざわざ百恵ちゃんのソウルジェムを自前のグリーフシードで回復させてくれる鶴乃ちゃんマジ天使。

大丈夫だって安心しろよく。ヘーキヘーキ、ヘーキだから。

……さあ、鶴乃ちゃん籠絡シヨアの始まりや。パチパチパチパチ！

（乾いた拍手）

- ・ 第一次みかづき荘が解散していること
- ・ プレイヤーへの好感度が一定以上であること
- ・ プレイヤーがチームみかづき荘のメンバーでないこと
- ・ プレイヤーが鶴乃ちゃんよりも年上かつ設定上強いこと
- ・ 五回目の特訓でプレイヤーが負けること

この五つの条件を達成して初めて、鶴乃ちゃんを墮とすこと……俗に言うウワ鶴モードにさせることが可能になります。

若干厳しめですが、しっかりキャラメイクをしたうえでイベントもこなしてすべてクリアしましたので無事にルートが解放されました。ここからは鶴乃ちゃんを存分に甘やかしてあげましょう。今から小一時間たっぷり甘やかしてやるからなあ（ねっとり）。

おーよしよし。強くなつたね、良い子だね、かわいいね。

「えへへ……」

じゃあ強くなった御褒美をあげないとね。

丁度お昼時だし、腹減る……腹減らない？

「おおつ、確かにお腹が空いてる。集中していたから気が付かなかつたよー」

よしよし、じゃあ特別に百恵ちゃんの手料理を振舞ってあげるからね。

「えっ、百恵ししょーの料理？ いいの？」

もちろんSA (DNL D)。

というわけで鶴乃ちゃんを百恵ちゃんズハウスにご招待！ 一名様ご来店です。

あ、今回はウォールナッツに連れていきません。お家でゆつくりと、じつくりと鶴乃ちゃんを甘やかします。

ここに座つていてね。

手伝い？ 大丈夫大丈夫！ 今日はお祝いなんだからゆつくりしていなさいな。

「え……ゆつくりしていいの？」

兆候が見え始めました。ですがまだ墮としません。

段階的に墮とさないと好感度が上がりすぎて依存症になってしまいます。そうなってしまうと困りますので、丁寧にゆつくりと甘やかしてあげましょう。

というわけで料理ミニゲームじゃーい！

あれからも料理教室に通って鍛えに鍛え上げた料理スキル、見とけよ見とけよ？

ボタン連打で……大成功！ 遂にこの域まで来ましたよ。

ちなみにまなか先生は毎回、大成功の二段階上の超絶大成功を叩き出します。道は遠いなあ。

おまたせ！ 洋食しか作れなかったけど、いいかな？

「す、す………！ え、ししよー料理人でも目指しているの!？」

鶴乃ちゃん目がきらつきらですね。

料理店の娘ですし、やっぱり料理に対してこだわりがあるようです。尤も、彼女の店の料理はどう足掻いても50点なんです。

さあ、たーんとおさがり。

「じゃ、じゃあいただきます。……ふああ」

幸せそうな顔で食べてくれるじゃないか。

おかわりもいいぞ！ デザートもあるぞ！ 遠慮するな、今まで頑

張っていた分食え……。

「ふう……美味しかったあ」

すっかり食べきってくれましたね。

大成功だと作る量も丁度良くなるので、無理せずに食べきらせることができます。

さあ、鶴乃ちゃん。今度はこっちおいでこっちおいで。

ほら、ソファで横になろう。ふつかふかやぞお？ この日のためにわざわざ買ってきたんや。鶴乃ちゃん専用のソファやで？

疲れたやろ、体力勝負やしなあ。だから今日はもうゆっくりしよ  
ぜ。

「え……いいの？ 休んでいいの？」

そうだよ（肯定）。

あつ、そうだ（唐突）。この際百恵ちゃんも一緒に寝てしまいましょ  
う。それから溜め込んでいることとかも全部聞き出してしまいま  
しょう。

今の鶴乃ちゃんは堕ちきつてはいませんがかなりガードが緩んで  
いる状態です。丁寧に、丁寧に堕としていきましょ。

「暖かいな……。ここはとつても、暖かい……」

……落ちたな（確認）。

鶴乃ちゃんの目のハイライトが消えています。

はい、調教終わり！ 閉廷！ 以上！ みんな解散！ お疲れさ  
まっした！ もう早送りしちゃって大丈夫ですので倍速処理しちや  
いましょ。

さて、なんで鶴乃ちゃんを堕としたかというと、本編第7章『楽園  
行き覚醒前夜』での鶴乃ちゃん救出イベントを大幅短縮させるため  
です。

百恵ちゃんもこのイベント直後に『マギウス』を裏切りますので、第  
二次みかづき荘メンバーにヒントを与えて鶴乃ちゃんを救出させタ  
イムを早めていきます。

ちなみに鶴乃ちゃんとの特訓イベントは五回でお終いです。

これ以降は街中でばったりエンカウトした場合にのみ、ランダム

で起こります。

特訓イベントは起こると経験値になって、起こらないと時間短縮になるどっちに転んでも美味しいイベントなので、行動の制限がかからなくて素晴らしいです。

はい、というわけで本編開始前にやるべきことのひとつを完了させました。

じゃあ（次のイベントが来るまで）流しますね。

おはよーございまーす！

さて、今回も育成イベントの最終段階に入りましたのでそれをお送りしたいと思います。

お相手は百恵ちゃんの最初の弟子であるかりんちゃんです。

今日はかりんちゃんが傭兵として独り立ちするための最終試験日。発生条件はかりんちゃんと仕事を七回こなすこと。はい。七回です。鶴乃ちゃんは五回でオーケーなのにかりんちゃんは七回ですよ奥さん。

まあでも、会う頻度はかりんちゃんの方が上ですし、かりんちゃんは傭兵ルートに入っている手前半端な腕では出せませんからね。これくらい回数を重ねないといけないということでしょう。世知辛いですなあ。

ただここに至るまでに色々と問題がありましたね。

かりんちゃんね、極稀にね、連れてくるんですよ。「今日は先生に紹介したい人がいるの！（純粹無垢）」というセリフが若干トラウマになっていきます（8敗）。

特にこの七回目はね、凄い確率で連れてくるんですよ、あの<sup>アリナ</sup>人を。頑張っている姿を見てほしくて連れてくるんですよ（5敗）。やめてくれよ……（絶望）。

そうしてリセットし続けてようやくと単騎で来てくれました。ここまで来るのに長かったですよ、はい。

「来たわよ、百恵」

「おまえの方から連絡するなんて珍しいと思いきやだ。驚いたぞいきなりで」

「久しいな星奈。それで、新しい『傭兵』とは君か？」

そしてなんと今回はスペシャルゲストが来てくれています。

うわあ……これは西の七海やちよです。これは中央の都ひなので、ああ、こっちは東の和泉十七夜ですね。間違いない。なんだこれは……たまげたなあ。

ということで百恵ちゃんが手配しました、神浜魔法少女の重鎮の皆様です。あえてみふゆさんだけは連絡していません。

彼女たちと百恵ちゃん、そしてみたまさんの五人が、かりんちゃんの試験官を務めます。

ちよつと豪華すぎる気がしますが、それほどまでに『神浜の傭兵』という肩書が大きなものだという事です。百恵ちゃんめっちゃ頑張ってたもんなあ。

「頑張ってるねかりんちゃん。私も応援しているわ」

さて、準備が整いましたので試験開始です。

入っている仕事件数は……二件、普通だな！

よっし、かりんちゃん頑張ろうな！ 今日で卒業だぞ！ いいだろおまえ成人の日だぞ（意味不明）。

「先生……わたし頑張るの！」

本人の意気込みヨシ！（現場猫）

それじゃあ仕事にイクゾォー！ デツデツデデデデー！（カーン）

今回の百恵ちゃんの仕事は、後ろでかりんちゃんの仕事ぶりを見ているだけです。

魔女との戦いから依頼主の接し方まで全部かりんちゃんにお任せしています。だから倍速安定なんだよな。

倍速中お暇であろうみくなくさくまくのくたくめくにい。

かりんちゃんの卒業イベントについてお話していいこうかなって思っています。

プレイヤーを先生として傭兵を目指すかりんちゃんとのイベントは七回で固定です。

つまり試験日である七回目までの間にかりんちゃんに傭兵としてのノウハウを教え込まないといけないわけですね。これを疎かにしてしまうと途中でかりんちゃんは傭兵になることを断念してしまいますし、七回目の試験を迎えたとしても、審査員の他の四人がNGを出して失敗してしまいます。

かりんちゃんには傭兵になってもらわれないと困るので、しっかりと正解の選択肢を選び続けて育て上げました。

ですので……おっと、さっそく一件目の仕事を終わらせましたね。

最初は不安そうにしていたモブ魔法少女もすっかりかりんちゃんを信頼しているご様子。グリーンフィードも落ちましたし、順調です。

じゃけん次の仕事に行きましょうね。

はい、現着です。かりんちゃん、行ってらっしゃい。

えー、一戦目でお察しの方が多くと思いますが、もうこれは勝ち確定イベントです。そら（正解の選択肢ばかり選べば）そうよ。

かりんちゃんが傭兵になるにあたってメリットがあります。

ひとつはかりんちゃんが独立すると勝手にぐんぐん育って行きますので、気が付いた時にはアルティメットかりんちゃんが爆誕していただきます。

ちなみにかりんちゃん、独立すると仕事を絶対に失敗しない出来る女になるので、安心して任せることができます。

そしてもうひとつは、こうして一緒に行動する必要がなくなるということです。

これでようやくアリナの恐怖から一歩引くことができます。こいついっつもアリナを怖がっているな。RTA走者だからね、仕方ないね（レ）。

はい、お仕事終了です。

満場一致文句なしの合格ですね。これなら一人前の傭兵として戦っていただけます。

おー、よしよしよく頑張ったねかりんちゃん。今日からおまえは……富士山だ！

「……ぐすつ、せ、先生、ありがとうなの……。わたし、もつともつと

頑張つて、いっぱい人を、魔法少女を助けるの！」

やっぱ……かりんちゃんを……最高やな！

え？ お代の6000円をくれる？ そんなことしなくていいから（良心）。素直に受け取っておきなさい。

「おめでとうかりんちゃん♪ じゃあこれからはかりんちゃんの仕事の受付も始めるからね。忙しくなるわよ」

これでかりんちゃんも立派な同業者です。おまえはもうここ（傭兵ルート）から出られないんだよ！

しつかり最終決戦で働いてくれよなく、頼むよ。

さて、ここまでで鶴乃ちゃんとかりんちゃんの育成が完了しました。

残る百恵ちゃんの弟子……というか雇用中のフェリシアの攻略も進めなければですが、やりすぎると魔女を見ると猪突猛進になり周りが見えなくなるフェリシアの欠点がなくなってしまうです。そうなるってしまうと困りますし、下手に好感度を上げすぎると第二次みかづき荘入りしない可能性があります。

よってフェリシアに対しては単純な戦闘訓練だけを仕込んでいきます。フェリシアがエンカウントしてきたときに手合わせをして、フェリシアの戦闘能力だけを上げています。

かりんちゃんには戦闘技術はほどほどに傭兵としての振る舞いを徹底的に覚えるように仕込みましたが、フェリシアは真逆です。とにかく早く魔女を倒すことだけを突き詰めています。パパパツて魔女を倒しちやえばクレームはこんやろ（適当）。

あとフェリシアは百恵ちゃんと違ってフットワークが軽く、しかもお値段が格安の1000円なので実はそこまで生活に困っていません。評判はお察しですが。

「はあ、つつかれたー。百恵、飯作ってくれよ！」

強くなっていることを実感しつつ美味しい料理を食べられるというごことご機嫌なフェリシアちゃん。今後もこれくらいの距離で付

き合っていていきましょう。

完全に心を開かせる必要はありません。それはいろはちゃんたちの仕事ですからね。

さて、6月の終わりから始まったストーリーは早くも半年以上が経ちました。

年が明けて……やってきました受験シーズンです。もう合格は確定していますし、知り合うべきキャラとは全員知り合って好感度も上げています。

そして見てくださいよ、この百恵ちゃんのステータス。

《魔力》 90 《攻撃》 312

《防御》 23 《速度》 147

《精神》 85 《経験》 213

うっそだろおまえ（大草原）。おっ……すうっげ……（感心）。信じらんねえ、笑っちゃうぜ（素）。

《防御》はお察し。

一切ポイント割り振ってないし、そもそも攻撃を受ける気がないから当たり前だよなあ？

《速度》は現状のやちよさん（170）より少し下ですが、度重なる魔女戦と鶴乃ちゃんやフェリシアといった特訓イベントが起こるキャラと交流を持ったことでえらいことになっている《経験》、そしてこの圧倒的《攻撃》の数値。

まず《経験》ですが、これはループ中のクーほむとほぼ同数値です。ほむほむがループ中に倒れまくった魔女やマミさんや杏子、さやかとの戦闘経験の合計値と同じってとんでもない数字です。少なくとも3年以上魔法少女として普通に戦っているベテランの倍以上の戦闘経験を積んでいることになります。

そしてメインの《攻撃》ですが、これは外伝主人公のジャンヌ・ダルクことタルトがクロヴィス<sup>エペ・ド・クロヴィス</sup>の剣で調整して放っている攻撃のワンランク下です。



もう二振りどころではありません。普通の魔女なら一撃で倒せる破壊力の持ち主です。

まあ、直撃で一撃なので、遠距離から剣圧だけで倒すなら二振りが必要なんですけどね。

これだけ攻撃力があるなら充分ワルプルギスの夜に挑めます。

なので経験値も無理して稼ぐ必要もありませんし、受験シーズンということで百恵ちゃんの傭兵業も休業中。この間の仕事は全部かりんちゃんが引き受けてくれます。

というわけでですね、結構前にお話しした通りの裏技を使いましょう。

なんにもしないで一気にスキップしちゃいます。タイムを圧縮圧縮ウ！

そして……とうとう来ました。3月です。

面白くなってきましたが、今回はここまでです。

次回は本編前3大イベントの序章、『バイバイ、また明日』が始まるところからやっていきましょう！

ご視聴、ありがとうございました！

Side. 御園かりん わたしは『傭兵』

先生との出会いは、わたしが魔法少女になって一年が経とうとしていたときのことだったの。

あの時のわたし……御園かりんは歪んでいた。

丁度ハロウインの夜に魔法少女として契約したわたしは……わたしのバイブルである漫画『怪盗少女マジカルきりん』のようになりたいたいと考えていた。

『怪盗少女マジカルきりん』の主人公であるきりんちゃんは、誰にも頼らずにひとりで戦い続けるみんなを笑顔にさせる存在。そんな憧れの存在に、わたしは近づけたと思ったの。

……でも、いつからこうなっちゃったのだろうか。

今夜もいつものように獲物からグリーンフシードを能力で盗み取り、弱い魔法少女に届けようと神浜の街を飛んでいた。

そんなとき偶然、魔法の結界を見つけた。

とりあえず遠くから様子見をしていると……小さな人影がその結界のすぐ近くに来たのがわかった。

それはあまりにも小さな女の子だったの。中学一年生のわたしよりも背の低い、女の子。

一瞬魔法の口づけを受けたのかと思ったけれど、様子からしてそんな気配はない。それなのに魔法の結界に近づいていくということとは、彼女が魔法少女だということ。

「あれは……ダメそうなの」

すぐにわたしはこのグリーンフシードをあの子に渡すべきだと判断した。

女の子が結界に入る刹那、わたしは彼女の前に現れる。

「トリックオアトリート!」

「うにゃあっ!? い、いきなりなんじゃ!」

「我こそは! ハロウインが生んだ魔法少女! 怪盗かりん!」

……決まったのだ。

我ながらカッコいいエントリーだと思った。

「今日は貴様にグリーンフシードをやろう。トリックオアトリート！」

「は？ い、いやいらんぞ私は！」

「そう言わずに受け取るのだ！」

「いや、じゃから必要ないというておる！ 自分のグリーンフシード程度自分で調達できるわー！」

む、なかなか受け取ってくれないの。大抵の魔法少女は喜んですぐに受け取ってくれるのに。それになんかおばあちゃんみたいな不思議な喋り方をしているの。

まあ、そんなことはどうでもいいの。とりあえず貰ってもらおうとするの。

「貴様はまだ小学生だろう。ここは先輩であるわたしの施しを受けるといいぞ」

「……お主よ」

頭を撫でつつグリーンフシードを手に握らせて飛んでいこうとする。すると……

「私は来年大学生の高校三年生じゃ！ 小学生ではないし、おそらくじゃがお主の後輩でもないわ失敬な！」

「えっ」

怒った様子の彼女の言葉に、すぐに立ち去ろうと思っていたわたしの動きが止まった。

え？ 高校生？ 高校三年生？

つまりわたしよりも年上？ この子が？

「その様子じゃ信じておらぬの？ ほれ、これが目に入らぬか！」

そして学生手帳を突き付けてきた。

『星奈百恵』『神浜市立大付属高校三年』と確かに書いてあった。本人の顔写真付きで。

「理解したかの？ まったく、人を見た目で判断してはならんぞ。——ついてくるがよい」

そう言う彼女はまだ理解が追いついていないわたしの手を掴んで堂々と魔女の結界に入り込み、変身した。

戦いやすそう涼しそうな和服を着た彼女は、彼女どころかわたし

よりも大きい大剣を片手で担いでいる。

見た目からしてとんでもない重量物のはずなのに、それを軽々と持ててしまっている彼女の腕力はいったいどんなことになっているのだろう。

そんな彼女はその大剣を一振り。

すると、あつちにいたはずの使い魔たちのほとんどが消え去っていた。

……嘘。まだ近づいてもいないのに……直接切り捨てたわけでもないのに、ただの風だけで使い魔を……。

呆けていると、わたしのすぐ近くの柵から武器を持った使い魔が襲い掛かってきた。完全に無防備かつ碌に魔女と戦ってこなかったわたしは反応に遅れた。

あ、これ避けないと。と理解しつつも体が動かないわたしは使い魔に襲われそうになる。

「おっと」

でも、使い魔の攻撃は届かなかった。

その身を巨大な剣の一閃で両断されたのだから。背後に迫っていた他の使い魔たちも巻き込まれて倒されていく。

「呆然とするでないぞお主よ！ 来るぞ！」

使い魔が速攻で根こそぎ狩られたことに反応したらしい。結界の魔女が出てきた。

大きいし、周りに大量の使い魔を従えている。

あんまり魔女と戦ったことのないわたしでもわかるの。

この魔女、結構強い。

「これは随分放っておかれたんじやのう。安心せい。今から楽にしてやるからの」

でもそれからは……早かったの。

彼女が大剣を振り回すだけで使い魔は消え、魔女がなにかをするまでもなく横に一振り、そして返しに一振り。たったの二振りで魔女を倒してしまった。

呆気なく倒されて消えていく魔女から出てきたグリーンシードを

手にした途端、結界が消滅した。

「あなたは……一体」

「私か？ 私はの……」

変身を解除した彼女は身長わりに大きい胸を張りつつ、ドヤ顔でポーズを決める。

「星奈百恵という！ 見た目はこんなじゃが、18歳の高校生！

そして魔法少女歴五年のしがない傭兵じゃよ！」

見た目に反して異常に強い大ベテラン魔法少女、星奈先輩に連れられてわたしは近くの公園のベンチに座っていた。

ここに来る道中で、星奈先輩は自分のことを話してくれた。

星奈先輩は三年前から神浜で傭兵として活動している魔法少女で、力のない魔法少女の代行として魔女と戦い、グリーンシードを売る商売をしているらしい。

なんというか、金銭が発生している違いはあれど、わたしが目指していた憧れの存在と同じような活動をしている人だった。

「その……ごめんなさいなの。失礼なこと、言っちゃったの」

「よいよい、私も慣れてきているからの。怒りはしたが根には持たぬよ」

隣に座る先輩は柔らかく笑ってわたしの謝罪を受け入れてくれた。

魔法少女歴五年なんていうとんでもない経歴を持つ彼女にとって、さっきのわたしの言動は物凄い侮辱行為だったと思うけれど、本当に気にしていないらしい。あっさりと流してくれた。

「して、お主はどうして私にグリーンシードを与えようとしたのかの？」

「え……その。ごめんなさい。先輩が弱い魔法少女に見えて、危ないから助けようと思っただけなの」

「なるほどの。まあ、認めたくはないがこんな珍竹林ちんちくりんな見た目じゃ、そう見えてしまうのも仕方ないのう」

嘆息しつつ「じゃがのう」と言葉を続けた。

「言ってはなんじゃが、お主はあまり強い魔法少女ではあるまい？」

「というか新人じゃろう？」

「……やっぱり見抜かれていたの。」

五年も魔法少女をやっている、色んな魔法少女たちに雇われている大先輩だ。

少し見ただけで戦える魔法少女かそうでないかを見分けられる目を持つていても不思議じゃなかった。

「お主は偉いのう。そのグリーンフィードひとつ調達するのにも苦労したじやろうに、それを自分よりも弱きもののために無償で提供しようとする。とつても頑張り屋さんで優しい子じや。じやが、もう少し自分を大切にせい。それでは体がもたぬぞ」

褒めてくれたつも、わたしを心配してくれている星奈先輩。……違うと叫びたかった。

自分の傭兵としての活動を語る星奈先輩は当たり前前みたいな口調だったけど、どこか誇らしそうだった。忙しいとか、問題も多いとか、小言を口にしていただけけど決して嫌そうじゃなかった。

星奈先輩は自分の力に絶対の自信を持っていて、そして出来ると確信している。

だからこそ傭兵なんていう常に危険と隣り合わせで、ハイリスクローリターンで、明らかに星奈先輩の負担が大きい仕事なんてしている。そう思えるの。

それに比べてわたしは……。

「星奈、先輩」

「む？ なんじや？」

「わたしはそんな、褒められるどころか心配される価値もないの」  
確かにわたしは弱い魔法少女のためにグリーンフィードを融通している。

でもその方法は、本当の目的は目の前にいる小さいけれど大きな先輩と比較するのも烏滸がましい。

「これは……このグリーンフィードは、わたしのじゃないの」

わたしは全てを話した。

本当はこのグリーンフィードは自分のものではなく、他の魔法少女か

ら盗み出したものであること。

そして弱そうな魔法少女たちに配っていたのは、魔女と戦うのが怖くて、盗み出すことでしか生き延びる術がなかった自分の罪の意識から目をそらすためだということを、全部話した。

いつもわたしの漫画を見てもらっている厳アリナ・グレしくも優しい先輩にすら言えなかったことを、わたしは話していた。

あまりにも眩しかったから。

わたしが本当に目指しているものをそのまま体現したかのようなこの先輩が眩しくて、そしてそんな尊敬できる人に嘘を吐きたくないと思ったから、わたしは話した。

星奈先輩は「そうか」と眩くと、右腕を上げる。

……きつと失望された。殴られる。

あんな大きな剣を自在に操っていたその腕で殴られたらどれだけ痛いのだろうか。でもそれが今まで、卑怯なわたしがやってきたことに対する贖罪になるのなら受け入れるの。

でもやっぱり怖いから、思わず目を瞑る。

「よく、勇気を出して本当のことを話してくれたのう。お主は偉いのう」

殴られる覚悟を決めていた私の耳に届いたのは、不思議なことに褒め言葉だった。

そして頭を感じるの痛みではなく、心地よい快感だった。

目を開くと、そこにいたのは……優しい青い瞳で笑顔のまま、わたしの頭を撫でる先輩だった。

「え、あ……怒らないの？」

「？ そのグリーンフィードの持ち主が怒るのならわかるが、なぜ私が怒る必要があるのじゃ？」

きよとんと不思議そうな顔で星奈先輩はあつけらかんと答えた。

そ、それはそうかもだけど……。でもそれでもわたしを褒めるのはおかしい。

どう考えてもわたしが全部悪いのに、どうして褒めてくれるの？

「むしろ私が謝るべきであろう。すまなかったのう。もう少し私が有

名であれば、お主にこのようなことをさせずに済んだかもしれぬのの」

アホ毛を萎らせつつ本当に申し訳なきように星奈さんが言う。

な、なんでこのひとに謝られているのわたしは……！　これはいくらなんでもおかしすぎるの！

口を開こうとすると、星奈先輩が左手で制してくる。

喋るな、という意味であることが分かって口を閉ざした。

「本当はの。そのグリーンフィードがお主のものでないことは薄々勘付いてはいたのじゃ。どんなに優しい子でも、余裕がなければ他人を優先することなんてできないからの。じゃから、なにか別の手段でそれを手に入れたのではないか。そう思ったのじゃよ」

……最初から、わたしのことを疑っていたということだった。

「じゃがの、話してみて分かった。お主は決して悪い子じゃないの。やり方は良くないが、そうしなければお主が生きられない以上、仕方のないことであろう？　自分を否定するでない。それに曲がりなりにもお主がやろうとしてきたことは決して悪いことではあるまい？」  
そして、紡がれてくる言葉は全部わたしを肯定してくれる言葉だった。

怒ったり呆れたりするどころか、星奈先輩はわたしを全て受け入れてくれている。全部理解した上で、わたしを認めてくれていた。

「そのグリーンフィードを本来の持ち主の元へ返しに行こう。私も一緒に謝ろう。一緒に怒られよう。じゃから、もう過去を清算しようではないか。やり直そうではないか。つらかったであろう？　お主は優しくいい子なんじゃからの」

……もう、我慢の限界だった。

ずっとずっと、口を裂けても言えなかったわたしの心の内を癒してくれた星奈先輩の言葉の力は絶大で、そしてとつても優しくかった。

「ごめんなさい……なの」

情けなく、わたしの目から熱いものが流れる。

本当は流しちゃいけないのだろうけど、こらえないといけないのだろうけど、それでもどうしても流れていってしまう。



「これこれ、それは私に言う言葉ではないであろう？　もっと、他にやるべきことがあるのではないかの？」

……わかっている。

でも、どうしても謝りたかった。この人じゃない……今まで自分が盗んだグリーンフシードの持ち主たちに。だから最初に、謝罪の言葉が出てきたの。

そして今、わたしがやるべきことは――

「ありがとうございます……ごいいます、なの」

「うむ」

感謝と――

「わたし……ちゃんと謝るの。迷惑かけちゃった人みんなに謝って、一からやり直すの」

自分がやるべきことをしつかりと言葉にすること、なの。

「うむ、よく言えたのじゃ。お主は偉いのう。落ち着くまでこうしていてやるからの。存分に溜め込んでいたものを流すとよい。もっと甘えてもよいのじゃ」

星奈先輩はどこまでも、わたしを受け入れてくれた。

話し方や雰囲気からして、わたしの大好きなおばあちゃんみたいだったからだろうか。

わたしは星奈先輩の言葉に甘えて……しばらく胸を借りた。

それから少しして、わたしは盗んだグリーンフシードを返した。

盗まれた魔法少女は新しいグリーンフシードを求めて、別の魔女と交戦している最中だった。魔女と間合いを取りつつ魔法で作った矢を弓で連射している。

いつもの戦い方をしているけど、動きが鈍くなっていたの。でもソウルジエムが濁ってしまっているせいだった。

慌てて乱入したわたしはすぐにグリーンフシードで彼女のソウルジエムを綺麗にさせて回復させ、そのまま一緒に魔女を倒した。

もしかしたら、このままわたしが来なかったら彼女は死んでしまっ

ていたかもしれないの。

そのあとにしつかり本人と向き合つて謝った。

星奈先輩も一緒に謝ろうとしてくれていたけど、これはあくまでもわたしの問題だったし、星奈先輩を盾にするようなことはしたくなかった。

だから遠くから見守つてもらおうようにだけお願いした。

「まーうん。結果的に無事だったし、いいよ」

私も弱つちいときは誰かから盗んでやろうかとか本気で考えたことあるからなあ、と笑つて許してくれた。

もう少しで命が危なかつたのに、なんで笑つていられるのだろうか。

「強くなったのう、お主よ」

「あ、百恵さん！」

わたしが謝り、そして許してくれた様子を見てやってきた星奈先輩が相手の魔法少女とにこやかに話をしている。

知り合いだつたみたいなの。

「久し振りに会つて話せて嬉しかったです、百恵さん」

「私は呼べばいつでも来てやれるぞ？」

「あはは、私はもう大丈夫です。それにもっと百恵さんを必要としている人が他にもいるでしょう？」

「そう言われてしまつてはなんにも言えぬのう。じゃが困つたことになつたらいつでも呼ぶのじゃぞ？」

……なんというか。

そんなに年が離れていないはずなのに孫とおばあちゃんみたいな感じの会話をしているの。

そのあと彼女は「気にしてないし、もうやらないならいーよ」と言つて去つていった。

さっきの魔女との戦いでグリーンフシードを手に入れていたのにまた次の魔女を探しに行くらしい。

「あやつもの、お主と同じ元は魔女に恐怖を抱いて逃げ出し、私を頼りにしていた弱い魔法少女じゃつたのじゃ」

信じられないの。

さっきの戦いは消耗していたから後れを取っていたけど、最初の戦いでは余裕を持って魔女を倒していたし、あんな風に笑いながら人を許すことができるほど強い人が弱かったなんて……。

「じゃがの、今は本当に立派になった」

立ち去った彼女が走っていた方向を、星奈先輩は誇らしそうに見つめていた。

なんでも彼女は三年前、星奈先輩が傭兵として活動を始めた時の最初のお客様みただったの。

でもしばらくして彼女の方から戦い方を教えてほしいと頼み込まれ、バツクに付き、フォローを入れつつ一人前の魔法少女になるまで見守り続けたらしい。

そういえば星奈先輩は傭兵として活動しつつも、本人が望むなら自立を促せるように指導もしていると言っていたの。

そっちはあんまり上手く行っていないと言っていたけど……さっきの彼女を見たら嘘なんじゃないかって思う。

だって昔は弱かったなんて思えないほど強かったし、だからこそグリーフシードを盗む獲物にしようと思ったのだから。

……わたしも。

「星奈先輩」

「む、なんじゃ？」

「わたしも……強くなれる、かな」

この先輩について行けば……わたしの憧れに近づけるかもしれない。

直感でそう思えたわたしは、星奈先輩に質問した。

今のわたしは弱い。

経験も足りていないし、魔女と戦う覚悟もそんなにできていない。でも、それでもこの思いは、きりんちゃんのようにいろんな人を笑顔にしたいっていう思いは本当だから。

弱い魔法少女の力になりたいって思う気持ちは、本物だから。

「強くなれるとも、お主は」

そして、わたしの頭を撫でながら返ってきた言葉は、わたしが一番欲しかった、強い『力』を感じさせる言葉だった。

あれからわたしはグリーンフシードを盗んだすべての魔法少女に謝って、星奈百恵先輩へ弟子入りをした。

部活動もあつて、不定期になつちやうし、時間も遅くなつちやうけどそれでも先生……百恵先輩は受け入れてくれた。

最初は魔女との戦いになれるために仕事と関係なく、プライベートでも一緒に魔女と戦ってくれた。

おかげで一月でわたしは魔女と戦うことに大きな恐怖を抱くことはなくなつたの。

とりあえずまともに戦えるようになったわたしは、今度は余裕を持って戦えるように先生から戦い方についてのレクチャーを受ける。全部実戦ありきのスパルタで厳しかったけど、先生が見てくれているからか、不思議とそこまで怖くなかった。

そして最後の試練である魔女退治を経て、わたしは『一人前』と先生から評価された。

もうひとりで充分に戦えると先生に認められたし、わたし自身も自信をもって魔法少女をやつていける。

そう思えるほど、濃密な時間だった。

そして今は……わたしも先生に倣って『傭兵』として仕事ができるように、手解きを受けている。

これが思つた以上に大変だったの。

ひとりで戦うだけならまだ楽だった。周りのことを気にせず敵のことだけを考えればよかつたから。

でも、傭兵として他の魔法少女たちを引き連れて戦うとなると……話が全然違つたの。

依頼者の安全性を第一に確認し、それを踏まえた上で立ち回らないといけない。それがかなり難しいことだった。

依頼者は最初のわたし同様、弱くて魔女に怯える魔法少女ばかり。

まともに魔女どころか、使い魔とすら戦うことができない。

そんな彼女たちを庇いながら戦う先生は、本当に格好良かったの。安定した戦い方にそれを後押しする破壊力、俊敏さを併せ持つ大ベテランは格が違った。

依頼者から離れたとしても常に依頼者を気遣い、使い魔に襲われたとしてもすぐに対応して一切のケガを依頼者に負わせない。

「安心するがよい。私が守り切ってやるからの」

そして歪んでいたわたしを助けてくれた、包み込むように大きくて頼りになる言葉で、先生は依頼者たちを安心させていた。

恐怖の対象である魔女でさえも、まるで紙きれのようにいとも容易く斬り裂き仕事を完了させてしまう。

ずっと思っていたことだけど、やっぱりあの力は反則だと思うの。

「なるほどの。お主はそれで魔法少女になったのか」

ある日の仕事中の会話。

魔女を探しながら一見さんと話をしていた先生は、その人の魔法少女になった理由を聞いていたの。

その人はどうしても欲しいものがあって、魔法少女になったことで願いが叶って手に入れることができた。でも、魔女との戦いを代償にしてまで欲しいものではなかったと気が付いて後悔して泣いていたの。

先生曰く、ある程度の覚悟を持った人や、そうしないと生きていけないほどの危機に瀕した人、そして元から強い精神力を持った人の大半は、魔法少女になったその時からひとりで戦っていけるらしいの。

でも、なんでも願いが叶うというキユウベえの言葉で衝動的に魔法少女になった人は、いきなりひとりで戦うことは難しいらしい。わたしもどちらかというと後者にあたるから気持ちはよくわかるの。

ただそれでも、おかげでおばあちゃんは元気になったし、願い自体はそこまで後悔していなかった。

でも……この人は違った。

自分の願い事さえ、後悔してしまっていたの。

「魔法少女の知り合いがいたんです。でも、その子も、私の願い事を聞

いたらくだらないって……」

……正直に、素直に言うのと、わたしもその人が自分の願い事を語った時に同じことを思ったの。

なにもそこまでして手に入れることはなかっただろうと、もつと別の願い事があっただろうと、良くないことだと思っただけでも、そう思っただけなの。

でも。

「お主の願いはくだらなくなんてないぞ？」

先生は違ったの。

即座に、その人の願いがくだらなくないと断言したの。

「たとえばそれがどんなに些細で、小さく、他人から見てもどうでもいいことや余計なことであつたとしても。」

衝動的で一時凌ぎな願いであつたとしても。

お主にとって、それはとても大切に重要なことであつたのであろう？

ならばなぜ、それをお主が後悔する必要があるのじゃ？」

頭の中が真っ白になるほどの衝撃だつたの。

その言葉はわたしに向けられたものじゃない。

でも、そこに込められた力のある言葉はただ隣で話を聞いていただけにすぎないわたしの胸に深く突き刺さつた。

衝動的で一時凌ぎな願い。

それは、わたしの願いでもあつたのだから。

時々考えちやうことがあるの。

確かにわたしは病気で苦しんでいるおばあちゃんの病気を治した。

でも、もしおばあちゃんがまた別の病気を患ってしまったらどうなるのか。

もうわたしは魔法少女になってしまっている。もう奇跡は起こせない。

もつと違う願い事にすべきだつたのではないか、そう思っただけで、それは確かにあつた。

「自分の願いを、願つた自分を否定するでない。後悔なんてするでない。」

い。

人の大切な願いを馬鹿にするような、そんなくだらない連中の言葉など真に受けるでない」

歩くのをやめて、立ち止まり、その人を真正面から見つめる先生はただ笑っていた。

それは嘲るような皮肉めいた笑みでも、同情が含まれているような生暖かい笑みでもない。

ただただ、全てを肯定して優しく包んでくれるかのような……あの時、間違ったことをしていた歪んだわたしを正してくれた時と同じ穏やかな笑顔だった。

「くさい言い回しになってしまっがの。魔法少女は『願い』を力に変えるのじゃ。

自分が願ったことがそのまま自分の魔法になるのじゃ。

じゃから、自分の願いに誇りを持つのはじゃ。胸を張って言い放つのはじゃ。

それでも馬鹿にされて、自信がなくなってしまうのであれば私を頼るのじゃ。

少なくとも私はお主を、お主の願いを馬鹿になどせんからの」

改めて大きな人だとわたしは思った。

やつぱりこの人が、わたしの憧れで、目指すべき人だと思った。

あんまり体力はなかったけど、自分なりのやり方を見つけて、この人のようにわたしのこの手でたくさんの人を、そしてたくさん魔法少女を助けたいと思うことができたの。

そして、そんな出来事から四ヶ月が経ち、10月に差し掛かったある日。

わたしは先生から呼び出しを受けた。

「お主を『傭兵』と正式に認めようと思う」

いきなりだった。

わたしを正式に傭兵として起用する話は、実は9月の始めあたりか

ら検討されていたらしい。

でもいきなり起用するわけにもいかず、先生とみたままさんがこの日のために神浜各所に根回しをしてくれていたとのこと。

「実は随分前から、かりんちゃんを雇いたいつていう魔法少女の子がいたのよ?」

「うむ。私の目から見ても、お主はもう一人前の魔法少女じゃ。ならばその声にも応えねばなるまいよ」

そこからの展開は早かった。

「来たわよ、百恵」

最初に来たのは西のリーダーの七海やちよさん。

やちよさんは一瞬だけわたしを見て薄く笑って挨拶してくれた後、先生と談笑を始めた。

同じ学校の同じクラスで長い付き合いになるって聞いていたけど、それ以上に親しそうだったの。

「おまえの方から連絡するなんて珍しいと思いきやだ。驚いたぞいきなりで」

次に来たのは中央の相談役の都ひなのさん。

先生を見るなりとびっきりの笑顔を浮かべていた。そして先生は悔しそうにしつつも胸を張った。すると今度はひなのさんが悔しそうに顔を歪めているの。

「?」

「大丈夫よ。いつものやりとりだから」

正直よくわからないけど、やちよさんが言うにはふたりの仲はさぶる良好らしい。……深く考えないことにしたの。

ひなのさんはわたしに軽く挨拶した後、調整をするためにみたままさんのところに行っちゃったの。

「久しいな星奈。それで、新しい『傭兵』とは君か?」

そして最後に現れたのは東のカリスマ、和泉十七夜さん。

先生とは手短に挨拶をすませて、すぐにわたしの方に来た。

「は、はいなの。今日は頑張ります、なの!」

「うむ、そうか。……期待しているぞ」



それだけ言って椅子に腰かける。

……正直、今の今まで冷静でいられたことを褒めてほしいと思ったの。

先生から独立の話を聞かされて一時間もしないうちにこんな展開になったのに気絶しなかったわたしは多分凄いと思うの。

まさか、神浜の有名な魔法少女六人のうちの五人が一齐にここに来るなんて。

なんでもみんな、わたしの『傭兵』としての採用試験の試験官として呼ばれたらしいの。先生に。

わたしのためだけにわざわざ時間を作ってまで来てくれたらしいの。

「頑張つてね、かりんちゃん。わたしも応援しているわ〜」

調整が終わったひなのさんとみたまさんが来て……私の『傭兵』採用試験が始まったの。

正直、まだ心が落ち着いていないけど、仕事は仕事なの。

大丈夫、ちゃんと教えられたことを自分のやり方で貫き通せば、認めてもらえるはずなの。

「先生……わたし頑張るの!」

「うむー。大丈夫じゃ、お主ならば合格できると信じておるからの」

試験は、わたしが仕事をして先生は後ろから見てくれるいつも通りの実戦形式だった。

さすがに有名人全員が固まって街を闊歩するわけにもいかないから、先生がわたしの仕事している姿を録画録音して試験終了後、調整屋でそれを見て判断するらしい。

最初のお仕事。

お客さんは初めて依頼を申し込んだみたく、緊張しているの。とりあえず挨拶して、魔法の結界が見つかるまでお話をするの。

えっと、こういう時は相手のことを聞かないで自分のことを積極的に話すの。そうしたら自然と向こうも話してくれるようになるから、そうなったら魔法少女としての自分の話をするの。

それで興味を持ってもらった話題を膨らませていけば……よかつ

た、緊張がいい感じにとけているの。

おっと、魔女の結界、見つけたの。

全員変身して状態を確認するの。

わたしと先生は問題なし。お客さんは……ちよつと濁っているけど、ほとんど問題ないレベル。だったら予備のグリーンシードは使わなくて大丈夫なの。

わたしが先導して使い魔たちを倒して……お客さんから出来るだけ離れないようにしなきゃなの。不安になっちゃうから。

向かってくる使い魔たちを全部倒したら……来たの！ この結界の魔女が！

とにかく大切なのはお客さんの無事なの。

この魔女は遠距離攻撃が苦手だから、使い魔に気を付けつつ、ある程度離れながら攻撃していけば安全に倒すことができるの。

「大丈夫なの。すぐに終わるの」

不安にさせないように、強い言葉を使う。……うん、出来ていると思うの。

先生の「大丈夫」ほどじゃないけど、わたしだって強くなっているんだから！ 先生に独り立ちをしてもいいって認められているんだから！

自信を持とう。自分に、自分の魔法に！

「ゆくぞ……これが我が全魔力の結晶なり！」

なんて言っているけど、実際は使い魔たちから盗み取った魔力を集約しているだけなの。

さすがに魔女の魔力を盗むのは大変だけど、使い魔のものなら体に入れない限りは問題なく奪えるの。

これで使い魔たちを封じ込めて……本命の魔女だけに集中するの！

「これが、ハロウィンが生んだ力なのだ！」

トリックアンドトリート。

直訳で、お菓子をもらうし、いたずらもするっていう意味なの。

魔力を奪って命まで貰うんだから、これほどぴったりの決めセリフ

はないの！

「……もう、私が……くても大……じゃの」

丁度攻撃が魔女に当たる直前で先生の声が聞こえた。  
でも、なんでかな。

はつきりとは聞こえなかったけど、先生のその声は今まで聞いたことがないトーンだったの。寂しそうな、でも安心しているような……そんな声だったの。

振り返って先生の顔が見たかったけど今は仕事中。しつかり魔女を倒すまでは余所見しちやいけないの。だから、わたしは魔女から目を離さない。

わたしが作ったお菓子の形をした魔力弾が魔女に一斉に襲い掛かる。

わたしの奥義のひとつをもらに受けた魔女は……そのまま力尽きて结界ごと消えていったの。

そして残ったのは魔女の卵——グリーンフィードだった。  
「次はお菓子をくれたら許すのだ」

決まったの！

さて、あとはこれをお客さんに渡して、代金をもらって仕事完了なの！

「あ、あの」

「ん？」

「ありがとうございます！ あ、またお願いしていいですか？」

「もちろんなの！ 『傭兵』マジカルかりんにお任せなの！」

あとのもう一件も同じようにこなして、試験は終了したの。

最初は見られてると思って緊張していたけど、不思議とお客さんを見たらスイッチが入っちゃって試験のことを忘れてたの。……あれ！?

それじゃわたし……。な、なんか変なこと……言っていないよね？  
言っていないと信じたいの！

「さて、結論は出たかの？ 私の弟子は合格か、不合格か、順番に発表してくれるかの？」

調整屋に戻って控え室で頭を抱えていると、試験結果が出たらしく先生たちがやってきたの。

席の並び順的にやちよさん、ひなのさん、十七夜さん、みたまさん、そして先生の順番らしいの。

合格条件は満場一致であること。

つまり誰かひとりでも不合格を出したらダメなの。

「まずは私からね。ズバリ言うわ……合格よ。ハロウィンが生んだ魔法少女さん？」

合格にしてくれたことは嬉しいけどわああなの！

やっぱり言っているのわたし！いつものノリでやっちゃっているのおおっ!!

普段は別に聞かれてもいいし、むしろ聞いてほしいけど、こんな凄い人たちが真剣に見てくれている中でこのセリフを聞かれるのはさすがに恥ずかしいの！

「次はアタシだな。合格だよ、さすがは百恵が認めた逸材だ。だがさすがに魔女に菓子を強請るのはどうかと思うぞ？ 碌なものをくれなさそうだ」

「うむ、自分も合格を言い渡そう。にしてもハロウィンとは凄い力を秘めているのだな。どれ、今度のハロウィンは自分も気合を入れてみるか」

「十七夜なら吸血鬼なんて似合うんじゃない？ あ、わたしも合格よ〜マジカルかりんちゃん♪」

次々と合格をくれるけどそれを喜んでいる場合じゃないの！

あああ……やり直したいの。

仕事はちゃんとできていたはずなのに……なんか黒歴史なの。

「かりん」

聞きなれている声だけど、聞きなれていない言葉が聞こえてきて、偉い人たちの意地悪に悶絶していたわたしは一気に現実を引き戻された。

頭を抱えていたわたしが前を向くと、すぐそこに先生が立っていた。

初めてなの。先生に『お主』じゃなくて、名前で呼ばれたのは。

「初めて出会った時にお主が私に聞いたこと、そして私が答えたこと。覚えておるかの？」

「……はい」

忘れるわけがないの。

あの言葉があつたから、先生が出来るって言うてくれたから、諦めそうになっても励ましてくれる先生がいたからここまでこれたんだから。

「強くなったのう」

そう言つて、先生はわたしに抱きついてきたの。

そして……あの時と同じように、優しくわたしの頭を撫でてくれて……。

「合格じゃ。おめでどう。かりんよ、お主は私の誇りじゃよ」

一気に顔が熱くなった。呼吸が止まりそうなほど胸が締め付けられた。

どうしよう。こんなに。こんなに嬉しいと思つたこと……生まれ初めて初めてなの。

最初はただの弱虫の卑怯者だった。

それを隠すために自分に言い訳をし続けて……でも、そんな自分が嫌で嫌で仕方がなくて、歪み始めていた時に……この人に出会えた。

小さいけれど大きくて、まっすぐで、輝いていて、優しい、わたしの憧れの先生——『大傭兵』星奈百恵さん。

そんな……そんな人に、認めてもらえた。おめでどうつて祝われた。

そして……こんなわたしを「誇り」って言うてくれた。

「……ううっ。ぐすっ……」

ああ、もうダメだった。嬉しさが溢れて止まらないの。

不思議なの。嬉しいはずなのに、涙がこみあげてくるんだから。でも、言わないと。

泣いてばかりじゃなくて、はつきり声に出して言わないと。

「ぐすっ……せ、先生」

「なんじゃ?」

最初に言わないといけない言葉は――。

「ありがとうなの……」

「……うむ」

それで次に言うのは――

「わたし、もっともつと頑張つて、いっぱい人を、魔法少女を助けるの  
!」

「……うむ! よく、言えたのじゃ! お主は偉いのう!」

まんま、先生はあの時と同じ言葉をかけてくれた。

「まったく……こつちまで泣きそうになるからやめてもらえないかし  
ら?」

「冷やかしてやるなよ。だが……確かにこれはくるものがあるな」

「星奈は良い弟子を持ったものだな」

「おめでとうかりんちゃん♪ じゃあこれからはかりんちゃんの仕事  
の受付も始めるからね。忙しくなるわよ」

あの時は、弱かったあの時の私は、こんな日が来るなんて思っても  
いなかっただろうな。

でも、もう私はあの時の私じゃないの。

胸を張つて、堂々と自分のやりたいことをやるの。

そして……今、自分の力を活かしていきたい魔法少女の子たち  
に、伝えるの。

魔法少女って、こんなにキラキラした人たちがいるんだよって。

## RTAパート7 バイバイ、また明日

受験が終わって自由になったRTAはーじまーるよー。

今は3月、大学受験を終えて自由登校が解禁されたので時間が有り余っています。

傭兵業も基本的に夕方スタートなので好き放題に行動できます。

そして3月は第一イベントである団地イベントこと『バイバイ、また明日』が起こる月です。そして、絶対に成功させなければいけないイベントでもあります。

この『バイバイ、また明日』がクリアしていないと、最終イベントである第三のイベント『散花愁章』が発生しません。

そうなってしまうと神浜のやべーやつトップスリーの更紗帆奈を野放しにさせたまま本編に突入するというとんでもない事態が起こる(6敗)ので、なんとしてもクリアする必要があります。

クリア条件は団地組——がっくりしている姿がかわいい友達想いな伊吹れいら、極度の緊張症だけど度胸があつて頑張り屋の桑水<sup>くみ</sup>せい<sup>み</sup>か、その精神力の高さは百恵ちゃん以上の可能性の小動物である相野<sup>あいの</sup>みと——の三人全員がそれぞれ正規の手段でキュウベえと契約することです。

まずうちさあ……

うん (タメ口)

屋上……あんだけどお……

はえへへ

飛んでかない？

ああへへいいっすねへへ (屈託のない笑顔)

という12棟516号室の魔女さんとれいらのやり取りがあつて、ホイホイついて行ってしまったれいらは命綱なしのバンジージャンプを慣行。

それを見てしまったせいかキュウベえと契約してれいらの自札がなかったことになります。

そしてすれ違ってしまったせいかとの仲を元に戻すためにれいら

が契約。しかしその願いとは裏腹にせいかとれいらのすれ違いが悪化し、悲しんだみとが心を繋げる力が欲しいと契約。

ここまでやって団地イベントはクリアです。

12棟516号室の魔女？ そんなのどうせ百恵ちゃんの下振り  
で終わる雑魚なんですからどうでもいいんですよ（天下無双）。

ただ団地組にとっては充分強敵です。一歩間違えると誰かが犠牲  
になる可能性があります（3敗）ので注意が必要です。

ではどうやってこのイベントをクリアしていくのか。

これがまた厄介な問題でして、なんといつてもこのイベント、シナ  
リオ分岐型のイベントなのですよ。

なので途中で逸れてしまつてれいらやみとが魔法少女にならな  
かったり、そもそも投身自札が起こらずにせいか魔法少女になつて  
いないこともあります。

なのでクリアするためには、団地の様子を把握することが重要で  
す。

しかしながら百恵ちゃんは予知能力とかそんな便利な固有魔法を  
持っていない脳筋ですので、このままでは東の神浜大東団地に住んで  
おきながら最西端の神浜市立大附属学校に通っているちよつとよく  
わからない三人組の動向なんて把握することができません。

しかも現状はなにも情報がないので、百恵ちゃんには団地に行く  
という選択肢すらありません。イベントに介入するのは不可能です。

よつて、百恵ちゃんに情報をくれる協力者が必要になります。

……つて、お？

電話が来ました。発信元は……『常盤ななか』！

おまえのことが好きだったんだよ！

「お久しぶりです百恵さん」

組長オツスオツス！ 2月の会合以来つすね！

で、今日はどうしたんすか？

「大東団地の調査を依頼したいのです。そこに魔女が棲みついている  
ことを確認できたのですが……そこにお住いの魔法少女の方に釘を  
刺されてしまいました」



あ、いいっすよ（快諾）。

と、こんな感じで好感度が高いと組長が仕事を依頼するために百恵ちゃんに情報をくれるわけなんですな。

ななか様とはあれ以降も度々連絡を取り合っています。

『飛蝗』についての情報の共有のための会合が月に一回開かれていますし、不穏な雰囲気のある場所の調査の依頼も片手で数えられる程度とはいえ持ち掛けてくることがありました。

もちろん全て引き受けて結果を示してきましたので好感度もしっかり上げていきますので、どこか怪しい場所を見つけたら組長が百恵ちゃんに連絡をくれるように仕込むことができます。

ちなみにこうして連絡を取り合う中になっっているのにこの時期に連絡をくれなかった場合はこれらの投身自札が起こっていない証拠ですのでリセット案件でしたが、今回は一発でヒットしてくれているのでありがたいです。

ななか様、（情報提供）ありがとナス！ もちろん仕事は引き受けます！

「感謝します。百恵さんには無用かと思いますが、お気を付けてください」

情報とお金までくれて、そのうえで心配までしてくれるななか様。いいお客様やでえ。

「アザレアの時も連絡してくれよな。頼むよ。」

ということでも早速大東団地にイキますよ〜イキますよ〜イクイク……ヌツ！

「あ、あのね！ 他に意味はないんだよ……ただ、気になっちゃって……。もし、私が見たのがせいかなら……出来れば……理由を……教えてほしいなって……」

「やめてー！」

「わっー！」

「……せい……」

「……あー」

現着したら修羅場だった件。

これは……不審者騒動は終わった後じゃな。そして、それでも寂れた商店街の中に入っていくせいかを見たれいらが気になって理由を聞こうとしているところです。

あつぶえっ!? ギリギリセーフです!

このまま帰らせていたら、下手をするとキュウベえがれいらに接触せずに団地イベントが強制終了している可能性があります。

「せいかな……怒ってるの……?」

「お、怒ってないよ! ただ、私は……」

「みと、悪いのは私だから! ごめん……せいかな……」

おっと、ここで介入しましょうか。

理由はキュウベえにれいらとみとの存在を認知させるためです。百恵ちゃんは強力な魔法少女なので、呼んでいないから出てこないだけでほとんどの確率でキュウベえが近くにいます。

せいかなだけでなく、れいらやみとちゃんにも魔法少女の才能があるのでこれを機に契約を迫るべく接触してくるでしょう。

というわけで百恵ちゃんのダイナミックエントリーだぜ!

へい、君たち! どうしたんだい、そんなしけた顔しちやってさ!

「えっ……だ、誰?」

「私たちと同じ制服……もしかして星奈百恵先輩!? あの有名な!」

ふう、ちゃんと制服着てきた甲斐があったぜ。

中等部と高等部に分かれているとはいえ同じ学校に通っていますので、向こうが認知している可能性を考慮していましたがアタリでした。

百恵ちゃんかなり特徴的な見た目をしていますからね。背が低すぎんよ。

話のとっかかりができましたが、いきなり話しかけられて驚いた様子の子の三人組。

五歳も離れている先輩に話しかけられてまだ少し緊張しているみたいです。じゃあちやんとご挨拶しないとね。

神戸市立大附属学校の高等部三年生の星奈百恵。……その静かな魔法少女の女が語った……よろしくね。

「え、えっと……相野みとです。中等部一年生です」

「お、同じく一年の伊吹れいらです」

「……………」

せいちゃんだけが凄い顔して見つめてきますね。

彼女は極度の緊張症なので、好感度が一定以上でないとうとうして固まってしまつて会話が成立しません。

おまえ初めましてだな？ 力抜けよ。と言いつつ念の為にせいちゃんの指輪を確認します。オツケーです確認が取れました。

そしてこちらも指輪をちらつと見せておきます。

「……………」 桑水、せいかです……………よろしく、お願いします」

はい、これで知らない人じゃなくなったよ。不審者じゃないよ。

今日はね、百恵ちゃんの凄い……………大切な友達に……………会いに来たので（大嘘）。

それで三人は、どういう集まりなんだっけ？

友達？ あ、そつかあ（痴呆）。それじゃあ百恵ちゃんに事の経緯を教えてくださいませんか？ もちろん無理して話さなくてもいいよ。

え？ 大したことないから大丈夫だつて？ そう……………（無関心）。

じゃあ俺、情報貰つて帰るから（棒読み）。

今日のところはこれで退散します。これでほぼ間違いなくイベントが行われますからね。白タヌキ、見ているかあ？ 魔法少女の卵がいるぞ？

そしてまた来ます。調査終了ということ放つておいてもいいのですが、この三人はしっかり好感度を上げておくと便利なので、調査という名目でこの団地にあと二日通い続けてイベントの進捗を確認しつつ、好感度を上げていきます。

ということではいつもの作業です。

調整屋に行つて仕事がないかを確認して、仕事があるなら仕事。ないなら家事をしてステータスアップです。

次に行くのは明後日です。明日は行きません。重要なのは明後日

と明々後日です。  
じゃあ、流しますね。

コーンバーンはー！

おはようございますじゃないのかだつて？　だつてもう夕方ですもん、こんばんはの時間ダルルオ!?

あ、こんな時間までなにをしていたかというのと、神浜大東団地について調べていました。

スマホで簡単な情報を入手し、図書館に行って過去の新聞を読み漁っていました。

え？　現地調査する前にやるべきことじゃないか？　いいんですよ結果的に不安要素を消せたんですから！

さておかげさまで情報を仕入れ終わりました。

あとはれいらから得られる情報を基に調べていけば12棟516号室の魔女の所に辿り着けます。準備万端です。

じゃあ団地に乗り込めー！　悪い魔女はお仕置きだどく。

どこだあ〜？　探すぞおく。

おつ、ソウルジエムに反応あります。

この方向は……商店街ですね。シャッターが閉まり切っています。使い魔が結界から出ていないということは結界内で誰かと戦っています。

良かった、これはイベントが発生していますね。

このイベントはれいらとせいかが魔法少女の真実の一片を知るときつかけとなる超重要イベントです。魔法少女になって数日で気がつくとかなんてハードで残酷なシナリオなんですしょう。

これは絶対に成功させないといけませんので、かわいそうです。が、難易度ハードですと右腕防御が間に合わずに胸元のソウルジエムに攻撃が直撃し、そのままフェードアウトしてしまう恐れがあります。

百恵ちゃんは傭兵という立場上、失敗が許されないので干渉不可能

のお祈りイベントです。

さあ、ここで初めてアイツに頼るとしましょう。

来いよ、白いナマモノ！ 感情なんか捨ててかかってこい！

「キミからボクに話しかけるなんて、数年ぶりじゃないか。どういう用件だい？」

ほらやっぱりました。

結界の中で戦っているやついんだろ？ そいつは大丈夫なのか？

「今ふたりの魔法少女が使い魔と戦っているよ。ふたりとも新人だし、苦戦しているみたいだけどね。でももうすぐ終わるんじゃないかな」

こいつはこういうところで便利です。

嘘を吐かないので、結界内の戦いの様子を教えてくださいます。まあ、もう少ししたら締め出されるんですけどね。

……おお、結界が消えました。使い魔が全滅したみたいですね。

出てきたのは浮かない表情をしたせいかと……れいら！

生きてる〜！（れいらが無事に）帰ってこれたよ〜アーツハツハツハツハツハ！ 帰ってこれた〜ハツハツハツハツハ！ 生きてる〜！ 帰ってこれたよハツハツ生きてる〜！ ハツハツ！ あ〜生きてるよ〜！

ハア〜〜〜（クソデカ溜め息）。

よし……落ち着きました。

さあ、キュウベえと一緒にふたりの元に向かしましょう。彼女たちもキュウベえに用がありますしね！

「キュウベえに……星奈先輩!?!」

バリバリ警戒している様子のおふたり。（好感度が高くないのが）見える見える。

おら、キュウベえてめえに用があるんだってよ。彼女たちの体になにをしたか説明しろよ、あくしろよ。QB、早くしろ〜→

「……どういふことなの……?」

「ソウルジェムが……私たちの……命……?」

「そうだよ、むしろ便利だろう？ ソウルジェムさえ砕かれな限り

キミたちは無敵だよ。弱点だらけの人体よりもよほど戦いでは有利じゃないか？」

こいつはいつも通りの平常運転だぜ。

はい、君もう帰っていいよ！　というか帰れ帰れ！

「星奈百恵、キミはこの運命を受け入れたうえで、最高の戦闘能力を願った極めて珍しいタイプの魔法少女だ。キミはボクたちの考えに共感してくれているんじゃないのかい？」

なにいつてだこいつ。日本語で……いや、せめて地球の言語で喋っていたきたいですね。

ほら、おまえがいると面倒だからとつとどつか行くんだよ。塩撒いとけ塩。ぺっぺっ！

「まったくわけがわからないよ」

ふう、ようやく邪魔者が消えました。

さてさてふたりの好感度を上げましょうね。

「星奈先輩……その、私たちは本当に……」

そうだよ（肯定）。

おまえらはもうここ（魔法少女の運命）から出られないんだよ！

「ねえ……せいか……せいか……私たちの体……」

「……れいら……」

「私たちは……もう……」

「……ご、ごめん……ごめん、れいらー！」

おっとあまりのショックにせいかさん渾身の全速前進DA！（社長）

あつ、おい待てい（江戸っ子）。まだ帰ってもらおうと困るので呼び止めます。それでも聞かない場合は回り込んで阻止です。速度100オーバーだから捕まえることなんて余裕余裕。

このままふたりを帰した場合、この後かかってくる覚悟を決めたみとちゃんの電話を拒否したり、部屋の中に引き籠ったりしてバッドエンドに直行してしまう可能性があります。

なのでここである程度元気を出させて少しでもみとちゃんの電話に応じるようにしてあげる必要があります。

ちなみにみとちゃんはこうなってしまった場合は放置していてもほぼ確定で正史通りの願い事を叶えて魔法少女になります。ソウルジエムの秘密を知っても勝手に乗り越えます。手間のかからないええ子や。《精神》100のビツクリステータスは伊達じゃねえぜ。

「星奈先輩……どいてください」

(どか) ないです。今から一緒にOHANASHIするんだよ。

友達に会いに来たと言ったな、あれは嘘だ。本当は知り合いの魔法少女に頼まれて魔女の調査しに来たんだよ。嘘じゃないよ。それに百恵ちゃん、この業界の有名人だよ。

「せいか、星奈先輩の言ってること、多分本当だと思うよ」

お、れいらちゃんがフオローを入れてくれました。

多分昨日契約する際にキュウベえから聞きましたね。たまにはいい仕事してくれるじゃないか、あの白いナマモノ。

さて本題です。魔法少女の秘密の冒頭を聞かされてショックを受けているふたりに、先輩魔法少女として前を向くように熱い言葉を投げかけてあげましょう。

過去のことを思っちゃダメだよ。なんであんなことしたんだろ……って怒りに変わってくるから。未来のことと思っちゃダメ。大丈夫かな、あはあくん。不安になってくるでしょ？ ならば、一所懸命、一つの所に命を懸ける！ そうだ！ 今ここを生きていけば、みんなイキイキするぞ！

「……れいら」

「せいか……」

「……気持ちの整理、しつかりつけるから。頭冷やすから……」  
「うん……そうだね。今日はもう帰ろう」

ふう、これで多少とはいえ余裕を取り戻してくれましたね。

「星奈先輩、その……ありがとうございます。おかげで少し落ち着けました」

ええんやで？ 誰だってあんなこと知ったら恐怖でブルっちゃうよ。

というわけでおふたりさん、百恵ちゃん仕事に戻るからじゃあな！

気を付けて帰れよ！ それから大事な友達からの電話、無視すんじゃないぞ！

さて、ここからはみとちゃんがふたりを屋上に呼び出すまで暇潰し……ああ、違う。団地に棲みついていてる魔法の捜索をしましょう。

ななか様からの依頼ですからね。仕事しなきゃ（使命感）。

じゃあみとちゃんがふたりを呼び出すまで、倍速です。

「ふいっ……ふたりとも、もう大丈夫？」

「……うん」

「大丈夫……」

「これで仲直り……できたかな？」

「みと！ ありがとう！」

「ありがとう！」

偶然屋上を調べていたら（すつとぼけ）感動のワンシーンに遭遇した件。

ヨシ！（現場猫） 無事にイベント終了です！ これでもう不安要素はありません。

「おわっ！ 痛い痛い！ 抱きしめる力が凄いよっ！」

「……でも……みと」

「そう……契約させちゃって……」

「だから……いーんだって！ ふたりと一緒になら怖くないよ……」

私、三人でいるときが一番楽しいんだから！ ふたりが大好きなんだよ」

やっぱ……団地組の……友情を……最高やな！

みとちゃんマジ主人公適正高すぎイ！ みとちゃんを大事に育てていた先駆者兄貴もいらっしやいましたが納得のメンタルの高さです。

魔法少女の秘密を知っている魔法少女はシステム上強めに育てることができるので、この菩薩メンタルに戦闘技術が追い付けばなるほど、最強クラスの魔法少女が誕生するわけですな！ 今回のチャート



ではやりませんが、機会があるなら手解きしましょう。全員新人なので伸びしろがあります。

「でも、キュウベえも知らないみたいで……。ただ、れいらが知っているって！」

おっと、この話題が出てきました。ここが頃合いですね。百恵ちゃんのスタイリツシユエントリーです。

話は聞かせてもらった！ 星奈百恵、助太刀に参る！

「つてうわあ、ほ、星奈先輩!？」

「み、見てたんですか!？」

そんなことはどうでもいいんですよ。

ほら、れいら、魔女の居場所を思い出すんだよ、自分の見たことを辿るんだよ、あくしろよ。

「私が……見た……。……あーっ……。……そ、そうかも……。……！」

はい、確定演出です。こうなったら無事に記憶を辿って魔女探しが始まります。

思い出せなかった場合はどうするのかって？ お代わりだ！（2  
敗）

好感度的にみとちゃんは怪しいですがれいらとせいかは夕方のやり取りである程度上がっていますし、百恵ちゃんの事情も知っています。しかも百恵ちゃんが大ベテランということも知っていますので、同行することを許してくれます。

じゃけん明日12棟516号室行きましょうね。

こーんばーんはー！

今日は学校からスタート、そして放課後に団地組と落ち合っただけのまま一緒に調査です。

不審者プレイをしていないので百恵ちゃんは団地の情報や問題のPR動画については知っていますが、それ以外はわかりません。なのでれいらの記憶を頼りにするしかないわけですな。

「あ、星奈先輩だー！」

「今日はよろしくお願いします」

「お願いします」

オツスオツス、昨日ぶりっすね！ ささっ、行きましようか。

え？ 初めての魔女戦で緊張するって？ 大丈夫だって安心しろよ。ヘーキヘーキ、ヘーキだから。戦闘は百恵ちゃんに任せておきなさい。

さあ、団地に到着しました。オツス、(ガイド) お願いしまーす。

まずは12棟5階にある案内図の確認です。当然『516号室』なんてありません。ここで5階の搜索を打ち切って屋上に行くとゲームオーバーです。

「さっきから何か気になって……」

そうだよ(便乗)。みとちゃんに便乗しておきます。

すると確定でこの階を調べてから屋上に行くようにれいらが提案し、せいかも乗ってくれます。

さあ、ここで百恵ちゃんが率先して調べてバツ印を見つけましょう。これやろ、みとちゃん？ 気になることって。

「……あ！ そう、それです星奈先輩！ でも……落書きかな……」

「このバツの落書き……他の場所にも、ほら！」

するとあら不思議、どんどんバツ印が増えていくではありませんか！

はい、第一関門突破です。そしてみんな仲良く結界の中にダイブ！

不審者がいた商店街へとやってきました。

ここで商店街を調べずに出ようとするとゲームオーバーです。

せいかの提案に便乗して調べましょう。

「……その角を……あれ？」

と、不審者が向かっていた場所に行くとバツ印を発見、今度はすぐに飛ばされず、使い魔戦に突入します。百恵ちゃんの見せ場がやってきましたよ。

みんな変身していますけど戦わせません。危なっかしくてしようがないです。

気になったんやけどれいらちゃん、ズボンかスカートはどこ行った

ん？ まあいいや。

三人は下がって下がって、百恵ちゃんに任せとき！  
ここにすつこ  
いおつきい剣があるじゃろ？  
これをこうして、振り上げてこうじゃ！  
横薙ぎ

はい、使い魔全滅！ 戦闘終了です！

「す、すごい攻撃力……」

「これが魔法少女歴5年の力……！」

「かっこいい！……あ！ 見て！ バツの落書きが……！」

はい、第二関門突破。次に出てくるのは屋上です。

ここで明らかに目立つ給水塔を調べるとゲームオーバーです。

もう一回せいかの提案に便乗して外周を調べるように誘導しましょう。こいついつつも誰かの提案に便乗してんな。主体性がない大先輩の屑。脳筋だからね仕方ないね（レ）。

「み、みんな！ 下！ 下見て！」

はい！ これで『516号室』に続く最後のバツ印を見つけました。

さあ、『516号室』にカチコミじゃーい！ 警察だ！（大嘘）

さて、ここは好感度を一気に上げるために最初は団地組にお任せします。

（さすがの魔女も）三人に勝てるわけないだろ！

「ううっ……」

「強い……！」

「ぜ、全然攻撃が効いてないよー!？」

ですよねー！

「馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前（天下無双）」と奮起している魔女さんは団地組三人を圧倒しています。団地組は全員新人なんだから苦戦するに決まっているだろいい加減にしろ！

ということでバトンタッチです。百恵ちゃん、行きます！

はい、終わり！ 閉廷！ こんな魔女一撃で充分なんだよなあ。二振りも必要ねーんだよ！ 以上！ みんな解散！

ということで『バイバイ、また明日』無事クリアです。

もう用がないので連絡先を交換して帰りましょう。

じゃあな、団地組の三人！ また会おう！ 用があるときは電話す

るか、新西区にある調整屋か、北養区のウォールナッツって店の料理教室に来てくれよな！ やっちゃんやなぎたんに頼んでもいいぞ！ そのグリーンシードはプレゼントや。今後も『傭兵』を鼻屑にしてや！

「やあ、星奈百恵。少し話をしないかい？」

ってなんでこいつが出てくるんだよ。せつかく重大イベントのうちのひとつを乗り切って最高の気分だったっていうのに。

構うとタイムロスなので無視&倍速処理安定です。

そういえばもう、こいつは神浜出禁になるんでしたね。ざまあ見やがれ、へっ！

ということ白いナマモノを無視しつつ今回はここまでです！

ご視聴ありがとうございました！

「焦っているんだろう？ キミの身体はもう……」

……限界が近いんだからね……。

## RTAパート8 魔法少女好感度調整

知り合いキャラの好感度を上げていくRTAはーじまーるよー。  
いやあ、前回の『バイバイ、また明日』は好タイムを叩き出せましたね。

ガバもなく、無駄もなく、無事クリアできました。これって、勲章ですよ……。

この調子でどんどん進めていきましょう。

あと白タヌキが初登場しましたね、百恵ちゃんが呼んだからなんです。

なんか最後長つたらしく百恵ちゃんと喋っていましたけど本当にやめてほしかったです。倍速処理できるとはいえタイムに繋がりますからね。

ネームド魔法少女との会話は意味があるのでまだしも、あの白い害獣との会話は基本無駄でしかないのでタイムロス以外の何物でもありません。こっちの事情も考えてよ。

まあ、今頃神浜から追放されて途方に暮れているのでしょうがね。

もう二度とこの街に入ってくるんじゃないぞ。あと間違ってもあまのスズネ天乃鈴音をけしかけてくるんじゃないぞ。けしかけてきたら嫌だぞ。

さて、それはさておいて現在は5月です。

百恵ちゃんとやちよさんは無事に大学に進学できました。

大学の授業は前期後期でカリキュラムを自由に設定できるうえに、鉢合わせするキャラがやちよさんしかいない都合上、授業描写が丸々スキップされます。

朝の選択肢である『大学で講義を受ける』を選択すると、自動的にその日に組み込むであるすべてのカリキュラムを終えた状態からその日の自由行動に移せるので、中学・高校生の魔法少女と比べて余計なイベントが挟まることなく大幅なタイム短縮になるんですな。

「……百恵」

おっと、やちよさんが話しかけてきましたね。

このやちよよとのイベントは、やちよと違う学部に入っている時に全

てのカリキュラムが終わった後の帰り道限定で発生します。

なんで違う学部を選んだかというところ、やちよと同じ学部に入っていると頻繁に話しかけられることがあってRTA的によろしくないからです。

それでどうしたやちちゃん、浮かない顔しちやつてさ！

「あなた、その……体は、大丈夫なの？」

ああ、そういえば百恵ちゃんの育成が完了したんでしたっけね。

魔法少女には限界点というか、これ以上強化不可能みたいな隠しパラメータがあります。ベテラン魔法少女に設定するとこのパラメータが牙を向くのですが、正直そこまで熱心に育てずともやっていけるのであってないようなシステムでした。

しかし百恵ちゃんの場合は傭兵という仕事柄、戦闘経験豊富で何体もの魔女を倒して経験値を稼いだ結果この限界点に到達して、もう強化することが不可能になりました。

その最終ステータスがこちら。

《魔力》 90 《攻撃》 334

《防御》 23 《速度》 170

《精神》 85 《経験》 228

《速度》はやちよさんの大学一年時のステータス180に匹敵し、武器を使わなければ+50の補正が入るオバケ仕様。

《攻撃》は334で打ち止め。なんでや！ まあ、こんだけあれば普通にワルプルギスの夜とやり合えます。

私が手掛けてきた魔法少女の中でも最強の戦闘能力を誇るバケモノです。《防御》は……ナオキです。

てなわけですね、これ以上ステータスが上がらなくても特に問題ありません。だから大丈夫だって安心しろよ。

え？ 髪？ ああ、そういえば最近白くなってきましたね。こんな年から白髪が生えるとか親の遺伝かなにかでしょう。これを機に染めてみましょうかね？

ちなみに身長は変わらず143センチのままです。みやーこ先輩(145センチ)どころか、小学生の千秋理子ちゃんちあきりこ(144センチ)

以下です。でも胸だけはなぜか成長してDの大台に乗っています。

ものっそいアンバランスな体型ですが、特に体調不良は起こっていない健康優良児です。だからヘーキヘーキ、ヘーキだから。

「そう……その、いえ、やっぱりいいわ」

やちよさんとの好感度は依然として高いですが、これ以上にするのはよろしくありません。

なぜかって？ やちよさんまで『マギウスの翼』入りする可能性があるからですよ（5敗）。

みふゆがいて百恵ちゃんもいる。（入って）当たり前だよなあ？

ということでは好感度を下げないけど、上がりすぎないような選択肢を選びましょう。

というわけでじゃあな、やっちゃん！

オッス、みたまさん！ 仕事、入ってるかい？

「あらあ、モモちゃん。仕事は入ってないわよ」

あらま、これでここ一週間ともに仕事が出来ていませんね。

まあ、育成完了した今は面倒なだけなんでもいいんですけどね。

「こんにちは……あつ！ 先生、久しぶりなの！」

おお、かりんちゃん。なんというか、かわいいんですけど貫禄が出てきましたね。

10月から本格的に仕事を始めたかりんちゃんはメキメキ育って結果を残して、神浜の魔法少女の間では有名な存在になっています。先生として鼻が高いです。

それじゃあかりんちゃんのスケジュールを確認してみましよう。

えっと、かりんちゃんは……おつ、いっぱい入ってんじやくん。順調に育ってくれていてなによりです。かりんちゃんはもつともつと強くなってくれないと困りますからね。

「最近はかりんちゃんがいいっていう子が増えたのよ。なんでも年が近くて話しかけやすいかららしいわ」

いいことです。この調子でバンバン仕事をかりんちゃんに回してくれよな。頼むよ。

百恵ちゃんはこれまでの傭兵稼業のおかげで資金は潤沢ですので、

程よく使っていけば仕事がなくてもやっていきます。

さて、調整をしましょうか。

ステータス的に意味はないんですけど、調整を怠るとソウルジェムが濁りやすくなったりしますからね。

これまでは毎日していましたが今は定期的で大丈夫です。

「モモちゃん……やっぱり、もう……」

ああ、みたまさんも気が付いているみたいですね、百恵ちゃんの成長が止まったことを。

それでもオバケステータスですしそんなに心配することはないんですが。

「あの、先生？ その……本当に大丈夫なの？」

今度はこちらちゃんまで。

やちよさんといいみたまさんといいかりんちゃんといいなんか最近妙に心配してきます。

まあだ、時間かかりそうですね？

「……モモちゃん」

「先生……」

はい！ 調整も終わったし仕事もないということので退散しましょう。

じゃあな、みたまさん！ また明日も来るぜ！

かりんちゃんも仕事、頑張ってくれよな！

さあ仕事がなくて時間が出来ましたので、他の知り合いキャラの好感度調整と参りましょう。

現状、みたまさん、かりんちゃん、やちよさんが好感度トップスリーです。それに続く形でまなか先生、組長、鶴乃ちゃん、ももこ、みゃーこ先輩、なぎたん、みふゆ、フェリシアの八人が頭ふたつ抜けています。

この11人の好感度は問題ありません。やちよさんだけ変に上げすぎなければ、あとはどうでもいいです。

問題はそれ以外のネームド魔法少女ですね。

組長と知り合うために接触した彼女たちの好感度がまるで上がっ



ていません。なかなか組のほか三人はそこそこあるとはいえ、これは地味にマズいです。

好感度を一定レベルまで上げておかないと団結できずにワルプルギスの夜に挑む魔法少女が減ってしまつて失敗する可能性がある（8敗）ので、少し頑張らないといけません。

なんでこんなことになるまで放置していたのかつて？ 仕事（傭兵稼業）が忙しかつたんじゃないか。社会人はつらいなサム（レ）。

ただ今は閑散期ですので時間的余裕があります。なので、ここでネームド魔法少女たちとの信頼関係を築き上げるとしましょう。

6月以降は『そしてアザレアの花咲く』『散花愁章』が立て続けに起き、この後から『マジウスの翼』が開設され、メインストーリー第1章『はじまりのいろは』が始まります。

つまりこの5月を逃すと知り合いの魔法少女との好感度調整がイベント中ではできないので、自由に調整できる最後のチャンスなのです。

というわけですね、さつそく行動開始です。

数多の魔法少女たちが集まる人気スポット……エミリーのお悩み相談所にイキますよ〜イキますよ〜イクイク……ヌツ！

「お、おお？ 珍しい人が来たねえ」

「え……って、百恵さん!? どうしたんですか?」

早速エミリー先生とあきらくんがお出迎え。

よかった居てくれました。これで空振ったら悲しかったです。

えっと、他には……。

「あ、あなたが……星奈百恵さん!?」

阿見莉愛! トリビア様じゃないっすか! オツスオツス!

彼女もここで出会える可能性が高く、さらにスペックも高い魔法少女です。

いい意味でも悪い意味でも目立ちたがり屋で負けず嫌いな性格な

ので、魔法少女の真実を知つても自分の活躍の場を作るためにと勝手に乗り越えてくれる強い精神力の持ち主でもあります。

固有魔法も『隠蔽』とかなり便利。是非仲良くなっておきましょう。そのための仕込みとしてしつかりと『BiBi』を始めとした、他のファッション誌を買ってドア様莉愛のことを百恵ちゃんは知識の中にインプットさせておきました。

ちなみにこれらのファッション誌は、やちよの好感度上げにも使えますのでお得ですよ。

シエア様莉愛は自分を認知してくれる存在に弱いので、こうして情報を集めてから会うと好感度が上がりやすいです。

そして褒め称えることも大切です。

リタイア様阿見莉愛は誰よりも自分の存在を一番に見せたい目立ちたがり屋なので、思いつきりその容姿や活躍を褒めることが何より大事。そして、百恵ちゃんは神浜の魔法少女の中の超有名人です。

「あ、あの最強の『傭兵』がこの私を……！」

はい、そのダブルコンボでベア様莉愛撃沈です。

好感度が爆上がりしていいゾ〜これ。

「……わあ、すっごい。あんな風に人を堕とすんだ……！」

「うひょー、ヒヤックエ先輩は手馴れてるねえ。あーしも褒めて褒めてー」

オツケー、オツケー牧場（激寒）。

というわけでこんな調子で今日一日、ここでお喋りしていきましょう。居座っていれば他にも色々な魔法少女たちが来ます。

候補としてななか組全員、梨花れん、みゃーこ先輩、レア様莉愛、鶴乃、ささら、明日香、このみさん、交友関係にない魔法少女だと矢宵やよいかのこと江利えりあいみ、空穂夏希うつほなつきあたりです。

かのことあいみは比較的好感度を上げやすく、魔法少女としてのスペックも申し分ないので仲良くなっておきたいです。

そしてそれ以上になんとしてでも仲良くなっておきたいのは夏希です。

夏希は希少な味方のバフ魔法『激励』の持ち主です。そしてここ

の魔法もまた『激励』。

このダブル『激励』によるバフを受けた調整済み脳筋百恵ちゃんの攻撃……想像するだけでもう涙が出るほど、気持ちいいんじゃない……。これをワルプルギスの夜にブチ込んでやるぜ。

ということ、仕事のない日はこのエミリーのお悩み相談所に通い詰めることにしましょう。

喋るだけなので時々選択肢が出てきますが、基本倍速で片付けることができるので楽です。

じゃあ、流しますね。

おはよーごさいますーす！

「およ、ヒヤック工先輩！ もう常連さんだね〜」

「会えるだけでも結構レアな人だったはずなんだけどなあ……」

今日もエミリー先生のところからお送りします。

あれから仕事をしつつここに通り詰めて色んな魔法少女と仲良くしています。

かのことは無事に知り合いました。

相変わらずの凄いセンスにさすがの百恵ちゃんも戦慄していました。そのあとは普通にキノコの話題で盛り上がりましたが。

こんな時のためにキノコ料理を嗜むようにして正解だったぜ。

あとみやー先輩とも会いましたね。

「百恵……おまえ、なにをそんなに急いでいるんだ？」

そら肝心の夏希と出会うことができないからよ。正直若干焦っています。

最悪知り合わなくてもいいのですが、彼女のバフは知り合いで仲が良ければ良いほど効果が大きくなるので、ある程度の好感度は欲しいです。

そんな願いを込めてもう両手の指の数では足りないほど相談所に来ている百恵ちゃん。

雑誌や大学の授業やら勉強内容やらで話題は尽きないですし、魔法

少女としての悩みはエミリー先生と一緒に聞いてもいるのでさりげなくですがモブ魔法少女たちの好感度も上がっています。

「おや、百恵さん。珍しい……いえ、最近では普通ですか」

あ、組長じゃないですか。

そちらこそ珍しいっすね、来るとするならいつもはメンバー全員でなのひとりでなんて。

「あきらさんたちから聞いたので来たんですよ。……随分と、雰囲気が変わりましたね。その髪の毛はイメージチェンジ、というものでか？」

まあ大学生になったし多少はね？

結局染めてないんですよ髪毛。まあ、そこに使うお金がもったいないですし、神浜じゃあ白髪の魔法少女なんて珍しくないし……普通だな！

「そうですか……。その、あまり無理をしないでくださいね」

おう、お互いにな！

さて、勉強に戻りましょうか。単位なんてどうでもいいんですけど、しっかり単位を取らないとやちよさんに絡まれて行動に制限がかかる可能性があるので真面目にやります。

「こんにちはー！」

相談所の隅っこで勉強していることしばらくして元気な声が聞こえてきました。

おお、あいみちゃん！ やつと会うことができました。

あいみちゃんはかなり強い魔法少女です。

なんせ固有魔法が『行動予測』というチート一步手前の激ヤバ能力。この魔法で敵の行動を予測したうえで拳銃をぶっ放すので百発百中、しかも敵の攻撃すらも予測するので攻撃を喰らうこともない、まさに攻守一体の万能魔法です。

まあ、百恵ちゃんはそんなことしなくてもダブルストライクで撃沈させちゃうんですけどね。IQが低すぎんよ。

というかあいみちゃんが来たってことは……。

これはもしかして……もしかするかもしれませんよ？

「こんにちは！ エミリー先生にあきら！ それから……えっ、もしかして星奈百恵さん!?!」

き、来たー！ 来てくれたー！

来てくれたよーアーツハツハツハツハツハツハツ！ 来てくれたーハツハツハツハツハツ！ 生きてるー！ 来てくれたよハツハツ生きてる！ ハツハツ！ あー来てくれたー！

幻の夏希……幻の空穂夏希だ！  
やったぜ。

夏希はあきらくんともあいみとも仲がいいのですが、頻繁にここには来ませんので実はかなりのレアキャラだったんですね。

さあ、じゃあ百恵ちゃんと仲良くしてもらおうかね、ちゃんとお話ししてもらおうね！

「友達から聞いています！ 前に星奈さんに助けてもらったことがあるって！」

なんと！ 百恵ちゃんのごことは御存じだった様子。

クオレハ……モブ魔法少女からの情報ですね。

魔法少女の話題になった時に百恵ちゃんのことを夏希ちゃんに話してくれたみたいです。なんだよ……結構……役に立つじゃねえか……。

掴みはばつちりですので、このまま一緒に話ししましょう。あいみちゃんも見てないでこっち来て。六人でお喋りしようよ。

エミリー先生、あきらくん、ななか組長、あいみちゃん、夏希ちゃん、そして百恵ちゃん。なつかなか濃い面子で何を話すかといいますが……。

「星奈さんって、なんか、イイ人っているんですか？」

はい、恋バナです。あいみちゃんがいると大抵はこの話題になります。

クソレズ魔境都市神浜では絶滅危惧種でもある貴重なノンケ魔法少女であり、意中の相手がいるので必然的に恋バナになります。

ちなみにあいみちゃんの意中の人である伊勢崎隼人くんいせさきはやとはかなりのイケメンかつ性格良しの超優良物件です。

おまけにあいみとは本人たちは明かしておりませんが両思いなので、絶対に手を出してはいけない聖域でもあります。間違っても冷やかしたりしないようにしましょう、好感度が急降下します。

で、百恵ちゃんのイイ人だって？（い）ないです。悲しいなあ。

自分の運命知ってて彼氏なんて作るわけないだろいい加減にしろ

！

「ええー、勿体ないですよー！」

「そーそー！ ヒヤック工先輩ちみっちゃいけど素材良いんだしさ  
！」

「こ、こらこら……。でも確かに、百恵さんなら作ろうと思えば普通に作れそうだよね」

「そうですよ！ 本当に勿体ないですー！」

真面目に返してくれるこの子たちマジ天使。

まあ確かに一部の人達には大受けの容姿だと思いますが、それでも（作る気は）ないです。

百恵ちゃんには仕事があるので彼氏に構っている時間はありませんし、なんてったってこれはRTA。タイムこそがすべてですからね。彼氏作って恋愛にかまけてたらRTAになんないよ。

「……本当にそれだけが理由ですか？」

おっと、今度は静観していた組長からご指摘が。いや、本当にそれだけなんですって。

……わかった。この話はやめよう。はい!! やめやめ。

「失礼。では、ここまでにします」

ふう、やれやれ。

これ以上この話題を膨らませても誰の好感度も上がる見込みがありませんでしたからね。切り上げて正解です。

にしても組長までなんか様子がおかしいですね。

好感度は特に下がっていませんし、ガバもないはずですが……ま  
いっか！（適当）

ってあら、組長帰るん？ それじゃあな！

エミリーのお悩み相談所で好感度を上げつつ、時々入ってくる仕事

をこなして5月は終了！

いよいよ失敗できないイベントその2、『そしてアザレアの花咲く』が始まります。

これも前回の『バイバイ、また明日』同様分岐型イベントですが、失敗すると取り返しがつかなくなる(12敗)マジヤバイイベントなので、百恵ちゃんが関与し始めた時の状況や場面をしっかりと把握するようにしましょう。と、その前にセーブしなきゃ(使命感)。

ということで相談所で駄弁りつつ今回はここまでです！

ご視聴ありがとうございました！

## S i d e . 七海やちよ 崩壊の足音

思えば、彼女の雰囲気が変わったのは8月に入った時だったのかも  
しれない。

7月に魔法少女の真実を知って、チームを解散させた私の拠り所は  
いつの間にか隣に座る彼女になっていった。

チームを解散させ、広くなったみかづき荘。

賑やかだった毎日とはもはや過去のものになってしまった。

六年間、一緒に過ごしてきたみふゆも出ていってしまい、今は私し  
かない静かなみかづき荘。

でも学校に行けば、必ず彼女がいた。

神浜最強の魔法少女……星奈百恵。

彼女だけは、いつも私の近くにくれてくれた。

どこの組織にも属さない、完全中立の傭兵。

彼女がこの神浜に来た時に宣言した誓いは変わらなかった。

どんな時でもこの言葉から逸脱した行動をとらず、この神浜に住む  
全ての魔法少女たちに手を差し伸べた。

中には百恵を恨むような魔法少女もいた。

自分の縄張りに新入りの魔法少女が入ることを拒む一部の中堅の  
魔法少女たちだ。しかもそのほとんどが西の魔法少女。

でも百恵はそんな魔法少女たちさえも受け入れ、自ら憎まれ役を  
買って出ることだってあった。新入りや弱い魔法少女たちを守るた  
めとはいえ、誰もが引き受けたくない仕事を彼女は率先して実行して  
いった。

百恵は誰かに頼ろうとはしない。全部その小さな体で受け入れて  
しまう。

強靱な精神力と、腕っ節の強さ、柔軟な思考で全てを乗り切ってし  
まうタフな魔法少女だった。

「おはようなのじゃー！ お主が出ている雑誌、買ってみたぞー！」

チームを解散させた頃、私に百恵はいつもと変わらない笑顔で話し  
かけてきた。



ファッション誌なんて読むような子じゃないのにその話題を出してくれるということは、私を元気づけるためにわざわざ買って見られたということでしょう。

百恵はあれが良かったこれが良かった、もっといいポーズはなかったのか、このモデルが綺麗だとか、いろんな話題を持ち掛けてきた。私が載っているページだけじゃなくて、他のページもしっかり見られている。

ありがたかった。

ただ私を元気づけるためだけじゃなくて、真剣に雑誌を読んでくれていることも嬉しかったし、私のページに至っては様々な感想や質問をくれて、上面だけでなく本気で興味を持ってくれていることが伝わってきたから。

多分そこまで百恵は考えてくれているのだと思う。

どうすれば私が一番元気になるのか、しっかり計算した上で実行している。百恵はそういう子だった。

計算しているくせに温かい、どこまでもずるくて優しい人間だった。……でも。

8月に入ってから……百恵の様子が変わった。

「私の後継者を見つけたのじゃ」

なんでもない平日、みかづき荘で百恵がそう切り出した。

後継者。

つまり百恵に次いで『傭兵』として活動を始め魔法少女を見つけたと、百恵は告げてきた。

傭兵の仕事を引退するのかと問うとそうではないらしい。

現在進行形で上がり続ける戦闘能力はどうとう魔女を一撃で倒せるところまで成長し、今の百恵は絶好調だった。百恵の仕事も完璧で大きな失敗はおろか細やかな失敗すらしていない。

ならばなぜ、と聞いた時、百恵が一瞬遠い目になったのを見た。

それは、転校してきたときに屋上で見せた、そして7月にみふゆが質問した時に見せた百恵の真顔と同じ雰囲気が出ていた。

「別によからう？　ひとりよりもふたりいた方が良いし、私ひとりの

時よりも数多くの魔法少女を救えるのじゃからな」

返ってきたのはいつもの百恵らしからぬ適当で建前なのが丸分かなりな返事だった。

あまり語りたくなさそうだからそれで流したけど……でも私は、しつかりと異常を感じ取っていた。

だって百恵は……『後継者』って言ったのよ。

『同僚』や『仲間』ではなく『後継者』と言った。

つまりそれは……いつか百恵は傭兵をやめると言っているようなものだ。でも、傭兵をやめるつもりはないとも言った。

本人は傭兵をやめる気がないのに後継者を育て始めた……それが意味するものはつまり。

「……バカバカしい」

そこまで考えて、私は考えるのをやめた。

考えたくないというのも理由のひとつだし、あまりにも信じられないことだったから。

だから私は、この推測を頭の片隅に追いやることにした。

百恵が死ぬかもしれない。

そんなありえない、ありえてはいけない、バカバカしい推測なんて。でも、それから数日と経たず、私は恐ろしい報告を受けることになる。

「やちよししよー！」

久しぶりに鶴乃がみかづき荘に来た。

浮かんでいるのは満面の笑顔。とても嬉しそうに、そして褒めてほしそうな笑顔だった。

彼女が犬だったのならきつと尻尾をぶんぶん振っていることでしょう。

「わたしね、百恵ししよーに勝ったんだよ！」

「……は？」

ほんのり温かくなっていた気分が一気に凍りついた。

一瞬、鶴乃の言っていることの意味が分からず素で返事をしてしまった。

なんですって？

鶴乃が、百恵に、勝った？

「本当に……う？」

鶴乃が決して、そんな嘘を吐くような子ではないことを私はよく理解している。

素直で、嘘が吐くのが苦手な子だ。

それに「誰かに勝った」だなんて、その『誰か』を蔑むような悪質で軽薄な嘘を吐くような子では決してない。そんなことはわかってる。

でも聞き返せざるを得なかった。

あまりにも信じられないことだったから。

「うん！ さすがに武器は使ってくれなかったけどね、わたしの攻撃があたったんだよ百恵ししよーに！ でも焦ったよ、まさかモロに受けて気絶しちゃうんだもん」

もう頭がどうにかなりそうだった。

とりあえず鶴乃を褒めて、そして決して言いふらさないことを言い聞かせて帰らせた後、私はソファに力なく座る。

武器を使っていないとはいえ百恵が鶴乃に負ける？

「ありえない……」

百恵の訓練は実戦形式の本格的なもの。

つまり百恵も全力で戦っていたということになる。

圧倒的な破壊力が際立っているけれど、百恵は『スピードスター』の異名もあるのだ。

本人は納得していないけれど、その小さく身軽な体で相手の攻撃を躲し続けて相手を捕らえ、その剛腕で沈める。

百恵からグリーンフシードをふんだくろうとした魔法少女たちは、そうやって成敗され、恐怖を植え付けられて二度と百恵に逆らおうとしない。

私だって、百恵と手合わせしたことは何回かある。

でも私は百恵に一回たりとも勝てた試しがないし、勝てる気さえ抱くこともなかった。

そんな本気の私でも勝てないのに、鶴乃が百恵に勝った？  
とても笑えない冗談だった。

鶴乃には悪いけれど、私には鶴乃が百恵に勝てるヴィジョンが見えない。私にすら勝てない鶴乃が百恵に勝てるわけがないもの。

いくら才能があつたとしても、魔法少女歴が一年にも満たない鶴乃が、毎日魔女との戦いに明け暮れている魔法少女歴五年の大ベテランの百恵に勝てるはずがない。それだけ年季と経験が違うのい。

あらゆる可能性を考慮しても、鶴乃が百恵に勝てる要素なんて皆無のはずだ。

でも、鶴乃は百恵に勝つたと言った。

しかも一発、攻撃を当てただけで気絶してしまったと言った。

多分鶴乃は私だからこの話をしてきたと思うし、私が言い聞かせなくても絶対に言いふらしたりしないでしょうけど、こんなことが発覚したら……神浜で戦争が起きる。

攻撃を一発受けただけで気絶するだなんて……そんなことが百恵を恨む魔法少女に伝わってしまったら、間違いなく百恵は集団で襲撃を受けることになるでしょう。

全力を出しても本気を出さない百恵は魔法少女相手に武器を使うことはない。

自分を憎む魔法少女に対しても手を差し伸べようとする彼女は、切り捨てることなんてできない。

最悪無抵抗のまま攻撃を受けることになる。

そんな事態が起こった場合、百恵を慕う魔法少女たちが黙っているはずがない。

そして百恵を嫌う魔法少女の大半は西の中堅魔法少女。ともなれば差別しない百恵を好意的に思っている東の魔法少女たちも黙っていない。おまけに『中立』を維持しているみたまも百恵に救われた魔法少女のひとりで、忘れがちだけど東の魔法少女だ。

神浜の完全中立が傾いた上での、東西魔法少女による全面戦争が起こりかねない。

私の考えすぎで、どんなに低い可能性だったとしても、想定できて

しまう以上看過することはできない。

だから私は鶴乃に釘を刺した。

そして……頭の片隅に追いやった推測が再び頭に過る。

百恵が死ぬ、そんな嫌な推測を。

結局私は百恵に確認をしなかった。

鶴乃の言っていることは本当だとしても、たまたま調子が悪かっただけなのかもしれない。手加減しただけなのかもしれない。

そうよ、そうに決まっている。

自分に言い聞かせるように、そんな都合のいい思い込みで、私はこの推測をまた頭の片隅に追いやった。

10月になって……百恵から『後継者』の採用試験をしてほしいという連絡が入った。

これは私だけでなく、みたまに中央の都ひなの、東の和泉十七夜も巻き込んだ本格的な採用試験だった。

百恵の『後継者』だもの。

神浜で『傭兵』がブランドになっている今、新しい『傭兵』を認めるにはこれくらいしないと割に合わない。

試験官として当然のメンバーだと納得した。

私はそれに応じた。

『後継者』という言葉は確かに気になったけど、今回は百恵が手塩にかけて育てた弟子の方に興味が行った。

自分の懐に入れる人間を徹底して選んでいる百恵が、本当に楽しそうに、大切そうに話していた弟子が一体どんな魔法少女なのか。私はそれが気になった。

百恵の『後継者』は御園かりんという魔法少女だった。

中学一年生だけど魔法少女歴が二年とそこそこの経歴を持つ中堅の魔法少女。

強そうには見えなかったけど、百恵が認めた実力者だ。すぐに先入観を捨てて観察することにした。

軽く挨拶して百恵と話していると、都ひなの、和泉十七夜が到着してそれぞれ御園かりんに挨拶していた。

彼女は若干戸惑いながらも挨拶を返していた。

「ここだけの話、あやつに傭兵採用試験の話をしたのはほんの数時間前なのじゃよ」

こつそりと私と十七夜に聞こえる声で百恵がカミングアウト。

なるほど、百恵も意地悪なことをする。

でもこれで御園かりんという魔法少女が、相当肝が据わっている魔法少女だということが分かった。

いきなり試験のことを説明されて、東西中央のリーダー格に挨拶されて、あそこまで動揺しない神浜の魔法少女は滅多にいない。

大人しそうな顔をしていて中身はなかなかどうして、強く芯がしっかりしていて凶太い。これなら百恵が太鼓判を押すのも納得できる。

試験前だというのに、私は百恵の弟子である御園かりんの評価を上げていた。きつと十七夜もまた、彼女のことを買い始めているだろう。

調整を終えたひなのとみたまが集まり、いよいよ試験が始まった。

仕事は二件。無難な件数だ。

彼女は積極的に依頼主の魔法少女に話しかけた。

明らかに年上なのに臆することもなく、だからと言って下に見るわけでもなく、知り合いと世間話をするような感覚で喋っていた。すると依頼主はすぐに打ち解け、仲良くお話をしていた。

これは百恵にはできない芸当だ。

見た目はアレでも百恵は立派な年長者。多少なりとも委縮してしまふ。でも御園かりんは違う。

話の流れを掴む手口は弟子ということもあってか、ほとんど百恵と同じものだったけど、心を掴む時間は圧倒的に彼女の方が早い。

百恵ならそこから悩みを聞いて受け止めるところまで行かないと心を掴めないのに、御園かりんは普通に話しているだけで打ち解けてしまう。必要以上に踏み込まなくても、勝手に相手から喋ってしまふ。

これが彼女の力というか、持ち味なのでしょう。おそらく天然物の。

そして肝心の魔女戦だけど、これも見事という他なかった。

百恵と違って圧倒的な力はないけれど、多彩で、しっかり自分の固有魔法を有効活用した本来の魔法少女の戦い方をしている。これも百恵にはできない芸当だ。

「ゆくぞ……これが我が全魔力の結晶なり！　これが、ハロウィンが生んだ力なのだ！——トリックアンドトリート！」

うん、まあ、うん。

思わずくすりと笑ってしまった。ひなのも苦笑いしているし、みたまも生暖かい笑顔を向けている。十七夜だけが真顔で真剣に見ていたのがシニールだった。

多分凄くテンションが上がっていたのでしようね。年頃の女の子だもの。

でもこういう決め台詞があるのは評価すべき点だ。

魔女を怖がっている魔法少女に、かっこいい自分の姿を見せることで奮起させることができる。

御園かりんがまだ中学一年生という点もいい。自分より年下の魔法少女が頑張っているのだ。「それなら自分も」と覚悟を決める子もきつと出てくる。

いとも簡単に魔女を退治することによって、意外と魔女は大したことがないという意識を刷り込ませていく百恵のやり方とは全くの逆。

強大な魔女に自分の魔法を駆使して立ち向かう彼女は、アニメや漫画で見る正義の魔法少女の姿を体現した、まさに正統派の魔法少女としてのやり方だった。衣装や武器も魔法少女らしくて好ましい。

「ズバリ言うわ……合格よ。ハロウィンが生んだ魔法少女さん？」  
認めましょう。

彼女は……御園かりんは百恵の後継者として相応しい力を持った、魅力的な魔法少女であると。

そしてそれを認めたのは他の四人も同じだった。

特に百恵は本当に嬉しそうだった。

「かりんよ、お主は私の誇りじゃよ」

最高の褒め言葉が百恵の口から出た。おそらくこれ以上はない、最

上級の褒め言葉だ。

そんな破壊力抜群の一撃を喰らった御園かりんがまともでいられるはずがない。いろいろな想いがあったのでしよう。泣き崩れて百恵に抱き着く彼女。

でも。

「せ、先生、ありがとうなの……。わたし、もっともっと頑張つて、いっぱい人を、魔法少女を助けるの！」

すっかりと言い切った。自分がやるべきことを、そして百恵に対する感謝の言葉を、はつきり言葉にした。それを聞いた百恵はなお一層嬉しそうに彼女の頭を撫でていた。

まったく……。こっちまで泣きそうになるからやめてもらえないかしら。

「冷やかしてやるなよ」

おっと声に出してしまったみたいね。ひなのに咎められてしまう。

こうして……。御園かりんの採用試験は、満場一致の合格という形で幕を下ろした。

誰より一番喜んでいた百恵はその一方でとても安心したような、穏やかな表情をしていたことを私は見逃さなかった。

それから数ヶ月が経ち……。私と百恵が大学生になった時、百恵の『傭兵』としての仕事に変化が起こっていた。

徐々に顧客を増やしていく御園かりんとは裏腹に、百恵の仕事がだんだんと減っていったのだ。

理由は百恵が客にしていた魔法少女たちが独り立ちをしていったから、そして、御園かりんの人気が百恵を上回ったからだだった。

やっぱり年上よりも年下の子を雇う方が精神的に楽だからでしょう。

新規の客のほとんどが御園かりんの方に流れた。

「良いことじゃ。かりんが人気者になることは先生としてとても誇らしい。私は幸せ者じゃよ」

少し寂しそうなながらも、百恵は温かく彼女を見ていた。



でも……私は少し悔しかった。

今まで頑張ってきたのは他でもない百恵だ。その百恵の仕事がなくなっていくのは複雑だった。

決して勘違いしてほしくないけれど、私は御園かりんに対して憤りを覚えているわけではない。むしろ好ましく思っている。これは本心。

彼女は自分の仕事をしつかりこなしているし、こうして人気が出たのは彼女の頑張りが実った結果なのだから。

でもそれはそれ。それとこれとは話は別なのよ。

「百恵は……寂しくないの？」

私は百恵にストレートに訊いた。

今のこの状況が寂しくないのかと。自分を必要に思っている人が少なくなつて悲しくないのかと。

「私か？ まあ、少しだけな。じゃがの、たとえ少なくなつたとしても私を必要とする人間がいるのであれば、手を貸すのみじゃ。私のやることはなーんにも変わらぬよ」

「……そう」

なんとなく想像した通りの答えが返ってきた。

やっぱり百恵は何も変わっていない。その強さも意志も何も変わらない。静かながらも確かにそこにある強い『力』。それだけは変わらない。そう感じて私は安心した。

でも、それは仮初のものだった。

5月に入った。5月5日が百恵の誕生日。

「あなたの誕生日はわかりやすいわね」

「ぐぬう……」

このやり取りは毎年恒例だった。

5月5日は端午の節句……つまり『こどもの日』。

なんというか、本当に悪いけれど百恵にはぴったりの誕生日だった。

この日は調整屋で百恵の誕生日を祝った。

面子は主役の百恵、私、みたま、ひなの、十七夜、そしてかりんの

六人。この頃にはもう私とかりんは友人になっていたし、会話も普通にしていた。

大学生ふたり、高校生三人の中、ひとりだけ中学生という年齢的に明らかに浮いていたかりんだったけど、平然と溶け込んでいるあたりやっぱり肝が据わっている。

この日は楽しく過ごせた。

みんなで騒いで、笑って、途中サプライズで出てきたみたまのケーキ(!?)を物凄い顔をしながら完食した百恵が目回して気絶していたけど、本当に楽しかった。

……でもこの日を境に、百恵の体に異変が起きる。

「百恵……あなた、その……体は、大丈夫なの？ 髪が……」

ほんの三日前までは綺麗な濡羽色だった百恵の髪。

しつぽへアーに纏めているけど、解けば長く艶やかな黒い髪だった。それは本人も自慢していたことだし、私も素敵だと思っていたことだった。

なのに。

三日ぶりに出会った百恵の髪の毛に……大量の白髪が混じっていた。

残っている黒い髪の毛も艶が引いてしまっていて、まるで老婆の髪のようにくすんでしまっている。

「ああ、この髪か？ みたまのケーキを食べたからかの、なーんてな。なに、これは遺伝のようなものじゃよ。折角じゃし、染めてみようかのう」

冗談を混じえて呑気に言っているけど、どう考えても遺伝で済ませられるようなことじゃない。明らかな異常だった。

しかも異常が起きてるのは髪だけじゃない。彼女の纏う『力』にも現れている。

ついこの前までは静かながらも漲り、増え続ける力の波動のようなものを感じ取ることができたのに、今の百恵にはそれが無い。静かすぎるのよ。

なんというか、そう……覇気がない。

「そう……その、いえ、やっぱりいいわ」

怖くて私はこれ以上聞けなかった。

突然起こった親友の身体の異変。

老朽化してしまったかのような髪の毛に、停滞している彼女の力。なんでもないようにカラカラといつも通りに笑っていたけど、明らかに百恵の身に何かが起こっている。

でも百恵は教えてくれない。頼ってくれない。

それが何よりも悲しかった。

百恵の異変は姿だけでなく、行動にも現れ始めた。

仕事がない日は決まって家に帰って勉強するようになって真面目で、友達が多いはずなのに付き合いが浅かった百恵が、放課後はほかの魔法少女たちと触れ合うようになったのだ。

水徳商店街の一角にある、知る人ぞ知る相談所。

一般の人達も利用しているけど、大体集まるのは魔法少女。相談室を開いている子も魔法少女で、数多くの魔法少女たちの悩みを解決してきたやり手らしい。

利用したことのない私がなぜ知っているのかというと、過去に鶴乃から聞いたからだ。

最強にこだわって迷走していた鶴乃も、その相談所の先生の言葉や人脈がきっかけで立ち直ることができたらしい。

百恵はそこに通うようになった。

そこに居座って勉強しながら、色んな魔法少女たちと仲良くなって、悩みを聞いて、普通におしゃべりをしている。

大学生になり、そして仕事が少なくなって時間ができたからこそ、今までできなかったことができて楽しいと百恵は語っていた。

これだけなら別によかった。……でも。

「やちよ、百恵の様子がおかしいぞ」

ひなのから連絡が入った。

化学の実験イベントを開いている彼女のアシスタントが相談所の先生らしく、百恵のことはそこから伝わったらしい。

話を聞いてなんとなく気になったひなのが相談所に向かうと、案の

定そこには百恵がいた。

「あの白くなつた髪にも驚いたが……妙にそわそわしているとか、どこか焦っているような、急いでいるような様子だった」

普段の百恵を知らないと絶対に気が付かないくらい微妙な変化だったけど、しつかりと感じ取ることができたらしい。

なんでも隅で勉強している百恵は相談所に人が来るたびにそこに顔を向け、雑談している時も意外と積極的に喋りかけているのと。……確かにこれはおかしい。

仕事の時はともかく、普段の百恵は基本的に聞き手だ。

自分から喋るときは何かしらの意図があるときだけ。それこそ落ち込んでいた私に接してくれた頃のような時くらいしか、自分から話しかけたりはしない子だ。

そんな百恵が自分から喋りかけに行くということは何か意味があるということになる。

でも話を聞く限りだとなんでもない雑談らしい。とても百恵から話を振りに行くようなことじゃない。

そこから何かの情報を得ようとしているのならやり方が強引すぎる。確かに、焦っている、急いでいると感じてもおかしくない。

それだけじゃない、とひなのは続けた。

「なんて言えばいいんだろう……。一番しつくりくる表現だと、久々に会いに来た孫との別れを惜しむおばあちゃんのような感じだった。妙に人との繋がりを求めているというか……寂しそうというか……」

……全然「少しだけ」じゃ、ないじゃない。

思いつきり、百恵は人とかかわりに飢えている。

多分大学という環境も彼女にとってあまりよくなかったのかもしれない。

高校の時と比べて自由ではあるけれど、そこまで深く人と関わることはできない。

サークルなんかに入れば話は別だろうけど、百恵には『傭兵』という仕事の都合上そんな余裕がない。

ふと、私はひとつの結論に至った。

百恵の身に起きている数々の異変の正体。それが一体何なのかを。突然増え始めた白髪、止まってしまった力の成長、そしてとにかく人とのかわりを求める行動。

これらの行動がすべて該当することといえば、ひとつだけしか心当たりがない。

「っ」

いてもたってもいられなくなった私は急いである場所に向かった。そこには百恵の全てを知る者がいる。

神浜で唯一、ほぼすべての魔法少女たちと関わりがあり、願いを知り、過去を知る者が。

そしてその人物は、百恵が『お主』を使わず常に名前で呼ぶ唯一の存在。

悔しいけれど、百恵の全てを知り、理解しているであろう神浜のもうひとつの完全中立……廃墟と化した映画館『神浜ミレナ座』。

「……来るならそろそろじゃないかなって、思っていたわよお？」

『調整屋』の店主……八雲みたまが、いつになく真剣な表情で出迎えてくれた。

すぐに『臨時休業』の看板を設置したみたまに催促されて店内の奥……待合室に行くと、そこにはふたりの人間がいた。

ひとりは百恵の一番弟子であるかりん。

もうひとりは……参京院教育学園の制服を着た眼鏡をかけた人物。雰囲気からして只者じゃないことがわかる。

「お初にお見えにかかります、西のリーダー七海やちよさん。私は常盤ななかと申します」

礼儀正しく挨拶された。

なんでも彼女……常盤ななかさんは百恵に去年の7月から今に至るまで現在進行で仕事の依頼をしている魔法少女で、月に数回百恵と会って情報交換しているらしい。

しかし百恵の異常に今日直接出会って気が付き、事情を知っているであろうみたまの所に訪ねてきたのだとか。

行動が早いあたり、彼女も百恵を慕って頼りにしていることが見て取れる。

「さて、みんなこんなに血相変えて私の所に来たってことは……モモちゃんのことでもいいのよねえ？」

沈黙が待合室を支配する。

それはみたまのその質問の答えが『是』であることを意味していた。

「ふう……モモちゃんはあんまり自分のことを深く喋らないからねえ。心配させないように振舞っているけど、まあ、付き合いが長くて、モモちゃんと触れ合う回数も多いみんなには誤魔化しきれないわよねえ」

「……前置きは良いわ。それで、あなたは知っているのでしょうか？」

百恵の事情を」

「それを私たちに教えてくださるのですか？」

「みたまさん、お願いしますなの。先生が……もう、本当に見えて心配なの……！」

私たち三人は食い気味にみたまに詰め寄る。

普段ならこんなことはしない。でもこれは緊急事態なのだ。

もし私の結論が本当なら……こうしている時間も惜しい。

一刻も早く、何かしらの手を打たないといけない。

「少し待っていてくれるかしら」

有無を言わずそれだけ告げて、みたまは待合室から出る。

そして数分後、みたまが待合室に戻ってきた。……ひなのと十七夜を連れて。

なるほど、確かにこのふたりにも伝えるべき案件ね。

情報交換をしている都合上、百恵の異常はしっかりと十七夜にも伝わっている。

ピリピリした雰囲気を出しているふたりが席に着き、みたまが立った。

「本当はわたしの口から言うべきことじゃないと思うけど……いいわ。あなたたち五人は信用できる。だから特別に教えてあげるわ。でも一切の他言は厳禁。もし言いふらしたりしたら……わたしを敵

に回すと思いなさい」

笑みを絶やさないうたまの目が一気に鋭くなる。それは殺気に近いものだった。

もし約束を破るようなことをすれば、私たちの本体でもあるソウルジェムを滅茶苦茶にしてまともな生活ですら送ることができない体にされてしまうでしょう。

でもそれでいい。それくらいじゃないと割に合わない。

現にここにいる全員、うたまのその言葉を聞いても怯むことはなかった。

「最初に断っておくけど、わたしが教えるのはあくまで今、モモちゃん  
の身体に起きている異常についてだけ。少しだけ過去に触れること  
があっても、それ以上は教えないわ」

結構。それだけで充分。

言い方はアレだけど、私は別に百恵の過去なんてどうでもいいの  
よ。重要なのは今の百恵。

それ以上に大切なものなんてない。

「……結構。文句が出るようなら叩き出すつもりだったけど、その必  
要はないようで助かるわ。……ふう。それじゃあ、お話ししましょう  
か——モモちゃんの身に起きている異変について」

私たちの、長い夜の会談が始まった。

## Side. 八雲みたま 異変の正体

「みたま、どうやら私はもう限界まで来ているらしい」

3月の暮れのこと、モモちゃんがわたしにそう告白した。なにを言っているのかわからなかった。

『限界』。

底が見えない力を今もなお滾らせているモモちゃんにとってその漢字二文字は無縁だったはずだ。それはわたしが良く理解している。今年で魔法少女歴六年。

それでも数多くの魔女と戦い、力を付けていくモモちゃんは、他のベテラン魔法少女たちとは比べ物にならないほど調整し甲斐があったし、これからもずっと……それこそ、そこに立っているだけで魔女をやっつけてしまうんじゃないかと思うくらいまで成長できるとわたしは見込んでいた。

そんな、もしかしたらモモちゃんよりもモモちゃんの身体のことを知っているわたしの予想を裏切る言葉だった。

いったいどうして。

わたしが口を開く前に、モモちゃんが言葉を続けた。

「みたまは知っているであろう？ 私の魔法少女の願いを」

それはもちろん知っている。

わたしは魔法少女のソウルジエムを調整する際に、その魔法少女の過去を不可抗力とはいえ見えてしまう。その際にわたしはモモちゃんの願いを知った。

『力が欲しい』。

ただそれだけの、とつてもシンプルな願い。

モモちゃんらしくない願いだと思っただけど、モモちゃんの知る情報や、魔法少女になるときの状況を照らし合わせて考えるなら納得できる願いだった。

この願い事によって、モモちゃんは常人と比べるのも烏滸がましいほどの凄まじい身体能力を誇る肉体を手に入れることができた。

魔法少女特有の願いの結晶でもある『固有魔法』をモモちゃんが



持っていないのは、それすらも肉体に還元されてしまったから。

つまり、モモちゃんにとって自分の肉体こそが願いの結晶で、モモちゃんが一番大切にしているものでもあった。

そしてこの願いの最大の利点は、燃費の良さだった。

固有魔法を持たないというのはデメリットであると同時にメリットでもあった。

魔法を使った魔法少女らしい戦い方ができない代わりに、魔女との戦いに消費する魔力が圧倒的に少ないのよ。

魔法少女にとって、日常生活を送っている時と魔女と戦う時ではソウルジェムが濁るスピードに差が出る。

当然、魔女と戦う時の方が濁るのが圧倒的に早い。日常生活で普通に暮らす分には魔法なんて使わないからね。

魔女と戦って魔法を使って、体を動かして、疲弊して、そしてソウルジェムが濁る。だからグリーンフィードを使って浄化する。グリーンフィードがなければ魔女と戦う。これが魔法少女として当然のサイクル。

でも、モモちゃんは違う。

元々の高い素質に加え、ソウルジェムの観点からするとモモちゃんにとつて、魔女との戦いは日常生活を送ることと大差がない。

だから魔女と連戦しても使用するグリーンフィードが少なかつたり、ソウルジェムを綺麗にせずに数日放っておいても異状が起こることがない。ソウルジェムの汚染という魔法少女が抱える宿命のひとつが軽減されているのよ。

そういう事情もあったからモモちゃんはグリーンフィードにそのままで執着しないし、平気で他人に譲渡することができる。過酷な傭兵稼業をずっと続けられてきたのも、そもそも自分で使うグリーンフィードの個数が少なかつたから。

ここまではモモちゃんが描いた展開通りだった。

そう、モモちゃんはこうなることを予想した上で魔法少女として契約したのよ。

あらかたのキュウベえから説明を受け、そして今叶えたいことと調

和できるように考え抜いた結果見つけたモモちゃんの願い。本当に中学一年生の時に契約したの？って聞きたくなっちゃうよね。

「じゃがの、甘かった」

モモちゃんにとつて完璧だったはずの魔法少女の契約。

病気とはほぼ無縁で、深い傷や損傷が起きても魔力で修復できる魔法少女のベースとなる肉体に加え、純粹に高い戦闘能力とその燃費の良さで生き永らえやすいようにこれでもかと強化された体を手に入れたモモちゃん。

でもその裏に隠された実態は、モモちゃんの想像をはるかに上回っていた。

「この前キュウベえと久々に話をしたのじゃ」

——キミの身体はもう……限界が近いんだからね。

確かにキュウベえは、モモちゃんにそう告げたらしいわ。

キュウベえは本当のことを全て話すわけではないけど、決して嘘は吐かない。そういう存在。

その兆候は今年に入ってから現れ始めたらしい。

わたしもびつくりしたのだけどモモちゃん、他の魔法少女の子との特訓中に攻撃をモロに受けて気絶してしまったそうよ。普段は反応できた攻撃に対して、一瞬とはいえ反応が遅れてしまったみたい。

その時は油断したと自分を戒めて終わりにしようとしたみたいだけど、微かに残った違和感から異変を感じ取ったモモちゃんは……すぐに手を打った。

「それが自分の『後継者』となる魔法少女を、早々に育て上げることだったのよ」

「……っ」

今の神浜はモモちゃんのおかげで戦えない魔法少女の数は減少傾向にある。でも完全になくなってはいない。

モモちゃんが『傭兵』として活動した時から今に至るまで、モモちゃんなしだと生きていけない魔法少女の子もいるし、キュウベえがいる限り新しい魔法少女は増えていく。

そんな魔法少女たちを救う存在……モモちゃんに代わる存在を育

てることにした。

だから前々から『傭兵』になるために勉強していた愛弟子のかりんちゃんを、自らに代わる『傭兵』になれるように手を回し始めた。

急だったと思わない？

あのモモちゃんが相談もなしにいきなり傭兵採用試験をするって言い始めたのよ？

普段のモモちゃんなら入念に相手の予定を聞いてから日程を決めるのに、わたしも含めてみんな聞いたのは前日だったでしょう？ かりんちゃんに至っては当日だった。

普段と変わらない様子だったけどモモちゃん、内心では相当焦っていたのでしょね。

話を戻しましょう。

そんなモモちゃんは特訓とはいえ人生初の敗北を喫して、なんとなく悟っていた自分の体に起こった違和感は、このキュウベえの言葉で確信に変わり、そして思い知った。

自分の体に限界が訪れようとしている、そんな逃れることのできない運命を。

「正直に言おうと、ボクもこんな形でキミの『願い』がキミに牙を剥くなんて思いもしなかったよ」

『願い』は、魔法少女の力の源であると同時に、その魔法少女を中から蝕む猛毒でもある諸刃の剣。

一度願い、手にした力は二度と変えることはできないし、その願いの結果がもたらした因果の縛<sup>も</sup>れは必ずそこに修正という形で収束する。

希望を願った魔法少女はそれと同じくらいの絶望を受け、中には取り返しのつかない出来事を引き起こしてしまうこともある。

そうやってプラスマイナスゼロになることでこの世の中は成立し、ひとりの人間がどんなに無茶な願い事をしたとしても、崩壊することなく回り続ける。

モモちゃんもまた……そんな魔法少女の悲しい運命からは逃れることができなかつた。ただそれだけだつた。

でも、それだけの代償が恐ろしい皮肉となってモモちゃんの体に襲い掛かった。

「キミは願いを叶えて、その強靱な肉体を手に入れた。まさかたったの一撃で魔女を倒すところまで成長するなんてね。でも……その体はどこまでも人間の体だったということだ」

魔法少女の体はあくまでも、もともとの肉体を媒介としている。つまりベースは素体となる普通の人間の体にすぎない。

魔法少女になって多少身体能力が上がるのは、魔法によって無意識のうちに強化されていたから。ソウルジェムの濁りが早くなるのも、常人を超えた魔法少女ならではの身体能力を發揮するために魔力を使っているからだ。

じゃあモモちゃんの場合はどうだろうか。

並の魔法少女をも超越した身体能力、明らかに本人の体重の倍以上の大剣を片手で自在に操れる腕力。そして、そこから繰り出される一撃必殺の破壊力を誇る攻撃。

もうわかるでしょう？

モモちゃんの戦闘スタイルは一切魔法に頼らない物理攻撃ばかり。そして全て大きく体を使うものばかり。

魔法少女になったとはいえ、もともとが人間のものである体への負担が大きすぎるのよ。

「例えるならキミは契約してからこれまでの間、ずっと強烈なブースタードラッグを服用しながら生きていたようなものさ。そう考えるならキミの並外れた戦闘能力も納得できる。

いくら素質があったとしても、ここまで強力な魔法少女が生まれ、そして六年間も生き永らえたのは極めて珍しかったからね。

ソウルジェムが濁りやすかったり、暴発しやすかったりと、抱えるデメリットのせいで、過去の強力な魔法少女たちは極めて短命だったんだ。場合によってはボクもすべてを話した上で契約を持ち掛けた魔法少女もいるくらいにね。

さて、そんなドーピングを服用し続けてきたキミの体が……いつまでもまともでいられると思うかい？」

悪魔の宣告。そうとしか形容しがたい残酷な真実が告げられた。

今まではずば抜けた魔力で強化し続けてきたモモちゃんの体は、成長していくにつれて強化し成長させる余地がなくなってしまう。キュウベえの言葉で言うなら限界を迎えようとしていた。

皮肉なことにモモちゃんの体が、彼女の願いで手に入れた『力』を受け入れることができなくなってしまった。

モモちゃんの体が成長しないのもその副作用のひとつ。

体の成長すらも、自分の『力』を受け入れるためのリソースにしてきたのだから身長は止まったまま。

なんか胸だけは成長しているけど、それはキュウベえですら「わけがわからないよ」と匙を投げてしまう珍現象だったみたいよ。

「今からボクが語るのはあくまで推測でしかないけど、ほぼ確実にいえるキミの運命だ。」

おそらくキミは今年で力の成長が止まるだろう。そして……20歳。人間の定義で『大人』と呼ばれる歳になった時、本格的な弱体化が始まる。

それが一気にくるものなのか、段階的に衰えていくものなのかまではわからないけどね」

19歳の誕生日に調整したつきり、モモちゃんの調整に手応えがまるでなくなってしまったわ。

当然よね。その日こそ、モモちゃんの『力』に体が対応できる最後の日だったんだから。

もうわかったでしょう？

今、モモちゃんの身に起こっている現象の正体が。

キュウベえの言った弱体化は、『老い』という形で実現してしまった。

今まで無理をし続けた体は限界を迎えたことで成長が完全に止まり、彼女の『力』もそれに合わせてもう増えることはない。来年の誕生日を迎えるその日までがモモちゃんの全盛期になるでしょう。

そして……それ以降は、もうモモちゃんはひとりどころかチームを組んだとしても魔女と戦うのが困難な状況になっている可能性が高

いわ。

髪の毛や行動からすでに『老い』の兆候が見え始めている。

この運命からはモモちゃんは逃れられない。

いくら調整してもグリーンフシードをストックしても無駄。

だってモモちゃんの異状は、ソウルジエムじゃなくて彼女自身の体にあるのだから。

魔法少女として生き永らえたとしても、肝心の肉体が機能しなければどうしようもない。寿命という人間の限界に逆らうことはできない。

これがモモちゃん……星奈百恵の身に起こっていることの真相よ。

沈黙が調整屋の待合室を支配している。まあ、そうなるのも無理はないわよね。

ここにいる全員がモモちゃんを頼りにし、慕っていた魔法少女たちですもの。

わたしだつてすぐに受け入れられずに、教えてもらった日は店仕舞いをして泣いたわ。

かりんちゃんはモモちゃんの弟子として、一番近くでモモちゃんの戦いを見続け、そしておそらく一番モモちゃんの寵愛を受けた魔法少女。

かつて迷走していた時も一番傍で寄り添い受け入れてくれた出来事も手伝つて、かりんちゃんにとってモモちゃんは大きな心の拠り所だったのでしよう。

ななかちゃんは付き合的に一番短いし、他の四人と比べて関係も浅いけど、モモちゃんがプライベート以外で、仕事関係で連絡先を交換した唯一の魔法少女。

モモちゃんに認められた稀有な魔法少女で、彼女もまたモモちゃんを慕っていた。

そうじゃないと、公私を混同せず比較的ドライな性格のななかちゃんが、モモちゃんの異変に気付いてすぐにここに来ることなんてしな

いでしよう。

十七夜やひなのだって、モモちゃんを重宝し尊敬していた魔法少女。

モモちゃんがいたから東西中央の魔法少女たちによる紛争が収まったし、一年前の鏡の魔女による事件の時だって、完全中立のモモちゃんがまとめ役となって事件解決に動き、ストップパーとなったことで協定違反する魔法少女が現れることなく、比較的穏便に済ませることができた。

そして……やちよさん。

彼女にとつてのモモちゃんは親友以上の存在にまで昇華していた。

一部ではモモちゃんは『七海やちよの切り札』なんて呼ばれることもあるくらいにやちよさんはモモちゃんに頼っていたし、変わることなく腰を据えているモモちゃんがいたからこそ、あの悲惨な事件から立ち直ることができた。

多分かりんちゃん以上に、モモちゃんを抛り所に使っていたのでしようね。

「……百恵は、アイツはなんて言っていたんだ？」

真っ先に口を開いたのはひなのだった。

やっぱりひなのは強い。

自分の気持ちよりもモモちゃんが何を言ったのかを聞いて、それを尊重しようとしてくれている。

身長云々で会う度に張り合っているけど、その実仲良しで互いに近い距離で付き合ってきた間柄なもの。

「うむ、そうだな。星奈はこの運命を知って、一体なんて言っていたんだ？」

「確かに、それは気になりますね」

続くように十七夜とななかちゃんが聞いてくる。

このふたりもモモちゃんと適切な距離で接してきた魔法少女。だからこそ、まだ心に余裕がある。

余裕がないのは……かりんちゃんとやちよさんのふたりだけみたいね。

これは想定通りだから落胆なんてしないわ。わたしだって、落ち着くのに三日もかかったもの。

「モモちゃんは、受け入れていたわ。この運命を」

モモちゃんの運命を聞いた時、取り乱して縋るように泣いてしまったわたしを、モモちゃんはただ優しく抱きしめてくれた。

わたしなんかよりもよっぽど悲しいはずなのに、それでもモモちゃんは変わることにはなかった。

「なーに、人はいつか死んでしまうものじゃ。私はちよっぴり、それが早いだけであろう?」

なんてカラカラ笑いながら言っていたわ。ポジティブすぎるけど、モモちゃんらしかかった。

こんなにあっけらかんと自らの寿命を受け入れられる人ばかりなら、医者も苦勞はしないでしょうに。

「それにのう、不思議なことに私は自分が死ぬことが怖くないのじゃ。

この神浜には強い魔法少女がたくさんおるし、弱かった魔法少女も少なくなってきた。

東西中央の問題も沈静化して起こらなくなったし、それぞれ強力なリーダーたちがいて、手を取り合おうとしておる。

完全中立ならみたま、お主もいるし、私の後継者であるかりんだっている。この神浜を引っ張っているようなポテンシャルを持つ魔法少女だっている。

やり残したと思うことはない。悔いはない。老兵は死なずただ去るのみじゃ。

20歳になったら傭兵を引退して静かに暮らそう。

そして……体が完全に死ぬ間際に、自分の手でソウルジェムを砕く。

生き恥を晒すつもりはない。ひっそりと朽ち果てようぞ」

それがモモちゃんが出した答え。

引退して、誰にも悟られることなく寿命が来たらひとりで死ぬつもりよ。

自分のことで悲しませる人を出したくないからって、モモちゃんは



確かにそう言ったわ。

「……そうか」

「……ふむ」

「……………」

三人は黙って目を瞑った。

そして。

「それなら……そこまで覚悟が決まっているなら、アタシはなにも変わらない。

もうお節介はしない。

今まで通りに、最後までアイツと付き合うぞ。

それが本人も望んでいることだろう」

「ふっ、そうだな。

星奈が気にしていないと言うのなら、自分も余計なことはするまい。

誇り高い傭兵としての大往生を見届けよう」

「ですね。

百恵さんを慕う者のひとりとして、彼女の意志を尊重しましょう

それが私にできる彼女への手向けです」

それが三人の出した結論だった。

「ええ、わたしも同じよ」

さすがにいきなり症状が出た時は心配になって深く聞いちゃったけど、もうわたしも追及するつもりはないわ。

モモちゃんがどうしてもダメそうなとき、そしてモモちゃんがわたしを頼ってきたときだけ、手を差し伸べるつもり。

「……そうなの。先生はいつだって強かったの。

そんな先生が大丈夫って言うなら、わたしも信じるの」

かりんちゃんも心を決めたみたいね。

まったく、本当に強いマインドを持っている子ねこの子は。こういう子は長生きするわ。魔法少女としても人としてもね。

もしかしたら、魔法少女の真実を知っても、平気な顔で乗り越えちゃうかもしれないわね。今はまだ教えられないけど。

さて、残っているのはただひとり。

「私は……」

俯いて固く手を握っているやちよさん。

まだ、決められないみたいね。でもそれは仕方のないことだと思う。

よほど強い心を持つ人間じゃないとこんな話は耐えられないと思うし、加えてやちよさんは過去、目の前でふたりの仲間を失っている。立ち直りつつあるけど乗り越えることはできていない。

そんな中で今、一番近いところにいる親友の命が尽きようとしているのだもの。

受け入れきれなくて当然よ。

「無理して今決める必要はないわ。わたしだって受け入れはしたけど、諦めてはいないもの」

モモちゃんの運命は理解できた。でもだからと言ってこのままモモちゃんが弱っていく姿を黙って見ているつもりはない。

せっかく調整屋なんて、魔法少女との繋がりの深い店を開いているのよ。

モモちゃんの体に効果のある魔法少女がいないか、わたしは探している。

「うむ、自分も東に有効な魔法少女がいないか、当たってみるとしよう」

「だな。中央はアタシに任せろ」

「わたしもお客さんの中にそういう魔法が使える人がいないか聞いてみるの！」

「皆さんほどの人脈はありませんが……私も知る限りの魔法少女に声をかけてみるとしましょう」

それは他のみんなだって同じ。

わたしたちがモモちゃんのためにできることはこれしかない。

悲しんでいたって仕方がない。

悲観するくらいなら行動しないと、諦めてこのまま自分の運命に身を委ねているモモちゃんを助けることなんてできない。

「……そうね。私は百恵の運命を簡単に受け入れられない。だけど、足掻くことなら今からでもできるわ。」

西は任せてちょうだい。なんとしてでも百恵を助ける。

勝手にひとりで死なせてたまるものですか」

やちよさんの目に強い光が戻った。

西のリーダー七海やちよ、東のカリスマ和泉十七夜、中央のまとめ役都ひなの、二代目神浜傭兵御園かりん、広い人脈を持つチームのリーダー常盤ななか、そしてわたし、調整屋の八雲みたま。

神浜の魔法少女の中でも指折りの六人全員が、最強の魔法少女の背負う運命に抗うために立ち上がった。

「ふう……いいお湯であったのう」

今日も、楽しい日であった。

大学で授業を受けて、木崎衣美里先生のところでみんなと喋って、笑って……こんなことは忙しかった一年前までは味わうことができなかったのう。

仕事は本当に少なくなった。抱えているのはななかを持ち込んできた一件くらいじゃ。

私が見てきた魔法少女たちは皆立派になって私の元から離れていった。いいことじゃ。いいことなのじゃが……なんでじゃろうな。嬉しいはずなのに妙に寂しく感じてしまう。こんなことは今までなかったのじゃがな。

ふと、部屋の中を見渡してみる。

今年で四年目。もう慣れ親しんだはずの私の部屋なのじゃが……妙に広く感じて仕方がない。

そして静かであった。当たり前じゃ。私はひとり暮らしなのじゃから。

他の人の声がしなくて当たり前。四年もこの部屋に住んでおるのじゃぞ。慣れっこじゃったはずじゃ。なのに……。

「テレビでも点けようかの」

誰かの声がないと落ち着かない。この静けさが妙にもどかしい。こんな年になって涙が出そうなくらいに寂しくて仕方がない。

誰か……。

……いかんいかん！ 気をしっかり持つのじゃ星奈百恵！

何もない空間に伸ばしていた手を引っ込め、頬を軽く叩いて奮い立たせる。

泣いてどうする、大丈夫じゃ。私はひとりではない。沢山の友達がいるであろう？ 誇れる愛弟子だっているであろう？ じゃから寂しくなんてないのじゃ。

それに私は皆に頼られる存在なのじゃ。そんな私が弱気でどうする？ 堂々とせんか！

「……よし！ 髪の毛を乾かすとしようかの！」

鼓舞して、テレビから流れる音を聞いて調子が戻った私は洗面所に戻る。踏み台に乗ってドライヤーを手にした。

身長は悲しいことに伸びることはなかったが、胸だけは成長した。私が目指す理想の体型でないのは悲しいが、グラマーではあるかのう？ うーむ、よくわからん。

「あーあー、とうとう真っ白けっけになってしまったのう」

私の『願い』の副作用のせいで老化が始まってしまった私の体。

その症状が髪の毛に現れていたのじゃが……早かったのう。6月に入る間もなく真っ白になってしまったわい。

せつかくじゃし染めてみようかのう？

うーむ、無難に黒かの？ 金髪は……なんか別の人物と被りそうじゃからなしじゃな。茶髪も同じ理由でなしじゃ。

ちよつと派手に思い切って紫なんていうのも面白いかもしれんのう……って、それはただのおばちゃんの発想ではないか！ 余命宣告

を受けた残る寿命が短い身とはいえまだギリ未成年じゃぞ私は！  
却下じゃ却下！

うーむ……うーむ……。

……………。

……。

「まあ、染めなくてよいか！」

お金の無駄じゃしの。

それに、これが今の私なのじゃ。ならば堂々どこの白髪で街を歩こうではないか。

全部白髪になったからなんじゃ。私はまだまだ元気じゃし、バリバリの現役じゃわい！

「うむ、胸を張って最期まで私らしく歩いて行くのじゃ！」

## RTAパート9　そしてアザレアの花咲く

イベントに立ち向かっていくRTAはーじまーるよー！

いやあ、まさかこんな早くに強制イベントのひとつである百恵ちゃんの魔法少女ストーリーを見る羽目になるとは……。

倍速処理して吹っ飛ばせるとはいえタイムに影響が出るのでやめてほしいですね、本当に。

さて、気を取り直しまして6月ですよ6月。ここから怒涛のイベントラッシュです。

百恵ちゃんの魔法少女ストーリーなんてRTA的にどうでもいいイベントとは違って、絶対に、ぜえーったいに失敗できないイベント第2弾、『そしてアザレアの花咲く』が始まります。

以前にもお話しましたが、第一イベントである『バイバイ、また明日』とこの『そしてアザレアの花咲く』をクリアしなければ、最終イベントである『散花愁章』が起これないので、とんでもないガバの化身である更紗帆奈が出てきてくれません。

よって、このアザレイイベントもしっかりクリアしていきましょう。

前回の団地イベントとは違って、今回のアザレイイベントは事前になんか仕込むことができませんからね。そしてその仕込みは既に終わっています。

団地以上のすっごいタイム叩き出してやるからなく、見とけよ見とけよ。

といってもですね、こちらからは動きません。やちよさんか組長からの連絡を待ちます。

もう6月に入っただけなら経ちましたし、アザレア組が神浜にやってきていてもおかしくありませんからね。

ななか組とアザレア組の出会いには偶然魔女の結界内で鉢合うことなので、協力関係とはいえ基本的には一緒に行動することはないのでこちらからは干渉不可能です。……て、お？

電話が鳴っていますね。お相手は……『常盤ななか』！

来たっ。来た。来たなあっ!? さすが組長! 動くのが早い!  
サラマンダーより、ずっとはやい!!

うっす、組長。お疲れさまっす。本日はどういったご用件で?

「最近、神浜で魔法少女が昏倒しているという事件が起こっています」  
多分それはただの噂だと思っんですけど (名推理)。

この事件は実際には誰も昏倒していなくて、更紗帆奈がアザレア組  
を嵌めるために仕組んだでっち上げです。

というか、もうこの事件が起こっている時点で無事にイベントが進  
行していますね。そしてここまで来ているということはバッドエン  
ド直行ルートではないです。一安心。

「犯人と疑われているのは、私も偶然出会って知り合った三人の魔法  
少女です。尤も、そこまで親密な間柄ではないのですが。しかし、私  
はその三人が犯人ではないと考えています」

そうだよ (肯定)。

全部更紗帆奈って奴の仕業なんだ。

「その方たちを陥れようとしている何者かの作為を感じるのです。悪  
意が籠っているような作為を……。ですのでどうか、この事件の真相  
究明に手を貸していただけませんか?」

あ、いいっすよ (快諾)。受けます受けます (食い気味)。 (情報提供)  
ありがとナス!

早速調査にイクゾォー! デッデッデデ……って、おや? また電  
話ですか。

お相手は……『七海やちよ』! おまえのことも好きだったんだよ  
!

ちわっす、やっちゃん! どうしたんだい?

「百恵、緊急事態よ。この神浜で誰かが魔法少女を昏倒させている、っ  
ていう噂が流れているのよ」

そう…… (無関心)。

アッハイ。それはもう知っていますんで、他の情報をくださいませ  
んかねえ?

「それから……覚えてるかしら? 私のチームメイトだった十咎<sup>とがめ</sup>も

もこが昨日被害に遭ったのよ」

なんだって！ それは本当かい!?

ももこちゃんを襲うなんて……アタイ……ゆるせへんっ!! ゆるせへん……アタイツ……!! 人間の屑がこの野郎……!」

勿論協力しまつせやつちゃん！ 星奈百恵、動きます！

まあ、動くことは確定でしたし、今動いたところで事件は解決しないですけどね!

このイベントはアザレア組こと静海しずみこのは、遊佐葉月ゆさはづき、三栗あやめみくりの三人の無実を証明し、なおかつこのはを説得して神浜に残ってもらうことがクリア条件です。

犯人探しをしても時間の無駄です。

このアザレアイベントでは何をどうしても更紗帆奈を捕らえることはできません。

だから百恵ちゃんは犯人探しではなく、疑惑のある「最近、神浜で見かけるようになった魔法少女」が犯人かどうかの調査を請け負います。

そしてやちよさんも昨日ももこが被害を受けましたので、犯人と思わしき疑惑のアザレア組に接触を図ろうとします。百恵ちゃんもそれに便乗して会いに行くとしましょう。

というわけでやつちゃん！ 今すぐみかづき荘に行くから、一緒にアザレア組に会いに行こうず!

「わかったわ、ありがとう百恵。待っているわ」

ということので気を取り直して、改めて調査にイクゾオー！ デッデッデデデ！ (カーン)

「……あなたたち、誰?」

「……………」

「だ、誰さー!」

葉月編第10話にダイナミックエントリー成功!

やったぜ。ガバナし、無理なしの最速でのアザレアタイムが狙えま



すよクオレハア……。

おっと、ちゃんとご挨拶しないとね。

「私は七海やちよ」

そして神浜で傭兵をやっている星奈百恵ちゃんだよ。はい、これで知らない人たちじゃなくなったよ。だからそんなに警戒しなくてもいいんだよ。やっちゃんも百恵ちゃんも神浜じゃあ有名な人なんだよ。

「七海……星奈……」

「……あ、七海やちよと星奈百恵って……！ ほら、前に話した……」

「……神浜でも最古参って言われているのと……神浜最強って言われている魔法少女……?」

「そう、それ……ですよね?」

そうだよ（肯定）。

良かったく葉月ちゃんが紹介してくれて。葉月ちゃんは……（神浜の）ファミリーみたいなもんやし。

ここからはしばらくやちよさんにお任せしましょう。

やちよさんには一度会った魔法少女の魔力の波長を記憶し、照らし合わせることで、対象の人物が過去に会った魔法少女と同一人物かを判別できる特殊能力がありますので、これでアザレア組の疑惑が消えます。

そしてここからが百恵ちゃんの腕の見所さん!?!ですよ！

「……どこに連絡をしているのかしら?」

どこって、そりやあまず組長やろ? それから調整屋のみたまさんやろ? 中央のみゃーこ先輩に東のなぎたん、愛弟子のかりんちゃん。ももこにフェリシアだけど?

やちよが確認して、百恵ちゃんが神浜の有名人＋アザレア組とこの事件に関わりのある魔法少女全員に無実を証明するための連絡をします。

するとあら不思議。

次の日からはアザレア組の疑いが綺麗さっぱり消えている、ということになるわけですな。

これは調査したのがやちよと百恵ちゃんというビッグネームふた

りに加え、その調査結果を神浜の重鎮ふたりと調整屋、人気の傭兵、そして事件に巻き込まれた被害者本人が発表しているからです。説得力が強すぎんよ。

組長に連絡したのは任務完了の報告をするため。フェリシアはなんだかんだで非公式ですが『傭兵』の仕事をしていますし、もうあやめと出会って友達になっていますので、友達の無実を晴らすために喋ってくれるはずですよ。

ここまですれば流石にこのはもこの街から出ようとは思わなくなるでしょうし、ももこが襲われて激おこぷんぷん丸になっている水波レナちゃんもこのはたちに突つかかったりしないでしょう。

はい！ アザレアしゅーりょー！ お疲れっした！

じゃあな、アザレア組のみんな！ 神浜はおまえたちを受け入れるぜ！ あとこれ連絡先や！ 『散花愁章』の時は最真にしてな！

いや、良いタイムでしたね。

じゃあ次のイベントが来るまで流しましょうかね。

なんで葉月から電話かかってくる必要があるんですか？

え、ちよ、電話くれるの早い……早くない？ 昨日の今日やで？

ま、まあええわ。とりあえず出ましよう。

にーん、どつたの、センチ？

「百恵さん……その、お願いしたいことがありました」

お願い？ なんだい？ 百恵ちゃんに言っごらん？

「十咎ももこさんとコンタクトを取りたいんです。協力していただけませんか？」

へええっ!? ももこですかあ!? ということは……なんてこつたい！

このはさん神浜から出ていこうとしていらっしやいますよ！ あれだけ手を回したのに！

本当に他人を信じようとしませんかあの人。頭に来ますよ。

ですが百恵ちゃんに頼ってきてくれてよかったです。

本来なら葉月はかこちゃん経由でももこの学校を突き止めて、もも

この下駄箱に手紙を仕込みます。おまえもしかして、ももこのことが好きなのか？（すつとぼけ）

そこからももこを呼び出して、葉月は一緒に犯人探しをするのですがここでも分岐がありまして、ももこの説得を断念するとバッドエンドにまつしぐらですし、原作通りに葉月が手紙で呼び出しをしようとした場合、ももこがそれに応じないことがあります。難易度ハードだからね仕方ないね（レ）。

よって、ここで自然と百恵ちゃんが介入できるのはありがたいです。

ということ、百恵ちゃんが立ち会うことを条件にオーケーサインを出しましょう。

「ありがとうございます。時間と場所は——」

はいオーケーオーケー。じゃああとはこつちに任せてね。

ももこちゃんに電話しましょう。

オッス、ももこちゃん！ おひささ！ やっちゃんから聞いたよ。えらい目に遭ったなあ。

「心配ないですよ。もうなんでもないですから」

じゃあ明日の放課後に会わへん？ ももこちゃんに会ってほしいなって思う人がいるんですよ。遊佐葉月っていう子なんですけどね。ももこちゃん好みじゃないかなあつて思いますよ。

「……はあ。わかりました。アタシも会ってみたいと思っていましたから」

ありがとナス！（明日の放課後）お待ちしてナス！

はい、ということ、このアザレイベント、もうちよつとだけ続くんじゃ。

葉月編第12話にイキますよ〜イキますよ〜イクイク……ヌツ！

「うおっ、やちよさんから聞いた通りだ。お久しぶりです百恵さん」

時間きつかりに来てくれるももこちゃんは人間の鑑。

じゃけんファミレス行きましょうね〜。イケメン系女子の葉月

ちゃんが待つてるぜい。

「ここですー!」

「……遊佐葉月さん……?」

「はい、そうです! はじめまして!……十咎ももこさん。百恵さんもご協力ありがとうございます!」

はい、引き合わせに成功です。

一応ももこは、やちよさんから話を聞いていますが、百恵ちゃんからもここに来る道中に話をしておきました。まあ、ももこちゃんの返事は自分の目で確かめてみるの一点張りですが、実は効果抜群です。

「アタシらは犯人じゃない……。だからこういうお願いがあります……。アタシと一緒に犯人を捜してもらえませんか?」

「……へえく……。そりやまた大胆というか……。……よし、信じた!」  
はい、ここ←です! お分かりいただけましたでしょうか皆さん!

本来ならここでももこがもう一度葉月に向かって「まだ疑っているぞ」と返し、葉月がももこを説得するか、諦めるかの分岐が発生するのですが、一発オーケーをももこはしてくれましたのでそこまで行きませ

ん。  
「やちよさんや百恵さんの言う通りだ。あんたの目、曇りがないよ。正直に腹割って話してる!……そう、アタシは感じたね」

つまり正解ルートの確定演出というわけです!

これはやちよに加えて好感度の高い百恵ちゃんからの口添えがあつたからこそできる芸当です。

このために第一次みかづき荘解散の時にももこの好感度を上げておいたんですね。

あのイベントはももこの好感度が爆上がりする激ウマイイベントですので、数回しか交流していなくても高い好感度修正を見込めます。やったぜ。

「……十咎さん……!」

「ももこでいいよー!」

「ももこ! わかってくれてありがとね!」

ヨシ！（現場猫） やっぱ……金髪の……イケメンコンビを……最高やな！

ということで百恵ちゃんはここでフェードアウトしましょう。もうここは大丈夫ですし、一緒に行動するとタイムロスに繋がりますからね。

だってどうせ更紗帆奈を捕まえられないんですもん。時間の無駄です。自分で調査しつつアザレア組は無実だということが広がるように手を打つと言いながら去りましょう。

まなかちゃんとエミリー先生に連絡して……はい、終わり！

ふう、これでようやくアザレイイベントはお終いです。あとは気長に『散花愁章』まで待ちましょう。どうせ一週間か、二週間も経たないうちに発生しますからね。今の比較的安全なこの状況なら、流石のこのはも葉月がももこと行動していることを知っても取り乱すことはないでしょうね。

はい、というわけでお疲れさました。

じゃあ、流しますね。

「百恵、緊急事態よ。今もこのチームの子から連絡があつて、水名神社でもう1人の相方の子が静海このはに決闘を申し込んだらしいわ」  
なんでレナちゃんがあつかかる必要があるんですか？

ふざけんな！（声だけ迫真）

はあくつつかえ。やめたらこのチャート。

百恵ちゃんのサービス（ショートカット）をことごとく拒否りやがつて！ なんて百恵ちゃんに気持ちよく走らせねえんだ！ 百恵ちゃんはタイムが惜しいんだよ！

とはいえ介入せざるを得ません。まさかまさかのアザレイイベント続行です。しかも最後まで。こんなんじゃないよ。

まあ、こんな時のための保険もちゃんと用意してあります。早速連絡を入れましょう。

あ、もしもし組長？

「百恵さんの方から連絡していただけるとは珍しいですね。もしや、事件に進展が？」

おう、ちよつとアザレア組にトラブルが起こって色々ヤバいから大至急水名神社に来てくれるかい？ あとお願いだから、かこちゃんも連れてきてくれ！ 百恵ちゃんも向かうし、詳細は追って連絡するからさ！

「……………わかりました。すぐに向かいます」

はい！ これでかこちゃんはななか様が連れてきてくれます。

葉月ちゃんが連絡を入れているかは難易度ハードのせいだ不確定なので、組長経由で確実に呼び出しましょう。

さらにここにかこちゃんに動いてもらうことで利点もひとつ増えます。

やちよに連絡をもらってからすぐに動いているので、誰の決断が下されるかの最後の分岐が起こる前に乱入して、強制的に正解ルートであるあやめ編第10話に突入させます。

分岐が終わっている場合はバッドエンドに向かってしまう場合があるのでセーブポイントからのやり直しです！ それだけはなんとしても阻止です！ そんなことしたらタイムが壊れちゃうだろ！

おっと、忘れずにもうひとりにも連絡を入れましょう。

おっ、フェリシア！ 起きてるかあ？

「ふあ……………なんだよ百恵。寝てたつてのに……………」

大丈夫つすよバツチエ寝ぼけてますよ。ダメみたいですね。

おいゴラア！ 起きろ！ 水名神社来んだよ！ おいゴラア！

水名神社に來い！ あくしろよ！ アザレア組がトラブル起こしてんぞ！

「は？…まさかあやめが危ねーのか!？」

そうだよ（肯定）。

このままだとバッドエンド直行で「あ、あやめーっ！」になっちゃうぞ！ だからはや水名神社に來い！ 40秒で支度しな！

「わかった！」

はい！ これで公園で惰眠を貪っていたフェリシアも水名神社に向かいます。

これで仕込みが完了しましたので百恵ちゃんも向かいましょう。

「百恵さん！」

「おっ！ 百恵！」

「百恵さん、いったい何が!？」

水名神社のすぐ近くでかこちゃん、フェリシア、そして組長と合流できました！

かくかくしかしかまるまるうまうまってことで静海このはがパニクってるんや！ 今すぐ止めるで！

「だあーっ！ つまりどつかの分からず屋が余計なちよっかいをあやめたちにかけてたってことだな!？」

「なるほど……恐れていた事態が起こってしまった、というわけですね……!？」

「だから葉月さん……。あやめさん……!？」

ほんと、あのさあ……。レナちゃんさあ……。しゃーない、切り替えてく。

ということとで三人を連れてやけくそ気味にあやめ編第10話にスライリツシユエントリーじゃーい！

「あやめー！ どこにいったあーっ!？」

「あやめさーん！ 葉月さーん!？」

「フェリシア！ それにかこも!？」

ヨシ！（現場猫）あやめが無事ということはなんとか間に合いましたね！

「百恵……それに常盤さん……!？」

「おや、これは七海さん。先日はどうも」

あれ、やっちゃんと組長知り合いなん？ おっ、大丈夫か大丈夫か（ガバ）。

あつ、そうだ（唐突）。そういえば百恵ちゃんの魔法少女ストーリー

で一緒に喋ってましたね。すっかり忘れてました。

って、そんなことはいいんすよ。問題はアザレア組ですよ。

えっと今はどのシーンなんでしょう。まだこのは編第14話の途中でしょうか？

「星奈百恵に常盤ななかまで……！　そ、それに……あやめ……その2人は……」

「あ……。このは……あ、あちしも、このはに黙ってたことがあるの……」

あつ、これかあ！（あやめ編第10話冒頭）

ということは……あつぶえつ!?　丁度分岐点だったってことじゃないか！　セーフ！　ギリギリセーフ！

「……あちし……この街で、できたんだ。……多分……友達ってやつが……」

良かったらあやめちゃんが説得してくれて。あやめちゃんも……

（神浜の）ファミリーみたいなもんやし。

「私たち、まだ知り合ってから全然経ってないじゃない？　でも、もつと時間をかければ、もう少しお互いが見えるかも……。そう思わない？　ね、百恵？　みんなも」

そうだよ（便乗）。

だからこのは、おまえはもうここ（神浜）から出られないんだよ！　ジュージューになる（神浜から出て行かないと言う）までやるからなあオイ！

「……ふう……。ありがとう、かこさん、フェリシアさん……。これからも、あやめをよろしくね……」

工事完了です。はい！　これで本当に万事解決です！

かこちゃんもフェリシアもまっすぐで純粋な良い子なので、これにはさすがのこのはもノックアウト！

この後にやちよさん、組長、このは、葉月と話し合いがあるのでもう少しだけ続きますが、倍速処理しちゃって大丈夫！

これにて絶対に失敗できないイベント第2弾『そしてアザレアの花咲く』無事クリアです！　ぬわああああん疲れたもおおおん！



チカレタ……。

いやあー、ショートカットを狙ったんですがことごとく空振ってしまいましたね。

仕込みがあったとはいえ介入もかなりギリギリを攻めていたのでほとんど博打でしたが、最後は綺麗に締まってにっこり。結果的にタイムも、通常プレイの半分ほどで済んだのではないでしょうか。いくつかガバもありましたが終わり良ければ全て良しです。

最終イベントの『散花愁章』まで倍速処理するので、次回はそこでお会いしましょう！

ご視聴ありがとうございました！

S i d e . 遊佐葉月 神浜最強と最古参

アタシたちは誰かに嵌められている。

神浜の児童養護施設『つつじの家』の存続を三人の願いで確固たるものにして、そこからは各地を転々と移動しながら活動してきたアタシたちは、神浜で魔法が増加しているという情報を手に入れ、拠点を神浜に戻した。

魔法少女としての判断として、間違いはなかった。

魔法が多い方が必需品であるグリーンフィードの確保に困ることがなくなるし、近隣に住む魔法少女との衝突も少なくなる。

一石二鳥、将来的に見ても決して間違っていない判断だったはずなんだ。

でも……いぎ、神浜に戻ってみると、そこはアタシたちにとって厳しい環境だったということに気が付かされた。

神浜魔法少女昏倒事件。

神浜に越してきてアタシの仲間の三栗あやめによやくできた同学年の友達……夏目かこちゃんと深月フェリシアちゃんが仕入れてきた事件。

縄張りのためなのか、なにかほかの理由があるのかはわからないけど、神浜の魔法少女が何者かによって襲われ、魔法で昏倒させられるという事件が起こった。

そして、その犯人として疑われているのが……アタシたちだった。

「なんでさー！ そんなわけないよー！」

真っ先にあやめが反論した。

まあ、本当にやっていないからそうなんだけど、今アタシたちが何を言ったところで信じてくれる人は少ない。

でも、アタシたちを公園に呼んだかこちゃんとフェリシアちゃんは、その数少ない人たちだった。

アタシたちがやってないと何の疑いもなく信じてくれて、内心凄く嬉しかったのは秘密だよ。

しかもそれは、かこちゃんのバックにいる常盤ななかという油断も

隙も無い魔法少女もアタシたちを信じてくれているらしく、誰かがアタシたちを陥れようとしていると考え、独自で調査をしてくれているみたいだった。

フェリシアちゃんは昔彼女と衝突が会ったらしく全然信じていないみたいだけど、かこちゃんの様子からして彼女は味方と見て間違いないなさそうだ。

そしてアタシも、誰かに嵌められていると考えていた。

この際犯人のことは語弊があるかもしれないけど、とりあえずどうでもいい。問題なのは今、アタシたちにかけている疑いをどうやって晴らすかだ。

やったことを証明することは簡単でも、やっていないことを証明することは難しい。

闇雲にやっていますよアピールをしても逆効果。

そしてこの噂がさらに広がったら、非常に面倒臭いことになる。

最悪、昏倒した魔法少女の友達とかが報復に来る可能性だってあるんだからね。

撃退に失敗して傷つけるわけにもいかないし、だからと言って大人しく受け入れることもできない。

さって、どうしたものか……。

あとこれは別の問題だけど、この話はアタシのもうひとりの仲間……静海この話にも話さないといけない。

そしてこの話は、つつじの家の一件からアタシとあやめ以外を一切信用していない。

そんなこの話をして……最悪、神浜から出ようと言いかねない。それはダメ。

だってあやめがようやく、自分の力で作った友達がふたりもいるんだよ？

かこちゃんもフェリシアちゃんもとってもいい子だし、常盤ななかさんのように、こうしてアタシたちに救いの手を差し伸べてくれる存在だって神浜にはいる。

そして仮に今、この状況で神浜から出ていったとしても、アタシた

ちにはずつとこの噂が纏わりつくことになる。

新しい場所に移っても、そこにこの噂が流れちゃつたらまた引越さないといけない。それじゃあ神浜を出た意味がない。

それに今出て行ったら、本当にアタシたちが犯人のように見えてしまうではないか。

だからこそ、アタシたちの無実をなんとしてでも証明する必要がある。

さて、それを踏まえた上で、どうしたもんかな……。

「でもきつと大丈夫です！ ななかさん、神浜最強の魔法少女に協力要請を出すって言っていましたから！」

「え？」

色んな課題に頭を悩ませていたアタシは、絶対に聞き逃してはいけないフレーズがかこちゃんの口から飛び出したことに反応し、素で声をあげてしまった。

……神浜最強の魔法少女？

「それって……百恵のことか？ かこ」

「はい！」

「そっか！ よかったなあやめ！ 百恵が動くななら間違いないぞ！」

「え？ え？」

さつきまでとは一転して明るくなったかこちゃんとフェリシアちゃんにあやめが混乱している。そしてアタシも混乱している。

「ちよつと待ってどういうことかな？」

アタシはふたりからその最強の魔法少女について聞き出すことにした。

『傭兵』 星奈百恵。

フェリシアちゃんと同じ『傭兵』だけど……神浜で『傭兵』と言ったら真っ先に思い浮かべるのがこの星奈百恵さんらしい。

フェリシアちゃんの傭兵が『自称』なら、彼女の傭兵は『公称』。

誰もが認めた、確固たる地位を築き上げている大物魔法少女。

『完全中立』『神浜最強』『大傭兵』『小さき大星』『スピードスター』

『七海やちよの切り札』……数々の肩書きを持ち、剣圧だけで使い魔を

屠り、たったの一撃で魔女を滅ぼすほどの戦闘能力を誇るといふ、まさに最強の魔法少女だった。

中でもアタシが着目したのは、彼女が『完全中立』だということ。星奈百恵さんは神浜の魔法少女全員の味方であると宣言していて、そして偏りをなくすためにどこのチームにも属すことなく、東西中央差別することなく、助けを求めるなら誰でも平等に力になってくれるということだった。

「百恵さんは去年から、私のチームの支援をしてくれていました。なかなかさんも慕って頼りにしていて、時々出す仕事の依頼も完璧にこなしてくれるんですよ」

「オレもあいつに戦い方を教えてもらっていてな！ たまに飯を食わせてもらってたんだ！」

そしてその大物は奇しくもこのふたりと良い関係を持っているらしい。

そしてかこちゃんのチームのリーダーである常盤ななかさんの言葉を信じるなら、その大物がアタシたちのために動き出した……ということになる。

光が見えたような気がした。

このふたりの言っていることが全部真実なら、この星奈百恵さんはアタシたちの味方になってくれる。

『完全中立』で依頼通りに仕事をこなしてくれるのなら、渦中の人であるアタシたちにでも手を差し伸べてくれるはず。

そして、星奈百恵さんは大きな影響力を持つ魔法少女。

彼女さえ味方に引き込んでしまえば、間違いなくアタシたちの無実を証明することができる。

「いいことを聞いたよ。ありがとうね、かこちゃん。フェリシアちゃんもね」

「はい！ きつと大丈夫ですから！」

「あやめ！ そんなつまんねー噂、百恵なら簡単に吹き飛ばしてくれるからな！ 安心しろよ！」

悩みが多少とはいえ軽減されたアタシは家に帰って、常盤ななかさ

んからの情報としてこのはにも話した。まるつきり嘘でもないしね。  
「……そうなの」

こののはの反応は、アタシが思っていたよりも冷静だった。  
若干の違和感はあるけど、嬉しい誤算だった。このはなら今すぐ  
神浜から出ようと言い出してもおかしくなかったから。

とりあえず様子見をするということの話が決まったその日の夜。  
河川敷で魔女退治を終えたアタシたちに、ふたりの人物が接触して  
きた。

すらっとしたモデル体型な青い魔法少女と、多分あやめよりも背の  
低い白髪の女の子。

女の子の方は変身していなかったけど……間違いなく魔法少女だ  
ろうね。あやめよりも年下だろうに……。

でもその胸から下げているものを見るに、最近の子は発育がいい  
なあって思う。

「私は七海やちよ」

モデル体型の人が自己紹介した。予想外の大物だった。

まさか西の魔法少女のリーダーが直々に訪ねてくるなんてね。  
まあ西の魔法少女が主に被害に遭っている以上、動かざるを得なかつ  
たんだらうね。

それでアタシたちのところまでわざわざ来てくれたってことだ。

でもなんでかなあ、敵意を全く感じない。

嬉しいことなんだけど、ちよつと不気味だね。

「私は星奈百恵という」

「……え？」

女の子が言い放った言葉に、今日二回目の素の返事をしてしまつ  
た。

この子が、星奈百恵さん？ 神浜最強の？

うっそー……。でも、隣に立つ七海やちよさんは全く表情を変えて  
いないし、冗談というわけでもなさそうだった。ということは本当に  
彼女が……。

となるとするならなるほど、七海やちよさんは切り札を引き連れて

やってきたってことだ。

随分アタシたちを高く見積もってくれているみたいだね。

「……神浜でも最古参って言われているのと……神浜最強って言われている魔法少女……?」

「そう、それ……ですよね?」

なんともアレなこののは言い方に冷や汗を流しつつ、アタシは極めて明るく振舞って場を和ませようとする。

「なっはははー! うむ! 私は確かに『神浜最強』なんて周りから呼ばれておるのう?」

「……そうね、私も長い間、やっているわ……。でも、最古参って言われるとちよつと……ねえ? 何だか凄く年を重ねているようなイメージというか……」

カラカラ笑う星奈百恵さんとは対照的に、七海やちよさんは凹んでいた。うん、それに関しては謝るよ……。

そのあとあやめが歳はいくつなのかをストレートに聞いて、七海やちよさんがいくつに見えるかを聞き返すやり取りがあった。

悩んでいるあやめだったけど……多分雰囲気からしてこのはよりも年上だと思うから高校三年生? もしかしたら大学生なのかも?」

「あやめ……当てるのは後にしなさい。でも、多分私よりも年上よ」  
「このはも同意見みたいだった。」

「……あら、それってどういう根拠で……」  
「では私は? 私はいくつに見えるかのう?」

「……………」  
「……ええー?」

このはが固まった。……割と真剣に考えているんだと思う。

そしてあやめも多分七海やちよさんの時と違うベクトルで悩んでいる。

……正直アタシも予想がつかなかった。

見た目から安直に考えるなら、間違いなくあやめよりも年下に見える。ということは小学生。あやめと同じ年としても中学一年生。

でも、どちらでもないのアタシは思った。纏う雰囲気が静かすぎ

る。とても子供が放つ雰囲気じゃない。

それにかこちゃんの話していた感じからして明らかにかこちゃんよりも年上だし、多分あの常盤ななかさんよりも年上だと思う。

魔法少女としての強さや実績から推測すると見た目以上に年を重ねていると考えて間違いない。

となると彼女も高校生……このはよりも年上、下手をしたら七海やちよさんよりも年上かもしれない。

トランジスタグラマーってやつかな？ だったらあの胸にも説明がつく。

「うーん……多分、小学生だよ！ あちしの一個下！ 12歳！」  
「……………」

あ、星奈百恵さんの纏う空気が凍り付いている。

年下扱いされて怒っているけど、あまりにも純粹無垢に答えられたから怒るに怒れないんだろうな……。

七海やちよさんがぶるぶる震えている。

「いえ、あやめよりも年上よ……。そして多分私よりも……」  
「！」

お？ こののはの予想はあやめの逆だね。

そしてちよつとだけだけど、星奈百恵さんが期待しているような目をしている。

これはアタシもいい線行っているかもしれない。  
「ずばり……29歳ね」

ビツシイ……。

再び星奈百恵さんの纏う雰囲気が凍り付いた。

うわちやー……これはこのは、やりすぎちゃったね。

七海やちよさんは顔を俯かせて口に手をやっている。

「見た目はどう見ても小学生以下だけど、私は騙されないわ。その白髪、多分色素が落ちたものね。つまり相当歳を行っていると見たわ。

その幼い見た目から察するに……だらけきって髪の毛のケアを怠った三十路手前の独身女性。それで間違いないわね」

「っーっーっー！」



「ぶっぶ……うっぶぶ……」

天然このはの自信満々な分析という名の凄まじい罵倒の嵐が星奈百恵さんを襲う。酷い言われ様だった。

七海やちよさんは耐えきれず嘔き出してダウン。星奈百恵さんは一度ひっこめた青筋をまた浮かび上がらせている。

こ、これは完全にやっちゃってる……！

どうにかしようとして口を開く前に……星奈百恵さんの雷が落ちた。

「私はこの七海やちよと同じ年の19歳！ 大学一年生じゃ！ 誰が小学生じゃ、誰が三十路手前じゃ、失敬な！ それから髪の毛のケアは怠ってないわい、こういう体質なのじゃ！」

「えっ」

純真なあやめの素直な感嘆詞が口からポロリと出た。

結局、口に出していないけど、アタシの予想が一番近かったわけだ。上下に10歳近いズレた年齢を言われた星奈百恵さんが哀れすぎる。

にしてもあの見た目で大学一年生かあ……色んな意味で凄い魅力的な人だね。

ぶんすか怒っている星奈百恵さんは、今も隣で肩を震わせて笑っている七海やちよさんの背中を軽く殴りつけていた。なのにドゴツという音と、「かつは……」と空気が抜けたような声がする。

七海やちよさんは海老反りで崩れ落ちていた。

さすが神浜最強。

たった一発の軽いパンチで西のリーダーをノックアウトするとはね……。

「もうよい。用件をすませよう。ほれお主よ、しゃきつとせんか」

「ごっほごっほ……あなたの暴力は手加減していても洒落にならないのよ……」

「知るか」

「プイっとそっぽを向ける星奈百恵さん。なんだろう、凄く微笑ましい。」

最初の剣呑な雰囲気はどこに行っちゃったのか、緊張感がないまま、西のリーダーが私たちに用件を伝えてきた。

用件はやっぱり、例の魔法少女昏倒事件の調査だった。

七海やちよさんの仲間の魔法少女……十咎ももこつていう魔法少女もその被害に遭ったらしくて、その人とチームを組んでいた仲間の魔法少女が激昂してアタシたちが犯人なんじゃないかって言いだしただから、真相究明のために動いたらしい。

星奈百恵さんもまた、常盤ななかさんからの依頼を受けて調査に乗り出した矢先に七海やちよさんからも連絡を受け、合流してアタシたちを探していたとのこと。

「……ハッキリ言っておくけど、私たちはやっていないわ」「でしようね」

呆気なく、七海やちよさんはこのはの言うことを信じていた。

その顔に含みはない。

最初から分かっていたと言わんばかりの自然な表情だった。

なんでも七海やちよさんには魔法少女が放つ魔力のパターンを記憶し判別できる能力があるらしい。

そして、その十咎ももこさんが襲われた現場に一緒にいて、犯人の顔は見えないものの、魔力パターンは覚えていた。それがアタシたちの誰とも合致しなかったから、アタシたちが犯人でないと断定できた、ということだった。

なるほど、そりゃあ敵意を感じないわけだ。

会った瞬間にアタシたちが犯人じゃないと確信していたんだから。星奈百恵さんが変身していなかったのも、きつとアタシたちを疑っていないっていうアピールだったんだろうね。

「ごめんなさいね、突然に」

「あー、いえいえ！ 自分たちもこれで疑われないで済みますし……ねえ？ このは、あやめ」

「う、うん！……よかった……」

「……まあ、そうね。ところで、彼女はどこに連絡しているのかしら？」

そういえば七海やちよさんが話している間、星奈百恵さんはスマホで誰かに連絡を入れていた。しかも複数人に。

数えていたけどもうこれで六件目だ。

「む？ ああ、私の知り合いの魔法少女たちじゃよ。

まずは常盤ななかじゃな。仕事の結果を報告していたんじゃよ。お主たちが犯人じゃないってのう？

それから八雲みたま、都ひなの、和泉十七夜、私の弟子、あとは十咎もここにもの」

あとひとり私の知り合いに連絡をするつもりじゃよと、笑顔で言ってくるけどちよつと待ってほしい。

星奈百恵さんの弟子と常盤ななかはいい。問題は他の四人。

調整屋で神浜のもうひとつの完全中立である八雲みたまに、中央の相談役の都ひなのに、東のカリスマの和泉十七夜だって？

みんながみんな、神浜でとてつもない影響力を誇る魔法少女ばかりだよ……。しかも十咎ももこさんに至っては被害者だ。

このはもポカンと口を開いていた。

「質の悪い噂は力尽くでも消さないといかんからろう？ なーに、私とやちよのふたりが調べて問題なしと判断したんじゃ。信じないやつなぞこの神浜にはおらぬよ。加えてここまで手を回してしまえば、もう大丈夫じゃろうて」

にっこりと笑顔を向けてくれる星奈百恵さんだけど……なんだろう。アタシと同じような匂いを嗅ぎ取ってしまった。

最初から構えていたつもりだったけど、それでも悔っていたらしい。

この人、多分七海やちよさんや常盤ななかさんよりも手強い。戦闘能力だけじゃなくて頭も相当回る人だ。伊達にあの只者じゃない常盤ななかさんに慕われ、七海やちよさんに切り札として頼られているわけじゃないってことだ。

多分だけど最初の年齢当ての下りも、アタシたちから余計な警戒心を消すために仕組んだこと。あのまま本題に入るよりも全員力が抜けていたし、自然と彼女たちの話を聞く気にもなれた。

改めて恐ろしい人だと思った。

この人の前で嘘を吐いても様々な手段を使って暴いてくるだろう

し、誤魔化しても結局吐き出さされてしまうだろうね。

何度も言うけど本当に恐ろしい人だ。絶対に敵に回したくないと思える程に。

でも、そんな星奈百恵さんは、アタシたちの味方だった。

『完全中立』を謳って長いキャリアと信頼を勝ち取っている彼女の影響力は、東西中央のまとめ役たちにも効果がある。弟子の子も最近人気になった新しい『傭兵』らしくって、仕事中にアタシたちが犯人じゃないって伝えてくれるらしい。

これでアタシたちの無実は、この神浜の有名全人全員のお墨付きをいただいたことよって瞬く間に神浜中に広がることになった。

「そういうことよ。じゃあ、私はこれで」

「私も失礼するぞ。あ、これは私の連絡先じゃ。困ったことがあったら連絡してくるがよい。あと、下の名前で呼んでよいからの」

アタシたちの潔白が証明されると、ふたりはこの場から去っていった。

連絡先を星奈百恵さんが渡してきてくれた時に七海やちよさんが驚いて……少し悲しそうな顔をしていたけど、それはよくわからなかった。

「……とりあえず、疑惑は解消……って感じかな？」

多分もう、大丈夫。平静を装っているけど、アタシは内心ほっとしていた。

確かにかこちゃんやフェリシアちゃんの言う通りだった。

星奈百恵さんを味方にできたのは相当大きい。こればかりは常盤ななかさんに感謝してもしきれない。

まだ見ていないからわからないけど、噂通りの凄まじい戦闘能力に加えて、この神浜での影響力、そして培ってできた沢山のコネクション。

どれをとつても一級品な星奈百恵さんが、西のリーダーの七海やちよさんと結託してアタシたちの無実を神浜に広げるために手を回してくれた。

これはアタシたちにはどうやってもできないことだった。

「だね！ つーか当然だよ！ あちしたち犯人じゃないもん！ 疑われるのがおかしいんだよ！ そうでしょ、このは！」

「……そうよ……あやめの言う通り……私たちの、周りがおかしいの」  
たぶんアタシは気が抜けてしまったんだと思う。

このはこの言葉の意味を深く考えなかったのだから。

「昨日の七海やちよと星奈百恵の件で、決定的に思ったことがあって……。それをふたりに相談したいの」

翌日、改まった様子のこのはがアタシたちを呼び止めた。

決定的に？ なにか嫌な予感がした。そしてアタシのこういう時の勘はよく当たる。

頼むからこの時だけは外してほしい、そう心の中で願う。

「神戸市を出ましよう」

でも、ダメだった。

アタシは必死で反論した。七海やちよさんと星奈百恵さんがアタシたちの無実を証明してくれたじゃないかと。

でもこのははそれを鵜呑みにできないと言った。

彼女たちからまた騒動が広がりそうな気がするから、この街を出て一からやり直そうと言った。

確かにそれは一理ある。

でも彼女たちがこの神戸の重鎮である以上、騒動を引き付けてしま  
うのは当然だと思うし、アタシたちの目の前で、そのトップたちに連  
絡して手を回してくれたんだ。

いくらなんでも用心深すぎるんじゃないか……アタシはそう思っ  
た。

「葉月……あなたはと思う？」

「アタシは……アタシは、出ない方がいいと思うよ」

だからアタシは最後まで反論することにした。

一番の理由はやっぱりあやめだ。あやめから友達を取り上げたく  
ない。

だから、アタシはなんとしても神浜に残るように進言する。

「この街の影響力が強い人たちがアタシたちの潔白を証明してくれたんだよ？ だったらアタシたちも堂々としていようよ。それが一番、アタシたちが犯人じゃないって印象付けることができるんじゃないかな」

「どうだか……あの星奈百恵が犯人の可能性もあるのよ？」

このははどこまでも、アタシとあやめ以外を信用しようとしていなかった。

確かにその可能性は否定できないし、そうだった場合が一番恐ろしい。

でもアタシは……星奈百恵さんが犯人である可能性は極めて低いと思っっている。

星奈百恵さんは影響力の強い魔法少女。アタシたちが気に入らないなら、そんな手の込んだことをせずに直接非難すればいい。彼女にはそれだけの力がある。こんな回りくどい手段を取る必要なんてない。

でも、このははほとんど聞く耳を持っていなかった。

だからアタシは反論の切り口を変えた。

他人がダメならアタシたちのことを盾にすることにした。

この噂が広がった時に考えたことをこのはに伝える。

もしこのまま神浜を出ても噂はいつまでも付き纏ってくると、それが発覚したらまた引越すのかと、反論した。

これには流石のこのはも黙り込んだ。

そして……もう少し様子を見ると落ち着いてくれた。

このはをなんとか説得し、この神浜から出ようだなんて思わないようにするために、一刻も早く犯人を捕まえる必要がある。

疑惑を晴らすだけじゃダメだ。アタシとあやめが大丈夫だと思ってもこのはがそれを許さない。

だからアタシが取った行動っていうのは……。

「もしもし、星奈じゃが？」

「あ、どうも。昨日はありがとうございました、遊佐葉月です」

まずは、星奈百恵さんに頼ることだった。

現状、少ないアタシの手札の中で最も強力なカードであり切り札は、やっぱりこの星奈百恵さんだった。

「おお、お主か。どうしたのじゃ?」

「あ、はい。実は星奈さんに……」

「これこれ、言ったであろう? 名前で呼んでもよいとな」

いきなり調子を崩された。でもこれはいい意味で、だ。

七海やちよさんの言葉を信じてアタシたちが犯人じゃないと思っているからこそ、柔らかく対応してくれているんだと思う。

多分これ、計算してやっているんだろなあ。アタシが普段やる手段とそっくりなんだもん。

でもありがたいことには変わらないし、乗らせてもらおう。

「わかりました、百恵さん」

「うむ、それで良い!」

「それでですね百恵さん……その、お願いしたいことがありまして」

「ふむ、なんじゃ? 言うてみい?」

「十咎ももこさんとコンタクトを取りたいんです。協力していただけませんか?」

アタシの目的は星奈百恵さん……いや、百恵さんを通じて被害者である十咎ももこさんと会うことだった。

十咎ももこさんが通っている学校は知っている。かこちゃんから聞いたからね。

最初は下駄箱に手紙を仕込もうか考えたんだけど……それをしても素直に来てくれるとは限らない。それなら百恵さん経由で十咎ももこさんに接触した方が確実に手っ取り早い。

百恵さんが十咎ももこさんの連絡先を知っているのは昨日の件で知っているしね。

「ふむ……なるほどの。わかった。ただしその席に私も同席する。それが条件じゃ」

多分それは建前。

昨日の今日で、まだ充分にアタシたちが事件の犯人じゃないって

う噂を流しきれないから、それを知らない魔法少女からアタシを守るための口実なんだと思う。

ふたつ返事をして時間と場所を伝えたと、すぐに対応すると言って電話を切った。

「ふう……うまく、協力を取り付けられたらいいな」

第一段階をクリアして、アタシはほっと一息。でもなにも解決していない。

ようやく、スタートラインに立ったところだった。

「待っててね……このは、あやめ。アタシ頑張るから！」

そう意気込んで、アタシは明日に備えた。



## Side・遊佐葉月 つつじの家

翌日の放課後。アタシは指定したファミレスにいた。もう少しで待ち合わせの時間になろうとしたその時、にこやかに笑う百恵さんがやってきた。律儀な人だ。

そして後ろにはアタシとは違う薄めの金髪のポニーテールの子を連れている。

その彼女がこの昏倒事件で実際に被害を受けた魔法少女……十咎ももこさんだね。

「……ですー！」

「……遊佐葉月さん……？」

「はい、そうです！ はじめまして！……十咎ももこさん。百恵さんもご協力ありがとうございますー！」

それからアタシは十咎ももこさんに、この事件の調査を手伝ってもらうように話を持ち掛けた。

十咎ももこさんは自分の目で見極めるまでは、まだアタシたちが完全にシロだって思ってくれていないらしい。

でもアタシも引くわけにはいかない。

「アタシらは犯人じゃない……。だからこういうお願いがあります……。アタシと一緒に犯人を捜してもらえませんか？」

素直に、そしてストレートに用件を切り出す。

きつとこれが一番効果的で、アタシができる一番の誠意の伝え方だから。

「……へえく……そりやまた大胆というか……。……よし、信じた！」

「……へ？」

これまた昨日の七海やちよさん同様、あっさりと信じてくれた。

どうやら百恵さんもここに来るまでに説得してくれていたみたいで、今のアタシの態度で、信用するに値すると判断してくれたらしい。

……本当に頭が上がらないなあ、百恵さんには。

こうやって信頼を勝ち取ってきたのか、この人は。

見た目に見合わず狡猾な人だよ……。良い人だからいいんだけど

さ。

「もう大丈夫なようじゃの。じゃあ私は失礼するぞ。私も私で、調べることがあるのぞな」

そして自分の役目が完全に終わったことを確認した百恵さんは、すぐに立ち去って行つた。あとはアタシたちに任せてくれるらしい。

これもありがたい。

十咎ももこさん……ももこと打ち解けられて、ようやく素で力を抜いて話すことができる。

そこからはとんとん拍子に話が進み、アタシたちは噂の出所を探することにした。

このアタシたちを陥れようとした犯人が、昏倒事件の犯人と同一人物か、かかわりの深い人物なのは間違いない。だからこの噂の出所さえ掴むことができれば、犯人を捕まえることができる。

百恵さんも別のルートで事件を調査してくれているみたいだし、解決できるのも時間の問題だろう。

待つてね……このは、あやめ。必ずアタシが、犯人を見つけてみせるから！

そんな強い気持ちを持って、アタシはももこと一緒に情報収集を開始した。

いろんな人たちに出会った。

百恵さんの弟子の『傭兵』とも話をしたし、かこちゃんの知り合いの魔法少女数人にも話を聞いた。

みんなアタシが渦中の魔法少女だって知って驚いていたけどそれだけだった。

「先生から聞いたの！ 犯人扱いされてたって！ わたしにも出来ることがあるなら協力したいから、なにかあったら調整屋に来てほしいの！」

「ああ、かこちゃんが言ってた。ごめんなさい、詳しいことはわからないの。その代わりに……はい！ サルスベリ 百日紅の鉢植えです！ もう少し

したら素敵なお花を咲かせるですよ！ あなたの小家に彩りを！」

「いらっしやいませ。……ああ、あの噂の。百恵さんから聞いていま

すよ。大丈夫です。ここを利用してくれる魔法少女たちには、まなかからちゃんと説明してきますから。それよりご注文はどうでしょうか？ オススメはオムライスですよ！」

「みやーこ先輩にあきららつち、それからヒヤック先輩から聞いているよー。でもへーキつしよ！ あの人達すつごい頼りになるし、あーしもちゃんと駄弁って広げてるからさー……そうだ、いいこと思いついちった！ なんならここで、あーしと一緒に駄弁っていようよー！」  
みんながみんな、温かかった。なんでだろうね。

こつちは結構心穏やかじゃない気分で捜査に乗り出したつていうのに、不思議なことに晴れやかな気持ちになっていた。

でも、捜査は難航した。

あれから数日経つても、一向に噂の出所が掴めない。

ある程度のところまではいけるのに、そこから先が全部有耶無耶になつてしまつていて発信源に辿り着けない。

百恵さんや七海やちよさんを筆頭にした大物魔法少女たちも動いてくれているけど、吉報はいまだに届くことはない。非常に悪質で巧妙な手口だ。

一体なんで、アタシたちがそんな悪意の塊のような存在に目を付けられてしまったのか、まるで見当もつかない。

やり場のない怒りが込み上げてくるけど、それを表に出すわけにはいかない。そんなことをしまつては犯人の思う壺だからね。

冷静に、慎重に調べないと、どこからまたアタシたちに疑いが掛かるか分かつたもんじやない。

なかなか進まない捜査と、アタシたちを嵌めた犯人に対する苛立ちをなんとか押さえつけているアタシだけど、それ以上にマズいのはこのはだ。

こののは機嫌が日に日に悪くなつていくのが目に見えて分かる。

百恵さんたちが神浜の魔法少女にアタシたちの無実を広げてくれたから、変につつかがってくる魔法少女はいないけど、それでも最初の時のもこのように鵜呑みにしていない魔法少女はいる。

魔女退治をしている際に時たま遭遇する魔法少女から一瞬とはい

え変な目で見られることに、このははストレスを感じていた。

僅かとはいえ確かに残っているアタシたちに対する疑惑の目、神浜の重鎮たちも動いているのに一向に進まない捜査、神浜に来てからたまに見るといふ幻覚……そして三人で過ごす時間が減った寂しさもあるんだと思う。

前進も後退もしない、なんとも言えないやきもきした気持ちをこのはは抱いている。でも、もう少しだけ耐えてほしい。

きつと……アタシがきつと、犯人を捕まえてみせるから。

だからどうか、先走らないでね、このは。

「おつと……かえでから電話だ」

学校帰りの放課後。

ももこと一緒に捜査して、あともう少しで六時半になろうとしていたその時、ももこにチームメイトから連絡が入った。

「おーす、かえで？ どうした？……は!? なんだった?！」

ももこが慌てたように電話相手に聞いただしてている。物凄く、嫌な予感がした。

「わかった、すぐに向かう！」と乱暴に電話を切るももこ。

「どうしたのー?！」

「ごめん葉月！うちのチームメイトがこのはさんに突つかかった！すぐに止めに行こう！」

ああ、やつぱりアタシのこういう勘は当たっちゃうんだなあ……。

七海やちよさんから聞いていた、ももこが襲われたときに激昂したももこのチームメイト……水波レナさん。

この神浜で一番会いたくないと思っていた相手と、物凄く機嫌が悪いこのはがバツティングしてしまった。

ももこは水波レナさんにアタシたちが無実だって言い聞かせていたみたいだけど……彼女もももこと同じで、自分の目で確かめないと気が済まないタイプだったみたい。

加えてももこ曰く、素直になれずに結果的に突つつけんどん慥けんどんになる性格も相まって、まるでケンカを売るようにこのはに突つかかってしまった。……最悪だね。

もうひとりのチームメイトである秋野かえでさんはすぐにマズいと判断してくれて、ももこに、そして七海やちよさんに連絡してくれている。不幸中の幸いだった。

もしこの連絡がなかったら、取り返しのとつかないところまで来てしまっていたかもしれないのだから。

事件が起こっている水名神社に走りながら、アタシはかこちゃんに連絡……しようとしたとき、アタシの携帯に着信が入った。

発信元は……『夏目かこ』！　なんてベストタイミング！

「もしも葉月さんですか!?!　今、ななかさんと水名神社に向かっているんですけど!」

「本当!?!」

かこちゃんだけじゃなくて常盤ななかさんも!?!

どうして……というかどこでその情報を?

「失礼、代わりました。常盤ななかです。お久しぶりですね、遊佐葉月さん」

「常盤さん……」

「随分と切羽詰まっている様子ですね。ですがご安心を。私たちは星奈百恵さんという方から連絡をいただきまして、水名神社に向かっています」

そうか、常盤ななかさんの情報源は百恵さんだったね。

七海やちよさん経由で百恵さんに連絡が行って、そこから常盤ななかさん、そしてかこちゃんに連絡が行ったってことだ。

これには七海やちよさんに感謝だね。

そしてすぐに動くことができる百恵さんと常盤ななかさんも凄い。

「感謝します!　そのまま来てください、お願いします!」

アタシらしくないけど用件を伝えずに、そのまま来てほしいとだけ頼んで連絡を切った。多分百恵さんから詳細は伝わっていると思うし、問題ないと思う。

あとひとり……アタシはフェリシアちゃんに電話をかけた。

「おう、葉月か!?!　大丈夫なのか!?!」

すぐに出てくれたけど、やっぱり様子がおかしい。もうこっちの情

報が伝わっているみたいなの反応だった。

もしかして……。

「百恵から話は聞いてるぞ！ オレも水名神社に向かっているから、着くまであやめを守ってくれよ！ じゃあな！」

一方的に電話を切られたけど……アタシの気分は軽くなっていた。夏目かこちゃんに深月フェリシアちゃん……あやめが自分で作ったふたりの友達。

七海やちよさんに星奈百恵さん、常盤ななかさん……アタシたちを信じて無実を証明し、引き続き捜査をしていている三人の大物魔法少女。

そしてアタシの隣で走る十咎もも……アタシの打算に付き合ってくれて、一緒に事件を追いかけてくれている、表裏のないサツパリとした性格の友達。

その全員が今、アタシたち三人のために必死で動いてくれている。……ああ。

このは、待っていて。

お願いだからこれ以上先走ろうとしないで、もっと周りを見ようよ？

こんなにたくさん、アタシたちを助けようとしてくれる人たちがいるんだよ。

多分ここが……アタシたちの新しい、つつじの家なんだよ？

「いい目になったね、葉月」

「そうかな？……そうかもね」

思い出したんだから！ アタシたち以外にも信じることができると人たちがいっぱいいるって、改めて感じることもできたんだから！

アタシは前に進む！ このはとあやめを連れて、温かい人達が大勢いるこの神浜で生きていくって決めたんだから！

だからこんな……こんなくたらない茶番、とつとと終わらせる！

(……葉月……来て！ あちしだけじゃ……ヤバイよ……！)

その時あやめから念話が届いた。

声が震えているし……言葉も断片的。相当追い込まれているねこ

れは！

(なにがあつたのあやめ！ 状況は!?)

(このはが……このはが、あちし以外の神浜の全ての魔法少女を叩き潰すって……!)

(はっ!?)

なんだって……。

いくらアタシたち以外に心を開こうとしないこのはでも、客観的に物事を捉えられる冷静さはいつも持ち合わせていたはず。それは今、物凄く機嫌が悪い状態でも維持できていたし、それがあつたからアタシの意見を聞いてくれて様子見することを許してくれた。

そんなこのはが……自分たち以外の魔法少女を全て潰すだっけ!?  
めちやくちやにもほどがある！

仮にアタシとあやめが賛同したとして、アタシたち三人でなにができる!?

この神浜の魔法少女は他の地域の魔法少女と比べて数も質もなにもかもが違う！

チームを組むのが普通だし、チームを組まずにたったひとりで魔法を相手する猛者だっけわんさかいる。東西中央のリーダーはまさにそれだし、そのリーダーを押しつけて神浜最強の位置に君臨する百恵さんだっている。すぐに制圧されてお終いだ。そんなこと普段のこのはなら考えるまでもなく理解することができるに決まっている。

なのにそんな無謀なことを……恐らく感情的になって実行しようとしているってことは……!

「どこまで……どこまで、アタシたちを弄べば気が済むんだああーッ！」

怒りのあまり声を出す。走るスピードも上がる。

隣で走っていたももこが驚いたような顔をしているけどこの際無視だ。今のアタシはこんな茶番を仕組んだ犯人に対しての怒りでいっぱいだった。……でも!

落ち着け、落ち着くんたアタシ……!

なんのために声に出した? 少しでも怒りや苛立ちを鎮めるため

でしょ！ このままのテンションでこのはと激突すれば仲間割れすら起きかねない。

このはが正気じゃない今、アタシが一番冷静でない！

そうして走りながら自分に言い聞かせてなんとか落ち着いた時だった、水名神社に到着したのは。

「ちよつと待った！」

このはの攻撃から水色の髪の子を守るように七海やちよさんが構えているところで、アタシは乱入することに成功した。

すぐに周りを確認する。不審な人物はいない。そして倒れている人もいない。つまりまだ、このはは最悪の一線を超えていない！

間に合ったんだ！

「来たわね……葉月……」

「このは……」

なに安心したように笑っているのさ……。

でもその笑みは、少し遅れてやってきたももこの姿を見て消えた。

周りの反応からこの数日間、アタシが一体誰と行動していたのかが分かったみたいだね。

そんなことはすぐに考えられるのにどうして……。

「……あやめから聞いたよ。他の魔法少女全員と戦うって……？ そんな無謀なこと、アタシがさせないからさ……！」

させてたまるか。

ようやく、ようやく見つけた、アタシたちを受け入れてくれる場所を壊すなんて。

あやめが友達を見つけたこの場所を壊すなんて。

しかもよりにもよって、仲間のこのはに壊させるなんて！

そんなことはアタシが絶対に許さない！

このはの質問なんて無視だ。

今のこのはにアタシがももこと一緒にいる理由を馬鹿正直に話しても無駄。一切の聞く耳を持ってくれないだろう。むしろアタシが

勝手に外の人間とコンタクトを取っていたことに怒り、悲しむだけ。

だったらアタシは、アタシの考えをこのはに真正面からぶつけるだ



け！

「このはに伝えたいんだ。最近、アタシが思っていることを。……アタシら、もつと外と向き合うべきだよ！」

言った。言ってやった。

多分今のこのはにとつて、裏切りにも等しい言葉を言った。もう後戻りはできない。いいんだ。誰が戻るもんか。前に進むんだよ、アタシたちは！

深呼吸して言葉を繋げた。このはの言葉を論破する必要なんてない。

今に至るまでの、アタシが過ごしてきたこの数日間の出来事を語るだけ。それだけでいい。

神浜で捜査をしているうちに何人もの魔法少女と知り合った。

みんながみんな、アタシたちを信じてくれていているわけじゃないけど、アタシたちを信じて温かく歓迎してくれる魔法少女だって何人もいた。大物の魔法少女たちは確かに動いてくれていたし、積極的にアタシたちの無実を広げてくれている協力者だった。

だから……もつと周りのみんなを信じよう。思い出そうよ。いたじゃんアタシたちには。

院長先生が、つつじの家の他の仲間たちが。アタシたちは確かにみんなを信じていたじゃん？ そのときの感情を思い出してほしい。

ただそれだけなんだよ、このは！

「葉月やめてー！ やめてよー！ どうして……そうしてそんなこと言うの……！」

全部言い切った時、このはは……泣いていた。

院長先生が亡くなった時以来かもしれない。このはが泣くなんて。そこからこのはは、自分が溜め込んでいたものを吐き出した。

院長先生が亡くなって、つつじの家から出て、もう自分に残ったものはアタシとあやめだけだっていうことを。このはが大切にしているアタシたち三人の関係が理不尽に壊されるかもしれないことが怖くて仕方がないと。

このは……そこまで、アタシたちを思ってくれていたんだ。そして

その思いが爆発して、こんなことを……。

あまりにも悲しく、大きすぎるこののは告白を受け、途端に神社が静かになった。誰も声を出せない。

このはは肩で息をしているし、あやめはこののはの胸の内を知って戸惑っている。

アタシがなにか言わないと。そう思った時だった。

「あやめー！ どこにいったあーっ！」

「あやめさーん！ 葉月さーん！」

それは天からの救いの声だった。

凄いやいミミングで来てくれた。

「フェリシアー！ それにかこもー！」

あやめに出来たふたりの友達。

そして、それに続くのは……百恵さんと常盤ななかさん。アタシたちを助けようと動いてくれている大物たち。

「星奈百恵に常盤ななかまで……！ そ、それに……あやめ……そのふたりは……」

「あ……。このは……。あ、あちしも、このはに黙ってたことがあるの……」

そして……ついにあやめが言葉を紡いだ。

「……あちし……この街で、できたんだ。……多分……友達つてやつが……」

言った。あのあやめが。

アタシたちの後ろをついてくるばかりだったあやめが、誰かに促されたわけじゃなく、自分だけの意志で、友達を作ったと。前に進むものとして。そして、ここにいるかこちゃんフェリシアちゃんこそが、その友達だと言い切った。

「アタシがこういう考え方をするようになったのはさ、あやめと、その友達が会っている光景を見たからなんだよ」

そしてアタシがフォローを入れる。アタシだって、あやめに友達ができる前ならこのはに賛同して引っ越したかもしれない。アタシが変われたのはあやめのおかげなんだ。だからきつと、このはも……。

「私たち、まだ知り合ってから全然経ってないじゃない？ でも、もつと時間をかければ、もう少しお互いが見えるかも……。そう思わない？ ね、百恵？ みんなも」

「うむ、その通りじゃ。困ったことがあったら私に頼ればよい。知り合いはたくさんおるからの」

「その前に私のチームに入る提案のお返事をいただきたいのですが？」

七海やちよさんはアタシたちに「時間をあげる」と言ってくれた。

百恵さんはアタシたちに「人脈を用意する」と言ってくれた。

常盤ななかさんはアタシたちに「場所を作る」と言ってくれた。

「………………。そう……。あやめにふたりも友達が…………」

この三人にここまで言われて、そしてあやめに出来たふたりの友達を見て、このはの表情が穏やかなものになっていく。

「ご挨拶が遅れてごめんなさい。あやめさんの友達の夏目かこです」

「オレは深月フェリシア！ あやめの友達だぞ！」

「…………ふう……。ありがとう、かこさん、フェリシアさん……。これからも、あやめをよろしくね……」

…………よかった。

このはが……アタシとあやめ以外は信じられないと言っていたあのこのはが、外の世界を認めてくれた。

一気に肩の荷が下りた気分になった。

事件はまだ解決していないけど……一番大切なものだけは守り切ることができた。

アタシだつてこのはに負けなくらい、このはとあやめのことを大切に思っているんだから。

騒動は収まりお開きになって、今残っているのはアタシとこのは、七海やちよさん、百恵さん、そして常盤ななかさんの五人。

アタシはまず、ももこと一緒に昏倒事件の犯人がアタシたちだという噂を流した人物が誰なのかを探っていたことを話した。そこに至

るまでの経緯は百恵さんがフォローしてくれた。

そして結果を報告する。

最初は順調に追うことができたけど、追っていくうちにどんどん噂自体が曖昧になっていき、そして途端にプツンって糸が切れちゃったこと。

そこからアタシは、この噂は真犯人が仕掛けた目くらましの噂で、真犯人は魔女ではなく魔法少女だと結論付けた。魔女にはこんな器用なこととはできないからだね。

でもその手口は妙な作為を感じる手際だった。なにが目的かわからないけど魔法少女を襲い、その罪をアタシたちに擦り付けた。そしてそれが、アタシたちを追い込むことになった。

「色々とあつて有耶無耶になりそうだったけど」

「……悪かったわ。私を取り乱したせいで……」

「過ぎたことは忘れましょ。とにかく問題なのは……」

誰があやめを襲ったのか、だった。

アタシとももこが到着する前……あやめから念話が送られてくるその直前に、あやめは何者かに襲われたらしい。このははそれを見て、ついに堪忍袋の緒が切れて取り乱してしまったみたい。

七海やちよさんの証言だと、当時そこにいた全員があやめが襲われたときに一切動いていなかったらしい。そして勿論、このはがあやめを襲うはずがない。

「……となると、やはりそのあやめさんを襲ったのは、そこにいなかった誰か、ということになりますね？」

「なにも感じる事ができなかったのかの？」

「ええ、不甲斐ないけどね。今回も、私は尻尾を掴むことができなかったわ……」

七海やちよさん……もういいや。

やちよさんが悔しそうに唇を噛んだ。

「私の方も色々調べてみたのじやがの。妙なことが分かったのじや」  
すると今度は百恵さんが口を開いた。

アタシとは違う線で事件の調査をしていた百恵さん。一体何を調

べていたのか、確かに気になった。

「この昏倒事件なのじゃがな……どれだけ探しても被害者の魔法少女がおらんのじゃよ」

「え？」

「それはどういう？」

「じゃからのう……襲われた魔法少女は昏倒して眠ったままという情報自体がデマである、ということが分かったのじゃよ」

つまり百恵さんの言うことを要約すると……最初から、昏倒事件なんて起こっていなかった。そういうことだった。

そ、それじゃあ……！

「では……この事件は最初から、あなたたち三人を陥れるためだけに何者かが仕組んだもの……ということになりますね」

ななかさんの言う通りだった。

でもそれならば、こんな回りくどくて変なところで巧妙な手口の説明が見つく。

「そう……そういうことね。葉月には言っていたけど神浜に来てから、私は幻覚を時々見るようになったわ。あやめが襲われて、葉月に手遅れだって言われる……そんな幻覚を。あやめが襲われたときも、その幻覚を見たわ」

そのこののはの証言で……確定した。

この事件の犯人の標的はアタシたちだ。

そしてその犯人はアタシたちを陥れるためだけにもかかわらず、無関係な人にも危害を加え、こんな大それた事件を起こすような、そんな危険な思考回路を持つ頭のネジが外れている人物。

「心当たりはある？」

「ないですよ」

「ええ。私にもないわ」

「百恵、あなたが会ってきた中で、そんな魔法少女はいる？」

「まさか。そんなヤバイやつ、出会った瞬間お主に報告しておるわい」

「常盤さんは？」

「私も心当たりはありません」

結局、アタシたちが今掴んでいる情報だけで分かったことは、この事件の標的がアタシたちだった、ということだった。

犯人の動機はおろか、正体すらわからない。

「……でも、きつと……！」

「そうね……正体を暴きましよう……！」

アタシたちをここまで振り回して、弄んでくれた札は絶対に返す。

そう、アタシたちは誓った。

あの夜から、このはは幻覚に襲われることがなくなったらしい。

捜査は進展することなく、犯人も分からない。謎は深まるばかりだった。すべてはいまだに闇の中。

……でも、良いことだってあった。

この一件のおかげで、アタシたちの世界が広がった。

このはの視野が広くなったし、あやめも友達とよく一緒に遊んでいる。

やちよさんに百恵さん、ななかさんという神浜の主要の魔法少女とのコネも作れたし、捜査の途中で仲良くなった魔法少女だっている。

時々百恵さんの弟子の『傭兵』の子と鉢合わせることもあるし、花屋でアルバイトしている子からもらった鉢植えは、リビングで花を咲かせている。

なんか料理に対して熱意を向けてしまったこのはは、クオリティの割にリーズナブルな北養区のレストランで開かれている料理教室に通おうとしている。

そしてアタシも、買い物帰りに水徳商店街の相談所に立ち寄って、情報収集を兼ねているとはいえ、他の魔法少女の子たちとお喋りを楽しむようになった。

みんながみんな、新しい明日に向かって歩き出した。

院長先生。やっと……やっと見つけたよ。

アタシたちの新しい……『つつじの家』が、さ。

# RTAパート10 CROSS CONNECT ON

『散花愁章』に向かつてひたすら倍速するRTAはーじまーるよー！

いやあ、前回の『そしてアザレアの花咲く』は強敵でしたねえ。

こちらが用意したショートカットが全部無駄になってしまったおかげで最後までやる羽目になってしまいました。

レナちゃんさあ……おまえ一番態度悪いって（かえでちゃんに）言われてるぞ。

なにはともあれ無事にクリアできてよかったですねー。と言いつつ倍速倍速ウー！

……ん？ 倍速が止まりましたね、なにかのイベントでしょうか。ちなみに今、百恵ちゃんは水徳商店街に來ています。

土曜日なので大学も仕事もありませんからね。今日も色々な魔法少女と交流を深めるためにエミリーのお悩み相談所に向かっています。もう実家のような安心感で満たされていますよ、ここは。

ちわあーす、三河屋でーす（大嘘）。

「あ、百恵さん！ いらっしやい。今日はエミリーちゃんはお休みだよ」

あきらくんがお出迎え！

あ、そっかあ（痴呆）。今日はエミリー先生お休みかあ。でも誰もいないよりはマシです。

おつ、他にも来ている人がいるようですね。誰でしょうか？

わあ、これが茜ヶ咲中学校の制服ですかー。色んな学校がありますねー。こんなに綺麗なデザインの新制服とは思わなかったあ（現実逃避）。

ここは神浜市で、向こうに、ホオズキ市があるんだ。後で、そこへ行こうよ（とつとと行ってくれた意味で）。

ん？ 名前？ 星奈百恵っていうんだ。

「私は……天乃スズネです」

……戦わなきや、現実と！

ンノオオオオオオオオオオオツ!! アイエエエツ!? スズネ!! サン!? 魔法少女スレイヤーのスズネ!! サンナンデ!?

ちよつと待って! 天乃鈴音が来ているやん! どうしてくれるのこれ。好感度を稼ぎたかったから相談所に来たの! イベント……イベント引いちゃったの? この中の中(乱数)で? 難易度ハードつつつてもこのイベントは引いたらあかんやろ。わかる? この罪の重さ(哲学)。

……嘆いても仕方ないのでそろそろ真面目になりましょうか。ということで見事にハズレを引いてしまいました。

絶対に失敗できないイベントエクストラ、『CROSS CONN ECTION』です。

え? なるみアリサ成見亜里沙としおんチサト詩音千里……? そいつらはどーでもいーんですよ! 絵本でもなんでも好きに探して、どうぞ。

問題なのは今百恵ちゃんの目の前にいるコイツ……天乃鈴音ただひとりです。

このイベントを失敗させたり、変に長引かせたりすると、何人もの魔法少女が氏にます。

モブもネームドも関係なし。最悪の場合第二次みかづき荘のメンバーもやられます(2敗)。やべえよ……やべえよ……。

そんな魔法少女スレイヤーこと天乃鈴音はキュウベえから神浜のことを聞いて、ホオズキ市に向かう前の寄り道感覚でここに集まる魔法少女の命を狙って襲来してくるとんでもない奴です。くっそ、あの白ネリモノめ余計な真似を……。

このイベントのクリア条件は鈴音に神浜の魔法少女が一筋縄ではいかないところを見せつけ、神浜から撤退させることです。間違っても頃したりしてはいけません。

並の魔法少女ならともかく、脳筋パワー馬鹿の百恵ちゃんなら充分可能ですし、一番手っ取り早いのですが、発覚した場合は神浜の魔法少女全ての好感度が急降下します。つまり罠です。



面倒ですが、しつかりこなしていけないといけません。はい、見事なタイムロスです。おのれ、あの白タヌキめが！

さて……真面目に取り組んでいこうと思うのですが、いきなり懸念点が……。

この時間にあきららくんに連れられて相談所に来ているということは……昨日の夜からイベントが始まっていたってことです。

つまりアウトドア系魔法少女の栗根<sup>あわね</sup>ころろがすでに鈴音の襲撃を受けています。倍速でイベントをすっ飛ばしてしまったツケが回ってきてしまいました。

どつどつ、どうしましょう！ もしころろちゃんが氏んでしまっていたら……ちよつと待って！ 腕怪我しとるやん……ということ  
は！

セーフ！ ギリギリセーフ！

生きてる〜！（ころろちゃんが生きて）帰ってこれたよ〜アーツハツハツハツハツハ！ 帰ってこれた〜ハツハツハツハツハ！ 生きてる〜！ 帰ってこれたよハツハツ生きてる！ ハツハツ！ あ〜生きてるよ〜！

はあ〜……落ち着きました。

ということで、ころろちゃんは相方のクーデレ系魔法少女の加賀美<sup>か</sup>まさらちゃんに無事に救助されています。

良かった〜まさらちゃんが助けてくれて。まさらちゃんは……（神浜の）ファミリーみたいなもんやし。

安心したところで時間を確認しましょう。

現在時刻は……15時27分！ ということは……！

「失礼します。ああ、あきらさん。それに百恵さんも、ここにいらっしやいましたね」

キタ——（。▽。）——！！

我らが組長、常盤ななか様がいらっしやったぞー！ 全員整列！  
キヤーナナカサーン！ 素敵！ イケメン！

「近くに用事があったので気が向いたというか……魔が差したという……か。……そちらはっ」

この滲み出るおまえのことを疑っていますよ的なオーラ。怖すぎてブルっちやうよく。

それを受けても平然とした態度を崩さない鈴音はガチでやべえ。

「それはそれは……常盤ななかと申します」

意訳：私はおまえの敵だ。

凄い！ 笑顔で自己紹介しつつ圧力をかけてる！ そのおっかない作り笑い！ 百恵ちゃんじゃないと見逃がしちゃうね！

カッコイーツ!! 惚れちゃいそうだけ常盤ななかつツ!!

どうして組長が警戒を通り越して、敵意を初対面の鈴音に向けているのかを一応解説しておきますと、それはななか様の固有魔法が反応したからです。

自分たちの敵か味方かを判定できるその固有魔法によって鈴音の本性を見破った、というわけなのですな。オラもこんな便利な魔法を使えるようになりてえ！（無能力）

「……あきらさん……」

「なんだよ、もうー！」

「百恵さんが付いていたとはいえ……無事で何よりです」

まるで尋問しているかのような組長の質問の嵐に逃走を計る鈴音ちゃん。オタツシヤデー！

まあ、もうすぐ再会するんですけどね！

「百恵さんも気が付いていたのでしょう？」

当たり前だよなあ？

あんな危険人物見間違えるわけがないっすよ。見た時からこの人、ああーこりやあ何人かやつちやつてるなあ、つて思っていましたとも！

「……そうですか。百恵さん、休日をお過ごしのところ申し訳ございませんが……これは緊急事態と見て、間違いないですね？」

そうだよ（肯定）。

「では……百恵さん、お付き合いしていただいてもよろしいでしょうか？」

あ、いいっすよ（快諾）。

こちらら他所者に傾されてもいい神浜の魔法少女なんていないからなあ？ 余計な真似をされる前に対処しないとイケないから勿論協力するぜ！

「感謝します。……それでは、参りましょう」

というわけでななか様とあきらくんと一緒に、イベントにイクゾオー！ デッデッデデデ！ (カーン)

「……な……なんなのよ、あなた！」

魔女の反応を追っていたら、偶然魔法少女同士で争っている現場に遭遇してしまいました(すつとぼけ)。

おいにやんにやんにやん！ (意味不明) こらあかん！ 組長！  
居ったでー！ あと写真撮ったろ。動画もな！

「こ、こつちだつて……意地でも聞かせてもらおうから！」

「私も興味があります」

というわけではない！ 第18話にダイナミックエントリーです！

原作通りに周辺の魔女の反応を追えば遭遇できるので、比較的簡単にエントリーできます。

ここでは昨日襲われたころちゃんやんが、襲った理由を問いたただすために鈴音に戦いを挑んでいます。趣味が山登りということも相まつてか、なかなかガッツのある魔法少女ですころちゃん。

魔法少女の性能としても悪くありません。神浜魔法少女の中でも屈指の防御力を誇り、生半可な攻撃ではビクともしないのですが……いかんせん相手が悪すぎますね。

鈴音は最強クラスの攻撃力と速度を持つ、攻撃的な魔法少女です。ステータスだけなら百恵ちゃんの完全下位互換なのですが、固有魔法の影響で火炎系の魔法を使えるのでどつこいどつこい。鈴音を相手にするならベテランクラスの魔法少女でないとならないと思います。こころちゃんが戦えているのは、防御力のおかげです。

ただし限度がありますので、防戦一方のこころちゃんでは鈴音にダメージを与えられず、じり貧になっていつか傾されてしまいます。

ちなみにこのイベントに30分以上遅れると確実にこころちゃんがお亡くなりになってしまいます(3敗)。

「そうか……あなたたちも……」

そして無事に間に合うと、鈴音は姿を消す魔法である『陽炎』を使って撤退します。

百恵ちゃんにこころちゃん、組長、あきらくん、さらにおそらく物陰に隠れて鈴音を狙っているであろう、神浜のアサシンことまさらちゃんの五人の魔法少女がいますので確定です。五人に勝てるわけないだろ！

というわけでまさらちゃん。おまえさつき百恵ちゃんたちが駆け付けてるときチラチラ見てただろ。見てないでこっち来て、おまえも(神浜魔法少女の輪の中に)入れてみるよ。

「……いえ、さつきの人を捕まえようとタイミングを計ってました。……結果、取り逃がしましたけど」

いよつ、まさらちゃん！ やっぱりいてくれましたね。  
難易度ハードですとイベントに間に合わない可能性もありましたので一安心です。

次にイベントが発生するのは17時52分。その時間になると鈴音がエミリーのお悩み相談所に戻ってきます。

イベントの発生時間はさすがに変更はないので、それまでの間の40分は安全圏です。

「そうか。事情は大体分かったヨ」

組長が美雨メイユイを呼んでくれました。

地味に美雨とは連絡先を交換していなかったのでありがたいです。

「ところで……本当に殺す気だったか？」

「……それは間違いないと思う」

そうだよ(便乗)。

あんな的確に急所(ソウルジェム)を狙ってくる奴に頃す気がないとかありえねえんだよなあ。

「ななか……どうするつもりなの？」

そうだとわかっていてもあきらくんは鈴音への情を捨てきれません。

やっさっしっいっなっあっあっきっらっくっん。

しかし現実は無情である。あんなはた迷惑な奴、とつと追っ払うに越したことないですしこれはRTAですからね。関係各所に連絡をしてしつかりと対策します。そのためのコネ、コネ……あとそのための好感度？

「百恵さん……。ほんの少しだけ問いかける間があれば。せめてそれくらいは話をさせてほしいんです……」

おっと、あきらくんが頼ってきましたね。

よしよし、わかったわかった。百恵ちゃんに任せておきなさい。组长もいつすかあ？

「……いいでしょう。それに……もう、手は打つてあるのでしょう？」  
大丈夫つすよバッチェ連絡してありますよ！ あとは向こうが根回ししてくれるんで問題なしです。二度とこの世界(神浜)にいられないようにしてやる。

じゃけん第26話行きましょうね。

「……こんにちは」

来たっ。来た。来たなあっ!?

あきらくんとふたりで待つこと数分、多くの走者を苦しめてきた最悪の魔法少女が戻ってきたぞー！

ということとで仕掛けを発動させるまで安心と信頼の倍速です。

まあだ、時間かかりそうですかね？ AKR<sup>あきら</sup>早くしろ！ →

「なんでそんなことをするの!?! 理由を教えてください！」

「……理由。そんなもの、知らない方がいいわ」

(教える気は) ないです。そして明らかなSATSGAI予告。もはや言い逃れは不可能。(交渉は) ダメみたいです。

はい、ということとで時間です！ みんな出てきてちょうだい！

「……まじっよ」

「緊急事態と聞いて飛んできたが……思った以上の大事だったようだな」

「おい、アタシのアシスタントの相談所で暴れるなよ？」

おまたせ。

いつもの。

ほんへ。

実家のような安心感。

親の顔より見た三人。

もつと親の顔見ろ！ 一人暮らしだからね仕方ないね（レ）。

ということで手配しました、神浜の重鎮たちです。

他にもかこちゃん以外のなな組、まさらにこころ、さらに上空からかりんちゃんがこちらを監視しています。

総勢十人の実力派魔法少女たちが鈴音を取り囲んでいます。

「天乃スズネさん、で間違いのないわね。あなたがやろうとしていることは、すでに神浜の魔法少女のほとんどが知っているわ」

「証拠の動画もある。言い逃れできると思うな」

「写真も拡散させておいたし、注意喚起も今日中には神浜全土に広がるだろうさ」

情報提供者は百恵ちゃんです。最近の携帯は便利だぜ！

「……動画と写真……！ 星奈……百恵！」

ありやりや、携帯いじくって遊んでいたらしい百恵ちゃんを見て、いったい誰がこの状況を作り出したのかが理解できたらしいですね。

「二度だけ警告するわ。今すぐ神浜から出ていきなさい。そして二度と神浜に足を踏み入れないと誓いなさい。そうすれば今回は大目に見てあげる」

おまえはもうここ（神浜魔法少女の包囲網）から出られないんだよ！ ジュージューになる（神浜から出ていく）までやるからなあオイ！

「……分かったわ」

瞑目して歩き去っていきます。……工事完了です。

はい！ これで『CROSS CONNECTION』、無事にクリアです！ 直接対決なんて必要ねーんだよ！ あんな誰かがガバつて本当に氏んじやうかもしれない作戦やらせるわけないんだよなあ。

タイムを縮めるために極めて穏便（穏便とは言っていない）な方法で鈴音に帰っていただきました。ラブアンドピース！ 愛だよ愛！みんな、イベントなんかやめようよ！ 馬鹿らしいよ！

そしてこの方法で事件を解決させると、後の第二イベントである『Rumors in Disguise』がキャンセルされます。

鈴音はこの神浜には足を踏み入れることはありませんし、『キリサキさん』の噂も広がることはありません。写真と名前が拡散されましてからね、はつきりとした情報なので噂にならない、ということなのですな。

このイベントが起こった時点で相当なタイムロスなのですが、対策はすませましたので、これ以上鈴音の好き勝手はさせません。本当にもう二度と来るんじゃないぞ。まだあの白い淫獣が戻ってくる方が……そうでもないな！ どっちも帰って、どうぞ。

え？ 成見亜里沙と詩音千里？ なんのこったよ（すつとぼけ）。絵本見つけたんならそれでいいんじゃないかな（適当）。

まさか倍速処理中に地雷イベントを引き当ててしまうとは思いませんでしたが、無事にクリアできてなによりです。ちよつと早いですが丁度いいので今回はここまで！ 次回こそ、『散花愁章』でお会いしましょう！

ご視聴ありがとうございました！

## Side. 静海このは しずみんクッキング

最年長として頼られるように、私は生きてきたわ。

親もなく、碌に仕事もできない年齢の私たちが生き残るために資産管理と運用方法を覚えて、私は稼ぎ頭としてみんながお金に困らないように支えてきた。

魔法少女の戦い方を研究して、三人でうまく戦える方法を編み出してきたのも私。

前回は失態を犯してしまったけど、その場その場の最終的な判断を下して、最善で最適な答えを選び続けてきたのも私だった。

別に誇る気はない。

三人で生き抜くと覚悟を決めて、私がふたりを……遊佐葉月と三栗あやめを守ってみせると誓った今、私はそれらを覚えるのが苦痛じゃなかった。

覚えないと生きられないから、そういうマイナスな思考じゃなくて、覚えればふたりを守ることができるというプラスの思考で私は行動し続けて、そして身に着けた。

ふたりを守る、その気持ちさえあれば私は割となんでもできた。いや、できないものなんてないと本気で信じていたわ。

アレ以外は。

「う……う……う……」

今現在、平日の夜七時過ぎ。

夜ご飯の時間になったとき、机に突っ伏しているあやめが気分の悪そうな弱々しい声をあげていた。

今日は葉月が委員会の仕事で遅くなる日。そして葉月こそ、我が家の料理担当でもある。

つまり葉月がいない今、時間になってもご飯が出てこないということだった。

連絡してきた葉月は奢るから出前を取っていいって言ってくれたけど、出前なんて出費の無駄。

いくらお金に困っていないと言っても、年頃の女の子である私たち



の財布の中身は些か寂しいもの。それは葉月だってもちろん例外じゃない。だから……。

「……私が作るわ」

そう、決めた。

私がつった方が早いし、無駄な出費もしないで済む。

葉月からは「このは絶対料理だけはしなくていいからね。絶対だよ」ってなんか妙に言い聞かせられるように禁止されていたけど、最後に私が料理してから大分時間が経っているわ。

確かにあの時は失敗しちゃったけど、それはきつと初めて料理をしたから。うん、そうに決まっているわ。

だから今日は私が作る。

あやめだつて、私の料理を食べてみたいって言ってくれたんですもの。腕によりをかけて、全力で美味しいものを作ってみせる。

そう決めたのはいいのだけれど。

その結果……生まれてしまったのが、明らかに様子のおかしいあやめだった。

最初の内は美味しいと言いながら食べてくれていたんだけど……途中から完全に喋ることなく、黙々と食べ進めていた。眉間が寄って、食べるペースもどんどん落ちていたことに、「美味しい」と言われて内心舞い上がっていた私が気付くこともなく。

完食してぐったりしてしまっているあやめを見て、ようやく様子がおかしいことに気が付いた。

「あ、あやめーっ!」

「たっだいま〜!……って、あやめ!? あやめ、大丈夫!? これってまさか……」

丁度私が悲鳴を上げたその時、帰宅した葉月はいち早くあやめの異変に気が付き、机の上に乗っている食器を見て全てを察した。

「ち、違うのよ!?! あ、あやめはね!?! おいしいって言って……全部食べてくれたのよ!?!」

「ぜぜ、全部!?!」

内心原因がわかっているながらも決して認めたくない私は、なにも

違っていないのに違うと言っていつもの私らしからぬ言い訳をしてしまうけど、葉月はそんな私よりも、私の料理を全部食べつくしたあやめを心配し始めた。

「言わんこっちゃんない……だから出前にしなつて言ったのに……」

溜息交じりに頭を抱えた葉月のその言葉でようやく現実と向き合う気になった私は、あやめに確認した。本当は美味しくなかったのかと。

あやめは申し訳なさそうな顔をしながら、それを肯定して水を求めていた。

満身創痍。そうとしか形容しがたい状態になるまでに、私の料理はあやめを苦しませてしまっていた。

葉月曰く、こうなることがわかっていたから葉月が料理の担当を一任して、できないときは出前を取ったりスーパーの弁当を買うように促していたらしいわ。

「アタシが食事の面倒を見るから、料理は諦めて？　ねっ！」

でもその葉月の言葉だけは、私は認めるわけにはいかなかった。

誰が諦めるものですか。

葉月とあやめと一緒に生きる、私はそう誓ったのよ。そのためなら私はなにも諦めないわ！

絶対に、私の料理でふたりに「美味しい」と言わせてみせる！

そう宣言すると、ふたりは露骨に嫌そうな顔で「ええく!？」と不満の声を出すけどそんなことは関係ないわ。必ずやってみせるんだから。

それからは、私の全身全霊をかけた料理研究の日々が始まったわ。

まずは下準備、料理をするには適正な道具が必要不可欠。

葉月は代用したりしているけど、それは葉月が天才だから。そして私は凡人。凡人の私には道具を代用するなんていう高等技術は使えない。だからまずは形から入ってみることにしたのよ。

お金の心配を葉月はしてきたけど、それは問題ないわ。安くていいものをさらに安い時に買い揃えたのだから。私のお金のやりくり術を舐めないでほしいわ。

「そして、書物から学んだ料理の理論……」

「理論!? アタシ、そんなの勉強してないよ!？」

仰天している葉月だけど、仕方がないのよ。

料理の天才タイプの葉月なら勉強しなくても自然とできるのでしようけど、私は天才じゃないもの。だから一から勉強しないと碌な料理を作ることができない。

きつと私が料理ができなかったのも、勉強しないでいきなりチャレンジしたからに違いないわ。

「まあアタシが天才なのかは置いて……。このはが料理の天才じゃないのは、はつきりしてるよね」

「……………」

「あつ、っつごめん!」

いいのよ……いいのよ葉月。わかってるもの。だからこそ勉強したんだもの! だから、やるからには一分の隙も無く、徹底的にやり遂げてみせる!

味の相互作用を考えた対比、抑制、相乗効果。舌を満足させるテスクチャー……即ち食感の選択。そして色彩効果。これらをすべて満たしたとき、必ずやおいしい料理が作れる……はず! 加えて調理器具だつて揃えたもの。私に死角はないわ。

「……………このは、今日作る料理は、アタシが試食するよ!」

そんな私のやる気を感じとってくれたんだと思うわ。曇りのない笑顔で葉月が進言してくれた。

ありがとう葉月、私頑張るわ!

気分が良いうちにやってしましましょう!

「まずは、対比効果を狙って塩と砂糖を混ぜ込んで……」

そう呟いた時、まだ近くにいた葉月の笑顔が凍り付いていたことに私は気が付かなかった。

そして、できあがった。我ながら完璧な仕上がりにね。

名付けて、『甘味たっぷりカツオだしオムレツ』!

オムレツを紫芋パウダーで青く染めた上に、真っ赤なケチャップ。砂糖に漬けた白いカリフラワー。複数の食感が楽しめるように、卵の

焼き具合はカリツカリとふわふわをミックスしてみたわ。

色彩、相乗効果、食感……全てにおいてパーフェクトね。

「さあ、ふたりで頂きましょうー！」

「うん……」

さようなら、料理のできなかった私！

(さようなら、今日までのアタシ……)

「いただきますー！」

「いただきます……」

そうオムレツを口に入れた瞬間、私の口にありえない味と食感が広がっていく。

な、なんなのこれは……！

マズいし食感も最悪じゃないの……！ な、涙が出てきたわ……。

美味しくなくて悲しいのもそうだけど、あまりのマズさに私の舌がこれを食べることを拒否しているのだから。

「うーん……」

葉月は一口で撃沈。

気絶してしまっていた。

「は、葉月ーっ！」

「ただーいまーっ！ このは！ これ！ これ見て……って、葉月が倒れてる!?!」

丁度私が悲鳴を上げたその時、帰宅してきたあやめが持ってきたのは『料理教室』と書かれていたチラシだった。

教室を開くお店は……『洋食ウォールナッツ』!?

神浜の中でも特に有名な名店じゃないの！

「うう……ああ、そこね。あの事件の時には色々とお世話になったけど、今でも普通に通っているお店だよ……」

「葉月！ 意識を取り戻したのね！」

「うん……。ウォールナッツの料理は値段の割に本当に美味しいよ。初めて食べた時は……美味しかったのもそうだけど、色々あって涙が出ちゃったくらいだもん」

ウォールナッツで料理人をしている少女も魔法少女らしくって、私

たちが犯人としてでっち上げられたあの昏倒事件の時も、私たちを信じて積極的に私たちが無実だという話を広げてくれていたらしい。「それにあそこは、あの百恵さんとも繋がっている色んな意味で凄いい店だよ」

「百恵さんとも……」

神浜最強と言われている星奈百恵さんまで認めるレストラン……まさに、神浜最強のレストランね。

そこで開かれる料理教室……これは行くしかない！

なんか妙に上機嫌に勧めてくれる葉月とあやめに見送られながら、私はウォールナッツの料理教室に行くことにした。

(料理教室なら、試食するのはアタシたちじゃないしね！)

(食べるの、あちしたちじゃなくなるもんね！)

「む？ おお、お主は静海このはじやつたかの？」

料理教室当日。

そこその人数がここに集まっている中、まさかの人物が笑顔で話しかけてきた。

白髪の尻尾ヘアート、古風な喋り方が特徴的な幼女。

しかしその正体は御年19歳の大学一年生で、神浜最強の戦闘能力を誇ると言われている大物魔法少女、星奈百恵さんだった。

ここに深い繋がりがあるとは聞いていたけれど、まさか料理教室に参加しているとは思ってもよらず、意外なところで出会ったことに私は目を丸くする。

「お久しぶりです百恵さん。あの時はお世話になりました」

「よいよい。ところで、お主も料理の勉強をしにきたのかの？」

「ええ」

そこから料理教室が始まるまで百恵さんとお話をした。

なんでも百恵さんはここの料理教室の常連で、始まった当初からずっと通い続けて腕を磨いているらしいわ。

百恵さん専用の踏み台もすっかり用意されている辺り、ここの先生

も百恵さんが来ることを前提としてセッティングしていることがある。

そういえばあやめ、かこさんと一緒にフェリシアさんに誘われて百恵さんの手解きを受けた時に、お昼を御馳走してもらったって話をしていたわね。

「あのおばあちゃんすごい強いし、すごい料理上手いよ！」  
ってはしゃいでいたかしら。

未成年なおばあちゃんって言われている百恵さんが可哀想だったけど……まあ、あやめがそう呼ぶのもわかる。

初めて会った時は怒らせちゃったけど、この人が私よりも年上だっ  
てことはすぐにわかった。なんとというか、院長先生と同じような落ち  
着いて柔らかい雰囲気をしていたから。

「まなか先生の指導は素晴らしいものじゃぞ。一年前までは凡人で  
あった私も、今や料理が得意分野と胸を張れるくらいになったから  
う」

言葉通りに身長に見合わないほどの巨大な胸を張ってくる百恵さ  
ん。

凡人……つまり今の私と同じレベルだったららしい百恵さんが、あや  
めが喜ぶほどの腕前までに成長するなんて……！

「はい、みなさん！ こんにちは！ 今日、料理講師をする、胡桃ま  
なかです！ よろしく願いしまーす！」

先生が最前列でご挨拶している。

あやめより年上でしようけど……葉月と同じくらいかしら？ い  
や、隣のテーブルにいる人のことを考えると……いやいや、さすがに  
それは考えすぎね。きっと百恵さんが例外なだけよ。うん。

まあ、見た目や年齢なんてどうでもいいのよ。肝心なのは彼女……  
胡桃まなか先生は私と同レベルだったであろう百恵さんを矯正させ  
るほどの指導をしてくれるプロだということ。この人の教えを請え  
ば私だって……！

「まずは基本から教えていきます！ と、その前にもうひとり、紹介し  
ないといけませんね！ 百恵さん、お願いします！」

「うむ」

「あら？ 隣の調理台に立っていた百恵さんがまなか先生の隣に？」

「星奈百恵という。よろしくお願いするのじゃ！」

「百恵さんはアマチュアですが、まなかも認める料理の腕を持つている方です。前半の基本的な道具の使い方や料理のやり方に関する指導は、この百恵さんにもお手伝いしてもらいます」

まなか先生に認められるところまで、百恵さんの腕が上達しているなんて……！

百恵さん……いえ、百恵先生。色んな意味で頭が上がりませんわ。

「しっかり見ていてあげるからの。一緒にやっていくのじゃ！」

そしてそんな百恵先生はにこやかに私のところまで来てくれた。

「どうやら私から教えてくれるらしい。」

「まずは包丁の使い方じゃの。無駄なく、そして綺麗に切ることがおいしい料理を作る秘訣なのじゃよ。切り方によっては食感も変わるから、簡単なようでも意外と奥が深いのじゃ」

「あ、それって『テクスチャーの選択』ですね！」

「て、てす……？？」

「やっぱり勉強したことは無駄じゃなかったみたいでテンションが上がってしまった。」

結構噛み砕いているけど百恵先生が言っていることは、私が勉強したものと全く同じだったのだから。

「ま、まあ多分そうなのじゃろうな。口で説明するよりも見てもらった方がよい。私が今からやるから、よく見ておくのじゃよ」

鼻歌を歌いながら百恵先生は包丁を手に野菜を切っていく。

水で洗った後に薄く皮を剥いていく。するするするっと、途切れることなく綺麗に皮が剥けていった。

ピーラーを使わないでこんなことができるなんて……凄い手先の器用さ。さすが百恵先生。

魔法少女としてじゃなくて料理の腕も最強クラスとは恐れ入るわ。

「まあ、こんなもんじゃの。ほれ、お主もやってみるとよい」

さすがに皮を剥く作業は百恵先生がやってくれて、そこから食材を

切る練習に入った……のだけれど。

「ちよつと待つのじゃお主よ。よいかの？　こうじゃよ」

「そうじゃそうそう……って危ないぞ、お主よ！　ゆっくりでよいのじゃ。慌てずともよい」

「食べ物を切るときは猫さんの手じゃ！　そんなに押さえつけんでも大丈夫じゃ、怪我をするぞ！」

……正直、すごく難しいわ。

ちよつとずつできるようになっていっているらしいけど、危なっかしいらしい。

少しまなか先生と話をして戻ってきた百恵さんは、どうやら今日一日私の担当になってくれるらしい。

「なーに、安心せい。最初はみんなこんなもんじゃよ。包丁はもうよい。次は卵を割ってみようかの。ほれ」

「えいっ！　あつ！　殻が全部入っちゃいましたわ」

「お主は無駄に力を入れすぎなのじゃ。もう少しリラックスせんか。こう、ボウルの縁にコンコンコンと……ほい、こう少し輝を作つて……ゆっくり割るのじゃ」

「えつと……う……！」

で、出来た……！　綺麗に卵が割れた！

「そうじゃそうそう！　よく出来たのう！」

踏み台に乗っているもののそれでも私より背の低い百恵先生は、つま先立ちしながら手を伸ばし、私の頭を撫でてくれた。

……こうして誰かに褒められながら頭を撫でられるなんて、いつ以来だったかしら。

多分院長先生にされたのが最後だと思っけど……思い出せないってことは、相当昔にされて以来ってことね。

年長者だったから葉月もあやめもやらないし、つつじの家を出て以降、あの昏倒事件が起こるまではふたり以外の誰にも心を許すつもりがなかったから無縁だと思っっていたし、やってほしいとも思わなかったけど……される時が来るなんてね。

多分他の誰かにされたらすぐに掃うのでしようけど……不思議と、



この人にされるとその気になれない。子供扱いされているとか、そんな考えが出てこない。

落ち着くというか、懐かしいというか……どこか心地よかった。

そんなやり取りをしながら、基本的な料理のやり方を百恵先生に教えてもらうこと30分。

一通り教えてもらって……明らかに昨日までの自分とは違うことが実感できた。

「力を抜くのじゃ、お主よ。そんなに力まずとも美味しい料理は作れるものじゃよ？」

もう何度も言われたこの言葉。凄まじい力を誇る百恵先生だからこそ、凄い説得力があった。

よくわからなかったけど、少しずつできるようになっていくことに安心感が得られたのか、危なっかしいと心配そうに百恵先生が見ていた私の包丁さばきも軽いものになった。

「うむー。とりあえずは大丈夫そうじゃの。少し休憩を挟んだら課題料理を作るぞ。私も隣で作っているから困ったことがあったら私からまなか先生に聞くとよい」

そう言って百恵先生は隣の調理台の方に向かっていった。

たったの30分だったけど、かなり濃い時間だった気がするわ。

まなか先生が見ている他の人達も授業が終わったみたいで、丁度ブレイクタイム。

十分休んで、後半に差し掛かった。

「それでは料理教室の後半。課題料理を作っていきますよ。百恵さん、ありがとうございます」

「まあ、ひとりしか見ておらぬがの」

苦笑いしているけど、おかげで自信は付いたわ。

だからこの課題料理……今の私ならちゃんとできる！

今度こそさようなら、料理のできなかつた私！

「先生、ガスを止めても火が小さくならないわ？」

「え？ こ、このはさん！ フライパンの上の油に引火しています！

百恵さんー！」

「心得た！」

遠くにいたまなか先生が指示を出すと、隣の調理台から踏み台を持ってすっ飛んできた百恵さんがフライパンの蓋を横からゆっくりとスライドさせて上に乗つける。

するとすぐに火が収まった。

「ふう……みなさんもし、揚げ物かなんかで誤って油に引火してしまった時は、ああいう風にして対応してください。絶対にやってはいけないのは水をかけることです。大炎上しますので本当にやらないでください。濡れタオルで覆うのもあんまりお勧めしません。濡れきっていないところに引火してしまう可能性がありますからね。フライパンを使って料理をするときは必ず、近くに専用の蓋を用意するようにしましょう」

そうまなか先生が綺麗に締めくくって授業再開。

あ、危なかったわ今のは……。

「強火にしすぎじゃな。こんなところまで力を入れおって……隣にいるから、まなか先生が他の人に付いているときは私に聞くとよい」  
にかつと笑って、百恵先生が調理台の方に戻っていく。

「ああ、そうじゃ……」

その途中、百恵先生は真剣な顔で一言。

「よいか？ 余計なアレンジは決してするでないぞ？ それから味見もこまめにするのじゃぞ？ 味見はつまみ食いではないからな？」

それから重ねて言うが、わからなかったら先走らずに私かまなか先生に聞くのじゃぞ？」

「は、はい……」

なんかすごい迫力があつた。

それからは物凄く……ええ、物凄く平和に料理教室が続いた。

フライパンを使った焼き鮭の火加減はまなか先生に確認してもらった後に、心配になったら百恵先生を呼んで一緒に見てもらったから多分大丈夫。

炊き込みご飯に使う出汁の配合を百恵先生に見てもらって、炊飯器に入れる出汁の量がわからないからまなか先生に確認を取って対応

して……出来上がった炊き込みご飯を食べた時は、本当に自分が作ったものか、一瞬疑うほど美味しかったわ。

ちよつと食べすぎちゃって、まなか先生に呆れられちゃったけど。お味噌汁だって、百恵先生の言う通り、調味料を入れては少し味見してを繰り返して……美味しいお味噌汁を作ることができたわ。

お味噌汁が爆発？　するわけないでしょう。

完成した純和風の料理を見て、思わずうっとりしてしまふ。

そういえば私、今日は凄く味見をしているわね。

隣で百恵先生がたまに横目で見てくるから、意識してやってきたけど……前までの私は味見なんてしてなかったかもしれないわ。だから出来上がったものを食べるまで、失敗していることに気が付かなかったのかも。

「それでは……実食してみましようか」

順番にまなか先生が回って試食してコメントをしている。

アドバイスもしているみたいで、ひとりにつき二分くらいは時間を使っている。凄い本格的というか、ガチな採点のようね……。

そしてついに、私の番になった。

「さて、このはさんの番ですね」

まずはお味噌汁を小皿に移して、一口。

「……はい、なるほど。良いですね。ちゃんと味見して整えられているのがわかります。具材も……いい感じですね。しっかり熱が通ってお味噌も程よく染み込んでいます」

お味噌汁は大丈夫……ということね。

「炊き込みご飯も……いいですね。決められた量と方法で作れているので、まなかで作ったものと大差がありません。鮭も問題ないですね。火はちゃんと通っていますし、味付けの塩の量も適正なのでしょっぱくありません。ちよつと焼きすぎちゃっている感じはありますが、大丈夫です。よく、出来ていますよ」

につこり笑ったまなか先生は、次の人の所に向かっていった。

「……よしー」

出来た……！　出来たのよ静海このは……！　美味しい料理、作れ

たのよ私!

「良かったのう、お主よ」

もうひとりの先生である百恵先生が穏やかに笑いながら来てくれた。

ちなみに百恵先生の料理は既にまなか先生に試食済み。頷きながら楽しそうにおしゃべりしていたから、きつと最高の評価をもらっていたに違いない。さすが百恵先生……。

思えば百恵先生がまなか先生の指導を受けていたのは三回だけ。

火加減と味付けの時くらいしか呼んでいなかったから本当に手馴れている。鼻歌を歌っていたし、心底料理が好きなのでしょうね。

料理教室が終わった帰り道。

改めてまなか先生にお礼を伝えた後、私は百恵先生と一緒に歩いていた。

いろんな話をしたわね。どうして料理を勉強しているのかとか、そんな話から始まって、魔法少女の話や仕事の話、そして……あの昏倒事件の話。

残念なことにあの事件はいまだになにも進展がないらしい。

憎たらしいことに犯人は智能犯らしく、一切の尻尾を出してくれていないみたいだ。

でも……今は少しだけけど、犯人に感謝している自分がいる。

あの事件があったから私は他人を信じようと思うことができたし、百恵先生然りまなか先生然り、その他何人もの魔法少女の知り合いもできた。友達もできた。

それが巡り巡って、私も料理を作ることができるようになった。

「料理教室がなくとも、私を頼ってよいからの。なんなら今度家に遊びに来るとよい。一緒にまた料理をしよう。それから三栗あやめと言ったかの？ なかなか美味しそうに作ったものを食べてくれて嬉しかったと、また遊びに来いと伝えておいてほしいのじゃ」

この親切心MAXの世話焼きで柔らかく誘ってくる感じは完全にその……おばあちゃんみたいね。

私のおばあちゃんがどうなのかは知らないけど、世間一般に言うところ

ころの典型的なおばあちゃんって多分この人のことを指すんじゃないかしら？

でも、それはありがたいお誘いだった。

まなか先生は多忙で、料理教室の時からいしか教えてもらう機会はないけど、百恵先生なら連絡を入れたらスケジュールを組んでくれそう。土曜日は完全に仕事もないみたいだし、それを狙ってあやめと一緒に遊びに行くのも悪くないのかも。

連絡先を交換して百恵先生と別れ……そして帰ってきた我が家。

早速、料理教室で磨いた腕を振るわせてもらおうじゃない！

なんか葉月とあやめが震えているけど大丈夫よ。

まなか先生と百恵先生のアドバイスを忠実に守れば……！

「は？ ちよ……これ本当にこのはが作ったの!？」

「う、嘘だ……味噌汁が美味しい!! ご飯は炊き込みご飯だし、おかずも綺麗で……なんでっ!？」

「なにがあったのこのは!? とうか本当にこのはなの!？」

「……………」

……いくらなんでもこのリアクションは酷いんじゃないかしら？

「私は正真正銘の静海このはだし、なにがあったもなにも料理教室に行ってきたのよ! 失礼ね!」

その後、私はあやめと一緒に百恵先生の所に度々行くことになるようになった。

焼き物とお味噌汁、ごはんなら作れるけど、他はまだまだだから。

玄関で温かく私たち迎えてくれるあの人を見て、私は改めて思う。

ああ、ここが……この神浜こそ、私たちの新しい『つつじの家』なんだ、ってね。

## RTAパーティー 散花愁章（前篇）

ひたすら全力ダッシュ（倍速）するRTAはーじまーるよー！

前回はまっつったく旨味のないイベントが発生してしまいましたね。あの白い淫獣め、本当に余計な真似をしゃがって……。

適切に対処したので無被害かつ好タイムで乗り切ることができましたが、発生させた時点でタイムロスなので複雑な気持ちです。

そういえば「まるでRTAみたいだあ」って言ったそこの君、怒らないからあとで男子便所に来なさい。お話があります。

これRTAですか？ RTAでえーすうーかあーらあー？……と、お？

電話が来ました。

誰かな誰かなつと。発信元は……『七海やちよ』！

これはもしかして……もしかするかもしれませんが……？

やつはろー、やつちゃん！ どうしたんだい？

「百恵、緊急事態よ。また……というより、本当に魔法少女が昏倒する事件が発生しているわ」

来たっ。来た。来たなあっ!?

遂にやってきてしまいました、絶対に失敗してはいけないイベント最終章『散花愁章』です。

このイベントは前々回のアザレイベントとは異なり、本当に魔法少女が昏倒する事件が発生します。

アザレイベントに引き続きこのイベントの黒幕である神浜のやべーやつこと更紗帆奈は、チームやコンビを組んで活動している魔法少女たちの片割ればかりを襲撃し、神浜に混沌を齎します。

原作では昏倒する被害者は三人なのですが、難易度ハードになりますと増えたり減ったりと、被害者の人数が変動します。

たまにプレイヤーキャラを狙ってくることもあり、上手く行くと寝ているうちにイベントが無事に終わって一気にショートカットできるのです……が。大抵の場合は、更紗帆奈が野放しにされて失敗してしまうのでハズレです。

「至急水名神社に向かってちょうだい。参考人として静海このはと常盤ななかも呼ぶわ。四人で話し合いをしましょう」

あ、いいっすよ（快諾）。（水名神社に）行きます行きます（食い気味）。というか組長も呼ぶんすね。

原作ではこのはだけなのですが、本チャートではななな様もがつつり絡んでいますし、やっちゃんとも面識があるのでお呼ばれされたのでしよう。水属性魔法少女の中にポツンという無属性。（固有魔法も）ないです。悲しいなあ……。

というわけで捜査開始じゃーい！

水名神社にイクゾオー！ デツデツデデデデ！（カーン）

「百恵先生、この間振りです」

「……百恵先生？」

柔らかく対応してくれるこのはさん。料理教室で好感度を稼いでおいてよかつたぜ。

知る人ぞ知る隠しルートなのですが、このはの料理の腕を上げさせることができるイベントがあります。それはこのはの魔法少女ストーリー第2話。

普通に進行した場合はまなか先生が失神してしまう料理を作ってお終いなのですが、ここに一定の料理のスキルを習得しているプレイヤーカーが介入し、すべて正解の選択肢を引き続けると、このはの料理が改善され、好感度が大幅に上昇します。やっぱ……料理の……スキルを……最高やな！

まなか先生に料理教室を開く度に連絡するように根回ししたのも、このはの魔法少女ストーリー第2話に介入できるようにするためだったのですな。

この隠しルートをフルに使ってこのはに料理の指導をしました。味噌汁が爆発？ 冗談はよしてくれ（料理人の威厳）。

百恵ちゃんは料理人（アマチュア）だ。世の中の料理下手を見逃すわけにはいかねえんだ。このは、おまえには……正義の鉄槌で、その

腐った（料理の）腕を矯正してやる。

つということで、無事このはの壊滅的な料理の腕は矯正されました。今では百恵ちゃんの家みんな来て料理するほどの料理仲間です。

ちなみにですが、みたまさんはなにをどうしても料理の腕が上がることはありません。みたまさんは味覚が逝ってしまったので、味見するようにキツク言っても無意味です。常人の舌には合わない味でも美味しく頂けてしまうやべーやつになにが美味しくてなにがまずいかなんてわかるわけないだろいい加減にしろ！

「みんな集まったところで本題に入るわ。……魔法少女が何者かに襲われて昏倒しているわ。以前とは違って、今回は被害者が確認されているわ。被害に遭ったのは……」

木崎衣美里、胡桃まなか、春名このみ。

こころちゃんと毬子あやちゃんまりこの代わりに、まなか先生とこのみさんが被害に遭っている形ですね。

原作ではささら、明日香、まさら、あいみ、そして保澄ほずみしずく雫の五人が動いていましたが、今回の被害者からまさら、あいみ、雫ちゃんが抜けて、代わりにシエ莉愛ア様とかえでちゃん、レナちゃんにももこが動きそうです。

ああつ、雫ちゃんと会うチャンスが消えてしまいました！　ここで仲良くなれると思ったからほったらかしにしておいたのに！　更紗帆奈！　おまえ他人ひとのモノ（チャート）を！（レ）

「三人を繋ぐ線がある……。三人は共通したある人物と会っていたようなの。周囲の証言からも、それは間違いないわ」

「……………」

「…………誰と会っていたの…………？」

「…………遊佐…………葉月さん…………」

ですよね！　バリッバリ接点ありますよね！　だってエミリー先生もまなか先生もこのみさんも前回アザレア組の無実を広めるために積極的に動きまくった魔法少女ですもんね！　狙われて当然です。

「しかもこの三人はあなたたちの無実を広める活動をしていた魔法少



女よ。そうよね、百恵」

そうだよ（肯定）。

このみさんはかちゃん経由ですが、エミリー先生もまなかちゃんも百恵ちゃんが連絡して、アザレイイベントの陰で動いていた縁の下の力持ちですもの。

「だったらなおさら！」

「ええ。でも……最悪なことに、あなたたちが犯人だっていう噂が再熱しているの」

「……それは我々の手で鎮火させたはずですが？」

「それでも、よ」

ええ……（ドン引き）。あそこまでやったのにまだそんな噂が立ちやうんですか……。さすが難易度ハード。百恵ちゃんらしい力任せのゴリラプレイではねじ曲げることができないということですか。「でもこれではつきりしたわ。前回の事件に引き続き、犯人の標的はあなたたち三人。この事件を追っていて確信に変わったわ。悪意をもって行動している誰かがいる……とね」

「……それは私も同意見です。百恵さんにはお話ししていますが、ここでおふたりにもお話ししておきましょう」

おっと、ここでもななか様も自分が追いかけている敵である『飛蝗』について話し始めました。一気にイベントが進んでいいゾ〜これ。

「なるほど……それがあなたが百恵に依頼していることなのね」

「ええ。そして……私は感じるんです。この事件の背景に……『飛蝗』の存在を……」

さあ、これで『逃避行編』と『飛蝗編』がしっかり交じり合いましたね。情報共有できているので、お互いの好感度を下げることなくイベントが進行しそうです。

「そして……この事件で、私はひとつの結論に辿り着きました。この事件の黒幕と『飛蝗』は同一人物。そして、その人物は魔女を操る力、もしくは人心を操る力を持っている、と」

「なるほど……その可能性は高いわね」

「……百恵先生。そんな力を持っている魔法少女に心当たりはありま

すか？」

ないです。当たり前だよなあ？

……お？ 倍速できるといふことは、オリジナル展開はここまでです  
ね。

さて、ここからアザレア組は三人で身を隠します。潜伏先はここに  
いる全員が知っているのです、ななか様も美雨メイユを使わずともアジトに乗  
り込めます。

いやあ、本当にアザレア組のアジト、わかり難くていいところにあ  
るんですよ。尚更紗帆奈はめちやくちや簡単に突き止めてしまう模  
様。ダメみたいですね。

ここからは原作通りに進んでもらいます。

更紗帆奈が暗示の力を使ってアザレア組とななか組を衝突させる  
ように仕向けますが、現時点で双方の信頼度が高いので（衝突するこ  
とは）ないです。悔しいでしょうねえ……。

「それでは百恵さん、明日はお願いします」

そして百恵ちゃんは組長と一緒に調整屋に向かいます。そこから  
なぎたんと共に団地の調査に乗り込みます。

ななか組とアザレア組と離れて行動することで、更紗帆奈が動きや  
すい状況を敢えて作ってイベントを発生させ、同時に大東団地編と合  
流します。

アザレア組の無実を広めるのはやっちゃんにお任せ。

だって百恵ちゃんの協力者、みんなおねんねしていますからね。今  
の百恵ちゃんの手札はかりんちゃんだけです。そしてかりんちゃん  
は調整屋にいますので、ななか様と行動するのは全てにおいて合理的  
です。

ということでは会談終わり！ 閉廷！ 以上！ みんな解散！  
じゃけん明日調整屋行きましょうね〜。

おはよーございまーす！

大学で授業受けて一気に放課後までひとつ飛び。大学生はこれが

できるから便利だぜ。

ななか組の皆さんと合流して調整屋さんに行きましょう。

オツス、みたまさん！ たのもーたのもー！

「いらつしや〜い♪ あら、モモちゃんにななかちゃんたちじゃなあ  
い？」

「あ、先生！ それにななかさんも！ お久しぶりなの！」

お、かりんちゃんもいんじやくん。連絡する手間が省けて助かった  
ぜ。

「でもあんまり面白そうじゃないわね〜。……事件のことね？」

そうだよ（肯定）。

ちよつと聞きたいことがあるんだけどさあ、魔女を操る魔法少女つ  
て知ってるかい？

「え？ 魔女を操る魔法少女？ 知らないわよ〜？……いやななか  
ちゃん、ホントにそんな子は知らないわよ。ここに来たことなんてな  
いし、知り合いにもいないわ」

「わ、わたしも知らないの！」

知ってた。だってそんな魔法少女百恵ちゃんだつて知らないんで  
すもの、このふたりが知っているわけがありません。

「……では人心を操る魔法、あるいはそれに類する力を使う方にお心  
当たりはありますか？」

はい、こつちが本命です。

かりんちゃんはもちろん知りません。だって担当しているお客さ  
んに、そんな物騒な魔法を使えるようなやべーやつがいるわけないか  
らです。ですから必然的にみたまさん頼りです。

ちなみにこれ、『バイバイ、また明日』のれいらが516号室の魔女  
の居場所を思い出すのと同様に判定があります。みたまさんが思い  
出せなかった場合は百恵ちゃんがバイバイ、また明日（リセット）し  
てしまいますので、頑張つて思い出してほしいものです。

「……あ。あ〜！ 思い出したかもー！」

良かった〜みたまさんが思い出してきて。

本来なら情報を要求してくるのですが、緊急事態かつ、好感度の

高い百恵ちゃんを仲介していますのでタダで情報をくれます。やっ  
たぜ。

「ということで早速なぎたんに連絡しましょう。もしもしなぎたん。  
星奈か？ そつちから連絡をしてくるとは珍しいな」

おう、ちよつと暗示をかける魔法を使うやつについて話を聞きたい  
んだけど……いいかな？

「……わかった。だが少し待っていてほしい。バイト中だし、思い出  
すのに時間が欲しい」

あ、いいつすよ（快諾）。

じゃあバイト終わったら連絡してくれよな。頼むよ。

へっへっへ組長。話、取り付けときやしたぜ。

「それでは待つとしましょう」

うん、そうつすね！

それからかりんちゃん！ かりんちゃんも事件の捜査をしてもら  
おうかね、ちゃんと参加してもらおうね！

「勿論なの！ わたしだって、こんな事件を起こした犯人を許せない  
の！」

気合ヨシ！（現場猫）

こんなに遅しくなっちゃって！ と言ってもまだかりんちゃんは  
待機です。いつでも動くことができるようにスタンバイしてもらい  
ましょう。

じゃあ（なぎたんに会うまで）流しますね。

「待たせてすまん」

ええんやで。

ということで暗示の魔法を使う魔法少女『瀬<sup>せ</sup>奈<sup>な</sup>みこと』の情報ゲッ  
トだぜ！

しかしながらなぎたんは瀬奈みことのことまでは覚えていても、そ  
の相方の更紗帆奈のことは暗示の影響で思い出すことができません。  
このことが引つ掛かったなぎたんは瀬奈みことについて自分で調べ

てその後、情報を共有しようとして提案してきます。

お任せしてもいいのですが、先程言った通り大東団地編に合流したいのと、いち早く更紗帆奈のことを思い出し出してもらおうためのショートカットを使うので百恵ちゃんも同行します。

「瀬奈みことが住んでいたのは……神浜大東団地」

はい、このタイミングで一手を打ちます。

なぎたんいつすかあ？ その団地にい、百恵ちゃんの知り合いの魔法少女、いるらしいんすよ。

「なに？ 一応訊くが星奈。その魔法少女と連絡は取れるのか？」

大丈夫つすよバツチェ取れますよ。

ほったらかしにしていますが、団地組の好感度は順調に上がっています。なんでかつて？ 前の団地イベントで稼いだ分と、アザレア組の影響です。

あの事件以降、アザレア組と団地組は仲良く行動していますからね。だから団地組もこの事件の調査に乗り出すわけです。

そしてその二組は百恵ちゃんの恩恵をフルに受けているので、放置していても勝手に話題に百恵ちゃんを出してくれるので好感度が上がるっていう寸法です。

逆に悪いことをしていた場合、こういうところから話が広がって気が付いたら知り合い全員の好感度が下がっているなんていう事態が起こりえます。

外道プレイを嗜もうとしている人はしっかりと暗躍しましょうね。

ということとで早速連絡を入れましょう。連絡をするのはみとちゃんです。なんでみとちゃんなんだって？ 連絡先一覧で一番上に表示しているからですよ。

もしもしみとちゃんお久々。

「本当に久しぶりですね！ それでどうしましたか？」

今神浜で起こってる事件あるっしょ？ それについて聞きたいことがあるから、明日会えないかな？ よかったらいらとせいかも一緒に来てほしいんだ。

「！ わかりました！ 私たちもちょうどあの事件を追いかけていた

ところなんです！ 協力します！」

ありがとナス！（調整屋で）お待ちしてナス！

ということだなぎたん！ 明日一緒に団地組と会おうぞ！

「わかった。星奈、明日はよろしく頼むぞ」

「それでは私は別行動を取らせていただきます。お互いにこまめに情報を共有しましょう」

これで無駄なくなぎたんと団地組を合流させることができます。

しかも調整屋に呼び出したので、すぐにみたまさんに暗示の魔法を解除してもらえます。

じゃあ（今日の所は）流しますね。

おはよーございまーす！

本日も調整屋からお送りしてまいります。

「百恵さん、なぎたん、久しぶりです〜！ つて、えっ!? 百恵さん!？」

「か、髪の毛どうしちゃったんですか!？」

「……ま、真っ白」

ということ呼びかけに応じてくれました団地組の皆さんです。せいかは相変わらずガツチガチです。なぎたんの圧が強すぎるっぴ！

あと髪の毛のことは大丈夫やで。こんなに若いうちから白髪とかホント嫌になっちゃうよ〜。

「……それで聞きたいことってなんですか?」

「それでこのはさんたちの無実を証明できるんですか!？」

ということここからはなぎたんと団地組の皆さんにお任せします。百恵ちゃんに出来ることは現状ありません。

なぎたんは一度しか会ってはいなかったとはいえ、瀬奈みことのことを覚えていました。みたまさんに言われてようやく思い出す程度の朧げな記憶でしたけどね。

そしてその瀬奈みことは神浜大東団地に住んでいてある日を境に失踪した、そこまでははつきり覚えています。

で、それと大東団地の失踪事件の関連性を疑ったけど、その家族の苗字が『瀬奈』じゃなくてこれもうわかんねえなという事態に陥っています。

「れ、れいらー！ ど、動画！ ほら……」

と、ここでだんまりだったせいか声が声を出します。

ちなみにせいか動画のことを思い出せずにいた場合は百恵ちゃんと言うつもりでした。団地イベントの時に問題の動画を百恵ちゃんも見ていますからね。

「……ぐっ！」

おっ、大丈夫か大丈夫か。

物凄い汗をかいています。これでよしです。これでなぎたんは、瀬奈みことからもうひとり魔法少女を紹介されたことを思い出します。一体それは誰紗帆奈なんだ（すつとぼけ）。

と、ここで百恵ちゃんがなぎたんに暗示の魔法がかけられているのではないかと指摘を入れましょう。なにもしなくてもせいか指摘してくれますが、ここで指摘することでちよつとタイムが縮まります。ここぞというときにRTAアピールをする走者の屑。

「なるほど……つまり、自分は瀬奈君に暗示の魔法をかけられたことで、記憶に何らかの封印がなされている……ということだな？」

そうだよ（肯定）。

さあ、みとちゃんやちよつとください！

「私の魔法を使うの!？」

ちなみにみとちゃん、自分の固有魔法のことをすっかり忘れていません。

ちよつとおまつ、そんな素晴らしい魔法使えるんだから忘れるんじゃないよ！ 泣いている百恵ちゃんだっているんですよ！（自業自得）

「じゃあ行くよ！ みんな、手を繋いでね！」

もちろんSA（DNLD）。みたまさんもかりんちゃんも見えてないでこつち来て、おまえらも（なぎたんの記憶に）入れてみろよ。

ということみんな仲良く手を繋いでなぎたんの記憶にダイブン！

はい、これで目的が達成されました。あとはなぎたんが勝手に固有魔法である『読心』を使ってくれるのでそれを待ちましょう。パパッて……読心して終わり！

なぎたんの魔法とみとちゃんの魔法が相殺されて現実世界にただいまです。

それでなぎたん、読心して何がわかったん？

『サラサハンナ』？ 初めて聞く六文字だあ（すつとぼけ）。

「だが自分にかけられた魔法はまだ解けていない。仕方ない、魔法を強制解除する。……八雲、できるな？」

「む、無茶言わないでえ!」

ままま、みたまさん！ 百恵ちゃんからもお願いしますよ！ その分は……ギャラ出すんで（棒読み）。

ホラホラホラホラ（鬼畜）。グリーンフィード、いっぱい持ってきたで？

「ちよつとモモちゃん……みんなをここに集めたのは、最悪こうするためだったのねえ!」

そうだよ（肯定）。

ほら早くなぎたんにかけられた魔法を解くんだよ、あくしろよ。MTMみたま早くしろ〜→

「んもう……わかったわあ。ただし特別よお？ それに本当に出来るかどうかもわからないからね？」

数分後。

「はーっ……はーっ……はーっ……。い、以上だ……」

「ぜーはー……ぜーはー……。げ、限界にしんどいわ……!」

なんだよ……やれば……出来るじゃねえか……!」

ということ（情報提供）ありがとナス！ そしてこれで更紗帆奈の暗示対策ができます。だって弱点を聞きちゃいましたもんね! ……と、お？

電話です。発信元は……『常盤ななか』!

組長最高！ ナイスタイミング!

「もしもし百恵さん。……釣れそうですよ、敵が」



ヨシ！（現場猫）これは無事にあやめとかこちゃんを衝突させることができましたね。

このはとななか様は敢えてチームメイトに夜の話し合いの時の内容を言っていないので、なにも知らないピュアな十三歳組は更紗帆奈の罠にかかります。

ですが、このはもななか様もこれを狙っていました。そして……尻尾を掴めたから連絡を入れてきてくれたわけなんですな！ 組長！好きツス！（直球）

おう、組長こつちも事件の黒幕の正体がわかったからよ！ やつちゃんに連絡してアザレア組と合流な！

「！ わかりました。今すぐ連絡をし、急行します。そちらもお気を付けて……！」

さあ、かりんちゃんにちよつと指示を出して仕込んでから向かうとしましょう。

団地組はここまでです。

みんな魔法少女としては発展途上なので、普通に頃されてしまう可能性があります。そうなるとりせ案件なので置いていきます。

（捜査協力）ありがとナス！ あとは百恵ちゃんたちに任せてくれよな！

「百恵さん……お願いしますね！」

「絶対にあの人たちを助けてください！」

「お願いします……！」

……ということで飛蝗編第6話にいきますよ～いきますよ～イクイク……又ツ！

「全員、揃ったみたいね」

「みんな……」

「大所帯ですね」

さて、メンバーの確認をしましょう。

集まっているのはアザレア組、ななか組、やちよさん、百恵ちゃん、

そしてかりんちゃん、十人です。おそらく総合戦力としては神浜最高峰じゃないっすかねえ。

「それでは……調査の報告をお願いします」

それじゃあかりんちゃん、頼んだで。

「……わかったの。この事件の黒幕は『暗示をかける魔法』を操る魔法少女なの。それを使うのは……」

……『サラサハンナ』……。

はい！ ここまで条件が揃うと出てきてくれます！

やつちゃんと組長が即座に反応。百恵ちゃんも変身しています。それにつられて他のみんなも変身しました。このは後ろく、後ろくつ！

「じゃじゃーん！」

今明かされる衝撃の真実ウ！（知ってた）

ということとで遂に姿を現しました！ 神浜のやべーやつ堂々の第二位、混沌の魔法少女、更紗帆奈のご登場です！ アザレア組となか組を陥れたすべての元凶です！

はい！ というわけで、今回はここまでにしましょう！ 次回は混

沌編です！

ご視聴ありがとうございました！

S i d e . 更紗帆奈 混沌の幕開け

もうさあ、本当に本当に大嫌いだったんだよね。

なんかいきなり来た父親を名乗る男の虐待から始まってさあ、そいつに怯えて空気同然になっている母親に放置されてさあ？

ロクでなしの父親は刺されて死んじまうし？ 父親が死んだことで吹っ切れちゃった母親も車に轢かれて死んじまうし？

ほんっと、つまんねーあたしの家族はどこまでもつまんねー生き方をして、そしてつまんねー死に方をしやがった。

そんなクソみたいなつまんねー環境から出られたと思ったらさ、今度は学校でいじめだってよ。しかも意味わかんねー理由でさ。

はあくあ。まあアレだね……。

まるで毎日冴えなくて、楽しくなくて、つまらなくてさ。そのうえ苦しくて、痛くて、面倒くさくて。だからと言ってたただ死ぬつても腹立つしさ？ とりあえず生きているよってやつ、いんじゃない？

所詮あたしもさ、そんなやつらのひとりだったってことなんだよね。

わかってんだよ。

こんな目に遭っているやつなんてこの世界に巨万ごまんといてさ、あたしなんてまだ可愛い方かもしれないなんてことはさ。

でもさあ……それで納得するほど聖人君子ってわけじゃなかったんだわあたし。

だからアイツの話に乗った。

もう全てがどうでもよくなっちゃってさ、そんなときにアイツ……キユウベえと契約して魔法少女になった。

あたしをいじめてきたやつらをあたし以外の記憶から存在ごと抹消して、知り合いからも、友達からも、家族からも思い出してもらえず、そんなことになっていることすら知覚させずに消滅させる。

もく、最っ高の気分だったね。

次の日に学校に行ったらさ、そいつらが席ごと消えてんだもん！

教室のところどころ、机があるべき場所が妙にぽっかり空いてるつてのにさ、みーんなそれに違和感を抱くことなく、楽しそうに昨日とおんなじ笑顔浮かべて友達と駄弁ってやがんの！

しかもあたしが消したやつらの話をしたらさ、きよとんとした顔で「誰それ？」って言うの！ 先生すらもその状況に違和感なくホームルームを始めるしさ！ 傑作っしょこんなん！

もうこれ学校絡みのいじめだろうって、腹抱えて笑っちゃったよね！ なに言ったか覚えてないけど、大声で叫びまくったよ！

ああ、本当に面白かったなあ。あたしの人生で多分最初に感じた楽しいと思っただことなんだろうね。

あ、でも同情なんかしちゃダメだよ？

あたしがやってんのはさ、『復讐』なーんていう御大層なものですらない、私怨と八つ当たりで塗れた、どうしよーもなくつまんねーことなんだからさ。

結局あたしはさ、周りにつまんねーつまんねーと言っているくせにさ、自分から面白いことをしようともしない、周り以上につまんねー人間だったってことなんかわさ。

魔法少女になって違う世界に来れたと思った。

でも、そんなに甘くはなかったよ。

あの時のあたしは本当に弱っちくてさあ。

なり立てほやほややってのもあったけどさ、絶望的に戦闘センスがなかったんだわ。

なんで杖を使った魔法を使えるのに近づいて殴ってんだよ、普通に距離取って魔法使えや、なんて感じの今のあたしからしたらツツコミどころ満載の危なっかしい戦い方なんてしちゃってさあ。そんな風に戦っていちやあ、勝てる敵にすら勝てないっての。現に使い魔数匹倒すだけで息上がっちゃまってたしね。

こんなんで魔女なんて倒せんのかなって、慣れてもいねーくせに余計なこと考えてつかから使い魔相手にピンチになっちゃまうんだよ。

……でもさあ。

「その人を攻撃してはダメ！」

そのおかげでさあ……会えたんだよね。

短い間だったけどさ、あたしに光をくれた、あいつにさ。

瀬奈みことっていうやつなんだけどさ、そいつ……瀬奈は思い込みが激しいところはあったけど、どうしようもなくお人好しでさ。

名前の響きが似ていて同じ魔法少女だからなんて理由で、こんな根暗なあたしを友達って言ってくれてさ。こっちは内心、楽できるから利用してやろうって思っていたのにさ。

しかも瀬奈はあたしに魔法をくれた。

魔法少女には固有魔法があるって聞いたんだけど、あたしにはそれがなんなのかわからなかった。

あたしらしくないのかもしれないのかもしれないって思っていたんだけどね、あの日の魔女退治であたし、瀬奈と同じ『暗示』の魔法を使えるようになった。

それから別の魔法少女と出くわす度に、あたしの魔法が変わっていった。その魔法少女たちと同じものに。

『上書き』の魔法。

あたしは他人の魔法を使うことができる。

扱えるのは一種類限定だけで意識してコピーしないと自分のモノにできないけど、充分強力な魔法だった。しかもこのコピーは何度だって使える。

生まれつき取り柄もないのかもしれないあたしらしい魔法。

他人からパクってきて自分のものにする。そんな固有魔法だった。

まあでも？ 結局瀬奈の『暗示』の魔法しかロクに使わなかったけどね。

他のやつらの魔法、あたしと相性良くなかったさあ、瀬奈の魔法が一番使いやすくて便利だったから、ずっと『暗示』の魔法を使い続けた。

「えへへ〜！ ちょっと誇らしいかも……！」

そんなあたしの心の内を知らないであろう瀬奈はただ嬉しそうに笑った。

気付けばあたしも、少し笑っていた。……こんな風に笑えるように

なったんだって、少し自分でも驚いていたのは秘密だった。

だからあたしたちはふたりで『暗示』の魔法について研究することにした。

そして気が付いたんだけどこの魔法、かなりヤバいものであることが判明した。

この『暗示』の魔法は相手の記憶にも干渉できて、対象の記憶を封印することができる。思い込みを増長させて混乱させたり、自分に言い聞かせることでリミッターを外したりといろんなことにも使える。

そのいろんなことがさあ……全部魔女じゃなくて人間相手にも使えることだから尚更ヤバいつてわけ。

だからあたしは、瀬奈にその事実を話さなかった。

瀬奈のことだからたとえ知ったとしてもそんな風に使わないだろうし、そんな凶悪な使い方を示唆されて落ち込む姿を見たくなかったって言うのもある。

そんな……お互いに魔法を研究しながら魔女を倒して、それなりに充実した毎日を過ごしていたある日のことだった。

「まずは一段落だな」

あの変な喋り方の女と出会ったのは。

堅っ苦しい喋り方で一緒にいると息苦しくってしょうがない。

瀬奈は魔法少女の知り合いが増えて嬉しいらしくってぺらぺらと自分のことを喋っている。

こいつのことはあたしは知っていた。

和泉十七夜。

たったの一年で東の魔法少女たちを纏めるようになったカリスマだ。

正直、こいつは凄い面倒くさい存在だと思った。

今のあたしにとって、大切なのは瀬奈だけだ。瀬奈さえいれば後はいらぬ。そんな風に思うようになっていたんだ。

そして、あたしと瀬奈の世界にこいつは不要だ。

前々から試してみたかったこと……魔法少女に『暗示』の魔法をかける実験。その被験体になつてもらおうと思った。

検証したかったことが実行できて、ついでにあたしのことを忘れてもらえる。一石二鳥だった。

帰り道にこいつを襲って魔法をかけてやる。そう考えていた時だった。

「瀬奈君と更紗君はまだ新人みたいだな。だったら紹介しようか、傭兵に」

「傭兵……ですか？」

「ああ。聞いたことはないか？　星奈百恵……というベテラン魔法少女のことだ」

その名前も聞いたことはある。

なんでも神浜最強の戦闘能力を持つって言われている魔法少女。

『完全中立』を謳っていて、神浜の全ての魔法少女の味方と公言しているやつだ。

和泉十七夜からその名前が出た時、あたしは一気に不快な気持ちになった。

その名前だけはどうしても瀬奈に聞いてほしくなかったからだ。

「星奈……さん！　帆奈ちゃん、また私たちと響きが似ている名前だよ！　しかもそんな人が神浜最強ってすごいね！」

「う、うん。そうだね……」

ああ、こうなるってわかっていたから聞かれなくなかったんだよ！

星奈百恵。

漢字二文字で後ろに『奈』の字。あたしたちと同じだ。

こうして瀬奈と仲良くなれたのも名前の響きが似ているからっていうのがきっかけだった。だったらそれは他の魔法少女だって例外じゃない。

星奈百恵。

あたしはこいつのことが大嫌いだったんだ。

百に恵まれるなんていう御大層な名前。

『星』とかいう希望を表す一文字に、あたしと同じ『奈』の字がくっついていやがる。あたしにとっちゃあ皮肉以外の何者でもない苗字だった。

名前からして大嫌いだったのに、さらにそれを後押ししたのはその名前通りの輝かしい功績の数々を聞いたから。

周りからの信頼の厚さ、確かな実力。すべての要素がなーんにもないあたしとは真逆。

『完全中立』という謳い文句も嫌いだった。

そんなことを言えるのは心に余裕のある強いやつだけ。そしてそんなやつは本当になーんにもないやつの気持ちなんて知らない。理解しようとも思わないだろうさ。

それにさ、『完全中立』って結局のところ、どっちつかずっていうことでしょ？ それが神浜の全ての魔法少女の味方と公言しているから笑わせる。

もし魔法少女同士でどうしても避けられない戦いが起きた時、あんたはいったいどっちに付くつもりなんだ。きつと何も考えていないに違いない。

考えれば考えるほど星奈百恵という魔法少女は、あたしが嫌いな要素がすべて詰め込まれた、聞くだけで不愉快な存在だった。

瀬奈は会いたいと言っていたけど、あたしは全力で拒否した。

面倒くさい以前の問題として星奈百恵にかわりたくなかった。だからあたしは拒絶した。

「……まあ、本当にどうしようもない時は自分に連絡をしてほしい。自分が星奈の窓口をやっているからな。星奈は必ず助けに来る。この町に住む魔法少女のためなら、どんな者にも手を差し伸べる。あいつはそういう存在だ」

瀬奈と連絡先を交換した和泉十七夜はそのまま帰っていった。

あたしも瀬奈と別れて、和泉十七夜を追い、魔法を使って記憶を封じた。

実験は成功だった。……成功だったんだけど、あたしの気分は晴れないままだった。

いつかは瀬奈とふたりでこの世から姿を消して自由な人生を歩む。それがあたしの秘かな計画。

その足掛かりとなる魔法の開発に成功したのに……。



瀬奈も瀬奈で……その星奈百恵のことを聞いてから、より一層魔女退治に熱を入れるようになっていた。最強の存在が自分と似ている名前であることがよっぽど嬉しかったみたいだ。漢字一文字合っているだけでよくもまあ……。

でも、そんな瀬奈だからこそ、あたしは救われたんだ。

でもさあ……。

「あのさ、ちよつとペース落とさない？」

最近は使い魔ばかりで魔女も見つからない。

神浜にいる魔法少女が多いことをあたしは知っている。

魔女は基本的に見つけたもの勝ち。早い者勝ちの恨みっこなしっ言うのがこの神浜の掟だ。だから魔法少女の数が多ければ多いほど、生き残っている魔女を見つけるのが困難になる。

それにあの星奈百恵の存在もある。

やつは西の魔法少女でありながら東でも平然と活動しやがる。

仕事終わりに寄り道感覚で魔女を狩っていくハンターだった。

そして……神浜最強の肩書きが伊達じゃないくらい、あいつは強い。

偶然、この近くであいつが仕事をしているところを見つけたんだ。

本当にあいつが最強なのかよって思うくらいチビで、あの和泉十七夜に負けないくらい変な喋り方をしていやがった。

どんなもんなのか、嫌いとはいえ好奇心が勝ったあたしは後をつけてみることにしたんだ。

したらさ、あいつ魔女の結界に入って数分で出てきたんだよ？ 意味が分からない。

魔女との戦いは15分以上かかるのが普通なのに、あいつはその半分にも満たない時間でクリアしやがる。

そうして仕事が終わった帰り道に、魔女が見つからなくてグリーンフシードに困っている魔法少女を見つけた時には、なんとタダでグリーンフシードを譲って浄化していやがった。

あたしたちのソウルジェムを浄化するグリーンフシードは、必ずしも魔女を倒せば出てくるわけじゃあない。運が悪ければ何体魔女を倒

しても手に入れることができないほど希少なものを、あいつは平気な顔で渡していた。

「なあに、困ったときはお互い様じゃ。なにかあったら私に頼るがよい。力になるからの」

その言葉を聞いた時は……なんでだろうなあ。

あいつのことが大嫌いなはずなのにさあ……凄いいい人だなんて思っちゃったんだよ。

あいつの仕草や表情を見て、そして声を聞いてわかった。いや、本当は今日偶然あいつを見つけて、つけていた時から気付いていたんだよ。

あいつは本気で他人に寄り添って、心配をして、味方になろうとしているんだなってさあ……。

虐待もいじめを受けていたからわかるんだよ。

薄っぺらい正義感とか同情とか、そんな犬の餌にもならないつまんねーものを掲げて、善人面して近寄ってくるような連中のことをさあ。

でも、あいつはそいつらと圧倒的に違う。

軽い世間話や自分の話ばかりかして相手の心を開いて、その上で話を聞いて……その全てを肯定していた。直接的な物言いは絶対にしなかった。

なぜ、どうして、そんなすぐに答えを求めるようなこともしないで、否定することも、あやふやにすることもせず、ただただ、優しく受け止めていた。

あいつなら、こんなあたしも……。

そんな考えが浮かんで、気が付いた時にはあたしは自分の部屋にいた。バカだなんて思ったよ。

いつだってこの世界はあたしに冷たい。そんな世界があたしにとって都合のいい人間を二度も用意してくれるわけがない。

欲張らない。あたしには瀬奈がいればそれで充分。

ロクに喋ってなくて、遠巻きに見ていた他人の温もりなんて必要ない。

瀬奈さえいれば……。

話が長くなっちゃったね。

そんな事情もあってさ、あたしは瀬奈にペースを落とすように提案をしたんだよ。

瀬奈はいつだって全力だった。

魔女だけじゃなくて使い魔相手にも毎度毎度全力で……どう見ても無理をしているようにあたしには思えたんだ。時々しんどそうな顔をしているし。

余計な心配しないでよって怒られちゃったけどさ、それでも心配なんだよあたしは……。

「そ、それにさ！ 聞いたんだけど星奈さんって、一日に何体も魔女を倒せちやうらしいんだよ？」

「へ、へえ。そうなんだ……」

怒っちゃったことに申し訳なく思ったのか、瀬奈が話題を変えてくるけど……知ってるよ、そんなこと。だってあの時、最低四体は仕留めたところを見ていたから。

でもあれはあまりにも……規格外すぎる。

なんていうか、普通じゃない。絶対にあの強さの裏になにかがある。なにか……得体のしれないなにかが、さ。

「でもさ、あたしたちはまだ魔法少女になって一年も経っていないペーパーじゃん？ 目標が高すぎるんじゃないか？」

「目標は高い方がいいでしょ！ それよりもさ！ また団地の方、探しに行こうよ！」

結局あたしの言葉に耳を貸してくれなかった瀬奈の勢いに負けて、あたしたちは神浜大東団地に行くことになったんだよ。

成果としては使い魔を見つけたただけでお終い。戦いもあっさりと終わったんだ。

でも……問題は、その後だったんだよ。

戦いが終わった後、瀬奈はボーっとしていたんだ。

ここから見る景色が好きって言っていたからさ、いつものことかと思っただよ。

でも、すぐに様子がおかしいことに気が付いた。  
突然悲鳴を上げて苦しみだす瀬奈。

助けてと手を伸ばす。あたしはすぐに、崩れる瀬奈を抱きしめて  
……瀬奈のソウルジェムを見て絶句した。

真っ黒だった。

グリーンシードがないのにもかかわらず全力で戦い続けた結果、瀬奈のソウルジェムの輝きが完全に消えて濁り切ってしまったってんだ。

そこからはさあ……もう地獄だったよ。

瀬奈のソウルジェムに輝が入り始めて変形しちやっつき、変化が終わった時には……グリーンシードに変わっちゃっていたんだ。

そしてあたしはこの時、隠されていた魔法少女の真実つてやつを目の当たりにしたんだよね。

魔法少女の行きつく先は……魔女だって……!!

なによりも大切だった、ずっと一緒にいたいと思えたあたしの大切な存在が、あたしの目の前で、魔女になった。

一周回って冷静になれたあたしは魔法を使って瀬奈だった魔女を追い払った。

倒してはいない。ただ……追い払うことしかできなかった。

その後に出てきたキュウベえからあらかたの話を聞いた。

エネルギーがどうか小難しい話をパーツとね……。

あたしは頭が悪かったけどそれでも分かったことは、魔女は魔法少女の成れの果てってこと。

そっかそっか……そういうことか……。

じゃあさあ……。

「ねえキュウベえ？ それはさあ……あの星奈百恵も知っていることなの？」

「？ なぜここで星奈百恵が出てくるんだい？」

「いいから答えてよ」

「……そうさ。星奈百恵はこの魔法少女の運命を知った上で魔法少女になった、極めて珍しいタイプの魔法少女だよ」

「そっかそっか……うん……そっか……。……そうなんだあああああ！」

あたしは何度も頭を床に打ち付けた。

並外れたこの身体能力も！

怪我をしてもすぐに回復するこの体も！

なんでも思うままになると思っていた『暗示』の魔法も！

手に入れられると思っていた……夢のようなあたしの世界も！

全部全部偽物だったと……ただの張りぼてだったと知ったから！

そんな幻を打ち砕くために！ あたしは頭を叩きつけたんだ……

！

それにあたしは……星奈百恵が許せなかった。

わかってんだよ。星奈百恵は何も悪くないってことはさあ。これ

はあたしの八つ当たりだ。

キュウベえにあいつがこの真実を知っているのか聞いたのも、少し

でもあいつに非があると思ひ込みたかったからってことはわかって

んだよお！

それでも……それでもさあ！

どうして……どうしてなんだよお……！

どうして瀬奈を……あたしを……ちくしょう……。

ひとしきり頭を叩きつけて笑い飛ばして……それからはさあ、なん

かもう色々と吹っ切れちゃったんだよね。

なんていうかそう……目の前がパーツと開けた気分ってやつ？

そう！ もうスツキリ！

なーんかさあ、もうどうでもよくなっちゃった。

だって行き着く先がわかっちゃったんだからさあ、だったら楽しんで

方がいいでしょ？ 思いついたことをせーんぶやって、バーンツて

弾けるんだ！

え？ 星奈百恵に喧嘩を売る？ まあ、それもいいかもね！

でもさあ……それはメインディッシュじゃない？ まだまだ早いよ

ね。

だって今のあたしが仕掛けたところでさあ、多分一瞬で制圧されて

終わりっしょ。

『暗示』の魔法は万能じゃないんだ。ちゃんと口に言葉を出さないといけないし、意外と繊細なんだよ。

それしか武器がないあたしが神浜最強に噛みついたところで速攻で組み伏せられてお・わ・り！ そんなのはつまらない。

もつともつと強くなって……そして、この神浜の全てを巻き込んだドデカイ事件を引き起こして、その上で……あいつの手にかかる！  
それがあたしの目標！

最っ高にぐつちやぐつちやに搔き回して、そして神浜最強に殺されてジ・エンド。

あつは！　なんて愉快で素敵なあたしの最期……！

あたしは、あたしが少しでも心を許しかけた相手に殺されて死ぬんだ……！

瀬奈がいないこの世界で生きるのももううんざり！

ならせめて……一瞬とはいえ、気の迷いとはいえ、信じてみたいと思つた存在に殺されてフィナーレを迎えよう！

ああ、それまではいっぱい戦つて強くならなとなあ！　いっぱい魔法を使つて研究しないとなああ！

なんでだろう！　今がすっごい楽しい！

瀬奈が魔女になつた時は絶望のどん底だったのに、生きる気力がぐんぐん湧いてくる！

「すっごいなあ……これが星奈百恵の『力』かあ……！　あつは！」

さて……手始めになにをしようかなあ……？

そうだ、とりあえず瀬奈だった魔女に暗示をかけてこの団地に居座つてもらおう。元々ここに住んでいたし、住み慣れているでしょ？

適当に厄災振りまいて楽しく暮らしなよ！　時々会いに来るからさっ！

それからあたしは毎日のように魔女との戦いに明け暮れたよ。

『暗示』を自分にかけて姿を消して、誰にも気が付かれないようにひっそりと、そして星奈百恵と会わないように気を張りながら着実にねええ！

あいつは本当、いろんなところで仕事しているからさあ……時々鉢合わせそうになって焦るんだよね。まあ、それもスパイスになるから楽しいんだけどさ！

こんなことであたしを楽しませるなんて、本当に最高の魔法少女だよね星奈百恵！

それでさあ、次にやったのは魔女をペットにすることだよね。本当に便利なんだわ、これがさ！

『暗示』の力は魔女にも効くからさあ、魔女に悪さをさせたりグリフシードを回収したりとなにかと便利！ 暇潰しにもなるしさあ……。

でも気を付けないと星奈百恵に狩られちゃうから、わかりづらい場所に隠してあるんだあ。

まあ、それでも気付かれて何体か狩られちゃったんだけどさ！ でもぜんぜんムカつかないのさ！ むしろよく見つけられたねーって褒めてあげたいくらい？

しかもあたしがペットにしている魔女は大魔女になるまで成長しているような個体ばかりなのにあ、あいつそれをたつたの二振りです倒しちゃうの！

見たんだよこの目で！ 一振りで使い魔を全滅させて、二振りで魔女を倒す星奈百恵を！

魔法を使って完全に気配を消して、特等席で見ただ！

綺麗だったなあ、鮮やかだったなあ、格好良かったなあ、強かったなあ……。

やっぱ！ あんな大きい剣に真つ二つにされて、あたしは死んじやうんだ！ ゾックゾクしちゃう！

それから、なんか澄ました顔したやつ……ああ、そうだ常盤ななかって言ったつけ？

そいつの実家に魔女を放ってやったつけね？ 人生を滅茶苦茶にされたとき、あの澄ました顔がどんな風に歪むのか、想像するだけで楽しかったよ！

はあーあ。そんな予行練習しながらさ、あたしは力を付けたよ。

『暗示』の魔法だって、弱点があるとはいえもうあたしの手足のように使える。潜伏しているときなんて、あの星奈百恵にすら気付かれなかったんだよ。

さつてと……それはさておきだよ。

なーんか最近はおかしいことが相次いでいるんだよねえ。

変なフードを纏った連中が暗躍しているし？

星奈百恵もなーんかちよつと様子がおかしーんだよねえ？

覇気がなくなつたつていうかさあ……。あとなーんか知らんけど、白髪になつてつし？

だあーかあーらあー、もうやつちやおう！

時は来た。

今こそ……今、この最高のあたしが、この神浜をぐつちやぐつちやに引つ掻き回すその時なんだ……！

てえーはあーじいーめえーにいー……神浜に引つ越してきたあの

三人組！ あいつらを滅茶苦茶にしてやろう。

そこから少しずつ大きくしていけば……星奈百恵が動く！

あたしのために、動いてくれるんだ！

「待っているよ……。星奈百恵え……」

ああ、早くあたしのところに辿り着いてくれないかなあ……楽しみだなあ……。



## Side. 更紗帆奈 混沌の裏側

ああ、もう本当に本当に毎日が楽しいなあ！

あれからあたしはすぐに行動に移した。

まず三人組の年長者である静海このはに暗示の力を使って幻覚を見せた。正確には幻覚じゃなくて、思い込みを利用した単なる妄想なんだけどさ。

まあそんな細かいことはいいいんだよ。肝心なのはその効果なんだからさあ。

なんで静海このはを狙ったのかって？ そりゃあ一番攪乱させると面白いからだよ！

もうさあ、ここに越してきてから数日観察してきたけどさあ、やけに閉鎖的っていうか他人を信じようとしなやかさあ……まんまかつてのあたしと似たような思想だったからびっくり！

だからわかるんだよ！ こいつが一番壊しやすいってさ！

こういうタイプってのはとにかく自分が信じる世界に他人が入ってくることを拒むんだ。だからこそやりやすい。

ほんのちよつと、仲間が傷ついている姿を見せればすぐに動揺する。そして、そうなる原因を作る要素を徹底的に潰しにかかるんだよ、どんな手を使ってもね！

まあでも？ すぐに壊れてもらっちゃ面白くないし？ ちよつとずつ、ちよつとずつ、忘れたと思った頃に幻覚を見せていく。そうやって心を揺らしていくんだ。

もしかしたらこの幻覚通りの展開になるかもしれないって恐怖を植え付け、必死で自分の居場所を守るために他人と距離を取らせる。面白い具合に上手く行っちゃうからさ、笑いをこらえるのに必死だったよ。

それにしてもほんつと、バカだよねえ。

いつまでもそのままの状態を維持し続けることなんてできないのにさあ。

他人と距離を置けば置くほど自分の居場所が狭くなって、自分以外

の誰も信じられなくなって、いつか自分が信じてきた人達まで離れて  
いって……。

結局、自分ひとりが孤立するだけなのに、さ……。

さてと、程よく揺さぶったところでちよつとした事件でも起こして  
みようか。

この後のお祭りの前のウォーミングアップってやつをさあ。

やることは簡単。噂を流す、それだけ。

そうだなあ。

あんまり派手なのにするのは面倒くさいし、『魔法少女が誰かに襲  
われて、寝たきりでいる』『最近神浜で見かけるようになった魔法少女  
が現場の近くにいた』……なんでもものでいっか。それだけで充分。

『暗示』の力を使って数人の魔法少女にその情報を植え付ける。当  
然、あたしのことは忘れてもらってね。それだけでいい。

それだけで瞬く間に神浜中に、この噂が流れる。

この際噂の真偽とかはどうでもいいんだよ。

『自分も襲われるかもしれない』、そう思わせるだけで勝手に警戒す  
るし、犯人として最有力候補のあの三人に疑惑の目が向く。それから  
数日経ってから……有名な魔法少女のチームのうちのひとりを軽く  
襲えば準備完了。

目撃者がいる前で事件が起これば、もはやこれはただの噂じゃなく  
なって、歴とした事件になる。

実際に昏倒したまま眠り続けている被害者がいなくても、みんな勝  
手に噂を信じて、ありもしない昏倒事件にビビっちゃうっていう寸法  
さ。

だからあたしは神浜の西のリーダーの七海やちよと偶然一緒にい  
た、十咎ももこを襲った。

これで七海やちよが動くのが確定するし、噂の信憑性もグンと上が  
る。

それに……あたしがだあいっ嫌いな星奈百恵は『七海やちよの切り  
札』なんて呼ばれている。

間違いない七海やちよから連絡をもらって、事件の捜査を始めるだ

ろう。一石二鳥つてやつだね。

案の定すぐに七海やちよと星奈百恵が動いた。事件が起きた次の日にいきなり接触するなんて、本当に対応が早いよね。でもそうでなくつちや面白くない。

問題を出す側は解く側が必死であれば必死であるほど、嬉しいものなんだよ。わかるかなあ？

で、そしたらさあ、本題に入る前に星奈百恵が三人にいくつに見えるかって訊いたんだよ。

そんなの難題もなにも無理ゲーだろ！ あんたのことを19歳だって一発で答えられるやつはこの世にいねーよ！

それに対して三栗あやめと静海このはが答えたんだけどさあ……もう腹抱えて笑つちやつたよ！ 小学生だとか三十路手前だとか……ボロクソじゃねーか！

というか小学生はまだしも三十路手前はねーわ！

静海このは！ やっぱおまえ最高！ そして歳を訊いただけで笑いを勝ち取る星奈百恵はもつと最高！ 神浜最強は笑いの才能すら最強つてか！

笑いすぎてちよつと魔法が解けそうになって焦つたじゃんか！

それで事件解決とか冗談じゃねーからやめろよなあ！

はあーあ。

いやあ、久しぶりに思いっきり笑つたよ。

良い気分だったんだけどさあ……ちよつと、七海やちよのことをを舐めていたよね。

まさか魔法少女の魔力を記憶できる能力を持っているなんて、思わないじゃん？ そのおかげであの三人の容疑が完全に晴れちゃった。

しかもそこに追い打ちをかけるかのように、星奈百恵が神浜の重役たちに連絡しちやつたもんだからさあ大変。

あーあー、せつかく準備したのになあ……。

これは完全にあたしが悪いね。七海やちよの能力、そして星奈百恵のネットワークの広さを見誤った。さすがはベテラン魔法少女、難易度が高いね。ま、それはそれで面白いからいつか。

さてこれからどうすつかなあ。

こりやあ、多少強引になつちやうけど次のステージに……と思ったのも束の間！

「昨日の七海やちよと星奈百恵の件で、決定的に思ったことがあって……。それをふたりに相談したいの。……。神浜から出しましょう」

馬鹿だ！ 筋金入りの石頭がここにいた！

静海このはああああ!! おまえ本当に最っ高！ もう本当に大好き！ お礼に幻覚を見せてあげるよ！

そつからあたしは、静海このはに幻覚を断続的に見せ続けた。そうしたらもう見る見るうちに情緒不安定になってさあ、面白かったよね。

でも星奈百恵のネットワークは広い。

さらに三人が潔白なんだって事実を広げるために、また新たなサクラに連絡を取っていた。

だからさあ、さらに面白くするためにあたしが襲った十咎もこのチームメイトのひとり……水波レナにも暗示をかけてやったんだ。

こいつもなかなか面倒くさい性格をしているよね。だからこそ見ていて面白いからさ、あたしは好きだよ！

そしたら水波レナが静海このはに喧嘩を売っちゃってさあ！

七海やちよが乱入して……そしてここだつてところでさあ、三栗あやめを襲ってやったんだよ！

そうしたらもう静海このはがガチギレしちゃった！ 冷静なやつが感情的になる瞬間つてさあ……ゾクゾクするよねえ！

それでこの神浜の全ての魔法少女を叩き潰すとか言っちゃってんの！ 無理に決まってるじゃん！

おまえなんかあの星奈百恵に勝てるわけがない。あいつの強さは次元が違うんだ。あいつを敵に回したら一巻の終わりなんだよ！

遊佐葉月が静海このはに楯突いちゃって、さあさあ面白くなってきたぞつてところで……星奈百恵が来たんだよ。あつは！ 最高！

最高のタイミングで来ちゃったよ神浜最強がさあ！ なーんか知らないけど常盤ななかも連れて！

いいねえいいねえ！　あたしが陥れてきたやつらが集まってきているよ！　どうなるのどうなるの!?……って期待したんだけどさあ……。

はあーあ……一気に萎えちゃったよ。

まさかそんな、三栗あやめに友達ができたなんて理由で静海このはが正気に戻るなんてさあ……。なんだよ本当、つまんねー……。でもさあ。

あたしが萎えちゃったのはさあ、もつと違う理由なんだよね。

一瞬だけど、思っちゃったんだよ。

ああ、よかった。ってさあ……。

はあー……本当に、ばっかみたい。

結局その後は大人しく隠れていたよ。

ちよつかいかけける気になれなかったし、残って話をするらしい星奈百恵、七海やちよ、静海このは、遊佐葉月、常盤ななかの五人に興味を持ったから。

話し合いはこの事件の真犯人がいったい何者なのか、という話から始まった。

いろんな話が出ていたけど、最終的に犯人は魔女ではなく魔法少女だって結論がつけられたね。うん、正解。

でもそんなんちよつと考えればわかるっしょ？　こんな大層な面子が集まって出すような答えじゃないよねえ……。

「私の方も色々調べてみたのじゃがの。妙なことが分かったのじゃ」とここで星奈百恵が口を開いた。

そーいえばこいつ、最初に動いたつきり妙に大人しかったよねえ。平たく言っちゃえば、知り合いに連絡を入れていただけだし。

なにを調べてたんだこいつ。

「この昏倒事件なのじゃがな……。どれだけ探しても被害者の魔法少女がおらんのだよ。じゃからのう……。襲われた魔法少女は昏倒して眠ったままという情報自体がデマである、ということが分かったのじゃよ」

……こいつ！

そうか。こいつはあたしがデマで流した昏倒事件の被害者について調べていやがったのか！

そして、その被害者が実際にはいなくて……昏倒事件なんてハナからなかったということ突き止めたんだ。

「……あはっ」

いい……いいよ、星奈百恵！

ああ、それでこそ、それでこそあたしが見込んだ女だ……！

そう！ そうなんだよ！

それさえ調べれば解決できるように……あたしの狙いが最初から静海このはたちだつてことがわかるように、わざと抜け道を作っておいてやったんだよ！

なのにどいつもこいつも、『静海このはたち三人が犯人だ』っていう噂の出所ばかりを調べやがって……ちよつとムカついていたんだよね。

噂はひとつじゃない。ふたつあったらろつて声に出して言っただけりたかつたくらいだ。

でもこいつは……星奈百恵はそれに気付いて、ひっそりと調べていやがったんだ。

……やっぱ！ 鳥肌が立つちやう！ さすがにまだあたしのところまでは辿り着かないだろうけどさあ……ちよつとでも気を緩めたら後ろから首根っこ掴まれちやいそうじゃん……！

ああ、これだよこれ！

追われている身特有のこのスリルが堪んない……！

しかも追ってきているのが神浜最強って考えると……ゾクゾクしちやう！

やっぱりすごいなあ、星奈百恵！ かっこいいなあ……。

実に……実に気分が良いまま、あたしは帰ることにした。もうここにいない必要はない。

あたしが仕掛けた問題の真相に、一番近づいていたのが星奈百恵だった。それだけ分かっただけで充分だった。

それからちよつと時間を空けて……あたしは再び事件を起こした。

言ったかもしれないけど、前はあくまでウォーミングアップ。

……今回は本気で行くよ。

手始めにあたしは、木崎衣美里、胡桃まなか、春名このみの三人の魔法少女を襲った。

今回は本当に眠らせた。本当に昏倒事件を起こしたんだ。

なんでこの三人を選んだかって言うと、前回の事件の時にこの三人は星奈百恵の口となって、噂の火消しをしていたから。

今回も静海このはたちを犯人に仕立て上げるつもりだったから、星奈百恵の厄介な協力者たちを先に消した。これで星奈百恵の手札を削いだ。

星奈百恵の一番弟子の御園かりんも狙ったんだけど……あいつ、見た目以上にしっかりしているやつだった。

隙が全く無くて、移動中も鎌に乗って飛んでいやがるから襲いづらんだよ。面倒くさかったから、やめておいた。

それからはずっとあたしは静海このはたちに張り付いた。拠点を変えて潜伏しても、肝心なあたしが一緒に移動しているんだから意味なんてまーったくない。まあ、静海このはたちを追いかけている魔法少女たちから逃れるにはいいかもしれないだろうけどね。

そしてあたしは、『暗示』の魔法を使って三人の意識に介入して……三栗あやめに、友達に会うのに静海このはと遊佐葉月から了承を得たと思わせ、静海このはと遊佐葉月に、三栗あやめが勝手に出ていったと思わせた。

これでまたこの三人の仲をぐっちゃぐっちゃにしてやる。

そおーれえーでえー！

ついでに三栗あやめと夏目かこの仲もぶっ壊してやろう！

夏目かこは常盤ななかと通じているし、ここで仲違いをさせれば静海このはと常盤なながぶつかる。

そうしたらさあ……星奈百恵はどっちに付くんだろうねえ……。楽しみだなあ……。

「……ただいま……」

「あやめっ！ ちよっと！ どこ行ってたの!？」

「……えっ？」

ああ、始まった始まった！　まずはこの三人だよね！

遊佐葉月が三栗あやめを問いただしているよ。「勝手にどこに行つてたの」ってさあ。

酷いなあ、三栗あやめはちゃんと言ったのにい。

それに対して三栗あやめはさあ、「出かけるって言ったもん」「OKしてくれたじゃん」の一点張り！

いや確かに出かけるって言ってたけどさあ、遊佐葉月も静海このはも許可してないのに勝手に出かけちゃダメだよお？

まあ、ぜえーんぶ、あたしが『暗示』の力を使って錯覚させてたんだけどさあ！

疲れたんだよお？　あんな連続して能力使うのはさあ。しかもタイミングもぼつちり合わないとかバレちゃうからさあ、簡単なように見えてすつごく繊細で難しいんだわさ。

おーよよ、三栗あやめが泣いちゃったあ。

こりやあ、さすがに三栗あやめが本当のことを言っているって気が付くかなあ？　こんなしょーもない嘘を吐くようなタイプじゃないもんね。

「……あやめが嘘を吐いているようには思えないわね……」

お、静海このはナイスパス！　じゃあここだね！

「……そうかな？」

「は、葉月！　信じてくれないの……!?!」

はい、ここで解除お！

「え？　何が？」

「葉月、あちしが嘘ついているって……!?!」

「はい？　アタシが？」

「言つたよ！」

「ええく!?!　い、言っていないよ！」

あつは！　揉めてる揉めてる！

そうだよねえ、あんたら全員嘘なんか吐いていないもんねえ。だからおかしいことになってるんだもんねえ。



そつから遊佐葉月がどんどん深みに嵌ってくれたよ。

今自分たちが誰かにコントロールされていることに気が付いてさあ！もしかしたら会話だけじゃなくて行動まで操られているんじゃないかってさあ！それで自分が三人を襲っちゃったんじゃないかってさあ！

いやいや無理無理、無理だから！『暗示』の魔法、そこまで万能じゃないから！やろうと思えばできなくはないけど、そうなる前にあたしの魔力が尽きて終わりだから！これ自分に使うならともかく他人に使うと結構魔力食うんだよ？  
でえーもおー、そんなことこいつらの知る由もないからねえ。

「ヤバいよ……足元が崩れていくよう感じだ……。自分はやってないのに……！ やってないんだ！……でも……ほ、本当はアタシが……？」

あつははははは！ 壊れ始めちゃっているよ！

にしてもさあ、遊佐葉月がこんなになるなんてねえ。

頼りになる参謀って感じだったのにさあ、ちよつと揺さぶっただけでここまで崩れるものなのかあ。

ウォーミングアップの時に一肌剥けやがってさあ、いち早く広くなった視野を使って事件を追いかけていたあの遊佐葉月が取り乱していやがるよお！

やっぱいいいなあ。普段は理性的でしたたかなやつがさあ、感情的になって制御不能になる姿を見るのはさあ。

「葉月！ 大人しくしなさい……」

……お？ そういえばやけに静かだったな静海このは。

こいつほとんど喋ってなかったし、今だって取り乱した様子もない。前までなら真つ先に疑心暗鬼に陥っていたはずなんだけど？

そつから静海このはは……なんか遊佐葉月の頭を撫でまわした。わしやわしやわしやーってさ。

「……はい、もう大丈夫」

……えーつと？ なにが？

ちよつとよくわからなかったけど……この静海このはの行動は混

乱していた他ふたりを落ち着かせるには充分だったらしい。

なんでもこいつらが児童養護施設にいた時に、泣いてたり落ち込んだりしたら、こいつらが慕っていた院長先生とやらにこうやって頭を撫でられていたらしい。そうすると不思議と落ち着いて、元気が出てくるんだってさ。

……はあーあ？ なにそれ。意味が分かんないね。

なんで頭撫でられただけで安心できるのさ。

そんなことされたって、なーんにも解決できていないってのにさあ……。

「失礼するわ」

「どうも。聞いてはおりましたが、なかなかこれは枯れた趣がある場所ですわね」

「……来たわねふたりとも」

おつとお？ このタイミングで七海やちよと常盤ななかが来た？

って、おつかしいなあ。七海やちよはともかく常盤ななかまで？

さっきの三栗あやめの一件でちよつと距離を取ると予想していたんだけどなあ？

静海このははこいつらが来ることがわかっていたみたいだし……まさか、静海このはが呼んだのか？

もしそうなら、それは……三栗あやめが出かけた時に連絡を取り合ったってことだ。対応が早すぎる……っていうことは！

あつは、やるじゃん！ あたしの尻尾を掴むためにわざと泳がせたっていうことか！

だから静海このはは取り乱していなかったんだ。最初っから仲間のふたりを囿にしてあたしの仕掛けを見破るために！

そしてそれは常盤ななかも同じ！

多分どこかに隠れていたんだらうね、三栗あやめと夏目かこのやり取りを見ていて、あたしの魔法を見切ったんだ！

それで七海やちよに連絡して一緒に来たってわけだ！

いいねえいいねえ。あたしとしたことが一杯食わされたよ。

まさか全部あたしを誘き寄せるための罠だったなんてねえ。やつ

てくれるじゃん！……でもさあ。

なあーんで、あいつが来ていないかなあ？

「マジカルかりん、ここに参上！…なの！」

「……待たせたのう」

って言ってるそばから来た！

そうだよおまえをずっと待っていたんだよ星奈百恵え！

楽しみだったから敢えて無視していたけどさあ、弟子と一緒に事件を調べてたってか。

多分静海このはと常盤ななかは状況証拠を揃える係で、星奈百恵がより確実な情報を集める係で、七海やちよはどっかかり腰を据えて静観する係だったんだろうね。それで全ての情報が出揃ったから、こうして一堂に会したってことだ。

有能共が役割分担をするとこんなにもあつさり解決できちゃうんだなあ。あたしが昏倒事件を起こしてからまだ三日しか経っていないってーのに。もうちよい捻った方が面白かったかなあ。

……まあいつか！

あたしを探すためだけにこいつらはガチになって問題を解いてくれたんだ。

しかも一番調べてくれたのは誰でもない……星奈百恵だ。

きつとあいつはわかっている。この事件の犯人が、その能力が、その名前が……！

星奈百恵が無言で弟子の御園かりんに手をやって促した。多分調査結果を報告しろっていう意味なんだろう。

欲を言えばあんたの口から聞きたかったんだけど……まあ、それはいいや。

「この事件の犯人は『暗示をかける魔法』を操る魔法少女なの。それを使うのは——サラサハンナ」

……あはっ！

ちよつとだけ魔法を解く。するとほぼ同時に、七海やちよ、常盤ななか、そして星奈百恵が変身した。

僅差だったけど見逃さなかったよ。一番変身するのが早かったの



これで……あたしの姿をこの場にいる全員が認識できる！

「どーもどーも！ はじめまして……でもないか……。えー、あたしがお目当ての……更紗帆奈だよーっと！ あっはー！」

ずつと誰にも認識されない裏の世界にいたあたしは、ついに表舞台に降り立った。

それで意気揚々と出てきたのは良いんだけどさあ……。

そっからはさあ……もう質問の嵐。

やれどうしてこんな事件を起こしたんだとか、自分たちに降りかかった災いの元凶なのかだとか、瀬奈はどこに行つたのかだとか……もう、ほんつとうにうるさくてしょうがない！

矢継ぎ早にバンバン人に訊いてきやがって！ 少しは自分で考えろつてんだ！ どいつもこいつもすぐに答えを知ろうとしやがって！

……まあ、でも？ 気分が良いし？ それに唯一、星奈百恵だけはあたしに質問を投げかけてこなかったしね。

いいよ。星奈百恵に免じてひとつだけ答えてあげちゃうよ。

「まあまず、ひとつだけ言っておくけど……ほぼ、あたしが犯人でくす！」

はい！ これで質問タイムしゅりょー！

あととはさあ、あたしと遊んでくれたら答えてあげるよ！

「あたしと『鬼ごっこ』しよー！ 百まで数えたら追いかけてね……」

はい、これでもうこいつら全員本当に百まで数えないと動けない！

馬鹿だよねえ。あたしのこの口が動く限りさあ、『暗示』の魔法を警戒しないとダメだって。せつかく調べて、能力まで知つたのにさあ。

んま、あたしも十人相手に同時に使つたからちよつと魔力の消耗が激しいんだけどさ。グリーンフシードもないし、使える回数も限られちゃうんだけどそんなことはどうでもいいんだよ。

どうせあたしは今日で……盛大に弾け飛ぶんだからさー！

「うぐっー！」

「これは……」

「体が……動かない……!?」

それじゃあねえ。バイバーイ！

誰が最初に追いつくかな？……てえ!?

「はっ？ あんた動けるの!？」

さつきまであたしがいた場所に、星奈百恵が移動してきていた。

『暗示』の魔法が効いていないのか、普通に動いている星奈百恵があたしに掴みかかったんだ。あつぶないなあ、もう少しで捕まるところだったじゃん。

ていうか、なんで？ なんであんた動けるの？

もしかしてあたしの『暗示』の力が効いていない？ いや、そんなはずはない！

何回も使い込んだ魔法だ、もう元の持ち主の瀬奈よりもこの魔法を知り尽くしていると言っても過言じゃない！

じゃあなんで……。

………!

「つて……それは!」

星奈百恵の耳元をよく見てみると……そこには小さな機械が付いていた。

あれは……イヤホン！ 無線式の携帯イヤホンが装着されていた。

なあるほどねえ……! やつてくれんじゃん星奈百恵！

「あつは！ さすが神浜最強の魔法少女！ 対策もばっちりつてことか!」

あたしの『暗示』の魔法はあたしが直接言葉を口にして、それを聞き取ってくれないと効果を発揮しない。つまり聞こえなければなんの効果も表れない！

こいつ……多分あたしの魔法の対策として、大音量で音楽をずっと聴き続けていやがったのか！ そして、変に喋ればあたしにバレると踏んでずっとだんまりだったつてことだ！ 御園かりんに報告させたのも喋るのを嫌ったから！

なるほど！ 仲間との会話なら念話で済ませればいいからデメリットが軽減されているのか！

「あんた本当滅茶苦茶！ 神浜最強はなんでもありつてねええ……!」

あつは！」

ああ、やつぱりこいつだ！

あたしのためにこんな対策まで用意してくれるこいつこそ、あたしの最期を飾るに相応しい……！

でもさあ……あたしの声が聞こえないってのはいただけいなあ！

もつとお話したいのにさあ！ あたしだけくつちやべってるのは寂しいじゃんか！

それにもつと、もつとあたしは遊びたいんだ！ 楽しみたいんだあんなとの時間をさあ！ だからあつさり捕まってやるかってーの！

あたしはここに隠していた魔女を一斉に解き放った。わざわざ呼び寄せて、丁寧に隠しておいてよかったよ。

星奈百恵にとつちやあ雑魚も同然だろうけどさあ、あたしの暗示にかかっているやつらにとっては充分脅威だろうさ！ そして正義の味方であるこいつはそいつらを放っておくわけがない！

すぐに武器であるでつかい剣を取り出して、魔女を殲滅させていく。やつぱ強いなあ。

でもさあ、あたしのとつておきの一体を除いた全部のペットにしている魔女を解き放ったんだ。使い魔だつてわんさかいるし、動けないやつらを庇いながら戦えばさすがに時間がかかるつしよ。

「あつは……じゃね……」

というわけでちよつとびっくりしちやったけど、計画通りあたしはこの場から逃走した。そしてちよつと離れた廃ビルの中に身を潜める。魔法を使って気配を消してね。

きつとみんな、手分けしてあたしを探してくる。だからきつと、ここにも来る。

誰が来るのかなあ、楽しみだなあ。星奈百恵だったらいいなあ……。

「どっつ……」

「いないね……」

「こつちも……」

「ここじゃないか……」

「そうかなあ……?」

「ぶわあああつ!」

残念、静海このはたちだったね。

ちやんとここにいてるってのに見当違いなこと言ってるから出てきてあげたらドツキリ大成功! そういうリアクション好きだよ、三栗あやめ!

こいつら三人のコンビネーションはまあ強い強い。良い連携だよ、本当。仲が良いんだなあって思うよ、うん。

……でもさあ、あたしだって負けてないんだよ!

これでもたったひとりで今日まで生き延びてきたんだ。昔の弱っちかったあたしはもうどこにもいねーんだよ!

『暗示』の力を絡めて攻撃を受け流して、隙ができたところをはいどーん!

こつちだつてねえ、星奈百恵以外には勝算があるからここにいるんだよ!

「じゃあ次は二百まで数えてね。バイバーイ!」

さて、今度はどこに隠れようかなあ……って思ったのも束の間!

「ようやく見つけましたよ。逃がしません」

今度は常盤ななかのチームが来た!

このチームも面倒くさいんだよなあ。結成して一年くらいなのにコンビネーション抜群だし、単純に人数も多いから捌ききることも難しいんだよなあ。

んまあ、魔法少女としての質なら静海このはのチームより劣るんだけどさあ、数の暴力ってあんまり美しくないと思うわけよ。

だあーかあーらあー! こいつらにはあたしのとっておきをプレゼントしてあげる!

あたしはこいつらの攻撃を受け流しつつ目的地に向かって移動した。

途中で静海このはたちのチームが合流してきたけど、そっちはまた止めておいた。



全く無粋だよ。今は常盤ななかのチームと遊んでいるんだからさ、邪魔しないでよ。

で、目的地って言うのは……あたしが隠していた最後の魔女がいる場所。あたしが育て上げた最高傑作。こいつをこの四人にプレゼントトしてあげる！

嬉しいでしょ？

だってこいつこそ……おまえらのチームがずっと探し求めていた、『飛蝗』なんだからさあ！

感動の再会だねえ！ ゆっくりしていいよ！

はあーあ。さつてと、ちよつと疲れたし、あたしもちよい休憩しよう。

あたしは神浜大東団地の屋上の給水塔の裏に隠れた。

楽しかったけどくたくただよ。あいつら、普通に強いから梃子摺っちゃった。

ソウルジエムも……ちよつと濁しすぎちゃったかなあ。

そういえばここだったなあ……和泉十七夜と会ったのは。

そして……瀬奈が魔女になったのはさ。

瀬奈はここから見える夕方の景色が好きだって言ってたけど……。

あたしは辺りを見渡す。

今はすっかり日が暮れちゃってあたりは真っ暗。もう夜だ。ここから見える景色は……いい。神浜全てを見渡せる綺麗な夜景があたしを癒してくれる。

やつぱりあたしは夜の方が好きだね。

電気が点いて明るくなった家が星みたいでさあ……。

「みいーつけた。待っておったぞ、お主よ」

そんなことを考えていたあたしの耳に、今一番会いたいと思っていたやつの声が届いた。

S i d e . 更紗帆奈 最凶と最強

「みいーつけた。待っておったぞ、お主よ」

声が出た方を見上げれば、給水塔の上に小さな人影。

月明かりに照らされた白い髪に銀色に輝く風車の小物。

青と紫の模様が散りばめられた和服の戦闘着。

身長に見合わないでかい胸を守るようにぐるりと回る小さな銀の

鎧。

風に吹かれて靡く青い帯。

そして……その右腕一本で担いでいるのは、二匹の竜の紋様が描かれたあたしの身長以上に巨大な両刃剣。

まるでいたずらに成功した子供のような笑顔を向けて、そいつは給水塔の上に佇んでいた。

……ああ、来た。来てくれた……!!

神浜最強の魔法少女……星奈百恵が!

「あはっ! 見つかっちゃったあ」

あたしが笑って眩くとそれに応えるように星奈百恵もまた、にかつと笑った。

……あたしの声が聞こえている! そういえばさつきしつかり喋ってた! ということはイヤホンはもうしてない!

届くんだ。あたしの声が、こいつに届くんだ……!! やつと……

やつと……!!

やつば! あたし、ゾクゾクするのが止まらない!

「残念だったわね、更紗帆奈」

そして正面から七海やちよが来た。

はあく……あんた空気読めよなあ。あたしは星奈百恵と遊びたいんだよ。引っ込んでろよ。

ていうか……待っていたって言ってたかこいつ? てことはあたしがここに來ることがわかっていて、張っていたってことか?

「鬼事が得意なのはお主だけではないのじゃよ。かりん、降りてこい」  
給水塔から飛び降りてきた星奈百恵に応えるように、それから鎌に

乗った魔法少女……御園かりんが降り立った。

「なるほどねえ。あたしは空から監視されてたってわけか……」

だから先回りされてしまった。

しかも……今まで戦ってきた他の二チームとは比べ物にならない、圧倒的な実力を誇るチームに！

星奈百恵、七海やちよ、御園かりん……考えうる限り最悪の三人組だ。

全員が単体で神浜トップクラスの実力者。ベストコンディションのあたしでもこの三人相手じゃ厳しいかなあ。

あたしが求めているのは星奈百恵ただひとり。他のふたりは正直どうでもいい。

どうかして星奈百恵だけ隔離できないかなあ。

「……やちよ、かりん。下がっておれ」

「先生？」

「百恵……あなた」

って、お？ 星奈百恵が出てきた……ということとは！

「心配せんでよい。それに……どうやら奴さんは私を御所望のようじゃからの。直々に、サシで相手してやろう」

そう、星奈百恵が笑った。……あつは！

「あつははははは！ やっぱりあんた最高だよ星奈百恵！ そうだよ！ あたしが本当に狙っていたのは静海このはたちじゃない……あんななんだよお！」

「そうじゃろうなあ。お主が初めて姿を見せてからずっと、私に熱い視線を向けてくれていたからのう」

興奮が抑えきれず、あたしは杖で星奈百恵に殴りかかる。

そうだよ！ あんたは神浜の魔法少女の希望の星なんだ！ だからあたしの望みも叶えてくれるんだ！

さあ、殺し合いをしようよ、星奈百恵え！

「つとー！ やるのう、お主よー！」

楽しそうな声をあげてあいつは片手であたしの杖を掴み取りやがった。

あの剣は消えている……仕舞いやがったんだ。へえ……。

「素手で相手すんの？ 言っておくけどさあ、あたし結構強いよ？」

「そんなことはわかっておる。じゃがのう、私も負けなくらい強い  
のじゃ。おいたが過ぎる悪い子には一発ぶん殴って躡ける程度が  
ちよūdいのじゃよー！」

にいいつと笑う星奈百恵は、手ぶらになっている右手を握りしめて  
……思いつき振りかぶってきやがった！

すぐに距離を取ろうとするけど、馬鹿みたいな怪力を誇る星奈百恵  
の腕に掴まれている杖がビクともしない！ だったら！

「放せー！」

「！」

これで杖を掴む手が放された。もうあたしは自由だ。

すぐに横に飛んで星奈百恵の拳を回避する。

ブオンつと、鈍い空気を切る音があたしの耳に響き、わずかに耳元  
が切れる。

直接当たったわけでもないのに体を傷つけるようなパンチなんて  
喰らっちゃあ少なくとも気絶は免れない。それはあたしが望むこと  
じゃない！

「ほう、なるほど。やはり便利な魔法じゃのう、『暗示』とやらは。じゃ  
がのう！」

すぐに体勢を立て直した星奈百恵はあたしに接近、次々と必殺級の  
剛腕を繰り出してくる！ リアル百烈拳つてやつ!? そんなところ  
まで百に恵まれてんのかよ！

というか……こいつやっぱり……！

「くっ……このっ……」

「ほら声を出しとる余裕はないぞ？ 集中せんと痛い目に遭うからの  
？」

あたしの『暗示』の力を封じてきていやがる！

『暗示』の魔法は声に出さないと使えない！

つまり……声を出させる余裕がないと意味がない！

しかもあいつ……あたしのソウルジエムの位置も確認して、濁り具合まで見ていやがる！ このまま消耗させて魔法が使えなくなるまで追い込むつもりだ！

でもあたしが求めるのはこれじゃないんだ……！

ボコボコにされて無様に死ぬのも悪くないけどさ……あたしが望むのは、おまえのあのどつかい剣に斬り裂かれることなんだよお！

「良い体捌きじやのう。ずっと頑張ってひとりで魔女と戦い続けた者の動きじや。お主、近接タイプの魔法少女ではなからう？ どう見ても中距離・遠距離タイプの魔法少女なのにこの動きができるということは、相当頑張ったんじやのう！」

当たり前じゃん。

あんとあの時間を少しでも長く楽しめるように、あたしは近接戦闘の練習したんだ。静海このはたちのコンビネーションだって捌ききるくらいには洗練されている自信がある。そんなあたしが手も足も出ないんだから、あんたがバケモノ過ぎるだけなんだよ。

こつちは必死で躲して受け流し続けているのに星奈百恵は笑顔を決やさない。本当に楽しそうな……それで……。

そこまで考えた瞬間、一気に冷えた。

「!? おおっ！」

星奈百恵が驚きの声をあげる。そりやあそうだろうさ。防戦一方だったあたしが、最強の星奈百恵の拳を杖で受け止めたんだから。

勿論、こんなこと普段のあたしにはできない。力で負けて吹っ飛ばされるのがオチだろうさ。

でも……今は違う。

あたしはあたしに『暗示』をかけて体のリミッターを外したんだ。

当然、こんなことをして無理して動けばあたしの体がもたない。だから本当に最後の手段だったし、できれば使いたくなかったんだけど……仕方ない。

杖で拳を受け止めたあたしはすぐに星奈百恵と距離を取る。

『暗示』の力は使えない。あたし自身に使っているからねえ。

「お主よ……まさか、自分に『暗示』をかけているのではおるまいな？」

「あくらら、気付いちやった？ そうだよ！ 今あたしは限界を超えたんだ！ これであたしはあんたとまともに戦える！」

びっくりしちゃったのかなあ？ 力だけは自信があつたみたいだからねえ。

多分初めてなんじゃないの？ 自分が放つた拳を受け止めたやつなんてさあ。

ほら、これであたしはあんたにとって脅威になったでしょ？

後ろで見守っている七海やちよも御園かりんもめっちゃ驚いてんじゃない？

つまり、あたしはあんたに並べるくらいの力を持つてることなんだよ。

だから……。

「阿呆が！ そんなことをしてはお主が死んでしまうのじゃ！ 今すぐ魔法を解かんか！」

だからそんな……あたしを心配するような顔をしないでおくれよ……！

「はああっ?! なにあたしの心配なんてしてくれちゃってんの?! バツカじゃないの!」

飛び掛かったあたしを星奈百恵は軽く流す。

そこからは今までと全く逆。

あたしが星奈百恵に攻撃を仕掛けて、星奈百恵がそれを躲して相殺して受け流す。攻守が逆転した。今はあたしが攻めたてる時なんだ！

ほら、早く武器を出しなよ！

一発でも攻撃を喰らったらぶっ倒れちゃうほど、あんたの防御力が極端に低いことは知ってんだよ！

それにあたしは……あんたのソウルジェムを狙ってんだよ!?

あたしと戦い続けてもいまだに輝きを失っていない、その綺麗な銀のソウルジェムをさ！

知ってんだろあんたはさ！ ソウルジェムが砕かれたら終わりだつてさ！

だからもし当たっちゃったらあんたが死んじゃうかもしれないだぞ！ だから……いい加減あたしに手加減するのはやめろよ！

「……そうか。お主は知っておるのじゃな」

「あつは！ そうだよ！ 知ってるんだよあたしは！」

「そうか……そうか……」

それを聞いた星奈百恵はより一層悲しそうな目をあたしに向けてくる。だからなんでそういう目を向けてくるんだよ！

違うだろうが！ あたしはあんたの敵！ 神浜を混乱させて、あんなの仲間を傷つけた許せない敵のはずじゃんか！

なのになんでそんな……まっすぐな、温もりを感じさせる目をあたしを向けてくるんだよ……！

「てめえ、いい加減……につ……」

「いい加減にするのはお主……じゃー！」

振り下ろしたあたしの黒い杖が宙を舞った。星奈百恵のカウンターパンチが炸裂したからだ。

多分今までは手加減してくれていたんだろうね。だって……今喰らったパンチはさつきまでと比べ物にならない威力があったから。

武器を使っていない時点で手加減しているのはわかっていたけどさあ……まだ力をセーブしていたのかよ……！

そしてその衝撃はこちらの体にまで及んだ。

腕が痺れて動けない！ 全身が震えあがっているような痛みがあたしの体を硬直させた！ 声すら出ない！

そんな……ソウルジェムのおかげで体への痛みは軽減されているはずなのに……そもそも『暗示』のせいで無茶な動きもできるようになっていないはずなのに……それでも、動けなくなるくらいダメージが!? 直接受けたわけじゃないのに!?

「歯を食いしぼるのじゃ。私の拳骨はちと痛いぞ?」

あたしの耳に……言葉の内容とは裏腹に穏やかで、どこか安心できるような声が届いた次の瞬間、あたしの脳天にありえない衝撃が走ると同時に、目の前で星が弾けた。

「あつ……がつ……」

殴られた。頭を思いつきり。

それだけしか、あたしは思考することができなかった。脳味噌がぐつちやぐつちやになりそうなほど頭が揺れる。

やつば、めつちや痛い……首がもげそう……。でも、それだけだった。

別に首が吹っ飛ぶわけでも頭が潰れるわけでもなければ、気絶することもない。思いつきり手加減されていることがわかる拳骨があたしに炸裂したんだ。

魔力も尽きて……限界を迎えたあたしの変身が解け、その場に崩れ落ちた。

変身を維持することができなくなった。あたしの目の前に……ほとんど真っ黒になったソウルジェムがころころと転がる。

そんな……こんな終わりがあつてたまるか……！！

あたしはソウルジェムに手を伸ばす。

諦めて堪るか……！！　ようやく、ようやくここまで来たんだ……！！　もう少して最高のフィナーレを迎えるんだ……！！

気合を入れて手を伸ばす。あと少して届くというところで……。

「もうよい、休め」

星奈百恵にひつたくられた。そして惜しげもなく、着物の中から取り出したグリーンフシードである程度浄化する。全部じゃない。

本当に……あたしが魔法を使えず、そして魔女にならない程度まで調節して浄化していた。器用なことを……。

「かりん、これを。良いか？　絶対に粗末にはならぬぞ？」

「は、はいなの」

「うむ。あとグリーンフシードをすぐに取り出せるように用意しておくのじゃ。今はまだ使わなくてよい」

「わかったの」

今や星奈百恵に代わる神浜の傭兵である実力者の御園かりんが、大人しく従っていた。

やつぱり……すげえよ、あんたは。



ああくそ、あたしだつて一応頑張ったんだけどなあ……それでも、こいつに全力を出させることすらできなかったのか。

「失礼、遅れました」

「全く、三百数えるの、地味に大変だったわよ……！」

そして……常盤ななかと、ご丁寧に三百数えていたらしい静海このはが来た。

ほかのやつらは……多分このふたりに託したんだろうね。それか常盤ななかが相手していた魔女との戦いを交代したのか……まあ、どうでもいいか。

「あーあ。あたしの負けかあ」

こうなつちやあ、お終いだね。

ソウルジエムは取られているから自分で砕くこともできないし、魔女になろうにもすぐに浄化されちまう。……だったら！

あたしは常盤ななかに目を移した。

「……なんでしようか？」

「あつは！ 常盤ななか、あたしはさあ……あんたのこと、魔法少女になるずうつと前から知ってたんだあ……！」

「………ということは………」

あはつ、やつぱり疑つて……いや、これはもう確信してたねえ？

でも言つてあげるよ。犯人の口から直接聞きたいでしょ？

真実つてやつをさあ！

「ネットで見たんだ。『華道の天才美少女』とかなんとか書かれている記事！ それ覚えててさ……だからね！ だからね！ 魔女を操つて何しよつかなくつて考えてた時にピーンときたの！——あの澄ました可愛らしい女の子の人生……ぐちゃぐちゃにしたらどうなるかなーつて！」

「………」

あははつ、どんどん常盤ななかの表情が険しくなつていつてる！

いいよいいよ。もっと怒つて怒つて！

それでやったことなんてさあ、ここに居る誰も咎めたりしないだろうからさあ！

「どう？ 驚いた？ でもさあ！ こつちも驚いたよ！ そんな適当な理由で選んだ子がさ、まさか……まさかだよ！ 魔法少女になつてさ！ 神浜最強の魔法少女とつるんでてさ！ しかも魔法少女のヤベー秘密まで知ってんだもん！ そりやビビるでしょ？ あつはー！」

あたしが気付いてないと思つたあ？

あんたさあ……あたしのソウルジエムを狙つてたっしょ？ 他のやつらとは違って、ピンポイントに、あたしのソウルジエムを奪おうと行動していた。

うんうん、それが一番あたしを止めるのに手っ取り早い行動だもんね！ 賢い賢い！

「魔法少女の……秘密？」

「なんのことかしら？ 説明してちょうだい」

「あん？ そんなに知りたきや、あんたら先生の先生にでも聞けばいいさ」  
御園かりんと静海このはは知らなかつたみたいだねえ。まあ、こんなやつばい秘密知っている魔法少女の方が少ないだろうから驚きはしないけどさあ。

でも今、あたしは常盤ななかと遊んでいるわけ。無粋なことしないでよ。

「やつばいいわ……うん……面白い。ぐちゃぐちゃになるのつてさ……！ あつはー！ あつはははー！」

「……やめろ」

低い……低い低い常盤ななかの声があたしの耳にしっかり入った。

……いいよ！ いい！

本当なら星奈百恵が良かったけど……今のアなた、最っ高じゃん！  
来なよ……もつと挑発してやるからさあ……！

「え？ 何か言つた？ あたしじえーんじえん聞こえない。あつはー！」

「……やめろつて言つてんだよ……」

——そのムカつく笑い声をつ！

ドスの効いた怒鳴り声を出した常盤ななかは……御園かりんの元

に向かう！ 腰に携える刀に手をやって！

あつは！ やっぱいいいなあ、澄ましたやつが感情的になっている  
光景を見るのはさあ！

いいよ、常盤ななか！ あたしのソウルジエム壊しなよ！ それで  
全部お・わ・り！

今のおなたに殺されるならあたしは満足さ！

「ななか、落ち着け！ 落ち着くのじゃ！」

でもすぐに反応した星奈百恵に、常盤ななかは羽交い絞めされてい  
た。

常盤ななかのその手には日本刀が抜き取られていて、御園かりんの  
目前まで迫っていたっていうのに……！ 星奈百恵え……！

「えっ!? えっ?」

「ななかさん? どうしてソウルジエムを狙って……」

「ななか、あなた本当に……」

御園かりんが混乱して、静海このはが冷静に質問する。七海やちよ  
は確信していた。

「……申し訳ありません。百恵さん、もう大丈夫です」

「……わかった。気持ちはわかるが抑えるのじゃ。お主に一線を越え  
させません」

「……感謝します」

……あーあ、つまんねーの。

結局常盤ななかもダメ、かあ……。

「かりん、それにこのは。詳しい話は彼女の処遇を決めてからゆつく  
りしてあげるわ」

「うむ。今は此奴こやつのことを優先しようではないか。……じゃがの。少  
し、私に任せてはもらえぬか?」

星奈百恵があたしの元に立つ。

やっぱり、あたしを楽にしてくれるのはあんなのかな……。

「なに? あたしを真つ二つにでもする? あんたが斬り殺してきた  
魔女みたいにさ」

「そんなことするわけなからう? 少し、話をせんか?」

「あたしと？　いーよ。負けちゃったし、勝手に死ぬこともできないし、してあげるよ」

って言ってるけどさ。本当は嬉しかったんだ。やっぱりこいつは……あたしを見てくれてるんだってな。

今日初めて会ったばっかりだったのに、こんな気が狂ったことをやってるつてのに、まだこいつはあたしを見てくれてる、つてさ。

「そうか。ありがとう」

変身を解いて、少ししやがんであたしと視線を合わせてきた。

綺麗な目だった。

その青みのかかった瞳にはあたしへの敵意なんて微塵もない。

温かくて……受け入れてくれるような、そんな目だった。

なんとなく直視できなくなったあたしは少し目を反らした。

すると星奈百恵は、くつくつと笑う。

「照れ屋さんじゃのう。そんなお主にの、ひとつ聞きたいことがあるのじゃ」

「……なに？」

「お主は私になにか言いたいことがあるのであろう？　じゃから、どうかそれを教えてくれぬかの？」

……そうかよ。こいつ……やっぱりあたしを……。

……いーよ、それじゃあ、教えてやるよ。あたしの全てをさあ……。

「あんたはさ、いいよなあ、星奈百恵……。才能にも、仲間にも恵まれていてさあ」

「……そうじゃのう。私もの、自分が色んなものに恵まれていると思っておるよ」

謙遜しないのかよ。

まあでも、そこで「そうかの？」って聞き返して来られるよりも数倍マシだね。

「それに比べてさあ……あたしはなーんにもなかったんだよ。碌でもない両親に育てられて、暴力ふられて、それで勝手に死なれてさあ。施設に預けられても独りぼっちでさ、学校でもいじめにあつてさあ……」

「うむ……」

「でもさあ、あたしは自分が魔法少女になってさあ、世界が変わったと思えたんだよ」

今までとは違う、自分になれたと思った。

ちよつとした怪我なんかすぐに癒えて、病気にもならない健康的な体。

願いが叶った結果、少しはマシになったあたしの環境。

そして……初めてできた、あたしのたったひとり友達。

「大切にしようと思っていたんだ。あたしなりのやり方で、大切なもの……瀬奈と一緒に、ずっと生きて行こうって思っていたんだ。こんな冷たい世界から抜け出してさ、世界の裏側でひっそりと、さ……」

「うむ……」

ああ、なんでかなあ……。

今でも鮮明に思い出すよ。

『わー！ 響きが似てるね！ 帆奈と瀬奈！ よろしく！ 帆奈ちゃんって呼んでいい？』

瀬奈、あんたと初めて出会った、あの日のことをさあ。

ちよつと猪突猛進で、思い込みが激しいところはあったけどさ……。

明るくて、優しく、いつも全力で、頑張り屋でさあ、こんなあたしと一緒にいても嫌な顔ひとつしなかった、あたしの唯一の友達。

今でも頑なにあんたの下の名前を呼ぶ気はないけどさあ、それはあなたのせいなんだよ？

たったの漢字一文字とはいえ響きが似ている名前同士……あたしはそこに、確かな繋がりを感じたんだ。その繋がりを大事にしたくて……あたしは、『瀬奈』ってずっと呼んでいたんだよ。

楽しかったなあ……瀬奈と一緒にいたあの時間が。

とつても短くて、夢い泡沫の夢だったけどさあ……。

甘くて、とつても幸せな、それこそいつまでも続けばいいなあって思えるような、そんな時間だったんだ……。

「でもさあ、守れなかった。唐突に、あたしの宝物は壊れちゃったん

だ」

「……そうか。それでは瀬奈みことは……」

「そうだよ。瀬奈は魔法少女として戦って、ソウルジェムが濁り切つて……魔女になっちまったんだよ……！」

今でも鮮明に思い出すよ。

あの日……瀬奈が断末魔を上げながら魔女になった、あの地獄の瞬間がさあ！

自分に暗示をかけても夢の中に出てくるんだ。

この神浜大東団地の屋上で！ 瀬奈が大好きだったこの場所で！

瀬奈が魔女になるあの光景が！ 何回も何回も！

「なあ……どうして、どうしてなんだよお……！」

ちつくしう。

あたしらしく、気持ちよくファイナーレを迎えようと思っていたのに……本当に思い通りにさせてくれないし……なってくれないなあ。

だからあんたのことが嫌いなんだよ星奈百恵え……。

あたしは星奈百恵に縋りついて……無様に涙を流して顔をぐちゃぐちゃにしながら、ずつとずつと、言いたかったことを口にした。

「どうして瀬奈を……あたしを……助けてくれなかったんだよお……！」

あんたは神浜最強なんだろう？

必ず助けに来てくれるんだろ？

どんなやつにだって手を差し伸べてくれるんだろ？

あの堅苦しい和泉十七夜がそう言っていたじゃないか。

なのにどうして助けに来てくれなかったんだよお！

あんたのその出鱈目な力でさあ！

使い魔や魔女なんてすぐに倒してさあ！

他人に平気で譲るくらい、こんなあたしにも使ってくれくらい有り余っているグリーンフィードがあればさあ！

瀬奈は魔女にならずに済んだじゃないかよお！

わかってんだよお！ こんなのただのあたしの八つ当たりだってさあ！

でも……こうでもしないと本当に気が狂っちゃまいそうだったんだよお……。

悪夢の中で瀬奈が言うんだよ。

『どうして……あのとき星奈百恵さんに助けを求めてくれなかったの？』

ってさあ！

それで何回魘うなされて、飛び起きたことか……！

ああ、そうだよ、そうなんだよ！

そもその話、あたしが変に意地を張って拒否しないで、和泉十七夜の誘いに乗って星奈百恵を紹介してもらえていたら……瀬奈は助かったかもしれないんだ！

もちろん瀬奈はそんなことを言うようなやつじゃない！ 全部全部、あたしが生み出した妄想だ！

でもさあ……それでも、あたしのせいで瀬奈が死んじゃったって考えるとさあ……瀬奈があたしのことを恨んでいるんじゃないかって、嫌いになっちゃったんじゃないかって思えちゃって……辛くて辛くて仕方ないんだよお……。

「だから……あたしはずっと、あんたに断罪されることを願っていたんだよお……」

瀬奈が憧れた……漢字一文字って言っても確かにあたしと瀬奈と名前の響きが似ている、神浜最強の魔法少女、星奈百恵。

あんただけが、あたしの罪を裁いてくれる。そうあたしは信じたんだ。

だから……あたしは堕ちるところまで堕ちることにしたんだ。

魔女を育てて襲わせて、無関係なやつを不幸にして……そんな、魔女みたいなことを繰り返して、そして大きな事件を引き起こせば……きつと星奈百恵があたしを裁いてくれる。

綺麗に、鮮やかに、美しく、格好よく、魔女を倒すときみたいになさあ、あの大きな正義の刃で……あたしを断罪してくれる。そう信じてここまでやってきたって言うのにさあ……！

「なんでなんだよお!? なんであんたはあたしを殺してくれないんだ

！　なんでこんなあたしをまだ見てくれるんだよお？

あんた正義の味方なんだろ!?　あたしは何人も人間の人生を滅茶苦茶にしてきたんだよ!?　あたしの我儘のためにさあ！

あんたを理不尽に嫌って、勝手に恨むような、そんな……魔女みたいなあたしを、今になってどうして助けようとしてくれるんだよお！

本当に意味が分からない！

こんなどうしようもないやつ、さつさと斬り殺しちゃえばよかったのにさ！　常盤ななかにソウルジェムを壊させればよかったのにさ！　そうした方が早かつたはずなのにさ！

今だって、あたしを無力化したんだからこんな話なんてしないでとつとと殺せばいいのにさ！

なんでこいつは……！

「……そうか。そういうことであつたか」

ひとしきり声に出して訴え終わった時、今まで相槌を打つだけだった星奈百恵が口を開いた。……ようやく、かな。

あたしの望み、叶えてくれるのかな……それとも、もつと無様な方法であたしを殺すのかな。

まあ、どうでもいいや。どうせあたしは……。

「ありがとう」

「……は？」

なに言ってるのか……。

ありがとう、だって？

「どんな理由であれ、お主に恨まれることで、私がお主に生きる希望を与えられたのであれば、こんなに嬉しいことはない。私に頼ってくれて、ありがとうなのじゃ」

……意味が分からない。

自分を恨んでくれてありがとうだって？

なんだそれ。

あたしが生きられるなら……自分が恨まれても構わないって、本気で言ってるのかこいつは……！



「な、なに言ってるんだあん——」

「——よい。もう、よいのじゃ」

そう言って……星奈百恵はあたしを抱きしめる。そして右手で頭を撫でてくれた。

それは決して乱暴なものじゃなくて、ゆっくり、ゆっくりとした……とても温かくて、安心できるものだった。不思議と落ち着くことができた。

静海このはたちが頭を撫でられて安心できていた意味が、少しだけわかったような気がした。

「すまなかったのう。私はお主の友達を助けることができなかつた。自分でも許せぬと思っておるよ。」

まさか私という者がいながら、この神浜で魔女になってしまう者をふたりも出してしまうとはの。

お主が恨むのも尤もじゃ。

肝心な時に力になってあげられなくて……本当に、申し訳なかつたのう……」

なんであんたが謝ってるんだよ……！

あんたはなにも悪くないじゃないか。悪いのは全部あたしなんだよ。

それなのになんで……なんであんたが、そんなに悲しそうな顔をするんだよ。

なんで……あたしに優しくしてくれるんだよ。

この世界はあたしに冷たかつたはずでしょ？

神様はあたしに二度も微笑むはずがないんだ。こんな都合のいい話があつてたまるか。

あたしを……許してくれる存在なんて、あたしの味方になってくれる存在なんて、どこにもいるはずがないんだ。どこにもいるはずが……ないのに……！

「二年も待たせてしもうて、すまなかつたのう。でももう大丈夫じゃ。

ちなみにじゃがのう？ 私は正義の味方ではないぞ。私はの、この神浜の全ての魔法少女の味方じゃ。

もちろん……お主とて、例外ではないぞ更紗帆奈よ。

じゃから私はなにがあっても、どんな事情があつたとしても、お主の味方じゃからの」

今、あたしを優しく包んでくれている、この小さくて、変な喋り方をしていて、ずっと嫌いだったけど、あたしの唯一の希望だった、神浜最強の魔法少女、星奈百恵は……しっかりとした声でそれを言い放った。

あたしの味方になるって……言ってくれたんだ。

「大丈夫じゃ。もう、大丈夫じゃからの。この二年間、よくひとりで張り続けたのう。偉かったのう。これからはもつと私に甘えるとうい。今まで頑張っていた分、肩の力を抜いて、楽になってよいのじやよ」

「……ぐう……ううう……」

気付けばあたしは……星奈百恵に抱き着いて泣いていた。

とつても小さくて、華奢な体だったけど……とても大きく感じたんだ。

温かかったし、優しくかった。柔らかくって心地よかった。

「……そろそろ、いいかしらね？」

物凄く気まずそうな声で、七海やちよが話しかけてきた。

星奈百恵が首を縦に振るけど……それでもあたしを抱きしめたまま放さなかった。むしろ力が少し入ったように思える。

本当に、あたしを守ろうとしてくれているんだ。逃げないように押さえつけているようには、不思議と感じなかった。

「……いーよ、もう」

ある程度泣けたし……なんでだろうね、凄いスッキリしているんだ。こいつに斬り殺されることを願っていたのにさあ……今はもう自分から死ぬ気は全くなかった。

尤も、ここで誰かが死ぬというなら受け入れるつもりだけどさ。

「……あらかたの事情は分かったわ。それを踏まえた上で更紗帆奈、あなたの処遇を決めるわ。——まずは、常盤ななか、そして静海この

は。あなたたちの意見を聞きたいわ。きつとあなたたちが一番の被害者ですもの。私はそれを尊重するわ」

ああ、そうだね。

きつとあたしを一番に恨んでいるのはこのふたりだ。だったら……このふたりの言うことは聞かないとね。

まず最初に常盤ななかが口を開いた。

「……正直今すぐにもソウルジエムを叩き割ってやりたいところですが……いいでしょう。今回はこれで手打ちにします」

「……いいの？ あたしはあんたの家、滅茶苦茶にしたんだよ？」

「私を足止めしていた魔女、あれが答えでしょうから」

やつぱり気付いていたのか。

あの魔女が常盤ななかの家を滅茶苦茶にするために放った魔女だつて。

「私は目的を達成できましたが……違う目的を見つけました。更紗帆奈さん、あなたが二度と、こんな馬鹿な真似をしないように監視するという目的を」

「そんなまどろっこしい事しなくてもさ、ここで殺しちやっただ方が簡単じゃん？」

「なぜ私があなたの命を背負わなくてはいけないのです？ あなたは……まあ、今までよりかはマシになるかもしれないですが、それでも厳しい現実で生きていただきます。死んで逃げるなんて、楽な道を選択させませんよ」

いまだにあたしに対する殺意は消えてなかったけど……それでも、常盤ななかは猶予をくれた。

あたしが次に、こんな馬鹿みたいな事件を起こさなければそれでいいと。

「今度は私ね。私も正直なところ、あなたを許す気はないわ。……でもね、感謝している私もいるのよ。おかげで視野が広がったし、いろんな人たちと仲良くできたから」

静海このはは静海このはで、あたしに感謝しているとか言っている。

「それにね……あなたを見てみると、ほんの数週間前までの私を思い出すのよ。自分だけの小さな世界だけに引き籠って、その小さな世界を守ることに一生懸命になって、それを脅かす周りが許せなくて……。きつとあなたは、あつたかもしれない未来の私なのよ。私だつてあの時のまま、ここにいるみんなを信じないで、葉月やあやめが目の前で魔女になったら……壊れる自信があるわ」

だからあたしがこんな暴挙に走った気持ちがある、そう静海このはは言った。

「そう……。それがあなたたちが決めたことなら、私から言うことにはなにもないわ。ただし、神浜に混乱をもたらした罰は受けてもらうわよ」

最後に口を開いたのは、七海やちよだった。

七海やちよ自身はあたしに対する恨みは……十咎ももこが襲われたことかな？

あたし色んな事やってきているし、死ぬつもりだったから何にも考えてなかったし、どこでどう恨み買っているのかわかんないんだよね。

「そうですね。まずは危険な『暗示』の魔法を捨ててもらいましょうか」

「……そうね。それがないだけでも危険性は減るわ」  
「わかったよ」

七海やちよに差し出された、あたしのソウルジエムに少し触って、あたしは『暗示』の魔法を解除した。

瀬奈との唯一残った繋がり魔法だったけど……それをこんな風に悪用しちゃった以上、もう使うわけにはいかない。

ごめんね、瀬奈。一緒に研究してきた大切な魔法だったけど……お別れだよ。

「はい、もう捨てたよ。ついでに全ての『暗示』を解除したからさ、もう眠っている魔法少女、みんな起きてるんじゃないかな」

「……本当に捨てたかどうかは知らないけど、まあいいわ。信じてあげる。次は、ななかが言っていた監視ね。もう大丈夫だと思うけど」

……一定期間、あなたには監視を付けるわ」

まあ、妥当だねえ。あたしへの信頼なんてないも同然だろうし？

それで、どんな形で監視に付けるのかな？ 常盤ななかの家に弟子入りするとか？ それともみかづき荘に軟禁されるとか？

「その監視の任務、私が引き受けよう」

……は？

今もなお、あたしを抱きしめている星奈百恵が名乗りを上げた。

「私の家に住ませよう。マンションじゃが部屋は空いておる。監視は9月までのおよそ二ヶ月間。大学は夏休みに入っておるから私は家にいるし、それだけ監視すれば問題なからう」

「でも……あなた傭兵の仕事が……」

「それならお主が、ここで更紗帆奈の監視を仕事として私に依頼すればよからう？ 傭兵業はかりんひとりでも回せる。どうじゃ？」

聞いているけど、曲げる気がさらさらないので感じさせる言い方だった。

柔軟な思考をしているけど、意外と強引な一面もあるんだね、星奈百恵って。

でも……そういうところ、あたしは好きだよ。

「わ、わたしは大丈夫なの！ 先生が仕事に集中できるように、頑張れるの！」

そして真っ先に声を上げたのは御園かりんだった。

真っ先に師匠の意見に賛成して、しかも安心できるように配慮する辺り、さすが弟子なんだなって思う。本気で星奈百恵を慕っていることが感じ取れた。

「……そうですか。百恵さんが言うのであれば、私は何も」

「私も文句はないわ」

「……はあ。いいわ。好きにきなさい」

そして三人が立て続けに折れた。星奈百恵の発言力の高さが実感できる。

……まあ、わかるよ。

こいつ歩いて接したやつらに恩を売るのが物凄くうまい。

自然な感じで介入してきて、さらつとこなして好感度を上げているんだ。多分計算しているんだろうけど、それがこいつの素でもあるから憎めない。

そうやって自分を慕う味方を増やして……今の地位を確立させたんだろうな。

あたしだって嫌いだったはずなのに、真正面で向き合ってしまったが最後、もうこいつには頭が上がらない。不思議と反発する気が削がれてしまう。

「ほれ、ソウルジェムじゃ。これはお主のものじゃからの。返すぞ」

「……いいのかよ？ あんたが持つていればいいじゃん？」

「言ったであろう？ 私はお主の味方じゃとな。私はお主を信じておる。じゃからなーんにも問題はない。それに問題を起こすようなら、今日と同じ拳骨をお見舞いしてでも止めてやるからの」

「うへえ……」

あれをもう一回喰らうのは御免だなあ……。

死にはしないけど滅茶苦茶気持ち悪くなるし、それ以上に凄い痛いし。

ま、そんなことしないからいいんだけどさ。

「……わかったよ。大人しく、あんたに従ってやるよ」

たださあ……なんだかさ、このまま素直に従うって言うのもあたしらしくないよね？

だから……。

「せつかくだし、あんたのその出鱈目な力。あたしも使うとするよ。あつは！」

あたしの新しい固有魔法……あんたとお揃いにするよ！ いいよね？ そんなに厄介そうな魔法じゃないしさ。

っていうかなにこの力!?

体の内から漲ってくるような……。やっぱ！ これが星奈百恵の力の源……酔っっちゃいそうなくらい心地いい……。

「うにゃあつ!?! お主よ、まさか私の魔法をコピーしたのか!?!」

あの星奈百恵が目を真ん丸にして驚いている！

こいつ、こんな表情もできるのか！　なんていうか、可愛いところもあんじゃん。おばあちゃんみたいに落ち着いていると思っただけだよ！

七海やちよと常盤ななか、御園かりんの三人は驚いているけど……互いに顔を見合わせてなにか話をしている。

多分念話だろうけど……なにを喋っているんだろうね。

「お主よ……はあ、よい。じゃが私の魔法は、お主とそんなに相性がいいとは言えぬぞ？」

「いいんだよ。あたしが欲しいって思ったから、もらったんだから」

たしかにこれ、魔法って言うより単純な身体強化っぽいね。しかも常時発動している成長型の。始めは漲っていた力がどんどん馴染んでいくのを感じる。

「ひとつ聞く。お主は今、いくつじゃ？」

「え？　15歳。一応、中学三年生だけど？」

「……そうか。ならば、その魔法を使うのはお主が高校生になるまでじゃ。それ以上は許さん。よいな？」

「え？　まあいいけど……」

なんだ？　今の星奈百恵の真剣そうな顔。そんなに危険な魔法なの、この魔法……。

まあ、もうあたしはこいつに従うって決めたから、言う通りにするけどさ。

「ああ、そうだ」

これからあたしは、こいつん家に厄介になるんだった。

なら、一言挨拶しないとね。

「じゃーさ、お世話になるよ。……星奈」

あたしと似ている名前、しかもそれが苗字……奇しくも瀬奈と特徴が同じだ。

「みよ、苗字を呼び捨てとは……十七夜を彷彿とさせるのう……」

「あ、それはなんかヤダ」

よりにもよってあんな堅っ苦しいやつと一緒にするのはちよつと勘弁だ。だったら……。

「セーナ……うん！ あたし、あんたのことセーナって呼ぶよ！」

『ほしな』を別の呼び方にする、『せいな』。だからセーナ！

すっごー！ 伸ばし棒を入れただけで、瀬奈とほとんど一緒じゃん！

「まあ、お主の好きに呼ぶとよい。それじゃあ、今日は帰るかの。帆奈」

「うん！ 一緒に帰ってあげるよ、セーナ！」

ああ、瀬奈。見つけたよ。

あたしの新しい世界が……あたしの新しい居場所が。

あたしが信じられるひとが、さ。

まあ、しばらくの間、あたしはセーナに連れまわされて、あたしが今まで迷惑をかけた関係各所に謝り倒したんだけどね。自業自得とはいえ……ちよつときつかったよね。

でもおかげでスッキリできたよ。

ありがとう、セーナ。……大好きだよ。



## RTAパート12 散花愁章（後篇）

ようやく黒幕が出てきたRTAはーじまーるよー！  
前回までのあらすじ！

ななか様が追っている敵の正体は魔女を操る魔法少女だったんだよ！  
よ！

そしてそれと今回の昏倒事件の犯人は同一人物なんだよ！

Ω Ω Ω へな、なんだってー！

なぎたんの封印された記憶が今解き放たれる！

捜査線上に浮上したのは……『暗示』の魔法を『上書き』の魔法で  
使役する魔法少女！

その名も、更紗帆奈！

じゃんじゃじゃーん！

というわけでやってまいりました、『散花愁章』の後半、混沌編です  
！

いやあ、出てきてくれましたね更紗帆奈！ と、いうわけですよ  
ねえ……。

……さあ、更紗帆奈籠絡ショーの始まりや。パチパチパチパチ！

（乾いた拍手）

すべての元凶である更紗帆奈はこの事件で自らソウルジェムを砕  
いて自札しますが、そんなことはさせません。

百恵ちゃんの下管理下に置いて色々と仕事をしてもらいます。

だって更紗帆奈の固有魔法の『上書き』は、非常に強力なんですも  
ん。

『激励』をコピーしたり『伝播』をコピーしたり……『暗示』のまま  
ワルプルギスを完全に制御したりとやりたい放題できて超便利！

こんな便利なもの利用しない手がないんだよなあ。

「あたしと『鬼ごっこ』しよー！ 百まで数えたら追いかけてね……」  
いやです（完全拒否）。

大先輩ばりに唐突に始まった鬼ごっこですが、乗る気は全くありま  
せん。

え？ ひゃくう？ 百恵ちゃんのことかな（すつとぼけ）。

「はっ？ あんた動けるの!？」

当たり前だよなあ？

『暗示』の魔法は口に出した声を聞かせられないと効果はありません。

つまり……聞こえなければどうということはないということです！

百恵ちゃんはここに来た時からイヤホンを使って大音量で音楽を聴いていました。

当然更紗帆奈の声なんて聞えません。だから余裕で動けるんですな！

かりんちゃんに報告させたのも、百恵ちゃんがなんにも聞こえてなかったからです。

ちなみにこの対策は、しつかりプレイヤーキャラがなぎたんと一緒に行動して、暗示の魔法についての詳細を聞いていないとできません。なぎたんと同行したのはタイムを節約すると同時に対策できるようにするためです。鬼ごっこなんてそんなタイムロスになるとさせるわけないんだよなあ。

「あつは！ さすが神浜最強の魔法少女！ 対策もばっちりつてことか！」

なに言ってるのかさっぱり聞こえないっすね。

ちなみに味方との会話は念話で済ますことができるので問題はありません。

じゃあちよつと百恵ちゃんが更紗帆奈と遊んでいるから百数えたら一斉確保だぞ！ 動いたら確保な！ 動いたら確保！

（百恵……ごめんさい、時間を稼いで！）

おう、任されたで！

ということで帆奈ちゃん、やつちゃんたちが百数え終わるまで一緒に遊ぼうぜ！ 動けるようになったらパパパツて……捕まえて終わり！

「あんた本当滅茶苦茶！ 神浜最強はなんでもありつてねええ……！」

「あつは！」

つと、いきなり魔女の結界が現れました！

ひとつやふたつじゃありません！　ざっと数えただけでも八体はいます！　これは……更紗帆奈が飼育している魔女じゃな！

なんらかの原因でプレイヤーキャラが動ける場合、更紗帆奈があらかじめ用意していた魔女をアジトに放つことがたまにあるのですが……今回はそのパターンを引き当ててしまったようです。

「あつはー！　じゃねー！」

そして逃走する更紗帆奈！

ガツデム！　おまえ他人ひとのモノ（タイム）を！（レ）

このイベントを引き当ててしまった以上、更紗帆奈は後回しにしないといけません。

魔女を無視して更紗帆奈を追いかけると、最悪百数えている他の魔法少女が襲われて頃される可能性があります。なので真面目に戦います。

この魔女ラツシユ、普通の魔法少女だと地獄のイベントで発生した瞬間即リセ案件なのですが、単純な戦闘能力だけならおそらくタルトとアルマど様以外には圧勝できる百恵ちゃんなら問題はありませぬ。

更紗帆奈はともかく魔女は心底どうでもいいんで普通に斬り頃します。正義の刃、覚悟しろ！

ふう、ようやく全滅しましたね。

限界まで育ててしまったのでグリーンフィード以外に旨味が全くありませんが致し方なしです。

魔女の壁のせいで更紗帆奈を逃がしてしまいましたでしたがそう遠くは逃げられていないはずですし、こうして戦闘をしているうちにやっちゃんたちは数え終わっているので自由に行動できます。

（百恵、追うわよー）

うん、そうっすね！　ということでもみんな散開だよ、散開。

そして百恵ちゃんとやっちゃんは神浜大東団地の屋上で待機します。本来なら団地組がここで待ち構えているのですが、今回は百恵ちゃんが向かいます。

かりんちゃんは戦闘をさせずに更紗帆奈を見つけ次第、監視を続けさせます。空を飛ぶ魔法少女って本当に希少なんですよ。

(先生・ターゲットはななかさんたちに魔女を放った後に、大東団地に向かつて移動しているの！)

オツケーですかりんちゃん！

そのままかりんちゃんも合流な！ このはと組長にも連絡を入れといてくれな！

さて、迎え撃つ準備ができましたのでイヤホンももうフヨウナラ！

あとはこの神浜団地のどこかの屋上に潜伏している更紗帆奈を見つけるだけ！

どこだあく？ 探すぞお。悪い魔法少女はお仕置きだどく。

「あはっ！ 見つかったあ」

見つかったよお！ 幻の混沌……幻の更紗帆奈だ！

ということだからりんちゃん、監視ご苦労さん！ もう降りてきちゃっていいよ！

「なあるほどねえ。あたしは空から監視されてたってわけだ」

そうだよ(肯定)。

じゃあ、やつちやんとかりんちゃんは下がっててください。ここは百恵ちゃんがひとりで戦闘を行います。

理由は簡単。百恵ちゃん、チームを組んだ場合、武器を使わないとそこまで強くななくなっちゃうんですわ。

更紗帆奈を生け捕りにするので当然武器は使いません。よって百恵ちゃんは殴ることしかできません。つまり超近接戦闘型魔法少女です。しかも一発攻撃をもらったらすぐに脱落してしまう紙装甲なので、味方の足を引っ張り兼ねません。

ですので、対魔法少女戦をチームで戦うことは基本的にやりません。

下手をするとフレンドリーファイアを喰らって即リセする可能性がありますからね。

というわけでVS更紗帆奈戦にイクゾオー！ デッデッデデデ  
！(カーン)

「あつははははは！ やっぱりあんた最高だよ星奈百恵！ そうだよ！ あたしが本当に狙っていたのは静海このはたちじゃない……あんななんだよお！」

えっ、（なんですか）それは……（困惑）。

狙いはアザレア組じゃなくて百恵ちゃんだったんすか？

えっ、ちよつと待って！ 交友関係に更紗帆奈入ってないやん。

待て更紗帆奈!? なんのことだ！ まるで意味が分からんぞ！（大困惑）

おおお、落ち着きましたよう。大丈夫、大丈夫です。

更紗帆奈から一方的に狙われているだけで、チャート的に問題はな  
い……はず！ いや、ないんだ、ないと言ってくれえ！（血涙）

ま、ままええやろ（現実逃避）。

今は更紗帆奈との戦闘に集中しましょう。

「素手で相手すんの〜？ 言っておくけどさあ、あたし結構強いよ〜？」

更紗帆奈は持っている黒い杖を使った魔法を放つ中距離・遠距離型の魔法少女です。

そこに『暗示』を絡めることで、苦手な近距離をカバーしてきます。うん、更紗帆奈、普通にめっちゃ強い魔法少女です。伊達に魔法少女を3年もやっていません。

しかしながら百恵ちゃんにとってそれはほとんど問題ありません。カンストした《攻撃》と《速度》が火を噴くぜ。

なーんか今回の更紗帆奈の動きが良いんですが、百恵ちゃんには及びません。一気に近づいて攻撃を仕掛けていきましよう！

ホラホラホラホラ！（鬼畜） 暴力！ 暴力！ 暴力！ 更紗帆奈、おまえには……正義の鉄槌で、その腐った心を矯正してやる。

「くっ……このっ……」

誰が大声出しているいつつたオラア！（大声）

更紗帆奈の暗示の魔法のもうひとつの弱点は言葉を口に出さないといけないことです。つまり喋らせる余裕を作らせなければ完封できます。

そして百恵ちゃんの攻撃は手加減しているとはいえほぼ一撃必殺。一発でも当ててしまえば勝ち確で、暗示を封じ、なおかつボタン連打でおkなのでタイムにも優しい、IQが低い割に理に適っている素晴らしい戦法なのです。

しっかしこの更紗帆奈、なんでこんなすばしっこいんでしょうか？必死そうですが、見事に百恵ちゃんの攻撃を躲し続けています。動く当たらないだろ？ 動く当たらないだろオ!?

こいつこんな近接戦闘得意な仕様でしたっけ？

まあ、いいです。このままの状況が続けばいつかは百恵ちゃんが勝ちます。

更紗帆奈のソウルジェム……首元にある紫色のアクセサリーの濁り具合を確認するに、相当消耗していることがわかります。さすがの更紗帆奈も、アザレア組やななか組と戦った後に休む間もなく百恵ちゃんと戦っていますので厳しいようですね。

さあ、落ちろ！ 落ちるんだよ！ 百恵ちゃんに勝てるわけないだろ！

……ファツ!? なんだこの混沌!?! (驚愕)

百恵ちゃんの拳を受け止めただとお!? なんやこいつ、バケモンか!?! (ブーメラン)

多分トラックに撥ねられた時と同じくらいの力やぞ？ それを杖で受け止めるとか……まさかこいつ！

「あくらら、気付いちやった？ そうだよ！ 今あたしは限界を超えたんだ！ これであたしはあんたとまともに戦える！」

帆奈ちゃん!?! 何してんすか、やめてくださいよ本当に! (限界突破は) まずいですよ!

これはみふゆさんの自分に幻覚をかける禁術と同じで、自分に暗示をかけることで元の倍のバフをかける強化魔法です。つまり自爆覚悟の最後の力の開放なのです!

これはまずいことになりました!

このままでは更紗帆奈が氏んでしまいます!

せつかくの『上書きの魔法』をこんなところで失うわけにはいきま

せん！

こ→こ←は説得しましょう。

そんなことしなくていいから（良心）。だから（身を削るのは）ヤメ  
ロツテ！

「はああつ!? なにあたしの心配なんてしてくれちゃってんの!?  
バツカじゃないの!」

（説得は）ダメみたいですね。

こうなってしまうと、更紗帆奈の魔力が尽きるまで耐え続けること  
を選択せざるを得ません。

ここで百恵ちゃんが変に反撃してしまうと更紗帆奈を頃しかねま  
せんのので、更紗帆奈のソウルジェムの濁り具合を確認しながら攻撃を  
躲し続け、濁り切る直前でカウンターを仕掛けて、ごっそり魔力を消  
耗させて変身を強制解除させることを目指します。

ということでも更紗帆奈の攻撃を躲し続けているんですが……強  
いってレベルの次元じゃねーぞおまえ!?

なんでわざわざ接近して攻撃を仕掛けてくるんや! やりにく  
いったらありやしない! 本来の中距離・遠距離の戦い方をしてくれ  
よ! 百恵ちゃん一発でも攻撃喰らったらお終いなんやぞ! やば  
いって!

にやー! 帆奈ちゃん許して! チャート壊れちゃう! やち  
よ、かりん、どうにかしろ（無責任）。

「てめえ、いい加減……にっ……」

って、お? 隙ができました!

ということは……今です! 振り下ろしてきた更紗帆奈の杖を殴  
りつけて吹っ飛ばします。さっきまでは手加減していましたが、今回  
は少し本気で殴りつけました。

本気で怒らしちゃったねえ! 百恵ちゃんのことねえ! 百恵  
ちゃんのこと本気で怒らせちゃったねえ! もう許せるぞオイ!  
もう許さねえからなあ?（豹変）

「!」

はい! これで擬似的な硬直状態にさせました!

結構な力を込めて殴りつけましたからね、いくらリミッターを外してもその衝撃には耐えられません。

これでもう更紗帆奈は動けません。声も出せません。最後の一発くれてやるよオラア！

歯を食いしばれよ最凶……百恵ちゃんの最強は、ちつとばつか響くぞ。

「あっ……がつ……」

百恵ちゃん必札（頃すとは言っていない）の拳骨が更紗帆奈に炸裂う！  
F O O → 気持ちいく。

そして、大ダメージを受けて倒れた更紗帆奈は変身を解除！ もうほぼ限界近くまで濁ったソウルジェムが転がります！

はい、更紗帆奈のソウルジェムを確保！ これで自札を封じました！

すでに『マギウス』が行動を開始しているので魔女にはなりません  
が、ドツペルを出させてしまうと今後の展開が一気に狂うので、濁り切らせず、かといって魔法も使えないレベルにまでグリーンフシードを使つて回復させます。

そしてかりんちゃんに持つてもらいましょう。

壊すなよ？ 壊すなよ？ 絶対に壊すなよ？ フリじゃねえぞ、マジだかな？

あとそれからグリーンフシードを用意しておいてね。絶対にそれ以上濁らせるんじゃないぞ。

「は、はいなの。わかったの」

ヨシ！（現場猫）かりんちゃんはええ子や。

「失礼、遅れました」

「全く、三百数えるの、地味に大変だったわよ……！」

そしてななか様とこののが合流しました。

どうやら他の人達は更紗帆奈との戦闘で消耗してしまっているらしくって休んでいるみたいですね。

「あーあ、あたしの負けかあ」

魔法が使えず、ソウルジェムも取り上げられてしまった更紗帆奈は



完全に詰みました。

はい、これで戦闘終了です。

さてとこれから百恵ちゃんとOHANASHI……おい、ちよつと待て更紗帆奈、おまえ組長を挑発すんじゃないって！

「……やめろって言ってるんだよ……そのムカつく笑い声を！」

マジレコ屈指の名言きましたって興奮している場合じゃねえ！

マジギレして辻斬抜刀斎と化した組長が更紗帆奈のソウルジエムを狙う！

これで組長が更紗帆奈を札害するとチャートが修復不能になります！ すぐに取り押さえましょう！ 暴れるなよ……暴れるな……。全く油断も隙も無いですね。

自札できないからって他の誰かに傾かれようとするのとか本当にやめてくれよなく。頼むよ。

「えっ!? え?」

「ななかさん? どうしてソウルジエムを狙って……」

「ななか、あなたもしかして……」

あーあー、これでやつちゃんはお察し。かりんちゃんこの疑念が出てしまいました。

組長を煽っている途中で魔法少女の秘密について言及してしましたし、これはかりんちゃんたちにも魔法少女の真実を話さないといけなさそうです。

「詳しい話は彼女の処遇を決めてからゆっくりしてあげるわ」

おお、やつちゃんナイス!

百恵ちゃんもすかさず便乗します。今は更紗帆奈を優先しようぜ?

というわけで更紗帆奈の説得タイムです。

選択肢がいくつか出てきますが、正解ルートはただひとつです。ひとつでも間違えると裏切ったり隙を見て自札しようとしてくるので慎重にしましょう。

まず否定するのはNGです。それから安易に答えを求めるとダメ。基本的に聞き手に回って、更紗帆奈の胸の内をすべて吐き出させ

る必要があります。

うん、凄く……面倒です。でもやらないとチャートが壊れちゃうからね仕方ないね（レ）。

ということではOHANASHIしようぜ！

ほら帆奈ちゃん。百恵ちゃんに言いたいことがあるんだろう？

言っでごらん？

え？ なんだって？ うんうん……せやなあ、君の人生、色々と重すぎるんだよなあ……。

「瀬奈は魔法少女として戦って、ソウルジェムが濁り切って……魔法になっちまったんだよ……！」

っっておまつ!? ここで瀬奈みことが魔女になった話をするんかい！

おいおいおい！

「そんな……」

「魔法少女が……魔女に……！」

「……なるほど、そういうカラクリだったのですか……！」

おっ、大丈夫か大丈夫か（ソウルジェム）。あーもうめちやくちやだよ。

とりあえずやつちゃん、グリーンフシードやるからそっちはどうにかしろ（無責任）。

さて、こっちは話を続けようか。

うん、うん。そうかあ、辛かったよなあ。

「なあ……どうして、どうしてなんだよお……。どうして瀬奈を……あたしを……助けてくれなかったんだよお……！」

それはごめんなあ。

1年前スタートだから、瀬奈みことが魔女になっちゃうのは確定だったんだよなあ。

というかそういうことでしたか、帆奈ちゃんが百恵ちゃんを狙っていた理由って。

瀬奈みことを助けてくれなかったから恨んでいたんですね。だから交友関係にないのに、ここまで帆奈ちゃんに目を付けられていた

と。

ああ、しかも帆奈ちゃん、自分のせいで瀬奈みことが氏んだと思つて、百恵ちゃんに断罪されたかつたみたいですね。それでこんな事件を起こしたと。

チャートのために斬るわけにはいかないけどもう大丈夫やで？

百恵ちゃんが受け止めてあげるからなあ。百恵ちゃんはねえ、君みたいな可哀想なねえ、子を癒すのが大好きなんだよ！

ということだ帆奈ちゃんに熱い言葉をかけて慰めてあげましょう。

綺麗だよね……輝いているよね。この川のように君の心もピュアだったじゃねーかよ！ なんだよ……欲ばかり……。嫉妬、悪口、自分のことばっか考えているんじゃないやねえか？ そんなの全て洗い流しちゃえ！ 変わるよ……。この川のように、みんなは君の思いを……飲み込んでくれるさ。自然が一番！

「……ぐう……ううう……」

あ、帆奈ちゃん泣いちゃいましたね。

この子はですねえ……こんなに色々どぶつ飛んでしまうくらいの、えぐい人生送ってきた子なんですよ。詳しくは魔法少女ストーリーーを見て、どうぞ。

「……あらかたの事情は分かったわ。それを踏まえた上で更紗帆奈、あなたの処遇を決めるわ。——まずは、常盤ななか、そして静海このは。あなたたちの意見を聞きたいわ。きつとあなたたちが一番の被害者ですもの。私はそれを尊重するわ」

おっと、そうでしたそうでした。

百恵ちゃんが受け入れても肝心の組長とこのはが受け入れてくれないとダメです。もしダメそうなら多少の好感度を減少させてでも帆奈ちゃんを守ります。

なーに、好感度なんて後でいくらでもリカバーできますよ。

「……正直今すぐにでもソウルジェムを叩き割ってやりたいところですが……いいでしょう。今回はこれで手打ちにします。私を足止めしていた魔女、あれが答えでしょうから」

ああ、なるほど。

組長が遅れて、他のななか組が休んでいるのは魔女と戦っていたからですね。で、それがななか組が追いついていた元凶の魔女だったと。その魔女を倒せて、それで帆奈ちゃんの事情も知ったから多少とはいえ溜飲が下がったと。なんて慈悲深い。

「今度は私ね。私も正直なところ、あなたを許す気はないわ。……でもね、感謝している私もいるのよ。おかげで視野が広がったし、いろんな人たちと仲良くできたから」

そしてこのはも理由はどうあれ、より多くの繋がりができたことを嬉しく思っているようです。

それに……なるほど。確かに帆奈ちゃんと初期のこのはは似ている部分がありましたね。自分の大切なもののためなら周囲を拒絶するところとか、周りの人間が信じられないところとか。

にしてもこのははに組長にかりんちゃん、魔法少女の真実を知ったのに落ち着いていますね。どんな説明したんややつちゃん。……まいつか！

（フォロー）ありがとナス！（真実を知って）すつきりさっぱりだな！ これからもフォローよろしくな！

「そう……。それがあなたたちが決めたことなら、私から言うことはなにもないわ。ただし、神浜に混乱をもたらした罰は受けてもらうわよ」

あ、じゃあそれは百恵ちゃんが引き受けますよ！

帆奈ちゃんは完全に墮とします。

彼女の中で百恵ちゃんを瀬奈みことと同レベルになるまで徹底的に甘やかして、ジュージューにします。だから一番いいのは百恵ちゃんの家と一緒に住むことです。なーに、百恵ちゃんは一人暮らしだし部屋も意外と広いし、ちよつとくらい、人が増えてもバレへんか……。

「……そうですか。百恵さんが言うのであれば、私は何も」

「私も文句はないわ」

「……はあ。いいわ。好きにきなさい」

ヨシー！（現場猫）

この三人の好感度が軒並み高いおかげで百恵ちゃんの我儘が通り

ました。なんかやつちやんと組長だけ、妙に悲しそうな顔をしていましたが……ま、いつか！

ほら、かりんちゃん。ソウルジエム帆奈ちゃんに返したって。綺麗にしてやるからなあ。

「……わかったよ。大人しく、あんたに従ってやるよ」

帆奈ちゃんからの視線がアツウイ！

ということとで神浜のやべーやつ、更紗帆奈ゲットだぜ！ めちやくちや大切に育ててやるからなあ？

ああ、それから『暗示』の力は強制的に消させました。残念ですが仕方ありません。それが条件のひとつですからね。他にも色んな条件が付けられましたが、まあほぼ問題ナツシング！

ああ、どんな固有魔法覚えさせようかなあ、楽しみだなあ……つて帆奈!? 何してんすか、やめてくださいよ本当に！（百恵ちゃんの固有魔法は）まずいですよ！

「せっかくだし、あんたのその出鱈目な力。あたしも使うとするよ。あつは！」

ああ、（脳筋ルートから）逃げられない！（カルマ）まさかまさかの帆奈ちゃんまで脳筋にいい！

おまいそういうキャラじゃないやろ！ こんなんキム○クもダイナミックエントリーしてツツコミを入れてくるレベルだぞ、「ちよ待てよ！」って！

かりんちゃんが傭兵ルートで帆奈ちゃんが脳筋ルートとかこれもうわかんねえな。

まま、ええわ。純粹に戦力がひとり増えたと思ひましよう。ただワルプルギス戦では違う魔法で支援してもらうので、いつか使うのをやめるように言っておきましょう。まあ、適当に高校生になったらやめるように言っておきましょうかね。

さあ、帆奈ちゃん。百恵ちゃんに家に行くで。おまえはもうここ（百恵ちゃんの救いの手）から出られないんだよ！

「うん！ 一緒に帰ってあげるよ、セーナ！」

え、なんかこの子百恵ちゃんにすっごく懐いてる、懐いてない？

好感度どうなってんだ……。

まま、ええわ。あとでいくらでも調整できますからね。

はい、というわけで『散花愁章』、クリアです！

今まで貯めに貯めまくったグリーンフシードを大盤振る舞いしましたね。でもその報酬が更紗帆奈の獲得と、このはたちに魔法少女の真実を受け入れてもらったのですから安いものですよ。

なーに、百恵ちゃんは超燃費のいい魔法少女ですし、仕事も最近は少ないから本当にお得です。

それに今は固有魔法が百恵ちゃんと同じものに設定されてしまいました。が、やろうと思えばまた上書きできますからね。だから帆奈ちゃんは強いんですよ！ 戦闘面でも手加減している百恵ちゃんもある程度まで戦える実力者ですからね。鬼に金棒です。

さあ、次からはよいよメインストーリーに突入します。

それまでの空白期間である7〜10月までの間に、みふゆさんがコンタクトを取ってくると思いますので気長に待ちましょう。

そしてもう少しで夏休みですので、帆奈ちゃん的好感度を上げまくるチャンスでもあります。

引き続き重要なキャラとの好感度を調整しつつ、メインストーリーに向けて準備をしましょう。『マジウスの翼』に入ってから色々仕込まないといけないし……忙しいなあ。

ということでは今回はここまでです！

ご視聴ありがとうございました！

## RTAパート13 マギウスの翼

メインストーリーに向けての準備を始めるRTAはーじまーるよー！

無事にメインストーリー前の三大イベントをこなしまして、ついに入ることができました、『上書きの魔法』というチート魔法の使い手、更紗帆奈！

まずはこの帆奈ちゃんをね！ 百恵ちゃん好みになるように調教していききたいと思います！

大学の前期は終了して今は夏休み！ 単位もすべて習得しましたので問題なし！

時間は有り余っていますので、ここで帆奈ちゃんの好感度を調節します。

というわけで帆奈ちゃん。北養区にい、(指導が)うまい料理の教室、あるらしいんすよ。

「それって……ウオールナッツのこと？ セーナがよく行ってる」  
そうだよ(肯定)。

まなか先生からお誘いがありましたし、まだ帆奈ちゃんまなか先生に謝っていませんからね。これを機に会わせて仲良くなってもらいつつ、楽しい時間を過ごしてもらいましょう！

ちなみに帆奈ちゃんがなんで百恵ちゃんがウオールナッツの料理教室に通い詰めているのを知っているかという点、たまに百恵ちゃんのことをストーキングしていたらしく、行動パターンを探っていたらしいんです。そしてたまに魔女狩りの現場に居合わせて、慌てて魔法を使って姿を消していたとか。

あつ、これかあ！(原因)

なーんか妙に魔女を狩り続けていても魔法少女に会えないなあと思っていましたが、実は帆奈ちゃんがエンカウントしていたんですね！

でも帆奈ちゃんは潜伏し続けていたから魔法少女に会っていないと勘違いしていたと！

あつ、そつかあ（痴呆）。

というかですわね！ 帆奈ちゃんとOHANASHIして気が付いたんですけどね！

どうやら百恵ちゃんの苗字の『星奈』がこの隠れ帆奈ちゃんを引き寄せてしまったみたいなんですわ。

このゲーム、先駆者兄貴たちとバージョンが違いまして、プレイヤーキャラの名前に近い魔法少女がエンカウントしやすくなるシステムが導入されていないんですよ。

だから何も考えずに名前を決めたのですが……名前が『○奈』だと交友関係にないのに帆奈ちゃんに狙われるっていうトラップが仕込まれていたみたいです。

つまりこのRTA、名前を決めた時点ですでにトラップが発動していたということです。

開始からガバガバじゃねーか！ 先駆者兄貴のRTAからなんにも学んでない。

はあくつつかえ。やめたらこのチャート。運営に電話させてもらうね（クレーム）。

まあ、それが好転して無事に帆奈ちゃんをゲットできたから、今回は許したる。

みんなは名前をちゃんと決めような！ 百恵ちゃんと約束だぞ！

「わかったよ。行くよ」

いやあ、本当に素直でいい子ですわ帆奈ちゃん。

じゃけんウォールナツツ行きましようね。

「いらつしやいませ……と、お待ちしていました、百恵さん！ 更紗帆奈さんも！」

につこり笑顔でまなか先生がお出迎え！

まなか先生には帆奈ちゃんを連れてくること、そして帆奈ちゃんの事情を簡単にですが伝えてありますので、ほとんど抵抗なく料理教室に参加させてくれます。



「……あの時は悪かったよ。あたしがバカだった」

「まあ、寝ていただけですし、もういいですよ。そんなことよりも料理するのは初めてですか?」

自分が襲われたことを『そんなこと』と言って流してしまっまなか先生は人間の鑑。同時にすぐに料理の話を持ち出す料理人の鑑。

「こんにちは、百恵先生。それに……更紗さんも」

そしてもはや百恵ちゃんに並ぶ料理教室の常連、覚醒したこのはもやってきました。

本来ならこのははこの時点ではソウルジェムの中に魔法少女の魂があることしか知らないのですが、今回は全ての真実を知っています。葉月とあやめにも話しているらしく、もう落ち着いていて大丈夫なんだそうです。

アザレア組、チーム力としてもメンタル面でも神浜最強クラスのチームになってしまったのでなからうか。

「まなか先生に謝りにきたみたいね。でも……せつかくなんだし、楽しんでいきなさい。この料理教室、本当にわかりやすいのよ」

「……そうさせてもらうよ」

まだちよつとギスギスしていますがほとんど問題ないですね！

「それでは時間になりましたので、始めて行きましょう」

オッス、(指導) お願いしまーす。

もう充分スキルを上げましたので途中までボタン連打で……最後の判定だけを大成功させます。はい、終わり！ 閉廷！ これで百恵ちゃんのスキルが上がります。

今はまなか先生のひとつ下のランクです。もう店を開いても食べていける腕前ですね。

「……まあ、こんなもんか」

そして帆奈ちゃんは……まずまずの出来です。大成功一歩手前の成功つてところでしょうか。

料理初心者ですが、まなか先生と百恵ちゃんの言うことを守って料理しているの、失敗はありません。

ちなみにこのはは普通に大成功です。

あの青いオムライスを作っていたこのはが料理で大成功ですよ奥さん。

ほう、(百恵ちゃんとの)経験が生きたな。メロンソーダを奢ってやろう。

「あなた……やるわね。初めてでここまでできるなんて……。あなたには料理の才能があるわ……！」

「いや、あんたが才能なさ過ぎただけだよ……」

そしてみんなで仲良く料理したので好感度がお互いに上がります。こうやって百恵ちゃんに対する好感度の上昇値を減らしていきます。

え？ 瀬奈みことと同レベルにするぐらいジュージューにするんじゃないかって？

いやそれがですね……もうなっているんですよ、うん。

『散花愁章』が終わって帆奈ちゃんの好感度を確認してみた結果……なんとやちよさんに匹敵するくらいまで上がっていることが判明しました。

堂々の一位がみたまさん、そして二位がやちよさんと、百恵ちゃんと関わってきた時間が濃密なふたりと並ぶ好感度を初期から持っている状態で来てしまったのです。

これはちよつと予想外でした。というかやりすぎです。

この状態のまま好感度を稼いでもうとですね……帆奈ちゃん、百恵ちゃん依存症になってしまいました。

というかその兆候が見え始めています。一緒に寝たいとたまに布団の中に入ってくることもありますし、お風呂も一緒に入ろうとします。帆奈ちゃんとはほとんど同じ好感度のやちよさんは、百恵ちゃんのことを『親友』程度の認識なのにです。

同じ好感度でもここまで差が出てしまうこともこのゲームの面白いポイントのひとつなのですが、厄介なところでもあるんですね。

確かにジュージューにするといいましたがせっかちなのは良くありません。

本チャートでは帆奈ちゃんを『マギウスの翼』に入れる気がないので、ゆっくり、ゆっくりと上げていかなければいけないからです。

なぜ帆奈ちゃんを『マギウスの翼』に入れないかなのですが、理由は簡単。

帆奈ちゃんが強すぎるからです。

今の帆奈ちゃんは百恵ちゃんと同じ魔法のせいで身体能力がえげつないことになっています。

手加減状態の百恵ちゃんとはいえ、それに接近戦を仕掛けられるほどの身のこなしは百恵ちゃんの魔法で日々強化され続け、本来の距離、遠距離攻撃もできるオールラウンダーです。

そして帆奈ちゃんは百恵ちゃんにほぼ忠実です。

そんな帆奈ちゃんを『マギウスの翼』に入れてしまうと……戦力過多で第二次みかづき荘が詰んでしまいます。

なので過剰な好感度上昇はフヨウナラ！

すでに帆奈ちゃんは百恵ちゃんの言うことをなんでも聞いてくれる（ん？　今なんでもするって言ったよね？）状態なので、『マギウスの翼』にまで付いて来させない程度にまで落ち着かせるために、そしていざというときにしっかりと働いてもらうために緩やかに好感度を上げていく必要があります。

だからこうしてほかの魔法少女と関わらせて、帆奈ちゃんが周囲に心を許せる環境を整えてあげます。

そうすると帆奈ちゃんは少しずつ百恵ちゃんから離れていくので、適正な距離を保ちつつ、決戦時に百恵ちゃんの言うことをなんでも聞く（ん？　今なんでも以下略）便利屋として仕事をしてくれます。

ということだ帆奈ちゃんをあっちこっちに連れまわすぞー！

次は水徳商店街じゃーい！

「いらっしやいませー！　あら、百恵さん！　ということはそのつちの子が？」

フラワーショップ『ブロッサム』にやってきました。

このみさんも帆奈ちゃんに襲われた被害者なので、しっかりと謝らせましょう。

「悪かったよ。あたしの身勝手に眠らせちゃってさ」

「ううん、いいのいいの！ 正直襲われたことすら気付かなかつたしね！ ただちよつと何日も寝てたことにはびっくりしちゃったかな」  
やぎさぎしいな あこのみぎさん。

物凄くあつさり許して帆奈ちゃんに赤にピンク、青、そして白の色とりどりのお花の鉢植えをプレゼントしていました。

なんやこの聖人。今後もブロッサムを鼻屑にしましょう。

このみさんと別れて次に向かうのは、エミリー先生のお悩み相談所です。

よつ、やってるかい？

「おつ、ヒヤック先輩じゃん！ おひさくー！」

おお、いましたいました！ エミリー先生です！ あきらくんもいますね。

「んでんで！ そつちの子があきらつちたちが言つてたさらはん？」

「さらはん……？」

病み上がりでもエミリー先生は絶好調だぜ！

帆奈ちゃんが『さらはん』ですか。相変わらずハイセンスなニツクネームつすね！

「いや、まあ、それはいいや。……悪かったよ。あたしの我儘に巻き込んじまつてさ。そつちのあんたもな」

「え？ 別にいいんじゃない？ あーしはなーんにも気が付かなかつたし、そういうこともあるっしょ？」

「ボクは君になにかされたわけじゃないし、他のみんなが良いって言うなら何も言わないよ」

エミリー先生は基本的に根に持たないので普通にスルー、あきらくんは組長と百恵ちゃん効果で帆奈ちゃんのことを許しています。

というところでここではばらく駄弁つていきましょう。

少しでも多くの魔法少女たちと帆奈ちゃんを触れ合わせて、帆奈ちゃんの世界を広げます。

この9月までの監視中にギア様<sup>莉愛</sup>やかのか、明日香には会わせておきたいですね。

帆奈ちゃんと同じ水名女学園に通っている魔法少女たちですので、仲良くなつてもらえるとありがたいです。同じ理由でまなか先生の料理教室には、絶対に帆奈ちゃんを連れていきます。

「こんにちはって、ああーっ！」

「どうしたの？ って、あー！」

言ってる側からやってきました、お笑いコンビ騎士と牛こと、明日香ちゃんとささらちゃんです。

「あなたは更紗帆奈さん！ ですよね！」

「……まあそうだけど」

おっと、明日香が帆奈ちゃんに突つかかってきましたね。

まあ、思い込みが激しい性格の持ち主ですので仕方ありませんが。ここは仲裁に入らずに見守りましょう。どうしてもダメそうならフオローを入れます。

エミリー先生もあきらくんもちよーつと黙っていてね？

「本当に悪かった。あんたらの大事なやつ、傷付けるような真似しちゃってさ」

「ほら、明日香。もういいでしょ？」

「……そのようですね。それならいいんです。もうこんなこととしてはいけませんよ！」

「分かってるよ」

ヨシ！（現場猫） ちゃんと謝れて偉いぞ帆奈ちゃん！

帆奈ちゃんが完全に心を入れ替えている場合は、こうして素直に謝ることができまし、挑発することもあります。

そして百恵ちゃんを含めた他のキャラが介入しないことで、周りの帆奈ちゃんへの好感度が大きく上がり、帆奈ちゃんもこの神浜の魔法少女の一員として受け入れられていきます。

「失礼します。ああ、やつぱりここにいらつしやいましたか」

「おいーっす、衣美里元気かー？ って、百恵もいんじやんか。ということこそつちが……」

どこからか情報を仕入れたらしいななか組長と、エミリー先生の様子を見にみゃーこ先輩がやってきました。

みゃーこ先輩には百恵ちゃんが対応しましょう。組長は帆奈ちゃんにお任せします。大丈夫でしょ。

「どうなんだ、彼女は？」

大丈夫つすよバツチエ調教してありますよ！

え？ 本当に大丈夫なのかって？ 大丈夫だって安心しろよ。

へーキへーキ、へーキだから。

「……どうやら本当に心を入れ替えたみたいですね」

「さあね。フリをしているかもしれないよ？」

「ふふっ、そうでないと断言できますよ。私の魔法が一切反応していませんから」

「……つまんねーやつ」

「まあ、他の人にはしおらしく謝っているって聞いていましたが、私にはそれですか。これは百恵さんに言いつける必要がありますよね」

「ちよっ、それはやめてっつて！」

見てくださいよこの微笑ましい組長とのやり取り！

それに組長の魔法、知っているでしょ？

だから帆奈ちゃんがもう安全だっではっきりわかんだね。

ちなみにこの状態の帆奈ちゃんが挑発している場合は、挑発先の相手に心を許しています。

だから実は帆奈ちゃん、組長のことを案外好意的に捉えているんですね。おまえもしかして、ななかのことが好きなのか？（青春）

だからみゃーこ先輩、帆奈ちゃんは大丈夫やで！

「ふっ……それもそうだな。じゃあアタシはもうこの話をしないことにしよう」

ありがとナス！

すぐに人を見極めて気遣いができるみゃーこ先輩マジイケメン。

なんでこの人がリア充になれないのか、コレガワカラナイ。

というわけで組長と帆奈ちゃんが仲良くしているところに百恵ちゃんも合流します。あとは時間が許すだけここで駄弁つていましょう。

じゃあ、流しますね。

おはよーございまーす！

あれからずっと知り合いの魔法少女の所に帆奈ちゃんを連れ回しまくって好感度を調整し続けました。

「おはようセーナ。朝ごはん、作っておいたよ」

するとあら不思議、最近では帆奈ちゃん、自分からいろんなことをするようになりました。

今まで百恵ちゃんに頼りつきりでしたが、今は自分から家事をやったり買い物に行ったりしています。こういう行動をし始めると、依存症になることはありません。

依存症になると過剰なまでに甘えてきたり、百恵ちゃんがなにか言わない限り大人しくし続けるなどの症状が出ますが、自分から行動している場合は適正な距離を保っている証拠です。

良かったら帆奈ちゃんが無事に更生してくれて。帆奈ちゃんは……（百恵ちゃんの）ファミリミみたいなもんやし。

というわけで帆奈ちゃんがもう大丈夫なことを関係各所に報告しに行きましょう。

9月に入りましたから帆奈ちゃんの監視はお終いの予定です。解放していいのかわかを今日調整屋で協議（激ウマギャグ）します。

だから帆奈ちゃん、留守番頼んだぜ！

百恵ちゃんちよつと出かけてくるからな！

「そっか……もう9月、か。……うん。行つてらっしゃい」

それじゃあ調整屋に乗り込めー！

オツス！

「いらっしやうい、モモちゃん♪ みんな揃っているわよお」

どうやら百恵ちゃんが最後になってしまったみたいです。みんな真面目過ぎんよ。

メンバーは百恵ちゃんを除くと、西の代表のやちよさん、東の代表のなぎたん、中央の代表のみゃーこ先輩、調整屋のみたま、傭兵のかりんちゃん、ななか組組長のななか様、アザレア組組長のこのは、そ

してかもしもトライアングルのリーダーのももこの八人。

この八人が全員一致でオーケーサインを出さなければ帆奈ちゃんの監視が続行されます。

このまま帆奈ちゃんを手元に置いておくチャートならどうでもいいイベントなのですが、今回はこの後百恵ちゃんが『マジウスの翼』入りするので、なんとしても帆奈ちゃんを自由にさせなければいけません。……が。

「決が出たわね。それでは……今日を以って、星奈百恵の下で行われていた、神浜に混沌を齎した魔法少女、更紗帆奈の監視を終了とするわ」

はい！ やっちゃん、ありがとナス！

いやあ、正直ですね、こうなるのは分かっていました。

帆奈ちゃんをあちこちに連れ回したのは、百恵ちゃん依存症を回避するだけじゃなく、ここにいる各メンバーと交流させて好印象を抱かせるためです。

まなか先生の所に行けばこのはが、調整屋に行けばみたまさんとかりんちゃんが確定でいますし、バイト先に行けばほぼ確定でなぎたんがいますし、エミリー先生の所に行けばみゃーこ先輩や組長、そして葉月ちゃんが来ることがあります。

やっちゃんには定期的に報告の連絡を入れていきますし、ももこは帆奈ちゃんに謝られて以来ですが周りの意見を聞いて判断してくれるのでほとんど問題なし。

こうして様々な根回しをした結果、帆奈ちゃんの監視任務は終了！ふう、これで安心して『マジウスの翼』の依頼を受けることができます。ぜ。

てなわけで協議終わり！ 閉廷！ 以上！ みんな解散！ ラブアンドピース！ 愛だよ愛！ みんな、協議なんてやめようよ！

すぐに帰って帆奈ちゃんに伝えましょう！

ただいま帆奈ちゃん！

今日で監視は終わりやで！ 君もう帰っていいよ！ いいだろおまえ成人の日だぞ！（意味不明）



「そっか……うん、わかった。荷物も纏めておいたし、あたしはもう行くよ。今までありがとう。たまに来てもいい？」

もちろんSA！（DNLD）

百恵ちゃんの家はずっといられるのは困りますが、たまに来てくる分には大歓迎です。

まあ多分次に会うのはワルプルギスの夜との決戦時でしょうけどね！

「なあ、セーナ。あたしが言うのもなんだけどさ……なんかあったら呼んでよ？」

やつぱ……更生した……帆奈ちゃんを……最高やな！

ワルプルギスの時は助けてくれよな。頼むよ。

これで帆奈ちゃんの育成終了です。

好感度が高すぎて困るというレアケースを引き当ててしまつてからの育成でしたが、最終的にはほとんどやちよさんと同じレベルの関係に落ち着きました。

かなり理想的な仕上がります。

廃止されたはずのネームトラップが起動していたというところでもないガバから始まりましたが、終わり良ければ全てヨシ！（現場猫）

それどころか最初から好感度が高かったおかげで素直に帆奈ちゃんが動いてくれたので、事前準備だけで最高のパフォーマンスを生み出すことができましたね。

というわけでじゃあな帆奈ちゃん！

間違つても『マギウスの翼』には入らないでおくれよ！ 百恵ちゃんとの約束だぞ！

さつとと、帆奈ちゃんが出ていったところでやる事がなくなつてしまいました。

もう好感度の調整は終わっていますし、百恵ちゃんの育成も終わっていますし、みふゆさんの勧誘が来るまで暇です。

あつ、そうだ（唐突）。

帆奈ちゃんの監視の仕事が終わったつてことは、通常業務が復活しているじゃないか。

だったら夕方になったらまた調整屋に行きましようかね。多分仕事はないんでしouxけど。

じゃあ、流しますね。

「あら、モモちゃん。さつきぶりねえ〜」

おうまた来たぜみたまさん。

仕事、入ってるか〜？

「モモちゃんには入ってないのよお……」

大丈夫つすよバツチェ入ってないつすよ！ 悲しいなあ。

まあでも、今となつては仕事をする価値がほとんどないので、RT A的には大助かりです。

じゃあなんで調整屋に仕事が入っているのか聞きに来ているかというと、万が一仕事があつてボイコットしてしまうと好感度がガクンと下がってしまうからです。

それだけは阻止しなければならぬので、こうして真面目に仕事があるかどうかの確認をしているんですね。

やることがないので帰りましょう。あく今日も一日楽しかったな〜、早く帰つて家事と勉強しなきゃ。……あら？

倍速に出来ません。なにかのイベントでしょうか？

「……お久しぶりです、モエちゃん」

みふゆさん！ みふゆさんじゃないつすか、オツスオツス！

本当に久しぶりじゃないか。どこ行つてたん？（すつとぼけ）

ああ、ついに、ついにきましたね。

プレイヤーキャラに対する『マギウスの翼』への勧誘イベントです。

このイベントは、プレイヤーキャラが『マギウス』もしくは『マギウスの翼』の軍門に下る魔法少女との好感度が一定以上ある場合、もしくは、それ相応に名前が知れている魔法少女だった場合に発生します。

今回はその両方が適応されているので、確定で起こるイベントでした。

ここで以前あった読者の皆さんからの質問に対する回答をしましょう。

『散花愁章』にて、帆奈ちゃんが魔法少女の真実を語ることを前提にチャートを組み立てた場合、メルちゃんの生存ルートを選択しても大丈夫なんじゃないか、という質問をいただきましたが、個人的にはオススメできません。というかほとんど不可能です。

組もうと思えばできると思いますが、そうするとみふゆさんが『マギウスの翼』に入らない、という物凄いシナリオブレイクが発生します。

ワルプルギスの夜を討伐するチャートならば、『マギウスの翼』が原作と同じくらい機能していなければ困ってしまいますので、なんと少しでもみふゆさんが『マギウスの翼』に入るきつかけとなる事件……第一次みかづき荘解散を起さなければいけませんでした。

加えて『散花愁章』で帆奈ちゃんが魔法少女の真実を語ること自体がレアなので、それを頼りにするのは無理があります。

ましてや今回はネームトラップという隠し要素を偶然引き当ててしまったうえでの展開でしたし、それを見越してメルちゃんの生存ルートを選択するのはRTA的にもチャートのにも厳しいものがあります。

以上二点から、帆奈ちゃんを当てにすればメル生存ルートからでもチャートが組めるのではないか、という質問に「NO」と回答させていただきます。

メルちゃん本当にごめんよ……。ワルプルギスの夜を神浜に来させないチャートを作らない限り、あなたには氏んでいただきます（無慈悲）。

さて解説している間、みふゆさんに連れられて人通りの少ない裏路地にホイホイついてきてしまった百恵ちゃん。

まあ、かなりヤベー話をしますからわからんこともないのですが……にしても、みふゆさん。なんかいっぱい人引き連れてませんか？

後ろにわんさか黒羽根と白羽根がいるんですけど？

「この方が……星奈百恵さん!?!」

「神浜最強の!?!」

「あなたは……!?! あの時には本当にありがとうございます!?!」

うわあ……これは天音月夜あまねつくよですね。これは天音月咲あまねつかさで、ああ、こっちは七瀬ゆきかですね。間違いない。なんだこれは……たまげたなあ。

ゆきかは実に不本意ながら交流が持つてしまったキャラですのでわかりますが、まさか天音姉妹も来るとは……。後ろにいる黒羽根と白羽根も、今まで百恵ちゃんが助けてきたモブ魔法少女ですし。

随分とまあ、気合が入っていますね。

「モエちゃん、ワタシたちはあなたに仕事を依頼したいのです」

さて、今まで長々と『マギウスの翼』についての説明をしていましたが、ようやくと本題に入りました。百恵ちゃんへの勧誘です。

ここで百恵ちゃんの地位を確固たるものにするために正しい選択をしていきましょう。

最初の選択肢は『引き受ける』『拒否する』のふたつだけです。

ここは拒否します。

いきなり了承すると傭兵止まりなので、『マギウス』に雇われるのと大差ありません。

百恵ちゃんは『楽園行き覚醒前夜』後に裏切るので、言いなりではない傭兵のまま雇われるわけにはいきません。

「モエちゃんならそう返してくると思います。ですがここで諦めるわけにはいきません。覚悟を決めて、ワタシたちは来たんです」

よしよし、諦めないで勧誘してきてくれましたね。

ここで第三の選択肢である『覚悟を聞く』が出てきます。おまえのことが好きだったんだよ!

迷わず選択していきましょう。すると……。

「ワタシたちの全てを……ワタシたちの忠誠をモエちゃんに捧げます。それが報酬です。ですから……どうか。どうか、ワタシたちに力を貸してください……!?!」

あつ、いいっすよ(快諾)。受けます受けます(食い気味)。

実質『マギウスの翼』のリーダーであるみふゆさんが百恵ちゃんに

忠誠を誓ってきたので、これで百恵ちゃんが『マジウスの翼』のリーダーに成り替わりました。

これからは自由に『マジウスの翼』を操作できます。

みふゆさんを支持している天音姉妹もゆきかも異論がないらしく跪いていますし、後ろで控えている羽根たちは百恵ちゃんが助けてきた魔法少女なので百恵ちゃんの言うことをなんでも聞きます（ん？今なん以下略）。

無事に百恵ちゃんが『マジウスの翼』を工事完了（乗っ取り）したところで終わりにしましょう！

ご視聴ありがとうございました！

## S i d e . 更紗帆奈 独り立ちの日

あたしがあんなバカな事件を起こしてから一週間程が経った、ある日のことだった。

「帆奈よ、私と一緒に料理教室に行こう」

少し豪華な朝ご飯を食べながら神浜最強の魔法少女、星奈百恵ことセーナがそんな誘いをしてくれたのは。

あたしがセーナの家に来たのは、セーナに監視されるため。

一週間前に起こした事件で9月まで監視生活を強いられることになったあたしは、この神浜最強の目が光るところで軟禁されることが決定した。

正直さあ、もっと厳しい生活が待っていると思っていたんだよ。だってあたしはさあ……自分でも結構ヤバいなあって思うことを普通にやっていたんだしき。

セーナは味方でいてくれるって言ってくれたけどさ、形だけでもあたしに対して厳しく接するかなって思っていたんだよ。体裁とかもあるだろうしね。

若干冷たい牢屋のようなイメージを想像していたんだ。もっとこう……この部屋から出るの禁止みたいなさ。

でも……待っていたのは、ただただ温かい家だった。

あたしが来て初めに出された夜ご飯はとにかく豪華だった。

まるで久しぶりに家に来た孫を歓迎するおばあちゃんのような、そんなレベルの料理が机の上に並べられているのを見て、驚きのあまり顎が外れそうになったよ。

しかも豪華なくせに量はそこそこだったから、その美味しさも相まって普通に食べることができてしまった。

正直ここまで美味しいご飯を食べたのは人生で初めてだった。

今までずっと、給食やらコンビニ弁当やら栄養食みたいなやつばかりだったからさ。

ほら、あたし魔法少女じゃん？ だから栄養バランスが悪い食生活送っていても全然問題なかったんだわ。

でも……セーナの料理は口にしたら最後だった。

もうあたしは以前までの食生活では満足できなくなってしまった。胃袋をがちりと掴まされてしまった。

そんな風に間接的にだけどき、逃げられないように拘束されていると考えるとさあ……ゾックゾクしちゃうよね。

「それって……ウォールナッツのこと？ セーナがよく行ってる」  
「うむ、そうじゃ」

悪意が一切感じられない笑顔でセーナは肯定した。

神浜最強が料理の上でも最強になれた所以の場所が、ウォールナッツ。北養区にある洋食の名店だ。

そして……あたしが襲った魔法少女が切り盛りしているレストランでもあった。

「昨日まなか先生から連絡があつての。折角じゃし、お主も連れていこうと思つたのじゃよ。一緒にまなか先生に謝りに行こう。他の迷惑をかけた魔法少女たちにもじゃ」

ああ、やつぱりね。

セーナは基本的に意味のないことをしない。こいつが動くときは何かしら意味があるときだけ。ただの思い付きで、あたしを連れ回すことなんてしないと思つてはいた。

あの時は死ぬことしか考えていなかったから、後先のことなんて全く考えない行動ばっかやっていたからねえ。

常盤ななかや静海このはたち以外に、あたしが迷惑かけたやつなんて両手の指じや足りないほどいるだろうさ。

でも、セーナはそんなあたしを受け入れてくれて……そして、やり直すチャンスまで作ってくれようとしていた。

それを認識して……あたしは夢から覚めていくような気がした。

今日までの一週間……あたしは瀬奈の時と同じか、それ以上のことをセーナに求めていた気がする。

あまりにも温かくて、安心できるこの家に生活していて、セーナに甘えっぱなしだった。

家事全般はセーナがやってくれた。水名女学園に復学するための

勉強もセーナが見てくれた。ことあるごとに褒めてくれて、甘やかしてくれた。あたしはそれに漬かりそうになっていた。まだ時々見る悪夢が怖くて一緒に寝てもらうこともあったし、もつとあたしを見てほしくしてお風呂にまで押し掛けたこともあった。

それくらいあたしは……セーナに依存しそうになっていた。

でも……今のセーナの言葉を聞いて、あたしはまた、心を改めようと思えた。

セーナはきつと、あたしがもう二度と同じ過ちを犯さないように気を遣ってくれているんだと思う。だからこそ、このタイミングであたしが迷惑をかけた魔法少女に謝りに行こうと提案してくれたんだ。

思えばセーナは、傭兵として常に仕事をしていた時に、魔法少女が自分に頼らなくても生きていけるように指導をしていた。そしてそれが、あたしにも向いたってことだね。

もつと広い世界を見せてやる、そう言ってくれているとあたしは感じた。

「わかったよ。行くよ」

セーナの言わんとしていることが分かったあたしは二つ返事をした。

元から逆らう気はなかったけど……なんていうのかな、セーナの言うことをなにも考えないでなんでも聞いていた昨日までのあたしとは違うって思った。

「うむー、それじゃあ、時間になったら行こうかのー！」

朗らかに笑うセーナだったけど……なんでかなあ。

一瞬だったとはいえ、どうしてそんな、なにかを諦めているような顔をするの？ セーナ……。

「いらっしやいませ……と、お待ちしていました、百恵さん！ 更紗帆奈さんも！」

11時過ぎ、あたしたちはウォールナッツに来ていた。

料理教室は11時半からだったからまだ少し余裕があるけど、いつ



もこの時間に到着するように調整して家を出ているのは、ストーキングしている時から変わらない。

この料理人であり、セーナの料理の師匠である胡桃まなが扉を開けてすぐに出迎えてくれるあたり、彼女もセーナのルーティンを把握しているみたいだった。

胡桃まなかはあたしを見ても特に反応を示さない。

自らを襲った相手なのに警戒する素振りも見せない。

むしろ……温かく迎えてくれた。

「あのさ……」

「？」

あたしはずっと、誰かに頼らないとなにもできなかった。

瀬奈がいないと碌に魔女退治もできなかつたし、セーナがいないと今日まで生きようと思うことだつてできなかつた。固有魔法ですら、誰かがいないとなにも魔法を使えない。あたしはそんなやつだったんだ。

でも。

「あの時は悪かつたよ。あたしがバカだつた」

心を改めるつて決めたんだ。

もう今までのこの世界から目を背けて、世界の裏側でひっそりと生きようとしていたあたしとは決別するつて。

だから……言つた。自分から。

ちよつとセーナが驚いている。

多分自然にあたしが謝れるような流れを作ろうとしてくれていたんだと思う。セーナはそういう人だから。

でも、それじゃあダメだつて思えるようになったんだあたしは。

「まあ、寝ていただけですし、もういいですよ。そんなことよりも料理するのは初めてですか？」

結構勇気出したんだけど、あつさり許された挙句流された。

襲われたのは他でもない自分だつていうのに「そんなこと」つて……。

「い、いやいや。あんたを大した理由もなしに襲つたんだよ？ そんな

な簡単に許せるのかよ」

「ええ、まあ。まなかは正直、自覚していませんでしたしね。もし罪悪感を抱いているのでしたら、今後もウォールナッツを鼻屑にしてください。それだけで充分ですよ」

……言っている感じからして嘘を言っているように見ええないし、セーナに強制されているようにも思えない。本心からそう思っているって伝わってきた。

「そんなことよりもですよ。まなかの質問に答えてください。料理、するのは初めてですか？」

「え、あ、ああ、まあ……」

「それは勿体ないです！ 料理はとつても楽しいんですから！ 今日の料理教室、参加していただくさいね！」

「え、あ、うん」

「それでは準備がありますので、また後程！ 百恵さんにも失礼しますね！」

そのままのテンションで厨房に行く胡桃まなかを笑顔で「またの〜」と軽く手を振っていたセーナの隣で、あたしは生返事をしつつ見送った。

なんかその……物凄く拍子抜けしてしまった。

常盤ななかと同じようにあたしを殺す気で睨みつけてくるか、怯えて拒否するように接せられるか、どちらにしても険悪かつ微妙な雰囲気になると思っていたのに。

「さあ、私たちも行くぞ。まなか先生も言っておったが、料理は本当に楽しいのじゃからのう。お主にもぜひ身に着けてほしいのじゃ」

あたしの手を引くセーナ。

多分、胡桃まなかに謝罪するだけじゃなくて、監視生活が終わった後、あたしが食に困らないようにする打算も入れて連れてきてくれたんだろうけど、セーナが料理好きなのは百も承知だったから、それも本心なんだろうな。

セーナは本当に楽しそうに料理をする。

朝早くから色々仕込んで少し凝った朝食を作るし、夕方からはあた

しに毎回どんなものを食べたいか訊いてから手を付ける。ちやつかり料理する前に作るものを一通り調べてから取り掛かるあたり、料理に対する情熱がすさまじい。

でもセーナ曰く、それは趣味の一環で料理人になるつもりはないらしい。

正直言つて勿体ないなつて思った。これだけの腕があるなら充分やっつけていけるだろうに。

だから気になつて踏み込もうと思つたけど、一瞬セーナが遠い目になつたからやめたんだつて。

「こんにちは、百恵先生。それに……更紗さんも」

別室の調理室で料理教室が始まるのを待ちつつそこまで思い返していた時、静海このはがやつてきた。

「こんにちはなのじゃ。久しいのう」

「ふふつ、一週間ぶりじゃないですか。そんなに間は空いてないですよ」

「そうかの？」

そのままふたりは和やかに話し始めた。

どうやら静海このはは、他のふたりにも魔法少女の真実を話したみたい。大事な家族で仲間のふたりに隠し事はしたくないからつてき。普通は墓まで持つていくようなショッキングな真実だつたと思うけど、あたしが起こした事件のせいで一皮も二皮も剥けたらしくつて、ひとりで抱え込まないで正直に話そうとすぐに思つたみたいだつた。

思えば、こいつはだいぶ変わったなつて思う。

ずっと前までは自分たち三人以外の誰も信じていなかった静海このはがさ、こうして人と触れ合うようになって、自分の仲間を完全に信じて魔法少女のヤベー秘密を暴露するなんてさ。

あたしが付け狙つていた頃からは予想もつかなかった展開だよ。

まあ、こいつが変わるきっかけになつたのは三栗あやめの影響が大きいんだけどさ、陰から支えていたのはやっぱりセーナなんだよね。

あたしが罫を仕掛けた現場に夏目かこと深月フェリシア、そして常

盤ななかを呼んだのはセーナだったし、遊佐葉月と十咎もこの仲介人になったのもセーナだった。

友達ができた三栗あやめも、元から柔軟な思考の持ち主だった遊佐葉月も、魔法少女の真実を知って少し動揺したみたいだったけど、割とすぐに受け入れたっぽい。

今まで通りに過ごしていれば特に問題はないからっていうのもあったけど、なによりも静海このはが自分たちにもその秘密を話してくれたことが嬉しかったみたいだった。

「そうか……お主はいい親友を持ったのう」

「ええ。自慢の仲間ですよ、本当に」

そこまで話した後、あたしに静海このはが視線を向ける。

そこにはうつすらと柔らかい笑みが浮かんでいた。

「まなか先生に謝りにきたみたいね。でも……せつかくなんだし、楽しんでいきなさい。この料理教室、本当にわかりやすいのよ」

あたしのことを完全に許していないと言っていたはずなのに、あたしを気遣う言葉をかけてくれる静海このは。

こいつがあたしにこんな顔を向けてくるなんて、一週間前には夢にも思わなかった。

「……そうさせてもらうよ」

静海このはから目を逸らしながら返事をした。

そこからは普通に料理教室が始まった。

前半はセーナは胡桃まなかの手伝いで他の参加者に指導していたっけ。

「……まあ、こんなもんか」

料理教室も終盤に差し掛かって、あたしの料理が完成した。

右隣で作っていたセーナとは比べ物にならないほど劣っているだろうけど、初めて料理をした身にしちゃあ、上出来なんじゃないかな。

この料理教室は評判通りのクオリティだった。

使っている食材や道具は特別凝ったものじゃないし料理のお題もメジャーなものなのに、普通に作るよりも簡単で、わかりやすく、味も一段上。

確かにここに通い詰めていけば、セーナまではいかずともアマチュアの料理上手程度にはなれるだろうね。

「あなた……やるわね。初めてでここまでできるなんて……。あなたには料理の才能があるわ……！」

「いや、あんたが才能なさ過ぎただけだよ……」

左隣で作っていた、爆笑間違いなしの料理下手だった静海このはも手馴れたもので、本当にあんな凄い料理を作っていたのかと思える程上達していた。

聞けば、最初はセーナから付きつきりで指導を受けて悪い癖を矯正された後、胡桃まなかの後押しもあってそこからぐんぐんと腕を上げていったらしい。

「ぐ……葉月にも同じことを言われたわ」

「驚かれたんじゃねーの？ 急に料理できるようになったときはさ」

「……偽物なんじゃないかって疑われたわ」

「ぶっ」

そいつはひでーや！ 料理ができる静海このはは静海このはじゃないってか！

というか料理教室に行くって言っていただろうにその反応ってことは、改善されないって確信してたってことじゃねーか！

「容赦ないねえ、あんたの仲間は」

「本当にね。小さい頃からずっと一緒だったけど、失礼な話よ……」

その後、気が付けば料理教室が終わるまで、あたしは静海このはとずっと話をしていた。

途中でセーナと胡桃まなか合流して四人で少し喋って、今日は解散になった。

不思議な気分だった。

自分からあんまり仲がいい……というかほぼ敵対していた人に話しかけたことなんて今までなかったし、最後にはあたしの勘違いじゃなければそれなりに自然と喋れていたような気がする。

胡桃まなかは最初っからだったけど、静海このはも料理を通して、あたしを受け入れてくれていた。この冷たい世界であたしを受け入

れてくれた人間は瀬奈とセーナだけだったのに……。

それを自覚して、なんとなく胸の中が温かくなった。

「さあ、次は水徳商店街に行こう！」

セーナはまだあたしを連れ回すつもりらしい。

水徳商店街つてことは……一気にふたりだね。

「うん。わかったよ」

即答した。逃げないって決めただから。しっかりけじめを付けに行こう。

優しい笑顔を浮かべたセーナの手を少し握って、あたしたちは水徳商店街に向かった。

「いらつしやいませ！ あら、百恵さん！」

「こんにちはなのじゃ」

「はい！ ということはそっちの子が？」

まず初めに訪れたのはフラワーショップ『ブロッサム』。

ここでバイトをしている魔法少女、春名このみ。

彼女もセーナ……というより、常盤ななかの所の夏目かこの協力者で、噂の火消しをしていた魔法少女だった。

「あたしが更紗帆奈だよ。その、悪かったよ。あたしの身勝手に眠らせちゃってさ」

すぐに素性を明かして謝った。あたしが絶対にやらないといけないことはこれだからね。

さっきの胡桃まなかが特別だっただけで、あたしの知る限り普通の女の子で普通の魔法少女である春名このみにはさすがに警戒されるだろうと思っただから、話しかけやすいうちに謝った。

……んだけど。

「ううん、いいのいいの！ かこちゃんから軽くだけど聞いているし、正直襲われたことすら気付かなかったしね！ ただちよっと何日も寝てたことにはびっくりしちやっただかな」

……またもやあっさりとは許してくれて流されてしまった。

どうやらあの夏目かこが説明してくれたらしい。敵だったはずなのにお人好しなやつだ。

まあ、夏目かこの本屋を燃やすきっかけを作ったのは、あたしじゃないんだけどねえ。

実際、常盤ななが率いていたチームであたしが関わっていたのつて、常盤ななかだけなんだよねえ。

志伸あきは付き合っていただけだし、チュンマイユイ純美雨にも夏目かこにも、あたしはなーんにもしていない。信じてくれるかはアレだけどき。

「ちよつと待っててね。えーつと……はい！　これ！」

そして少し店内に走っていったと思ったら、色とりどりの花が植えられている鉢植えが入ったビニール袋を持って戻ってきた。

赤にピンク、青と白い花が咲いているけど、全部同じ花みたいだ。

「これはエゾギクって言ってね。アスターって言った方がわかりやすいかな？」

「いや……どっちも初めて聞くけど……」

「ふふつ、そつかあ。ちょうど夏の今、綺麗な花が咲くんだよ。だから持って帰って飾ってあげてね！　お部屋に少しお花を添えるだけで全然違うんだからー！」

なかが「だから」なのかがよくわからないんだけど……そういえばこんな子だった。

遊佐葉月にも花を渡していたみたいだし、自分が関わった魔法少女にそつと花を添えることがこの春名このみっていう魔法少女なんだろうな。

そしてそれは……理不尽な迷惑をかけたあたしも例外じゃなかった。

「……ありがとう。なるべく長く咲かせてみせるよ」

「うんうん、そうしてあげて！　これからも『ブロッサム』を最真にしてね！」

胡桃まなかといい春名このみといい、商魂逞しい。そして……優しくて温かい魔法少女だった。

道理でセーナとプライベートでも仲良くなれるわけだ。

エゾギクが植えられた鉢植えを受け取って、あたしたちは『ブロッサム』を後にした。

そして次に向かうのは……商店街の奥の方にあるスペース。エミリーのお悩み相談所だった。

「おつ、ヒヤック工先輩じゃん！ おひさく！ んでんで！ そつちの子があきららつちたちが言ってたさらはん？」

「さらはん？」

それってあたしのこと？

「更紗帆奈だから『さらはん』！ うん、呼びやすい！」

「ははは……。エミリーちゃんはこういう子なんだよ」

アシスタントをしている志伸あきらが苦笑している。

こいつとも敵同士だった気がするんだけど……全然あたしを警戒していないみたいだ。

木崎衣美里に至ってはさつきまで会ったふたり以上に、今回の事件を気にしていないことがわかる。

「いや、まあ、それはいいや。……悪かったよ。あたしの我儘に巻き込んじゃまってさ。そつちのあんたもな」

「え？ 別にいいんじゃない？ あーしはなーんにも気が付かなかったし、そういうこともあるっしょ」

やつぱりなんにも気にしてなかったみたいだった。

「そういうこともあるっしょ」って……ねーだろ普通。

「ボクは君になにかされたわけじゃないし、他のみんなが良いって言うなら何も言わないよ」

志伸あきらも特にあたしに対して負の感情はないみたいだった。

あたしの感覚が狂ってんのか？ 結構ヤバいことをやらかしているはずなんだけど……。

「こんにちはって、ああーっ！」

「どうしたの？ って、あー！」

若干困惑していると、相談所にやってきたふたり組があたしに気が付いて声を上げていた。

確かこいつらは……竜城明日香と美風ささらだっけ？



「あなたは更紗帆奈さん！　ですよね！」

「……まあそうだけど」

「つい先日、この神浜で大きな事件を起こした犯人の！」

「……そうだよ」

竜城明日香があたしに厳しい顔して詰め寄ってきた。

ああ、そうそう。こういうのだよ。やっぱりあたしの感覚は狂っていないかった。

こういう反応をされたりするのが普通なんだよ。

ましてや、木崎衣美里はこいつらの友達なんだ。さっきの胡桃まなかとも仲が良かったかな？

なにせよ友達を理不尽に傷つけられて、怒らないやつなんかいない。

今まであたしを許してくれたやつらは、少し甘いところがあるとはいえみんな当事者だったから割り切ることができたんだろうけど……完全な第三者視点じゃあ、割り切れないのが当たり前。

正直言つて、安心した。

このまま何事もなく、あつさり許されたりしたら逆にあたしがどうにかしちやいそうだったから。こうして突っかかってきてくれて、素直に嬉しかった。

「あたしはあんたらの大切なやつを傷つけた。あたしの身勝手な我儘のせいだね。他にも色んなやつらを巻き込んでさ」

「……どうしてそんなことをしたの？」

「簡単に言っちゃえばさあ……死にたかったんだよ」

「！」

「……………」

瀬奈が魔女になってから、あたしが望み続けていたのは誰かに殺されることだった。

瀬奈を魔女にさせずに済んだかもしれないのに、あたしの思い込みと堅い考えのせいでそれをふいにしてしまった自分に、罰を与えてほしかったんだ。

だからあたしは絶対に許されないようなことばかりしてきた。

碌でなしになれば、きつと誰かがあたしを裁いてくれる。そんなバカなことを考えちまった。

結局目論見が外れて今もこうして生き続けて、もう自分から死のうだなんて思わなくなっちゃったんだから身勝手にもほどがある。

「あたしは自分のために死のうとして……それで今は自分のために生きようとしている。虫のいい話だと思うよ。あたしだって、今こうして過ごせているのが信じられない」

セーナがあたしを受け入れてくれたとしても、常盤ななかや静海このはに殺されると思った。七海やちよから死ぬよりもつらい罰を与えられると思った。

でも、待っていたのは温かい場所だった。

神浜最強の監視つていう名目だけど、実際にはセーナに甘えっぱなしの樂園だった。

そのセーナはあたしが自立するための下準備までしてくれていて、それであたしは……瀬奈が魔女になって以来ずっと前向きになれなかった、この世界で生きていくことに希望を持てるようになった。

だからあたしは、今までのあたしと決別するために動こうって思ったんだ。

バッシングを受けても、それは自業自得。暴力を振られることだつて、罵声を浴びることだつて覚悟していたのに……みんなあつさり許しちゃうんだからさあ。

「あたしはあんたらに、なにをされてもなにを言われても構わないよ。……でもさ、これだけは言わせてほしいんだ」

信じられないと思うけどさ……あたしの本心である、この言葉だけは、聞いてほしいんだ。

「本当に悪かった。あんたらの大事なやつ、傷付けるような真似しちやつてさ」

今日初めて、あたしは頭を下げて謝った。

今までも頭を下げて謝りたかったけど、そうする前にあっさりとしちやうもんだからできなかつたんだよね。

当事者じゃないやつにやったところで大した誠意も感じられない

と思うけどさあ、これがあたしができる精一杯なんだよ。

あたしには人を幸せにする魔法なんて使えない。償えと言われても……肉体労働くらいしか提供できないから、こうして言葉にするしか手段がないんだ。

「ほら、明日香。もういいでしょ？」

あたしが頭を下げて十秒ほどしたとき、比較的落ち着いていた美風ささらが竜城明日香に嗜めるような言葉をかける。

「……そのようですね。それならいいんです。もうこんなこととしてはいけませんよ！」

そして竜城明日香はあたしの顔を上げつつそう叱咤してきた。

彼女たちの顔にはもうあたしに対する怒りはないように見えた。その代わりに……なんだか凄い、温かいものがそこにあつた。

「分かってるよ」

なんとなく恥ずかしくなったあたしは、竜城明日香から顔を背けた。そのあと無言でセーナに頭を撫でられた。それも物凄く温かくて……余計に居心地が悪くなる。

なんだこれ。

機嫌が悪いわけじゃないのに、今すぐにでも逃げ出したい。

「失礼します。ああ、やっぱりここにいらっしやいましたか」

そんなあたしにとって、このタイミングでこいつが来てくれたことは救いだつた。

口ぶりからしてどこからかから情報を仕入れてやってきた、眼鏡をかけた魔法少女……常盤ななか。

こいつには今まで謝ってきたやつら以上の負い目があるけど……なんだろうな。不思議と好感が持てるんだよね。

「おいーっす、衣美里元気かー？　って、百恵もいんじゃないか。ということはそのちが……」

そして遅れてきたのは……中央の相談役である大物魔法少女、都ひなのだつた。

そうか。そういえば都ひなのは木崎衣美里と交流があつたんだっけ？

訝し気な視線をあたしに向けてきた都ひなのだけど、すぐにセーナに絡まれて連行されていった。どうしたんだろう。

「……どうやら本当に心を入れ替えたみたいですね」

そしてしばらくあたしを見ていた常盤ななかがおもむろに口を開いた。

いつも通り澄ました笑みを浮かべて、なにか面白いものを見るような目をしてさ。

「さあね。フリをしているかもしれないよ？」

「ふふっ、そうでないと断言できますよ。私の魔法が一切反応していませんから」

「……つまんねーやつ」

見透かされているような気がして面白くないあたしは憎まれ口を叩く。

すると常盤ななかはわざとらしくそうに驚いて口に手をやっていた。

「まあ、他の人にはしおらしく謝っているって聞いていましたが、私にはそれですか。これは百恵さんに言いつける必要がありますそうですね」  
「ちよっ、それはやめてっつて！」

こんな冗談なんかでセーナに失望されたくないし、鉄拳制裁を受けるのも嫌だ！

あれ以来受けてないけど、ちよっつとでも怒らせたら笑顔で拳骨が飛んできそうで怖いんだよ！ あいつ滅茶苦茶優しいんだけどさ、怒ったときとガチで戦うときは本気で怖いんだからさ！

「なにをしておるのじゃ、全く」

丁度都ひなのと話をすませたらしいセーナがあきれた様子でこっちにきた。

様子からしてあたしたちのやり取りを見ていて、常盤ななかと言っていることが質の悪い冗談だってわかってきているみたいだ。……ほっとした。

都ひなのはセーナになにを言われたのか、もうあたしに視線を向けることなく木崎衣美里と少し話して立ち去っていった。

常盤ななかもあたしの今の姿を見て満足したらしく、「またお会い

しましよう」と言つて帰つていった。

正直なところあんまり会いたくないけど、あたしとしては常盤ななかくらいの距離で接してくれるのが一番心地いいから複雑だった。

それから月日が過ぎて……。

8月の終わりが迫つてきたときには、あたしを取り巻く環境は大きく変化していた。

まずその……まなかにかのこ、それから……ええつと、れ、レミリアだっけ？ まあいいか。なんか脳内で「五百年も生きていませんわよ！」とツツコまれた気がするけど。

とにかくその、同じ水名女学園に通っている三人と、その……友達になれたんだ。

そのおかげもあつて、今まで行く気にもなれなかった学校に行く気が出た。

同じ学校に通う友達ができるだけで、こんなに違うんだね。なんと  
いうか……凄い安心感があるよ。

まなかの料理教室のおかげで他人に出せる程度の料理はできるようになったし、家事もセーナが全部教えてくれたから一通りできるようになった。

そして二ヶ月の月日を経て……あたしが起こした事件はみんなに忘れ去られつつあつた。

あたしが迷惑をかけた魔法少女全員に謝罪し、その全員が受け入れたことを確認した神浜の重鎮たちが、事件の収拾に動いてくれたからだ。

セーナが各方面に連絡を入れて、東西中央の顔たちが噂を広め、調整屋とセーナに代わる傭兵の御園かりんがさらにそれを拡散する。

被害を受けた衣美里にこのみ、まなかたちも動いてくれたから、神浜の魔法少女たちを恐怖に落とし入れた事件は極めて平和的に解決されたとして収束し、次第に過去の出来事として埋もれていった。

「それでは……行つてくるからの」

そして今日は……あたしの監視が終わる予定の日でもあった。  
今日セーナたちが調整屋で話し合って決めるらしいんだけど……  
今日に至るまでの神浜の重鎮たちの動きから見ても、あたしのこの生活  
は終わるだろう。

「そっか……もう9月、か。……うん。行つてらっしゃい」

改めて、もうすぐ9月だということを確認したあたしはセーナを見  
送った。

帰ってくる間に、あたしはやれる限りのことをすることにした。

洗濯物を全て干して、部屋を掃除して……そして、あたしの私物を  
全て出して集めておいた。

きつとセーナは監視が終わったとしても、あたしが望むならここに  
いていいって言ってくれると思う。でも、それはきつとあたしにとつ  
て良くないことだから。

この日のためにあたしは立ちどころにいろいろなことを覚  
えた。

家事は勿論のこと、勉強もサボっていた今までの所を全部頭に叩き  
込んだ。

誰かに頼りっぱなしだったあたしも、もういない。

だってあたしは、もうひとりじゃないんだから。

あたしの周りにはたくさんの方がいて、そして受け入れてくれてい  
る。友達だっていっぱいできた。

だから今度こそ……今度こそ、そんな大切なものを守れるように、  
あたしは強く生きる。

もう知ることには全部知ったし……それにあたしにはセーナの魔法  
がある。

なんとなくだけど、セーナがあたしにこの魔法を使う制限を付けた  
理由がわかったよ。

確かにこの魔法は危険だ。

自分に暗示をかけてリミッターを外したことがあるから感覚でわ  
かるんだよ。この魔法はそれを非常に緩やかに行う魔法だってね。  
しかも止める術がない。

日に日に強くなっていくけど……体が限界を迎えたら崩壊が始まるだろうね。

セーナはこれを知っていたから制限を付けてきたんだ。

それで……もう長くないことがわかっていたから、あたしを独立させられるように動いてくれたんだらうね。

もう瀬奈の時と同じ絶望を味合わせないように、セーナがいなくなっても頼れる先を作れるように、全部あたしを思っこの監視の仕事を引き受けてくれたんだ。

そんなセーナの気持ちに、あたしは応えようと思う。

少しでもセーナを安心させて、あたしは自分の道を歩く。

それから少しして、帰ってきたセーナは会議の結果をあたしに教えてくれた。

満場一致で監視を終了することが決まり、あたしは自由の身になった。

「そっか……うん、わかった。荷物も纏めておいたし、あたしはもう行くよ」

「……用意が良いのう。確信しておったのかの？」

「まあね。最近のみんなの動きを見てたら予想できたよ」

「そうか。……そうか」

あたしの前向きな姿勢に喜んでいる様子のセーナ……だけど。

やっぱり、どこか寂しそうだった。なんというか、セーナが小さく見えるんだ。

元から小さいんだけど、その人柄や秘めている力からずっと大きく見えた、神浜最強の魔法少女がとても弱々しく見えた。

でも、そんな表情を見せたのはほんの一瞬だけ。

すぐにいつもの笑顔に戻ったセーナは優しくあたしの頭を撫でる。

「胸を張って生きるのじゃよ。なあに今のお主ならば大丈夫じゃ。自由に楽しい人生を過ごすとよい」

「今までありがとう。たまに来てもいい？」

寂しそうなセーナが少し心配って言う理由もあるけど、もうここはあたしにとって第二の実家のようなもの。このセーナの家だって、あ

たしが守っていきたいと思える大切な場所なんだ。

だからまたここに来たいし……ここでまた、セーナと笑い合いたいんだ。

「勿論じゃとも。なにかあつたら私を頼るのじゃ。いつでも力になるからの」

あたしだつて……セーナの力になつてみせるさ。

あたしはそう心に決めて……ここを出発する。

セーナ、あんたは言ったよね。

なにかあつても、あんたはあたしの味方だつてさ。

その言葉、あたしもそっくり返してやるよ。

「なあ、セーナ」

「む？ なんじゃ？」

「あたしもなにかあつても、あんたの味方だからさ……。だから……無理しないで、少しは頼ってくれよな」

それだけ言つて、あたしはセーナに背を向けて家を出た。あたしはセーナほど堂々とした人じゃない。

あーつたく、物凄い恥ずかしいこと言つちまったなあ。顔が熱くしてしょうがないや。

さて、束の間の平和を取り戻した神浜だけど……これつてきつと、嵐の前の静けさつてやつだと思う。

あたしが以前から見かけた怪しい連中の動きが活発になつてきているみたいだし、これから神浜は荒れるだろうね。

そして……今、あたしが一番大切にしているものも、近いうちに壊れてしまうのだろう。

でも、あたしはもう壊れない。

誓つたんだから。

どんなことがあつても……たとえ、セーナが早くに死んじまつたとしても、この世界で生きていくつてさ。



## S i d e ・ 梓みふゆ 希望の星

モエちゃんから魔法少女の真実を教えてもらったあの日から、ワタシの毎日は灰色一色に染まりました。

かけがえのない仲間を失った。

ただそれだけでも充分ショックな出来事だったのにもかかわらず、その後に関ることになった恐ろしい魔法少女の秘密。

ワタシたち魔法少女は、ソウルジェムが濁り切ると魔女になる。

人間であるどころか、魔法少女としてすら碌な最期を迎えることができない、残酷な真実。それを知った上で、六年間も魔法少女として戦い続けてきたモエちゃんは、本当に強い人間だと思えます。

ただワタシはモエちゃんなんかとは比べ物にならないほど弱かった、それだけのことでした。

そしてそれは、魔法少女としての能力にも影響を与えていたのかもしれない。

ある日を境に、ワタシは自分の思うような出力の魔法を放つことができなくなっていました。

ほんの数ヶ月前までは当たり前前のように使えた魔法の威力が下がっていたり、便利だった小手先の魔法が使い魔に通用しなくなったりと、明らかな異変が起きていたんです。

そのことについてもモエちゃんに聞きました。魔法少女は弱体化するんじゃないかと。

キュウベえから聞き出せるだけの情報を聞き出したと言っていたモエちゃんなら、このことを知っているんじゃないかって聞いてみたんです。ですが……。

「……魔法少女の弱体化？ それは聞いたことがないのう？」

返ってきたのは……ワタシが望んでいたものではありませんでした。

キュウベえから事情を聞いているはずのモエちゃんが、魔法少女の弱体化を知らない。

そしてワタシと同じ年で魔法少女歴も近いやっちゃんもモエちゃ

んには、弱体化の兆候が見られない。

そこから導かれる結論はつまり……っ！

「本当ですか？ その……モエちゃんは、ここ最近自分の力が衰えたと感じたことはありませんか？」

認めたくなかった。認められるわけがなかった。

ワタシだけがどんどん弱くなっていることなんて、それだけは認めたくなかった。

だから……ワタシはモエちゃんにもう少し踏み込んで聞いてみたんです。

「私の力が？ うんにや、そんなことはないのう？ むしろ漲っておるぞ。私の願いのせいかもしれぬがの？」

「……そうですか」

ですが、やっぱりモエちゃんは強いままでした。

きよんとした顔で、強くなっていく一方で決して弱くなっていないと言い切ったんです。

隣に座っていたやつちゃんを見てみましたが、やつちゃんもワタシの質問の意図がわからないらしく、訝し気にワタシを見ていました。

ということは、今現在弱体化が始まっているのはワタシだけ……。

やつちゃんとモエちゃんはどんどん強くなっていつているのにワタシだけ弱いまま……！

そこまで考えた時、ワタシはみかづき荘から出ていました。

もうそこにいることができませんでした。

魔法少女の全ての真実を知っただけでも相当だったのに……弱体化に関しては運命でもなんでもなく、ワタシだけに降りかかっている現実だったなんて……！

このままだとワタシは、早かれ遅かれひとりでもともに魔女と戦うことができなくなつて……魔女との戦いに負けて死ぬか、グリーンフシードが尽きて魔女になるか、そのどちらかの結末を迎えることになる。

「……いやっー！」

そんな……そんなバカな話があつてたまるものですか！

そもそもワタシが魔法少女になった大本の理由は、普通の女の子になりたかったから。

でも魔法少女になってしまったら、もう普通の女の子であることは叶わなくなる。

だからワタシは自由になりたい、そう願いました。

決して家族のことが嫌いだったわけじゃないんです。

ただ……梓の人間としての生活はあまりにも自由がなさすぎて、他の同年齢のワタシよりも自由に生活をしている女の子たちが羨ましかった。ただそれだけだったんです。

でも、ずつとずつと、両親が敷いてくれたレールの上を走ることでできなかつたワタシは、結局どう自由にすればいいのかわかりませんでした。

急に自由になったところで、地図のない道なき道を歩く勇気がワタシにはありませんでした。

だったら……せめて夢の中だけでも自由に生きてみたい、そうキユウベえに伝えて契約したんです。その結果が……これです。

知らなければよかつた。

弱体化について聞かなければよかつた。

いつそのことモエちゃんが最初に忠告してくれた通り、すぐに帰っていればよかつた！

こんな真実を知ってしまった以上……ワタシはもう夢の中ですら自由にできない。

だつて行き着く先がわかつてしまつたんですから。

結局ワタシは、親が敷いたレールから抜け出すことができても、魔法少女の運命からは抜け出すことができなくなつてしまつた。自由なんて、夢のまた夢でした。

そして……ワタシが弱くなつていく一方で、力を付けていくやつちゃんやモエちゃんを恨みそうになる自分がなにより嫌でした。

ふたりはなにも悪くなく、ただの八つ当たりだつてわかっているからこそ、そんな自分が嫌で嫌で仕方なかつたんです。

やつちゃんがチームを解散してくれたことは、ワタシにとって救い

でした。

これでやつちゃんやモエちゃんと距離を置ける。距離を置いて、少し時間をかければ考え方を変えられるかもしれない。こんな嫌なことを考えてしまう自分を変えられるかもしれない。

そんな切なる願いを込めて……ワタシはみんなの元から離れました。ですが……。

半年経つても、一年が経つても、ワタシは結局変わることができませんでした。

そしてその負の感情は次第にソウルジェムを蝕んでいきました。

ああ、モエちゃんの言う通りです。

ソウルジェムはワタシたち魔法少女の感情の影響を受ける。それが悪いものであればあるほど穢れが溜まっていく、と。

ああ、もうワタシも終わりなんですネ。

ワタシのソウルジェムは……真っ黒に濁り切ってしまっていました。

あれからずっと、碌に魔女と戦わず、灰色になってしまった世界の中で魔法少女になった自分自身を呪い続けていた反動が来てしまったみたいです。

ワタシもきつとメルさんのように……そう思ったのも束の間。

濁り切ったソウルジェムから……得体のしれないものが飛び出してきました。

ソレは、ワタシの上半身を覆うかのように顕現しました。

真っ白な鳥の羽が両腕に纏わりつくかの如く現れて肥大化していき、ありとあらゆる布が、乱雑に並べられたカーテンのようにワタシの背後を包み込む。

ワタシの頭には鳥の籠が被せられ、そこからまるで髪の毛のように黒と青のまだら模様を描く巨大なかつらがカーテン状の色とりどりの布を包み、変化が終わって巨大になった両腕がそこから生える角のように伸びる。

これが……魔女？ いや、違う……！

魔女になったのに、ここまで意識があるのはおかしい……！ そう

思った途端、ワタシの中から出てきたものは光となって消えて……ワタシは元の姿に戻っていました。

多少の脱力感がありますが……どうしてでしょうか、ずっとずっと感じていた倦怠感や憂鬱感が軽減されています。

ふと、自分のソウルジェムを見てみると……そこには穢れのない、ピカピカに光る綺麗な紫色のソウルジェムがありました。

「これは、一体……」

「くふっ、魔女になると思ったー?」

自分が思い描いていたことと全く違う出来事が起きて、困惑しながら呟くと、背後から面白そうなものを見た子供のような声が聞こえて振り返ります。

そこにいたのは聖リリアンナ学園の制服を着た、長い赤毛の女の子。

聖リリアンナ学園ということは、ワタシの実家以上のかなりのお嬢様。しかも小学生です。……ですが。

なんででしょうか、彼女が放つあの不気味なオーラは。

あどけない表情や喋り方はふざけた子供のそれなのですが……目がちつとも笑っていません。

まるで自分以外の人間を道具としてしか見ていないような、完全に人を見下しているかのような、傲慢かつ圧倒的強者の表情をしています。同じ強者であるモエちゃんとは真逆です。

あんな表情をただの小学生ができるものなのでしょうか。

「あなたは……う?」

「わたくしは里見灯花<sup>さとみとうか</sup>。今のはドツペル<sup>さつぺる</sup>って言ってね。魔女化を回避するためのものだよ」

ワタシの質問に簡単に答えると、すぐに別の話題を切り出してきました。腹の探り合いはなしですか、いよいよもってモエちゃんとは逆ですね。

モエちゃんはゆっくりと本題に向かっていくのにこの里見灯花さんとやらは直球すぎます。

面倒なことを嫌ったのか、はたまたそういう駆け引きが苦手なのか

……まあいいです。そんなことよりも、です。

今この里見さんはありえないことを口走っていました。

それについて問い詰めないといけません。

「回避って、そんなバカな話……。ワタシはこの目で見たんです。仲間が魔女になるところを」

「だから、そうならないようにドツペルになるようにしたんだよ」

軽く。実に軽く、なんでもないように、あっけらかんと答えました。

魔女化を回避する方法を作り上げた、ですって？

「したって……。あなたが……。？」

「そう、わたくしが！」

えっへんと笑顔で胸を張って答える彼女。

とても信じられませんが、現に魔女になるはずだったワタシは魔女になっていませんし、そのドツペルとやらも出して、ソウルジエムが浄化されています。

ですから、嘘を言っているわけではないことはわかります。

……。本当に？ 本当にこんなことが……。魔法少女が魔女にならなくて済むのでしょうか。

ワタシは……。この運命から逃げることができるのでしょうか。

「ねえ、ベテランのお姉さん」

僅かに希望を抱いているワタシに、里見さんが甘ったるい口調で囁いてきました。

「わたくしと一緒に、魔法少女を解放しようよ。」

そうすれば、お姉さんも苦しまなくて済むよ！

呪縛？ いいね、その言葉！

そうだよ。

魔女にならないし、

戦わなくて済むよ」

実に、実に都合のいい言葉ばかりが羅列していました。

ずっと前のワタシならば、きつと根掘り葉掘り聞いてから判断していたことでしょう。だってあまりにも都合が良すぎるからです。

このドツペルを使った魔法少女救済の裏には、絶対になにかがあ

る。

ですが……。

「……本当に、救われるんですか？」

「勿論だよ！ さつきだって、魔女にならないで済んだでしょ？」

「とっても素敵なおシステムだからさ、一緒に全世界に広がって行こー！ そうすれば全ての魔法少女を救えるんだから！」

「ワタシは……普通の女の子になれるんでしょうか？」

「なれるよー？ だって魔女にならないんだもん！ どう生きるのかは個人の自由だし、わたくしの計画が無事に達成できた暁には好きにしてもらっていいんじゃないかにやー？」

自信満々に力強い言葉で即答する里見さん。それだけはあの神浜最強の存在と全く同じだったんです。

彼女には人を惹き付けるカリスマがあつて、そしてそれに見合う絶大な力がある。

だから……ワタシは惹かれました。

「わかりました。ワタシも、協力します」

この辛い運命から逃れられるのなら、ワタシは堕ちることを選びましょう。

絶対になにかがあると知りつつも、深く聞かずに、ワタシは里見灯花さんの話に乗ることにしました。

ワタシが協力すると決めた組織は『マギウス』。

里見灯花さん、柊<sup>ひこうや</sup>ねむさん、そしてアリナ・グレイさんの三人の天才たちをトップに据えた組織です。

三人にはそれぞれ目的があつて、その目的を達成するための過程として、このドツペルを使った自動浄化システムを全世界に広めようとしているらしいのです。

自分たちはやりたいことを実現させられるし、他の魔法少女たちは魔女にならずに済むのだからwin-winだよ、というのが彼女たちの主張なのですが……なんといいですか。どこか釈然としないのはどうしてでしょう。モエちゃんも同じようなやり方で世渡りしていましたのに。

まあいいでしょう。

トップたちの考えはどうあれ、このシステムは素晴らしいものですので、これを神浜だけでなく全世界に広めることは素晴らしいことだと思いますのでワタシも賛成です。

しばらくの間は魔女化の真実を知った同胞たちを集める活動に勤しみました。

トップである『マギウス』の三人をサポートする組織である『マギウスの翼』を設立して、天音月夜と天音月咲の天音姉妹を筆頭としたそこそこの力を持つ白羽根と、そこまで強くない魔法少女たちが集まった黒羽根が、実働部隊として神浜各地で動いてくれています。

「うんうん、人員は集まってきたねー」

「流石は西のナンバーツーだよ、みふゆ」

そして……9月に入ろうとしたとき、ワタシは定例会を開いた『マギウス』に呼び出されました。

『マギウスの翼』について話があるとのことでした。

強かれ弱かれ協力者は多いにこしたことはなく、順調に組織として成長を遂げていった『マギウスの翼』。

今となつては東の魔法少女の大半が、そして西の中堅以下の魔法少女の半数近くが加入しています。

「でもさー、なーんか最近、士気が下がってきている感じがするんだよにやー？」

一転して不満げな顔で灯花が言います。

……まあ、それもそうでしょうね。

トップの一角であるねむの作り出したウワサを守り、そして、他の魔法少女たちを勧誘するのが『マギウスの翼』の仕事です。

ウワサは自動浄化システムを広げる上で必要な、半魔女であるエンブリオ・イブを成長させるための養分である人間の感情エネルギーを獲得するための魔女ではない怪。

最初こそ、害を持たないウワサばかりだったので良かったのですが……効率を求めるあまり過激な内容のウワサを作るようになり、挙句の果てに魔女を育ててそのままイブの餌にしまおうという意見



が出てから、『マギウスの翼』内で問題視するような声が出始めています。

ワタシもそのうちのひとりですが……全ての魔法少女を助けるためという建前を作って、ウワサの被害者たちが命にかかわるような危険が迫る前に助けるように指示を出していたので、今のところ犠牲者は出ていません。

羽根たちが無事なのは、ほとんどがモエちゃんの手解きを受けている魔法少女だったから。

モエちゃんの魔女との戦い方による指導はウワサでも活かせたので、なんとか一般人を救い出すことができているんです。

そして、そのモエちゃんによって救われた魔法少女のほとんどが『マギウス』たちのやり方を問題視している傾向にあります。

彼女たちに話を聞いてみると、真の意味で助けてくれたモエちゃんと違って、命令ばかりで基本的に自分たち下っ端の前に姿を見せず、なおかつ一般人を巻き込む方法を取る『マギウス』たちが信用できないとのこと。

それでも『マギウスの翼』に属しているのは、自分の命が惜しいという魔女化に対する恐怖心と、関わってしまった手前投げだすことができないという使命感、そして……『マギウス』と自分たちとの間にワタシがいるかららしいのです。

ですので……灯花の言う最近の翼内での士気の低下は当然のことでした。ワタシですら、『マギウス』に対する疑念があるんです。

そんなワタシを信じてついてきてくれて、なおかつ本当の希望であるモエちゃんの影響を大きく受けている羽根たちが、今の『マギウス』のやり方に疑問を抱くのは至極当然だったのです。

ワタシはそのことをしっかりと説明しました。

ことあるごとに、今のやり方を正すべきだと、なるべく穏便に済ませることはできないのかと交渉しましたが……私の強い『マギウス』たちにはすべて却下されてしまい、結局溝は深まるまま。

現場でウワサを守っている魔法少女たちの中には、自分がやっていることの罪悪感に押し潰されてしまいそうな子も出始めてしまっ

いる始末。

それも全部含めて、ワタシはこの場で意見をしました。

「ふーん、そうなんだ。じゃあ、士気を上げるホーホーを考えないといけないなあ。面倒くさいなあ」

「……今までのやり方を是正する気はないんですね」

「みふゆ、悪いけど僕たちのやり方は変わらないよ。だからやり方を変えずに、みんなの士気を上げることが考えなくちゃいけないんだ」

……やはり、ワタシたち現場の意見は聞き届けていただけませんか。

効率は確かにいいんです。

ワタシが入った当初よりもエネルギーの回収効率も高まり、イブも成長しているんです。

それは喜ばしいのですが……最近はそのを求めるあまり、羽根たちのことを全く考えてくれなくなっています。

非常に論理的で機械的。

そのの悪いところがモロに出てしまっているのが今の『マジウス』です。

「そーだ！ いいことを思いついた！」

「……なにか閃いたんですか？」

正直、碌でもないことを思いついたのだろうなあと思いつつ灯花の提案を聞くことにしました。

この後、碌でもないを通り越した、とんでもない提案が出てくるとも知らずに。

「その神浜最強をこっちに引き込んじゃえばいいんだよ！」

「……はい？」

「……………」

軽い感じで簡単そうな口ぶりで難題が飛び出してきました。

今まで黙ってお茶を飲んでいたアリナは、その言葉を聞いてぴたりと止まり、灯花を睨んでいます。どこか見下しているような緑色の眼差しを向けていますが、そんなことはどうでもいいんです。

今、灯花はなんといいましたか？

神浜最強……という言葉に該当する魔法少女はただひとり。モエちゃんこと星奈百恵です。

そのモエちゃんを、勧誘しろ……と？

「なるほど。現状士気が低下している傾向にある魔法少女の大半が、星奈百恵に恩のある魔法少女ばかりだからね。それなら星奈百恵を勧誘してしまえば済む、ということか。名案だよ、灯花」

「くっふふ、そーでしょー？」

そんなわけではないでしょう！

「モエちゃんがこちらに来ると、本気で考えているんですか？ モエちゃんに『マギウス』のことを知られるのがどれほど恐ろしいことか、わかって言っているんですか？」

どの組織にも属さないし、肩入れすることもない。

それは四年前からモエちゃんがずっと守ってきた鉄則です。

それを貫き通しているモエちゃんが……こんな、非人道的な行いに片足どころか堂々と踏み込んでしまっている現状の『マギウス』に加担するなんて到底思えません。

灯花たちが依頼を出したとしても断られてしまうどころか、即座に神浜の敵認定された挙句粛清されかねません。

だからワタシたちは、敢えてモエちゃんに手を出さないようにしていたんです。

いくら灯花たちが便利で強力な魔法を使えると言っても、モエちゃんの強さは次元が違います。

加えてモエちゃんは日に日に強くなっています。

最後に会ったのは魔法少女の真実を教えてくれた時ですが、今はそれ以上の力を持っているに違いありません。

町に蔓延っている大魔女以上に成長したイブですら、赤子の手を捻るがごとく倒してしまうことでしょう。そうなってしまうえば、お終いです。

「確かにわたくしたちがお願いしても聞いてくれないだろうねー。でもちゃーんとみふゆたちが説明してくれるなら、聞く耳くらいは持つてくれるんじゃないかによー？」

「！それは……」

灯花が言っていることを要約するならば……モエちゃんと交流の深いワタシと、モエちゃんに恩を感じている羽根たちを盾にしてモエちゃんを引きずり込め。

そういうことなのでしょう。

いくら完全中立を謳っているとしても、それは神浜の魔法少女を救うため。

それなら『マギウス』は神浜どころか全世界の魔法少女を救済しようとしているのだから、やろうとしていることは同じだと。

さらにワタシや羽根にそれを説明させることで、モエちゃんをその気にさせることができるんじゃないかと、そう言っているんですよ。

「確かに、そうすればモエちゃんを勧誘できるかもしれませんが。ですが！」

モエちゃんが真に『マギウス』がやっていることの実態を知ったらどう動くか。

かつてのモエちゃんは、西のまとめ役だったワタシとやっちゃんを挑発して、リーダーの器があるかないかを見極めていました。

そして害になると判断したなら排除して自らがトップに立とうと考えてしまうような苛烈な一面もあるんです。

「それはあくまでも傭兵になる前の話でしょー？ わたくしたちは傭兵として雇うんだよ？ 傭兵が主人に逆らうなんてありえないんじゃないかによー？」

「確かにモエちゃんは頼まれた依頼をきっちりこなしますが……！」

どこまでもモエちゃんを軽んじた発言に少しイラッと来ます。

ここに他の羽根たちを連れてこなくて正解でした。連れてきたら内部分裂が起こっていたでしょう。『マギウス』と『マギウスの翼』による全面戦争とか笑えません。

「なら大丈夫だよ。それでもダメなら『記憶キュレーター』のウワサを使って洗脳しちゃえばいいんじゃない？」

「それは絶対にダメです！ そんなことしたら一発で『マジウスの翼』が瓦解します！」

「じゃあ正攻法で説得するしかないねー。んじゃ、そういうことで、あとはお願いなねー」

「ちよつと、灯花!?!」

結局、その日の定例会はそれでお開きになりました。

ワタシに課せられた任務は、モエちゃんこと星奈百恵を『マジウスの翼』に引き込むこと。

それを他の羽根たちがいる前で発表しました。

「ええっ、あの星奈百恵さんを勧誘するの!?!」

「そ、それは無理なのは……」

「観鳥さんもそれはさすがに厳しいんじゃないかなーって思うんだけどな」

白羽根の筆頭である天音姉妹、そして情報収集が得意な観鳥令みどりりょうさんが真っ先にそれは厳しいと主張。

それに続くように、多くの羽根たちが、味方に出来たら心強いけど来てくれる未来が見えないと主張します。

一方で、モエちゃんがこちらに来ることを反発する子たちも出てきました。

この子たちはモエちゃんにあまりいい感情を持っていない子たちですね。少数ですが、モエちゃんのことを嫌う魔法少女は存在します。

縄張り意識が強く、モエちゃんの活動を良しとしない西の中堅魔法少女の一部である彼女たちは、モエちゃんが組織に与える影響があまりにも大きすぎると反論。

ですがもう決定事項であり、『マジウス』からの直々の命令だということ伝えると……すぐに黙り込んでしまいます。

フード越しに顔を歪めている子たちが多いですね。自分たちが受けている扱いをモエちゃんにも受けさせようとしている『マジウス』が許せないけど、助かるためには従うしかない。そう考えているんでしょう。

「ですが……どうすれば、星奈百恵さんをごちらに引き込めるのでしょうか？ あの方は完全中立でございましょう？」

「一応、抜け道はあるんです。モエちゃんが活動するのは、この神浜の魔法少女を救うため。ですので、それを盾にすれば……届く可能性があります」

「え、それってつまり……ウチらを盾にしろって言っているの!？」

「……はい」

情けないことに。

ですがそれが一番モエちゃんを動かすことができるカード……というか、完全に最後の切り札です。ワタシたちにはそれしか、手札がありません。

「明日、早速ワタシはモエちゃんに会いに行こうと思います。多分、調整屋の近くで待ってれば会えるはずですよ」

モエちゃんが調整屋に行く時間は決まっています。

ですので、それを狙って動けばほぼ間違いないくモエちゃんと接触できます。

「みふゆさんは、本当に星奈百恵さんに継ろうと思っているのかい？」

『マギウス』の三人の言いなりになっているんじゃないですか？」

令さんがワタシを訝し気に見てきます。

この子は『マギウス』を一切信用していません。

ただ解放されることを目的に属していますので、ここでワタシが『マギウス』の言いなりになってしまうことが面白くないのだと思います。ワタシだって、言いなりになるつもりなんてなかったんですよ。

ですが……ワタシは少し『マギウス』に関わりすぎました。

灯花の実家に援助してもらっている身ですので、あまり強く出ることができません。

だからこそ。

「はい。ワタシは自分の意志で、モエちゃんを勧誘しようと思っています」

「その心は……」

「モエちゃんの力なら……今のこの現状を変えられると信じているからです」

モエちゃんはワタシと違ってなんの縛りもありません。

加えて、頭が回る人格者でもあります。

モエちゃんがこちらに来てくれれば、性格上モエちゃんは物怖じすることなく、『マジウス』に直談判しに行くことでしょう。ワタシたちを助けるために。

そうなれば、さすがの『マジウス』も耳を傾けざるを得ません。

モエちゃんに喧嘩を売るのは本末転倒ですし、いくらなんでもモエちゃんに勝てるなんてことは考えていないでしょうから。

「それはつまり……星奈百恵さんにすべてを託す、そういうことでございましょうか？」

「はい」

結局、他人任せにしてしまうのはワタシが弱いから。ですが、背に腹は代えられません。

今この状況を打破し、より良い方向に進むためにはモエちゃんは必要不可欠。最終的な戦力としても周りに齎す影響力も、モエちゃんに頼るのが最適です。

「どう思ってもらっても構いません。ですが、ワタシはもう覚悟を決めました。この身を、心をモエちゃんに差し出しても、モエちゃんをここに呼びます」

「……もし失敗したら？」

「そんなことは考えていません。どんな手を使っても、モエちゃんを手に入れます」

「……っ」

多分ワタシは、酷い顔をしていると思います。自分でも凄いことを言っている自覚がありますから。

ですがもう、後戻りはできないんです。

他人任せな、弱い上司と思われるのが知ったことではありません。

プライドなんかよりも、ワタシは自分の命の方が惜しいんです。

「それなら……ウチらも連れて行ってください」

「ひとりで行くよりも、私たちもいた方が成功できると思います」  
そう言つて、天音姉妹がひぎを折る。

それに続くように令さんが、そして……九割ほどの羽根たちが膝を折っていました。みんな私についてきてくれる、ということでしょう。

そうじゃない子たちは……多分モエちゃんが嫌いな子たちですね。

「観鳥さんは明日、別用があるから行けないけどさ、何人か声をかけておくよ。あの神浜最強が手を貸してくれるってさ」

「令さん」

「だから……絶対に連れてきてくださいよ」

「……任せてください」

ワタシの弱さを知つて、そして覚悟を知つた上でもついてきてくれるなら、成功あるのみです。

必ずや、モエちゃんを手に入れる。

ワタシはそう心に決めました。

次の日。

夕方の調整屋付近の路地裏で身を潜めていますと……出てきました。

なぜか髪の毛が真っ白になっていますが、あの背格好に、青みのかかった瞳、そしてアホ毛に尻尾ヘア―は間違いなくモエちゃんです。

「……お久しぶりです、モエちゃん」

「む？……おお、みふゆではないか！ 久しいのう、息災じゃったかの？」

にっこりとした笑顔を向けてくるモエちゃん。

「まあ、はい、それはなんとか。その……ついてきてもらつていいですか？ あまり他の人に聞いてほしくない話をしたくて」

「ふむ、良かろう」

「ありがとうございます」

なんとなくワタシの気を汲んでくれたらしいモエちゃんは素直に



従ってくれました。

あとはモエちゃんをみんなが待つ場所に連れて行くだけです。

着くまでの間、モエちゃんに『マギウスの翼』と『マギウスの翼』についての説明をしておきましょう。

「モエちゃん。ワタシは今、『マギウスの翼』という組織にいます」

「『マギウスの翼』？」

「はい。魔法少女の運命である魔女化を防ぐための組織です」

「ほう……それは素晴らしい組織じゃのう」

「つつこり笑っていますが……先程ワタシと再会した時とは全く違います。」

目が全然笑っていません。明らかに怪しんでいることがわかります。

「今のこの神浜で、魔女になる魔法少女は現れることはありません」

「なぜ、そう言い切れるのじゃ？」

「この神浜には、すでに自動浄化システムの結界が張られています。ですので、たとえ限界までソウルジェムが濁り切ったとしても、魔女にならず、代わりに別の形で浄化されるようになったんです」

「ほう。して、その別の形とは？」

「ワタシたちはドツペルと呼んでいます。ドツペルは穢れによって顕現した力です。一時的ですがそれを使えば絶大な力を発揮できますし、その後はソウルジェムが綺麗になるんですよ」

「ほう……それは素晴らしいシステムなのじゃな」

……システムの効力については疑っていないみたいですね。

「どうやらワタシの話し方から、本当のことだと確信しているみたいです。すぐにそう判断できる頭の回転の早さも変わっていません。」

「着きました」

「……これは随分と、歓迎されたものじゃのう」

目の前にいる白と黒のフードを被った集団を見ても、余裕そうに笑うモエちゃん。

「多分一斉にかかってこられたとしても迎撃できる自信があるのでしよう。」

「この方が……星奈百恵さん!」

「神浜最強の!」

そして、前の方にいた天音姉妹がモエちゃんを見て驚いていました。

そういえばこのふたり、モエちゃんのこととは知っていたみたいですが、実際に会ったことはなかったらしいですね。

確かに、モエちゃんを初めて見た人はそういうリアクションになっ  
てしまうでしょう。

「あなたは……! あの時本当にありがとうございました!」

後ろに控えていた黒羽根のひとりフードを外して、モエちゃんに  
頭を下げていました。

確か彼女は七瀬ゆきかさんでしたか。

どうやら彼女もモエちゃんに助けられた魔法少女だったらしいで  
すね。

「む? おお、お主か。一年ほど前だったかの? 一気に三連戦もし  
たからよく覚えておったよ。すまんのう、あの方は急いでいたもの  
じやから碌に挨拶もできなかったの」

「いえー 本当に助かりました! あおのときはグリーンフシードも譲っ  
ていただいて……ありがとうございます!」

「うむ、よいよい。お主が元気でいてくれただけで、充分私も嬉しいか  
らのう」

頭を下げたゆきかさんを、モエちゃんは優しく撫でていました。

相変わらず、人を墮とすのが上手い人です。ですがこういうところ  
が……モエちゃんの良いところなんですよ。

ですからワタシは……ワタシたちは、そんなモエちゃんの力が欲し  
いんです。

「モエちゃん、ワタシたちはあなたに仕事を依頼したいのです」

「仕事の依頼、か。一応聞いておこうかの。なんの仕事じゃ?」

「ワタシたちの仲間になってほしいんです。この自動浄化システムを  
全世界に広げる手助けをしてほしいんです」

直球でワタシは仕事をモエちゃんにぶつけました。

ですが、モエちゃんは溜息をひとつ吐いて首を横に振ります。

「お主は知っておるじやろう？ 私がどの組織にも属すことはない。申し訳ないが、その依頼に応えることはできません。……今日のことはずべて忘れるとしようかの」

そう言つて踵を返そうとします。

こうなることは百も承知でした。ここから……ここからが本番なんです。

今のモエちゃんの断り方はあくまで事務的なもの。それなら感情で訴えるのみ。

モエちゃんは『マギウス』たちと違って合理主義者ではありません。ですので、ワタシたちの覚悟を見せることさえできれば……ワタシたちの叫びを聞いてくれれば、チャンスはあります。

「……モエちゃんならそう返してくると思いました。ですがここで諦めるわけにはいきません。覚悟を決めて、ワタシたちは来たんです」  
「……覚悟、とな？」

帰ろうとして、背を向けていたモエちゃんの動きが止まりました。やっぱり、非情にはなり切れなかったみたいですね、モエちゃん。

「はい、覚悟です。ワタシたちは自分たちが救われるためなら……この魔法少女の運命から解放されるためなら、なんだってする覚悟があります」

「ほう、なんだって、か」

「はい。なんだって、です」

ワタシが返すと……モエちゃんはこちらを振り返りました。

「それならば、お主らは私になにを差し出す？ こちらも商売じゃ、慈善事業ではない。傭兵に仕事を依頼するということは、それに見合う報酬を差し出さなければならん。ましてや、お主らの依頼は明らかに私の完全中立を揺るがす程のものじゃ。生半可な報酬では、私は動かぬぞ」

「それは承知していますよ」

多分モエちゃんが断った理由のひとつは、ワタシたちがモエちゃんに報酬を支払えないと思ったから。

モエちゃんは公平性を保つために通常業務以外の仕事の依頼に対しては、必ずそれに見合う報酬を要求する。そして、ワタシたちの依頼は掟破りのもの。

これ以上もないほどのものを差し出さなければ、釣り合わないような、そんな依頼でした。

「ほう？　ならば聞こうか。この依頼を受けるとして、お主たちは私になにを差し出す？」

来ました。

この問いかけが来たということは……受けてくれる可能性があるということですよ。

そして、言い回しや言葉を慎重に選ばないといけません。

モエちゃんは細かいところまで吟味しますので、少しでも間違えてしまえば、今度こそ見切りを付けられてしまいます。

もしかしたら、このまま『マギウス』の元まで乗り込んで粛清してしまうかもしれません。

これはモエちゃんから与えられたラストチャンス……絶対にものにします。

大丈夫です。昨日のうちに言うべきことは全て考えてあります。

ワタシは膝を折って、モエちゃんと目を合わせます。

小学生並みの身長のもエちゃんですが、膝を折ってしまえば必然とこちらの方が低くなります。

モエちゃんに下に見られるように背を少し丸めて、そして報酬を言います。

「ワタシたちの全てを……ワタシたちの忠誠をモエちゃんに捧げます。それが報酬です。ですから……どうか。どうか、ワタシたちに力を貸してください……！」

「……………」

瞬間、ワタシの後ろで控えていた天音姉妹が、ゆきかさんが、そして全ての白羽根、黒羽根たちが一斉に跪いて頭を垂らします。

それを見たモエちゃんは……瞑目しました。

「ワタシたちにはモエちゃんが必要不可欠なんです！　ワタシたちは

こんなことで死にたくありません、魔女になりたくありません！ 自分勝手なのは承知の上です！ でも、それでも助かりたいんです！ ですからどうか、どうか……弱いワタシたちを助けてください……！」

ワタシたちがモエちゃんに差し出せるのは、この身とこの心だけ。助かるのなら、神浜最強にすべてを捧げても構わない。それくらい、ワタシたちにとってモエちゃんが必要なんです。

ワタシはそれを声いっぱいにして訴えました。

これでダメなら……文字通り、身を削つてでも、モエちゃんをこちらに引き込みます。

失うとしても命よりは軽いものです。

30秒くらい経つたのでしょうか。

しばらくして目を閉じて、動きを止めていたモエちゃんはゆっくりと目を開いていきます。

「私のは、もう少ししたら引退する身だったのじゃ。自慢の弟子が頑張ってくれているからの。ゆつくりと過ごすつもりだったのじゃ。……じゃが、引退する前に少しだけ、一肌脱がせてもらおうとするかの」  
そして……変身したモエちゃんは、その巨大な剣を左腕一本で担ぎ、ワタシに右手を伸ばしつつ、ふわっとした笑顔を見せてくれました。

……ああ。

「あい、わかった。お主らの覚悟、しかと受け取った。私に任せるのじゃ。私がお主らを……助けてみせるからのう」

「……はい。よろしくお願いします」

ワタシはその手を握りました。

凄く小さくて細い手でしたけど……それ以上に温かくて、大きく、安心感を与えてくれる、その手を、掴むことができたんです。

ワタシたちは……大きな希望を手に入れました。

中立を維持してきた、神浜最強の切り札……全ての魔法少女の希望の星、『大傭兵』星奈百恵が『マギウスの翼』の事実上のトップとして、君臨することになったのです。

これで……ワタシたちは救われる。

この場で神浜最強に忠誠を誓ったワタシたちは揃って、『マギウス  
の翼』を設立して以降、初めて希望の光を見たような気がしました。

## RTAパート14 マギウス

『マギウスの翼』を百恵ちゃん好みに調教するRTAはーじまーるよー！

前回、ようやくみふゆさんが接触してきてくれました。

そしてこちらの目論見通り百恵ちゃんに忠誠を誓ってきてくれたので、これで『マギウスの翼』を好き勝手動かすことができます。

ガツバガバの警備体制敷いて手加減して情報漏洩しまくってタイム縮めていつてやるからなあ？ 見とけよ見とけよ（人間の屑）。

といっても露骨にすると解雇されてしまうので程々にしますけどね。

さて、百恵ちゃんが『マギウスの翼』の雇われリーダーになったことでみたまさんに連絡を入れないといけません。

これから百恵ちゃんは『マギウスの翼』専属調教師になるので、仕事は一切受け付けられなくなります。なので百恵ちゃんが仕事に行けない旨を伝えておきましょう。

放置してもいいのですが、そうすると今まで積み重ねてきた百恵ちゃんに対する信頼度が落ちたり、心配して百恵ちゃんを探し始める魔法少女が出てきてタイムロス&ガバに繋がるので、しっかり連絡を入れましょう。

ちなみに正直に話すか、適当に誤魔化すかの分岐がありますが、みたまさんの場合は素直に本当のことを話しておきましょう。

みたまさんは完全中立ですし、秘密は他にバレるまで守っていてくれるので、百恵ちゃんが『マギウスの翼』に雇われたとしても誰かに言いふらしたりはしません。

いうわけでケータイ取り出しポパイペ。

あ、みたまさんオツスオツス。

「モモちゃん？ どうしたの？」

ちよつと長期の仕事が入っちゃったから傭兵業は休業させてもらうぜ。

え？ 誰に雇われたんだって？ 『マギウスの翼』って言うんだぜ

！

「そう……分かったわ。でもあまり無理をしちゃダメよ？」

大丈夫だって安心しろよ。ヘーキヘーキ、ヘーキだから。

あつ、そうだ（唐突）。

ついでに百恵ちゃんが仕事できないこと、やつちゃんたちに伝えておいてくれない？ 『マギウスの翼』のことは伏せてな！

「……いいわ。みんなには黙っておくわよ。モモちゃんも上手く動いてね」

ありがとナス！ じゃ、そういうことであばよ！

みたまさんが好感度トップなので、ここからやつちゃんやみやー先輩たちに百恵ちゃんが傭兵業の長期休業をすることを広めてくれます。これで姿を晦ましても百恵ちゃんを探しに来る魔法少女は現れないでしょう。

仕事も全部かりんちゃんやんがやってくれますし、そもそも百恵ちゃん、ここ数ヶ月間仕事ゼロで廃業間近でしたからね。悲しいなあ。

さて、引継ぎが終わりましたので、新しいクライアントの所に行きましょう。

雇われた身とはいえ、忠誠をもらっちゃった百恵ちゃんは今や『マギウスの翼』のトップです。

正式に就任したことを組織内に広めるための演説をするようにみふゆさんから頼まれたので、それをこなします。

北養区にある『マギウスの翼』の本拠地『ホテルフエントホープ』の入り口、後の柎（いりぐち）桜子ちゃんこと『万年桜のウワサ』の場所はみふゆさんから聞いていますので、そこに向かいますよう。

オッス！（到着）

「待っていました、モエちゃん。こっちです」

そして一気に目的地にジャンプ！ わあ、これが『ホテルフエントホープ』ですかー。色んな施設がありますねー。こんなに広いとは思わなかったあ。

ここは本館で、向こうに議事堂、地下には聖堂があるんだ。後で、そこへ行くよ。



さあ、『マギウス』の本拠地に到着しました。

裏切った後手早く脱出するためにマップを作って……いや待てよ？ 百恵ちゃんの馬鹿力があれば余裕で突破できるやんけ。

じゃあ作らなくても大丈夫そうですね。余計な手間が省けました。

やつぱ……脳筋ルートの……チャートを……最高やな！

「モエちゃん、こちらに」

そしてみふゆさんにホイホイついて行きますと議事堂に辿り着きます。

ここは『マギウス』たちが演説していたあの場所です。はえ〜すっごい大きい……。

さて、この演説イベントですが結構重要です。

失敗してしまいますと『マギウスの翼』を統率できずにチャートがガツバガバになってしまいますからね。

百恵ちゃんが有名な魔法少女だったとしても、長い間組織を引っ張ってきたみふゆさんを差し置いていきなりリーダーになってしまふと当然反発する魔法少女が出てきます。

仕込みとして傭兵業である程度のモブ魔法少女たちの好感度を上げておきましたが、ここにいる全員が全員百恵ちゃんに対する好感度が高いわけではないので、ここががちりと心を掴んで百恵ちゃんの手足にします。

事前準備は万端です。

みふゆさんから現状の組織内の不満やらなんやらを聞き出していますので、それについて触れる選択肢を選び続ければ大成功を引き当てられます。

みふゆさん曰く、最近の『マギウス』のやり方が過激になってきて耐えられない子が多くなってきたのだとか。

確か、最初はウワサもそこまで危険なものもは少なかつたんですね。『絶交階段のウワサ』とか『口寄せ神社のウワサ』とかはアレですが、比較的緩い感じのウワサがほとんどだったんですよ。

ですが効率を求めるあまりウワサの内容を少し変えたり札意満載のウワサを新たに作ったりとどんどんエスカレートしていつて、遂に

は『キレートビッグフェリスのウワサ』やら『フラワースピーカーのウワサ』やら物騒極まりないやつらが終盤に誕生してしまうわけなのですが……。

なるほど。『マギウス』たちがこんな感じのウワサを作り始めたのは、どうやらこの時期くらいかららしいですね。

で、今や『マギウス』の援助を受けてしまっている都合上強く当たることができないみふゆさんに代わって『マギウス』に物申すことができる人材が欲しかったと。

そこで白羽の矢が立ったのが百恵ちゃんだったと。

完全に都合のいい女じゃねーか百恵ちゃん！ 頭に来ますよ。こんなRTAじゃなかったらよほどの聖人じゃない限りガチギレ案件ですよ。

みふゆおまえこれがリアルでなくてRTAでよかったな。リアルだったらおまえはもう氏んでいるぞ。

というわけで気合を入れ直して演説イベントにイクゾオー！ デツデツデツデツ！（カーン）

皆さんご無沙汰しております。『マギウスの翼』専属調教師の星奈百恵と申します。

今までの羽根としての活動はいかがでしたでしょうか？

現状では比較的ブラックな社畜プレイが沢山取り上げられていたと思います。

これからは今までと一新したホワイトな社畜プレイをお見せしたいと思います。

今回調教する魔法少女は、マギウスっ！

頭のネジがぶっ飛んだおガキ様ふたりと、エキサイトしている芸術家。

まだ11歳と16歳のこの少女たちは、百恵ちゃんの調教に耐えることができるのでしょうか？

それでは、ご覧ください。

はい、演説イベント終わり！ 閉廷！ 以上！ みんな解散！ 評価は最高です。やったぜ。

それじゃあ早速『マジウス』たちに直談判御挨拶しに行きましょう。  
行動するのが早ければ早いほど、『マジウスの翼』全体の忠誠値が上がりやすからね。

そしてこちらで勝手に決めるよりも事前に物申しに行くことでただでさえ低くなるであろう『マジウス』たちの好感度を多少マシにできます。

低すぎるとアリナ先輩のおもちやにされたり（6敗）するので、少しでもリスクを回避する動きをしていきましょう。

てなわけでみふゆさん！ 『マジウス』たちの所に案内してクレメンス！

「わかりました。ついてきてください」

行きます行きます（食い気味）。

議事堂を出てフエントホープの地下室に向かっていきます。

ここ←はアレですね。

『幸福な魔女』もといエンブリオ・イブを捕獲してある地下聖堂ですね。凄い瘴気が漂っていますし、案の定エンブリオ・イブが鎖で吊るされています。

で、そんな気分が悪くなる場所で平気な顔をしてお茶会をしているやつらがいます。

三人は、どういう集まりなんだっけ？（記憶喪失）

「くふふっ。初めましてかにやー？ あなたが最強さん？」

人によっては釘宮病を発症させてしまう通称おガキ様、里見灯花さとみとうかが無邪気そのものな笑顔で手を振ってきます。ひとの質問に答ええない人間の屑。

ぶん殴ってやりたい衝動に駆られますが感情任せで殴りにいってはいけません。

シナリオ云々の前に、こいつはとてつもなく面倒な魔法である『エネルギーの変換』を使ってきます。

この魔法は灯花が認識したエネルギーを様々な形に変換できるというもの。

周囲のエネルギーを攻撃的なエネルギーに変えて超低燃費で攻撃

を仕掛けたり、有害なエネルギーをそのまま無害なものに変えて打ち消したりとかなり優秀。

周りにエネルギーが満ちていればいるほど効果が跳ね上がるので、エンブリオ・イブから漏れる穢れが充満しているこの場所で戦うのは非常に危険です。

おまけにこいつは貴重な空を飛ぶことができる魔法少女、かつ小学生ということもあって低身長なので、的が小さく百恵ちゃんの攻撃がほとんど当たりません。

さらに言うところには中距離・遠距離型の魔法少女です。

えーっと、つまりなにが言いたいのかといいますとですねえ……。

こいつ、百恵ちゃんの天敵のひとりなんですよね。

戦闘になると負けることはないでしょうが勝つこともできません。かなりの長期戦の末、運が良ければ勝てるかな程度に相性が最悪です。絶対に戦闘を仕掛けることができません。そんなことしたらタイム壊れちゃう。

ということまでこいつに喧嘩を売るのは、キャンセルだ。グツとこらえて今後ともよろしくしていきます。だからちやんとご挨拶しないよね。

『マジウスの翼』の新しいリーダーになった星奈百恵って言うんだ。よろしくな！

「わたくしは里見灯花。『マジウス』の1人だよー」

「同じく、僕は柊<sup>ひいらぎ</sup>ねむ。よろしく」

そしてそのおガキ様の隣にいる眼鏡の子がねむちゃんですね。全てのウワサの創造主です。

この子には後々お世話になるのですが、慣れ合うつもりはないので放置して大丈夫です。

というかこのふたりは今後のために低い好感度をキープしなければならぬので、戦闘に発展しない程度に喧嘩<sup>イチャモンつけて</sup>を売って嫌われていきましよう。

で、最後のひとり……。

「アリナ・グレイ。ふーん……」

百恵ちゃんを興味津々に観察してくる『マジウス』最年長……クレイジーサイコアーティストこと、アリナ・グレイ。

こいつの好感度が一番の問題です。

灯花やねむは好感度がリンクしているのですが、このアリナだけは独立しています。つまり自由人フリーのキャラです。

『マジウス』ルートで灯花とねむの好感度を最高にしてもアリナが言うことを聞かないせいでシナリオが崩壊した、なんて兄貴姉御はきつと少なくないはず。

本RTAでは灯花とねむの好感度を下げる一方、アリナの好感度をどうにかして一定以上をキープしなければなりません。こいつだけは管理をしっかりとしないと、いつ牙を剥いてくるかわかったもんじやないからです。

そして、アリナの初期好感度が決まるのは、プレイヤーキャラとアリナが初めて邂逅したまさに今、この時です。通常は補正が入ってから初期好感度が決定するのですが、唯一アリナだけは初期好感度が決定してから補正が入る特別仕様（半ギレ）なので、初期好感度が低いといくら周囲の好感度を上げていたとしても無駄に終わります。

それに加え、難易度ハードですとアリナの好感度は完全なマスクデータに設定されていて、日々変動し続けている特別仕様（ブチギレ）にされるので、高いのか低いのか全く分かりません。やめてくれよ……（絶望）。

しかーし！ 先駆者兄貴姉御たちの活躍で、初期好感度に関する見分け方は判明しています。

アリナの初期好感度の見分け方は非常に簡単。

ゴミを見るような視線を向けて終わりなら低く、つまらなさそうに返事を返して終わりなら普通、そして「アハッ」とヤベー笑いを上げて終わりなら高いという三パターンに分類されます。

低いのは論外で、高すぎるとアートのしようど襲い掛かってくるのでダメ。狙いは普通です。ここを乗り切ってしまうばいくら好感度を上げてても、作品にするために襲い掛かってくることはなくなりませんからね。

さあ……判定はいかに!?

「……………」

……? あれ? シーンが進んだということは好感度が決定した証拠なのですが……終わりででしょうか。

なんでしよう初めて見る反応です。ダンマリでした。

というかまだ百恵ちゃんのことをガン見しているんですが。ナズエミテルンデイス!

「で、用件はなにかにやー?」

おっと、アリナのことは気になりますけどとりあえず置いておきましよう。

おガキ様から質問されて選択肢が出てくるはずですので齒に衣を着せずに直談判しましょう。

まずうち(マギウスの翼)さあ……文句……あんだけど、聞いてかない?……て、あら? あらら?

あれ? おかしいねコントロールが利かないね。

ちよつと待って! 百恵ちゃんの手で操作できないやん! どうしてくれんのこれ。直談判したかったからマギウスの所に来たの! ガバ……ガバが起きちゃったの? この中の中(乱数)で? 難易度ハードつつつてもコントロール奪取はあかんやろ。わかる? この罪の重さ(哲学)。

これはちよつとテキストを読んで確認しないとダメみたいですね。ってあれ? というか百恵ちゃん? なんか滅茶苦茶ブチ切れてないかい?

えっ、ちよつ?! なに変身してんのあんたって待て待て!

突っ込むな剣を出すな灯花を頃そうとするなやめろやめろやめろわーっ!?

なんてこった。

まさかここまで来てリセとは……はあくつつかえ。やめたらこのチャート。

百恵ちゃん、君には失望したよ。

「……………」

て、あれ？ 生きてる〜!! (灯花が無事に) 帰ってこれたよ〜  
アーツハツハツハツハツハ！ 帰ってこれた〜ハツハツハツハツハ  
！ 生きてる〜！ 帰ってこれたよハツハツ生きてる！ ハツハツ  
！ あ〜生きてるよー！

ハア〜〜〜 (クソデカ溜め息)。

ほつ。で、今一体何が起こったのでしょうか (困惑)。

寸止め？ いや、これは違いますね (反語)。

百恵ちゃんは大剣を振り下ろした……ように見せかけて、ぴつたりと刃が灯花の首に当たるように出現させただけです。もし振り下ろしていたら、実際に斬っていなくても剣圧だけで灯花ちゃんの首は吹き飛んでいましたからね。

ブチ切れているようでしたが……理性が残っていたみたいで本当に良かったです。

百恵ちゃん、俺は信じてたで (掌クルー)。

「っ！ いきなり何をしているのかな君はっ……」

いやっ、違う！ 今のは百恵ちゃんが勝手に！ (なにも違ってない)  
い)

というかこんなことは初めてです。

面倒なので倍速処理していたので気が付きませんでした。なにか地雷でも踏んだんでしようかこのおガキ様は。

「もう！ だからあれはもう魔法少女じゃないって言ってるじゃない！」

あつ、これかあ！ (原因) 百恵ちゃんが激怒したのはエンブリオ・イブを見たからですな。

百恵ちゃんはずっと魔法少女を助ける活動をしてきましたから、雇われた組織の上層部が魔法少女を半魔女にして利用しようとしていることが許せなかったのでしょうか。それで傾す気はないとはいえ本気で抗議したと。やべえ。

あれ、いや待てよ。でもこれは逆においしいパターンなのでは？

こちらとしては百恵ちゃんとマギウス (アリナを除く) とは対立するような関係を作りたかったわけですし……うん、おいしい！ (再認)

識)

なーんかまだコントロール奪われたまんまなんですけど、マジウスを  
粛正することはなさそうなので倍速にはしませんが安心して見てい  
られます。百恵ちゃん、激情に駆られて即断罪するような性格じゃな  
くてよかったです。

「そ、そう。じゃあ好きにすればいいんじゃないかにやー？ できる  
ものならねっ！」

頬を膨らませてそっぽを向くおガキ様。ファーストコンタクトは  
完璧だな！

おっ、コントロールできるようになりました。イベント終了です  
ね。

流し読みしていましたがこちらの意向は全て通りましたし、好きに  
動いてもいいという言葉も取りました。

そして灯花とねむのこちらに対する好感度は間違いなく最悪です。  
途中ヒヤツとしましたが、こちらの望む通りの展開になって一安心。  
アリナの好感度だけ気になりますが……ま、まあ、大丈夫でしょう。  
さて、挨拶は済みましたので早速戻りましょう。仕事がいっぱいで  
す。

んじやな、マジウスのみんな！ これからも仲良くしような！  
(すつとぼけ)

じゃあ、行きましようかみふゆさん。

「は、はい。あ、あの……よろしくお願いします」

なんか滅茶苦茶顔色悪いけど大丈夫だって安心しろよく。

百恵ちゃん、もう怒ってないよ。だからヘーキヘーキ、ヘーキだか  
ら。

「ウエイト。星奈百恵、ちょっと待ってほしいワケ」

………

「ふたりで話をしたいカラ。……ついてきてくれるヨネ？」

アツハイ。ワカリマシタ。………

な、なんでしようこの展開は。

アリナの好感度について気になっていましたけど……まさかこんな



に早く動いてくるとは思いました。

有無も言わせないフィンキ（↑なぜか変換できない）だったのでりあえずオーケーサインをしてしまいましたが……よかったのかホイホイついていつちまって。アリナはノンケ<sup>人間</sup>だってかまわないで<sup>アートにする</sup>食つちまう人間なんだぜ？

まあ、今更選択肢を取り下げられませんし、大人しくついて行くつもりでしょう。

レアな反応をしていましたので気になって昼と夜しか寝られなかったところですからね。

で、あの趣味の悪い地下聖堂を出てフェントホープのとある一室に入るアリナ。

クオクオハア……アリナの部屋ですね。デッサンするための道具が一式揃っています。

……ここに連れてこられたということは百恵ちゃんに危害を加えようとしているわけではなさそうです。

この部屋はアリナにとって神聖な場所でもありますので、ここで争うようなことはしないはずです。

「そこに座ってほしいんだケド」

窓際にある椅子を指さしてきました。……ま、まさか！

この展開はもしかして……もしかするかもしれないよ？

「ねえアナタ……アリナのアートのモデルになってほしいワケ」

き、キタ——（。▽。）——！！

これは幻のルートを引き当てましたよ！

今まで数件ほどしか報告になかったレアケース、生きている状態の作品としてお気に入り登録されるルートです！

つまりアリナにとってのみふゆのような存在になれるルートですね！

このルートに進める条件はただひとつ、マスクデータとして伏せられているアリナが好むキャラのデータにピッタリと当てはまるキャラをキャラメイクすることです。

見た目は勿論、そのキャラの過去や実績、そして行動などの細かい

データをすべて見るので、たとえまったく同じようにキャラメイクをしたとしても少しでも違う行動をとった場合はすぐにルートから外されてしまいます。

それゆえに確定演出がないことから幻のルートと呼ばれています。邂逅時にアリナがこちらを観察してくるのは、コンピュータがプレイヤーキャラのこれまでの行動を精査しているから、なんて都市伝説ができるくらいにレアの中のレアケース！ それを引き当てることができました！ おまえのことが好きだったんだよ！

もちろん返答はイエスです。

即答してアリナの作品のモデルになりました。

「アハッ。じゃあ早速……付き合ってもらおうカラ」

オーケーオーケー！　じゃけんデッサン始めましょうね。

え？　これからやるのがいっぱいあるんじゃないのかって？

んなことあどうでもいいんだよ！　ここはアリナのために時間を使います。

アリナは基本的に交渉不可能の魔法少女ですが、ここまで気を許してもらえたならわがままを言っても通ります。

しかも自分にとって都合が悪いことじゃなければプレイヤーキャラの味方になってくれるので、マジウスの翼ルートを走るプレイヤーにとつてはこれほど頼りになる味方はいません。

この状態を維持するには、アリナがデッサン目当てで呼び出した場合必ず応じなければなりません。そのためタイムを使ってしまうのですが……そんなものは必要経費です。それに費やした時間で地雷原であるアリナを制御できるのなら安いものです。

さて、ここまで御膳立てしてもらったらあとはプレイヤーの腕の見せ所さん!?です。

こちらの望む形に『マジウス』を上手く嵌めこむことができそうなので、この関係を維持しつつ手を回していかなければなりません。

そのためにもとことんアリナに協力して、そして協力してもらおうとしましょう。

このアリナイベント中はスキップ処理をしなければ自由な会話が

可能なので、ここでパイセンと交渉していきます。

交渉するのは、魔女を育てる仕事について。

これはアリナが推し進めている仕事なので、やめるように進言すると好感度が一気にガタ落ちしてしまいます。そしてそれはおそらくですが、このルートに入っていたとしても適用されるでしょう。

なのでここでこの仕事を百恵ちゃんに一任するようにお願いをします。

この仕事が羽根たちの士気の低下に最も大きく作用しているので、これがなくなるだけで百恵ちゃんの支持率が上がります。

そして魔女を率先してアリナ好みに育て上げることで、アリナの好感度も同時に稼ぐまさに一石二鳥の交渉なのです。

「フーン。まあ、いいケド。アナタの腕なら魔女を狩らずに無効化することだってできそうだし」

おう、任されたで。

みんなには魔女を育てる仕事が撤回されたって言うけど……いいかな？

「アリナからはもう言わないし、他のふたりにもこの件に関しては口出しさせないカラ、アナタの好きにすればいいワケ。バット、仕事はちゃんとこなしてもらおうカラ」

やりますやります（食い気味）。

魔女をとっ捕まえることなんて朝飯前なんだよなあ。

アリナ好みの魔女を育て上げてやるからなあ？ 見とけよ見とけよ！

はい！ ということでキリが良いので今日はここまでにしましょう！

次回からは『マジウス』のお仕事編です！

まだ百恵ちゃん是有能なトップでいてもらうので、バリッバリ仕事して今後の展開に備えていきましよう！

ご視聴ありがとうございました！

## S i d e ・ 梓みふゆ 希望の赫怒

今日この日ほど、モエちゃんの恐ろしさを再認識できた日はありませんでした。

モエちゃん……星奈百恵が恐ろしい人間だということは分かっていたつもりだったんです。

魔女を一撃で成敗するほどの圧倒的な戦闘能力、ワタシとやっちゃんのおふたりを相手にして怯むどころか自分の意向を押し通してこようとする胆力、次々と人脈を作り上げて着実に味方を増やしていくカリスマ性。

その全てを兼ね備えた、まさに神浜最強の魔法少女であり、全ての魔法少女たちにとっての最後の希望とも呼べる存在。

そんな最強の魔法少女の勧誘に成功して……ワタシは少し浮かれていたのかもしれませんが。

「でかしたよみふゆ。あの星奈百恵を墮とすなんてね。むふっ」

その前日、モエちゃんの勧誘に成功したその日の夜。

ワタシは『マギウス』に報告をしました。

この日はアリナが来ていなかったので、灯花とねむのおふたりだけ。報告を聞いたねむは満足そうに頷きます。

明日はモエちゃんの『マギウスの翼』のリーダー就任式です。

狙いとしてまず挙げられるのはモエちゃんが正式にワタシたちに手を貸してくれると大々的に公表することで羽根たちの士気を高めること。

羽根たちのおおよそ七割強がモエちゃんを慕う『保守派』の魔法少女たちですので、モエちゃんが仲間になることを知れば間違いなく活気が付きます。

一割程度のモエちゃんのことを噂で耳にするくらいにしか知らないような新参の魔法少女たちも、神浜の魔法少女全員が口を揃えて最強であると断言する魔法少女が自分たちの味方に付いたと言われれば元気が出るでしょう。

そして次に挙げられるのは、モエちゃんを組織に加入させることを

拒絶している残りの一割弱の『過激派』の魔法少女たちに対する牽制です。

過激派は保守派の子たちと違って積極的に『マギウス』からの命令に従う傾向が強く、一般人に被害を与えることにほとんど抵抗がありません。

そしてその実態は、過去モエちゃんに盾突き制裁を受けて逆恨みしているか、モエちゃんの影響を受けて縄張りを侵食されたことに対して憤りを覚えている魔法少女たちです。

最近では「魔法少女は選ばれた存在だ」と掲げる魔法少女至上主義なんていうとんでもない思想を広めようとしてくる始末。

その考え方が新参の魔法少女たちを蝕んでいく一方、保守派の魔法少女たちからは強い非難の声が上がっています。

保守派の子たちは、「魔法少女になったのは自分の我儘であり自分が選んだ道だ」と考えていますので、魔法少女至上主義を掲げる過激派の子たちに対して何様のつもりだと嫌悪感を露わにしているんです。

正直ワタシもこの過激な主義に対して問題視していましたので、ここでモエちゃんがトップに立ってもらうことで過激派の子たちを抑制し、新しい子たちへの悪影響を消す、ということも狙っています。ワタシたちが忠誠を誓ってまでモエちゃんに『マギウスの翼』のリーダーになつてもらおうことを頼み込んだ理由は、なにも『マギウス』に対して強く物言いできる人物が欲しかったからだけではありません。

保守派と過激派による内部分裂を防ぐと同時に、過激派に楔くさびを打ち込むという観点からも、モエちゃん以上の適任者がいなかったからです。

「なんじゃ、魔法少女を救うと銘打っていないながら組織内での問題が山積みではないか。わかった。明日の就任式とやらで一手打つとしようかの」

溜息を吐きながら頼もしくモエちゃんは返してくれました。

ちなみにモエちゃんは組織内での問題と一括りにしていますが、こ

ここには『マギウス』の今後の方針についても含まれています。

モエちゃんは就任式の後に『マギウス』にも挨拶しに行くと言っていましたね。

有言実行、すぐに動いて手を打つあたりが流石です。

「明日はそのお披露目があるんでしょー？ わたくしたちはいつもの場所で今後の話し合いをしているから、終わったら連れてきてよねー。アリナにも声をかけておくからさ。くふふっ」

「はあ、わかりましたよ」

上機嫌な灯花がそう指示してきますが指示されるまでもなくモエちゃんが行く気満々なので問題はありませぬね。

明日ようやく肩にのしかかっていた問題の解決口が見えると、今夜はよく眠れそうだと思つてこの日はその場を後にしました。

この時、とんでもないミスを犯していたことに気付くことなく。

そして今日、ワタシは『マギウス』の拠点……『ホテルフエントホーブ』に招待しました。

北養区にある山の中、あたり一面は草原が広がっていて、中心には大きな桜の木。

その下に等間隔で置かれた四つの椅子には誰も座っていません。

風もなく花も咲いていないはずに絶えず降り注ぐ花びらたちは、地面に落ちる直前に消えてしまうので決して積もることはない。

「待たせたのう」

そこに私服姿で現れたモエちゃん。

昨日は余裕がなかったのでしたっかりとは見られませんでしたが、昔と比べるとなんとというか、落ち着いて見えますね。

髪の毛が全部白髪になってしまっていることにはすぐに気が付きました。霧囲気がだいぶ違います。

昔は強大な力のオーラのようなものを静かに纏っていました。今はそれがすっかり消え去っててなんというか、凄みがなくなっていました。牙が抜けてしまったかのようです。

「ここは実によい景色じゃ。心が落ち着くのう。季節のせいかな花が咲いていないのは残念じゃが、立派な桜じゃな」

「ふふっ、この桜は春になつても花を咲かせないんですよ」

「む？ そうなのか？ 普通の桜ではないとは思っておつたが、不思議じゃのう」

そんな話をしながら桜の元に近づくと……一瞬視界がぶれ、そして次に映り込んでくるのは広大な敷地面積を誇る巨大な洋風のホテル。背後を振り返るとそこには大きなアーチ状の門があるだけで、先程まであった巨大な桜の木はありません。

「ここがワタシたちの拠点——ホテルフエントホープです」

「なるほど、先の桜の木は所謂ワープポイントというやつじゃな。面白いことを思いつくものよ。にしても残影の希望とは……随分と皮肉の効いたネーミングじゃな」

そんなモエちゃんの言葉にワタシは苦笑して返します。だってそれ、最終的に名付けたのは誰でもないワタシなのですから。

確かに魔法少女の救済を謳う『マギウス』にとっては皮肉でしかありませんが、今は残影でしかない希望にしがみつくしかない『マギウスの翼』にはぴったりの名前だと思っています。

ですが……そんなフエントホープに紛れもない希望が降り立ったのですから、きつと良い方向に向かうはずです。

そんな雑談を交え今後の段取りの説明をしつつ歩くこと数分、ワタシたちは議事堂に到着しました。そこにはワタシの呼びかけに応じてくれた何人もの羽根たちが集まっていました。

全員フードを被っているので顔は見えませんが……保守派と過激派、そして中立を問わずほぼ全員が集まってくれているようです。

「これは歓迎されているようで何よりじゃのう」  
確実に狙っていたことでしょう。

少し大きめに発せられたモエちゃんの声が議事堂に響き渡り、ぱつと静まり返りました。

モエちゃんの声は良く通りますし、知っている人であれば今の声を聞いただけで誰の声なのかすぐにわかるでしょう。

それほどまでに強い印象と影響力をモエちゃんは持っているんですから。

モエちゃんはゆっくりと議事堂の中心を歩いて壇上に向かっていきます。様々な視線も物ともせず、ただ穏やかで静かな笑顔を浮かべながら。

壇上の足元にはあらかじめ踏み台を用意してありますので、背が低いモエちゃんもすっかりと堂内を見渡せています。

「みふゆさん」

「こちらでございませす」

みんなモエちゃんに釘付けになっていている間に、ワタシは場所を作ってくれていた天音姉妹たちの元まで移動します。

そこは壇上を一番よく見ることができるところで、隣には大きなカメラを持った令さんが親指を立てて陣取っていました。

「やりますねえ、みふゆさん。本当にあの星奈百恵さんを引き入れるなんてき。しっかりと記事にさせてもらいますよ」

ウインクしながらカメラの調整に戻る令さんに「よろしくお願いしますね」と短く返しました。

彼女に任せておけばこの場にはいない他の羽根たちにも新聞という形で伝わることになるでしょう。

「んっ、んんっ。——よし」

マイクの先をこつこつと叩いてチェックをしたモエちゃんが満足気に小さく頷いて議事堂全体を見渡しました。

始まりますか。久し振りに見る、生のモエちゃん劇場が。

「初めまして……という者は少ないかの？　じゃがまあ、一応簡単に自己紹介をしておこう。

私は星奈百恵という。こんななりじやが19歳の大学生。来年には大人の仲間入りじやな。

魔法少女歴は六年。四年ほどこの神浜で傭兵業をしておるよ。

この『マギウスの翼』の元代表である梓みふゆに依頼されたことにより、この私が『マギウスの翼』の新しい代表になった。

以後よろしく願いますのじや」

ああ、長い間見ていませんでしたがモエちゃんらしいスタートです。



最初はこんな感じで物凄くフレンドリーな形から入るんですね。緊張を解すためにわざと。声色すら気を遣って柔らかくして。

「さて……現状の『マギウスの翼』が抱えている問題については話を聞いておる。

まずはお主たちの上司である『マギウス』からの過激な仕事についてじゃな。それに関してはこの後に『マギウス』に挨拶しに行くから、そこで交渉するでしょう。

なーに、安心せい。部下が動かないと困るのは上司じゃ。私が代表になったからにはお主たちに辛い仕事はさせないと誓おう。——ただし」

そこからモエちゃんは声色を変え、そして笑顔を消して真剣な顔つきに変わりました。

「上の命令に意見するからには、上が想定している以上の成果を上げなければならん。そうでなければ組織というものは成り立たないからの。

精神的に辛い仕事は取り下げるように尽力するが、おそらく今後は活動が活発化し忙しくなっていくであろう。

よって、私はお主らの時間をいただく。

お主らの時間を全て管理させてもらおうぞ」

講堂内がざわめき始めました。

モエちゃんに対して非難の声が上がり、困惑してそわそわし始めています。前者が過激派で後者が保守派でしょうか。

ですがどちらも共通して、今のモエちゃんの発言をこう認識したのでしょうか。

——ワタシたちの自由を全て奪われてしまう、と。

……ですがこれをモエちゃんが口にしても仕方のないことです。

そもそも『マギウス』たちがあんな過激なやり方を追求したのは、現状ですと目的である魔法少女の解放までに時間がかかりすぎるから。だから効率の良いエネルギーの回収方法を模索し、その結果としてあのような方針を示してきたわけで、冷静に考えれば組織のトップとして当然のことをしているだけ。それを下っ端であるワタシたちが

反対することは本来あつてはいけないことです。

ですからモエちゃんは厳しく言っているのでしょう。

だったら違う方法で上が納得する成果を上げるしかない。

『マジウス』たちがエネルギー回収の手段として『効率』を取った。ですがワタシたちはそのやり方を望んでいない。

だから手段を変えてモエちゃんは『時間』を取ることにした。

『マジウス』が効率よく回収しようとしているエネルギーと同等かそれ以上の量を、今以上に働いて短期間で補填するという意味でモエちゃんはあのような発言をしたのでしよう。

「おそらく大半が学生であろうお主たちの自由な時間を奪ってしまうことの残酷さは重々承知しておる。

友達と遊びたいであろう、

勉強して将来を見たいであろう、

はたまた恋愛を楽しみたいであろう。

学生時代にしか出来ぬ無茶な青春というものを満喫したいのであるろうな」

目を瞑りながら言葉を紡いでいくモエちゃんは「じゃがのう」とさらに声のトーンを落とし、そして目を開きました。

そこには一切の笑顔がない。年相応……年長者に相応しく引き締まった、凜とした青い瞳を鋭く光らせていました。

「それ以上に……救われたいのじゃろう、お主らは？」

やがて魔女になるという、絶対に逃れることのできない魔法少女の運命から」

その言葉に、ざわめきが止まりました。それは紛れもない事実だったから。

友達と遊ぶのも、将来に夢をはせるのも、恋愛をするにしても、それは自分が生きていることが前提の話。

ワタシたちが『マジウス』に協力しているのは自分の命が惜しいから。

「ならば甘えるでない。

お主らは既に、一般人には到底起こすことのできない奇跡を起こし

てしまっておるのじゃ。

その奇跡の代償が魔女と戦い、

そして魔女となって呪いを振りまくことなのじゃよ」

事実だけを静かに語られ、その全てがワタシたちの胸に突き刺さります。

そんなの聞いていなかった。騙された。そんな言葉がつい口に出そうになりますが、「甘えるでない」という先程のモエちゃんの言葉がそれを許してくれませんでした。

「話を聞いてない？　嘘を吐かれた？　騙された？

甘えたことを考えるでない！

擁護するわけではないが、キュウベえは嘘を吐いていなければ騙してもおらんよ。

事実、契約は果たされお主らの願いは確かに現実のものになったはずじゃ。

ただ——全てを話さずほんの一部しか話さなかったただけでな。

もしもお主らがもつと慎重になり、根掘り葉掘り問い詰めていたのであれば彼奴は必ずそれを答えていた。彼奴はそういう存在じゃ。

ただ聞かれなかったから話をしなかった、

やつらにとってはそれだけのことじゃよ」

ただただ事実だけをワタシたちに突き付けていくモエちゃん。

「碌に契約書に目を通さず、事前に確認もせず、誰にも相談せず、あっさり甘い言葉を鵜呑みにし、後になって騒ぎ立てて後悔しているような間抜け。

契約の対価をもらっておきながら、履行を拒否しようとしている無責任な連中。

それが今のお主らじゃ。違うか？」

そして遂に、絶対に認めたくなくて目を逸らし続けていた現実を容赦なく、まるで深淵の底から出したような暗く低い声で告げられました。

その表情は今まで見た中で最も冷たく、比較的付き合いの長いワタシですら見たことがないようなものでした。……そうです。

ワタシたちはキュウベえに願いを叶えてもらっていないながら、キュウベえからの要求を拒絶しようとしているんです。実に都合が良いことしか考えていない人間です。

魔女化の事実を知りながら今も懸命に戦い続けている魔法少女だっているんです。

モエちゃんだってそのひとりでした。かつてのチームメイトだったももこも、そしてやつちゃんも。

「ふう。……まあ、厳しい叱責はこれくらいにしておこうかの。」

今までの言葉はただの一般論のひとつでありすべてが私の本心ではない、とだけ言っておこうか。

何不自由なく育った普通の子供であるお主らが、なんでも願いを叶えてくれるなんて言う存在に出会って、心動かないわけがないからう。

それを考慮するのであれば、キュウベえが悪いというのは強<sup>あがな</sup>ち間違っではおらぬな」

すっかりお通夜ムードになっていますとモエちゃんはそんなことを言っただけカラカラと笑います。

相変わらずずるい人です。あそこまで言っただけでそんな慰めの言葉を口にしますか。

今のこの心理状態であなたに堕ちない人なんていませんよ。

ですがワタシは騙されませんよ。

モエちゃんは全てが本心ではないと言っていました。裏を返せばどこかは本心なわけで、おそらくですがほとんど全てが本心なのではないでしょうか。途中にあったワタシたちへの罵倒を除いて。

「じゃがこれで分かったであろう？」

お主たちは既に願いを成就させているのじゃ。たとえそれが自分の思い描いていたものと違っていてもな。

そしてその代償から逃れたいと本気で思っているのであれば、遊んでいる暇などなからうて？」

さつきまでの冷たい雰囲気はどこへやら。

いつも通りの明るい口調に戻ったモエちゃんは小さく笑いながら

問いかけてきます。それに反論するような声は保守派からは勿論過激派からも出ません。……当たり前ですね。

あそこまで言われてしまつて「遊びたい」なんて反論するような命知らずの恥知らずはさすがにいないでしょう。

「分かつてくれたようだなによりじや。これからは忙しくなるぞ。

さすがに休みなしで働けなんて言う気は毛頭ないし、無理な仕事をさせるつもりもない。

時間をもらうと言つても雁字搦めにするつもりもないから肩の力を抜くとよいぞ。

編成についてはこれから調整して近いうちに公表するから少し待っていてほしいかのう」

そしてにつこり笑つてそう締めくくりました。

内容はまでもも言っていることが結構苛烈だったモエちゃんの方針はすっかりと羽根たちに受け入れられてしまいました。

おそらく『マギウス』たちもすっかりとこういう風に説明していれば、モエちゃんがいなくても纏め上げることができたのでしようね。

「私が掲げる方針に関しては以上じや。

じゃがまあ、これで終わるのも味気ないし、もう少しだけ話して終わりにするとしよう。

そう時間はかけぬよ。五分もかからんからもう少しだけ付き合つてほしい。無論、強制はしない。

この後なにか用事があるという者は退出しても構わぬよ」

パンつと手を叩くモエちゃんですが……誰ひとりとして席を立つ者はいません。……それはそうでしょう。

新しいリーダーの言葉だから以前の問題です。

なんといいいますか、モエちゃんの言葉には人を惹きつける力があるんです。

ですから不思議とモエちゃんの言葉は最後まで聞きたくなくなつてしまふんですよ。

黙つてモエちゃんの言葉を待つワタシたち。

それを見たモエちゃんは「結構」と少し嬉しそうに笑います。

そしてふうと一息つくくと、悲し気に目を伏せてゆっくりと語りかけられます。

「お主たちは自分たちの運命を知って絶望したであろう。」

どうしてもっと詳しく話を聞かなかったのか、誰かに相談しなかったのか。

この現実から逃げ出したい、そう思ってしまう弱い自分が許せなくて、自分の弱さを突き付けられて、辛かったであろう、悲しかったであろう、悔しかったであろうな」

それは、さつきまでのただただ事実と現実を突き付けてきた厳しい発言から一転した、ワタシたちの心に寄り添う優しい言葉でした。声色もふわりとされていて、温もりを感じます。

きつと保守派の子たちがモエちゃんを慕う理由は、この状態のモエちゃんに助けられてきたからでしょう。

ワタシは近くで何度も聞いてきたので慣れていたはずなのですが……思えばワタシ自身に向けられたことがなかったので新鮮で、そして身を委ねたくなってしまうような安心感に包まれていきます。

「じゃがのう、それでも、それでもじゃ。」

お主らはどのような理由や目的であれたったひとつの願いを叶えるために終わらない戦いに挑む覚悟をした。

魔女と戦ってほしい、そんなキウベえからの頼みを聞いて、一般人を魔女の脅威から守るために戦う、そんな強い覚悟を確かに決めたはずなのじゃよ、お主らは。

魔女になるなんて知らされていなかったとしても、お主らは危険を承知で、命懸けであることを承知で魔法少女になることを選んだ。

それはとても勇敢で素晴らしいことじゃと、

誇らしいことじゃと私は思うのじゃよ」

この場にいる魔法少女のほとんどが、そんなに自分に自信のない子たち。

力はあっても自分たちのやっていることに迷いがあるような子たちばかり。

そんな子たちにとって……自分たちが信じる絶対的な強者からの

全てを肯定し、自信をつけてくれるような言葉がどれだけ欲しかったことか。

「じゃから……お主らは嫌だったのであろう？」

『マジウス』たちが提唱する一般人を巻き込み、不幸にする、そんなやり方を。

自分たちのエゴを通すためだと自覚しているからこそ余計にの「  
そしてまさに今、自分たちが悩んでいるところにメスを入れてきま  
した。

「じゃがそれでも助かりたい、そう思うのであれば迷うな。

一般人を巻き込む方法でしか救いがないのなら、それに縋り、貫く  
しか生きる術がないのじゃ。

非人道的？ 好きに言わせておけ。

自分の命以上に大切なものなどこの世のどこにもない。

他にやり方があるのかもしれない？

偽善者の言葉に惑わされるな、そんなやり方があるなら苦勞はせ  
ん。

長く魔法少女をやっている私とて知らなかったことを緻密な計算  
の下で企画し現実のものにしようとしている『マジウス』を差し置い  
てどの口が叩くと笑い飛ばせ。

仕事で失敗したとしても責任は私が取ろう。嫌なことがあつたら  
私のせいにしても一向に構わんし、恨んでくれて結構じゃ。

じゃが自分のやるべきことだけは<sup>ゆめゆめ</sup>努力忘れるな」

これはモエちゃんの言葉であり……『マジウスの翼』のトップとし  
ての言葉。

今の『マジウスの翼』が必要としているものを引き出そうとする、と  
ても『力』のある、そんな言葉。

「これでももし、割り切ることができぬのであれば巻き込んでしまつ  
た人たちをお主たちの手で助け出すのじゃ。

今もそのウワサとやらが人々を不幸にしているのであろう？

ならばこんなところで燻っている場合ではあるまい？

そうであらう？」

その言葉で……明らかに皆さんの目付きが変わったことが伝わりました。

隣に座る天音姉妹も観鳥令さんも今までの不安そうな表情が消え、自分たちがすべきことをなになんでも実行する、そんな強い覚悟が決まったような顔になっていました。

そしてワタシも……改めて、モエちゃんに羽根たちを任せられると確信し、これからはモエちゃんの副官として動くことを決意しました。

「ああ、そうじゃ。ひとつ言っておこう。『マギウスの翼』に勧誘するときに、私の名前を出すことは固く禁じさせてもらうぞ。勧誘された者の意思を私の名で捻じ曲げることは許さん。もし発覚した場合は契約違反とみなし、私は降りる。これは絶対の掟じゃ」

モエちゃんを盾にして脅迫まがいに勧誘することを許さないと思いついたように釘を刺してきますが、おそらくこれが破られることはないと考えます。モエちゃんが就任して喜んでいるであろう保守派はモエちゃんの言うことをしっかりと聞くでしょうし、邪魔に思っている過激派もさすがにモエちゃんを敵に回すような命知らずな真似はしないでしょうから。

「ごりやあ、新聞が外部に出回らないように相当気を使わないといけないねえ」

小さな声で「参った参った」と言う令さんですが、その声はとても楽し気です。

ワタシを信じてモエちゃんを連れてくることに賛同してくれましたけど、その実組織が無事に機能するかを心配していましたからね。

新しいトツプモエちゃんが自分たちの上司に相応しい人間だと認識して、これから楽しみでしょうがないのでしょうか。

「先も言ったがこれから私は『マギウス』と話をつけてくる。

そしてその後具体的な活動について精査し決まり次第連絡するでしょう。

それまでの間、お主らも自分のやるべきことを模索してほしい。



要望は可能な限り応えようと思うし、意見があれば必ず耳を傾けると約束しよう。

お主たちの働きを期待しておるぞ。

……以上で私の話は終わりじや。

付き合ってくれたこと感謝するのじや」

モエちゃんが締めくくって軽く頭を下げると、行動から大きな拍手が沸き上がります。

……さすがモエちゃん劇場です。がちりと羽根たちの心を驚掴みにしました。

それに加えて遠回しに過激派に対する牽制もしていたこともお見事です。

あれだけの確に事実を突きつける発言をしていれば、魔法少女至上主義なんて絶対に認めないと断言しているようなものですし、新参の魔法少女たちもそんな思い上がった考えを抱くことはなくなることでしよう。

自分をトップとして認めさせ、方針も決まり、過激派を牽制し、羽根全体の志気を上げる。

その全てにおいて完璧に近い演説でした。

「行くぞみふゆよ。『マジウス』の所に案内してくれんか」

壇上からワタシを見つけていたのでしよう。

一直線にワタシの元に来たモエちゃんがいつもと変わらない穏やかな表情で促してきました。

初めてモエちゃんに名前前で呼ばれましたが……これも狙ってやっていますね。

調整屋の八雲みたまという例外はありますが、モエちゃんが他人を滅多なことじやない限り名前前で呼ばないことは割と有名です。

そんなモエちゃんがワタシを名前前で呼んだ。これを聞いた周囲がどう認知するのか、簡単に想像できます。

モエちゃんが前のトップであるワタシと組んで本気で『マジウスの翼』を引っ張っていくと改めて認識させる、それが目的でしょう。

地味ですが繰り返し返して自分たちの味方になったと思わせて士気を

高めようとしています。

こういう細かいことを積み重ねていつてモエちゃんは、今の広い人脈と厚い人望を勝ち得ていったんですね。

「わかりました。ついてきてください」

そんな人垂らしの権化に魅了されている人間のひとりであるワタシはモエちゃんを『マギウス』の元に案内し始めます。

……ここで気が付くべきだったんです。

『マギウス』たちが果たして、どんな場所でモエちゃんを待っているのかを。

「……なんじゃこの酷い瘴気は」

「この先に、『マギウス』とこの計画に重要なものがあるんですよ」  
「ほう」

ここを初めて訪れる人たちと変わらない反応をするモエちゃんを見て、やっぱりこの瘴気に対して不快感を抱くんだなど、そこについてはワタシたちと変わらないんだなど、先程の演説が見事に成功して浮かれていたワタシはそんな能天気なことを考えながら案内を続けます。

階段を下るとそこには広大な地下聖堂が広がっていて、人工的な光が照らしています。

その中心には円卓の小さなテーブルがあつて囲っているのは三人の『マギウス』。

左からアリナ、灯花、そしてねむの順番に座っていて、そして背後の壁にはここに充満している瘴気の元である、今神浜全土に展開している自動浄化システムを全世界に広めるための半魔女——エンブリオ・イブがその巨体を張り付けられていました。

「ほう……」

このとき、ワタシは気が付くことができませんでした。

イブを見たモエちゃんの表情が消えて、一瞬とはいえ能面のようなものになっていたことなんて。

「くふふっ。初めましてかにやー？ あなたが最強さん？」

それには『マギウス』たちも気が付かなかったのでしょうか。

中央に座っていた灯花がいつもと変わらない態度でモエちゃんに問いかけます。

……………。

『マギウス』と『マギウスの翼』という上下関係が確かにあるとはいえ、人間としても魔法少女としても圧倒的な先輩かつ今や神浜でワタシよりも格段に高い地位にいるモエちゃんに対してこの態度。

しかもまだ入り口にいて碌に近づいてもいないのに呼び止め、先に名乗らせようとするなんて……………！

ここでモエちゃんの不興を買ったらどうなるのか……………本当にわかって言っているのでしょうか。

「こ、こら、灯花——」

「よいよい。こんな子供の無礼程度で怒りはせんよ」

あんまりすぎる態度を見せた灯花を叱ろうと声を上げますが、極めて穏やかな声でモエちゃんによって制されてしまいました。

モエちゃんが気にしていないのならいかと引き下がりましたが、さっきのモエちゃんのセリフを思い返して背筋が凍り付きました。

「こんな子供の無礼程度」と遠回しにですが灯花のことを『躰けのなっていない子供』と罵倒したからです。いつものモエちゃんなら「こんなこと」みたいに濁すのに……………。

ほんの僅かな小さな違いですが、長い付き合いのあるワタシですからわかるんです。わかってしまうんです。

モエちゃんが今、間違いなく不機嫌になっている、と。

「初めましてじゃのう。今日付けで『マギウスの翼』の頭になった星奈百恵じゃ」

ですがモエちゃんは本当に普段と変わらない笑顔を浮かべたまま自己紹介をしています。

……………これもおかしいです。

いつもなら自分の見た目と年齢のギャップを強調して雰囲気をもませつつ、良い印象を植え付けようとするはずなのにそれがありませんでした。

『マギウス』の前に畏まっているだけだと思ひ込みたいですが、今ま

さに『マジウス』に意見しようとしているモエちゃんが彼女たちに膝を折るだなんてとても思えません。

嫌な予感がして背中に冷たい汗が伝いますが、モエちゃんのことを知らない『マジウス』の三人は各々簡単に自己紹介していました。

「さて、挨拶も済んだし、今日はいろいろとお主らと話をしたくてのう」

「くふふつ、いいよー。なんでも答えてあげる。で、用件はなにかにやー?」

「それはありがたい。では早速なんじやがのう——彼女<sup>彼女</sup>は一体なんじや?」

モエちゃんがイブを指さします。

「彼女<sup>彼女</sup>つて、イブのこと?」

「ほう。彼女はイブという名じやつたか。そうじや。私は、そのイブとやらがどうしても気になって気になって仕方がないのじやよ」

「ふーん。まあ、無理もないかもねー。こんな酷い穢れを垂れ流しているんだし。さすがの最強さんもこの穢れにはびつくりしたでしよ?」

「はっはっは、まあ<sup>まあ</sup>のう。数多くの魔女をこれまで見てきたが、こんな状態<sup>状態</sup>のやつは一回も見たことがなかったからのう。じやからのう、教えてはくれぬか?」

「いいよー」

そこから灯花がイブについて説明を始めました。

不完全な状態<sup>状態</sup>で変異した半魔女であること、イブには感情エネルギーを回収して宇宙に送り届ける能力があること、それが今神浜市を覆っているから神浜で魔女になることはなくドツペルとして処理されること、そしてそんなイブを完全な魔女にすることで神浜だけでなく全世界にこのシステムを広げること。

別に知られても問題ないと思ったからでしょうか。

それらをすべて余すことなくモエちゃんに説明していました。

「なるほどのう。……のう、ひとつ聞きたいのじやがの。それを彼女は望んでおるのかのう?」

「彼女？ 誰それ〜？」

「彼女は彼女じゃよ。そのイブとやらは、それを望んでおるのかと訊いておるのじゃ」

……あ。こ、これは——いけませんっ！

今になってワタシはとんでもない失態を犯していたことに気が付きました。

モエちゃんにとって、イブは最大級の地雷だったことに！

数多くの魔法少女たちを助け、今もワタシたちを救うために奔走しようとしているモエちゃんにとって半魔女であるイブですら守る対象だったのでしょうか。

現にモエちゃんはイブに対して一回も『魔女』と呼んでいません。

『彼女』とまるで人間扱いするように呼んでいます。

「さーね。だってわたくしたちが見つけた時にはもうこんな状態だったし、意思疎通なんてできないんだから知るわけがないでしょー？でも自分が犠牲になるだけで世界中の魔法少女が救われるんだし、本望なんじゃないかじゃー？ 魔女になって呪いを振りまくどころか、みーんな幸せにすることができるんだからとつてもハッピーだよね！」

「とつ、灯花そこまで——」

嫌な予感しかしないワタシは勝手なことを言い始める灯花を止めようとし、が。

「——餓鬼が、あまり巫山戯ふざけたことを抜かすなよ」

「はっ！」

地獄の底の底から出たような声が隣から聞こえたかと思うと……灯花の座る椅子の上に器用に移動し、変身しているモエちゃんが、得物である巨大な両刃剣の中央にある孔あなの部分に灯花の首を通していました。

首を通した状態で両刃剣を出したらしくこれでは灯花は一切の身動きが取れず、モエちゃんが少しでも腕を引けば首が吹き飛んでしまうその構図は、まるで処刑台のそれでした。

そんなモエちゃんの顔からは表情がすべて消えていて、急な展開に

ポカンとしている灯花を見下すその青い瞳に籠っていたのは、軽蔑と激しい怒りの感情だけ。

モエちゃんがこんな顔をするなんて……。

「……ひっ」

「っ！ いきなり何をしているのかな君はっ……」

そんなことを考えて現実逃避をしていますと、自分の身になにが起こっているのかを理解した灯花が悲鳴を上げ、ねむが焦ったように変身しました。アリナだけは変わらず、ただ興味深そうにモエちゃんを見つめています。

彼女たちがあんな反応をするということはやっぱりそうなのですね。

全く。全く反応することができませんでした。

モエちゃんが動いたところも、変身したところも、武器を出したところも、なにも見えませんでした。気が付いたらモエちゃんが灯花の首を刎ねようとしていた。そんな風にしが見えなかったんです。

これは灯花たちだけじゃなくワタシですら、モエちゃんの戦闘能力を甘く見ていたみたいです。

モエちゃんが常に力をセーブしながら戦っていることは知っていましたが、本気を出すと知覚することすらできないような速さで移動できるなんて……。

モエちゃんを敵に回すと自分が殺されたのかも分からずに絶命してしまうような、そんな気がします。

昔と違って落ち着いて見えたとしても『神浜最強』のふたつ名は伊達ではなかったということですよ。

「安心せい、命を取る気は毛頭ないからの。ただのう？ 自分たちの身勝手で人様の体を都合良く利用するのはいかがなものかと、少し抗議をしたかっただけなのじゃよ」

本当に殺す気はなかったのでしょうか。

武器をしまつて変身を解き、椅子の上から『マジウス』たちの真正面に来るように降り立ったモエちゃんにまたいつもの笑顔が戻っていました。もはやそれは死神の笑みにしか見えません。

稀代の天才とはいえまだ11歳の小学生である灯花とねむも今の恐怖体験にはかなり堪えたらしく、すっかり委縮してしまっています。

「許せよ。私も彼女を犠牲にする計画にこれから加担する身じゃ。仕事じゃからのう。じゃから、今このタイミングでないとすっかり抗議することができなかつたのじゃよ」

「もう！ だからあれはもう魔法少女じゃないって言ってるじゃない！」

「ほう、まだ躰が足りぬかの？」

「っ！ ふーんだ！」

いくら灯花でもあんな怖い思いは二度と味わいたくないのでしよう。恐怖に怯えながらツンツとそっぽを向いてしまいました。

ねむももうモエちゃんが暴れることはないと判断したのか、それとも戦いになったら絶対に勝てないと悟ったのか、変身を解いて席に着きました。

それから遂に交渉が始まりました。

ここに来た本来の目的である『マギウスの翼』の今後の方針について。

正直この交渉はかなり面倒なものになる……と思ったのですが。

「——というわけじゃ。よって、申し訳ないがそちらの意向を通すことはできません。ただしそちらが望む感情エネルギーとやらの補填についてはしっかりと用意すると約束しよう。よいかの？」

「そ、そう。じゃあ好きにすればいいんじゃないかにゃー？ できるものならねっ！」

「良い返事をもらえて何よりじゃ」

完全にモエちゃんに怖気ついてしまったらしい灯花があっさりと承諾してしまったことで解決してしまいました。

これではもはや交渉ではなく一方的な要求です。

話が終わり帰ろうとしたモエちゃんはアリナに捉まり、話があるとどこかに連れていかれてしまいました。

思えばアリナの様子が少しおかしかったですね。ずっとモエちゃ

んを食い入るように見ていました。先程連れていくときもどこか楽しそうに見えましたし、意外にもアリナはモエちゃんのことを悪く思っていない気がします。

問題なのは……灯花とねむのふたりです。

都合のいい駒程度しかモエちゃんを見ていなかったようですが、今回の件で間違いなく見る目が変わることでしょう。

あんなに恐ろしい目に遭ったのもそうですし、なにより自分たちに従っているはずの下位組織である『マギウスの翼』のトップが食らいついてきたわけですから面白くないでしょう。

「ちよつとみふゆ！ あれ、どういうことなの!？」

「いや……すみません。ワタシの失態です。場所をしつかりと考えておくべきでした」

「ちがーう、そこじゃない！ あの星奈百恵！ わたくしたちに剣を向けるなんてどうかしてるんじゃないの!？」

「……………」

これはどう答えればいいのか。

正直に言つてワタシはモエちゃんと灯花、ふたりとも悪いところがあると思つていますので、どう答えたらいいのかわかりません。

明らかに非人道的で自分本位なことを言つてモエちゃんの逆鱗に触れた灯花も悪いですし、仮にも上司である灯花に対して剣を向けたモエちゃんも『マギウスの翼』のトップとしてやってはいけないことをしているのですから。

そう考えると……ちよつと不思議に思えます。

あんなに周りの空気を読んで自分の感情までもコントロールしてきたはずのモエちゃんが、激情に駆られて感情のままに行動するなんて……それほどイブに纏わる『マギウス』の態度が許せなかったということなのだろうか。

だんまりしているワタシを見てさらに腹が立ったのか、「もう行つていいよ!」と最初の機嫌のよさはどこへやらな灯花。

さすがにこれ以上ご機嫌を斜めにするのは良くないのでワタシはすぐにこの地下聖堂から地上に戻りました。



「これは……また新しい火種ができてしまいましたか」

一難去つてまた一難。

『マギウスの翼』だけでなく『マギウス』にも大きな影響を与えた最強の存在<sup>モエちゃん</sup>。

果たして彼女は薬になるのか、はたまた毒になるのか。

今になってとんでもない劇物を取り込んでしまったことに、ワタシは再び頭を悩ませました。

## RTAパート15 はじまりのいろは

『マジウスの翼』をブラックからホワイトにしていくRTAはーじまーるよー！

百恵ちゃんが暴走したりしたのは焦りましたが（特に問題は）ないです。

それどころか灯花とねむの好感度を最低にできたのでファインプレーと言っても過言じゃありません。

でも本当心臓に悪いからこういうのは勘弁してくれよなく。頼むよ。

そしてRTAでの悩みの種だったアリナは伝説のモデルルートを引き当てることができなかったので好感度が最高な状態です。

少しでも扱いを間違えると下方修正してしまうので注意が必要です。入ってしまったえばこちらのモノ（意味深）ですので安心できません。

さて、このように『マジウス』全員との関係は極めて良好（仲が良いとは言っていない）ですし、『マジウスの翼』の悩みの種だった仕事についてもOHANASHIして穩便に済ますことができましたので、これからは組織改革に精を出すとしましょう。

現在は9月の前半で、本編である『はじまりのいろは』が始まるのは10月からです。あと二週間程度しか猶予はありませんがいくらかでも手を打っていきます。

『マジウスの翼』の主な仕事は、『ウワサの警護』『魔法少女の勧誘』そして『魔女の飼育』の三つ。

まずひとつ目の『ウワサの警護』は、『マジウス』のひとりであるねむが創造したウワサを他の魔法少女から守る仕事です。

といってもウワサなんて調べている魔法少女は現時点ではやちよさんくらいしかいませんし、そのやちよも纏めているだけで本格的な調査には乗り出していないので、現状ウワサが消されるような心配はありません。

しかしながら羽根たちのほとんどが過去百恵ちゃんの手解きを受

けていらん正義感を持つてしまつていたので、どちらかという巻き込んだ一般人を助けるといふ滅茶苦茶危険な仕事になつてしまつています。自分から（ウワサに）入つていくのか……（困惑）。

ウワサに囚われた一般人を助け出すということは、ウワサに逆らう必要があるということ。

ウワサに逆らうということは……具現化したウワサが襲い掛かつてくるということ。

一般人を助けながらウワサを消さないようにして逃げる、というのはかなり危険で難しい仕事です。

そんなことしなくていいから（良心）と命令するすると一発解決なのですが、羽根たちからの好感度がガタ落ちする罠なので絶対にしません。

しかしながらこのままでは羽根たちの負担がかなり大きいのでしっかりと編成したチームを作る必要があります。

まず羽根たちの名前と住所を全て纏め上げ、その中で同じ学校に通つてゐるか比較的距離が近いような子たちで四人から五人のチームを組んでもらつて、交代交代でウワサの周辺警護をさせます。

あらかじめ決まつたメンバーで見張りをしておけば事情を知らない魔法少女からウワサを守れますし、巻き込んだ一般人を助けるのもこれくらいいけば何とかかなりますからね。

そしてこの編成の最大の利点は、百恵ちゃんがすべてのスケジュールを管理する都合上、意図的にウワサの警護をガバラせることができます。

これで原作通りにみかづき荘組を泳がせることができますし、百恵ちゃんも表面上は真面目に仕事をしているので強く非難されることはありません。

「……以上です。お見事です、モエちゃん」

編成をして一週間が経過してみふゆさんから成果の報告を受けましたが、ウワサの被害ゼロ、そしてウワサの犠牲者ゼロ、さらにエネルギー回収効率の上昇という最高の結果を叩き出しました。

これで派手に喧嘩を売つた『マジウス』も文句を言えないでしょう。

後はタイミングを見計らって『絶交階段のウワサ』と『マチビト馬のウワサ』の警護を緩めて順番に撃破してくれば完璧です。

次に『魔法少女の勧誘』ですが、これは現状維持。

ただし百恵ちゃんの名前を出すことだけは禁止しました。当たり前だよなあ？

百恵ちゃんがいることが発覚すると数多くのネームド魔法少女が押し寄せてシナリオが崩壊するからね、仕方ないね（レレ）。

同じ理由で携帯にもみたままさん以外からは出ません。なーんかやっちゃんからの着信が結構来ていますが全部スルーです。

そして最後の仕事である『魔女の飼育』。

これは百恵ちゃん専門の仕事で羽根たちにはやらせません。

内容はとてもシンプルでアリナの武器でもある緑色のキューブの中に弱らせた魔女を放り込む。そしてそれをアリナに渡す。それだけです。うん、それだけ。

それだけなんですけどねえ……本当は物凄く難易度の高い仕事なんですよこれ。

魔女を倒さないということはグリーンフィードが手に入らないということなのでソウルジエムを浄化できませんし、難易度ハードのせいで雑魚でもそこそこ強い魔女を手加減して弱らせないといけないので割と繊細な仕事なんです。アリナの好感度を除けば基本的に旨味がない仕事なので、羽根たちが嫌がるのも納得できます。

ですが百恵ちゃんはエネルギー効率抜群の戦闘特化型魔法少女なので、魔女退治は赤子の手をひねるがごとく熟すことができます。

そのためデメリットがほとんどなく、むしろ百恵ちゃんだからこそできる仕事になっています。

もうすでに今日までに三十体以上の魔女を捕獲してアリナ先輩に貢いでいます。そして貢ぐたびにアリナの絵のモデルになっているので好感度は下がることは絶対にありません。

気がかりは魔女を乱獲してしまっているせいでアリナが育てている魔女がえげつないことになってしまっている可能性があることなのですが……ま、まあ？ 鶴乃ちゃんとかフェリシアとか百恵ちゃん

との特訓でパワーアップしていますし、大丈夫でしょ。

ということで百恵ちゃんは『マギウスの翼』で不動の地位を築き上げることに成功しました。

これで反乱分子も押さえつけることができているので順調にシナリオが進んでいていいゾコレ。

ちなみに百恵ちゃん、『マギウスの翼』入りしてから大学を辞めて、ずっとホテルフロントホープで過ごしています。

ウワサの警護とかは羽根たちに任せて、事務仕事と羽根たちの戦闘訓練、そして魔女狩りに追われる毎日です。勉強なんか必要ねーんだよ！

というわけで今日も元気に魔女狩りじゃーい。

悪い魔女はお仕置きだど。あつ、魔女の結界見つけ！ いただきますー！

使い魔倒して……うん？ なんか百恵ちゃんの動きが……あら？ あらら？

状態異常の表示が出ているぞ!? 「( ^ o ^ ; )」 『毒』かな??? w w w w w w 「 ; o ^ ( L 『呪い』かな??もしかして『麻痺』かな?? w w w w w w 「 ; ; ; ) ( ……これ……これは……… 『魔力の衰え』だああああ 「( ^ o ^ ( L w w w w w w 「( ^ o ^ )」ド  
コードコード w w w w w w w w w w

うおおあああああああつ?! 史上最悪の状態異常を引いちまったぞおまつ！

『魔力の衰え』は言ってしまったえばみふゆさん状態です。

力のピークを過ぎた魔法少女にランダムで発生し、この状態異常にかかってしまったが最期、日に日に力が衰えていくという絶対に引き当ててはいけないバッドイベント！

この状態異常が起こる確率が上がるリスクを承知でベテラン魔法少女をキャラメイクしたのですが……本当に起こってしまうとは実に運がないと言わざるを得ません。

不幸中の幸いですが、この状態異常は非常に緩やかな弱体化ですし、百恵ちゃんの戦闘能力は最強クラスですのでチャート上は問題な

い……はず!

とにかくこの状態異常が出てしまった以上オートで戦闘をするのは非常に危険です。

急に力が入らなくなったり視野が狭くなったりするので慎重に操作をしましょう。

と、こんな風に喋っている間に魔女をボコボコにして捕獲しました。武器を使うとオーバーキルなので鉄拳制裁してピヨらせるのが賢い戦い方です。

はあーあ。大外れを引かされてガン萎えですが続行です。

リセしてもまた同じ状態異常を引いてしまつては意味がないのでこのまま行くとします。

さて無事に魔女を捕獲したのでアリナの所に行きましょう。

オツス! (到着)

「ああ、今日も(苦)労百恵。そこ置いといていいカラ」

アリナの好感度を見分けるポイントその二。フルネームではなく下の名前で呼ばれているかどうか。

下の名前で呼ばれていると好感度が高い証拠です。百恵ちゃんが部屋に入った途端に絵を描くのを中断するあたり、かなり百恵ちゃんを好いていてくれる模様。なにがアリナの琴線に触れたんですかね?

「!・アナタ……」

ん? なにかアリナが驚いていますね。

そして百恵ちゃんのことをじろじろと見てきます。

「はあ……。とりあえずそこに座つてくれる?」

あ、いいすつよ (快諾)。

なにを気にしていたのか全く分かりませんが、いつも通りの仕事終わりのデッサンが始まります。もう連日百恵ちゃんの絵を描いてくれています。飽きないんでしょうかね。完成した絵もほとんど同じに見えますし。

「……………」

そして二時間後。一息吐いてアリナが筆を置きました。これでア

リナのイベント終了です。いつも通り完成した絵を見てみましょう。そこにはちよこんと椅子に座っている百恵ちゃんの姿がありました。

写真でも撮ったかのように綺麗に書かれています……これ前書いたのとほとんど同じじゃないですかねえ？

おや、前に描いた絵と並べられて選択肢が出てきました。

『同じように見える』か『違うように見えるか』の二択ですね。今までこんな選択肢は出てこなかったのですが……なんなんでしょうかね。

正直、どっちが正解かわかりません。

だってこのアリナのモデルルート、レアすぎて研究が追い付いてないんですもの。

ですので、ここは勘で『違うように見える』を選んでみます。

果たして結果は……。

「アハッ、そうだヨネー！」

当たり前だよなあ？（わかっていない）

ふう、とにかく正解を引き当てられたような安心です。アリナの好感度は高いに越したことがないですからね。

用は済んだので百恵ちゃんの部屋に戻りましょう。まだ仕事が大量にあるんじゃないやあ。中間管理職は、辛いねんな。

「ああそうだ。ウェイト、ちよつと待ってほしいんだケド」

おや？ アリナに引き留められました。

どうかしたんですかね。

「もう魔女をハントしてくる必要はないカラ。大量にありすぎても困るんだヨネ」

おっ、これは魔女の育成が終了した証拠ですね。

この魔女の育成イベントはある一定の量の魔女をアリナに献上すると強制終了する仕様ですので、今回の分でそれがクリアしたのでしよう。

この魔女の数もルートによって変動するのですが百恵ちゃんが超絶強かったおかげか、早く終わることができました。一週間にひとり

で三十体以上も魔女をしびき倒しましたからね百恵ちゃん。なんだこの合法ロリ!?(驚愕)

なににせよこれで百恵ちゃんの時間に余裕ができますし、絶賛弱体化中の百恵ちゃんが危険な目に遭わずに済むので嬉しいことに違いありません。

アリナ先輩、ありがとナス! これからも(案件)お待ちしてナス!

じゃあしばらくフエントホープでの内勤生活ですので、動きがあるまでキンクリしましょう。

それじゃあ、倍速です。

おはよーごさいます!

10月に入りまして二週間が経ち、現在百恵ちゃんは定期検診のため調整屋さんに来ております。

調整屋のみたまさんは『マギウス』と繋がっていますので情報の仕入れるのにとっても便利。

『マギウス』または『マギウスの翼』ルートを走ろうとしている方はなんとしてもみたまさんの好感度を上げましょうね。

「最近? うーんそうねえ、他の町から魔法少女の子が神浜に行き来するようになったくらいかしらねえ?」

はい来ました!

その子は他でもない『マギアレコード』の主人公、環たまきいろはちゃんの間違いありません。

ということはメインストーリー第1章『はじまりのいろは』がスタートしていますね。もしかしたら気が付いていないだけで第2章の『ウワサの絶交ルール』まで行っているかもしれませぬ。

まあそんなことはどうでもいいんですよ!

とにかくいろはちゃんが神浜に来たことによってこれから目まぐるしく状況が変化していきます。

早速帰ったら『絶交階段のウワサ』と『マチビト馬のウワサ』周り



の警備を手薄になるように調整して、原作通りに動いてもらうとしましょうか。

なーに大丈夫です。

百恵ちゃんの手解きを受けているやつちゃんや鶴乃ちゃんやんがそばにいますから序盤のウワサ程度に後れは取りません。

え？ もしミスったらどうするのかって？ そりやあもちろんセーブ時点からのやり直しですよ。

だから気合入れてウワサを倒してくれよな。頼むよ。

「それよりもモモちゃん。その……体の調子は大丈夫？」

ああ、みたまさんは今の百恵ちゃんの状態がどんなものか丸わかりです。

まあ、一時期に比べるとそれは弱くなりました。と言ってもまだまだ全然現役レベルですが。

弱体化の影響は体の方にも出てきましたね。

動きが少し鈍くなりましたし、今までブンブン振り回していた武器も使いづらくなってきました。まあ、百恵ちゃんにはまだ拳があるのでRTA的には全く問題ないのですが。

だから大丈夫だって安心しろよ。ヘーキヘーキ、ヘーキだから。

「……そう？ それならいいけど……あんまり無理しちゃダメよ。モモちゃんの体が一番大切なんだから。ね？」

やつぱ……みたまさんを……最高やな！

おう、気を付けるわ（無理しないとは言っていない）。

さて少し早いですが今回はここまでです。

次回からは今まで以上に忙しくなりますのでご期待ください。

それではご視聴、ありがとうございました！

## Interlude. 嵐の前の

あの日、完全中立が傾いた。

これはちようど一ヶ月前の出来事。

9月の第二週目のある日の休日。調整屋でわたしこと八雲みたまは物憂げに溜息を吐いた。

今は午前7時半。調整屋が開店するまで大分余裕がある。だけど今日は、これくらい早い時間じゃないと調整することができない人が来る日。だからわたしはこうして営業時間外で出勤して準備をしていた。

さっきの溜息だけど、わたしは決してこのことを憂鬱にしているわけじゃない。なにせその人はわたしにとつての第二の恩師であり、十七夜と同じくらい大切に思っている親友なのだから。

かつては毎日顔を合わせるような間柄だったけど、あの日を境にほとんど会うことができなくなってしまった、そんな大切な人が会いに来る。それは本当は喜ばしいこと。久しぶりに会えたことを喜び合って世間話を楽しみたい……ところなのだけど。

「おはようなのじゃ。久しいのう、みたま」

約束の時間である8時丁度にその人——神浜最強の魔法少女、星奈百恵ことモモちゃんが来店した。

そう、今日はモモちゃんの定期検診の日。これが親友に会えるにもかかわらず晴れやかな気分になれない理由だった。

5月以降、力の成長が止まってしまつて弱体化の予兆が見え始めたモモちゃんが心身共に健康な状態なのかを一ヶ月に一回、決まつて第二週の日曜日にソウルジェムを通して診察をする必要があつた。営業時間外に診察する理由は、神浜最強の魔法少女の不調というところもない情報が漏洩することを防ぐため。

最初こそ遠慮して渋つていたモモちゃんだったけど、なんとかわたしが説き伏せてこうして診察することになった……わけなのだけど。わたしから言い出したことなのにつしか、この日が来ることが憂鬱になつてしまつていた。知らない方が幸せだけど、後で知ると物凄く

後悔する。この日が近づく度に、わたしはその二律背反に苦しまされる。

見た目に反して大人びた現実主義者リアリスト気質だったモモちゃんだったから最初こそ僅かで気にならないような変化だったけど……精神面でのモモちゃんの異常は日に日に大きくなっていることが発覚した。そしてそれは一ヶ月、さらに一ヶ月と、時が過ぎていくにつれより顕著になっていく。

誰かとの繋がりを求めて色々なところに出かけるようになった。それだけならいい。だけど積極的に自分の連絡先を教えたと聞いた時は驚いたわ。

モモちゃんは公平性を出すために、仕事を受け付けるときは必ず仲介役としてわたしややちよさんたちが間に入るように徹底していた。だからモモちゃんは自分から連絡先を教えることはなかったし、勝手に他人に自分の連絡先を教えることも固く禁止していた。少なからず神浜に影響力を持つ魔法少女と、モモちゃんが気に入った一部の子どもたちしか、モモちゃんは連絡先を教えようとしなかった。

なのにもかかわらず、更紗帆奈ちゃんが起こした事件の時にモモちゃんは自分から連絡先を遊佐葉月ちゃんに教えていたらしいわ。事件が発生しているから緊急連絡として教えたらしいけど、これまでのモモちゃんなら絶対にしなかったことよ。でもモモちゃんは当たり前のように連絡先を教えたという。多分無意識のうちに他人と関わり合いたいと思っちゃったのね。

仕事が減って、浅く広い関係でしか友達を作らず、数少ない親友しかいなかったモモちゃんにとって、『老化』という弱体化は致命的だった。飄々と振舞っていたけど、内心はきつと寂しくて仕方がなかったのかもしれない。かつて自分を必要としてくれていた子たちが沢山いたからこそ余計に。

だから……遂にあの日、モモちゃんは自分から完全中立を破ってしまった。

どの組織にも属さないと宣言していたあのモモちゃんが『マジウスの翼』のリーダーになると連絡をくれたとき、わたしは特に驚かな

かったわ。「ああ、やっぱりね」って逆に納得しちゃったもの。

奇しくもあの日は、帆奈ちゃんの監視が丁度終わった日。聞けば帆奈ちゃんはその日の内にモモちゃんの元から去っていったらしいわ。「立派になった。私がいなくてももう大丈夫じゃ」

なんてモモちゃんは喜んでいたけど……その後の笑顔がとても寂しそうだった。きつと帆奈ちゃんとの生活はとても楽しかったのでしょうね。だからこそ……その反動が来ちゃったのね。帆奈ちゃんに代わって『マギウスの翼』の子たちが自分を頼ってきてくれたことが嬉しかったんだと思うわ。

だから……あっさりともモモちゃんは中立を破った。そしてそれが意味することは、もうそこまでモモちゃんの精神状態が不安定になってしまっているということだった。

そして今日……そんな状態のモモちゃんをわたしが診ないといけない。だからわたしは憂鬱だった。わたしを助けてくれた大きな傭兵が、弱りきって小さくなってしまっているだなんて信じたくなかったんだから。

それに、モモちゃんを精神的にここまで追い詰めてしまったの要因のひとつはわたしにある。だってモモちゃんの仕事がなくなったのは、わたしが意図して受け付けないようにしていたからだもの。

モモちゃんを必要としていた子たちは確かにいた。でもわたしはその子たちを全員かりんちゃんの方に流した。理由はある。

ソウルジェムを通して、ずっとモモちゃんの体を診てきたからわかった。わかってしまった。表に出ていないとはいえ、モモちゃんが魔法少女として戦う度に肉体にダメージが蓄積されていつていることに。

モモちゃんが抱えている最凶にして最悪の爆弾は、肉体の老朽化。それを食い止めるためにあれこれ模索していたわたしにとって、その事実は許容できるものじゃなかった。

ちなみにこのことはモモちゃんを含めて誰にも教えていない。教えられるわけがなかった。

ただでさえ、モモちゃんは誰かに必要とされたくて精神が不安定に

なっているのに、そんなモモちゃんから戦いまで取り上げるなんてことはわたしにはできなかった。だからこのことは胸にしまって、わたしからモモちゃんに渡す仕事だけを制限することでモモちゃんを戦いから遠ざけていた。だけどそれで肉体的なダメージを抑えても、精神的にモモちゃんを弱らせてしまうのだから本当に皮肉としか言いようがない。

「いらっしやうい♪ 待っていたわよう、モモちゃ……っ」

そんな荒れている内心を押し殺して、いつものように笑顔で迎えようと振り返ったわたしは、モモちゃんの姿を見て絶句した。

心なしか、モモちゃんが小さく見えてしまった。元々小さかったけどさらに小さく、細くなってしまったかのような……ほんの一ヶ月前と比べて随分と痩せてしまっているように見えてしまった。

そしてもうひとつ、気付いてしまったことがある。

「モモちゃん、それを取って見せてくれる？」

モモちゃんの長袖の服の下にある、手の甲まで隠れているタイプの白いアームカバーをわたしは指摘した。

寒い季節に入ってきた今、それを着けている人がいても特別おかしくはない。けどわたしは、モモちゃんがそんなものを着けているところを一回も見たことがない。今年に入って着けるようになったと考えることもできるけど……なんとなく、なんとなくだけどそれを見た瞬間に鳥肌が立った。嫌な予感がした。

「やはりバレてしまうかの。全く参った。お主に隠し事は出来ぬな」

諦めたように笑うモモちゃんは右手を使つて左腕のアームカバーを引っ張る。

正直その下は見たくない。でも見ないといけない。気付いてしまった以上は、そしてモモちゃんの診察をする義務があるわたしはそれを見ないといけない。

覚悟を決めて……モモちゃんの左腕を見た。

「っ！ あ……あ……っ。……っ。……っ……」

叫びたくなつた、気が狂いそうになつた。目の前にある現実に頭が追いつかない。受け入れたくないし信じたくもない。でも……受け

入れるしかない。

モモちゃんの左腕の皮膚は張りが失って少し垂れ下がり……掌はしわくちやになってしまっていた。この間まで綺麗で柔らかかみを感じられた手が、まるで老人のような状態になってしまっていた。

「症状は左腕だけじゃし、二の腕はまだ平気なのじゃが参ってしまうのう」

だけどまた諦めたように笑うモモちゃんを見てわたしの頭が一気に冷え込んでいき、ふつふつと怒りが沸いてきた。そしてその感情のまま、わたしはモモちゃんの両肩を掴む。

どうして？　ねえ、どうしてこんな状況で笑っていられるの？

「なにを暢気なことを言っているのよ……。どうしてッ！　こんなになるまで放っておいたのッ!？」

「仕方なかろう。まさかこんなに早く時が来てしまうとは思ってもせんかったのじゃから。全くキュウベえの言うことは本当に当てにならぬな。はっはっは」

「ふざけないでッ！　笑っている場合じゃないでしょうバカ！　バカモモちゃん！」

きつと笑って誤魔化そうとしていたんだと思う。心配かけないように氣遣ってくれていたんだと思う。だけどそれはあまりにも悲しくて、ただただ空しい。

もし笑って誤魔化せると本気で思っているのなら絶対に許せない。わたしのことを馬鹿にしているとしか考えられない。こっちは本気で心配しているというのに冗談じゃないわ。

「……すまん。悪かった。許してほしい」  
一拍置いて、モモちゃんが謝ってきた。

少し俯いているから表情は分からない。けど、間違いなく笑ってはいない。偽りの……。あの悲しすぎる笑顔はない。それどころか、ちよつとだけ早口になっていて必死な様子だった。少し震えているし、どこか怖がっているみたい……。……

……いけないわ。

「ごめんなさい、モモちゃん。強く言い過ぎちゃったわね」

「なぜみたまが謝るのじゃ……。悪いのは私じゃよ。本当に申し訳なかった。決してバカにしているわけじゃなかったのじゃ。じゃから……」

「もう怒っていないし、そんなことは分かりきっているわよ。それに、こんなことでわたしがモモちゃんを嫌いになるわけないじゃないの」肩を掴んでいた手を背中に回して抱きしめ、できるだけ声を柔らかくして答える。

今のモモちゃんは非常にデリケートな状態。普通に仲が良い人相手には昔と同じように振舞えるけど、相手が親密であればあるほど嫌われることを恐れて弱くなってしまう。

こんなことでわたしがモモちゃんを嫌うはずがないということはきつと分かってくれている。でも頭で分かっている、どうしても不安になっちゃうんだと思うわ。

さて……。これまでの流れではつきりしたわね。

来年のモモちゃんの誕生日なんてそんな悠長なことは言っていない。きつと精神的にも肉体的にもモモちゃんの寿命はすぐそばまで迫ってきている。けどわたしが知っている神浜の魔法少女たちの中に、モモちゃんを助けられるような魔法少女はいない。だったから……！

「落ち着いたかしら？」

「……ああ。すまん、取り乱してしもうた」

「いいのよ、そんなこと。……ねえ、モモちゃん。モモちゃんは『マジウス』に協力しているのよね？ 全ての魔法少女を助けるために」

「……ああ、そうじゃ。残りの私の全てを懸けて、助けたいと思っておる」

「そう……」

ねえ、モモちゃん。

わたしが言った『全ての魔法少女』の中に……。モモちゃん自身は入っているの？ きつと入っていないんでしょう？ でもそんなのはわたしが許さないわ。

「わたし、決めたわ」

『マジウス』がどんな方法で魔法少女たちを解放しようとしているのかはわからない。ただひとつわかっていていることはある。

それは、現状神浜で魔女化する心配がないということ。なぜならソウルジエムに溜まった穢れはドツペルなんていうモノに変わるから。リスクはあるのでしようけど魔女になれるよりかはずっといい。そしてそのシステムがある限り、たとえモモちゃんの体が衰弱して戦えなくなってしまうとしても、とりあえず生きていくことはできる。だったら……それに賭けるしかない。

モモちゃんの体は現状どうにもできない。だけど生命を維持できるのならまだ手はある。

戦うことができなくなったとき魔女になる前に命を絶とうとしているモモちゃんだけど、魔女にならないのなら自殺する必要はない。解放されたのち、世界中を巡ってモモちゃんをどうにかできる魔法少女を探し当てる。幸いわたしには世界中を旅することができる魔法少女に当てがある。だから……。

「ねえ、わたしにも協力させて」

「……バカを言うな。お主まで中立を傾けては——」

「わたしはモモちゃんに協力するの」

『マジウス』に協力するわけじゃない。ただ利用するだけ。だからなにも問題はない。

「そうか……そうか。ならば、私も利用させてもらおうかのう」  
「ええ」

これからはモモちゃんにわたしが知り得た情報を流す。そしてなんとんでも計画を成就させる。モモちゃんは全ての魔法少女を助けられる。わたしはモモちゃんを助けるための時間を稼げる。利害は一致している。

そう考えたとき、ひとりの魔法少女の顔が頭に過よぎった。わたしよりもモモちゃんと付き合いが長い神浜最年長の魔法少女の顔が。

悪いわね、やちよさん。どうやらわたしはあなたの味方ではなくなるわ。

良くも悪くもまっすぐで責任感の強いあなたは、絶対にこのやり方



は認めないでしょう？ きつと『マギウス』がやろうとしていることを知ったら許さないに決まっているわ。

けどね、これしかないのよ。他にやり方があるのかもしれない、なんて優等生みたいなお話はわたしには言えない。これしか、モモちゃんを助けられる可能性のある方法をわたしは知らないのだから。「さてと……そろそろ来る頃かしら」

そして今現在。10月の第二週の日曜日、モモちゃんの検診する日だ。

さて、モモちゃんは一体どんなこと聞いてくるのかしらあ。現在の神浜の情勢に加えて、最近は面白い子が神浜に出入りしているから、おしゃべりするネタはたくさんある。

言っておくけどこれは決して情報漏洩しているわけじゃないわよ？ ただ親友と世間話をするだけ。それだけだもの。しかもその親友が完全中立のモモちゃんだから何も問題はないわ。同じ中立同士情報を共有しないとね。中立の味方は中立。ねえ、そうでしょう？

この日、完全中立が傾いた。



「また出ない、か」

繋がらない携帯のコールを待っていて、あたし——更紗帆奈は溜息を吐いた。

8月の終わりにあたしは晴れて自由の身になった。

久しぶりに帰った自分ちを綺麗に掃除して、学校に復学して、それなりに友達作ってさ、魔法少女の仲間も増えて行って、多分今、あたしは自分の人生で初めて普通の女の子の生活ってやつを楽しんでいると思うんだ。

ここまで来るのに色々あったけどさ、はつきり言って今のあたしはとても幸せさ。とても充実している。この先の自分の運命……魔女になるってことも分かっているはずなのにさ、不思議と全然怖くない

んだわ。不幸だなんて思わないんだわ。

ただただつまらなくて毒にも薬にもなりやしなかつたどうしようもねー人生を歩んできたからか、『今を生きている』そう思うだけで楽しくってしょうがない。

この先の未来の心配なんて……そうだなあ。苦手な教科のテストが近くなつた時くらいか？ まあ、そんないい意味でしょーもねーことくらいしかここ最近心配したことないんだわあたし。

そんな充実した生活を送り始めてからしばらくして。

あたしはまた、あの家の前に戻ってきた。新西区のとあるマンションの一室、『星奈』と表札が書かれた部屋の前に。

この部屋の主である星奈百恵ことセーナはあたしにとって……なんつーかなあ。親みたいなもの？ あたしの両親って揃いも揃って碌なやつらじゃなかつたからさあ、正直まともな親ってやつがどんなもんなのかなんて知りもしないんだけどさ。

一方的な逆恨みをして、どうしようもなかつたあたしを受け入れてくれて、色々世話を焼いてくれて、ただただ温かい空間を作ってくれた、ちみっこいけどとっても大きな存在。それがあたしにとってのセーナなんだよねえ。

ここに来た理由もなんとなく会いたくなつたからだし、ここに来た時はどこか安心感のようなものを抱いたし……うん、やっぱり親だわ親。

で、そんな大恩人のセーナちん家に来たんだけど、生憎と留守だった。休日の昼間なんだからいるかなって思ったんだけどな。

少し残念に思いつつ、夕方まで時間を潰して……そしてもう一回来てみたけど部屋の明かりが点いていなかった。そこであたしは嫌な予感がした。

セーナは基本的に生活習慣がきっちりしている。同じ時間に寝て起きるし、毎日のルーティンもある程度一定だ。二ヶ月もあいつと同じ屋根の下にいたし、それ以前もストーカーみたいに様子を見に来ていたあたしだから、間違いないと確信していた時間に来ててもセーナがいないうことに違和感を抱いた。

すぐに電話をした。

今何をしているのか、どこにいるのか、色々聞きたいことはあつたけど、それ以上にセーナの声が聞きたかつたから。でも。一向に出る気配がなかつた。スピーカーから発信中の呼出音が、規則正しく響くだけだつた。

一抹の不安を抱きつつ、その日は家に帰つた。

そして次の日、もう一回セーナの家に行つてみた。だけど結果は昨日と同じ。携帯も繋がらない。

さらにそのまた次の日、学校帰りにセーナの家に向かつた。電話もした。だけど、結果は変わらない。三日連続で、セーナは電話に出ず、家にも帰つてきていなかった。

……仕方ない、奥の手だ。

「……おっじゃまします」

驚かせてやろうとこつそり作つておいた合鍵を使ってセーナち家ちに上がり込んだ。

部屋の中は当然のように電気が点いちやいないから真つ暗。暖房器具なんて動いちやいないから肌寒いし、気味が悪いと感じる程に静まり返つていて当然人の気配もない。そこまで認識した時、チクリと胸が痛んだ。

あたし、この家に二ヶ月住んでいたけど今日ほど寂しいと感じたことは一回もない。いつも温かくて明るかつたはずのこの家は、今はすっかり冷え込んでしまつていた。

悲しい気持ちになりつつも、とりあえず電気を点けてリビングに向かう。

リビングはしっかりと片付けられていて特に散らかつていない。というか、片付けられすぎていてまるで生活感がない。掃除もまめにしていたはずなのに、テレビの上に埃がうっすらと載つかっている。

冷蔵庫の中もあたしが最後に見たあの時と特に変わつていなかった。もしかしたら背が伸びるかもしれないと期待して好んで飲んでいた牛乳の消費期限が切れちまつている。

これはもう、セーナがいなくなつて三日四日の話じゃない。あたし

が出ていって間もなくして、セーナもこの家から出ていったんだ。そして今日に至るまで一回も帰ってきていない。

「どこに行っちゃったんだよ、セーナ……」

ちよつといい素材でできていると自慢していたソファに力なく座り込んだ。

なんにも言わずに、家すらもほっぽり投げてどっかに行っちゃった、携帯にも出てくれないあたしの大切な人。きつとかつての瀬奈の時と同じ状態だったら間違いなく発狂していただろうね。でも今のあたしは至って冷静だった。そんなあたしにしてくれたのは他の誰でもない、セーナだった。

ふと、あたしはここで生活していた時に時折見せていた暗い顔のセーナの顔を思い出す。

いつつも笑っていたけどさ、たまに寂しそうな、なにかを諦めているような悲しい笑顔を浮かべることがあったんだ。

その時は決まって、なにかの理由であたしがセーナの家から出ていこうとしている時だったっけかな。買い物だったり遊びに行くときだったり、一瞬だけだったけど顔を曇らせていたっけ。

「……ああ、そうか」

そこまで考えて、あたしは理解した。納得した。

きつとセーナは……どこか賑やかなところに行ってしまったんだろうと。このちよつと広すぎる家よりも楽しくて、寂しさを紛らわすことができる、そんなところに。

親しい人と一緒にいるのか、はたまた仕事に打ち込んでいるのか、どっちかは分からないけど……でもきつと仕事しているんじゃないかなってあたしは思う。

セーナは神浜のほとんどの魔法少女から頼られているし、電話に出ないのも仕事が忙しくて出る余裕がないと考えれば一応納得はできる。もしかしたら、以前からちらほらと見かけていたあの怪しい連中の……？ まあ、どこでもいいか。

ただ願わくば、そこに少しでも気を許せる人がいてくれたらいいなって思う。どうせなら仕事は楽しくやってほしいって、そう思うか

ら。

じゃあ、そんなセーナに対して今のあたしができることは……。

「……よし、決めた」

ソファに埋めていた体を起き上がらせたあたしはすぐに家に帰って荷物を纏め、それを持って翌日セーナの家に戻ってきた。

そして……まずは掃除を始めた。もう何日も掃除していないせいであちこちにある埃を全部叩いて掃除機をかけて拭き取った。

冷蔵庫にあるものを仕分けてあたしの家から持ってきた食べ物を突っ込む。あたしが使っていた部屋もそのままだったから、そこにあたしの荷物を置いて……。

それから部屋に飾ってあった少し萎れてしまっている花たちに水をやって、その隣にあたしが春名このみからもらったエゾギクの鉢植えを置く。これで少しは寂しくなくなったっしょ。

「……ずっと、ここで待ってるからさ。いつでもいい。だけどできるなら、ちよつとでも早く帰ってきてくれよな……セーナ」

あとは、ここの家主を待つだけだ。

仕事が終わったら、セーナはきつとこの家に帰ってくる。その時にあたしが温かく迎え入れよう。かつてセーナが、あたしにしてくれたみたいにさ。

セーナはこの寂しい家のことがあまり好きじゃないかもしれないけど、あたしにとってもはやこの家は実家のようなものなんだ。大好きな人が住んでいる大好きな家なんだ。

引越しが一段落して、ベランダに出て星たちが輝く雲一つない夜空を眺める。団地の屋上から見ると夜景も好きだったけどさ、ここから見る満天の夜空も同じくらい好きなんだよね。

だから……あたしはこの家で待とう。待ち続けよう。大好きなこの家で。仕事が終わってきつと疲れて帰ってくるセーナを癒してあげよう、労ってあげよう。寂しきなんて感じさせないような家をあたしが作り上げよう。

それが今のあたしに出来る、セーナへの恩返しなんだから、さ。



9月に入って夏休みが明けた初日の大学。

私こと七海やちよは、キャンパス内のカフェでガイダンスのしおりの内容に目を通していた。しおりには色々書いてあるけど、一番重要なのは曜日ごとに受けることができる授業の日程表でしょう。

必修科目はともかく、好きな授業を好きなだけ選ぶことができる大学の仕組みが私には気に入っていた。

興味のあることを知ることができるから勉強に精が出るし、試しに受けてみた授業から新しい発見や学びを見つけていることができるから。前期は堅実に単位を取るために必要最低限の授業しかとらなかつたけど、後期は少しだけ欲張ってみようかなんて思う。

さて……時刻は10時を回った。

私は携帯電話を取り出す。学部は違うけど同じ大学でちよくちよく同じ授業を受けて、一緒に勉強をしていた私の親友……星奈百恵に電話をするために。

前期も自由選択の授業をふたりであーだこーだ言い合いながら決めたし、後期も色々話合っただけでそれぞれ受ける授業を決めようと思っただけ。

一緒に授業を受けることになったら嬉しいし、違う授業を受けることになったら、その感想を基に今後の授業選択の参考にすればいい。教科書の貸し借りができれば経費を抑えることができるし、いいことしかない。加えて私は、最近の神浜に起こっている問題について話し合いをしたいと思っていた。

だから私は百恵に連絡をかけた。10時を回っていれば自由時間でしょうし、大丈夫だと思っただけから。

でも……百恵は電話に出なかつた。

この時は少し残念に思うだけだった。少し時間が経ってお昼時、もう一回私は百恵に電話をした。だけどその時も、電話に出てくれなかつた。そして……おかしいと、違和感を抱き始めた。

百恵が電話に出ないことは意外とある。

仕事や立場、そして日常生活で多忙な身の百恵は、電話に出られないことがちよくちよくあるのよ。といっても、その後には折り返しの電話をくれたりメールをくれたりとフォローはしっかりする子だった。だけど、今回はそうじゃない。折り返しの電話もメールもない。まるで私からの連絡を無視しているみたいだった。

「まさか、ね」

無視するなんてとんでもない。百恵はそんな子じゃない。きつと手が離せない状況にあつて、連絡を寄越す余裕がないだけだ。そう思つて今日はもう、百恵に電話することをやめた。

……結局この日、百恵からの折り返しの連絡はなかった。

翌日の朝、もう一度電話を試してみた。だけど百恵は電話に出ない。この時間で電話に出ないのは流石におかしすぎる。今のガイダンス期間中は朝からしつかり来ないと受けない授業が受けられなくなる恐れがあるのだから。

しかも今は、仮に百恵がまだ家にいたとしても少し余裕を持つて大学に来れる時間帯。真面目な性格の百恵に至つて、後期開始早々寝坊するなんて考えられない。

だったらどうして……電話に出てくれないの？

嫌な予感がした私は学生課に足を運ぶ。そしてそこで百恵の所属している学部にお問い合わせしてみた。すると……衝撃の回答が返ってきた。

後期に入つて、大学を辞めてしまった、と。

「……ありえない」

呆然としながら学生課から出てきた私の第一声がその五文字だった。

大学を辞める……のは、百歩譲つていい。弱体化の影響で老化が進んでしまつている百恵にとつて、大学という環境が合わないのかもしれないとは前から感じていたことだったから。でも、私になにも言わずに辞めた、ということは認められなかった。

あの子と出会つてもう四年の付き合いだけど、私は百恵と親友と呼べる間柄になつていふと思つていた。それなのに……百恵は私にな

にも相談もせずに大学を辞めてしまった。そして私から距離を置いていたかのように、電話にも出てくれない。

嫌な予感は膨らんでいく。

大学のことなんてどうでも良くなった私は急いで百恵の家に向かった。だけど……百恵が出てくることはなかった。だから次は百恵が行きそうなところを片っ端から当たった。

うちの大学は始業が少し早い代わりに次の休みが五日間の大型連休になっている。だから神浜の他の学校はまだ夏休み。つまり魔法少女の知り合いはまだ、昼過ぎでも町中にいる。

高校を卒業してから百恵が頻繁に通っていた水徳商店街に向かった。でも、どこを探してもいないし、知り合いに聞いても最近は見ないと言口を揃える。

百恵が尊敬する料理人がいる北養区のレストランにも行った。でもその子も百恵を見ていない。料理教室があるから誘おうとしているのに電話に出てくれないと困っていたわね。

一応鶴乃の実家である万々歳にも行ってみた。今でも百恵の手解きを度々受けている鶴乃なら知っているかもしれないと思ったから。でもやっぱり、結果は空振りだった。

あと探していないところは……もうひとつしかない。

「いらっしや〜い♪ あら、どうしたのおやちよさん。そんなに怖い顔しちゃって」

調整屋の店主の八雲みたまはいつもと変わらない態度で私を迎える。

どうして私が来たのか本当にわからない、と言いたげな表情だけどどこか白々しい。

……これは一筋縄ではいかなさそうね。

「ねえ、真面目な話だから惚けとほけないで答えてほしいんだけど……いいかしら?」

「……なにかしらあ?」

少し棘を含ませた私の言葉を聞いて、みたまの顔つきが変わった。やっぱり。みたまはなにかを隠している。そしてそこに必ず百恵が



いる。

「単刀直入に聞いわ。百恵がどこに行ったのか、知らない？」

「さあ、知らないわよ」

ストレートかつ百恵が行方不明だという情報を織り交ぜた私の質問に、みたまは目を吊り上げて否定した。……絶対に嘘だ。

みたまは百恵のことを慕っている。そして今、百恵は精神的にかなり危険な状態にある。そんな状況下で、みたまが百恵が行方不明なことを知って冷静でいられるはずがない。ましてや、今みたいに素っ気なく返すなんてありえない。

「嘘を言わないでちょうだい」

「あら、決めつけは良くないわあ。それに……仮にわたしがモモちゃん？の所在を知っていると、あなたに教える必要はあるのかしら？」

「神浜の大物魔法少女である百恵が失踪しているのよ。一応西の顔である私は、事情を知る権利はあると思うわ」

極めて事務的、しかしながら正論でもある理屈を突き付けてみる。だけどもみたまはどこ吹く風だった。

「大物魔法少女が失踪したから、ねえ？　でもそれ、モモちゃんに限った話じゃないでしょう？」

「……………」

痛いところを突かれた。

そう、百恵の他にももうひとり、神浜の大物魔法少女がすでに失踪している。

梓みふゆ。

六年間、私とチームを組んで共に西の魔法少女を率いていたもうひとりの親友が、一年前の夏——魔法少女の真実を知って以降、姿を晦ませている。

つまりみたまはこう言いたいのだ。みふゆの時は騒がなかったのに、なんで百恵の時ではこんなに騒ぐのか、と。

「…………みふゆの時だって騒ぎはしたのよ。でも結局見つからないまま……………」

「そうだったの知らなかったわ。こうしてわたしのところにまで殴り込みに来てくれなかったから。それに騒いだ割には大して取り乱していなかったみたいじゃない」

「それは……」

それは他でもない、百恵がいてくれたからなのよ。

自分から距離を置いたとはいえ、仲が良かった人たちが離れていつて心が痛まないわけがないじゃない。でもそれでも潰れなかったのは……近すぎず、遠すぎない絶妙な立ち位置をキープしてくれる親友がいたから。そしてその親友こそ、百恵だったのよ。

それに……。

「少し時間を置いたら戻ってくる、そう思ったからよ。それにチームは解散したから、わざわざ顔を合わす必要もなくなっただし」

「モモちゃんだって、あなたとチームを組んでいるわけじゃないんだから毎日顔を合わせる必要はないでしょう？ それに不思議なんだけど、どうしてもモモちゃんは時間を置いても戻ってこないって決めてくれているの？」

「大学を辞めているのよ!」

「そう。それは初耳だけどそれがなに？ 大学を辞めたからって永遠に会えなくなるわけじゃないじゃないの」

ああ言えばこう言う。しかもほぼ全面的にわかりやすく毒を含ませて。でもみたまの言うことは一理あるから詰め切れない。

「ひとつ言っておくわ。わたしはあくまで調整屋。顧客情報はきっちり管理する必要があるの。だからいくらやちよさんでも、顧客の情報を素直に明け渡すことはできないわ」

「……そう」

これはもう、駄目ね。この状態に入ったみたまはなにをどうしても絶対に口を開くことはない。いつにも増して攻撃的になってるし、これ以上は百恵について教えてくれないでしょう。本格的にみたまが機嫌を悪くする前に引くことにしましょう。

「わかったわ、邪魔したわね」

「……せつかくだし、調整していかない？ お代はいらないわ」

「そうね。でも駄賃は払うわ。なんなら奮発してあげるわよ。情報料も込みでね」

「そう……」

さつきまでの突っ慥貪な態度はどこへやら、いつもの読めない笑顔に戻ったみたまはクスリと笑う。

みたまは百恵の居場所については教えてはくれなかった。けど全てを隠す気はなかった。明らかに嘘を吐いていることがわかる態度を取ったのがその証拠。

みたまが本気で百恵の全てを隠そうとするなら、きつと取り乱すような演技をして有耶無耶にしようとするはず。本当なのか嘘なのか判断できなければもうお終いなだから。だけど、みたまはそれをしなかった。そのおかげで……ひとつはつきりしたことがある。

間違いなく百恵は、みたまの目が届くところにいるということ。つまり……百恵は無事だということだった。

なにをやっているのかはわからないけど、百恵の安否が確認できただけでも心が軽くなった。

今の百恵は非常に危険な状態。

老化がどれくらい進んでいるのかはわからないけど、少しでも目を離れたらどこかに行ってしまったきり帰ってこなさそうな気がして怖いよ。

もし目が届かないところで弱り切ってしまったら？ 今の百恵の体を治す手段を模索している最中に、肝心の百恵の状態がわからなくなってしまうたらお終いだ。

でも……悔しいことに一番百恵のことを知っているみたまがしっかりと管理してくれているのなら安心できる。ただ心が軽くなったとはいえ、ずっと胸の中に抱えている嫌な予感は拭うことはできない。

調整を終えた私は、今後のことについて考える。

最近の神浜はどこかおかしい。

変な噂話が横行しているし、その噂話に関連した怪奇現象が各地で起こっているという話が私の耳に入ってきて来ている。

もし、それが真実で、魔女が関わっているなら見過ごすことはできない。これは本格的に調べる必要があるそうね。

加えて魔女の数も例年に比べて増加傾向にある。

まるでなにかに吸い寄せられているかのようには、数多くの魔女が神浜に蔓延ばっこっている。しかも揃いも揃ってかなり強い。

低く見積もっても中堅レベル、使い魔から成長したての魔女なんか比ではなく、弱い魔法少女では単騎で倒すことが困難を極めるような魔女が跋扈ばっこしているのだ。

弱い魔法少女が生き残りにくい環境になっている今のこの神浜には、神浜最強星奈百恵という切り札はない。相談に乗ってほしかったけど、どこにいるかわからない以上どうしようもない。だからひとりで考えなければいけない。

なぜかは知らないけど最近キュウベえが神浜のどこにも現れないおかげで新しい魔法少女が生まれることはない。……代わりに何か知らないけど、小さいキュウベえは見かけたけど。

そいつが異変に関わっていると感じた私は追いかけてはいるのだけれど、一向に捕まえられないのよね。基本出てこないし、見つけてもすぐに逃げちゃうし。

……話が逸れたわね。

とにかく普通のキュウベえがいらない以上、神浜で魔法少女が誕生することははない。かりんもいるし、今は百恵のおかげで独り立ちしている子も多いから、神浜市内の魔法少女はなんとかなる。

けど外から来た魔法少女は話が別。

もしそんなに強くない魔法少女が神浜でばったり魔女と遭遇してしまつたら、最悪死んでしまう可能性がある。各地を回る流浪の魔法少女だつて、この世の中に存在している。

本当ならそこまで私がケアする必要はない。でも、神浜で余計な血が流れることを黙って見過ごせるほど冷徹な人間にはなれない。

もし見かけない魔法少女がいて、その子が苦戦しているようなら力尽くでも追い出そう。それがその子のためだし、それでも言うことを聞かないで戦死するならそれはもはや自業自得。私の知ったことで

はない。

「……やるが多すぎるわね」

ぼそつと愚痴をこぼした。

こんな時に百恵がいてくれたらどんなに楽だったか。本当に、どこに行っちゃったのよ百恵……。親友がいけないという現実を再認識して、また少し気が沈んだ。

そして……。一ヶ月が経った。

10月の半ばに入っても百恵は姿を消したまま。怪しげな噂話が集まるものまだまだ全然情報が足りない。でも、怪奇現象の報告例は増えていく一方。魔女もどんどん増えていつているし、どうなっているのよもう……。

と、そんな憂鬱な気分になっている時、あるひとりの女の子が視界に入った。

桃色の髪の毛の中学生くらいの子。手元を見ながら……。魔女のいる方へと歩いて行っている。ということは魔法少女。

魔女は先に見つけた者勝ち、それが神浜のルール。だから別に女の子が探している魔女を横取りする気なんてない。

だけど……。あの子、見ない子ね。もしかしたら外から来た子？  
だったら、見極める必要がある。

まるで待ち受けていたかのようにその子を取り込んだ結界に私もこっそりと侵入して戦いを見守る。そして……。ああ、これは駄目だと確信した。

大量にいるとはいえ、使い魔ごときに苦戦しているようではこの神浜で生きてはいけない。頑張つてはいるけど、戦い方が未熟すぎる。

「あつ……。ウアアツ!!」

ああ、言わんこつちやない。

こんなに使い魔がいっぱいいるときにご丁寧に一匹ずつ相手しているからこうなる。……。頃合いね。

隠れるのをやめた私は周囲の使い魔を一掃して、攻撃を受けて気を失ったその子を抱えて結界から抜け出した。

「ここは、あなたが居ていい町じゃないわ」

どうせ聞こえていないでしょうけど敢えて口に出した。全く、私もお人好しね。

とにかくこのまま市外の適当な公園にでも寝かせておきましょう。それでもう神浜に近づかないことを願いましよう。

これが私と、桃色髪の少女……環いろはとのファーストコンタクトだった。

## RTAパート16 神浜うわさファイル

遂にメインストーリーが始まったRTAはーじまーるよー！

みたまさんからいろはちゃんが神浜に来ていることを教えてもらいましたので、無事にメインストーリーが始まったことを確認できました。

まだウワサを撃破された報告が来ていませんので時期としては第1章『はじまりのいろは』の終わりから第2章『ウワサの絶交ルール』の序盤あたりでしょうね。

さあさあ御膳立てをして差し上げましょう。と言ってもやることは超簡単。

いろはちゃんたちが倒す記念すべき最初のウワサである『絶交階段のウワサ』の警備を緩める、それだけ。

とはいえ露骨に緩めるわけにはいきませんのでここぞとばかりに百恵ちゃんの強権を発動させます。

「二斉休暇、ですか？」

今や百恵ちゃんのパシリと化したダメ人げ……残念美じ……ゲフンゲフン、みふゆさんに羽根たちの一斉休暇について通達するように指示しましょう。

百恵ちゃんがリーダーになってから交代制とはいえほぼ休みなしで働かせていますので、それを理由に全員纏めて数日間の休暇を出します。ちょうど中間試験の時期ですので特に怪しまれることもないでしょう。

一部を除く羽根たちの信頼度が高いので、百恵ちゃんの命令は絶対に聞き入れますし、反抗している羽根たちもこの通達には恐らくですが逆らうことはないでしょう。(休みが取れて)嬉しいダルルオ!?

ちなみに百恵ちゃんに反抗的な羽根たちの正体は、第二部で魔法少女至高主義なんて物騒極まりない思想を掲げている将来の『ネオマジウス』候補です。

このゲームのバージョンが最新型ですので、そこまで設定が更新されているんですね。

まあでも、設定だけでするのでネームド魔法少女としての登場はしません。当たり前だよなあ!?

宮尾時雨みやびしぐれだの安積あずみはぐむだの神楽かぐら燦さんだのがこの時点から登場してくれちゃったら阿鼻叫喚あびきょうわんです。

そんなことしたら『マギウス』ルートが修羅場になっちゃうだろ！  
とはいえその設定が追加されたせいで『マギウスの翼』内で派閥が出来ちゃっているのは少し面倒なんですよね。

このゲーム、更新されるにつれて面白くなると同時に難易度がぐんぐん上がるので本当に走り屋泣かせですよ。でもこの辺がセクシー、エロいっ！（ドM）

おっとそろそろ話を戻しましょう。

とにかくこれから実施する一斉休暇はそんな面倒な『マギウスの翼』内での派閥関係なく受け入れやすく、不審がられず羽根たちを持ち場から離れさせることができる最も有効な作戦だということ。「そうですね。羽根のみんなも頑張ってくれていますし、いい考えだと思います」

おつ、そうだな（適当）。

みふゆさんを言いくるめることができたので無事に通達が行き渡るでしょう。

この間に『絶交階段のウワサ』を倒していただいとつと第3章の『神浜うわさファイル』まで行ってほしいです。

ちなみになんですが、『神浜うわさファイル』のボスである『マチビト馬のウワサ』を警護する魔法少女はいませんので御膳立てはしなくて大丈夫です。

だってあそこのウワサが活動するのが結構夜遅くですし、そもそも拠点である水名神社が閉まっていて普通は入ることができませんので警備する必要ありません。

だからノータッチで大丈夫だ、問題ない。

さて、仕込みが完了しましたので第3章が終わるまでは特にやることがありませんので倍速していきましょう。

そしてその間きつと退屈してしまううでしようみくなくさくまくの



くたくめくにい。

今後のチャートについて説明をさせていただこうと思います！

百恵ちゃんが裏方に回って二ヶ月ほど経ちますが、第4章の『ウワサの守り人』で表舞台に返り咲きます。

なんで第4章からかという点、百パーセントチームみかづき荘の面子が『マギウス』に下ることがなくなるからです。

今までホテルフェントホープに引き籠っていたのは他でもない、チームみかづき荘のメンバーとぼったり出くわすことを嫌っていたからです。誰かひとりでも『マギウス』に附ついてしまうとチャートが壊れちゃいますからね。

最近は事務仕事やら魔女の乱獲やら面白みのないことばかりやってきましたが、ここからは派手に動いていきますよ。

百恵ちゃんがいろはちゃんを筆頭とするチームみかづき荘を前に敵として立ちはだかります。

まあ手加減しまくりですし、最終的には原作通りになるようにするのですが、それでも圧倒的な実力差というものを見せつけてあげましょう。

恐らく原作勢のひとりである佐倉杏子を交えた五対一という、並の魔法少女じゃあ無理ゲーな戦闘が入ると思います。五人に勝てるわけないだろ！ ですが……うえっへっへ（ゲス顔）。

まあ、そこはこうご期待ということぞ！

次の第5章『ひとりぼっちの最果て』ですが、ここはぼっくれます。理由はふたつありまして、まずひとつ目は関わりとタイムロスになるからです。RTAだからね仕方ないね（レ）。

そしてもうひとつは過剰戦力になってしまからです。ただでさえアリナパイセンがエキサイトしているのに、そこに百恵ちゃんまで参戦してしまうとチームみかづき荘の勝ち目が消えてチャートが壊れます。

ということぞ（百恵ちゃんの出番は）ないです。

続いて第6章の『真実を語る記憶』についての説明なのですが、その前にひとつ解説すべきことがあります。

それは羽根内にいるネームド魔法少女との好感度の調整についてです。

『マギウスの翼』に所属しているネームド魔法少女は、みふゆさん、天音姉妹、牧野郁美、まきのいくみ、観鳥令、保澄雫、七瀬ゆきか。そしてもう間もなく合流するであろう、原作勢のひとりである巴マミともしへが加わって合計八人です。

まずはみふゆさんですが、基本的に百恵ちゃんに忠誠を誓っていますので指示通りに動いてくれます。

好感度も比較的高いので味方と見て間違いありませんが、百恵ちゃんが知るとまずい情報（主に『マギウス』のやらかし関連）は積極的に口にしません。

百恵ちゃんが暴走するリスクを抑えてくれるからRTA的にはありがたいのですが、忠誠を捧げた相手に対する態度としてはどうなんや？ ままええわ。

次に天音姉妹。

このふたりはみふゆさんを慕っていますので、間接的ではありませんが百恵ちゃんの言うことを聞きます。

百恵ちゃんが基本的のみふゆさんに指示を出し、そのみふゆさんが羽根全体に指示を出すからです。

観鳥さんといくみんも同様です。

あんまり関わり合いがないのに地味に好感度が高いのは、百恵ちゃんがこの二ヶ月間に行った組織改革の成果が出ているからでしょう。

『マギウス』ではなく『魔法少女の解放』に忠誠を誓ったふたりにとって、『マギウスの翼』のトップとして機能している百恵ちゃんはまさに理想の上司なのです。

以上この四人は好感度的に上司とその部下、みたいな関係に収まっています。

雫ちゃんとは今のところ遭遇していません。

多分まだ雫ちゃんが『マギウスの翼』に入っていないからです。ちよさん、（ノンケで）「ごめんなさい」していません。

一時期は雫ちゃんと知り合おうと画策していたんですが、チャート

的に必要ないということに気が付きましたので、遭遇したらいい程度にしか思っていません。

レポートはかなり便利なんですけど、もはやあってもなくても変わらないですからね。

続いて七瀬ゆきかですが、意図的に水名区に足を運ばないようにしていましたのであの一件から遭遇していません。

その甲斐もあつて好感度を抑えることはできていますが、それでも天音姉妹たちよりは高いです。やっぱり不本意だったとはいえ助けちゃったのが原因ですね。

実技訓練以外はもはや自室と化した執務室に籠りつきりで外に出ないようになっているのは、デバフがかかっていることを周囲に悟らせないようにするという理由もあるのですが、ゆきかと遭遇しないようにするという狙いもあります。

あつ、そうだ（唐突）。

デバフがかかっていることがバレたらどうなるのか説明するのを忘れていましたね。

百恵ちゃんは日に日に弱体化が進んでいっています。

《魔力》《攻撃》《防御》《速度》《経験》《精神》の六つのステータスの内の《経験》以外のどれかがランダムで減少していく、それが『魔力の衰え』というデバフです。

今のところ百恵ちゃんは主に《魔力》と《精神》に影響が出始めています。正直言ってほっとしました。

《魔力》は90もあるので少し減った程度じゃビクともしませんし、《攻撃》と《速度》にそこまで効果が出ていないので、このまま症状が進行したとしてもワルプルギスの夜を駆逐することは出来そうです。

ただステータス以外に肉体面でも影響が出始めちゃっているのは問題です。

両腕がだいぶ老けてしまったせいで腕を隠さないと百恵ちゃんの異変に気が付く魔法少女が出てきてしまいます。というかみたままさんには隠していてもバレました。秘密にしてくださいすけどね。

さて、そんなデバフがかかっていることを周囲が知ったら間違いな

く百恵ちゃんを守ろうと動き出します。

具体的に言うなら百恵ちゃんとそこそこ深い交流のあるネームド魔法少女たちがこぞって『マギウスの翼』に入ってくる恐れが出てきます。そんなことになったらシナリオ壊れちゃう！

加えて、組織内で百恵ちゃんと対立している灯花とねむ、そして一部の羽根たちから狙われるリスクが跳ね上がります。全く困ったもんじゃ……チツ。

今のところみたままさん以外には気付かれていませんが、やつちゃんやかりんちゃん、帆奈ちゃん、まなか先生といった好感度の高く付き合いが深い魔法少女相手には多分すぐにバレます。

電話を放置して距離を置いているのも、百恵ちゃんの体の異変に気付かせないようにするためです。

という事情がありまして、百恵ちゃんが色んな意味でヤバイ状態なのは可能な限り隠さないといけないのです。

以上、説明終わり、好感度の方に話を戻しましょうか。

最後にマミさんですが、好感度を上げるだけ無駄なので放置します。

だって洗脳されている上にウワサと融合させられているからね仕方ないね（レ）。

下手に好感度を上げると洗脳が解けてしまう可能性がありますし、洗脳やウワサとの融合のことを百恵ちゃんが知ったらまた間違いく暴走するので意地でも会わせません。

というか、マミさんは『マギウスの翼』に所属していますが、『マギウス』の直属の魔法少女扱いですので、おそらく灯花とねむが百恵ちゃんに会わせることに待ったをかけるでしょう。

そして百恵ちゃんと『マギウス』の板挟みになっているみふゆさんも、そんなトラブルの素であるマミさんを百恵ちゃんに紹介するとは思えません。

ということでもマミさんファンのみんな、すまん。本チャートではマミさんはガン無視、全力でスルーする（激ウマギャグ）方向性で行きます。

なのでそんなマミさんががつり登場する第6章の『真実を語る記憶』で記憶ミュージアムに行くイベントもばつくれまます。

そして肝心の第7章『楽園行き覚醒前夜』。

これが百恵ちゃんの『マギウスの翼』の長おさとしての最後の仕事です。マミさんのみならず鶴乃まで洗脳された挙句ウワサと融合させられたなんて知ったらまあ、こちらがなにをする間もなく間違いなく百恵ちゃんはブチギレます。

みふゆさんも見切りをつけるのでそれに便乗して『マギウス』を裏切ってワルプルギスの夜が来るのを待ちましょう。

はい、これでチャートの説明終わり！ 閉廷！ 以上！ みんな解散！

イベントが来るまですつ飛ばしま……おつ。

なんか浮かない表情のみふゆさんが来ました。

どないしたん？

「……モエちゃん、その……ふたつのウワサが消されました」

なんだって！ それは本当かい!?

詳しく話を聞いてみましょう。

多分チームみかづき荘の作業だと思っんですけど（名推理）。

ふむ、ふむ……ヨシ！（現場猫）

無事にやっちゃんたちが『絶交階段のウワサ』と『マチビト馬のウワサ』を倒してくれたみたいで何よりです。これで物語は第4章に突入します。

さあさあ、百恵ちゃんも本格的に動いていきましよう。ようやく派手に動くことができて見所さん!?!が作れそうです。

っと、んん？ どうしたのみふゆさん。

まだなにか百恵ちゃんに話すことがあるんですかね？

「モエちゃん。その……『マギウス』から呼び出しが出ています」

ああ、そんなことですか。

そしてやっぱり呼び出されちゃいましたか。

プレイヤーキャラが大きな権限を持って『マギウス』に下り、かつ『マギウス』のメンバーと関係が良好じゃない場合、仕事で何らかの支

障が出ると呼び出しがかかって糾弾されるイベントが起きることがあります。

百恵ちゃんは灯花とねむと関係が最悪ですので、まあ間違いなく来るだろうなって思っていました。

面倒くさいことこの上ないイベントですが、残念ながら百恵ちゃんは格が違うんです。『マジウス』からの追及なんて真つ向から突っばねてやりましょう。

じゃけん『マジウス』のところ行きましょうね。

オッス、(案内) お願いしまーす。

「来たね、星奈百恵」

「久しぶりにやー?」

例の地下大聖堂で実にいい笑顔でおガキ様たちがお出迎えしてくれました。

約二ヶ月ぶりつすね! すっかり嫌われちゃって、全然会わなかったつすもん。

アリナもいますがこちらはいつも通り紅茶を嗜んでいる様子。小学生ふたり組と違ってアリナとは頻繁に顔を合わせていますからね。

魔女狩りを打ち切られてからはなぜか呼び出されることがなくなり、アリナの方から百恵ちゃんの部屋に来て勝手にデッサンして帰っていくのが普通になりました。

RTA的には大助かりなのですがなんでなのでしょう。本当にアリナの行動は読めません。

好感度が高いことは間違いありませんが……。

「みふゆから聞いているよね? 今回の失態はどうやって責任を取ってくれるのかにやー?」

マウントを取った瞬間これです。頭に来ますよー。

ですがここは百戦錬磨の百恵ちゃん、しっかり対応していきましよう。

あー、今回の失敗ね。羽根たちを全員休ませていたからね仕方ないね(レ)。

え？　なんで全員休ませる必要なんかあるんですか（正論）ですって？

そら、みんな仲良く休まないと不公平になっちゃうからよ。

みんな一生懸命働いているし中間テストの時期だからね、休ませるなら同時じゃないとダメよ。

だから今回は運が悪かっただけ！　実に残念だあ（狙い通り）。

「ふうん。じゃあ今回の最強さんの采配に間違いはなかったって言うのー？」

そうだよ（肯定）。

あ、でも責任は取りますよ。

今まではどっしり構えていたけど、次からは百恵ちゃんも積極的に現場に赴くからさ！

「！　あんなに自分の存在を隠していたのに、表舞台に立つつもりかい？！」

まあ多少はね？　というかやつちやんたちを止められる魔法少女なんて百恵ちゃんかみふゆさんくらいでしょ実際。

羽根たちも強くなっているとはいえやちよや鶴ピー、フェリシアに勝てるわけがありませんしね。

「……ふん。じゃあ好きにしたらー？　最強さんのお手並み拝見と行こうじゃない？」

おう、任せてくれよな！　まあその『ミザリーリユトンのウワサ』も倒させちゃいますけどね！

てなわけでじゃあな！　ワルプルギスの夜を呼ぶ準備だけはしておいてくれよ！

ふう、難なく乗り切りましたね。

まあ、失敗するように仕組んだのはこちらで、百恵ちゃん自身は失敗するように手引きしたわけではないですから、特に怪しまれることもありませんでした。

アリナがなんにも喋らなかったのが気になりますますがまあ大丈夫でしょう。

休暇を与えていた羽根たちも戻ってきましたのでね、早速次の一手

を打っていきましようか。

次にチームみかづき荘に狙われるのは先程も言った通り『ミザリーリユトンのウワサ』です。

しかしながら百恵ちゃんには未来予知能力なんてないのでわかるわけがありません。

そこで上位の羽根である白羽根全員に緊急連絡先として百恵ちゃんへの携帯電話番号を教えます。プライベート用のものじゃなくて、先日購入しておいた仕事用のアドレスですけどね。

すると当然白羽根の中に天音姉妹がいますので、そこから百恵ちゃんに連絡してもらって、すぐに急行するように手配をします。そうすればごく自然に第4章に割り込むことができます。

というわけでみふゆさん、白羽根全員にこの連絡先を教えとい

ね。  
勿論、勝手に流出させるのは厳禁だからな！

「わかりました」

ヨシ！（現場猫） これで仕込みはお終い！ あとは連絡が来るのを待つだけです。

あっさりと仕込みが終わってしまいました。これも下積み時代に苦労したからなんですよ。

ここまで信用を掻き集めるのにどれだけ魔女を駆逐して神浜を走り回ったか……きつと傭兵ルートを走ったことがあるひとたちならわかってくれるはずですよ。

え？ わからない？ そう……（無関心）。

はい、それでは今回はここまでにしましょう。

次回は天音姉妹から連絡が来て、『ミザリーリユトンのウワサ』の所に急行するところから始めていきます！ ひっさびさに大暴れしてやるからなあ、見とけよ見とけよ。

それでは、ご視聴ありがとうございました！



## S i d e . 七海やちよ 絶望

百恵が行方を晦まして二ヶ月が経った。

そしてこの二ヶ月で、私——七海やちよの取り巻く環境がガラリと変わった。

今現在私は、人々の記憶から欠落してしまった、けれど確かにそこにいたはずの妹さんを探しに神浜にやってきた魔法少女、環いろはを助手に添えて、現在神浜で怪奇現象を起こしている元凶のウワサを調査している。

成り行きで鶴乃も首を突っ込んでできちゃって、今はこの三人でチーム……のようなものを組んでいる。

ええ、そう。チームのようなもの。断じてチームじゃないわ。

ももこのチームメイトに襲い掛かった『絶交ルールのうわさ』から始まり、質の悪い偽物を作り出す『口寄せ神社のうわさ』を撃破したのも束の間。

神浜で活動するため私の家であるみかづき荘に越してきた環さんがなにかに巻き込まれていることが発覚した。

まるでなにかのカウントダウンのように彼女の身の回りに数字が書かれた紙が落ちてくる。現象からして魔女の仕業じゃない。ということは……ウワサが絡んでいる可能性がある。

だけど、私が纏めておいた『神浜うわさファイル』の中に該当するようなウワサはない。

ということとは……最近生まれたばかりの新しいウワサだということだった。

心当たりがないかを聞いてみると、環さんは『フクロウ印の給水屋さん』とやらからもらった一杯の美味しい水を飲んだ直後から紙が落ちてくるようになったらしい。……もうこれは九割九分確定ね。

明らかにその水が環さんを襲っている怪奇現象を起こしている。

環さんと私、二手に分かれてその給水屋について調べることにした。なにかわかったらお互いに連絡を取り合うように約束して調査に乗り出す。

環さんが水を飲んだ場所……参京区を調べていると、異形の存在と遭遇した。

一見使い魔に見えるけど、結界を持っていない。

そしてなによりおかしいのは、私には歪な存在に見えるのに、なにやら親しげに話している様子の子たちは普通に友達のように会話をしているところだった。

そして、その異形はなにかの噂を広めようとしている。

なにかは推察できないけれど、噂の内容を確認しようと少し近づこうとしたところで。

「全く、さつきから同じことばかり喋くりやがって……アンタ、一体なにもんだ？」

私よりも先に……赤い髪の毛の女の子が話しかけた。

すると、その異形はまるで最初からそこにいなかったかのように消えてしまった。

あと少しで噂を聞き出せたかもしれないと思うと悔しいけど、それとは別に手掛かりになりそうなものを見つけた。

あの子も私と同じで、アレを別の存在に見えていた。だから思い切って話しかけた。自分が魔法少女だということも一緒に。

案の定、赤髪の少女……佐倉杏子さんは魔法少女だった。

そして奇しくも、その佐倉さんも環さんと同じ水を飲んだらしい。そして定期的に数字が書かれた紙が落ちてくるということも同じだった。

事情を話して協力を持ち込もうとしたのだけれど……価値観の違いからそれは実現できなかった。でも収穫があつたのは間違いない。環さんに起きている怪奇現象は給水屋からもらった水を飲んだからで確定。

そして噂を広めている得体の知れないなにかがいることも分かった。

ひとまず環さんと情報共有するために鶴乃の店である万々歳に集合することにした。

カウンター席で待つこと数分、環さんは……ひとりの少女を連れて

やってきた。

「お、こいつやちよじゃん！　すげー有名なヤツ！」

その子を見て思わずジト目になってしまった。

「環さん……」

「は、はい！」

「すぐにこの子と解約しなさい！」

「そんな突然!？」

面食らう環さんに、いったい自分が連れてくる人物が誰なのかを説明した。

深月フェリシア。

本人は強い傭兵として有名だと思っているらしいけど、どんなに針が振り切れて測定不能なぐらいの悪い傭兵として有名な魔法少女だ。

魔女を見れば目の色を変えてブレーキなしに暴走する。

強さは折り紙付きだけど、その暴走で味方を苦境に追いやることもある危険人物。

おまけに報酬次第じゃ寝返ることも多々あり。

みたまが憤慨しながらお尋ね者の張り紙を調整屋に張り出して、いたことが記憶に新しいわ。

このはたちの事件の時は助かったけどそれはそれ。

『傭兵』としての彼女の評価は私から言わせてもらえば最悪だ。今すぐ『傭兵』を名乗るのをやめてほしいと思っているほどに。

で、その悪名高い傭兵は、どうやらご飯を作ってもらうことを条件に雇われているらしい。

安い報酬くらいしかいいところがないとは聞いていたけど、ここまでは……。

ただ一度決めると頑固になる環さんが、自分がずっと見ているからと反発する。そして深月フェリシアは調子に乗って私のことを「偏屈ババア」呼ばわりしてくる。

こいつ……！

「やちよはババアじゃないよ！　ギリ未成年だよ！」

そしてフオローになっっていないおバカな鶴乃が乱入してきた。後で覚えていなさいよ。

私から興味が鶴乃に移った深月フェリシアが鶴乃に突っかかる。

「はあ？　誰だよオマエ……」

「最強の魔法少女、由比鶴乃とはわたしのことだー！」

「はっ、なに言ってるんだ。最強はアイツに決まってるだろうが、この自称最強」

「ぐ、ぐぬっ……」

鼻で笑われた鶴乃が悔しそうに表情を歪ませた。

「まあ……そうね。確かに最強の魔法少女はあなたじゃないわよ鶴乃」

「ひ、ひどい……けど、うん。そうだよね……調子に乗ったよ」

ギリ未成年とか声高々に言ってるのけた鶴乃にささやかな復讐を遂げた私は少し気分が良くなった。

全く……まあ、この深月フェリシアは環さんに責任をもって面倒を見させるとしましょう。

強力な魔法少女なのは違いないし。

「あの……ちよつと気になったんだけどいいですか？」

「なに？」

「その……最強の魔法少女って、なんですか？」

ああ……そうか。

環さんは神浜の魔法少女じゃなかったわね。だから知らないのも当然か。

「ああ？　オマエ知らねーのかよ、神浜の魔法少女のクセに」

「う、うん。私、最近神浜に来たばかりだから……」

「そーなのか？　じゃあ教えてやるよ。神浜最強の魔法少女はオレと同じ『傭兵』の——」

「星奈百恵よ」

深月フェリシアのセリフを遮って私が名前を言ってやった。

割り込まれた深月フェリシアは不機嫌そうに「先に言うなよ！」とか言っているけど知ったことじゃないわ。というかこの子に百恵を

紹介されるのはなんだか腹が立つし。

それになにが「オレと同じ」よ。全然違うわ。

「星奈、百恵さんですか？」

「ええ。この子と違って、神浜の魔法少女全員が認める『傭兵』よ」

「どういう意味だー！」

「意味通りよ。あなたと百恵じゃ月と鼈すっぽんもいいところじゃない。似ているところは大きな武器で戦うところくらいでしょ」

「なにをー！」

ぎやあぎやあ五月蠅い深月フェリシアと言いつている間に、ここ顔の鶴乃が環さんに説明していた。

鶴乃も百恵のことを師匠と仰ぐほど尊敬していたし、嬉々として百恵のことを環さんに話していた。

「そ、そんな凄い魔法少女なの？」

「うん！ わたしも色々教えてもらったし、鍛えてもらったこともあるんだよ！」

「おつ、それならオレもあるぞ！ キッツいんだよなあアレ！」

ふたりはそのまま自分たちが受けた百恵の戦闘訓練についての話をし始めた。そこに環さんも参加して色々話を聞いている。

深月フェリシアって百恵の指導を受けたことがあるのね、知らなかったわ。

それでなんであんな……ああ、そうか。

かりんと違って百恵は『傭兵』としての教育じゃなくて、戦闘技術の教育だけを施したのね。

本人の気質を変えることは難しいと踏んだからかどうかは知らないけど、暴走がエスカレートする前に魔女を倒させるために多分みっちり。

道理で異常に強いわけよ……。

「そーいえば最近は見えてねーな。オマエ知ってるか？」

「ううん。でも言われてみればしばらくの間百恵ししよーと会ってないなあ。やちよは知らないの？」

「……………ええ」

短く返した。本当にどこに行っちゃったのか……。

それからは噂を広めている使い魔みたいなものに遭遇したこと。そしてそれを見つけたらすぐに連絡をするようにだけ伝えてお開きになった。

数時間が過ぎて、引き続きウワサについて鶴乃と調査をしていると環さんから連絡が入った。

私が遭遇した使い魔のようなものを見つけたらしい。

すぐにそこに到着すると路地裏で、環さんと深月フェリシアが怪しげなローブを身にまとった集団に囲まれていた。

そのローブの集団はなにやら私たちに言いたいことがあるらしく「ちようどいい」と言葉を漏らした。

「何がちようどいいの！……はっ！　もしかして何かわたしたちに言いたいことが!？」

「その通り……」

「っていうことは……あの変なヤツに手を出さなっこと!？」

「その通り……」

「それで話し合いをしたっていうこと!？」

「すべて言われてしまった……」

「鶴乃ちゃんすごい……」

「えっへん」

頭の回転が速い鶴乃が見事に向こうの言いたいことを当ててしまった。

まあでも、普通に考えてそれしか私たちに接近する理由はないわよね。

さてどんな提案をしてくるのやら。

と、そんな期待を少ししてみたけどすぐに落胆した。

話し合いと向こうは言いつつもそれはただの一方的な要求だったのだから。

これ以上ウワサに手を出すな。

ただそれだけのシンプルな要求だけど、理由が全く見えない上に姿を隠してこそこそ暗躍しているやつらの頼みを素直に聞くバカがど

ここにいて思っているのやら。

あんまり知らないと思うけど、実は狡猾で計算高い性格をしている百恵と知恵比べをしたこともあるのよ。舐めないでほしいわ。

どういう理由があつて人に危害を与えるようなウワサを守っているのかは知らないけど、そこに正当性なんてあるわけがない。こんな危険なことをしている連中がいると知った以上は野放しに出来ない。

何か手を……と、そこで……そうだ。良いことを思いついた。

私は深月フェリシアに囁く。

追加の報酬を用意するから私たちを裏切つたふりをして敵の本拠地を暴け、と。

もはや自分がなにかまずいものに巻き込まれていると理解している彼女は素直に従つてくれた。

そして念のために鶴乃に深月フェリシアの後をつけるようにも指示する。

本当に裏切られたら意味がないし、なによりあの子を私はまだ完全に信用してない。保険は必要だった。

すぐに向こう側に寝返つたふりしてローブのやつらの所に残つた深月フェリシア、そしてそんな彼女を監視する鶴乃を置いて、私と環さんはその場を離れる。

移動している最中環さんは悲しそうにしていたけど、事情を話したら……怒られてしまった。

みんなに伝える余裕なんてなかったのは事実だけど、環さんのリアクションを楽しんでしまったのもまた事実。素直に謝つた。

それから二時間が経過した。

紙に書かれている数字は『2』。

つまり残り二時間で何かが起こるということ。タイムリミットは迫ってきている。

それでも深月フェリシアから連絡がこない。

……これはもしかしたら裏切つた可能性が出てきたわね。

案の定深月フェリシアをつけていた鶴乃が戻ってきた。

途中で撒かれてしまったらしい。……確定ね。

よほど向こうの提案する報酬が良かったのか、深月フェリシアは私  
たちを裏切った。そう考えて間違いなさそうだった。

環さんは相手に捕まったのかもしれないと擁護するけど、どうだ  
か。

曲がりなりにも百恵の戦闘訓練を受けている彼女が易々と捕まる  
とは考えられない。

まあ、彼女が裏切ったかどうかの話はさて置きましょう。こっちに  
はもう時間がないのだから。

私たちは深月フェリシアを見失った場所まで鶴乃に案内してもら  
うことにした。妙に変な道ばかり歩いていて心配なのだけど……方  
向はこっちで正しいという。

どうやら鶴乃は屋根伝いで追いかけていたみたいで直線距離でし  
かわからないらしい。なんとも鶴乃らしいというかなんというか。

そして深月フェリシアを見失ったという場所に到着すると、そこ  
は渦中の人物である深月フェリシアがいた。

そして演技は止めにして戻っておいでという環さんを拒絶した。

……やっぱ裏切ったのね。

所詮はプライドもなにもない、百恵が築き上げた『神浜の傭兵』と  
いうブランドを汚すような報酬第一の典型的な傭兵だったというこ  
とね。

一緒に行動すれば見直す点もあるとは思っていたけれど、どうやら  
思い過ぎしだったようだ。

だけど、そんな私とは対照的に環さんと鶴乃は深月フェリシアが裏  
切った原因は、自分の今の状況がわかっていないからだと指摘する。

まあ……確かに行き当たりばったりで先のことなんて何も考えて  
いなさそうではあるわよね。

「フェリシアちゃん！ もう二時間もない間に、本当に不幸になっ  
ちゃうよ!? それでもいいの?」

「またそれかよー。今更不幸になるーがオレには何ともないからな。  
父ちゃんと母ちゃんが死ぬ以上の不幸があつてたまるかよ」

……それは初耳ね。彼女、ご両親を亡くしていたなんて。



なるほど、今日のご飯とかやつすい報酬とは思っていたけど、そういう事情があったのね。

天涯孤独の身だから生きるために稼げる仕事をしようとしていたわけか。

なんとなく、本当になんとなくだけど、そこは百恵と似ている気がした。

思えば百恵はどうやって生活費を工面していたんだろう。

結構いいマンションに住んでいたし、ちよつとした贅沢をする余裕もあるように見受けられた。でもそれは、とても傭兵稼業だけの稼ぎで維持できるような生活じゃあない。

天涯孤独の身って言うていたからご両親と縁を切ったのか、それともすでにこの世にはいないのか。考えれば考えるほど謎ね。

もしかして私って、実はあんまり百恵のことを知らないんじゃないか……。

ずっと明るく気高く、そしてなんでもないような顔で振舞われていたから気が付かなかつたけど、神浜に来るまでの百恵の過去や家族について私はなにも知らない。

唯一知っていることがあるとするなら、百恵が前の環境を良く思っていたいなかったことくらいだ。

そんなことを考えているうちに、環さんが深月フェリシアを改心させることに成功していた。

……正直言つて凄いなって思った。

もし環さんが居なかつたら、深月フェリシアが裏切った途端に私は彼女と敵対していた。

いや、それ以前に彼女と手を組むこともなかった。

その結果、このウワサによる異変も全く進展することはなかったと思う。

ああ、そうか。

私が環さんと組んで不思議と違和感がないのは、環さんのこういうところが百恵と似ているからか。

環さんも百恵も常に相手を気遣つて理解できるところまで理解し

ようとする性格だ。自分の話から入って自然と相手の心を開かせる説得の仕方もどこか似ている。

まあ、多分環さんは素だからかわいいものね。

百恵は狙ってやっている節があるから恐ろしい。

そんな環さんの説得で今度こそそこつち側についてくれたフェリシアの案内の下、私たちは参京院教育学園に到着した。

ここは確か、なかなか通っている学校だったわね。

どうやらこの学校の校庭を越えた先にある地下水路がああ怪しい集団の拠点になっているらしい。

今日は休日だから人気ひとけもない。侵入することは容易かった。

そして……あつた。

この扉の向こう側が地下水路ね。

耳を劈つんぎくような音を立てて錆びた金属の扉を開くと……キーツ  
キーツ！

「わひやつ、コ、コウモリ!? キヤツ!! こないで！」

「ちよ、おい、コウモリぐらいで騒ぐなよな！」

「わああああつ！ 顔にぶつかった！ ばつちい！」

「落ち着きなさい鶴乃！ あなたの店と同じようなもんよ！」

「ひ、ひどいよやちよ！」

「キヤアーツ！」

「環さん落ち着いて！」

物凄く騒いってしまった。

「そこにいるのは、だれだ……」

そして当然のように見つかってしまった。

どうも彼女たちは『マジウス』という組織の目的を果たすために構成された『マジウスの翼』という下位組織。その中でもこうして黒いローブを着て素性を隠している彼女たちは末端の黒羽根と呼ばれているらしい。

そしてその目的は『魔法少女を救う』こと。

彼女たちが従う『マジウス』という組織はこの神戸市で魔法少女を呪縛から解放することを目論んでいて、彼女たち『マジウスの翼』は

その手助けをしているらしい。

魔法少女の解放？

それはつまり……魔法少女が辿る運命から逃れようとしているということ？

でもそれがどうして、ウワサを守ることで成立するのか全くわからない。

もう少し詳しく聞こうと思ったとそのとき、横槍が入った。

「なに、チンタラしてんだよ！」

私たちの後方から赤髪の魔法少女……佐倉杏子さんが黒羽根たちに攻撃を仕掛けた。

どうやら彼女も自分の身に起きていることに危機感を抱き、途中で私たちを見かけてからずっと尾行してきたらしい。

佐倉さんの乱入により話し合いは終わり、遂に戦闘に発展した。

ただ彼女たち黒羽根はそこまで強い魔法少女ではなく、物の数分で鎮圧できてしまった。佐倉さん……やるわね。

ずっとひとりで戦い続けてきた人の戦い方をしているけど、手を組むと決まればしっかりとこちらと連携を取るように動いてくれるから物凄く戦いやすかった。

「あなたほどの魔法少女なら分かるはずだ……七海やちよ。魔法少女を解放するとは、どういうことなのか。それに縋る気持ちも……」

「ええ、理解はできるわ……。ただ、他人を巻き込むようなウワサを利用してまで、私は救われたいと思わない」

「……はっ。やっぱり、あなたは傲慢だ。あの人と違って真の意味で、私たちのような弱い魔法少女を見ていない」

……あの人？

それって一体……。

「いつまで、そいつと話してるつもりだい？ チンタラしてたら先に行っちゃうぞ!？」

「やちよさん、早く行きましょう」

「！ ええ」

聞きたいことはあつたけど今は環さんたちにかけられた呪いを解

く方が先決。

私たちは地下水路を駆け抜ける。

そして少しすると、奥が開けている空間に出た。

そこには……先程の黒羽根たちとは打って変わる白いローブを着込んでいるふたり組がいた。

「マギウスの翼、白羽根の天音月夜にごさいます」

「マギウスの翼、白羽根の天音月咲だよ。どうぞ、ウチらの奏でる音色に」

「酔いしれてくださいませ」

ふたり組……白羽根の天音月夜と天音月咲は、非常に面倒くさい敵だった。

まず武器が笛というのがいただけない。

この音が反響するような空間では彼女たちの武器はかなり有効に働いてしまう。

数の上ではこちらが圧倒的に有利なはずなのに、相性の問題で全然奥に進めない。どこから攻撃が飛んでくるかがわからないから下手に動けない。

どうすればと考えると、五月蠅い鶴乃の声がこの広間に響き渡る。……声？

ああそうか。鶴乃は頭が良い。その手があったわね。

周りが五月蠅ければその音が彼女たちの攻撃である笛の音を打ち消してしまう。

鶴乃はそれに気づいて騒ぎ立てているのね。現に、あの天音姉妹の攻撃が弱まった。

これで真つ向勝負。

二対二で数は互角、そして向こうは双子だから普通のチームよりは連携が取れていると思う。だけど、動きからしてまだ魔法少女として若すぎる。だから負ける気がしない。

丁度環さんも気が付いたようだし……騒ぎ立てている三人の喉が潰れない内に終わりにしましょうか。この下らない戦いを。

私が前に、そして環さんがバックについてそれぞれ攻撃を仕掛け

る。

笛は攻撃する際に必ず口元に持って行かないといけないからどうしても隙ができるし、攻撃が来るタイミングも予測しやすい弱点を持っている。どう考えても中距離を得意とする武器だ。

だから、しつかりと前衛と後衛で役割分担できている私たちとの相性は最悪。

これで形勢が逆転した。

双子のソウルジェムはもう真つ黒。

魔力が付きかけている。勝敗は決した。と、思いきや。

彼女たちからバケモノが飛び出した。

あれは……そうか。以前環さんが出した、ソウルジェムが濁り切った先に出てくるバケモノ。

魔女になるはずの魔法少女の運命を真つ向から否定する、不吉な怪物。

佐倉さんは口寄せ神社の件で遭遇した市外の魔法少女、バマミと知り合いだったらしく、この現象のことを知っていた。

だけどバマミとは違って、至って冷静に物事を見ている。環さんとも打ち解けているみたいだし、完全に私たちの味方になってくれたとみて間違いない。

そしてそのバケモノを、天音姉妹は『解放の証』だと胸を張った。

「これは感情の映し、私たち自身を解放放ったもの」

「それ故に我々は、これをドツペルと呼ぶんだよ」

「その、解放放った自分が『解放の証』ですって……?」

「あなたには分かるでしょ?」

「七海やちよさんなら分かると思いますけど?」

またこいつらも……。

なになが「私なら分かる」よ。

確かに言いたいことは分かるわ。

本来は魔女になるはずの濁り切ったソウルジェムが、そのドツペルとやらが出たら綺麗に浄化されている。まさに魔法少女の運命から逃れられた超常現象と見て間違いない。

だけど認めない。

こんな人を不幸にするようなやり方をしてでも、私は救われたいとは思わない。

だって私は知っているから。

この理不尽な運命を知ってなお、懸命に戦う魔法少女たちがいることを。

その子たちを……百恵を、軽く見るようなこのやり方を私は絶対に認めない。

残り時間は30分を切った。タイムリミットは着実に迫ってきている。

敵の増援もあるからもう形振り構ってられない。

ガチで倒しにかかるわ。

私はそれぞれ指示を出した。

天音姉妹は私と鶴乃で対応。環さんは黒羽根を牽制し、それをフェリシアが無力化。佐倉さんは……って、あのふたり！

声を出して指示を出している私に注目が行っている隙に抜け駆けして奥に行こうとしている！

……いや、でもこれはチャンスね！

「よそ見だなんて、なめられたね月夜ちゃん！」

「まって月咲ちゃん！ あのふたり……ウワサの方に向かってる！」

……今ね。

「相手もよそ見だなんて、こちらも舐められたものね」

「そうだね、やちよししょー！」

「しまったー！」

特訓の時に百恵が見たらきつと怒るような見え見えの隙を晒す双子。やっぱり魔法少女としての経験が足りていない。

戦いに関してみっちり百恵に仕込まれた私と鶴乃がそれを見逃すはずがなく、私は姉の方の足を容赦なく槍で貫き、妹の方は鶴乃が炎を飛ばして一時的な酸欠を起こさせた。

これでおそらくここでの最高戦力は戦闘不能。後のやつらは私と鶴乃でどうにかなる！

このまま環さんとフェリシア、佐倉さんを奥に行かせてウワサを――ッ！

「なっ……これは……この魔力は……」

知っている魔力を感知して、私の思考が停止した。

その魔力を宿す者はこちらに近づいてきている。

私たちが来た方……この地下水路の入り口に続く道から足音が聞こえる。

こつん、こつんと、その足音はこちらに近づくとつれ大きく広間に響く。

「……ふっ、私たちの勝利です。私と月咲ちゃんはあくまで時間稼ぎ。役目は終わりました」

足を抑えつつも天音月夜は皮肉に笑う。もう勝利を確信したような顔だった。

ということはやっぱり……！

「派手にやっているのう、全く」

……ああ。

この若干幼さを残しながらも、耳に入りやすい通る声。古風な口調。小さな人影、そしてこの魔力の性質……。

「え、う、嘘……」

「マジかよ……」

さっきの声の主が誰なのかわかった……というよりもわかってしまったと表現した方が正しい鶴乃とフェリシアの声。

それは今までの元気な声とは程遠い、絶対に勝つことができない存在と対峙した時のような絶望感が聞いていて感じられる。

きつとふたりは察してしまったのでしよう。

この声の主が私たちの味方ではないと。

そんな希望的観測ができないほど、本能が警鐘を鳴らしているんでしょう。今すぐにこの場から離れろ、と。

「こんな分かりにくいところをわざわざ確保したというのに、それでも突き止められてしまうとはのう。教え子たちの成長を喜ぶべきか、はたまたこちらの不手際を悲しむべきか」

でも全員そこから動けない。動くことができない。  
なぜなら、その声に確かな『力』があつたから。

一瞬でも背中を見せた途端容赦なく飛び掛かつてくるような、まるで猛獣を目の当たりにしたときのような緊張感に、体が硬直して動けない。それに加えて、まさかの人物の登場に驚きを隠せない。

小さな人影がようやくはつきりわかる場所までやってきた。

青と紫の模様が散りばめられた白い和服の戦闘着。

地下水路に吹く風によつて靡く青い帯。

くるくると回転する銀色の風車のような小物。

尻尾ヘアーに纏めた老人のように艶のない白髪……もう、間違いない。  
い。

どうして……？ どうしてなのよ……！

「久しいのう。して、こんなところに何用じゃ？——やちよ」

二ヶ月ぶりに再会した私の親友が穏やかな笑顔で、そして極めて優しい口調で問いかけながらその姿を現した。

「だけど……その目は全然笑っていなかつた。」

希望の象徴だったはずの神浜最強の魔法少女、星奈百恵が、私たちを絶望と恐怖のどん底に叩きつけた。



Side. 七海やちよ タイムリミット

「久しいのう。して、こんなところに何用じや？ やちよ」

参京院教育学園の地下水道で、行方不明になっていた百恵と久しぶりの再会を果たした。

本当なら喜び合いたいところなのだけど、この状況……おそらく彼女は――。

（みんな走って！ 逃げるわよ！）

仲間の魔法少女全員に念話を飛ばして全力でこの場から離れるように指示する。

ここで百恵と相對するのはあまりにも危険！ せめてウワサの所まで行かないと全滅する！

私は隣で戸惑っている環さんの手を引いて駆け出した。

鶴乃とフェリシアは百恵のヤバさがわかってから指示が来た瞬間に奥の扉に一目散。佐倉さんも察してくれたみたいで駆け出してきていた。

「えっ、えっ!? なんですかやちよさん!」

「余裕がないから手短かに説明するわ。あの子が来たせいで状況は最悪なの。だからとにかく逃げるのよ!」

「え、さっきの子ってそんなに危ないんですか?」

「危ないなんてそんな生易しいもんじゃないわ。彼女こそ、神浜最強の魔法少女――星奈百恵なのよ!」

「ええっ!? あの子がですか!」

本当なら百恵を初めて人に紹介するときには楽しくってしようがないのよ。だってみんな、絶対に百恵の容姿と実力のギャップに驚くんだから、今の環さんみたいに!

だけど今回ばかりはそんな微笑ましいやり取りは最悪の宣告に他ならない。

だって――。

「これ、お主よ。他人の顔を見るなり逃げ出すとは酷いではないか。傷付くぞ」

ついさつきまで後方にいたはずなのに、気が付いたら逃げる先である奥に続く入り口の前で笑顔で仁王立ちしているような真正銘のバケモノなのだから。

百恵は魔法少女特有の固有能力を持たない珍しいタイプの魔法少女。

だから「どうやって移動したのか」という問いの答えは単純明快。ただその足で走って回り込んできただけだ。それも私たちが知覚できないようなスピードで。

「ふう。さて、後は任せてお主らは下がって天音姉妹の治療をするがよい」

「……はい。御武運を」

「うむ。お主らもよく耐えたの、誇るとよいぞ」

「感謝、致します」

「すいま……ゴホツゴホツ！」

「もうよい喋るな。休むがよい」

黒羽根たちは百恵の言うことを素直に従って、負傷した天音姉妹を連れてこの場から立ち去った。これでこの場には私たちと百恵だけになる。

……ああ、やっぱりそうなのね。

信じたくなかったけど……あなたはそっち側の人間なのね、百恵。

色々聞きたいことはあるけれど、それは後回し。

タイムリミットが30分を切ってしまった以上、ウワサを倒すことを何よりも優先しなければならぬのだから。

「……久しぶりね、百恵」

「うむ、久しぶりのう。どうじゃ？ 今からゆっくりお茶でもせんか？」

「悪いけど時間が押しているの。だから話は用が済んだらたっぷりさせてもらおうわ」

「そうか。ならば先程のこちらの質問に答えてもらおうかの？ こんな辛気臭いところにみんなして何用かの？」

あくまで態度を崩さず笑顔で圧力をかけてくる。

ここで素直に帰ればきつと見逃してくれるでしょう。百恵はそう

いう子だ。

「だけど……！」

「私たちはその奥にあるものが目当てなのよ。だから来たの」

「そうか……。のう、化かし合いはやめようか。急いでいるのじやろう？ 用件を言え」

「……そこをどいてちようだい」

「それは出来んなあ——ほう？」

交渉が決裂したことを確認するや否や、真っ先に動いたのは佐倉さんだった。

「ほぼ不意打ちに近い形で武器である槍を百恵に投擲する……が。それが貫いたのは固いコンクリートの地面だけだった。」

少し体を傾ける。

さっきの天音姉妹と違って無駄が一切ないその動きだけで、百恵は佐倉さんの不意打ちを見切ったのだ。

「お主よ、見ぬ顔じゃな。市外の魔法少女かの？ 良い腕じゃ。ずっとひとりで頑張り続けてきた者の動きをしておる」

「へっ、上から目線でどーも！」

苦々しそうな顔をしながら新しい槍を生み出す佐倉さん。多分彼女は本気で百恵を仕留めようとしていた。仕掛けるタイミングが完璧だったもの。

悟っていたのでしよう。

明らかに格が違うから不意打ちするのが得策だと。

「残念じゃ。ここで引いてくれれば今日のこととは忘れようと思ったのじゃがの」

「ごめん百恵ししよ……こつちも後には引けないんだよ！」

「オレもあの水を飲んじまったんだ。だから先に進ませてもらうぜ、百恵！」

鶴乃とフェリシアはもう覚悟を決めたらしい。……ふう。私もいい加減受け入れないかね。

何があったのかはわからないけど、今の百恵は私たちの敵。

しかもあるうことか、他の人間を巻き込んだ魔法少女の解放とやら

に関わっている。

見過ごすことなんてできない。

「……そうか。やちよ、お主も変わらぬのじゃな」

「ええ、変わらないわ。あなたには色々聞きたいことがあるけど……それはあなたを倒してからにするとするわ」

「それなら致し方あるまいな。『マギウスの翼』の頭かしらであるこの星奈百恵がお相手するでしょう。久しぶりに稽古を付けてやる。どこからでもかかってくるがよい」

自らを『マギウスの翼』の頭だということを明かした百恵が寧猛な笑みを浮かべる。

武器である大剣を出さず稽古を付けると言っているあたり、私たちの命を取るつもりはないみたい。つまり本気だけど全力じゃない。

でも、それでも悔しいことに百恵に勝てる気がしない……私ひとりならば。

今回はこちらが五人、百恵はひとりの凶だ。五人で力を合わせれば……まだ可能性はある。

おまけにこちらには前衛、中衛、後衛のメンバーが揃っている。即席チームとはいえ、それなりの実力者が揃い踏み。

……行ける。

「佐倉さん、今回は抜け駆けはなしよ」

「……だな。真面目にやらなきゃいけないーみたいだ」

不安要素である佐倉さんの協力を取り付けられた今、五対一が確定した。

これなら届くかもしれない、神浜最強に。

（鶴乃とフェリシアは積極的に攻めて、私と佐倉さんが合わせるわ。環さんは援護して！）

百恵に聞こえないように念話で指示を出して、全員が一斉に動く。鶴乃が先制攻撃の火炎を、そしてそれにフェリシアが続いた。鶴乃の炎を盾にして攻撃を打ち込む気ね。

百恵の視界が火炎で遮られるタイミングを見計らって佐倉さんが百恵の後方に回った。私も佐倉さんとは逆回りに移動する。これで

三方向を取った。

いくら百恵でも体がひとつしかない以上このコンビネーションを  
捌ききれない！

百恵の真横まで迫った私はそのまま彼女に槍を——と、ここで不  
然なことに気が付いた。

鶴乃の炎を前にして百恵はなにも構えていない。無防備すぎるの  
よ。

もしかして足が竦んだ？ いやそんなわけがない！ なにかある  
！

でも気が付いた時にはもう遅かった。

百恵が小さく口を動かして——フツと微かな音が聞こえたかと思  
うと、百恵に迫っていた炎がなにかに反射されたかのように軌道を変  
える。

その先には……。

「えっ!? あああっ!!」

炎を盾にハンマーを構えて突進していたフェリシアがいた。

直撃こそしなかったものの、攻撃をするために振り上げていた腕に  
炎が掠めた。フェリシアはハンマーを手放し、両腕を庇って苦しんで  
いる。

そんな……息を吹きかけただけで、鶴乃の攻撃を跳ね返したって  
いの!?

「自分よりも強い敵がピンピンしているにも拘らず、大振りな攻撃を  
仕掛けるやつがおるか愚か者！　そこで少し頭と腕を冷やせ！　ま  
ずはひとり！」

文字通りのフレンドリーファイアによってフェリシアを撃墜した  
百恵はそのまま直進する。

前提である炎の壁が破られてしまったがために連携が崩れた。私  
と佐倉さんの動きが無駄に終わる。

そして直進する百恵の次のターゲットに選ばれたのは……。

「えっ……あ」

鶴乃だった。

きつと今、なにが起こったのか理解できなかつたのでしよう。

百恵に放ったはずの攻撃がありえない動きをして味方フェリシアを焼いたのだから。そして次の瞬間には、百恵が目の前に迫ってきていたのだから。

先制攻撃を仕掛けて様子を伺っていた鶴乃は驚きのあまりその態勢のまま固まった。百恵を前にして、一瞬とはいえ無防備になった。なつてしまった。

「予想外の出来事に驚く気持ちは分かるが、戦闘中に隙を晒すとは何事じゃ！ 緊急時の対応に難あり！」

「いつ!?!」

ゴチンツ!

擬音ではなくリアルでそう聞えてしまう百恵の鉄拳が鶴乃の頭に炸裂した。

脳味噌をぐちゃぐちゃに掻き回されるほどの衝撃があると定評のある百恵の鉄拳制裁を喰らった鶴乃は千鳥足になって尻餅をつく。

……意識はあるみたいだけど駄目ね。

鶴乃もしばらく戦線を復帰することはできそうにない。

「ふたり目じゃ! 次は——」

鶴乃を轟沈させた百恵がこちらを振り返った。

「——お主にしようかの?」

「うおっ!?!」

次の瞬間には、すでに彼女は佐倉さんの構える長槍に器用に乗って彼女の耳元で囁いた。

もはや瞬間移動に等しい速度で接近された佐倉さんは驚きながらも槍を振りかざして百恵を引きはがす。が。

「おわっ!?!」

なぜか佐倉さんの体がなにかに引つ張られたかのように、武器を持つ腕からバランスを崩す。

よく見ると佐倉さんの槍に青いリボンのようなものが巻き付いていた。

それは百恵の着物の帯だった。

地面にギリギリ付かない程度に長い彼女の帯がまるで生きているかのようにうねり、佐倉さんの長槍を縛り上げている。

固有能力がなくとも、百恵には絶大な魔力がある。

その魔力を使って上手く操っているのだ。

百恵はその帯を引つ張って佐倉さんの持つ槍を掴み、そのまま持ち上げて振り回した。

槍を握ったまま持ち上げられた佐倉さんは槍ごと遠心力に従って投げ出され……丁度私がいるところに飛んできた！ 佐倉さんのみならず私まで狙うなんて……！

(チツ、避ける！)

「くっ」

佐倉さんの念話に従って、彼女を受け止めようとしていた私は緊急回避。

佐倉さんは槍を地面に突き刺した僅かの間に態勢を整えて槍から手を放し、勢いを弱めつつ水飛沫みずしぶきを上げながら踏みとどまり、なんとか無事に着地した。

私は突き刺さった槍を佐倉さんに投げ、彼女はそれを片手で受け取って立ち上がった。

「うむうむ、お主らは優秀じゃのう。結構結構」

ぱちぱちと余裕そうに拍手をする百恵が遠い。

かなり上手く行ったはずの私たちの連携をいなしただけでもおかしいのに、その勢いのまま決して弱くないふたりの魔法少女を戦闘不能にってしまった。

「おっと」

そんな百恵がなにかに気付いたように声を上げた。

いつの間にか突き出していた手に握られているのは、桃色の矢のような形をした魔力弾。

「星奈……百恵さん！」

鶴乃とフェリシアを庇いつつ、環さんが左腕のクロスボウを構えていた。

「お主、ようやく私に話しかけてくれたのう。お主も見ない顔じゃ。

市外の魔法少女かの？」

「はい。環いろは、と言います」

「うむ。私は星奈百恵という。しがたい傭兵をやつとるよ。まあ、今は訳あつて『マギウスの翼』の頭をしとるのじやがの。あと、こんななりじやが来年には成人するぞ」

「えっ」

百恵の自己紹介に私の隣にいる佐倉さんが素の声を漏らした。

環さんは事前に知っていたからか、特に驚いた様子はない。

「鶴乃ちゃんとフェリシアちゃんから話は聞いています。ふたりのお師匠様……なんですよね？」

「まあそうじゃな。何回か稽古付けてやった仲じゃ」

「ならどうして！ そのふたりを傷付けられるんですか!? その魔法少女の解放は……あなたを慕っている鶴乃ちゃんとフェリシアちゃんを傷付けてでも、こんな誰かを不幸にするようなやり方をしてまで、成し遂げないといけないことなんですか！ フェリシアちゃんに至つては……あと30分足らずでウワサの被害を受けてしまうんですよ!」

……驚いたわ。

まさか環さん、百恵を説得するつもり？ 変なところで肝が据わっている子だとは思っていたけどここまでとは思わなかったわ。

だけど案外有効かもしれない。

「訳あつて『マギウスの翼』の頭をしている」と百恵は言っていた。つまり何か事情があるということ。

思えば百恵が『マギウスの翼』に所属している状況がそもそもおかしい。

百恵は完全中立を宣言していたし、どこの組織にも所属しないとも言っていた。今の百恵はその約束に背いた行動をしている。

そこを突いて紐解いていけば……もしかしたら百恵の抱える事情を解決して、こちら側に引き込めるかもしれない。

そんな希望が見えたのも束の間、百恵は目を細めて環さんを見据えた。



「若いな」

「え？」

「お主は若いな。人間としても魔法少女としてもじゃ。じゃが良い瞳をしておる。……今の私には些ちひさか眩くらしすぎるくらいにのう」

そう語る百恵の目は……ひどく悲し気だった。

「答えを返そうか。確かに私はお主たちとは戦いたくはない。お主が庇かばっているふたりは、私にとって手塩にかけて育てた大切な教え子たちじゃ。なにも好き好んで不幸にしようだなんて思っておらん。このやり方だつて、私は納得してはおらぬよ」

「それなら……」

「じゃがのう……もう、私には時間がないのじゃ」

「え？」

「お喋りはここまでにしようか。お主、回復術士であろう？」

「え……な、なんで……」

「数多の魔法少女を見てきた私にはそれくらいすぐにわかる。私のテストから落第したそのふたりを癒してやるが良い。もうお主らに興味はないからのう」

まるでこれ以上環さんと会話をすることを嫌ったかのように話を切り上げた百恵は、再び私と佐倉さんに向き直った。

「さて、続きをやるうか。今度はこちらから行こうかの？」

そう言った百恵は両手で耳を塞いで大きく息を吸った。——いけない！

「全員！ 耳を塞ぎなさい！」

「ッ!!」

私がちようと耳を塞いだ瞬間、とんでもなく甲高い音とともに地下水路が揺れた。

そこら辺にある水溜まりが震え、天井に張っている水滴全てが地面に落ちる。百恵が咆哮を上げたのだ。しかも魔力を目いっぱい込めて！

百恵の腹の底から出た雄叫びはそのまま衝撃波となり、魔力によって形成された弾幕が地下水路の壁に反射して津波のように襲い掛か

る！

場所の性質を利用したその攻撃は二段階に効力を発揮する。

まずは単純に轟音による聴覚に対する攻撃。両耳を必死で塞いでも頭に響くような咆哮だ。

もし直で受けてしまえば気絶は逃れない。鼓膜も破れてしまう可能性もある。そしてそれが過ぎればこの魔力弾の雨だ。

ただ腹に力を込めて叫ぶ。

場合によっては自分の声すらも凶器に変えてしまうのが星奈百恵という規則外な魔法少女なのだ。

「くっ」

「なんだよこれ！ さっきの笛姉妹の攻撃が可愛く思えちまうぞ。おい、あいつの攻撃手段はコレなのか!?!」

「そんなわけないじゃないの！ 手加減してアレなのよ！ しかも多分思いついたからやっただけで全然本気じゃないわよ！」

「滅茶苦茶が過ぎるぜオイ！」

ぶーたれながらも必死で私と佐倉さんは百恵の攻撃を回避し続ける。数は多いけど狙いが定まっていない、下手な鉄砲も数撃ちや当たると理論の無差別無作為の雑な攻撃だ。ちゃんと見れば避けることはできる。

ちなみに環さんたちがいる方向には魔力弾が一切行っていない。本当に彼女たちに手を出すつもりはないみたいだけど、そんな調整ができるくらい余裕を持っていると見せつけられているみたいで嫌になる！

「よくぞ全部躲しきった！ 凄いのう！ さて、今度はそちらじゃ。どこからでもかかってくるがよいぞ」

魔力弾の雨は一分もしないうちに上がった。だけどその一分がとにかく濃かった。

私たちが無傷で乗り切ったのを見て百恵は嬉しそうに笑っている。構えを解いて隙だらけだし、完全に遊ばれている。

こっちは必死だつていうのに……!!

「チツ、舐めやがって。上等だ、そんじゃあたしと遊んでくれよ！」

凶悪な笑みを浮かべた佐倉さんが百恵に向かって駆ける。

一直線のわかりやすい軌道。そんな方法で攻撃をする理由は大きく分けて三つ。

ひとつ目は、単純に経験が足りていないパターン。

場数を踏んでなく、戦闘経験が浅いゆえに動きが洗練されておらず単調な攻撃しかできない場合だ。だけど佐倉さんはなかなかのベテラン魔法少女だ。だからこれはない。

ふたつ目は、小細工をする必要がないパターン。

まさに百恵がこれの典型で、自分と相手に明確な実力差があつて真面目から倒せてしまうような力がある場合ね。

だけどこれにも該当しない。いらだっている様子の佐倉さんだけが、百恵が格上の存在だつていうことは認めているはずだから。

ということとは……もうひとつしかない。

百恵を貫こうとしている佐倉さんの長い槍。

当然百恵はそれを掴もうと手を伸ばす。またさっきのように振り回す気なのでしょう。

だけどその槍が百恵の手に触れる瞬間……バラバラになった。いや違う。

あの長槍の柄の部分、実際には小さな棍たちが鎖で連結されている。

そうか、佐倉さんの本来の武器は槍じゃなくて、多節棍だったのね。

真の姿を見せた佐倉さんの武器は、それを取り損ねた百恵を取り囲むように展開され、一気に百恵に向かって収束させていく。

そのまま縛り上げるつもりだ。

「能ある鷹は爪を隠すとはよく言ったものよ！ お主はまさにその鷹じゃな！ 速くて力強いところもびつたりじゃ！ じゃが甘いぞ！」

当然百恵も佐倉さんの取った行動に罨が仕掛けられていることは分かり切っている。にやりと笑った百恵は佐倉さんとの間合いを詰める。……そうか。

このまま近づいてしまえば多節棍は百恵のみならず佐倉さんも巻き込んで拘束してしまう。だから佐倉さんは攻撃を中断せざるを得

ない。

加えて今の百恵は超近距離特化型の魔法少女。間合いに入ってしまえば、その剛腕が火を噴く。

私以上の魔女との戦闘回数を誇る経験からなる冷静で的確な判断が、攻めと守り、どちらにも有効で最も効率の良い選択を弾き出している。

そうよ、百恵がただのパワー馬鹿ならこっちはこんなに苦労はしないのよ。

「むっ？」

しかし佐倉さんに近づいた百恵が怪訝そうな顔をした。

なぜなら目の前の佐倉さんは拘束するための攻撃をやめてないばかりか、百恵と距離を置こうと動いていなかったのだから。

まさに目と鼻の先まで百恵が迫ったところで……佐倉さんの姿が消えた。

これは……！

「！ しもうた！ お主の魔法は『幻覚』か！」

「今更気が付いても遅いってーの！ 油断したな神浜最強！」

今まで私たちが見ていた佐倉さんは魔法で作られた幻覚だった。

おそらく魔力弾の雨から逃げているうちにこっさり作り出して物陰に隠れていたのでしょう。佐倉さんは二重の罟を仕込んでいたのだ。

実際には遠く離れた場所にいた本物の佐倉さんが鎖を引っ張る。すると百恵に向かっていた鎖たちが一気に百恵に纏わりついて縛り上げ、ガチガチに拘束してしまった。

「おお？ おおおっ！」

そしてそのまま宙に浮かされる。これで……道ができた！ 今ならうわさの所に行ける！

「鶴乃！ フェリシア！ 行けるかしら!？」

「お、おう！ なんとかな！」

「まだちよつとクラクラするけど大丈夫だよ！」

「なら環さん、ふたりを連れて今のうちに行きなさい！ 私と佐倉さ

んはここに残るわ！」

「！ はい！」

残り時間はあと20分。

意外にも百恵との戦闘が始まってまだ10分しか経っていないかった。とはいえ痛いタイムロスであることには変わらない。

あと20分、大丈夫。

鶴乃とフェリシアは強いし、環さんも着実に強くなっている。だから大丈夫。

「はっはっは！ いやあ、参った参った！ まさか私が拘束されてしまうとはのう！……じゃがのう！」

ギチツ……ギチチツ……パチツ！

金属が割れていくような小さな音が耳に入ってきた。……まさか！

「マジかよ……！ クソツ！」

佐倉さんがさらに鎖を引っ張って拘束を強めるも、小さくなが千切れていくような音は連鎖的に増えていく一方。

そして百恵を縛る多節棍が少しずつ動き始める！

「チツ！ 急げてめえら！ もう保たねえ！」

佐倉さんの顔と声に焦りの色が見え始め、なにが起こっているのかすぐにわかった三人は一気に走り抜け……ウワサへと続く通路に足を踏み入れた。

これで目的は達成した。でも……！

ギチツ……ギチギチギチツ……！ パチチツ！ パチツ！

「ぬうんっ！」

バチイッ！

ひとときわ大きな金属音が聞こえると縛っていた鎖がはち切れ、自由の身となった百恵が着地した。

腕や肩、首をコキコキと音を立てて回している。

「ふう。久々に力を込めたのう。全く、油断したわい。お主よ、あんなに強いのに固有魔法が『幻覚』とは私も見抜けなんだ。随分と欲張りが過ぎるのではないかの？」

「アタシだってな、この力はあんまり好きじゃねえんだ。でもアンタに勝つためなら、形振り構ってはいられなくてね」

「なるほど、それは実に賢明な判断じゃのう」

「んで、良いのかいアンタは。あの三人、行っちゃまったぜ？」

「ああ、よいよい。私が行ったら私がウワサをうっかり壊してしまいそうじゃしな。行かない方がマシじゃろうて」

まあ……たしかにそうね。

今まで見たウワサはかなり大きなものが多かったし、そんなウワサがいるところで百恵が暴れたら、そのウワサも巻き込まれてしまいそうなもの。

「ふう。まあ、これ以上の戦いは無駄じゃ。お主らがここに残るというのであれば、私はもう手出しはせんと約束しよう。不覚にも負けてしもうたからな、ご褒美じゃ」

「……わかったわ」

私は武器の槍を消した。

さすがに変身は解かないけど、これでもう戦う意思がないということとは伝えられたと思う。

「いいのかい？ アイツを信じて」

「大丈夫よ、百恵はつまらない嘘を吐かないから。それに……仮に戦いを続行したとして、勝てるの？」

「……チツ」

舌打ちした佐倉さんは武器こそ仕舞わなかったものの構えは解いた。物分かりが良い子で助かるわ。

百恵に同じ手は通じない。

一度手を晒せばすぐにその対策をしてくる。一発逆転の手も百恵が力任せに破ってしまったし、もう私たちの手札で百恵に勝つ手段はない。ここはあの三人を信じて待つのが得策。

さて……戦いは終わったことだし、色々問い詰めてやりましょう。環さんが問い詰めていたことを掘り下げてやるわ。

「聞きたいことがあるの」

「なんじゃ？」

「あなた……なんで『マギウスの翼』のリーダーなんてやっているの？」

「なんじゃそんなことか。依頼されたから、じゃよ。白羽根と黒羽根の子たちにのう」

嘘おっしやい。あんなに完全中立にこだわっていたくせにそんな言い訳が通用するわけがないでしょうに。もっと他に理由があるはずなのよ。百恵が完全中立を破ってでも、『マギウスの翼』に手を貸している理由が。

さらに問い詰めてやろうとした……その時だった。

「……うっぷ」

「百恵？」

「ごぼっ……がぼっ、がぼっ……」

「百恵!？」

突然、百恵が口から大量の血を嘔き出して崩れ落ちた。

白い戦闘着が彼女の血で赤く染まる。

「おい、どうしたアンタ!?! なにがあつた!?!」

これには佐倉さんも驚いて心配している。

でも、私はそれが比じゃないくらいに驚愕している。もうどうすればいいかわからなくて唾然としてしまうくらいに。

こんな姿の百恵を見るのは初めてだ。

いつも強くて、頼りになって、そしてかっこいい百恵しか見ていなかったから。

あの神浜最強が……今まで私たちを圧倒していた百恵が、こんなに弱り切っているだなんて!

我に返った私は百恵の元に駆け寄って百恵の肩を掴んだ……そして鳥肌が立った。

百恵に触って最初に抱いた感想が、『硬い』だったから。

「百恵、見せなさい!」

そこから私はすぐに百恵の異変に気付いた。

なによ、このアームカバーは! こんなもの、無かったはずじゃないの! この下に何を隠しているのよ百恵!

「ならん！ 見るな！」

アームカバーを取ろうとする私だけど、なぜか百恵は抵抗をし始めた。

どうしても見せたくないって言うの？ でもそうはいかないわ！  
何が何でも見てやるんだから！

「お、おいおい、なにやってんだアンタ!？」

突然の私の行動に佐倉さんが驚いているけどそんなのどうでもいい！

本当なら簡単に私を引き？がせる力を持っているはずの百恵だけど弱っているからか、思ったよりも全然力が入っていない。

そんな百恵を押さえつけてアームカバーを取る。その下にあったのは……………！

「……………！」

「な、なんだよこれ……………アンタ、なんで……………」

私は絶句し、佐倉さんは口に手を当てて目を見開いている。

かつて細くも力強かった百恵の腕、それが……………今や骨と皮だけになっってしまった。

そのまま裾を上げると……………それは肩の所まで続いてしまっている。だからか。肩を掴んだ時に硬いと感じてしまったのは。

私が見ない間に百恵の老化は……………遂に髪だけでなく、こうして体にも影響がはじめてしまっていた。

死へのカウントダウンが目に見える形で始まっている。

そういえば百恵はさっきの戦いの中で、一度も武器を使っていなかった。

単純に使う必要がないからだと思っていたけど……………もしかしたらあの巨大な剣を満足に扱えないほど弱くなってしまうていたからだとしたら……………！

「げほっ……………ふーっ、ふーっ……………見られてしもうたか。最後まで隠し通そうと思ったのじゃがの……………」

「百恵、あなた……………」

「もう大丈夫じゃ、治まった。じゃから放せ」



「放すわけないじゃないのバカ！」

なにが治まったよ全然解決になっていないわ。

こうなったら意地でも百恵を——連れて帰ろうとしたところで、緑色の光線が飛んできた。

「ハイハイ、ストップ。もうそこまででいいカラ」

そして聞こえてくる誰かの声！ 敵の増援!?

百恵の惨状に気を取られすぎて気が付かなかったわ。

光線を躲すために百恵と距離取った隙に、その第三者が百恵を抱きかかえていた。

第三者はまるで警察官のような帽子を被った、緑の髪の毛と瞳を持った魔法少女。この子……見覚えがある。

「まさかあなた……アリナ・グレイ？ 若手芸術家の？」

「アリナのこと知ってるワケ？」

肯定したということは間違いない。

炭化させた生き物で描いた死者蘇生シリーズなどを手掛けた有名な芸術家だ。

覚えていたのは百恵と話題の種にしたこともあるけど、なによりも彼女の作品があまりに気味が悪くて美しいというマイナス方面での印象が強かったからだ。

そんな芸術家が魔法少女だったなんて……しかも百恵と繋がっていたなんて。

「まあ、そんなのどうでもいいんですケド。全く、アリナの知らないところで死にかけるなんてなにしているワケ？」

「なはは……すまん、心配かけた」

「アナタは大切なアリナの作品なんだカラ勝手に死なれたら困るんだヨネ。アンダースタン？」

「すまんすまん。つついっ楽しいくて、張り切つてしもうたわい」

「エキサイトする気持ちは分からなくもないケド、ほどほどにして欲しいんだヨネ。ま、というワケで百恵は回収していくカラ。ウワサなら好きに壊したら？ アリナの興味はもうそこにないし」

ごく自然な流れで百恵を連れて行くこうとするアリナは、百恵の仲間

のはずなのに守るべきウワサをどうでもいいとかいう異質の存在だ。そしてなにより……このアリナは非常にマズい相手だと、私の直感が訴えている。

こいつに百恵を連れていかれるわけにはいかない……！

「待ちなさい！ まだ百恵には訊きたいことが——」

「あーそういうのは受け付けてないし、どーでもいいんだヨネ。じゃあ、シーユー」

アリナの周りで浮かぶルービックキューブのような緑色の箱が閃光を放つ！ くっ、視界が奪われてしまった。

ダメ……百恵を連れて行かないで。

そう心の中で祈ってみたけど、結果は空しいものだった。

光が止んだ時には百恵もアリナもこの地下水道からいなくなってしまうていた。逃げられてしまった。

「百恵……」

さっきまで親友がいた場所に手を伸ばすも、その先には何もない。

久しぶりに会えたというのにまさかの敵で、しかもあんなに弱っていただなんて。……どうなっているのよ。どうしちゃったのよ、百恵……。

この後、なんとか時間以内にウワサを倒すことができた環さんたちと合流して地下水路から全員脱出した。

百恵のことを聞かれたけどはぐらかしておいた。

今教えたところでどうしようもないし、環さんはともかく百恵と関わりがある鶴乃とフェリシアに余計な心配をかけさせたくなかったから。

……それがいつか、絶対に分かることだとしても。

ウワサを倒せて、今神浜に何が起こっているのかがわかってきて嬉しいはずなのに、晴れやかな気分になれない。

そんな私の前に。

「久しぶりですね、やっちゃん」

行方不明だったもうひとりの親友——梓みふゆが姿を現した。

……百恵と同じく、私たちの前に立ち塞がる敵として。

## R T A パート17 ウワサの守り人

百恵ちゃんを大暴れさせるR T Aは一じまるよー！

前回からチームみかづき荘が動き出しました。

無事に『絶交階段のウワサ』と『マチビト馬のウワサ』を倒してくれたおかげでオガキ様たちがカンカンでいらっしやるよ、黙らせて差し上げる（名言）。

ということとで重い腰を上げる時が来ました。

今絶賛進行中の第4章『ウワサの守り人』で百恵ちゃんが直々に侵入者たちを排除しに動きます（排除するとは言っていない）。

えー、とは言ったものの、天音姉妹から連絡が来るまではやること  
がありません。暇です。もう待ちきれないよ！ 早く出してくれ！  
（イベント）

まあ言っていないかもしれないので待っている間に『マギウスの翼』ルートに関する軽い説明をしましょうか。

今後このゲームでR T Aをしようとしている方は寄って頂戴聞いて頂戴。

本来『マギウスの翼』ルートを選択する場合はこの第4章が鬼門になります。

チャートによりますが、チームみかづき荘+佐倉杏子なんていう鬼畜メンバーとの戦闘なんて御法度。絶対にやっちゃいけません。なぜならほぼ負け戦だからです。

ぶつちやけ天音姉妹は大した魔法少女じゃないので頼りにならない上に、向こうのチームのクオリティが高すぎるからです。

本家と主人公組がタッグ組んだら補正やらなんやらで強くなるに決まってるだろいい加減にしろ！

ですので『マギウスの翼』ルートを選択するときは、あらゆる手を使ってこの第4章をすっ飛ばしてしまうか、チームみかづき荘がウワサに関わらないように動くのがベストです。

具体的な方法として例を上げるとするなら参京区にいろはを行かせない、とかですな。

ただそれだとフェリシアがみかづき荘入りしないので、別の意味で面倒くさいのですが。

まあ、ワルプルギスの夜を討伐するのに『マジウスの翼』ルートで走ること自体があまり良くないんですね。

『マジウスの翼』ルートって、『マジウス』の目的を果たして浄化システムを全世界に広めるために色々奔走するためのルートですから。ってお？ 着信が来ました。

仕事用の携帯ですので間違いなく白羽根の誰かからです。天音姉妹じゃないハズレからかかってくることも多々あるので現時点では喜べませんが。

確認してみましよう。

発信元は……天音月夜！ おまえのことが好きだったんだよ！

『もしもし百恵さんですか!? 参京区のウワサ付近に七海やちよが侵入しました!』

ヨシ！（現場猫）

やつちゃんと愉快的仲間たちが来てくれましたね！ 存分におもてなしをしに行きましょう。

すぐに向かうから時間を稼いでいてくれよな！

『わかりました、お願いいたします!』

さあ百恵ちゃんが表舞台に戻る時が来ました。

冒頭でも言いましたが今回は存分に百恵ちゃんを暴れさせてあげましょう。今までやらなかった割とガチな戦闘をしてやるからなく、見とけよ見とけよ。

「どこに行くワケ百恵」

ファツ!? 執務室から出た瞬間にアリナと出くわしてしまいました。た。

画材の入ったバッグを持っていますし、また百恵ちゃんをモデルに絵を描きに来たんでしょう。

すまん。ちよつと仕事が入ったからデッサンはまた後でな！

「……そう。アリナ的にはアナタが出る必要はないと思うんですケド？」

出、出ますよ……出ますよ〜今日は〜。

「ふーん。それなら後でしつかり描かせてもらおうカラ」

おう、またな！

さあ今度こそ参京区に……あつ、そうだ（唐突）。

みふゆさんと呼ぶのを忘れてはいけません。

今回ピーヒョロ姉妹は百恵ちゃんには連絡をしていますが、みふゆさんには恐らく連絡してはいません。

これはいけません。

みふゆさんはここでやちよさんと再会させないとシナリオブレイクしてしまいます。

なぜならここでみふゆさんを出さないで後になって出してしまうと、みふゆさんと親交のあるやちよと鶴乃がみふゆさんが敵になったという現実を受け入れられずにそのままシナリオが詰んでしまう可能性が出てきます（7敗）。

え？ 百恵ちゃんもバリバリ関わってんじやんだって？ 大丈夫だって安心しろよ。そのための好感度調整ですからね！

鶴乃とフェリシアはあくまでも師匠と教え子の関係になるように調整していますので、ウワ鶴モードになっているとはいえ鶴乃にとつての好感度は『やちよさん≧みふゆさん<百恵ちゃん』ですし、フェリシアも餌付けされただけです。実はそこまで高くありません。

現在好感度ランキング第三位のやちよさんですが、彼女も大丈夫です。

百恵ちゃんとみふゆさん、同年来の親友ふたりが『マギウスの翼』に下つてまあかなりシヨックは受けるでしょうが、彼女は自分の信念にまつすくなキャラクターですので、百恵ちゃんが敵だとわかればきちり敵対してくれます。

だから百恵ちゃんと顔見知りの三人はしつかり原作通りに動いてくれるので、ガバが起こる心配はほとんどないというわけですね。

それ以上に心配なのが、なんか知りませんがいつの間にか好感度がやちよさんを抜いていた帆奈ちゃんですね。

なんで？ 地味に怖いです。

今は大人しいですが、かつてはガバ製造機という悪名で我々走者を震え上がらせたあの更紗帆奈です。

百恵ちゃんが『マギウスの翼』に下ってから一度も会っていないはずなのに何があったのでしょうか。

気にはなりますが本人に近づくのも怖いので放置しておきます。

ちなみに堂々の一位は変わらずみたまさんです。

安心と安定ですね、いつもお世話になっています。

『モエちゃん、どうかしましたか？』

参京区に全力疾走しながら電話することスリーコール。みふゆさんが惚けた声で出ました。

どうかしましたかじゃないっすよ！ 参京区のウワサがやつちやんに狙われてんぞ！ だから一緒に説得しに行こうぜ！

『！ わかりました、ワタシもすぐに向かいます！』

頼んだぜ。と言ってもみふゆさんが来るまでにケリをつけさせちゃいますけどね！

百恵ちゃんとみふゆさんでは移動時間に決定的な差があります。みふゆさんは急行するとはいえ交通機関を乗り継いで参京区に向かうのですが、百恵ちゃんは己の驚異的な身体能力を駆使して現場に直行しています。ですのでおおよそ10分から20分の時間差ができます。これが大切なんですよ。

百恵ちゃんと同じホテルフエントホープにいたみふゆさんに直接言わずに電話越しに言ったのはこのほんの僅かな時間を作るためです。その間にウワサを倒していただいちゃいましょう！

さあやってまいりました。参京院教育学園です。

ここの校庭の奥に扉ありまして、それは地下水道に続いています。その地下水道に第4章のボス『ミザリーリユトンのウワサ』がいます。

その扉はいつもは固く閉ざされているはずなんですが……おつ、（扉）開いてんじゃ〜ん！ こわいな〜、とづまりすところ。

そして進んでいくと気絶している大量の黒羽根たちが転がっています。見ろよコレえ……この無残な姿をよお！

おつ、大丈夫か大丈夫か。とりあえず君もう帰っていいよ！ あと

は百恵ちゃんに任せとき！

黒羽根たちを引き上げさせてさらに奥に進むと開けた空間に出ました。

そこには足を怪我している月夜とゲホゲホと苦しそうに咳をしている月咲、後ずさっている黒羽根たち。そしてこちらを凝視しているやつちゃんと愉快的仲間たち。

おい、にやんにやんにやん！（意味不明）不法侵入ですよ不法侵入！

感動的な再会を果たしたわけなんですすがなんとチームみかづき荘、百恵ちゃんの顔を見るなり「逃げるんだよオ！」と言わんばかりの勢いでウワサがいるところに向かって駆けだして行くではありませんか！ あっ、おい待てい！（江戸っ子）

弱体化したとはいえ百恵ちゃんの《速度》はまだ160オーバー。しかも今は武器を持っていない身軽な状態なのでさらに修正が付いていますので、一瞬でやちよたちを追い抜いて通せんぼしてやりま

す。

デデドンツ！ 百恵ちゃんからは逃げられない。

普通ではありえない現象が起きてヤバいものを見るような目を百恵ちゃんに向けてきます。興奮させてくれるねえ！ 好きだよ、そういう顔！

というわけで羽根のみんな、時間稼ぎご苦労さん！

あとは百恵ちゃんに任せて帰っていいよ！

「感謝、致します」

というわけで以上！ みんな解散！ 戦闘でもチャートでも邪魔な彼女たちはここで帰しちゃいます。

これで百恵ちゃんとチームみかづき荘+杏子だけになりました。

「私たちはその先にあるものが目的なのよ。だから来たの。……そこをどいてちようだい」

（どか）ないです。って、あつぶえっ!?

いきなり槍を投擲してくるとかちよつと本気すぎやしませんかねえ杏子ちゃん！

当たつたらどうすんだよ、百恵ちゃんそれだけで負けちゃうんですよ!? こつちの事情も考えてよ（棒読み）。

さあ戦闘ミツシヨンが始まりました。

『マジウスの翼』側の百恵ちゃんに課せられるのは、チームみかづき 莊十杏子を奥のウワサの元に行かせないことです。といつても失敗させちゃうんですけどね！

まあそれでもしつかりと戦いましょう。

武器は使いません。あんなの使つたら手加減できませんからね。身体能力と魔力を駆使して翻弄してやりましょう。

先手は向こう側ですね。おう打ってこい打ってこい。

「ちやーらー！」

鶴乃ちゃんの炎が一直線に向かってきます。

そしてその後ろからフェリシアが突っ込んできていますね。

それに加えてやっちゃんと杏子が背後と真横から回り込んできて百恵ちゃんの退路を断つてきています。

良いコンビネーションだ、感動的だな……だが無意味だ。

鶴乃ちゃんの炎はあくまでも魔力によつて生み出された魔法ですので、それと同じくらいの魔力をぶつけると相殺することも反射させることもできません。

そして百恵ちゃんにはそれができるくらいの魔力を持っています。

今まで小細工なんかしなくても戦えていたので魔力は使わなかったのですが今回は大盤振る舞いです。

ママさんが魔力を使って本来の武器であるリボンをマスケツト銃に変えていましたが、その基礎であり応用でもある技をご覧になっていたでしょうか。

こちらに向かつてくる炎の中心点を見定めて、酸欠になる前に息を軽く吸い込みます。そして腹の中に魔力を溜めて静かに丁寧に吹きかけます。

一見すると百恵ちゃんが小さく口呼吸したように見えるでしょうがとんでもない。

百恵ちゃんは強烈な魔力の風を口から吹き出して鶴乃の炎にぶつ



けたんです。

それだけでなく完全に相殺せずに跳ね返すように、さらにその返した炎が突っ込んでできているフェリシアに直撃するように緻密に計算してやっているんです。

「えっ!?… あああっ!!」

当然ながら、突然の出来事に対応することができずにそれを受けることになったフェリシアは戦闘不能。

百恵ちゃん、優しいことにフェリシアの両腕だけを狙っていたみたいですね。全身丸ごと炎に包ませることを嫌ったみたいです。

この勢いのままどんどん行きましょう。次の標的は鶴乃ちゃんです。

もうね、面白いくらいに隙だらけですよ鶴乃ちゃん。ポカンとした表情をしていますしこれはもう襲ってくれと言っているようなもんですよね? え? 違う? そう…… (無関心)。

ぶつちぎりの《速度》を活かして一気に鶴乃ちゃんの目の前にこんにちは! そしてはいドーン! 百恵ちゃんの拳骨が鶴乃ちゃんの脳天に吸い込まれていく! Fooo→ 気持ちいく。

これを受けてまともでいられるような頑丈なやつなんていません。

鶴乃ちゃんは目を回して尻餅をついてしまいました。(戦線復帰は)ダメみたいですな。

さあ次です。誰にしましょうかね。

いろはちゃんはいつでもいいです。

いろはちゃんじゃあ逆立ちしても百恵ちゃんに勝てません。戦闘能力に関しては悲しいことに何もかもが百恵ちゃんの方が上です。いろはちゃんの初期設定が低すぎんよ。神浜の魔法少女じゃない上にまだ魔法少女になって一年足らずの普通の女の子だからね仕方ないね (レ)。

ということが残っているのはやちよと杏子ですが、百恵ちゃんはやちよと戦闘経験が豊富なので既に手の内を知り尽くしています。ぶつちやけ倒そうと思えば(王者の風格)いつでも倒せる状態なので放っておいても大丈夫。

じゃあもう杏子ちゃんしかいねえな！

さすがは本家原作勢、魔法少女になつてそんなに経つていないはずなのに隙なく武器を構えている杏子ちゃんですが、それでも百恵ちゃんの動きを捉えることはできません。

しかしながら槍の上に瞬間移動した百恵ちゃんに驚きながらも振り回して引き剥がそうと対応している辺り、杏子ちゃんはかなり強い部類の魔法少女だということがわかります。(優遇されているのが)見える見える。

「うおっ!?…おわっ!?」

ですが百恵ちゃんは一筋縄ではいきません！

投げ出された百恵ちゃんですが、その前にしっかりと腰に絞めている青い帯を杏子ちゃんの長槍に巻き付けておきました。

百恵ちゃんのみならず魔法少女の衣装は全て、自らの魔力によつて作られたもの。ですから魔力を使えばそれを自由自在に動かすことができます。

ちなみにこれはよほど魔力が高くない限り魔法少女歴三年以上のベテランにしか使えない技です。

つまり武器がリボンというところでもないハズレを引かされながらも自由自在にマスケット銃を作り出し、しかもそれをなりたての頃から普通にやっていたマミさんがごんだけヤバイ才能と戦闘センスを保持していたのかがわかります。

あつ、そつかあ(痴呆)。そう考えれば杏子をごんだけ強いのも納得がいきますね。

だつて師匠がマミさんな上に暫くの間バディを組んでいたんですもの、そりゃあ強くなりますわ。

さて、百恵ちゃんの操る帯によつてバランスを崩してそのまま引つ張られた杏子ちゃんを容赦なくジャイアントスイングの要領で槍ごとブンブン振り回し、そのままやちよのいる方向に投げ飛ばします。

いやあね、普通の魔法少女ならこれで終わるんですわ。でも杏子ちゃんとやっちゃんはこんなもんじゃ終わりません。

やっちゃんは普通に回避しましたし、杏子も上手く態勢を整えて無

傷で着地しました。やりますねえ！　って、おつとと。

感心している暇なんてくれませんね。

こちらの隙を伺っていた本作主人公、環いろはちゃんが攻撃を仕掛けてきました。が、やっぱり弱いです。

魔力によつて形成された矢の勢いもそんなになく、いとも簡単に掴み取ることができました。

ここでひとつアドバイスを。

『チームみかづき荘』ルートで走るときはなにがなんでもいろはちゃんを強化することを重視しましょう。

もう本当に弱いので何回いろはちゃんが頃されてチャートが崩壊した兄貴姉御たちがいるか……。

「星奈……百恵さん！」

おや、いろはちゃんは百恵ちゃんのことを知っているご様子。やつちやんたちから聞いたのでしょうかね。

どうやらいろはちゃん、百恵ちゃんを説得している模様。

いろはちゃんの凄いところはこの精神力の高さですね。まさか戦闘中に敵を説得してくると思いませんでした。

ただ百恵ちゃんは非の打ち所のないような善人ですから実はこの説得はかなり有効です。

しばらくすると『マギウスの翼』を裏切るかどうかの分岐の選択肢が出てきます。

これはプレイヤーキャラが比較的善人でなければ起こらないイベントで、プレイヤーキャラはここでいろはちゃんたちに説得されて『マギウスの翼』を裏切ることもできます。

まあ、ここで裏切らないので全く意味がないんですけどね！

……うん？　あれ？　選択肢が出てきませんね。

おや、百恵ちゃん。一方的にいろはちゃんを拒絶しちゃいました。イベントが強制的にスルーされてしまいましたね。選択肢が出なかったことでシーンが停止することがないですし、説得に応じるつもりもないのでRTA的に大助かりです。

これで戦闘ラウンドに戻ってまいりました。今度はこちらの攻撃

ですね。

このまま拳を使つて戦うこともできるのですが、それじゃあちよつと地味ですよ。

今までの魔女戦もただでかい剣でぶつた切るだけのなんの面白味のないものばかりでした。

というわけで、先程鶴乃ちゃんの炎を跳ね返した技のちよつとテクニカルな応用技をお見せしましょう。

あの時は腹の中に溜めた魔力を息という形で吐き出すことで、それを風に変換していました。

じゃあその息を声に変えてみたらどうなるのでしょうか？

その結果がこれです。

地下水路全体が揺れ動くような轟音が響き渡り、百恵ちゃんの口から広がった魔力は塊となつて縦横無尽に動き回ります。

魔力を音という形にすることで物理攻撃に変換しています。言つてしまえば音響兵器ですね。それを百恵ちゃんはやっています。ピーヒョロ姉妹涙目。

さて、この魔力弾の嵐ですが攻撃性は高いものの命中率はそんなに高くはありません。

そしてこちらはやつちゃんたちを傾す気ゼロですので、まあ無事に乗り越えてくれるはず。難易度ハードで強めに設定されていますしね。

案の定やつちゃんも杏子ちゃんも肩で息をしていますが攻撃をしのぎ切りました。

ちなみに戦闘不能の鶴乃やフェリシア、そして彼女たちを治療しているいろはちゃんには当たらないように調整しています。

原作ではいろはちゃんとフェリシア、杏子のウワサの被害を受けた三人が『ミザリーリウトンのウワサ』を倒すのですが、今回は杏子と鶴乃を入れ替えさせる必要があります。

なんで鶴乃ちゃんを行かせるかと言いますと、鶴乃ちゃんには『幸運』という非常に強力な固有魔法を持っているからです。

『ミザリーリウトンのウワサ』はその特性上、自分に近づく人間にコ

ウモリをぶつける、岩を落とす、滑らせるなどの不幸を引き起こして攻撃します。もうお分かりですね？

そう鶴乃ちゃんは『ミザリーリユトンのウワサ』の特攻キャラなんです。鶴乃ちゃんを連れて行くだけで割と簡単に倒すことができちゃうんですね。

やちよと杏子を足止めしつつ隙を作って、いろはちゃんたち他三人をウワサの元に向かわせる。これを狙って動いています。

ですのでいろはちゃんたちを無視して、杏子たちを挑発してやりましょう。

来いよ杏子。怖いのか？ 槍なんか捨てて、かかってこい！

「チツ、舐めやがって。上等だ、そんなじゃあアタシと遊んでくれよー」  
「野郎おおお、ぶっ頃しやああつー！」という勢いで杏子ちゃんが突っ込んできました。ですがこれは罠です。

めちゃんこ強い魔法少女である佐倉杏子が情だけで動くわけがありません。当たり前だよなあ？

戦闘が始まってから杏子ちゃんはまだ自分の武器の正体を明かしていません。本当は長槍じゃなくて多節棍なんですよアレ。でも杏子ちゃんはその姿を見せていません。

当然私たちプレイヤーは知っていても、操っているプレイヤーキャラである百恵ちゃんは知る由もないので、罠だとわかっていても対応するために動いてしまいます。

杏子ちゃんはそのことを突いて遂に己の武器の真の姿を見せてきました。

槍を掴もうと百恵ちゃんの腕が伸びますが、それは突然バラバラになって百恵ちゃんを囲います。これで拘束しようとしているんですね、さすがは杏子ちゃんです。

このまま縛られるのもいいですが百恵ちゃんは無駄に経験値が高いので普通に対応してしまいます。こちら辺の融通が利かないところがりアリティがあつていいですよね。

さて、百恵ちゃんはこのまま杏子に向かって前進。多節棍を操る杏子ちゃんを狙いつつ、自らを縛ろうとしている攻撃を中断させようと

しています。

さすがはベテラン魔法少女です。もうちよつと手加減したかったのですが仕方ないですね。

って、お？ 百恵ちゃんが伸ばした手が空振りしました。

確かに目の前に杏子ちゃんがいたはずなんですけど……つちよつ、おま、まさかコレは……！

「今更気が付いても遅いってーの！ 油断したな神浜最強！」

物陰からドヤ顔で本物の杏子ちゃんが現れました！ やつぱりそうでした！

今まで百恵ちゃんが向かっていたのは杏子ちゃんが作り出した幻でした！

杏子ちゃんの固有魔法は『幻覚』なのですが、彼女の家族に起こった悲劇から設定上この魔法が使えなくなったという裏設定があります。

しかし難易度ハードになりますとそれを克服して普通に使うてくるスーパー杏子ちゃんが登場することがあり、今回の杏子ちゃんがまさにそれです。流石の百恵ちゃんもこの二重の罠を見抜くことができずにまんまと罠にかけられてしまいました。

その結果、百恵ちゃんの体がつちり縛られて拘束され、宙に浮かんでいきます。……おおつ！ やりますねえ！（二回目）

「環さん、ふたりを連れて今のうちに行きなさい！ 私と佐倉さんはここに残るわー！」

「！ はいー！」

ヨシ！（現場猫） いいゾコレ。そのままウワサの所に行つて、どうぞ。

ホラホラホラホラ（鬼畜）。早くしないと百恵ちゃん自由になつちやうぞ。

脳筋娘の百恵ちゃんにとってこれくらいの拘束は力尽くで破れますからね。杏子ちゃんも頑張っていますですがそれでも百恵ちゃんの馬鹿力には及びません。

やがて百恵ちゃんは杏子の多節棍を引き千切つて解放されました。

しかしながらもういろはちゃんたちはウワサの元に。そしてやちよと杏子ちゃんが行く手を阻んでいます。

あーらら立場が逆転してしまいました。ミッション失敗です。悲しいなあ（棒読み）。

これにて戦闘終了です。

予定通りにストーリーが進みましたし結構派手な戦闘を皆様に見せられたと思うので大満足な結果でした。

あく今日は戦闘楽しかったなく、早くホテルフロントホープに帰って後処理しなきゃ。多分怒られるんでしょうけどヘーキヘーキ、ヘーキだから。……つて、えっ!?

百恵ちゃんが血反吐を吐き出して倒れてしまいました！

ちよ、ちよい待ちちよい待ち！ 百恵ちゃんの状態は……最悪うっ!?

これは状態異常の影響ですね。あんな派手な戦い方をすれば多少は症状が進行するとは思って覚悟はしていましたが甘かったみたいです。

「百恵、見せなさい！」

「お、おいおい、なにやってんだアンタ!？」

「……っ！」

「な、なんだよこれ……アンタ、なんで……」

あーもうめちやくちやだよ。

やっちゃんと杏子ちゃんに百恵ちゃんの状態の秘密を知られてしまいました。

こうなったらそう簡単には百恵ちゃんを帰らせてはくれません。このままみかづき荘に連行されてしまう可能性があります。そうなる面倒です。

このままですと百恵ちゃんの状態の情報が一気に神浜中に広がってしまいます。

少なくとも百恵ちゃんと交流のあるネームド魔法少女たちがこのタイミングで一斉に動き出してしまうので、チャートが崩壊してしまう可能性があります。

おまけにこの後、やつちゃんたちにはみふゆさんと会ってもらおうで、その時にみふゆさんを含めた他の羽根たちにも知られてしまします。そうなってしまってもう百恵ちゃんは自由に『マギウスの翼』を使役できなくなってしまうのでどうにかして乗り切らないといけません。

しかし百恵ちゃんはすっかり弱ってしまっていますしどうしたところか……。

「ハイハイ、ストップ。もうそこまでいいカラ」

……多？ こ、この声は……！

「まさかあなた……アリナ・グレイ？ 若手芸術家の？」

「アリナのこと知ってるワケ？」

（アリナ）先輩！ なにしてんすか。

光線ぶつ放してダイナミックエントリーしてきたアリナ先輩が百恵ちゃんをお姫様抱っこしてやつちゃんたちから距離を取ってくれました！ なんてイケメンなんでしょうか！

アリナパイセンありがとナス！

「エキサイトする気持ちは分からなくもないケド、ほどほどにして欲しいんだヨネ」

おう、考えてやるよ（ほどほどにするとは言っていない）。

というわけでじゃあな、やつちゃん、杏子ちゃん！ ポイテェロ！

今度みふゆさんと一緒にみかづき荘に遊びにいくから元気にしてろよな！

はい！ それじゃあキリがいいのでここまでにしましょうか！

第5章の『ひとりぼっちの最果て』はばつくれるので、次回は第6章の『真実を語る記憶』からスタートしていきます！

ご視聴ありがとうございました！



S i d e . 七海やちよ 真実を知る者 待ち続ける者 立ち向かう者

私は過去、二回地獄を見たことがある。

一度目は二年前、チームメイトだった雪野かなえが私を庇って戦死してしまった時。

二度目は一年前、同じくチームメイトだった安名メルが私の目の前で魔女になった時。

そして今日、私の人生三度目の地獄を見た。

ずっと長い間私の相棒を付き合ってくれて一番近くにいた梓みふゆ、そしてどんな時も丁度いい距離を保ってくれた星奈百恵。この親友二人が私の敵になってしまったから。

そして……百恵に至っては既に体がボロボロになってしまっていて、もういつ死んでしまうか分からないところまで症状が悪化していることを知ったから。

不幸中の幸いか、百恵の弱体化を知ったのは私と市外の魔法少女である佐倉杏子だけ。そして佐倉さんも決して口外しないと約束してくれた。

今日初めて会ったばかりの短い付き合いだけど、少しひねくれているとはいえ本質は竹を割ったようなさっぱりした性格をしている彼女のことだ。よほどのことが起きない限りは心の内にしまっておいてくれるでしょう。

鶴乃やフェリシアにはとてもじゃないけど教えられなかった。

フェリシアはともかく、鶴乃はみふゆのこともある。これ以上心配をかけさせたくはなかった。

ミザリーウォーターの事件を解決したけど私の心は鉛のように重い。

どうしてこうなってしまったのか。

誰よりも私はあの二人の近いところにはたはずなのに、どうして止めてあげられなかったのか。分かってあげられなかったのか。自分

を責めだしたら止まらない。

そして……私はやりようもない怒りをとある人物に抱いていた。八つ当たりでもあるのでしようけど、それでもどうしても許せなかった。問いただしてやろうと思った。

帰路についている途中、「用事が出来た」と環さんたちと別れた私はすぐにあの女狐がいる場所——調整屋に向かった。

「いらっしやうい♪ あらあ、どうしたのやちよさん。そんなに怖い顔しちゃって」

少し荒めに扉を開けて店内に入っても、調整屋の店主——八雲みたまは普段のお道化た態度を崩さない。

この台詞、そしてこの表情……はつきりと覚えているわ。

二ヶ月前に百恵が失踪した時と全く同じ対応じゃないのよ……！

「今日、百恵とみふゆに会ったわ」

「あら、よかったじゃない。元気にしてたかしら？」

「ふざけないでッー」

みたまの肩を掴んで壁に叩きつける。

いつもの私らしくない直接的で、しかも暴力的な態度にみたまは特に驚いた様子はない。張り付けていたような笑顔を取り払って、表情を消して押さえつけている私を見据えていた。

「威力業務妨害は本当なら出禁ものよ？」

いきなり掴みかかられたというのにその顔には余裕がある。どうやら私に暴力を振られることがわかっていたかのようだ。

……やっぱり、そうだったのね。

「知っていたのね……みふゆが、百恵が『マギウスの翼』に関わっているって」

「ええ知っていたわ」

あつさりと認めた。

私がつつと知りたかった親友二人の行方。

百恵だけじゃなくしてみふゆのことも知っていて黙っていたのか……。

「悪く思わないでちょうだいね。調整屋さんにも守秘義務があること

くらいは知っているでしょう？ 安易に顧客情報は明かせないの」  
ええ知っているわ。だからそれはいいの。

本当は決して良くないけど、それはギリギリ許せるのよ。まだわかるから。でも……！

「百恵の体のこと……アレも知っていたの？」

それを聞いたみたまの顔から余裕が消えた。

目が吊り上がり、眉間にしわを寄せて睨みつけてくる。

ということはやっぱり知っていたのね……百恵の体が今、どんな状態なのかを。

「モモちゃんとは定期的に会って、診察していたわ。だからもちろん知っているわよ。遂にモモちゃんの老化が本格的に肉体に対して牙を剥き始めたこともね」

「どうして教えてくれなかったの!？」

「じゃあ逆に、やちよさんはそれを知ったら誰かに教えるの？」

相変わらずの鋭い指摘に私は押し黙った。

実際私は鶴乃たちに秘密にしているし、佐倉さんにも口外しないように協力してもらっている。とはいえ……とはいえよ。

「私は事情を知っているじゃないの。一緒に百恵を助けようって約束した仲じゃない……」

「そうね。じゃあ訊くわ。モモちゃんの体について、十七夜たちに教えた？」

「そ、それは……」

「さらに訊くわ。教えていないなら、これから教える気はあるの？」

あるなら今ここで電話しなさい。かりんちゃんでもひなのでも、なかなかちゃんでもいいわ。スマフォくらい、持ち歩いているでしょ？ ないなら貸すわ」

スマートフォンはもはや現代人の必需品。当然何時<sup>いつ</sup>如何<sup>いか</sup>なる時も持ち歩いているわ。

でも……そこにどうしても手が伸びない。バッグを開けばすぐに取り出せるはずのそれを取る気になれない。

「教えられるわけ……ないじゃないの!」

みたまを突き飛ばしながら吐き捨てた。

今は六人で誓い合ったあの時よりも事態は深刻で、複雑になってしまっている。

完全中立だった百恵がついに傾き、そこにはやり方はどうあれ『魔法少女の救済』を掲げる大きな組織がある。

この『魔法少女の救済』というのが厄介だ。

きっと本当なら、他のみんなも私と同じでこの『マギウスの翼』のやり方に反対するはずだ。

向こう側に付いた百恵も「やり方に納得はしていない」と言っていたし、みふゆも罪悪感を抱いているような様子だった。

でもそれしか……その方法でしか百恵を助けられないと思ってしまつたらどうだろう。

あれから半年経つてもいまだに百恵を助ける方法は見つからない。そんな中で少しでも百恵を助けることができる可能性が見つかったら？ それに賭けようと思う人が出てきてもおかしくはない。現にみたまは『マギウスの翼』に傾いた。

でもそれ以上に……言いたくない。

もし……もしよ？ もしあの百恵が『マギウスの翼』のトップになった理由が自分の命が惜しくなったからだとしたら？

みたまにはひっそりと自ら命を絶つと言っていた百恵だけど、今はどうかかわからない。

百恵は肉体だけでなく精神的にも弱体化している。

朽ちていく自分の体を見て、死ぬことが怖くなつてしまったとしてもなにも不思議はない。私だって、自分の命は惜しいもの。

追い詰められた人間はなにをしてくすかわからない。

それを裏付けるように、百恵は「私にはもう時間がない」と言っていた。

残り僅かな自分の命が尽きるまでに魔法少女を解放するという意味だと最初は思ったけどそうじゃなくて、もう自分の命が助かるにはこれしかないから邪魔をするなどという意味だったら……。

あの百恵が、力強くて大きかった百恵が、中立を破つてまで『マギ

ウスの翼』が掲げる『魔法少女の救済』に継りつくほど弱くなってしまったなんて、思いたくもないし信じたくない。胸の内にはまい込んで見ぬふりをしたい。内輪で解決して有耶無耶にしたい。

だから言いたくない。

「モモちゃんの仕事がなくなった本当の理由を教えてくださいわ」

「……なんですって？」

いつまで経ってもスマフォを取り出そうとしない私を見てもう答えを察したみたまが突然切り出した。

百恵の仕事がなくなった、本当の理由？

「かりんの方に人気が行ったから……じゃないの？」

「半分はそうね。でもよく考えてみてちょうだい。いくらかりんちゃんの人气が伸びたとして、モモちゃんの顧客が一気に落ち込むと思う？ 誰ひとりとしてモモちゃんに頼ろうとしなくなるなんてことが、本当に起こり得ると思う？」

あり得ない。あり得るはずがない。

百恵を慕う魔法少女は今でも神浜に大勢いる。そんな子たちが百恵からかりんにみんな揃って一斉に流れるなんておかしすぎる。百恵の人气はかりんの登場があったとしても揺るぎないものだったはずだ。

じゃあどうして、百恵の仕事が急激になくなってしまったのか。

例えば百恵の弱体化が発覚した時から、極端に百恵の仕事がなくなっていた。百恵が大学生になってからはもはや顧客ゼロだ。よく考えればそんなことあり得ない。

それなら……まさか。

百恵の仕事がなくなった本当の理由は……！

「モモちゃんの仕事がなくなった本当の理由はね。わたしが握り潰していたからよ」

それを聞いた私の頭に一気に血が上った。

解放したみたまをもう一度、さつきよりも強めに肩を掴んで壁にぶつける。

あんなに百恵は寂しそうにしていたのを知っておきながらそんな

真似をするなんて、それは百恵に対する裏切りにも等しい。

「なんでそんなことを……！ そのせいで百恵は！」

もし仕事をそのまま継続させてあげていたら百恵の精神はここまですべて弱体化せずに済んだかもしれない。少しでも老化の症状を緩和できたかもしれない！

なのにどうしてそんな……百恵を追い詰めるようなことを……！

「……たしだつて……」

「なに!?!」

「わたしだつてねえ……好きでこんなことをしているわけ、ないじゃないのよッ！」

今まで無抵抗だったみたまが私を突き飛ばした。感情に身を任せていた私はそれに抗うことができず、調整屋の床に叩きつけられる。

逆切れされたと思つて睨み返してやるけど、みたまの顔を見て力が抜けてしまった。

険しい表情を終始浮かべていたみたまの顔が崩れ、目尻には涙を溜めていたのだから。

「今まで隠してきたこと、教えてあげるわ。モモちゃんは戦う度に老化が進んでいくのよ」

「……え？」

「聞こえなかったのかしら？ じゃあもう一度だけ教えてあげるわ。モモちゃんはね、戦う度に肉体に負荷がかかって崩壊に近づいて行っているって言っているのよッ！」

まさかの告白に私の頭が真っ白になった。

戦う度に……百恵の老化が進む？

百恵の体に負荷がかかって崩壊に近づいているですって!?

信じられない……。

だつてそれが本当だったら、私は百恵を追い詰めていたことになる。

白髪になつて百恵の成長が止まった後も、私は百恵を頼ることをやめなかった。

更紗帆奈が起こした事件の時も積極的に動いてもらったし、厄介な

魔女の討伐依頼を出したことで、何度もある。

それが、百恵の負担になっていったって言うの？

でも……そう考えると辻褃が合う。

あの時は百恵と関わりがなかったベテラン魔法少女の佐倉さんがいたから、なんとか百恵の隙を突いて環さんたちをウワサの元に行かせることができて、戦略上の勝利を掴むことができた。

佐倉さんという百恵が認知していない強力な魔法少女が居なければ、絶対に百恵に勝利することはできなかったでしょう。それくらい百恵の力は圧倒的なものだった。

あんなに体を動かして、普段使わないような自分の魔力を目いっぱい使って、佐倉さんに縛り上げられて、そしてそれを力尽くで破って、余裕で対応していたかのように見えたけど、きつとかなり体を酷使して無理矢理動かしていたんだと思う。

だから……その無理が祟ってしまった。

その結果が、戦いが終わって間もないうちに血を吐き出して崩れた、弱ってしまった小さな百恵だ。

あの力の正体を使うだけで百恵の体を蝕むような危険なものだったとしたら、全て合点がいく。

そして百恵のソウルジェムを調整して、同時に体の調子も診ていたみたまはそれにいち早く気が付いて百恵の仕事をストップした。そうして間接的に百恵の体を守っていたのでしよう。

だったらどうして……。

「なんで言ってくれなかったのよ!? 言ってくれたら私だって……！」

「言えるわけがないじゃない! このことをばらしちゃったら、もうモモちゃんは戦うことができなくなっちゃうじゃない!」

「……っ」

それは否定できない。

このことを知ってしまったら、私たちは徹底的に戦いから百恵を遠ざけていたでしょう。もしかしたら百恵の分のグリーンフシードさえ、私たちが用意していたかもしれないほど過保護になっていたかもし

れない。

でも百恵は、それを決して望みはしなかったでしょう。

百恵は誰かに必要とされなくなっていたことを寂しがっている節があった。みたまによって仕事を潰された挙句、私たちからも頼られなくなってしまうたら……多分今以上に精神が不安定になっていた可能性が高い。

だから……そう考えたみたまは真実を知りながらそれを私たちに伝えず、自分だけが制限をかけることで人知れず百恵の精神と肉体のバランスを調整してくれていたのだ。

「ずつとつらかったわ、モモちゃんを騙して仕事を取り上げ続けるのは！ 毎日仕事がないことを伝える度に寂しそうに笑うモモちゃんを見るのは！……こんな役目を背負うのはわたしだけで充分よ」

そう語るみたまの顔は陰になって見えなかった。

でも彼女の足元にひとつ、ふたつと水滴が落ちて染みを作る。

「迷っているくせにいつまでも優等生であり続けようとするあなたにかける言葉なんてないわ。……今日はもう帰って」

それだけ言って、みたまは奥に行ってしまった。

その背中は悲し気だけど……大きく見えた。それはまるで……。

結局私は調整屋を出た。

これ以上みたまを問い詰める気になれず、それどころか彼女に対して罪悪感を抱くようになって元々悪かった居心地が輪にかけて悪くなったから。

だからと言って真つすぐに帰る気も起きず宛もなく歩いていると……とある高層マンションが見えた。

そこは百恵が部屋を借りているマンションだ。

数回しか来たことがないとはいえ親友の家だし、何よりそこから見える夕焼けが綺麗だったからよく覚えている。

オートロックも認証システムもないから防犯面が整っていない分、意外と家賃が安いと百恵が笑って言っていたあの頃が懐かしい。

確か……六階の左奥から三番目の部屋がそうだったかしら。

ふと見上げて記憶の中の百恵の部屋を眺めた。



そして鳥肌が立った。

その部屋の明かりが、点いている……！

急いでマンションの中に駆け込んだ。エレベーターがあるけどそんなのを待っている時間が惜しい。

階段を駆け上がった。それでも目的の部屋に向かって走った。走ったけど、それでも目的の部屋に向かって走った。

そしてその部屋まで辿り着いた。

表札には『星奈』の二文字。

その部屋は案の定電気が点いている。つまり誰かがいる！

百恵が帰ってきている……そう思った私はインターホンを押した。

するとすぐに部屋の奥から足音が聞こえてきた。ここまで音が届くほどだから走ってきている。

そして……。

「セー……って」

「え？」

百恵じゃない誰かが中からドアを開けた。

その子は……かつて神浜に混沌を齎した魔法少女、更紗帆奈だった。

二ヶ月の百恵の部屋での監禁生活を終えて、すっかり更生した彼女は9月に入ってすぐに百恵の家を出て復学したと聞いていたけど……。

「んだよあんたか。ぬか喜びして無駄に体力使っちゃったじゃん」

「どうしてあなたがここに？」

「……まあ入んなよ。こんなところじゃなんだしき」

じろつと私を見た彼女は部屋に入るように促してきた。

百恵の家なのに自分の家のように振舞う彼女に少し苛立ちを覚えただけど、私は素直に言うことを従った。

久しぶりに入った百恵の部屋は掃除が行き届いていた。

どこにも埃がないし、少し散らかっていてもそれは人間が生活しているからこそ出る汚さであって嫌悪感はない。

テレビも点いているし、料理も作っていたんでしょう。いい匂いが

する。

彼女が随分とこの家に入り浸っているのが見て取れた。

「ほら、食べなよ」

彼女は食卓の上に料理を並べ始める。

まるで私が来ることがわかっていたかのように、しつかり二食分用意されていた。

しかしそれは次の彼女の言葉によって否定される。

「本当はあんたのために作ったわけじゃないんだけどさ。勿体ねーしな」

「じゃあ……誰のために作ったの？」

「そんなの決まってんじゃない。セーナだよ」

セーナ……つまり百恵のことね。

「つつてもさあ、空振りが続いちまってるだけだね。おかげで全部、次の日のあたしの昼飯さ。だから食ってくれよ、さすがに二日連続同じ飯は飽きちまう。かと言って残すのも勿体ねーだろ？」

「……じゃあいただくわ」

今はちようど7時半。サイクルから言って晩御飯の時間だ。

今日はいろいろあつて疲れたし、今更自分で何かを作る気にもなれなかつたから渡りに船だ。

テーブルの上に並べられた料理を見る。

どれも家庭的で特別豪華なものでも珍しいものでもないけど、盛り付けがしつかりしていてどこが上品だ。量も多すぎず少なすぎずで上手く調整されている。

「……い・この味」

そして……この安心するような味付け。

料理教室で学んできたことをベースに自分用にアレンジしてみたと言っていた、たまに家に来た時に食べさせてもらっていたあの味……百恵が作ってくれた料理と全く同じだった。

「まあ、この家で毎日食べさせられていたんだ。おかげですっかり胃袋を掴まれちまってさ、だから覚えざるを得なかつたんだわさ」

箸を突きつつ、彼女……更紗さんは懐かしそうに語る。

それからしばらくの間、無言の食事が続いた。だけどそれは決して気まずいものじゃない。

私はただ、更紗さんが出してくれた御馳走を味わい、更紗さんも自分の作った料理で腹を膨らませている。

招かれざる客だったとはいえ、そこまで嫌われていないみたいだった。

更紗さんから私に対して否定的な感情は一切感じない。

食事が終わったのはおおよそ20分後。

残さず全部食べ切るも決して満腹ではなく、それでいて物足りなくもない。腹八分目というやつだ。ほぼ完全に百恵の料理を更紗さんは再現してみせた。

洗い物を終えて戻ってきた更紗さんは私と向き合うようにして座る。

「んで、最初のアんたの質問なんだけどき、それに答える前にさ、あたしから少し聞いてもいいーい？」

「ええ……なにかしら」

「じゃあ質問だけどき、あんた、セーナと会ったろ？」

あまりにも直球で、そしていきなりすぎる質問に固まった。

そんな私を見て更紗さんは「ああ、もういい」と頷く。

「あんたはもう少しやりにくそーなイメージだったんだけどさあ、今日は随分お疲れのよーじゃん？ 答えなんて聞くまでもなかったよ」「……そんなに疲れているように見えたかしら？」

「ああ、それも物凄くな。だから放つとけなくてつい中に上げちまった」

「……ちなみにそうじゃなかったら？」

「追いつ返していたに決まってるだろ。あいつが失踪したってのにここに来もしない奴なんか、誰が上げるかってーんだ」

それは尤もね。

でもね、言い訳になっちゃうけど、百恵が姿を晦ませてからすぐに一度だけだけど来たのよ、本当に。

「でもそっか。あいつに会ったってーのにそんな浮かない顔をしてい

るってことはさ……もう長くないんだろ？」

「あなた……知っていたの？」

「まあね。とはいえあいつの口からは訊いてないよ。忘れているかもしれないけどさ、今あたしはセーナの魔法を使っているからねえ。だからわかるんだ」

「そういえばそうだったわ。」

更紗さんは事件を起こして以降、暗示の魔法を捨てて百恵の魔法を習得したんだった。

「だから……更紗さんは気が付いた。」

百恵の魔法がいかに強力で危険なものであると。

そして百恵の寿命が長くないってことも。

「ねえ、聞いてくれるかしら。少し長くなっちゃうんだけど」

「……いーよ。暇だったし、聞いてやるよ」

「……ありがとう」

私は全て更紗さんに打ち明けた。

百恵が今、どこで何をしているのか、百恵の体にどんな異変が起こっているのか。そして、そんな百恵を助けようと心をひとつにしたはずの人と喧嘩してしまったことを、掻い摘んでだけでも全部更紗さんに伝えた。

私の話を聞いている間、更紗さんは相槌を打つだけで特に何も質問してこなかった。

そして全部聞き終わった後に、ようやく口を開いた。

「そっか。セーナがねえ」

「……驚かないのね」

「まあ、なんとなくそーじゃねーかなーって思っていたからね。今更紗さん」

「そう言ってお茶をすすっていた。」

更紗さんの顔には焦りがない。

心配そうにはしてはいるものの、極めて平静だ。自分を押しさえつけて我慢しているわけじゃない。心の底から、その程度のことだと思っっているように私には感じられた。

「あたしはね、ぶっちゃけセーナがどこで何をしようがさ、どこでくたばりかけているのかとかさ、そんなことあどーでもいいんだよ」「なんですって?」

そしてあつげらんと言ひ捨てたその言葉に私は目を吊り上げる。まるで百恵のことなんかどうでもいいと言っているようなものだったからだ。

「百恵は死にかけているのよ?」

「知ってるよ。今聞いたし、察していたしね」

「悲しいと思わないの?」

「思うよ。そんなの当たり前じゃん。でもさ、セーナはそれを望んでないんだろ? 強がって隠し通そうとしているんだろ? セーナは自分の身に起こった悲劇を誰かに悲しんでほしいなんざ思っていない。だからあたしは必要以上に悲しまないようにしてんだ。今はもう、残りの短い寿命を全うしてほしいな程度にしか思っていないよ」

あまりにもあつげりとしすぎた更紗さんの言葉に思わず言葉を失う。

更紗さんは……百恵をかなり慕っていたはずだ。

こうして愛称で呼ぶほどに、百恵が更紗さんを受け入れた時はもう依存しているかのように、百恵のことが大好きだったはずだ。

でも……更紗さんは本当に変わった。

「さつとと、ここに来た時のあなたの質問に答えてやるよ。どうしてあたしがここににいるのか、だっけか? 決まってるんだろ。セーナの居場所を守るためだよ」

あの時の全てに絶望して濁っていた瞳とは一転して、その瞳には強いなにかが宿っていた。

「どんな奴らとつるんでいても、どんなことをしていても、どんな状態であつてもさ、それでもセーナはセーナだろ?」

セーナがあたしの全てを受け入れてくれたようにさ、あたしもセーナの全てを受け入れようって決めてんだよ。

今度はあたしが、セーナの全部を肯定するんだ」

その瞳は……どこかみたまど似ていた。

覚悟が決まっっていて、どんなに辛くても自分を貫き通そうとする、そんな力強い光がある。それが私には眩しい。眩しすぎてたまらない。

「ここはあいつの家なんだから、いつか絶対に帰ってきてくれる。たとえ死んじまつて骨だけになったとしてもな。」

そんなときに誰もいなくて、家の中が荒れまくってたら悲しいだら？

だからあたしはここであいつを待つてんだ」

そして……みたまと同じように重なって見えた。

あの小さな、神浜最強の横顔が更紗さんにも。

思えば百恵も、自分の信じたことや決めたことには結構意地っ張りになっっていたっけ。

更紗さんを受け入れた時も必死で守ろうとしていたし、傭兵として輝いていた時も常に自分で決めたルールに厳粛だった。

「あんたがなにを迷ってんのかは知らないけどさ、今は自分が信じていることをまっすぐにやってみりゃあいいんじゃないの？」

あたしだって、その喧嘩したやつだって、セーナだってさ、結局みんながみんな好き勝手にテメーが思ったことをやってんだ。

だからあんたもちったあ好き勝手にやれよ」

そしてその言葉で、霧が晴れていくような気がした。……そうよ。百恵もみたまも、みんな意固地になって抱え込んでいるだけじゃないの。

ふたりとも自分のやりたいことをやって目的を達成しようとしている。どんな理由を並べても結局それは個人の我儘でしかない。

……だったら、私だって我儘を言ってもいいじゃないの。

いつまでも優等生でいたい？ ええ、そうよその通りよみたま。私はずっとその優等生で居続けるわ。

そしてその優等生なりのやり方で……百恵を助ける方法も見つかるし、こんなバカげたやり方で『魔法少女の解放』を目論む『マジウスの翼』を止めてみせようじゃない。

今の百恵は暴走している。その暴走を……私が止める。

敵として立ちほだかるなら私が立ち向かってやるわ。こんなやり方は間違っている、ってね。

気分が軽くなつて、私は口元が緩む。

それを見た更紗さんが頬を搔いて頬を赤らめた。

「けっ、こんなのあたしの言うことじゃねーだろうがよ。あー恥ずかしい恥ずかしい。もう不貞寝しちまいたい気分だよ」

「ふふっ、そう。じゃあ私はもうお暇するわ。……ありがとうね」

「やめろよむず痒い。とつとと帰れってーんだ」

「はいはい」

まるで百恵のように相談に乗って、私の心を癒してくれた更紗さんは私から目を背けて追い払うかのように手を振る。こういうところ、なかなかかわいいじゃないの。

百恵が更紗さんのことをかわいがっていた気持ちがよくわかるわ。

「なあやちよ、次にここに来るときにはさ、セーナも一緒に連れて来いよな。きつとさつきまでのあんた以上に疲れていると思うから、さ」

玄関で靴を履いてドアノブに手を伸ばしたとき、部屋の奥の方から小さいけど、でも確かに聞こえるような声が入った。

「……ええ、約束するわ。——帆奈さん」

私は振り返らないで彼女に応えて、部屋を出た。

## R T A パート18 真実を語る記憶

第6章に向けてすっ飛ばしまくるR T Aはーじまーるよー！  
前回は久しぶりにガチの戦闘をしました。

オートじゃなくで全部マニュアルで操作したのでぬわああああん疲れたもおおおん！ チカレタ……。

リアルプレイヤースキルが出るところですのでいつも以上に真剣にプレイしました。

R T A 実況ですからスピーディーにそして面白いと思える戦闘シーンを我ながら見せることができたと思うので大満足ですが、まだまだ続くんじや。

えーしかしながらですね、肝心の百恵ちゃんが体を壊してしまつて現在ベッドの上です。これもすべて弱体化つてやつが悪いんや。

それでも戦闘能力に特に大きな影響はないので、これからしっかりと体を休めてワルプルギスの夜に備えましょう。

幸いここからは百恵ちゃんは戦いに身を投じさせる予定はありませんので、今回みたいな急激な弱体化は起きえない……はず！

「全く、本当に手間をかせかせてくれるヨネ」

そんなこと言っちゃって百恵ちゃんを介護してくれるアリナ先輩マジ天使。

本来はガバの温床であるアリナも大人しい時はとことん大人しいってのはつきりわかんかね。

あれから百恵ちゃん部屋の……と言ってもホテルフロントホープの一角にある執務室ですが、そこにアリナが住み込んでいます。そして四六時中ベッドに寝た切りになっちゃった百恵ちゃんを見ながらスケッチしています。

ずっと百恵ちゃんばかり描いて飽きないんですかね。

「モエちゃん、その……今は大丈夫ですか？」

お、みふゆさんじゃないっすかオッスオッス。

みふゆさんも第4章が終わってから毎日のように百恵ちゃんの部屋にやってくるようになりました。



羽根達に対する指示の相談が主ですが、来る度に心配そうに話しかけてきます。

大丈夫だつて安心しろよく。ヘーキヘーキ、ヘーキだから。

「絶対安静、つて言ったヨネ？」

アツハイ。サーセン。

ちよつとでも体を動かそうとするとこれです。

まだ確かに回復しきっていませんけどアリナパイセン過保護すぎじゃあないっすかねえ？

でもアリナ先輩、かれこれ一週間ずつと百恵ちゃんの傍から離れようとしませんが大丈夫なんでしょうか。

そろそろ第5章の『ひとりぼっちの最果て』が始まる時期です。

いろはちゃんがかづき荘に越してきて、行方不明になったマミさんを探して原作ダブル主人公である鹿目<sup>かなめ</sup>まどかと暁美<sup>あけみ</sup>ほむらが神浜入りするのがこの章です。

アリナ先輩もここで愉快で素敵でクレイジーな初登場を決めるんですが……あつ、そうだ（唐突）。

このRTAじゃあすでに登場していますね。みかづき荘組ではやりだけですがまあ、充分でしょう。

このままアリナが百恵ちゃんに付きつきりならこの第5章は極めてあっさりと終わります。

この『電波少女』の事件はなんのフラグも必要ありません。

第4章が始まると同時に『電波少女』の話題が上がりますので、そのまま放っておけば勝手にみかづき荘が動いてくれます。

そして独断行動した天音姉妹（主に姉）がハマしたせいで『名無しさんのうわさ』の正体である『名無し人工知能のウワサ』の場所が暴かれてしまいます。はあくつつかえ。やめたらこの仕事。

まあ、ウワサであるアイちゃんがいろはちゃんに接触してしまったせいでもあるんですけどね。

でもそれにしてもいくらなんでも明らかに厄介な鶴乃とフェリシアを毘にかけようとするのは駄目でしょう常識的に考えて。おまえら一番態度悪いつて言われてるぞ。

さて、せっかくですしここで『マジウスの翼』ルートの『魔法少女解放』チャートを走ろうとしている皆さんにひとつアドバイスしましょう。

この第5章も第4章同様、すつ飛ばしてしまう方法があります。

それはアイちゃんに囚われている二葉ふたばさなちゃんを懐柔してしまえばいいんです。

さなちゃんは消えてしまいたいと願いながらも、本当は自分を必要としてくれる人を求めています。

ですのでこちらからさなちゃんにコンタクトを取ってさなちゃんを懐柔してしまえば、事の発端であるアイちゃんの離反がなくなるので、後は笛姉妹をどうにかすれば第5章をすつ飛ばせます。

第4章・第5章とすつ飛ばしてしまえばフェリシアやさなちゃんがみかづき荘入りせず、おまけに原作組ともかかわらないので『マジウスの翼』ルートはクリアしたも同然の状態になってサクサクと解放に向けて準備を進めることができます。

ストーリーが面白いかどうかはさて置き、『魔法少女解放』を目指すRTAを走る兄貴姉御たちにはオススメします。本当にスピーディーに物語が進めていいゾコレ。

おっと、そんな雑談をしているうちになにかイベントが起こったみたいですね。

みふゆさんが来たのもそれを伝えに来たからでしょう。

「今さつき天音姉妹から連絡がありました……由比鶴乃と深月フェリシアを罫にかけた、と」

ああ、これは完全に第5章が始まっていますね。しかも割とクライマックスです。

今はもう夕方ですので、あと少ししたらみかづき荘+まどほむ連合軍が電波塔に突撃！隣の晩ご〇んしてきます。

なるほど、みふゆ経由でアリナに伝わってアリナが直々に出陣するんですね。あそこにはアリナが育てた魔女も隠していますし。

「……あの双子、面倒なことをしてくれるヨネ……。ホームページでうわさを調べてる魔法少女を釣る。それで懲らしめるとか言ってい

たケド……そんな大物を釣り上げたせいで振り回されちゃ世話ないヨネ」

ああつ、(耳が)痛い痛い痛い！

そのふたりを原作以上に育てちゃったの百恵ちゃんだからアリナ先輩の小言が痛いんだよおおおおお！ (自業自得)

「ベリーバッド。面倒くさいんですケド……アリナが行くしかないヨネ」

まあこうなりますわな。

ショートカットできるかと思っただんですが甘かったです。しょうがないね (諦観)。

「みふゆ、ここを見張っててヨネ」

「はい……」

本当に過保護スギイ！

百恵ちゃんを見張るように指示を出すとか、パイセンどんだけ百恵ちゃんのが好きなんでしょうかねえ。

というかこれ、もしかして監禁ルートに入っちゃってます？ だつたとしたら手を打たないといけないんですが……。

でも監禁ルートに突入しているとするとするならば、アリナは魔法で作り上げた結界の中にプレイヤーキャラを閉じ込めるはずなので多分違うと思うんですけど (名推理)。

でもモデルルート内での監禁ルートとか見たことないから全く分からないんですね。

ま、いつか (思考放棄)。

最悪監禁されたら自力でアリナの結界を壊して脱出しちゃえばいいですし (脳筋)。

「モエちゃん！ その、アリナが暴走を……」

部下から連絡をもらったみふゆさんが慌てていますね。これはフェリシアがやってくれましたね。

まさか百恵ちゃんが乱獲した結果もんの凄いことになっているはずのあの魔女をぶつ潰すとは……やりますねえ！

さて、このまま激おこぶんぶん丸と化したアリナをエキサイトさせ

るとシナリオが崩壊してしまうので止めにいきましょう。

というわけでみふゆさん、一緒にパイセンを止めに行こうぜ！

「モエちゃんが大丈夫なら……一緒に行きましょう。しっかり掴まっ  
ていてくださいね」

オツス、(輸送) お願いしまーす！

もう百恵ちゃんは自力で体を動かせる程度には回復していますが、  
それでもダメージが抜けきっていません。

変身して体に負担をかけたくないので、ここはみふゆさんにおんぶ  
してもらって神浜セントラルタワーのヘリポートに向かいましょう。

それにしても一週間も経つのに完治しないとは……このデバフっ  
てここまで影響が出るものでしたっけ？ だとしたら厄介極まりな  
いですね。

みんなもベテラン魔法少女をキャラクリするときは気を付けま  
しょうね。

このゲームでキャラクリするときのオススメは魔法少女歴二年か  
ら三年の中堅の魔法少女です。

ステータスアップ系の固有魔法を習得しない限りはベテラン確定  
にはなりませんし、こんなデバフは99パーセントかかりませんし、  
なにより便利な固有魔法が取れて楽しいですしね。

「アリナがああ魔法をどれだけ可愛がっていたか……。それにあの魔  
女を育てるのに……やっぱり怒りが鎮まらない……！」

「それでも、諦めなくてはいけません。今がその時だと思えますよ。  
そうですよね、モエちゃん」

おっ、そうだな(適当)。

説明しているうちに第5章6話『アリナの作品』にダイナミックエ  
ントリーです。

ヤッホーやっちゃん、一週間ぶりだね元気してたー？ 百恵ちゃん  
はこの通りだぜ！ うちのアリナがご迷惑おかけしてどうもすいま  
せへええくん。

「みふゆ……百恵まで……！」

ここからやっちゃんが色々質問してきますが全部みふゆさんに丸

投げでいいです。

こつちに來たら返さないとですが……全部みふゆが対応してくれました。選択肢が出ないので助かります。

「この場で争いが起きれば、ワタシの体が傷付きますよ？ 背負っているモエちゃんもろとも。それでもいいんですか？」

「っ!?! そ、それは、ノーグッドなんですケド！」

よしオーケー。工事完了です。

『マジウス』側の好感度が高いプレイヤーキャラがアリナを説得すると、ほとんどの確率でアリナは大人しく引き下がってくれます。今回はモデルルートですので確定でした。

ちなみにモデルルート以外のルートで確定にしたい場合はみふゆさんを連れていきましょう。

じゃあなチームみかづき荘の皆さん。無事に五人揃ってよかったぜ。まどかちゃんもほむらちゃんも元気そうだなによりだぜ。

特にほむらちゃん、眼鏡をかけていてくれて本当にありがとうナス！

(6敗)

「……やっぱり戻ってきてはくれないのね」

当たり前だよなあ？ ワルプルギスの夜が来るのが確定するまで(戻る気は) ないです。

というわけでスタコラサッサだぜえ！

そしてアジトであるホテルフエントホープに帰るなりみふゆと一緒にアリナパイセンにチームみかづき荘と敵対してしまっている事情を説明します。

アリナは自分の野望のためにも『魔法少女の解放』についてある程度は言うことを聞くので、しっかり説明すれば魔法少女の真実を知らない魔法少女相手には矛を収めてくれます。

「アイ、シー。じゃあアイツらはあくまで人を探しているだけであつて、アリナたちと敵対するつもりはなかったってワケ？」

そうだよ(肯定)。

まあ、そのいろはちゃんが探しているういちゃんはがつつり『マジウス』に利用されているから和解はありえないんだけどな！

ということでのこのやり取りを経て始まりました、第6章『真実を語る記憶』です。

全マギレコプレイヤーがドン引きしながらも後になって大爆笑したであろう、やつちゃんを出汁にしてマウントを取り合ういろはとみふゆの新喜劇から始まることで有名なアレです。

え？ 違う？ 細けえこたあいいんだよ！

「モエちゃん、体調はどうですか？」

大丈夫つすよバツチエ治ってますよ！

あれから三日してようやく百恵ちゃんの体調が戻りました。もう自由に動けますし、デバフも落ち着いたので元気です。

で、どしたのみふゆさん？

「今からみかづき荘に行こうと思うんです。『マギウス』の講義があることを伝えに行こうかと。モエちゃんも一緒にどうですか？」

来たつ。来た。来たなあっ!?

……ゴホンゴホン！ 失礼、少し落ち着かせます。

いやですね、走者の腹筋的な意味でちよつとヤバいです。これから何が起るか思い出すだけで……。

まだ乗り込んでもいないのに笑いを勝ち取るとは……梓みふゆ、なんて侮れない女なんだ。

さすが百恵ちゃんより一年長く魔法少女をやっているだけのことはありませんね（意味不明）。

さて話を戻しましてみふゆのお誘いなのですが、勿論これは乗っかります。

『マギウス』の講義はばつくれますがお誘いだけはしつかりやりま

すよ。  
ここでみかづき荘組……主にいろはちゃんとさなちゃん

の好感度を上げておきます。

微妙たるものでしょうがこれが響いてくるんですよ。  
ここでちよつとでも百恵ちゃんが悪い子じゃないことをアピールして、裏切った後にすんなり合流できるように仕込んでおきます。

さなちゃんはともかくいろはちゃんはチームみかづき荘のリー

ダーですからね。少しは仲良くなっておきたいです。

こつちには好感度を手っ取り早く上げる手段がありますし、行かない選択肢はありません。

だからみふゆさん、百恵ちゃんも行くんだぜ！

「それでは一緒に行きましょう」

ヨシ！（現場猫）

気合入れているはちゃんの好感度を上げにイクゾオー！デツデツ  
デデデデ！（カーン）

「お帰りなさいやちよさっ!？」

「ただいま、いろはさん。ワタシとモエちゃんも一緒にやっちゃんを待たせてもらっていいですか？」

「へ……………」

「…………あの、お茶煎れてきますね！」

「気を遣わなくて構いませんよ？ それにお茶でしたら、ワタシ、自分で煎れてきますから」

「え、でも…………」

「七年も通い続けた家です。ワタシの方が勝手は知ってると思います」

「あう…………はい…………」

「うーんと…………このお茶にしようかな」

「それ、やちよさんのお気に入りで勝手に飲むのはちよつと…………」

「ふふっ、心配性ですね。ワタシが飲んだと言えば特にお咎めは受けませんよ。モエちゃんもこれでいいですか？」

「あ、あの…………」

「いろはさんは…………」

「ひゃい!？」

『『マジウスの翼』に入る気はありませんか?』

wwwwwwwwwwwwww!!! バンバンバンツ! (台パ  
ン)

大草原不可避wwwwあつたたたたお腹がつwwwwお腹が痛い  
すwwww。

誰かwwww誰か助けてくださいwwww。

お腹が痛いwwww痛いwwww痛いwwww痛いんだよおおおお  
wwww。

草生やすな(豹変)。

ふう、落ち着きました。

まったく、本当になんなんでしょうねこのマウントカー〇イは。

なにが『『マジウスの翼』に入る気はありませんか?』(キリッです  
か。

こっちはいろはちゃんの好感度を上げようと気合を入れているの  
に、なにかとつけてマウント取りまくった挙句、MUR大先輩もびつ  
くりの唐突な勧誘を真顔でされたら力が抜けちゃいますよ。

RTAだっていうのになんか手が動かなくなつてスキップできま  
せんでしたから不覚にも全部モロに見ちゃいましたよ。思い切りタ  
イムロスです。

やはり梓みふゆ、侮れない女です。

さて、こっちが大笑いしている間に百恵ちゃんそっちのけでみふゆ  
さんというはちゃんの会話が続きます。

当然のようにみふゆさんからの勧誘をいろはちゃんが断りました。  
そら、そうよ。

最終目的はともかく大勢の関係のない人を巻き込む『マジウス』の  
やり方を認めるわけがありません。加えていろはちゃんは結構頑固  
な性格なので簡単には自分を曲げません。

それならばとみふゆは『マジウス』の講義を受講するように持ち掛  
けました。これにはいろはちゃんも頷いてくれます。

『マジウスの翼』がどうしてこんなことをしてまで『魔法少女の解



放』を目指しているのかの理由が知りたいんでしょね。

「お帰りなさい、やっちゃん」

「え……みふゆ？　百恵まで……」

おっとやちよさんが帰ってきました。

おや、アポなしでできたからか驚いている様子ですが百恵ちゃんを見ても特に動揺していませんね。あの腕を見られたので食い掛つてくると思っただけです。

まあ、それならそれでいいです。余計なタイムを使わなくて済むので。

「ほ？　みつふゆー!?　百恵ししよー!?　どうしたの!?　やっぱり戻ってくるの!?　やったー!」

「んだよ、鶴乃うるさいぞ！　ってオマエ百恵!?　それとなんか『マジウスの翼』のエライやつ!」

「は、はわわ……」

そして立て続けにみんな帰ってきました。コントかなんかでしょうか……あ、コントでした。それも新喜劇。

「あらあら、ごめんなさい。騒がしくさせてしまいましたね。これ以上混乱させるのも申し訳ないですし、ワタシたちはこれで失礼します。気が変わったら、いつでも『マジウスの翼』に来てくださいね」  
とかなんとか言つて帰ろうとしています。百恵ちゃんは（帰る気は一切）ないです。このままみかづき荘に残ります。だって全然目的を達成できていませんもの。

喋るタイミングをうかがっていたんですがみふゆさんがずっと喋っているせいで切り出せませんでした。

百恵ちゃんのマウントまで取ってくるのか（困惑）。こっちの事情も考えてよ（棒読み）。

「え？　あ、はい。わかりました。じゃあ先に帰っていますね。あ、やっちゃんは少し来てください。ふたりで話したいことがあります」  
おう、じゃあまたな!

ちなみにやっちゃんはしばらくしたら帰ってきます。一年前からまるで成長していないとねちっこい説教をみふゆさんにされてご機

嫌斜めな状態ですが。

さて、正直邪魔だったみふゆさんがいなくなったことでようやく自由  
由に振舞えます。

当初の目的であるいろはちゃんの好感度を上げましょう。

「みふゆに改めて『マギウスの翼』に誘われてね。あの子が本気だとわ  
かって気分が悪いだけよ……。ごめんなさい、百恵を対応したら少し  
休むことにするわ。だから今日は早く寝るわね」

「う……うん」

「夕飯とかは気にしないでください。私たちでなんとかするので」

「ありがとうございます、環さん」

はい、ここ←です！　ここで割り込みましょう！

いつすかあ？　今ここにいい、美味しい料理を作る人、いるらしいんで  
すよ。

「え……腕を振るうって？」

「もしかして!？」

「まさか作ってくれんのか?!　百恵の料理!」

そうだよ（肯定）。

そう、なにを隠そう料理こそ好感度を一気に上げられる手っ取り早  
い手段なのです。非常に新鮮で、非常に美味しいものを食べると誰で  
も気分が良くなるものです。

マイナーですが、実は料理のスキルによる恩恵は敵味方問いませ  
ん。口に入れさせてしまえば問答無用で好感度が上がる素晴らしい  
スキルなのです。

ウォールナッツの料理教室に通い詰めて超簡単なミニゲームをク  
リアし続けられたいだけなので個人的にかなりオススメのスキル  
だったりします。まだやったことないよという人は是非とも試して  
いただきたいですね。

最近料理することがなかったので久々ですが腕は落ちていません。  
大成功を引き当てて一気に好感度を上げましょう。

っていつても、いろはちゃんやさなちゃん的に「本当はいい人なん  
だな」程度までしか上がりませんがね。まあそれでも充分です。

さあ、ショータイムだ。迫真料理部の力、見せてやるぜ。ゲームスタート！

……F○○→(成功)……F○○→(成功)……F○○→気持ちいい  
(大成功)。

はい、ミニゲーム終わり！ 閉廷！ 相変わらず最高ランクの一步手前の出来です。

あと一回料理教室に通えば最高ランクにまで到達するのですが、サボってしまったので一步手前なんですな。

「え……なんですかこれ!？」

「凄い豪華……に見えます」

「やったー百恵の料理だー！ いただきまーす！ ぐぐ！ 美味しいー！」

「うめえ！ やっぱ百恵の料理は最高だぜ！」

まあそれでもあまりのクオリティの高さにいろはちゃんとさなちゃんがドン引き。一方の鶴乃とフェリシアは迷わず料理をがついでいますね。

いろはちゃんとさなちゃんも見てないでこっち来て、おまえらも(百恵ちゃんの料理を口に)入れてみるよ。

「!! 美味しいです！」

「はい！ まるでいいお店で出されたみたいです」

やったぜ。(好感度が上がるのが)見える見える。

「またあなたは……」

おや、まるで姑のようなみふゆさんの忠告を受けて部屋に引き籠っているはずのやっちゃんやんが普通にいました。ああ、そういえば百恵ちゃんを対応したら休むって言っていましたね。

普通に箸を伸ばして食べているあたりどうやらやっちゃんも百恵ちゃんの料理が大好きなようで。前にちよつと食べさせたらこれですから全くちよろいもんですな。

二十分もすれば百恵ちゃんの料理は綺麗さっぱりなくなっていました。これには今まで体調不良で元気がなかった百恵ちゃんもにつこり。

後片付けを終えるまでが料理ですので、当然百恵ちゃんがひとりで済ませます。

さてと、もう帰ってもいいんですがせつかくですし少し勧誘していきましよう。

断られることは分かっていますが、少しでも百恵ちゃんに対するいろはちゃんの好感度を上げたいのでやっていきます。

え？ 逆効果になるんじゃないのかって？ まあ、本来ならそうです。すね。

ですが百恵ちゃんには第二の必殺技があります。

アームカバーで隠している両腕をみんなに見せてやりましょう。

多分やつちゃんは喋っていないだろうからみんな驚くぞ。

ホラ、見ろよ見ろよ。ホラ。

「……えっ!？」

「! なんだよこれ!」

「そんな……どうしたの百恵!？」

「ひ、ひどいです……」

うんうん、想像通りのリアクションです。

百恵ちゃんはなあ、こんなななってまで仕事頑張っているんやで？

みたいな感じで心を煽りつつ勧誘しましょう。そして返事を聞かないで帰ります（無責任）。

そんじゃあなあ! 『記憶キュレーター』のウワサ』ってやつに気を付けろよ!

はい! 今回はここまでにしましょう!

仕込みは完了しましたのでこれでもう第6章で百恵ちゃんが出る幕はありません。

お次は第7章『楽園行き覚醒前夜』からスタートです。

さあ、『マジウス』を裏切つてやるぞ。

それではご視聴ありがとうございました!

S i d e . 七海やちよ 彼女はなんのために

電波塔で二葉さなさんを救出し、神浜セントラルタワーでのアリナ・グレイ率いる『マギウスの翼』との直接対決から三日が経過した。今日この日はみつちりと講義を入れてしまっている曜日。

だから一週間の中で一番帰りが遅くなる日だった。

おまけになんと今日、たまたま通りかかった前にちよつと行ったところのあるお肉屋さんで売られているコロツケがさらに値引きしているのが発覚し、それをいくつか買ったためにさらに遅くなった。

だって揚げたてを用意するって親切してくれたんだもの。

「ただいま」

あと少しで日が沈む、というか既に沈みかけている時間になって私はみかづき荘に帰宅した。

玄関にちよこんと置かれている靴は環さんのものだけ。フェリシアと二葉さんはまだ帰ってきていないみたい。

でもいつもならすぐに玄関まで来てくれる環さんが少ししても来ない。

「環さん帰ってるの？」

なんとなく違和感を抱いた私は小さく言ってリビングに入る。

そこには――。

「お帰りなさい、やっちゃん」

「お邪魔しとるぞ」

まさかのふたりがいた。

梓みふゆと星奈百恵という、私と同年の大物魔法少女かつ敵対している『マギウスの翼』のツートップを前に警戒している様子の環さんが遅れて「おかえりなさい」と困り顔で迎えてくれた。

こうしてまともに顔を合わせたのは『ミザリーウォーターのうわさ』以降ね。二葉さんの時は暴走したアリナを連れ戻すために来ただけだったし。

それにしてもまさかこのみかづき荘で私を待っていたなんて、大胆というかなんというか……。

「……あなたたち、何の用？」

「あら、大の親友たちに向かつてそんな言い方ないじゃないですか。用件はすぐに終わりますよ。だから警戒しないでください」

「ちよつと待て。お主、連絡のひとつも入れておらんかったのかの？」

「ええ、なにか？」

「……まあ、よい」

余裕そうに笑うみふゆとやれやれ顔の百恵。

この様子からして、みふゆが百恵を誘ってここに来たんだなつてことがすぐにわかった。

もし百恵が提案したのなら事前に私に連絡のひとつは寄越すでしょう。でもみふゆならアポなしでいきなりやってきかねない。この大胆というか大雑把なところが実にみふゆらしかった。

だから……みふゆや百恵が、完全に自分の意志で『マギウスの翼』に加担していることが改めて思い知らされて胸の中のもやもやが込み上げてくる。

「で、その要件はなに？」

「急かさないでください」

「要件は？ 『マギウスの翼』を抜けることにしたの？」

この苛立ちをぶつけるように私は即座に聞いたです。

今の質問にイエスと答えてくれたら一気に心が軽くなるけど、多分そうはならないんだらうなと思うと余計に腹が立ってくる。

案の定、答えはノーだった。

しかもあるうことか、私を勧誘しに来たのだと言う。……本当に何を言っているのやら。

そんな答えがわかり切ったことを聞くためにわざわざ切り札の百恵まで引き連れてやってくるなんて。

当然のように突っ撥ねた。

確かに私たち魔法少女の未来は決して明るいものじゃない。でもだからと言って周りを不幸にしてまで明るい未来を掴みたいとは思わない。自分の願いを叶えておいて周りを不幸にするなんて、そんな身勝手はない。

だから私は『マギウスの翼』を否定する。

たとえそこにみふゆや百恵がいたとしても……死にかかっている百恵がそれに縋っているとしても、私の考えは変わらない。もう決めているのよ。

私が勧誘を断って間もなく、ちよつと怒った様子の鶴乃がやってきて、みふゆと百恵を見るなり笑顔でふたりに飛び込んでいった。

多分分かってるんだと思う。

ふたりがここに来たのは『マギウスの翼』を抜けてきたわけじゃないことくらい。鶴乃はバカだけど馬鹿じゃないんだから。

でもそれでも信じてみたかったんだと思う。

さらにそこにフェリシアと二葉さんまでやってきた。

こんなタイミングで全員揃うなんて……ももこじゃないけどタイミングが悪いわね。

「あらあら、ごめんなさい。騒がしくさせてしまいましたね。これ以上混乱させるのも申し訳ないですし、ワタシたちはこれで失礼します。気が変わったなら、いつでも『マギウスの翼』に来てくださいね」  
鶴乃を優しく引き剥がしたみふゆはそう立ち上がる。……が。

「おっと、私はまだ帰らぬぞ。もう少しだけお邪魔させてもらおうかの」

「えっ？」

お茶を啜っている百恵はソファに座ったまま。

これにはみふゆも驚いていた。

「お主は先に帰っておれ。なに大丈夫じゃよ」

「あ、はい。わかりました。じゃあ先に帰っていますね。あ、やつちやんは少し来てください。ふたりで話したいことがあります」

「……わかったわ」

とりあえず百恵は置いておくことにしましょう。少なくともこんなところで暴れたりするような子じゃないから。

問題なのはこのみふゆね。一体私になにを話したいのやら。

みかづき荘から出て少し離れた人通りがない場所で、私はみふゆに尋ねた。

「それで、なにかしら？ ふたりに話したいことって」

「警告です……」

「警告？」

なにが言いたいのかが全く分からずオウム返しをすると、みふゆは至って真面目な表情で続けた。

「キツチンに立って驚きました。まさかいろはさんたちのマグカップを揃えているなんて。忘れたわけじゃないですよ？ 仲間を作れば……」

「仲間じゃないわ。私たちは協力関係よ」

皆まで言わせずにバツサリと斬り捨てた。

でもそれをみふゆは「詭弁だ」と吐き捨てる。口先だけだと、元に戻ったと断言した。

そんなこと……！

「やっちゃんは優しいから見て見ぬ振りができない。自分で設けたハードルを自分で下げています。正直に言います。ワタシの前にいるのは以前のやっちゃんです」

「……警告は聞いたわ」

これ以上みふゆの戯言に付き合うつもりはない。

私が以前の私に戻っている？ ハードルを自分で下げているですって？ バカバカしい……。

正直、もうしばらく顔を見たくないからお引き取り願いたいんだけど、こちらのみふゆに対して聞きたいことがある。

だから今度はこちらから切り出すことにした。

「……私からもひとつ、良いかしら？」

「なんですかやっちゃん」

「みふゆ、あなた……百恵のことをどこまで知っているの？」

「え……」

「答えて」

正直、もう答えは分かった。

きよとんとした表情のみふゆを見て、察しがついた。

「それはどうい……」



「ああ、もういいわ。よくわかったから」

みふゆとは長い付き合いだ。だからわかった。

この反応をしたということは、私の質問の意図を全然理解していない証拠だ。

つまり……百恵が抱えている爆弾について、なにも知らないということだった。

「いい、みふゆ。これだけは言っておくわ。あまり百恵に無理をさせないで。百恵に頼りつきりになるのは今すぐやめなさい」

「……どういう意味かは分かりませんが、今のモエちゃんは『マギウスの翼』のリーダーで、ワタシはその補佐官です。モエちゃんばかりに無理なことを押し付けてはいませんかよ?」

ああ、本当に理解していないのね……。

「私からも警告しておくわ。……神浜最強を過信しない方がいいわよ」

「だからそれはどういう意味なんですか!？」

「警告はしたわ。百恵をよろしく頼んだわよ」

もう話すことはない。

本当なら百恵の体に起こっている事情を話すべきなんでしょうけど、今のみふゆは信用できない。

変に話を広められて百恵に恨みを持つ魔法少女たちの耳に入ったらそれこそ取り返しのつかないことになる。

百恵は今、私たちの手の届かないところにいるのだからすぐには助けられない。

だからみふゆには警告という形でそれとなく百恵に異変が起こっていることを伝えることにした。これならみふゆも注意深く百恵を見るように努めてくれるはず。

……念のためにさらに釘を刺しておきましょうか。

「もしも百恵を危険な目に遭わすようなことをしたら……覚悟しておきなさい」

警告の狙いと同時に私の本心からの言葉を振り返らずにはつきりと言ってやった。

なんだかみふゆが騒いでいるけど聞えなかったふりをする。  
もう本当に話すことはなにもないし、まだみかづき荘には百恵がいる。

一体どんな理由でみかづき荘まで来たのか、その真意を確かめる必要がある。だから無駄な時間を割いていられない。

みふゆと別れてみかづき荘に戻る。

リビングに入ると完全に寛くわんいだ様子の百恵が緑茶を啜すすっていたけど、それ以外のみんなはぎこちなさそうだった。百恵と親密な間柄の鶴乃とフェリシアもどう接すればいいかわからないらしくそわそわしている。

「やちよさん、大丈夫ですか？」

「ええ……平気よ」

「平気ってやちよ、なんだか怖いよ？」

鶴乃に怖いと言われてしまった。

いけないわね、どうやら自分でも気が付かないほど険しい顔をしていたみたい。

「みふゆに改めて『マギウスの翼』に誘われてね。あの子が本気だとわかって気分が悪いだけよ……。ごめんなさい、百恵を対応したら少し休むことにするわ。だから今日は早く寝るわね」

「う……うん」

「夕飯とかは気にしないでください。私たちがなんとかするので」

「ありがとう、環さん」

今日は私が当番だったけど、さっきのみふゆとのやりとりのせいで気分是最悪で食欲も出ない。

だから百恵がここへ来た理由を聞きだしたらすぐに寝よう……と思っていたのだけど。

「それについては私に任せてくれんかの？」

「……え？」

このタイミングで百恵が口を開いた。

今までのやり取りからして百恵の言う「それについて」が指すのは……まさか。

「まず突然の来訪、すまなかつたの。まさか一報も入れていなかったとは思わなんだ」

「それはみふゆらしいから別にいいのだけど……」

「それはそれじゃ。なんの挨拶もなく来てしまつて私なりに申し訳ないと思つておるのじゃ。じゃからお詫びの気持ちを込めて……ここは私に腕を振るわせてもらえないかの？」

「え……腕を振るうつて？」

「もしかして!？」

「まさか作つてくれんのか!? 百恵の料理!」

「うむ!」

にっこり笑顔で肯定した。

……まさかこんな状況で百恵がみかづき荘で料理をするなんて誰が予想できたか。

がっちり胃袋を掴まれている鶴乃とフェリシアは小躍りして喜んでいる。

環さんと二葉さんはまさかの展開に追いつけずに放心している。

……はあ。

「もう、好きにしてちょうだい……」

みふゆといい百恵といい……本当に好き放題してくれるわ。

もう疲れてしまった私はソファに座りながら百恵に許可を出した。

「うむ、任せよ。すぐに用意するからの!」

自前のポーチからエプロンを取り出してキッチンに向かう百恵を見て、最初から料理する気満々で来たことがわかる。

百恵の狙いが全く分からないけど……まあいいわ。決して悪い話じゃないもの。

「あの……大丈夫なんですか？」

「大丈夫よ。百恵は料理に関しては真摯だから。変なものを作ったりはしないわよ」

むしろ味わったことがない環さんや二葉さんはびっくりするんじゃないかしら?」

「のう、やちよ」

「なに？」

「せっかくじゃし、これも使ってよいかの？」

それは……私が買ってきたコロッケね。

「ええ、使ってちょうだい。出来立てだから早く食べた方がいいわ」  
「うむ、わかった。じゃあこれに合わせるかしょうかの」

そんな暢気なことを言ってキッチンに戻っていった。

相変わらずオンとオフがしっかりしている子ね。そんなところは何も変わっていないいつもの百恵だ。

それなのにどうして『マギウスの翼』に加担しているのか……この際問い詰めてやりましょう。先日は色々あつて聞きそびれちゃったし。

「うにやー!? これ、お主ら! つまみ食いをするでない!」

「いいじゃんかよー」

「良いではないかー良いではないかー」

「あともう少しじゃから大人しく待つとらんか! ってそれに手を出すなああつ! 折檻じゃ!」

「あがつ!」

「いぎやいっ!」

百恵がキッチンに向かってから10分近くが経過して、いい匂いがリビングにまで香ってきた頃。

早速百恵の料理の虜とりこになっているバカふたりがキッチンに突撃をかまし、そしてアニメで見るような大きなたんこぶを作って半泣きになりながら戻ってきた。

百恵の鉄拳制裁を受けたのね。

「その……大丈夫、ですか?」

「全然大丈夫じゃないよー!」

「もんの凄くイテエ……。つたく、本当にケチだよなあ。ちよつとくらいいいじゃんかよー」

「いや、これはふたりが悪いような……」

「自業自得ね」

なんてやり取りして数分。

「御待遠様なのじゃ！」  
おまちとおさま

メンバーそれぞれのお盆を器用に持ってキッチンから百恵が現れた。

そこに載っていたのは全部で五つの食器。

綺麗に盛られた白米、季節の野菜を使ったお味噌汁、私が買ってきたコロッケと千切りにしたキャベツをはじめとした野菜にポテトサラダ、そしておそらく手作りのソース、そして小皿にちよこんと漬物が添えられている。

これといって特別な料理はない。

すべてがすべて家庭的なもので、誰でも簡単に作れるものばかりだ。コロッケに至ってはお店で買ったもの。

それなのに……

「え……なんですかこれ!？」

「凄い豪華……に見えます」

案の定、初めて百恵の料理を見たふたりはびっくりしていた。

どこにでもある定番の献立なのに品がある。とにかく盛り付けの仕方やお皿の配置が絶妙に上手いよ。そのせいで第一印象がとてもよく見える。

料理は見た目から勝負、という言葉をそのまま体現したかのような御前が配られた。

「やったー百恵の料理だー！ いただきますー！ くく！ 美味しいー！」

「うめえ！ やっぱ百恵の料理は最高だぜ！」

目がキラキラ光っているふたりは早速がつつき始めた。

私もいただきますをして味噌汁を味わう。

……ふう。

熱すぎず温すぎない丁度いい温度。お味噌の濃さも素材の味を殺さない程度にとどまっているし、なによりもしつこくない。野菜も食感が残る程度までしか火が通ってないからしつかり味を楽しめる。

ずっと飲んでいたいと思える程のお味噌汁だった。

見た目は普通なのに内容は全然普通じゃない。ああ、これよ。これ

が百恵の料理だったわ。帆奈さんはよくこれに近いところまで腕を磨けたわね。

「ほら、お主らも食べたらどうじゃ?」

「あ、はい。いただきます」

「いただきます……」

百恵の料理が初めてなふたりは恐る恐るおかずを口の中に運ぶ。

「!! 美味しいです!」

「はい! まるでいいお店で出されたみたいですよ!」

するとさつきまでの警戒心はどこへやら。

一口で撃沈したふたりはそのまま箸を進め、百恵特製のコロツケ定食をそれぞれのテンポで食べ進めていく。

またあなたは……相変わらず人の好感度を上げるのが上手ね。

「百恵! 味噌汁くれ!」

「わたしにもちようだい!」

「おお、良い食べっぷりじゃのう。待つとれ」

早くも鶴乃とフェリシアがお代わりをせがんでいる。

……これは私も食べていけないとお代わりがなくなるわね。あともう一杯は飲みたいからさっさと食べるとしましょう。

そして30分後。

すっかりお腹が膨れて百恵に胃袋を掴まれた私たちがそこにいた。

全員が米粒一粒残さず完食し、心地いい気分浸っている。

私や環さんが洗い物をしようとしたのだけれど、

「片付けを済ますまでが料理じゃ。じゃから私に任せてくれんか」と百恵に断られてしまった。

思えば帆奈さんも自主的に後片付けをしていたかしら。

こういう自分の拘りに絶対なところは『傭兵』として働いている百恵らしい。

でも、それならどうして完全中立を破ってしまったのだろうか。

「御粗末様じゃったのう」

エプロンを片付けながら洗い物が終わった百恵が戻ってきた。

鶴乃とフェリシアが真っ先に「ご馳走様」を言うと、環さんと二葉

さんがそれに続く。

最初の気まづかった空気は今はずっかり和らぎ、自然と百恵はみかづき荘に解け込んでいた。

「さて、それじゃあ帰る前にじゃ。少しだけお話をするとしようかの」  
「……………」

と、このタイミングで本題を切り出してきた。

これは……ななかから聞いたことがあるわ。

美味しいものをご馳走して雰囲気を変えてから本題に入る百恵の交渉術のひとつ。

こっちがお腹いっぱいいい気分になっているところを狙うことで相手に良い感情を持たせ、そこから自分の有利になるように話を進めるやり方だ。

……まずいわね。

さっきまでの緊張した雰囲気ならこの場にいる全員が構えることができた。でも今はすっかり解ほぐれてしまっている。

あまり百恵を知らず、警戒していた環さんや二葉さんまで若干とはいえ数分前よりも百恵に心を許してしまっているでしょう。

なるほど、だから料理をする気満々でこのみかづき荘に来たのね。自分の有利な場を作り上げるために。

やっぱり気が抜けない相手だわ。

「お主ら、『マギウスの翼』に入る気はないかの？」

そして直球ストレートに切り出してきた。

答えなんて分かりきっているだろうから多分これは本命じゃない。次がきつと本命のはず。

私たちはそれぞれ理由を告げて、百恵の勧誘を拒否した。当然ね。

あんな危険なウワサなんかを作って守って、しかもあのアリナ・グレイをトップにしている組織に誰が入るといふのか。

「まあ、そうじゃろうな。お主らならそう答えると思っておった。変なことを訊いてすまんおう」

「私からもいいかしらっ？」

「む？ なんじゃ？」

「どうしてあなたは『マギウスの翼』に加担しているの?」  
ジツと目線を合わせて問いかける。

誤魔化しは許さない、私が納得するような答えを出すまで帰らせないという意味も込めて、私もストレートに質問を投げかけた。

「いくら考えても分からないのよ。誇り高いあなたがどうして『マギウスの翼』のリーダーをやっているのか」

本当はいくつか見当は付いてはいる。けど、はぐらかせないようにするために敢えて言わない。逃げ道なんて作ってあげない。

「そうだよ百恵。百恵が『マギウスの翼』にいるなんて、そんなのおかしいよー!」

「おまえ自分は完全中立だって言っていたじゃねーか! なんでそれを無視してんだよ!」

さらにそこに鶴乃とフェリシアの追撃がくる。

きつとふたりも百恵の行動に違和感があったから口にしたんだろうけど、いい援護射撃よ。

さあ、答えて百恵。

「ふう……まあ良かろう。私が『マギウスの翼』に属している理由……それはの。もう、私には時間がないからなのじゃよ」

「時間がない」。

以前対峙したときに環さんに言った言葉がまた出てきた。

さりげなくだけど、あの時の環さんのやり取りが私の質問の答えだったということなの? それで、今それを正直に答えたということ……。

まさか。

「百恵、あなたまさか……!」

「……お主が知っておるのじゃ。どうせ隠し通せるものでもあるまい」

百恵は両腕に着けているアームカバーに手をやる。

ゆっくり、ゆっくりとそれを下にずらして……自らの、老いて、朽ちかけている両腕を曝け出した。

「……えっ!?!」



環さんは絶句し、

「！ なんだよこれ！」

フェリシアはそんな百恵の腕を掴み、

「そんな……どうしたの百恵!？」

鶴乃は両眼に涙を溜めて、

「ひ、ひどいです……」

二葉さんが口に手を当てた。

……まさか、百恵が自分から秘密を打ち明けるだなんて思いもしなかった。

環さんが治療しようと変身するも、百恵は自分の魔法の副作用のせいでから魔力の無駄だと拒否した。

「私に残された時間は少ない。じゃからの、なんと少しでも成し遂げる必要があるのじゃ。『魔法少女たちの解放』をの」

「……魔法少女が解放されたら、あなたは助かるの?」

百恵は首を横に振った。

「いや、無理じやの。これは私の肉体に作用する魔法じや。仮に目的を果たせたとしても、私は助からないじやろうな。あと一年も経たないうちに迎えが来るであろう」

「だったらどうして……!」

それじやあ、百恵が『マギウスの翼』に協力するメリットがなにもないじやない!

『マギウスの翼』に協力すれば百恵が抱える問題が解決するならまだわかる。わかってあげられる。

だけどそれでもダメなら百恵にとって『マギウスの翼』に入る理由がなにもないことになる。

理由もないのに完全中立を破るなんて、それはいくらなんでもおかしい。そんなのは百恵らしくない。

「私のは、ひとりでも多くの魔法少女を助けたいと思っておる。じゃから『マギウスの翼』に協力しているのじやよ」

「なんですって?」

「私を頼ってくれる子たちに光を見せてあげたいのじや。老い先短い

私がほんの少し頑張って導けば、多くの魔法少女たちを助けることができる。魔法少女が抱える理不尽な運命から解放して、私の分だけ自由に生きてほしい。そう思ったのじゃよ」

諦めているような笑顔で百恵はそう言い切った。

それが百恵の本心だということは伝わった。今の言葉に嘘はない。それは分かる。

でもそうになると、新たな疑問が出てくる。

「どうして……あなたはそこまでして魔法少女の救済にこだわるの？」

思えば傭兵稼業を始めてから、百恵は他の魔法少女たちに手を差し伸べ続けていた。

最初は本人の性格と仕事がぴったり当てはまったからだと思ってはいたけど、今の話を聞いて見方が変わった。

どうも百恵は、魔法少女を助けることが最初から目的で『傭兵』として活動し始めたかのように見える。

あの時は自分のテリトリーがなくて困っていたからだと言っていたけど、実は最初から魔法少女たちを助けるために傭兵になることを決めていて、そこに誘導するための建前だったとしたら説明がつく。

いったい何が百恵をそんな風に動かしているのか、私はそれが知りたかった。

「……別にこだわってなどおらんよ。どうせ助からない身じゃ。じゃったらせめて、大きな花を咲かせて散ろうと思っただけじゃよ」

それは嘘よ。

回りくどい言い方をして真意を隠してはくるけど、百恵が嘘を言うことはほとんどない。というか意外なことに百恵は嘘を吐くのが苦手な子なのだ。

だからわかるのよ。今の言葉が本心じゃないことくらい。

もつと問い詰めようとした途端、百恵は立ち上がった。

「お主らにこれを見せたのは私の覚悟を見せたかったからじゃ。じゃからは非とも『マジウス』の講義が行われる場所……『記憶ミュージアム』に来てほしい。そこですべてを知るじやろう。それを踏まえた

上で、今一度自分の頭で考えてみてほしいじゃ。……それじゃあ、邪魔したの」

「待って、百恵！」

言いたいことは全部言い切ったという態度でリビングから立ち去る百恵に手を伸ばすもあつさりと躲かれ、慌てて追いかけるも廊下を曲がったところで完全に見失ってしまった。

全力で逃げるほど、この話題に触れられなくなかったってことなの？

「ねえ、やちよ。その……百恵はどうしちゃったの？」

「そうだぜやちよ！ オマエ知っていたのか!？」

「私たちに教えてください！」

「あのひと……その、どうなっちゃうんですか……？」

ああ、こうなるわよね。

鶴乃とフェリシアは百恵のことを現在進行形で慕っているし、環さんや二葉さんも今日の一件から百恵が根からの善人で優しい人間だということを知った。

そしてそんな百恵があんな姿になって、しかも今までの『マギウスの翼』の子たちと違って自分の身を削ってまでして他人の為に動いている人物だと知ってしまったら興味を持たないはずがない。

他言無用。絶対に他の人に言いふらさないことを条件に、私は百恵の身に起きている異変についてみんなに教えた。

## RTAパート19 楽園行き覚醒前夜

いよいよ『マギウス』を裏切る時が来たRTAはーじまーるよー！  
前回で全ての仕込みが終了しました。

あとは第6章の『真実を知る記憶』を無事にクリアしてもらおうのを待たばかりです。

え？ そんな他人任せで大丈夫かって？ 実は大丈夫なんですよ。  
ルートの現在『マギウスの翼』ルートを走っていますので、敵方であるチームみかづき荘のイベントはこちらが干渉しない限りはオートでクリアしてくれます。

たまーにガバが起きて失敗している時もあるのですが……大丈夫でしょ（4敗）。

「モエちゃん、いますか!? 緊急事態です!」

おお? なんか慌てた様子のみふゆさんが来ました。

どうかしたん?

『マギウス』が……一線を越えようとしています!」

おお、来ました来ました!

これは『マギウスの翼』ルートのみふゆさんとの好感度が一定以上の場合に起こるイベントです。

そしてこのイベントが起こったということは無事に第6章が終わって第7章『楽園行き覚醒前夜』が始まっています。

このイベントでは洗脳された鶴乃と『キレートビッグフェリスのウワサ』を融合して多くの一般人を氏に追いやる計画を立て始めた『マギウス』に見切りを付けたみふゆさんが、プレイヤーキャラと一緒に『マギウス』を裏切るように迫ってきます。

これを待っていました。

勿論だぜ、みふゆさん!

そんな悪いやつは百恵ちゃんがお仕置きしてやる!

「ではついてきてください! すぐに皆さんの洗脳を解いて阻止します!」

ヨシ! (現場猫) 順調に物語が進んでいいゾコレ。

ちなみに現在コントロールが利かない状態です。

案の定百恵ちゃん、洗脳やら大量札人やらを『マジウス』が計画している聞いてえらい剣幕で怒っています。そら、そうよ。

まあ本来ならあんまりよろしくないのですが、今回はこの状態になつて特に問題ナツシングなので気楽に見ていられます。

というわけでホテルフエントホープの一室で、なにかさせるとやかましい鶴ピーたちの所にダイナミックエントリーです。

脳味噌筋肉娘の百恵ちゃんには洗脳を解く手段はないのでみふゆさんにお任せします。M H Y、早くしろ〜→

ほら（洗脳を）解け！ 解くんだよ！

「みなさん、もう一度思い出してください！ 本当の気持ちを……」

「オレ……何してたんだ……」

「私も……どうして……こんなこと……」

解けたな（確信）。

意外と早く解けたなく（嬉しい誤算）。解けたフリしてるだけじゃねえのかあ？（懷疑）

はい、これでフェリシアときなちゃんの洗脳は解けました。鶴乃ちゃんは（解け）ないです。悲しいなあ。

「どうして私たちのこと……」

「そうだぞ。オレたちのこと洗脳しといてわけわかんねーぞ」

『マジウス』が越えようとしているからです。越えてはならない一線をあなたたちを利用して。それはワタシの本意ではありません。あくまでワタシは、いえ、ワタシたちはみんなが解放されるのを望んでいますから」

そうだよ（便乗）。

洗脳している時点で百恵ちゃんぶち切れ状態なのに、そんな状態の鶴ピーたちを使って大量札戮とか許せるわけがないんだよなあ。

さてこうしてみふゆさんに協力したことにより、『マジウスの翼』ルートから『裏切り者』ルートに切り替わりました。

ここからは『マジウス』側にプラス補正がかかるので、チームみかづき荘の助けになるように動かなければチャートが破綻してしまい

ます。

かといってやりすぎるとワルプルギスの夜を呼んでもらえなくなってしまうので、原作通りに第7章を終えてもらう必要があります。

というわけですね、ここからは『マジウス』にバレないように水面下でチームみかづき荘の手伝いをしていきましょう。

「いけない……灯花が……」

おっと、ここで『マジウス』と鉢合わせるのは流石にマズいので撤退したいのですが……まーだ（コントロール奪取に）時間かかりそうですかね？

「モエちゃん、ここは……」

って、お？ おおっ？

なんと百恵ちゃん、こちらの目論見通りに窓から飛び降りて離脱してくれました！

さすがにここで暴れるよりもこれから始まる『マジウス』の暴走を食い止めることを優先してくれたみたいですよ！ これって、勲章ですよ……。

コントロールも戻りましたし、今後の動きについて説明します。

今現在チームみかづき荘によるローラー作戦が始まろうとしています。

当然百恵ちゃんも阻止しようと羽根たちを動かすつもりですが結果は振るうことはありません。（直接介入していないから）当たり前前だよなあ？

これからフェリシアときさなちゃんが解放されてみかづき荘に戻った際に、ももこ経由で東から流れてくる遊園地の噂を知ります。そこでチームみかづき荘は東のボスであるなぎたんに連絡を入れて、そのまま仲間に引き入れて一緒に行動するようになります。ここで百恵ちゃんが介入します。

これからの『マジウス』の計画についての情報はみふゆさんから連絡が来ますので、それを仕入れた後なぎたんに連絡を入れます。そこからは大幅なショートカットをするために団地組にも連絡を入れて

なぎたんに迎えに行かせ、そのままチームみかづき荘に合流させます。

どうしてここで団地組が出てくるのか。

それは色んなマギレコのRTAをご覧になっているであろう兄貴姉御たちにはお察しの通り、団地組の鋼のメンタリスト相野みとちやんがこのイベントの特攻キャラだからです。固有魔法の『心を繋げる力』で一発なんだよなあ。

先駆者兄貴のプレイと被っちゃって申し訳ないですけどRTAだからね、仕方ないね(レ)。

「モエちゃん、『マギウス』たちの計画がわかりました」

百恵ちゃんの部屋で待つこと三時間程度でみふゆさんが来てくれました。(情報提供) ありがとナス!

さて、これで計画の全容が掴めたので全力で阻止に回りましょう……ってんん!?

あら、またコントロールが利かない……って、おおーい! 百恵ちゃん!? 何してんすか。やめてくださいよ本当に!(今から乗り込むのは) まずいですよ!

「も、モエちゃん!? 落ち着いて! 落ち着いてください!」

おお、みふゆさんナイス!

頼むから百恵ちゃんを止めてくれえっ! このままじゃチャート壊れちゃう!

「今行くのはまずいです! 慎重に動かないと鶴乃さんたちが危なくなるだけです! それにモエちゃんがこのことを知っていることは隠しています! あとでこっそり救出に動いた方が安全で確実にす!」

そうだよ(肯定)。

だから落ち着け、落ち着け深呼吸!

……。

ふう、なんとかコントロールが戻ってきました。

本当勘弁してくださいよ百恵ちゃん。弱体化の影響で《精神》が下がってきているからか、短気な性格になつてきていますね。すぐに頭

に血が上つちやつて、全く困ったもんじやい。

制御できるようになったところで仕込みに戻りましょう。まずはなぎたんに電話します。

「む、久しいな星奈。そっちから連絡してくるとは、更紗君の事件以来か？」

うん、そうっすね！

今回もちよつと厄介事なんですがねえ、頼めるかい？ 『キレーシヨンランド』っていう遊園地のことなだけどさ！

「ふむ……その噂は自分の耳に入っている。わかった、対応するとしてよ」

すまん、百恵ちゃんも行きたいけどこつちも手がいっぱいいななんや。

あとさ、団地組にも声をかけておくから迎えに行ってくれないかな？ 絶対に役に立つし、連絡も入れておくからさ！

「そうか……そこまで言うのなら意味があるのだろう。わかった。任せてほしい」

ありがとナス！ これからもフォローよろしくな！

これでなぎたんへの連絡を済ませました。

次は団地組です。

電話帳の一番上にあるという理由でみとちゃんに連絡しましょう。

「百恵さん？ お久しぶりですね！ どうしたんですか？」

おうみとちゃん！

ちよつと頼みごとがあるんだけどさ、最近大東区で流行ってる噂あるじゃん？

「ああ、遊園地がどうかいう……」

そうそれ！

それをなぎたんと一緒に調べてくれないかな？ ちよつと緊急事態なんだ。人の命がかかっているくらいなのね！

「えっ、わわかりました！ なんだかよくわからないけど大変なんですわね！ れいらたちにも声かけておきますよ！」

頼んだぜ！



ふう、これで東は大丈夫です。

本当なら電話だけでこんななキャラを動かすことなんてできないんですよ？

でも百恵ちゃんは神浜で結構上の地位にいて、さらに好感度を積み重ねているからこんな力技ができてしまうんですね。

あとなによりもキャラの設定が大事！

こういう動きができるかどうか最初キャラクリ終了後のロードにかかっていますので本当に幸運でした。本当にRTA向けのキャラですよ百恵ちゃん。

これでとりあえずの仕込みは終わりました。

あとは百恵ちゃんも鶴乃ちゃんの救出に動くだけです。

『マジウス』の計画が動き出すのは明日の夜なので、もうやることは特にないです。

明日になったら堂々と裏切ってやりましょう。

じゃあ、流しますね。

こーんばーんはー！

さあさあ、遂にこの時がやってきました。

『キレートビッグフェリスのウワサ』による大量札戮決行の夜です。

「モエちゃん、ようやく場所がわかりましたよ」

完全に百恵ちゃんのスパイになっているみふゆさんマジ有能。

『マジウス』も百恵ちゃんにバレないように警戒しているらしく、全然情報が回ってきませんでした。どうやらみふゆさんにもギリギリになるまで教えなかったみたいです。

「ワタシは行きます。モエちゃんも後からついてきてください。……絶対に止めますよ」

うん、そうっすね！

というわけで『キレーションランド』にいきますよーいきますよーイクイク……ヌツ！

「みんなには遊園地で幸せになって貰わないとー。そして帰りたくな  
くなつてー、でも入場待ちはいっぱいいるから強制退場してもらっ  
ちやうの。この世から！ その時の感情の起伏って、凄そうでしょ!  
とーつてもエネルギーが得られそうでしょーつてうわわっ!」  
笑顔でもんの凄い物騒なことを言っているおガキ様のせいでまー  
た百恵ちゃん制御不能になつちやいましたよー。

本当、百恵ちゃんを怒らせることだけは得意ですねこのおガキ様  
は。

「あー、百恵さんだー!」

「百恵!」

「百恵さん!」

やーやーチームみかづき荘の皆さんこんにちは!

ちゃんと団地組もいてくれるようで何より!

今回ばかりは加勢するぜ!

百恵ちゃんは警察だ(大嘘)。世の中の不逞な輩を見逃すわけには  
いかねえんだ。『マジウス』、おまえらには……正義の鉄槌で、その  
腐った心を矯正してやる。

「なんで最強さんがここに居るわけ!?! というか、あなたこつち側  
でしょ!?! 邪魔しないでよ!」

嫌です(即答)。

てなわけでみんな! こつちは任せて鶴乃ちゃんを頼んだで!

ダメ押しにヒントもあげちゃいましょう。

鶴乃ちゃんはなあ、頑張り屋さんだからいろいろ溜まってんぞ。だ  
から少しは安心させてあげてや。

「それって……まあいいわ。みんな、行くわよ!」

「ふんっ! まあいいよー。どうせ倒し方を間違つたら仲間殺しに  
なつちやうだけだしね。自称最強さんと心を通わせられるかにやー  
?」

それができるんだな!

みふゆさんから対処法はばつちり聞き出していますし、そのための

団地組なんだよなあ。

「そういうことか……七海、相野君を連れていけ！ 彼女の固有魔法は役に立つ！」

「え……あつ、そうか！ はい！ 私も行きます！」

「なんだか知らないけど、お願いするわ！ 一刻の猶予もないもの！」  
ちゃんとみとちゃんを連れて行ってくれましたね。しかもチームみかづき荘のメンバー全員で。確定クリア演出です本当にありがとうございます。

あとは適当に『マジウス』たちと遊んでいきましょう。

みふゆさんはこちら側ですので、適当に受け流すだけで平気です。

アリナはどう動くかわかりませんが、なぜか百恵ちゃんと距離を取ったので攻撃を仕掛けるつもりはないのでしょうか。

となると残りは灯花と、なぜか百恵ちゃんに敵意？ き出しの羽根たちです。この羽根たちは……百恵ちゃんに反抗的な羽根たちですね。

百恵ちゃんに忠誠を誓っているような羽根たちは、そもそもこの『マジウス』のやり方に従うはずがないので、わざわざ羽根まで厳選して連れてきたみたいですよ。

さて、いまだにコントロールが利かない百恵ちゃんですが放置しておきましょうか。

頭に血が上つていると言っても灯花ちゃんたちを頃したりはしないでしょう。その証拠に武器の大剣を出していませんからね。

多少使いづらくなったと言ってもそれは片手で振り回すことが困難になっただけで、両手を使えばまだまだ全然戦えます。

だから安心して見ていられます。  
にしても百恵ちゃん、知らないところで随分恨みを買っていたようですね。

羽根たちが百恵ちゃんに群がって仕方ありません。

「事情は知らんが、今の星奈がこっち側だということは分かった。助太刀するぞ」

「やっぱ味方だと頼りになるよ、百恵さん！」

「私たちも戦います！」

「負けま……せん！」

お、他の残ったメンバーが全員味方してくれるようですね。

「も——！！ 面倒臭いんだから！」

さあさ、灯花ちゃんは百恵ちゃんと一緒に遊びましょうね！

今回の百恵ちゃんはガチで怒っていますからきつと怖いぞ。悪い魔法少女は、おしおきだぞ。

さて、始まりました。VS『マジウス』戦です。

やつちゃんたちが鶴乃をウワサから引き剥がすまでの防衛戦ですが、鶴乃の洗脳を解くためのヒントに加えてみとちゃんという特攻キャラを獲得していますので、従来のものよりも戦闘が早く終わります。

しかも少し時間が経てば……。

「加勢するわよって、星奈百恵!」

「ふゆう!? な、なんで!? 敵だったんじゃないのお!」

レナちゃんとかえでちゃんが来てくれます!

なぜか本来ならこのふたりの相手をするアリナ先輩が動かないのでもう楽ちんですね。

本当、アリナ先輩どうしたんでしょうか?

こうして灯花に協力しているかと思いきや百恵ちゃんが来た瞬間に身を引くつて……本当になんなんでしょうね? (困惑)

「今の元気は20点ぐらいだけど、やる気だけはいつでも満点! 最強を目指す魔法少女、由比鶴乃、復活だー!」

やったぜ。

良かったら鶴乃ちゃんが無事に帰ってきてくれて。鶴乃ちゃんは…… (神浜の) ファミリーみたいなもんやし。

まあ、当然の結果なんですけどね!

これにて戦闘終了です。

百恵ちゃんの怒りが収まっていますませんが、空気を読んで今はおとなしくしてくれています。暴れるなよ……暴れるな……。

「いいよいいよ、説明して損しちやった。行こう、ねむ。みふゆは羽根たちをお願いね。アリナと最強さんにはあとで話があるから」

あつらら、お呼ばれされちゃいましたね。

まあ、百恵ちゃんも殴り込む気満々なので言われなくとも行くつもりでしたが。

それにしても本当にアリナがおとなしかったですね。

多分百恵ちゃんが介入したからだと思っただけ（名推理）、ずっと黙りこくっていましたが、私も戦ってもいませんでした。これももうわかんねえな。

「みふゆ、百恵。今回はありがとう。あなたたちのおかげで、仲間がみんな助かったわ」

「私からもありがとうございます」

ええんやで。

いくらなんでも今回の『マギウス』のやり方は酷すぎるからね、しようがないね（レ）。

「ねえ、いい加減、あなたたちも戻って来ない？」

それもいいんだけどね、おガキ様にお呼ばれされちゃったし最後の大事なことがあるからまた今度ね。

最後の大事な仕事というのは百恵ちゃん専用のウワサをゲットすることです。

ここまで邪魔して灯花とねむの好感度を下げてやれば、向こうは百恵ちゃんを対策するためのウワサを作って無力化しようと思っただけ、逆にはね返さず、逆に屈服させて百恵ちゃんの武器にしちゃいます。これがワルプルギスの夜と戦うための最後のピースです。

パワーだけなら誰にも負けない百恵ちゃんに専用のウワサまでつけてしまえば鬼に金棒。

そこにももこや夏希ちゃんの『激励』によるバフを追加すれば、おそらく過去のRTAの中でもトップクラスのスピードでワルプルギスの夜を討伐することができます。

だからもう少しだけ『マギウス』の傍にいるんじや。

「みふゆ、百恵……」

じゃあな、やっちゃらん！

多分今度会うときはワルプルギスの夜との決戦だと思うから元気

でいろよ！

あと『フラワースピーカーのウワサ』ってやつには気を付けろよな！

「モエちゃん、その……灯花が呼んでいます」

さて、拠点であるホテルフエントホープに戻ってきて三日が経ちました。

あの後速攻で『マギウス』に喧嘩を売ろうとしていた百恵ちゃんですが、どういうわけかどこを探しても『マギウス』がいなかったので通常業務に戻っていたんですね。

なんで『マギウス』たちがいなかったかというと、天文台や電波塔でワルプルギスの夜を呼ぶための工作をしていたからなのですが、そんなことは百恵ちゃんを知る由もありません。

加えて本当なら『マギウス』について行っているはずのみふゆさんまで置いてけぼりなので、ガチで何も知らない状態ですが大丈夫だつて安心しろよく。ヘーキヘーキ、ヘーキだから。

まあでも？ あの後すぐに呼び出されなくてよかったです。

百恵ちゃんまた体を壊して二日ほど寝たきりになっちゃっていましたがからね。戦闘する度に寝込むとか、ウワサを作っては寝込むねむちゃんみたいになっちゃってます。

まだ全快ではありませんが、まあそこそこ戦える程度までは回復している今になって呼び出してくれてよかったです。あの時呼び出されていたらちよつと大変でした。

で、今になって呼び出してきたということは……どうとう作ってくれたんですね！ 百恵ちゃん対策のウワサを！ 早速受け取りに行きましょう！

ちわあーす！ 三河屋でーす！

「くふふつ、久しぶりだね最強さん」

おっ、そうだな（適当）。

明らかに含みのある笑顔で出迎えたおガキ様。（百恵ちゃんにキレ

ているのが）見える見える。

えっと、部屋にいるのは灯花とねむ、それから羽根たちが数人。アリナはどこに行ってしまったのでしょうか？

「アリナには席を外してもらっているよ」

「それよりもさー、日は経っちゃったけど改めてあの時の暴挙について説明してくれるかにやー？」

来ましたね、糾弾イベントです。

もはや弁明することは不可能ですし、まあた百恵ちゃんのコントロールが利かなくなっちゃったので敵認定されること間違いなしです。

さあさあ、早くウワサを出してくれませんかねえ。

そしたらサクツと屈服させてみかづき荘にスタコラサクサとパンサラツサだぜー！

ってんん？

あれ、なんか知りませんが百恵ちゃんダメージ喰らってるんですけど？……つて、ヤバイヤバイ！

えっ、ちよ、どうなってんのこれ!?

「モエちゃん？……モエちゃん!？」

ちよっ、状態異常にかかっちゃいましたよ!?

というかなにをしたんやこのおガキ様たちは!?

「くふふっ、知ってるんだよ？ 今の最強さん、とーっても弱くなってるってことー！」

「このホテルフェントホープは僕が作ったウワサだからね。中でなにが起こっているのか、少し力を使えば把握することができるんだ」

ちよっ、ナニソレイミワカンナイ！

そんな設定あったとか聞いてないっすよ！

じゃあ全部お見通しだったのか!?

「いったい何をアリナが隠していたのか気になっていたけど、まさか最強さんがこんな欠陥を持っていたなんてねー？」

「本当にアリナが邪魔してくれていたおかげで苦労したよ。君に付きっ切りになつて部屋全体に結界を張るなんて思いもしなかったか

らね」

そマ!?! (アリナ) 先輩! 好きッス! (直球)  
そしてなるほど。

普段はアリナが結界を張っていたからわからなかったけど、ここ数日間はそのアリナがいらないから結界がなくなつて、それで百恵ちゃんが戦闘後に体調を崩すことがこのふたりに知られたつてことですか。

これは……難易度ハードを侮っていたのかもしれませんが。

で、百恵ちゃんに何してくれとんじや、このおガキ様たちは。

「だからねー? わたくしの魔法を使つて最強さんの周りにあるエネルギーをほんの少し体に悪いものに変換していたの!」

健康な状態なら特別害はない程度だからどうかなーって思つてただけど、くふふつ。思つた以上に、最強さんの体は脆弱だったみたいだねー?」

あつ、これは……《防御》が23のせいですね。

攻撃なんて当たらなければどうということはない精神でしたが、まさかこんな落とし穴があるとは思ひもありませんでした。

このおガキ様、どこまでも百恵ちゃんと相性最悪ですね。

とか、そんな冷静でいられる状況じゃないんですよ! これは相当マズいです!

今の百恵ちゃんはまだともに戦うどころか、立ち上がることもすらできないほど疲弊してしまっています。もう片膝ついて肩で息をしているくらいに弱り切つてしまつてヤバイヤバイヤバイ!

「灯花! ねむ! どういうつもりですか! あなたたちもどうして……!」

おおつ、変身したみふゆさんが百恵ちゃんを庇つてくれています!

あんただけが頼りやみふゆさん!

さつさと逃げようぜ! 途方に暮れちまうよ!

「ぎーんねんでした! そこにいる羽根たちはみーんな最強さんに恨みを抱いている子たちだよ! だから味方なんていないの!」

あ、やっぱそつすか? つて、みふゆさんまで捕らわれてしましました! 色んな拘束魔法を使われて雁字搦めにされています!



みふゆさんもみふゆさんで、百恵ちゃんに『キレーションランドのウワサ』を使った計画を話したことがバレてしまったせいで敵認定されてしまった……らしいです。ダメみたいですね（諦観）。

八方塞がりなんですけどー!? これどうすればいいのー!?  
つて、ちよちよちよ、百恵ちゃん!?

めっちゃ無理して魔力集めてなにしてるの!? ダメージがえらいことになってるんですけど!?

「え、動けるのっ!?!」

いや、こつちも驚いているんですが（素）。

なんと百恵ちゃん、魔力を使ってめっちゃ無理矢理体を動かして……みふゆの拘束を力尽くで解いちゃいました! もう紙を破くみたいにはビリビリと!

「なっ、モエちゃんその腕は……!」

そしてそのまま掴んだみふゆを武器の大剣の上に乗せて……そのまま投げたー!?

「ちよ、ちよつと待っててください! モエちゃん!? モエちゃああああんっ!?!」

フエントホープの壁を突き破って、みふゆさんは星になりました。そしてそのまま力を使い果たした百恵ちゃんは気絶してしまいます。

なんと百恵ちゃん……最後の力を振り絞ってみふゆさんを逃がしました。

「……悔っていたよ。神浜最強の底力をね」

「でも力を使い切ったみたいだし、丁度いいんじゃない?」

「そうだね。すぐに取り掛かるとしよう」

な なにをする きさまらー! フ・ザ・ケ・ン・ナ、ヤ・メ・ロ・バ・カ! ああ（マジウスから）逃れられない!（カルマ）

こうなってしまうと最早お祈りタイムです。

みふゆさんが連れてくる仲間たちによって百恵ちゃんが助かるのか、それとも助からずに灯花ちゃん好みの芸術品に仕立て上げられてしまうのか!

ちなみに助かったとしても誰かひとりでも犠牲者が出てきてしま

いますとお終いですので本当にお祈りタイムです！

まさかこんな重要なところでガバってしまおうとは……。

ただこれ……成功すると物凄いタイムが出るんですよ。だってここから丸々早送りしていけばいいわけですから。

というわけで……今回はここまでです。

もしダメだったら……探さないでください。

ここまでのご視聴、ありがとうございました……。

## Side. 梓みふゆ 墮とされた希望

「私からも警告しておくわ。……神浜最強を過信しない方がいいわよ」

そのやつちゃんの言葉の意味を、こんな最悪な形で理解するとは思ってもみませんでした。

神浜最強の魔法少女、星奈百恵。

ワタシたちが手にした最強の武器はまさに諸刃の剣でした。

絶大なカリスマ性とその手腕で一気に『マギウスの翼』を纏め上げたモエちゃんは次々と組織改革を行い、羽根全員のスケジュールをすべて管理し、そして『マギウス』が求めるエネルギーを着実に回収してきました。

羽根たちから敬遠されていた魔女狩りもすべてひとりで秘密裏にこなし、責任者のアリナを満足させるほどの活躍を見せ、停滞していた『マギウスの翼』の業務は以前と比べ物にならないほど回転し活気に満ち溢れていました。

ここまではワタシの狙い通りだったのですが……。

「……また、真つ二つに分かれてしまいましたか」

モエちゃんが来る前もあった、『マギウスの翼』の派閥問題。

それが今は違う形で起こってしまいました。

まずは『星奈派』。

こちらはモエちゃんに忠誠を誓い、モエちゃんの手足となって積極的に動く派閥です。

旧保守派の魔法少女と新参の魔法少女たちが属する派閥で、『マギウスの翼』の八割以上がこの派閥に属しています。ワタシや天音姉妹、おそらくアリナもこちら側です。

それに対抗しているのが『マギウス派』。

旧過激派の魔法少女たちと、モエちゃんの改革に異議を唱えた一部の新参の魔法少女たちによって構成されていて、最悪なことにこちらは『マギウス』に忠誠を誓ってしまっています。

そしてアリナを除く『マギウス』……灯花とねむもまた、モエちゃ

んに対して良い印象を持っていません。

以前まではあくまで『マギウスの翼』だけの問題だったのですが、モエちゃんが来てからはエスカレートし、『マギウス』まで巻き込んだ問題にまで発展してしまいました。

このことはすぐにモエちゃんに報告をしました。

ワタシたちの忠誠と引き換えに『マギウスの翼』のリーダーになるという契約で、モエちゃんはここに立っています。ですので今の状況は、明らかなこちら側の契約違反。

隠そうかどうかも考えましたが、そんなことをして逆鱗に触れるよりも正直に話した方が得策と判断しました。

だって『マギウス』の計画には、すでにモエちゃんにとって禁忌の存在ともいえるエンブリオ・イブがいます。

モエちゃんがそれを知ってなお『マギウス』を粛正せずにこうしてワタシたちに協力してくれているのは、この雇用契約に従っているからです。

そんなモエちゃんにこれ以上嘘を吐いて裏切ってしまうえば、今度こそ『マギウスの翼』は『マギウス』ごと壊滅する。

ワタシはそれを恐れて正直に報告しました。

「そうか……。じゃが、これで完全に『マギウス』と『マギウスの翼』が分離せずにはすむ。私は『マギウス』に嫌われとるし、私もあまり好ましくは思つたらんからのう。『マギウス』との架け橋という本来の私の役目をそやつらが担っていると考えれば、悪いことばかりでもあるまいよ。解放のためには、こういう連中もいてくれた方が都合のいいものじゃ」

どうやらこうなることは分かっていたらしく、至って落ち着いた言葉が返ってきました。

内容が内容だっただけに即見切りを付けてくる可能性があるかと危惧していましたが、杞憂に終わりほつとしていましたが……。

書類仕事をしながらそう返したモエちゃんの表情が、一瞬とはいえとても悲しそうに歪んだことを、ワタシは見逃しませんでした。

それから日が経ってまさかの事件が起こりました。

モエちゃんの敗北です。

ウワサを消して回っているやつちゃんたちに対抗するべく現場に急行したモエちゃんですが、なんと敗北を喫したのです。

守っていたウワサが消滅したのは勿論ですが、アリナによって回収されたモエちゃんはかなり弱りきってしまったって、あらゆる回復魔法を試しましたがどれも効果がなく……。

結局モエちゃんが完全復帰するまで十日以上かかりました。

それまでの間、なぜかずつとアリナがモエちゃんの部屋で過ごしていました。

他の『マギウス』同様、基本的に自分本位な性格をしているアリナらしくなく、まるでなにかからモエちゃんを守っているかのように付きっ切りでモエちゃんの世話をしながら毎日モエちゃんの絵を描き続けているアリナは、見ていてとても異質でした。

ですが不気味なことに目を瞑れば、アリナの行動は全てモエちゃんを擁護するものばかりでした。

弱っているモエちゃんに回復魔法をかけるための魔法少女を慎重に選ぶように指示を出したのも、実際に回復魔法をかけた羽根たちに箝かんこうれい口令を敷いたのも、敗北したモエちゃんを糾弾するために呼び出した灯花たちを一蹴したのも全部アリナでした。

モエちゃんも『マギウス』の中で唯一アリナには心を開いているらしく、仲良くしゃべって絵のモデルになっていますし、少し不思議なんですよね。

いったい何がモエちゃんとアリナを繋ぎとめているんでしょうか。「百恵はまさに、『今』を生きているアート。それを勝手に壊されるのはアリナの本意じゃないんだヨネ」

なんとなく聞き出した結果、返ってきたのはそんなセリフでした。それだけが果たしてアリナの真意なのかは読めませんでしたが……理由はどうあれ、アリナがこちら側についていることを確認できただけ良しとしました。

結局モエちゃんの敗北は大々的に広まることはなく、ただの噂話として消えていきました。

真実を知るのは、ワタシとアリナ。そして一部の羽根たちだけ。そこまで抑え込むことができたんです。

でも、肝心な部分は解決していませんでした。

あのモエちゃんが、敗北した。

あの場にはモエちゃんが知らない魔法少女がふたりもいたことは確認しています。

ですから、初見殺しな技によってモエちゃんが足止めされてしまい、その間にウワサを消されてしまった。そんな戦略的敗北なら一応納得できるんです。

でも、モエちゃんは戻ってきたときにはかなり疲弊した状態でした。

一週間以上ベッドで寝たきりになって、さらに数日経ってやっと全快しきるくらいにまで弱りきっていたんです。おまけに回復魔法も効果が出ないほどの重症です。

あのモエちゃんを……戦いにおいて無敵に近いモエちゃんを、なにをどうすればあんな状態にさせられるのか、全く見当が付きませんでした。

そんな疑問を胸にしまいつつ、環いろはさんたちを『記憶ミュージアム』に誘うためにみかづき荘にモエちゃんを伴って行った際に、やつちゃんから言われたあの警告。

——神浜最強を過信しない方がいいわよ。

その言葉の意味をワタシは帰ってからずっと考えて……そして辿り着いた結論に、体が震えました。

もしかしてモエちゃんが……ワタシと同じく弱体化してしまっているのではないか。

あの白くなつた髪の毛も、以前と比べて少し小さくなつてしまったように見える体も、あの静かなながらも強烈な覇気が消えてしまったのも……モエちゃんが弱くなつてしまつてしまっている証拠なのだとしたら？

それならあそこまでこっぴどく負けてしまうのも頷ける。

「……そんなわけがないです、よね」

ですがすぐに、ワタシはそんな推測を振り払いました。

だってそれなら、あの時灯花の首を刎ねかけた動きに説明がつかなかったからです。

あの誰の目にも留まらぬ速度で移動し一瞬で灯花の首を捉えたモエちゃん、仮にワタシと同じ弱体化が始まったとしてもたったの数ヶ月であんなにボロボロにされるまで弱りきるなんて、あり得ないからです。

「でもそれなら……どうして」

最初の疑問に戻ってしまいました。

とにかくやつちゃんの警告通り、モエちゃんをしつかり見守ってあげた方がいい。

最近のモエちゃんはどこか調子がおかしかったですし、それ以前にモエちゃんはワタシの親友です。

ずっと一緒に神浜の情勢を管理してきた盟友の身に異変が起こっているのなら、ワタシがすぐに駆けつけられるようにしないと。

それからワタシは可能な限りモエちゃんの傍にいました。

モエちゃんを邪魔モノのように扱っている灯花たちとの間に立ち、なるべく衝突しないように情報を操って、モエちゃんが危険な目に遭わないように細心の注意を払ってきました。

そして……モエちゃんに隠して、『記憶ミュージアム』で鶴乃さん、フェリシアさん、さなさんを洗脳して連れてきたその日。

「だーもう、いつまでこんなところで待つてなきやなんないんだよ。オレたちだって解放のために色々やりたいよな！」

「うん、そうだね。せっかく安心できる場所を手に入れたんだもんね」「はい。ウワサを使っても魔女を使っても解放に繋がるなら……私、なんでもやりたい……」

わかっていたはずなんです。覚悟はしていました。

灯花たちの機嫌を取りつつ解放への近道ができると思つて、モエちゃんに内緒でこの三人を洗脳してしまおうと決めた時から。

ですが……これはあまりにも度が過ぎていました。

暗示程度の軽度のものだと説明を受けていたのですが、それ以上の効果を発揮してしまっています。

それにこの三人は今までワタシたちを邪魔していた子たち。そんな子たちを灯花がただで許すはずがありません。

間違いない酷い目に遭わされる。

それだけは、それだけはワタシも認められない絶対のラインでした。

ワタシも自分勝手に解放に縋ってきた身ですが、最終的にはみんなで解放されることを願っています。

これまでの『マギウス』たちの命令に従ってきたのも、他人を不幸にしてもギリギリ命までは取らなかつたから。誰も犠牲を出さないとならと割り切つて、今日まで頑張つてこれたんです。

ですから……このやり方だけは認められませんでした。

「モエちゃん、いますか!?! 緊急事態です!」

灯花が来るまでまだ少しだけ時間がある。

それまでの間になんとかしてこの三人の洗脳を解き、そしてモエちゃんに事情を話して『マギウス』の暴走を止めなければならぬ。

だからワタシはモエちゃんの部屋に転がり込みました。

「どうした? なにがあつた?」

『『マギウス』が……一線を越えようとしています!』

「……ほう」

途端、一気に目尻が吊り上がり、怒りの形相に変わったモエちゃんにワタシは全ての事情を説明しました。

みかづき荘の皆さんに魔女化の真実を伝えたこと、洗脳して利用するように『マギウス』から指示を受けたこと、そして、おそらくこれから三人には恐ろしい命令が下されるということを洗いざらい全て伝えました。

「……そうか。わかつた。とりあえず、その洗脳された三人に会いに行くのでしょうかの」

「ではついてきてください! すぐに皆さんの洗脳を解いて阻止しましょう!」

内心凄いいことになっているのでしようが極めて冷静に立ち上がったモエちゃんを連れて、三人がいる部屋に案内します。



「皆さん聞いてください。本当に皆さん、このままでいいんですか？今の『マジウス』が相手では、あなた自身も捧げないといけないかもしれませんよ？特にやっちゃんの仲間だったあなたたちなら、なおさら酷い目に遭ってもおかしくありませんよ？」

洗脳の度合いを再確認し、モエちゃんにもしつかり見せるためにワタシはこの質問を投げつけました。

まともな思考ができる人ならどう考えても首を縦に振るはずがない問いかけ。

それに対してこの三人の回答は……。

「いいに決まってるだろ。それぐらいの覚悟出来てるし」

「はい……。いくらでも私を使ってください……。どうせ透明人間ですから……」

「わたしだってなんでもするよ。みふゆや百恵の頼みだったら、もっと頑張るからね」

隣に立つモエちゃんの歯ぎしりする音が聞こえました。

両手を強く握りしめて我慢してはいますが、その身から溢れ出す荒々しい魔力を通じて激しい怒りの感情が伝わってきます。

モエちゃんはワタシたちにモエちゃんの名前を使った勧誘をすることを固く禁止していました。自分の名前でその人の意思を捻じ曲げることが良しとしなかったからです。

しかも鶴乃さんと深月フェリシアさんはモエちゃんが可愛がって育て上げた愛弟子たちです。それを差し置いても、モエちゃんにとってこの三人も守るべき対象。

そんな三人に酷いことをさせようなど、しかもそれを受け入れるように洗脳するなど言語道断。

つまりまた……『マジウス』はモエちゃんの地雷を踏み抜いてしまったのです。

「駄目ですよそれは……。そこまでするのは駄目です。皆さん、もう一度思い出してください！本当の気持ち……」

すぐにワタシは魔法を使って洗脳を解き始めます。

まさか、自分の幻覚の魔法をこんな形で使うことになるとは思っても

しませんでしたよ……。

フェリシアさんとさなさんの洗脳は無事に解くことができましたが、鶴乃さんだけは一向に解ける気配がありません。

どうもワタシが思っていた理由とは違う理由で洗脳にかかっていて、なおかつこのふたり以上の強い何かが彼女を落とし込んでいるらしいのです。

ふたりの洗脳が解けたところで……部屋の扉が開く音が聞こえました。

灯花が来てしまったようです。

「ふたりとも暫く洗脳されたフリをしてください！ モエちゃん、ここは……」

「うむ、心得た」

ワタシの意図をすぐに汲んでくれたモエちゃんは小窓を開けてこの部屋から出ていきました。今ここでモエちゃんが灯花と会うのは色々と面倒です。

さらにさなさんがすぐに窓を閉めて、近くの椅子に座ってくれたおかげで特に怪しいところはありません。

「ねーねー、まだみんな、洗脳は続いているかにやー？」

いつも通りの調子で灯花が入って来ました。

そして遂に……灯花はモエちゃんだけでなくワタシの許容できないラインの作戦を練ってきてしまったんです。

「実験も失敗を繰り返して、成果が出るからねー」

その灯花の言葉を聞いて物凄く……物凄く嫌な予感がしたんです。

「ちよつと待つてくださいい灯花。鶴乃さんに何をするつもりですか？」

だから問い詰めることにしました。

その答えは……。

「決まってるでしょー？ ゴイブの孵化”が近いんだよ？ これ以上は足踏みできないの！

あとちよつとなのに環いろはたちはウワサを消すし、やめろと言っても全然やめてくれないでしょー？

最強さんは思った以上に使えないし、

最近ではアリナも計画に無関心になつてきているし、

それならもうゆっくりしてる必要なんてないよねー？ パツと終わらせたいの」

さらつとモエちゃんの悪口が出てくるあたり、本当にモエちゃんのことを嫌いなんだなと思いますがこの際は置いておきます。

今の問題は灯花が連れ出そうとしている鶴乃さんにいったい何をするのかです。

「簡単なことだよー？ 自称最強さんには、たくさん殺してもらっちゃおうって思ってるんだよー」

「こ、殺す!?! いったい何を!?!」

「ウワサもたつくさん消されちゃったからねー。くふっ」

それだけ言つて……灯花は鶴乃さんを連れてどこかへ行つてしまいました。

少し待つように命じられたので大人しくしていると、30分ほどして戻つてきました。

とても上機嫌な様子ですがどう考えても碌なことを考えていなさそうなので、こちらの気分は最悪です。

ですがここで聞けるだけのことを聞いておかないと止められるものも止められませんので我慢して灯花の相手をします。

途中、他の『マギウス』のメンバー……ねむとアリナはどうしたのかという話題になった時に機嫌を損ねてしまつて焦りましたけどなんとか持ち直しました。

なんでもねむは今、新しいウワサを作るのに忙しいらしいです。

しかもそれに並行して、もうひとつ特別なウワサを用意する必要があるらしく、それを作るためのアイデアを捻りだしているのだとか。

アリナはモエちゃんが来てから全くというほど計画への関心がなくなつてしまい、ずっと好き勝手に絵を描く毎日。しかもその題材全てがモエちゃんなのだから意味が解らないとのこと。

「それでねー？ こないだ、そんな同じ絵ばっかり描いて何が楽しいのって訊いたら怒つちやつたみたいでさ？ 全然口を利いてくれない

いの！

でき、もうわたくしも我慢できなくなっちゃってアリナをねむの所に連れて行ったんだよ。ちよつとは手伝えてね！」

つまりアリナは今、ねむと一緒にその新しいウワサを作っているんですね……。

それで結局、灯花ひとりで今後の方針を決めるしかない。『マジウス』も色々大変なようです。

「それで、このふたりはどうするんですか？」

「うーん、このまま閉じ込めていても役に立たないしねー。自分たちの最期くらい、役に立ってほしいかにやー？」

……やっぱりただ洗脳して終わりではなかったみたいです。

ですがそれならやりようはあります。

ワタシはこう提案しました。

かつての仲間同士傷付け合ってもらった方がいいんじゃないかと。

「なんかみふゆ、吹っ切れた感じがするねー」

「はい、覚悟はできました」

「そつか。うん、それならいいや。ふたりの扱いは任せるねー」

そう言って灯花は出ていきました。

……なんとかなりましたね。

あとは黒羽根の衣装を手渡して、なにも事情を知らない白羽根の子を使ってやつちゃんたちの所に送り届けてもらえれば、ふたりを無事に解放することができます。

すぐにワタシは手筈を整え、ふたりを解放しました。

次にやるべきことは、鶴乃さんをどうするのかを問いただすことです。

先程のやり取りで多少灯花に良い印象を与えられたと思うので、ちよつと聞けば教えてくれるかもしれません。

少し時間を置いて、仕事の進捗や報告書を纏めてからいつも灯花がいる部屋にお邪魔してお茶を飲むこと一時間。

ようやく灯花から計画の一部を聞き出すことができました。

新しく作ったウワサと鶴乃さんを融合させ、それを使って多くの人

を誘き寄せ、そのまま全員殺して一気にエネルギーを補填する。

そんな、常人には到底思いつかないし、理解したくもない計画を立てていたんです。

ですがワタシは笑顔を張り付けて対応を続けます。我慢しないといけないからです。今ここで、我慢しないと本当に鶴乃さんが酷い目に遭ってしまいます。だから、じっと座って我慢して聞いていました。

そんな地獄のような時間が終わり、部屋を出たワタシはまた少し時間を置いてからモエちゃんの所に向かいました。

すぐに向かったりすると怪しまれるからです。

チラリとですが、部屋の外の少し離れた曲がり角の所に羽根の姿が見えました。

おそらくワタシを監視しているマジウス派の羽根でしょうから、怪しまれないようにするためにも仕事をしているように見せかけ、そして自然な流れでモエちゃんの所に向かわなければなりません。

ですから……モエちゃんに情報を渡すのに三時間もかかってしまいました。

いつ計画が始動するのかわかりませんが、なるべく早めに情報を渡したかったワタシにとってはかなりの痛手です。

部屋に入るといつもの調子で仕事をしているモエちゃんがいまいた。

平静を装っていますが若干ペンの動かし方が荒いことから、いまだに怒りが鎮まっていないことがわかります。

「モエちゃん、『マジウス』たちの計画がわかりました」

「……そうか。して、どんな計画なのじゃ？」

そんな状態のモエちゃんにこのことを伝えるとなると……凄く胃が痛いです。

ですが言います。言わないといけないんです。

全てを。本当に全てを話しました。

すると、モエちゃんは魔法少女に変身して乱暴に椅子から立ち上がりました。

「わかった、もうよい。ちと教育してくるとしよう」

「も、モエちゃん!? 落ち着いて! 落ち着いてください!」

いつもの冷静で温厚な素顔がすっかり消え去ったモエちゃんは、もはや完全に頭に血が上り切ってしまっています。

かつて灯花がモエちゃんの逆鱗に触れた時も静かに怒っていたのに、今回はかつてないほどに怒り狂っています。

こんな一面のモエちゃんは見たこともありませんし、知りもしませんでした

らしくないと思える程の変貌っぷりに度肝を抜かされましたが、このまま行かせるわけにはいかず、必死でしがみ付いて説得を始めます。

「今行くのはまずいです! 慎重に動かないと鶴乃さんたちが危なくなるだけですよ! それにモエちゃんがこのことを知っていることは隠しています! あとでこっそり救出に動いた方が安全で確実にす!」

「じゃ、じゃが……!」

「冷静になってください! モエちゃんがやるべきことはなんですか!?! その怒りを灯花たちにぶつけることですか!?! 違うでしょう!」

鶴乃さんを無事に救出する! それが本当にやるべきことではないのですか!?! 目的を履き違わないでください!」

「!……すまん」

ハツとした表情になったモエちゃんはすぐに変身を解き、力が抜けたように椅子に滑り落ちました。

……鎮まつてくれたようです。

「そうじゃな、取り乱してしもうた。……いかなあ。私としたことが、理性が飛びかけるなど……」

「……いいえ、モエちゃんはいつだつて正しいですよ。ただ、今回は熱くなりすぎてしまっただけです」

「そうか……。ありがとうなのじゃ」

「感謝されるほどのことはしていませんよ」

いつもの調子に戻ったモエちゃんとこれからのことを話し合いま

した。

内容こそ聞くことができましたが、日時がわからず、場所も東側と  
いうことしかわからない曖昧な状態。

これでは変に動いたら裏切りを察知されてしまいますし、失敗する  
と手遅れになってしまいます。

そこでモエちゃんは、東の取り纏め役である和泉十七夜に連絡を取  
り、さらにウワサとの融合を解くのに適した魔法を持つ魔法少女の手  
配をしていました。こちら辺のネットワークの広さで、モエちゃんが  
いかに神浜で大きな偉業を成し遂げてきたのかがわかります。

今日の所はこれでお開きになりました。

お互いに『マギウス』……特に灯花に裏切りを察知されないように  
気を付け、来るべき日に備えます。

事態はすぐに動きました。

計画が始まったのは次の日の夜のことでした。

唐突に灯花から連絡を受けたワタシは偶然近くにいたモエちゃん  
に情報を流し、先に大東区の観覧車草原に向かいます。

その古びた観覧車の中がウワサになっていて、そこにウワサの一  
部になった鶴乃さんが取り込まれています。

「シット、アリナは忙しいんですケド」

「もう！ まだそんなこと言つて！ 今日くらいちゃんと働かないと  
許さないんだからね！」

いきなり喧嘩が始まっています。

アリナは本当に面倒くさそうな顔していますし、灯花はそんなアリ  
ナを見てカンカンに怒っています。

今までアリナは“イブの孵化”に夢中でその瞬間を見たいがため  
に活動していました。

灯花たちにとつても悪い話ではなく、それに加えて都合のいい固有  
魔法もあつて仲間になったわけなのですが、いつの間にかアリナの興  
味はイブからモエちゃんに移ってしまい、そのせいで全然アリナが動  
かなくなってしまった、らしいです。

ふたりの喧嘩を聞いていて知りました。

最後にアリナが動いたのは確か……『名無し人工知能のウワサ』の時ですね。

でもあれもよくよく考えてみれば、あそこにはアリナが育てていた魔女がいたから動いただけで、『マジウス』のためじゃないですね。

一貫して、アリナは自分の興味のあること以外にはやる気を出さないみたいです。ここに来たのも灯花がうるさいから渋々って感じですよ。

とか言っている間にやっちゃんたちがやってきました。

ももこと十七夜、そして……多分余所のチームである三人組を連れて。

多分あの三人が、モエちゃんが手配した鶴乃さんを救出するためにうってつけの面子で、十七夜がそれを纏めているようです。

それにいち早く反応し、そして攻撃を仕掛けたのはやる気がない様子だったアリナでした。

「キンパツに透明人間……！　アリナの作品を壊したこと、許してないんだカラ」

ですがその理由は実にアリナらしいものでした。

解放云々ではなく、自分が育てた魔女を壊された怒りが再熱して攻撃を仕掛けただけです。狙いもフェリシアさんとさなさんでしたし。

「灯花ちゃん止めて。鶴乃ちゃんに酷いことさせないで……お願い」

「んー……い——やっ！」

理由はどうあれアリナがやる気を出したことに機嫌を良くした灯花はいろはさんの訴えを笑顔で拒否。

「みんなには遊園地で幸せになって貰わないとー。そして帰りたくなくなつてー、でも入場待ちはいっぱいいるから強制退場してもらっちゃうの。この世から！　その時の感情の起伏って、凄そうでしょ!？」

とーつてもエネルギーが得られそうでしょ!？」

「ほう、それはとても面白そうな話じやのう?」

「つてうわわっ!？」

聞いているこっちの頭がおかしくなるような灯花のセリフを遮るように青い帯がうねり、それは灯花が立っているところに鞭のように



叩きつけられました。

……ここで到着しましたか。

「是非とも詳しく聞かせてくれぬかの？」

「あー、百恵さんだー！」

「百恵!?!」

「百恵さん!?!」

「なんで最強さんがここにいるわけ!?!」

情報を厳しく管理して、秘匿にしていたのになぜかそこにいる神浜最強の登場に、他の皆さんだけでなく灯花まで驚いています。

多分、ワタシがモエちゃんに情報を流していたことがバレるのは時間の問題でしょうね。フェリシアさんたちを解放したのもワタシですし、ここにいる羽根たちは見た限りマギウス派ですから。

「というか、あなたこっち側でしょ!?! 邪魔しないでよ!」  
「断る」

バツサリと斬り捨てたモエちゃんはやっちゃんたちの横を通り抜け、先頭に立ちます。

「百恵……」

「すまんかったのう。誠に勝手ながら、今回はお主らに加勢させてもらうぞ。ここは任せて、お主らは前に進むがよい」

「そう……ありがとう」

「それからのう……。おそらく彼女は今、とても疲れておる。早く迎えに行つて、安心させてやるとよい」

「それって……まあいいわ。みんな、行くわよ!」

やっちゃんたちが動いたのと同時にそのまま戦闘が始まりました。

ワタシも形だけですが戦いました。

モエちゃんも分かってくれているからか、わざと威力を緩めた一撃をワタシにぶつけてくれました。はた目から見たら、神浜最強の拳をまともに受けたように見えるはずなのでそのまま気絶したフリをしています。

アリナはまたやる気をなくしたらしく、一歩下がって静観しています。

これでモエちゃんたちが相手をするのは灯花とマジウス派の羽根だけ。そして目的はやっちゃんたちが鶴乃さんを助けるまでの防衛です。

みんながみんな戦闘に手馴れていますのでそのままずると縛もつれ込み、そして……。

「今の元気は20点ぐらいだけど、やる気だけはいつでも満点！ 最強を目指す魔法少女、由比鶴乃、復活だー！」

無事に鶴乃さんが帰ってきました。

これで双方戦う理由がなくなったので戦闘が終わりました。

モエちゃんはまだ怒っている様子ですが、今は鶴乃さんの無事を確認できた喜びの方が大きいらしく大人しくしてくれています。

……そろそろ気絶しているフリをやめて起き上がりましようか。

さて、ここからは今日は体調がいらしくねむが外に出てきていました。

どうやら今日の計画で全て完了させるつもりだったらしく、そのお祝いをするためにわざわざ出てきたとか。

そしてこの場にいる全員に向けて『マジウス』たちの目指す解放のやり方についての話が始まりました。

最終的には誰も魔女にならず、キユウベえにも邪魔をされない魔法少女のための世界を作り上げること。

それを果たすためにはエネルギーが必要で、そのエネルギーというのが、ウワサのせいで人々が悲しんだり喜んだりして発生させるエネルギーと、魔女が蓄えていたり魔法少女が魔女化するときが発生させるエネルギーだということ。

そのエネルギーを大量に集めてフェントホープの地下に幽閉されている半魔女のイブを孵化させ、それと同時にこのマジウスの三人が揃っていることで、それが実現するということ。

より詳しい事情を知っていますから、ここだけ聞けば決して悪くない話です。

というかわたしは、この話を聞いて協力することを誓い、他の魔法少女たちを集めて『マジウスの翼』を作り、モエちゃんに助けを求め

たのです。

……ですが。

「色々と聞きたいことはあるけど、質問はひとつだけでいいわ」

「どーぞ？」

「そんな高尚な思想を持つあなたが、どうして人間を利用したの？」

「言わなかったー？ 魔法少女より価値のない人を先に使う方がいいでしょー？ 物事にはリスクが必要だから、使えるものは使わないと」

……なんとなく察しは付いていましたが、本当にそんなことを考えているとは思いませんでした。

なるほど、それなら旧過激派が『マギウス』に付くはずです。

今のその発言こそ、モエちゃんが全面的に否定した魔法少女至上主義そのものなのですから。

ワタシの隣になって静かに話を聞いていたモエちゃんの握り拳がさらに強くなります。

「いいよいいよ、説明して損しちやった。行こう、ねむ。みふゆは羽根たちをお願いね。アリナと最強さんにはあとで話があるから」

そう言って『マギウス』の三人は空間転移の能力を持つ羽根と一緒に立ち去りました。

「……私たちも戻るか」

「ええ。それじゃあ、皆さん戻りましょう」

「みふゆ、百恵……」

帰ろうとしたところでやっちゃんに呼び止められました。

とりあえず羽根たちを全員帰らせ、そしていなくなったことを確認してやっちゃんの話聞くことにします。

この羽根たちは言ってしまうえばワタシたちの味方ではありませんからね。変に聞き耳立てられて告げ口されたら大変です。

「ふう……今回はありがとう。あなたたちのおかげで、仲間がみんな助かったわ」

「私からもありがとうございます」

「気まぐれですよ」

「……そうじゃな。今回はどうしても許し難かったから介入した。それだけのことじゃよ」

「話がそれだけなら、ワタシたちは戻りますね。行きましようか、モエちゃん」

そう言つて背を向けるワタシたちに、やつちゃんは待ったをかけた。した。

「ねえ、いい加減。戻つて来ない？」

……そのやつちゃんの言葉はとても甘くて、そして優しいもの。戻るとしたら今が潮時なのでしょう。

これから帰つたとしても、ワタシの居場所はおそらくあそこにはありません。

灯花とねむをあそこまで怒らせてしまった今、裏切ってしまったワタシに待ち構えているのは針の筵だけでしょう。

「……みふゆ、お主は残れ。後は私がやる」

そしてそれはモエちゃんも同じ。

全く同じ結論に至つたモエちゃんのはつきりした声で、全員に聞こえるような声でワタシに残れと言つてくれます。……ですが。

「いえ、そういうわけにはいきません。残るとするなら、それはモエちゃんの方です。そもそも、ワタシたちはモエちゃんとの契約をすでに破つてしまっています。ですから……今までありがとうございます」

ワタシからもはつきりと告げます。

残るならモエちゃんの方だと。巻き込んだのはワタシなのだから今抜けても文句は言わないと。

「そうか……ならば、もう少しだけ一緒に頑張ってみようか」

ですが、モエちゃんは拒否しました。

戻らないと。

「そうですね。お供しますよ」

ですからワタシも返します。

戻らないと。

「すまんやちよ。まだ私にはやるべきことがあるのじゃ。だから戻

るわけにはいかん。もう後には引けんのじゃ」

「ワタシもですよやっちゃん。ワタシには責任があります。黒羽根や白羽根の子たちを、そしてモエちゃんを巻き込んでしまった責任が。だから果たさなくちゃいけないんです。みんなの夢を叶えるという目的を」

「みふゆ、百恵……」

ですから……ごめんなさい。

ワタシたちはやっちゃんの手を取らずに、フェントホープに戻りました。

次の日にモエちゃんに会いに行きましたが、少し体調が優れなかったらしくやりとりはスマフォで済ますだけ。直接会うことはできませんでした。

『マジウス』の三人も出かけていて、どこにもいません。羽根たちもどこかに連れ出されてしまっているらしく、フェントホープに残る羽根たちは数える程度しかいません。

ワタシになにも言わずに沢山の羽根を連れだしたということは、ワタシの信頼も地に落ちていきますね。これはバレていると見て間違いないでしょう。

そして三日が経ち、昼過ぎに『マジウス』の三人が帰ってきました。(ねえねえみふゆー。今から大事な話があるから最強さんを呼んでくれないかにやー?)

そして開口一番に放った命令がモエちゃんの呼出し。しかも念話で。

絶対になにかありますね。

いつもの灯花の部屋に来るように言われましたので、ワタシは信頼できる羽根たちを先に向かわせてモエちゃんを連れて行きます。

まだ体調が悪そうなので休ませようと思ったのですがどうしても行きたいとモエちゃんが言うので、モエちゃんを背負って部屋まで行きます。

部屋に入る前にモエちゃんはワタシから降りて、少し咳払いして体調不良を感じさせないようなしつかりとした表情を作って入室しま

した。

「くふふっ、久しぶりだね最強さん？」

「誰にも言わずにどこをほつつき歩いていたのかの？」

「さあ、どこでもいいでしょー？」

部屋にいたのは灯花とねむだけ。

「アリナはどうしたんですか？」

「アリナには席を外してもらっているよ」

これは……意図的に席を外させましたね。

アリナがモエちゃん側の人間だとわかっているから。

「それよりもさー、日は経っちゃったけど改めてあの時の暴挙について説明してくれるかにゃー？」

「それを説明する必要があるのかの？」

「んー？ まあどうでもいいかにゃー。だってもう終わったことだしねー」

「……随分と心が広くなったではないか。では私からの質問にも答えてくれるかの？ お主らのやり方についてなのじゃが……」

「くふふっ、慌てないのー。そんなに慌てているとー……体に悪いよー？」

一段と冷えた灯花の音が発せられた途端……。

「ガッ!? ゲホッ、ゴホッ……!」

「モエちゃん?……モエちゃん!」

突然モエちゃんが血を吐き出して崩れ堕ちました。

この弱り方は、あの時と全く同じ。

モエちゃんが敗北して戻ってきた、あの時と……!

「くふふっ、知ってるんだよ？ 今の最強さん、とーっても弱くなってるってことー!」

「このホテルフエントホープは僕が作ったウワサだからね。中でなにが起こっているのか、少し力を使えば把握することができるんだ」

「……どういう、ことですか?」

モエちゃんが弱くなっている?

それはつまりワタシと同じ……いや、だとしてもこれは変です。ワ

ワシはこんな風に血を吐き出したりしませんし……。

ということはワシとは全く違う要因で、モエちゃんは弱体化しているっていうんですか？

突然の出来事にあまり頭が回らないワシはモエちゃんを庇いつつ、灯花とねむを睨みつけます。

ですが彼女たちはそんなワシに目もくれずに笑顔で話を続けました。

「いったい何をアリナが隠していたのか気になっていたけど、まさか最強さんがこんな欠陥を持っていたなんてねー？」

「本当にアリナが邪魔してくれていたおかげで苦労したよ。君に付き切りになって部屋全体に結界を張るなんて思いもいなかったからね」

……まさかアリナがそんなことをしていたなんて。

でも……そうか。モエちゃんが弱っている間、アリナがずっと部屋で看病していたのは、このふたりからモエちゃんを守るため。

結界を張ってまでしてモエちゃんの弱体化の真実を、ワシも含めて誰にも打ち明けずに秘密にしていたんですね。

—— 神浜最強を過信しない方がいいわよ。

ワシの脳裏にやっちゃんからの警告がリフレインする。

そうでしたか……やっちゃんはこれを警告していたんですね。確かに口に出せませんよ……。

「くふっ、でも今回はしっかり見ちゃったよー？ わたくしたちの計画を台無ししてくれた日の夜に、部屋の中で随分苦しそうにしていたよねー」

あの神浜最強の魔法少女が、戦う度にダメージを負うような体になっっていたなんて……！

今日までずっと体調が悪かったのは、モエちゃんが魔法少女の力を使ったから。

どういふことかはわかりませんが、モエちゃんが魔法少女として戦う度にこうして体調を崩すようになってしまったとするなら全ての辻褄が合う！

「だからねー？ わたくしの魔法を使って最強さんの周りにあるエネルギーをほんの少し体に悪いものに変換していたの！」

健康な状態なら特別害はない程度だからどうかなーって思ってたんだけど、くふふつ。思った以上に、最強さんの体は脆弱だったみたいだねー？」

近くにいたワタシに何も起きない程度の有害物質を取り込んだだけで、ここまで弱ってしまうほどに体を壊したモエちゃんは肩で息をしながら灯花を睨みつける。

そんな……神浜最強の魔法少女が、こんなにあっさりと無力化されるなんて……！

「灯花！ ねむ！ どういうつもりですか！」

「どういうつもりもなにも、もう神浜最強はお役御免なんだよ。前回の一件で、僕たちは大幅に計画を変えるしなくなっちゃった。そこにこの神浜最強は必要ない」

「だからー、わたくしたちの役に立つようにしちやおーって思ったんだー。いい考えでしょー？」

「それって……」

まさか……巴さんにやったように、ウワサを宿らせて洗脳しようとしているんですか!?

弱っているとはいえ、いまだに神浜最強の名に恥じない戦闘能力を誇るモエちゃんにウワサなんてものを宿らせたら……神浜の希望が一気に絶望に変わる。

もし鶴乃さんと同じようにウワサと融合させて人々の命を奪うような真似をさせたら……！

「でもね、どうしても僕たちの都合のいいウワサを作ることはできなかったよ。神浜最強は扱いにくすぎる。本当にどこまでも僕たちの足を引っ張る存在だよ」

「だからねー、最強さんは時間稼ぎ！ 最強さんは環いろはたちの相手をしてもらって、その間に本命を呼ぶのー！」

「……本命？」

「そうだよ。ワルプルギスの夜を！」



「なっ!?!」

ワルプルギスの夜……? あの伝説の魔女を……呼ぶ? この神  
浜に……?」

「き、さまら……正気か?」

「あれ、まだしゃべれるんだ。しぶといね」

「そんなやつを、呼んでみろ……神浜の全てが根こそぎ持っていかれ  
るぞ……!」そこまでする価値があると本気で思っておるのか!」

「三日前に終わってればこうはならなかったんだよ? 最強さん  
がわたくしたちに盾突いたからこうなったんじゃない。こうなった  
のも全部、最強さんの我儘のせいだよ?」

「そ、それは……」

身勝手すぎる灯花の言葉を受けたモエちゃんが完全に押し黙って  
しまいました。

……モエちゃんが口喧嘩で負けた。しかも交渉事が上手くない灯  
花相手に!

ずっとずっとワタシややつちゃん、十七夜にひなのといった海千山  
千な相手に対して一步も引かなかったあのモエちゃんが……! 普  
段のモエちゃんならすぐに論破できるはずなのに!

そこまで……弱ってしまったということですか!?

「あなたたちもどうして……!」

ふと思い出して、ワタシは部屋の中で待機させた羽根たちに声をか  
ける。

彼女たちはモエちゃんを慕っていたはず。それなのにどうして動  
こうと……なっ!?

違う……フードに隠れているから気が付かなかったけど、この子た  
ちはワタシが声をかけた子たちじゃない!

「ぎーンねんでした!」そこにいる羽根たちはみーんな最強さんに恨  
みを抱いている子たちだよ! だから味方なんていないの!」

そんな……じゃあ、ワタシが最初に声をかけた子たちは……!」

「……みふゆさん、ごめんなさい」

「みふゆさんには恨みはないけど、少しおとなしくしててください」

「なっ、あなたたち!？」

ワタシの体にリボンや鎖といったものが次々と縛りついてくる。

この子たち……みんな拘束魔法の使い手ですね。

「みふゆも悪い子だよー。内緒だよって言ったのに全部最強さんに話しちゃうんだもん。だからそこでおとなしくしててね」

「く……」

頼みのモエちゃんは弱り果てていてワタシは動くことすらできない。さらに四面楚歌のこの状況。完全に詰んでしまいました。

こんなところで……。

「おの……れえ……」

地の底から出たような、黒い声と共に、少しずつ、少しずつ、うずくまっていたモエちゃんの体が動き始めました。

いつの間にか魔法少女に変身していて、その白い和服の戦闘着を自らの口から流す血で緋色に染めています。

「え、動けるのっ!？」

それはまともな起き上がり方ではなく、一々体の部位に力を込めて、無理矢理起き上がらせているかのような、そんな不気味な動きにワタシたちは誰も動けず、啞然と見ているばかり。

「近づくなぞ……今の私は、なにをしでかすか、わからんからのう……」

目を充血させて見たこともないような不気味な笑みを浮かべるモエちゃんは、内股で立ち上がりよろよろとワタシに向き合うと……ワタシを縛り上げている数多くの拘束具をまるで紙を破くように両手を使って乱暴に引き千切り、引き裂いていきます。

その際にモエちゃんの両腕を覆っているアームカバーがびりびりに破け……隠れていたモエちゃんの両腕の惨状が明るみになりました。

「なっ、モエちゃんその腕は……!？」

「お主は逃げろ。そして生きるのじゃ」

「え?？」

そして……モエちゃんは左手でワタシの体を持ち上げ、右手に持つ久しぶりに見るモエちゃんの武器である大剣の上に乗せます。……

え？

「しつかり掴まるのじゃ。そして齒を食いしばっておれ、舌を嚙むぞ……」

ま、まさか……！

「行くぞ……」

「ちよ、ちよつと待ってください！」

「え、まさか？でしよ？」

ぽかんとした灯花の声の後、ワタシを乗せた大剣が少し後ろに下がった、と思つた時にはワタシの体は風を切っていました。

目の前にある扉を、そしてフェントホープの壁を突き破りながらも一向に速度を落とさず、まるでミサイルの上に乗っているかのように飛ばされるワタシの体。

「モエちゃん!? モエちゃあああんっ!?!」

その恐怖と、残されたモエちゃんに対する心配が入り交じった悲鳴を上げつつ、振り向くと……諦めたかのような悲しい笑顔を浮かべて、投げ飛ばしたワタシを見ながら倒れ行くモエちゃんが羽根たちに囚われていました。

微かに動いているモエちゃんの口。

辛うじてワタシはそれを読み解くことができました。

——よかつた——

そう、言っていました。……どうして。

「どうして言ってくれないんですかモエちゃん……!」

同じ四文字なのに……どうして言ってくれないんですか。あの四文字を……!

それが無性に悔しくて、そして腹が立ったワタシはもう一度振り返ります。

「必ず……必ず戻ってきます！ ですからどうか、無事でいてください！ モエちゃん!」

もうフェントホープが小さくなるところまで飛ばされてしまいましたが、それでも……モエちゃんがいるあの部屋をしっかりと見て、ワタシは叫びました。

待っていてください、すぐに戻ってきますから……！

## Side. 七海やちよ 集結する魔法少女

鶴乃を救出してから三日が経った今日。

神浜は、混乱に渦巻いていた。

「……ヴヴ……ガアア……」

「次から次へと……!」

理性を飛ばして襲い掛かってくる羽根たちをあしらいながら、私は逃げ遅れた魔法少女がいないかの捜索を続ける。

現在神浜では大量の魔女がそこら中に跋扈している。そして、無関係の魔法少女が羽根たちに襲われる事件が発生していた。

凶られたように一斉に現れた魔女、神浜の魔法少女たちを無差別に襲う羽根たち、そして、今後の話し合いをしていた私たちの前に洗脳された巴さんが現れたことで確定した。

『マジウス』が動き出したのだと。

巴さんは言った、『マジウス』が手段を選ばなくなったと。

思い入れのあるウワサがあり、それがどうしても気になるから調べたいと言ういろはだったが、その行為はあまりにも危険なものに他ならない。

そのウワサが本当にあるかどうか分からないし、もし仮にあったとしてもそのウワサに罠が仕掛けられている可能性もある。そして何より、今のこの状況が私たちにとって非常によろしくない状況なのだ。

ええそう、凄く、凄く危険な状況なの。

だから今回はいろはを説得してそのウワサの捜索を諦めてもらって、手分けして襲われている魔法少女たちの救出と保護に向かった。

東側の工匠区に向かって移動しながら正気ではない様子で襲い掛かってきた羽根をいなしつつ、私は『調整屋』のみたまに連絡を取った。

「電話なんて珍しいじゃない、やちよさん。どうかしたの?」

『マジウス』が動き出したわ。洗脳された様子の羽根たちが手当たり次第に他の魔法少女たちを襲っているのだけど心当たりはない?」

「……えっ。どういう、ことなの？」

直球に聞き出すと、いつものみたまらしくないリアクションを返してきた。

みたまは百恵と繋がっている。ということとはつまり『マギウス』とも繋がっている。

だからこうなることを知っていた可能性がある。でも、このことを知らなかったとしたら……。

「ねえ、それって本当？」

「なんで私がこんなしょうもない嘘を言わないといけないのよ」

「……わたしに協力できることは？」

「話が早くて助かるわ」

文脈的に質問の答えになっっているようには見えないかもしれないけど、私にはしつかりと伝わった。そしてみたまにも私が言わんとしていることが伝わったのでしよう。

百恵が危ない、と。

手段を選ばなくなった『マギウス』のこのやり方を、百恵が許すはずがない。

鶴乃を利用した最悪の計画を阻止するために、みふゆと一緒にフェリシアと二葉さんの洗脳を解いて解放し、十七夜に連絡を取り、救出に最適解な魔法を使える相野みとさんと呼んでくれて、真正面から『マギウス』に牙を剥いた百恵が、こんなやり方を許すはずがない。百恵は『マギウス』にとって、切り札でもありストッパーでもあるのだから。

なのにこうして事態が動き、神浜中で羽根たちが暴れ出したということは……諸刃の剣で厄介者になった百恵を『マギウス』が何らかの手段を使って封じ込めて、無理矢理計画を進めべく動き出したと考えて間違いない。

最終目的はともかく道中の過程をこんな手段を使って押し進めてくる『マギウス』が、まともな方法で百恵を封じるはずがない。

さらに百恵は弱体化した今でも、この神浜で最強の戦闘能力を誇る魔法少女。そんな魔法少女を手中に収めておいて利用しないはずが

ない。

だから百恵が危ないということが分かったし、いろはの単独行動を認めることができなかった。

みたまは『マギウス』に傾いていたけど、それはあくまで百恵が『マギウスの翼』にいたから。その百恵が危険な目に遭っているのと知ったら黙っているはずがない。

その証拠にみたまは「協力できることは？」と返してきた。つまり『マギウス』に傾いていた天秤が私たちの方に傾いたということ。当然ね。

彼女の天秤の皿の上にいるのは、いつだって百恵なのだから。

「調整屋を避難所に使わせてちょうだい。そして、集まった子たちに事情を全部話すわ」

「……場所については分かったわ。でも全部話すって……」

「『マギウス』のことも魔法少女の秘密のことも……百恵のことも全部よ」

「それは……」

「こうなってしまった手前隠し通すことは不可能よ。今は時間と人手が欲しいの。だから……話すべきことを全部話して、百恵を助け出し、この馬鹿げた計画を潰す。これしかないの」

「……わかったわ。それについては任せてちょうだい。ただ調整屋さんも絶対に安全とは言いきれないから、誰かしら防衛を任せられる子を用意してくれると嬉しいわ」

「任せてちょうだい。……よろしく頼んだわよ」

「……ええ」

これで見たまの協力が得られることが確定した。

こうなつたみたまは信頼できる。だから任せられる。

みたまの協力を取り付けた私が取った次の行動は、中央のひなのと、『傭兵』のかりんに連絡を取ることであった。

「わかった。中央の魔法少女はアタシが誘導する」

「任せてほしいの！ 絶対にみんな無事に調整屋に送り届けてみせるの！」

中央はひなのの庭だから彼女に任せれば速やかな避難ができるでしょうし、そこに鶴乃も向かっている。

羽根たちは百恵に鍛えられているだけあって動きは良いけど、鶴乃やひなのには及ばない。このふたりがいるだけで戦力としては充分期待できる。

百恵の後継者であるかりんは単独で強力な魔女を倒せる実力を持っているし、貴重な空を飛ぶことができる魔法少女。

活動領域が広い上に、空からの目があれば取りこぼすことなく全員を調整屋に送り届けることができる。

さらに常盤ななかと静海このほにも連絡を取った。

このふたりは魔法少女の真実を全て知っている上に、神浜のチームの中でも特に強いチームのリーダーたち。

彼女たちには調整屋の防衛を依頼する。

「わかりました。道中で知り合いの魔法少女たちに声をかけながら向かうとしましょう」

「了解したわ。ちよつと寄り道するけど、なるべく早く調整屋の防衛に動けるようにするわ」

急ぎながら説明していたから大分話は端折ったし、色々と疑問に思うところはあったかもしれないけど、ありがたいことにみんな今が緊急事態だということを察してすぐに行動を開始してくれた。

頼りになる子たちが仲間でも本当に良かったと思う。

ひとしきり連絡すべきところに連絡し終えた私は神浜を駆ける。

工匠区の魔法少女たちのほとんどが『マギウスの翼』の傘下に入つたと十七夜は言っていたけど、本当に数えるくらいしか魔法少女はいなかった。

その後なんとか連絡を取れた子たちに調整屋に向かうようにだけ伝えた私は、洗脳された様子の羽根たちを相手しながら十七夜と合流し、東と中央を抜け西に戻った。

途中で羽根たちがまるでなにかを囲うように構えている現場に遭遇した。

間違いない誰かが襲われている。



「まーったくさつきからなんなのかなあ？」

「って、この声は……。」

「あたし、色々恨みを買ってるのは知ってつけどさあ、なにも言わないで襲ってこられるとどう接すればいいのかもわからないじゃん？  
せめて口くらいは利いちやくれないかなあ？」

「羽根たちの攻撃を綺麗に躲しながら、困ったように呟く紫の魔法少女……間違いない。」

「って、お？ やちよじやーん、おひさ〜。って、なんか和泉十七夜もいやがるな」

「おい、なんだその自分と七海の扱いの差は」

「随分と余裕そうね、帆奈さん」

更紗帆奈。

「手加減している百恵とはいえ、戦いとして成立させられるだけの動きができる強力な魔法少女。」

「百恵の家がある新西区に居ると思ったのだけど……：そういうえば学校は水名女学園だったわね。ということは帰り道に偶然襲われてここまで逃げてきたということね。」

「いや、こいつらの動きは大したことないんだけどさ、どうすりゃいいか分かんないからずっと鬼ごっこに付き合わされちゃって困ってたんだよね」

「仮に彼女たちにあなたが昔喧嘩を売っていたとしても、今は無駄よ。洗脳されているから」

「あ、やっぱり？ でもこいつらセーナんところのやつらだろ？ なんで洗脳なんかされてんのさ？」

「それを今調べているのよ。ねえ、帆奈さん」

「さんはいらさないよ、むず痒い。呼び捨てにしてよ」

「じゃあ帆奈、私たちに協力してくれるかしら？」

「あっはー……わーったよー！」

そこからは早かった。

「元々帆奈を囲んでいた羽根たちを一気に制圧し、そして新たにやってきた羽根たちを応戦する。」

「ガア……グググ……」

「本当にキリがないわね……！ 十七夜、読めたかしら!？」

「いや全然駄目だ！ 近づいても何も読めないし、読もうとするたびに嫌な感じがする！」

「やっぱりこの状態の羽根たちじゃ十七夜的能力が通用しないよね。」

「どうにかして洗脳を解かないといけない。でも羽根たちはやられそうになると一目散に逃げてしまうから全然捕まえられない！ 全く、面倒ね……！」

「あーったくまたテメーらかよ、しつけないなあ！」

「羽根たちを追いかけているうちに、そんな悪態をつく声が曲がり角から聞こえてきた。」

「この声は……。」

「ムカついてしょうがねえ！ もう我慢の限界だ！ かかってくんから覚悟しなよ！ 今のアタシは最高に機嫌が悪いんだからよ！」

「洗練された動きで巧みに長槍を操り、私たちが追い詰めていた羽根もろとも、自分を囲んでいた羽根たちを吹き飛ばしていく赤い魔法少女……間違いない。」

「んあつ!? なんだアンタか。一応聞いておくけどよ、アンタらはこいつらの味方をしにきたわけじゃあねえよな?」

「そんなわけないでしょう、そいつらを追ってきたのよ。久しぶりね、佐倉さん」

佐倉杏子。

「初見殺しの一発芸とはいえ、あの百恵に隙を作らせて拘束し、私たちの戦略的勝利の決め手を作ってくれたベテラン魔法少女。」

「おい、神浜でなにが起こっていやがる！ こいつら何度も追っ払ったってーのに懲りずに向かってくるし、ママは変になっちゃまってるしで、もうわけがわからねーぞ！ 説明しやがれ！」

「それを私たちも調べているのよ！ だから羽根たちを誰かしら捕らえて、聞き出そうとしているの！」

「それで……まで追いかけてきたってーのかい！ いい迷惑だぜ本当

に！　じゃあなんだ!?　アイツらをとつ捕まえてやりやあいんだな!?!」

「そういうことよ！　だから手伝ってちょうだい！」

「上等だぜ！　こっちは『マジウス』のやり方が気に食わなくってむしやくしやしてんだ！　付き合ってやらあつ！」

「うむ、君たちは仲がいいな。おかげで自分たちは楽ができる」

「それな。あたしたちいらなさそうだしさ、疲れちゃったしちよつと休憩してもいいよなこれ」

「ふぎけないで(ふぎけんな)!!　手伝いなさい(手伝いやがれ)!!」

「……本当に仲がいいな」

佐倉さんを加えて四人になりほぼ万全の状態になった私たちは、その勢いのままに彼女たちの目的と狙いを突き止めるべく、逃げていく羽根を追いかけようとした。

その時だった。

「待ってください、やっちゃん！」

息を切らせたみふゆが私たちの前に現れたのは。

「みふゆ!?!」

「梓！　無事だったのか！」

「ええ……なんとか……」

大分疲労が溜まっているようだけど目立った外傷はない。洗脳された様子もない。

みふゆは無事だった。

「あの羽根たちを追いかけてはいけません罨です！　逃げた先のヘリポートで巴さんが羽根たちの大軍を引き連れて待ち受けています！」

「!」

それは……危なかったわ。

今は比較的人数が少なめだから適当にあしらえているけど、羽根たちは正気を失って暴走状態。おまけに百恵によってそれなりに鍛えられているから実はちよつと強かったりする。

その軍勢になんの対策もなしに飛び込むのはいくらベテラン四人組といえども飛んで火に入る夏の虫のようなもの。そこに巴さんが

加わっているのだとしたらただの自殺行為だ。

本当に危なかった。

「わざと罠にひっかかりに行くのも面白いけどさ、さすがに今はマズいかなあ。んま、本当かどうかは知らないんだけどさ」

「……チツ。本当に面倒くせえ……」

みふゆの言葉を信じきっていない帆奈も佐倉さんも止まってくれた。もし本当だった時のリスクが高いからだ。

「そう……ありがとう、みふゆ。危なかったわ」

「そんな……感謝される資格なんて、ワタシにありません。……やっちゃん、ごめんさい！ モエちゃんが……！」

「そう……やっぱりそうなのね」

私に縋りついて泣きじやくるみふゆと、その言葉を聞いて確信した。

百恵が『マギウス』の手の中に堕ちたのだと。

「モエちゃんは最後の力を振り絞ってワタシを逃がしてくれました……。ですからこちらでも無事だった子たちに頼って調べて、ようやく『マギウス』の狙いを突き止められたのでそれを知らせに……」

「……だつてさ？」

「で、どーすんのさ？ 仮にも向こう側のソイツをどこまで信用できんだ？」

「どうなの十七夜」

「大丈夫だ、嘘を言っていない。今の梓は信用できる」

まあ、聞かなくても分かっていたけどね。

何年も一緒にバディを組んできたんだもの。今のみふゆの言葉に嘘がないことくらいわかる。

敢えて聞いたのは、みふゆを信用しきっていない帆奈と佐倉さんを納得させるため。

「調整屋で詳しい話を聞きましょう。今頃みんな集まっていると思うし、そこで全部説明してもらおうわ」

「うむ、それが得策だ。梓もそれでいいな？」

「はい……。すべてをお話しします」

「あつそ、じゃあいーよ」

「……チツ。とつとと行こうぜ。慣れ合うつもりはないんだよ、アタシは」

「羽根を追うことを中断し、私たちは調整屋に向かった。

「あつ、帆奈さん！ 大丈夫でしたか!?!」

「ひとりで全員を引き受けるなんてそんな無茶……いえ、そんな目立つことをしてズルいですわ！ って七海やちよー!」

「だああつ！ ひとりで勝手に騒いで忙しいですしうるさいんですよ！」

その途中でふたりの魔法少女と合流した。

ふたりとも私は知っている。

フライパンを武器にしている魔法少女が胡桃まなかさん。

百恵の料理の師匠で、時に協力者として数多くの魔法少女に情報を発信してきた魔法少女。

それからもうひとり。

なんか私を見て対抗心を燃やしている様子の彼女は……彼女は……。

……。

ええつと？

「ボリビアさん……だっけ？」

「阿見莉愛ですわ！ 私の秘宝はサタンオオカブトじゃありませんわよー!」

「阿見先輩、あのゲームやったことあるんですか？」

懐かしいわね……って感傷に浸っている場合じゃなかったわ。

「あー、悪い悪い。でもほら、大丈夫だからさ」

「そういう問題じゃないんですよ帆奈さん！ いくら強いと言っても今は緊急事態なんです！ 勝手な行動はしないでください！」

「ですわよ、帆奈さん！ 私たちがどれだけ心配したことか……!」

「そういう阿見先輩だってまっすぐ調整屋に行こうとしなかったじゃないですか、あつちこつちちよつかいかけて目立とうとして！ 振り回されるこつちの身にもなつてください！」

「はうつ!? ぐ、ごめんなさいですわ……」

「ああ、悪かったよふたりとも……」

いったい誰が一番先輩なのがよくわからないやりとりをしながら走る三人を生温かく見守りながら私たちは進む。

「お待ちしておりました、やちよさん」

「遅かったネ」

「幸い誰も被害は出ていないわよ」

「私の魔法で飛ばします……!」

調整屋の近くまで差し掛かったところで、ななかと純チユンメイユイ美雨さん、このは、そして先日鶴乃の救出に協力してくれた相野みとさんのチームメイトの桑水せいかさんの四人に出会う。

桑水さんは水を介して空間移動をする魔法の使い手だった。

このはが霧を生み出してその中に入った魔法少女たちを、桑水さんの魔法で調整屋に一気にワープさせることで安全に送っていてくれた。

ななかが陣頭指揮を執りつつ美雨さんと一緒にふたりを護衛し、それ以外のメンバーが複数人で周囲をパトロールして避難してきた子たちをここまで誘導、近づいてきた羽根を撃退するという最強の防衛作戦によって凌いでくれていた。

「聞いていた方たちは全員調整屋にいます。あと戻ってきていないのはかりんさんのみ。彼女は逃げ遅れた方がいないかどうかの最終確認をしています。彼女が戻り次第、私たちも参ります」

「助かったわななか。かりんをお願いするわね」

「お任せください」

頼りになるななかの返事を背中で受け止めて、私たちはついに調整屋に到着した。

「あつ、やちよさん! 無事でよかったです!」

すぐに私に気が付いて来てくれた、いろはを含めた新しいチームみかづき荘のみんな。みんなも無事のようにほっとしたわ。

調整屋には大勢の魔法少女たちが集まっていた。

中には知っている顔の子もいたけど、そのほとんどが知らない顔。

知ってはいたけど、こんなに沢山の魔法少女が神浜にいたなんてね。百恵と初めて会った時にされた、あの質問が懐かしい。

ええ、本当に。私が知らなかっただけで……こんなに多くの魔法少女が神浜にはいたのね。

「マジカルかりん、ここに登場！ この人たちが最後の！」

私たちが調整屋に到着して数分も経たないうちに、最後の見回りを終えたかりんが戻ってきた。

「あつ、いろはちゃん！」

「まどかちゃん!? それにみんなも！」

「また来ちゃいました……巴さんを助けるために……！」

「おつ、杏子もいんじゃない！」

「チツ、またお節介なやつらが……」

そのかりんが連れてきた魔法少女たちは鹿目まどかさんを始めた見滝原の魔法少女の三人。

巴さんを探しに来ていた子たちだった。

「戻りました」

「全く疲れたわよ流石に……」

「うわあ、こうして見ると壮観だね！」

かりんが戻ったことで任務が完了したななかのチーム、こののはのチーム、そして相野さんのチームの十人が調整屋に入ってきた。

これで『マギウス』についている子たち以外の、全ての神浜の魔法少女たちが一堂に会した。

「揃ったようねえ。みふゆさん、あなたも大丈夫？」

「はい……なんとか、回復しました」

ずっと待機していたみたまと、いろはの治療を受けていたみふゆがわかりやすく前に出た。

時は来た。

あとは……すべてを、ここにいるみんなに話すだけ。

「じゃあ説明するわ。今、神浜でなにが起こっているのか。そして……ここにいない、モモちゃん……『大傭兵』星奈百恵が今どこにいるのか、なにをしているのか、どういう状態にあるのか。その全てを

ね  
「今日の山場のひとつに差し掛かった。」



## Side. 八雲みたま 助けたい人のために

「……以上よ。これが、星奈百恵の秘密よ」

そう、わたしは締めくくった。

隣に立っているみふゆさんの『マギウス』と『魔法少女の真実』の話の後。

モモちゃんが『マギウス』の手に堕ちてしまった理由の補足説明として、わたしは話をしてしまった。

モモちゃんが急激な老化という、自らの魔法による副作用に蝕まれ弱体化していること。

それに伴って魔法少女として戦う度に症状が悪化していくこと。そして、その寿命がもう長くないことを。

本当ならまだまだ話していないことは山のようにある。でもここから先は、モモちゃんが抱えているもうひとつの爆弾。

モモちゃんの過去。

この神浜に来るまでにモモちゃんがなにをやっていたのか、どうして魔法少女になったのか、そしてどうしてあんな願い事をしたのか。その根幹に関わる話。

この話をわたしの口から話すことだけは絶対にできない。

少し覚悟しておくことを推奨するなんてことを言っていたけどとんでもない。モモちゃんの言う覚悟の意味をわたしは履き違えていた。

それくらい、モモちゃんにとって禁忌に等しいことを、わたしは初めてモモちゃんを調整した時に知ってしまったのよ。

「……そんな、百恵さんが……」

わたしの話を聞き終えてがくりと崩れたのは、胡桃まなかちゃんだった。

彼女はモモちゃんに助けられたことはない。

だけど、仕事を抜きにしてモモちゃんがプライベートで親しくしていた数少ない魔法少女のひとり。

モモちゃんは先生としてまなかちゃんを尊敬していたけど、まなか

ちゃんもまたモモちゃんを尊敬して恩も感じていたはずよ。

モモちゃんを初めて料理教室に連れて行ったあの日から、モモちゃんはことあるごとにまなかちゃんのお店の宣伝をしていて、まなかちゃんはその恩恵を受けていたのだから。

モモちゃんと料理教室を盛り上げていくうちに、もしかしたらまなかちゃんにとってモモちゃんは、一緒に料理を楽しんでくれる友達のような存在にもなっていたのかもしれない。

先に伝えられた魔法少女の真実と併せて、そんな親しい人に降りかかった不幸にショックを受けていた。

「なるほど……。星奈が『マギウスの翼』に入ったと聞いた時は耳を疑ったが……」

「そういう事情があったのか……」

「まさかそこまで弱っててしまったとは……」

ずっと前からモモちゃんの身に起きていた異変のこと自体は知っていた十七夜、ひなの、まなかちゃんの三人はまだいい。

一番深刻なのは……。

「先生……それに、アリナ先輩まで……」

アリナとモモちゃんという、慕っていたふたりがこの事件に関わっていることを知ったかりんちゃんは大粒の涙を目に浮かべて泣きじやくっていた。

いくら強いと言っても、かりんちゃんはまだ中学二年生。

そんな彼女にとっての心の拠り所でもあるふたりの先輩が、揃ってこんな事件を引き起こしている組織に関わっていて、しかもアリナは主犯格でモモちゃんは捕らえられて危険な状態だと知ってしまったらこうもなるでしょう。

今はそつとしておいて、落ち着いたところでフオローを入れるしかないわね。

「ふう……とりあえず、百恵さんのお話は後でたっぷり聞かせていただきます。今は『マギウス』と魔法少女の解放についてのお話をしましょうか」

今は静かだけど少しずつ波が広がり、混乱が始まろうとしている調

整屋。

そんな中で、平静を保っているななかちゃんが少し前に出てやちよさんの方を向いた。

『マジウス』のやり方に問題があるということとは充分に伝わりました。ですが『マジウス』の掲げる解放は、我々魔法少女にとつてはそれこそ希望のようなもの。それを否定する以上は、なにか対案があったことですか?」

「……それは、解放以外の方法で、私たちに抱えている問題を解決する術があるのか……ということかしら?」

「はっ」

おそらく、この場にいるすべての魔法少女を代表して聞いたのでしよう。

魔法少女が魔女になる。

知りたくもなかったはずの真実を知って、悲しんでいる魔法少女たちにとって、魔女にならない世界を作ろうとする『マジウス』は希望のように見えたことでしょう。事実、それに縋って大勢の魔法少女たちが『マジウスの翼』に下った。

モモちゃんだって、みんなを助けるためにはこれしかない判断したから『マジウス』のやり方を一度は飲み込んで受け入れた。

そんな『マジウス』たちを拒絶したからにはそれ以上のいい案はあるのかと、実に第三者視点で客観的な質問をななかちゃんはやちよさんにぶつけた。

「結論から言うと、無いわ。すべてが終わってから、考えるわ」

その答えを聞いたななかちゃんは、深く溜息を吐いて……目を吊り上げた。

「そうですか……。だとしたら、あなたたちがやっていたことは軽率だったのではないですか?」

「軽率ってどういうことかしら?」

「言ってしまうば、今こうして神浜で異変が起こっているのはあなたたちが原因でしょう? 変に関わった結果、このような凶行手段を使わせるところまであなたたちは『マジウス』を刺激してしまった」

「見て見ぬふりをすればよかった、と言いたいのかしら？」  
「そうです」

きつぱりとななかちゃんは言い切った。

『マジウス』の邪魔をすべきではなかったと。

「そちらの梓みふゆさんは、百恵さんが『マジウスの翼』のリーダーになってからはしっかりと統率が取れていたとおっしゃっていました。そのウワサとやらを使って人々を危険な目に遭わせていたとしても、すぐに助けられるように管理して、誰も犠牲が出ないように極めて穏便に計画が進んでいたはずなのに、あなたたちが介入したせいで全てが狂ってしまった。

真つ向から全否定するのではなく、多少譲歩してでも相手の言い分を聞き入れていけばこんな事態が起こることはなく、百恵さんも危険な目に遭うことはなかった。

互いにメリツトのある話にすることができたのではないでしょうか？」

鋭すぎるななかちゃんの正論にやちよさんが押し黙った。

これはずつと前にわたしがぶつけた言葉と本質は同じ。違うのはその対象がモモちゃんなのか、すべての魔法少女なのかだけ。

緊張が調整屋を支配する。

現状皆から見て、やちよさんたちは『マジウス』の解放に対する具体的な策もなしに喧嘩を売り続けた、この事件のもうひとつの元凶のようなもの。

なにも知らなかった子たちにとっては、二重の意味で余計なことをしてくれているように見える。

「とはいえ、です」

だけど、そんな空気を作り出したななかちゃんは一息ついてさらに続けた。

「それはあくまで表面上の、裏を知らない人間が出す意見。

問題の裏側を見てみますと、結果的に『マジウス』を否定したことは間違いではなかったのかもしれませんが。

人間、追い詰められた時にその本性を現すと言いますが、それがこ

のような暴挙だとするならば、この計画は根本的な部分に、人として致命的な問題があつた可能性が極めて高いです。

事実、『マジウス』たちの言い分は自分の目的のついでに魔法少女を解放する、という風にも聞き取れました。

『魔法少女の解放』と銘打っているものの、その本質は魔法少女である我々の弱みに付け込んで巧みに利用し、自分たちの欲求を満たそうとしている。

そんな下心を感じ取れます。

もし善意百パーセントの計画で、やむを得ずに無関係の人達を巻き込んでしまっている自覚と罪悪感が少しでもあるのなら、仲間を洗脳してこんな事件を起こしたり、ワルプルギスの夜を神浜に呼ぶなんていうことをする必要はそもそもありません。

もつと堂々と、自分たちは正義で向こうは敵だと我々の前で糾弾してしまえば良かったんです。

その広告塔として最適だったはずの百恵さんもいたのにも関わらず、それをしなかつたということは、全てを知られると何か都合の悪いことがあつたからなのでしょう」

……なるほど。

言つちやえばこれは……茶番ね。

「よつて、私としましては、『マジウス』たちは道を最初から踏み外していたと結論付けます。

七海やちよさんを支持し、百恵さんを救出し、『マジウス』の計画を止めるということをお願いいたしましょう。私の大切なものを、ワルプルギスの夜によつて失うのは御免被りますから。

他の皆さんはいかがですか？」

最初からここに着地するための芝居だった、ということね。

やちよさんと打ち合わせをしたのか、それともななかちゃんが機転を利かせたのかはわからないけど、その効果は覩面だった。

「ななかと言うなら、私はそれに従うだけヨ」

「はい……！ もう私は家を失いたくなんかないです！」

「ボクも戦うよ。いくらなんでも……このやり方はおかしいからね

！」

まずは彼女のチーム全員が声を上げる。

「……すべて終わってから考える、というところがどうしても引つかかるのだけど、それに関してあなたはどうか納得したのかしら？」

「こうして全員が一堂に会した今が良い機会です。バラバラで考えるよりも、魔法少女全体の問題として我々はこの問題について重く受け止め、そして考えるべきだと思います。今は時間がないので先送りにしますが、いつかは解決できる日が来るでしょう。『マジウス』に見つけられて、我々に見つけられない道理はないのですから」

次に声を上げたこのはちゃんは、ななかちゃんの答えを聞いて軽く笑う。

「それはまた随分と綺麗な理想論ね。でも……嫌いじゃないわ。ただ問題を先送りにするわけじゃなくて、それを目標にして私たちが進むべき道とその姿勢を見せてくれた。それだけで判断するには充分よ。

……葉月、あやめ、いいわね？」

「勿論だよこのは。アタシとしても異論はないね」

「つつじの家がなくなっちゃうなんて、それにあのおばあちゃんに酷いことをしているなんて、あちし絶対許せないもん！」

「というわけで、私たちも七海やちよさんを支持するわ」

ななかちゃんに続いて、このはちゃんのチームも『マジウス』に立ち向かうことを表明。

さらに。

「私たちも戦います！」

「実際に見ちやっただしね！ その『マジウス』がやろうとしていたことをさー」

「あんな酷いやり方は……絶対にないです……！」

れいらちゃん、みとちゃん、せいかちゃんのチームまで加わった。

これで調整屋の防衛戦で大活躍した三つのチームが全てやちよさんたちの味方に付いた。

完全に流れが変わる。

「そうだよみんな！ こんなやり方はないよ！ あんまりだよー！」

「あたしもそう思うね！ あたしたちの先輩も洗脳されてるんだ！

『マジウス』は信用できないよ！」

「チツ、やっぱ操られちゃまっていたのかよ……。益々気に入らねえな！」

その声を皮切りに、この場にいる全員の方針が決まった。

こうなるように誘導したななちゃんはかなりのやり手ね。モモちゃんが気に入るだけのことはあるわ。

これでみんなの心がひとつになった。

「みんな……ありがとう。じゃあ早速なのだけど、役割分担をしましょうか」

そしてそのタイミングを見計らって、やちよさんが動く。

今、この場の総責任者はやちよさん。チームみかづき荘としてのリーダーはいろはちゃんだけど、それだとほとんどが西の魔法少女であるみんなは納得しないでしょう。

みんなにとつてのリーダーは、ずっとやちよさんだったのだから。

「今からふたつのチームに分かれてもらうわ」

ひとつは、ヘリポートで待機している洗脳されたバマミちゃんと、彼女が率いている羽根たちを相手にするチーム。

そしてもうひとつが『マジウス』の本拠地であるホテルフエントホープに向かい、『マジウス』の計画を阻止すると同時にモモちゃんの救出するチーム。

どちらを選んだとしてもかなりの危険を伴う。だけど、自分の守るべきものを守るために立ち上がったこの子たちはその程度じゃあ怯まない。

最初に作戦から降りる子がいないかをやちよさんがみんなに聞いていたけど、結果は全員参加する意志あり。誰も名乗り出ないから名乗り出ないわけではなくて、みんなのその目には確かな力が宿っていた。

「私たちはヘリポートに行きたいです！」

「はい、巴さんは私たちの手で助け出します……！」

「絶対に連れ戻すんだから！」

まず先に拳手をしたのは見滝原から来たまどかちゃんたちのチーム。

「マミちゃんは彼女たちの大切な先輩。だからそちらのチームを希望するのは当然ね。」

「アタシも同行させてもらおうよ。つまんねえ洗脳なんかにかげられやがって……ぶん殴つてでも目を覚まさせてやる」

「またまたく。杏子だってマミさんのことが好きなくせに」

「うるせえ！ んなもんじゃねえよ！ ただアタシが知ってるマミじゃねえのが気に入らねえだけだ！」

「あれ？ でも杏子ちゃんってマミさんの考えを否定してたんじゃない？ ……」

「鹿目さん、しっ！」

「テメエら……！」

そこに風見野の一匹狼である佐倉杏子ちゃんが加わった。

とりあえず、この四人はヘリポートで確定した。

……ふう。よし。

「わたしは『マギウス』の本拠地に行くわよお」

「え？ みたま、あなた戦えないんじゃない？ ……」

「一応戦う術はあるのよ。攻撃が苦手なだけだね。それにねやちよさん、わたし動きだけには自信があるのよお？」

調整屋さんを広めるために、何度もモモちゃんと一緒に魔女と戦ってはいる。

「といつても魔女を倒せたことは一回もないんだけどね。でもね、攻撃を喰らったことも一回もないのよ。」

わたしはモモちゃんに、陽動係としての動きを仕込まれている。

戦うことができないうわたしが唯一、戦闘で役に立つ役割ということで見つちりと訓練を受けた結果、逃げることで敵を引き寄せることに関しては一級品とモモちゃんに言われるくらいの実力は手に入れた。だから足手纏いになるつもりもない。

わたしにしかできない攻撃方法だってある。

かなり使い勝手が悪いけど、それはきつと今回の戦いで役に立て



る。

それになにより……。

「もう見守るだけなのはうんざりなのよ。いい加減、わたしも自分から動いてモモチちゃんに恩返しをしたいの。だからわたしも戦うわ」

「……そう。それなら、力を貸してちょうだい」

「ええ、勿論よ」

この後もどんどんと、それぞれの持ち場を振り分けられていく。

「我々のチームはフェントホープに向かわせていただきます」

「私たちも同行するわ。百恵さんを助けたいもの」

「あー……それじゃあアタシたちはヘリポートに向かうか。ウワサについて知っているやつがいないと大変だしな」

ななかちゃんはこのはちゃんのチームが『マギウス』の本拠地に、ももこのチームと単独で動きがちな子たちがヘリポートに向かうような流れになっている。

「アタシはヘリポートに行こう。本拠地の方に行った方がいいのは承知だが、それでもひとりくらいは年長者がいないとダメだろ？」

「ここぞとばかりに先輩アピールするよね、みゃーこ先輩！ でもそこで格好つけていても誰にも見えてないよ？」

「駄目だよエミリー！ みゃこ先輩、ちっさいのに必死に背伸びして頑張っているんだから茶々入れないであげようよ！」

「り、梨花ちゃん……！」

「おまえらあぁーっ！」

ということではひなのは自分を慕う後輩たちを連れてヘリポートに向かうことが決まった。

そして、この後が問題だった。

「ええっと、私ってどっちに行けばいいのかな？」

困った様子でおろおろしているのは相野みとちゃんだった。

彼女の固有魔法は、魔法少女に憑依したウワサに対して非常に高い効果を持っている。彼女こそ、この作戦を成功させるためのキーパーソンと言っても過言じゃないわ。

そんなウワサに憑依された魔法少女は、ヘリポートのマミちゃん、

フエントホープのモモちゃんのふたりで、別々に行動している上にとちらも非常に強力な魔法少女。

「相野さんはどちらに行きたいのかしら？」

「えっと……出来れば百恵さんを助けに行きたいです。百恵さんには恩がありますから。でも私、その……あんまり強くないですから……」

なるほどね。

確かにモモちゃんを相手にするのは、みとちゃんにとって荷が重すぎる。だから決めきることができなかったのね。

「……それは、ちよつと困ったわね」

「ああ。できれば相野君にはフエントホープに向かってほしかったのだが……」

「でもこればかりはしようがないわよねえ……」

モモちゃんが本当にウワサに取り憑かれてしまっているのなら、みとちゃんの魔法は必須。でも肝心のみとちゃんを守りながら相手できるほどモモちゃんは甘くない。

本人の力量が足りていないのなら無理に連れて行くわけにはいかない。モモちゃんを相手するくらいならまだマミちゃんを相手にする方がマシなもの。

「ならその魔法、あたしに託してくれない？」

「えっ？」

さてどうしたものかと頭を悩ませているなか、みとちゃんに声をかけたのは帆奈ちゃんだった。

「あたしの魔法は『上書き』の魔法なのさ。だからあんたの魔法を見せてくれたら、あたしはその魔法を使うことができる。扱い方はあんたよりも劣るだろうけどさ、あんたの代わりくらいにはなれるっしょ？」

そうだったわ。

帆奈ちゃんと言えば『暗示』の魔法や、モモちゃんの魔法を思い浮かべるけど、その正体は『上書き』の魔法。だから帆奈ちゃんがいれば、ひとつだけとはいえ同じ魔法を複製できる。

そして、帆奈ちゃんは元々相当の実力者だったのに加え、今の今までモモちゃんの魔法を使っていたから身体能力がさらに上がっている。

モモちゃんに対する切り札として、これほど適切な魔法少女はいない。

「わかった！ 私の魔法、更紗さんに託すね！ 魔法を使うからとりあえず私と手を繋いでくれるかな？」

「それだけでいいの？」

「うん、それだけだよ！ これが私の魔法の発動条件だからね！」

手を繋いだふたりはゆつくりと瞳を閉じる。

そして次に目を開いた時には、帆奈ちゃんが纏っていたかつてのモモちゃんと同じような静かなオーラが消えた。

「なるほどね、大体わかった。その魔法、受け取ったよ」

「百恵さんをお願いね。絶対に助けてきてよ！」

「……あたりまえだ。あたしだって、まだあいつに何にも返しちやいねーんだ。こんなつまねーくたばり方をされてたまるかよ」

これによつて帆奈ちゃんはホテルフエントホープに、みとちゃんを始めとする三人組はヘリポートに向かうことになった。

「……わたしも、『マジウス』の所に行くの」

「かりんちゃん、あんまり無理しなくても……」

「先生や先輩なら、泣いているなら他になにかしろって間違いなく言ってくるの。それに……わたしだって、先生と先輩に一言くらい文句を言つてやりたいの！ だから、わたしも行くの！ それで絶対にふたりを連れ戻すの！」

涙を流していたせいで目元が赤くなっちゃっているかりんちゃんだけど、もう完全に立ち上がれたみたいね。

モモちゃんとはかく、先輩と仰いでいるアリナにもきつと大切にされていたんだろうし、そんな彼女をかりんちゃんは本当に尊敬しているんだと思うわ。

だから文句を言わないと気が済まないでしょう。

どうして勝手に突き進むんだ、少しでも相談してくれたら良かった

のに、って。

分かるわよ、その気持ち。

「まなかも連れて行ってください」

そして、そんな想いを抱いているのはまなかちゃんも同じだったみたい。

「まなかはそんなに強くはないですが、足手纏いになるほど弱くもありませんし、まなかの魔法は必ず役に立てるはずですよ。だから連れて行ってください。まなかも途中でサボった百恵さんに怒っているんですよ。あれで料理を極めた気にならないでほしい、と」

「……マジか。あれでもまだ駄目なのかよ」

「当たり前です！　ちなみにですが帆奈さんの料理は、まなかからしたらまだまだ全然です」

「うへえ、きつびしいなあ〜」

「帆奈さんと同じでもっと上を目指せるはずなんですよ百恵さんは。ですから、まなかの本気の料理を食べてもらって、目を覚まさせます。なのでお願いです、みたまさん！」

さて、どうしたものかしらあ？

普通に考えるならまなかちゃんにはヘリポートに向かってもらった方がいい。

まなかちゃんの固有魔法である『伝播』の魔法は自分の攻撃だけに限らず、味方の攻撃までも拡散させる能力を持っているから、大軍相手には非常に有利を取れる魔法少女。

加えてフェントホープはヘリポートよりもはるかに危険な場所だから、かなり腕の立つ魔法少女でなければ生きて帰って来られるかも怪しい。

だから本当なら、まなかちゃんにはヘリポートでみんなのサポートをしてもらった方がいい。

……本当なら、ね。

「いいわあ。わたしが口添えしてあげる」

「……いいんですか？　これはまなかの我儘ですよ？」

「わたしだってサポート型の魔法少女だもの。大丈夫よ、攻撃なんて

怖ーいお姉さんたちに任せておいて、わたしたちは皆の手助けをしていればいいのよ」

「誰が怖いお姉さんよ、聞こえているわよ」

新しい魔法に切り替えた帆奈ちゃんの手伝いをしていたやちよさんが戻ってきた。

まなかちゃんの友達のこと……うーんと？ あ、アイデアちゃんだったかしら？ とにかくその子も連れて。

「まなかさん！ 帆奈さんと一緒に私を差し置いて敵の本陣で目立とうとするなんて許せませんわ！……と、言いたいところですが」

「え？」

「その……あなたは強いですわ。私、いつも助けられていますもの」

「阿見先輩……」

「ですから！ 必ず、必ず私の分まで目立って、大活躍をして、そして無事に百恵さんを連れて帰ってくることに！ よろしいですわね！」

「……はい！ 勿論です。今回ばかりは、まなかも気合入れていきますよー！」

「その意気ですわー！」

まなかちゃんもいい先輩を持っているわね。

意気込みは良いけどちよと自信がなかったまなかちゃんも発破を掛けられて、すっかり元気になったわ。

「私はヘリポートで千切っては投げ千切っては投げの大活躍をして目立ってきます。ですから私の後輩をどうか、よろしくお願いしますわ」

「任せてちょうだい。えつと……アザレアさん？」

「ん？ 今あちしたち呼ばれた？」

「呼ばれていないからねー」

「あやめ、向こうを見ちゃダメよ」

「うん？ はい」

「阿、見、莉、愛、ですわあーっ！」

「胡桃まなかさん、百恵を助けに行きましょう」

「あ、はい。よろしくお願いします」

「しかもガン無視!? おのれ、七海やちよー!」

こうして時間が過ぎ、メンバーが決まった。

フェントホープに向かう魔法少女は……

『チームみかづき荘』のメンバー五名、

常盤ななかちゃんのチームのメンバー四名、

静海このはちゃんのチームのメンバー三名、

東の長でわたしの親友、和泉十七夜、

モモちゃんの後継者、御園かりんちゃん、

混沌の魔法少女、更紗帆奈ちゃん

『伝播』の魔法の使い手、胡桃まなかちゃん、

『マジウスの翼』のナンバーツー、梓みふゆさん、

そして……わたし、調整屋の八雲みたま。

計18名。

「それでは……案内します。ホテルフェントホープの入り口、『万年桜のウワサ』の元に」

戦いの時が来た。

「待っていてね、モモちゃん」

このメンバーで、必ず助ける。

だから……諦めないで、待っていてね……。

だってまだ、モモちゃんを必要にしている、そして恩を返そうとしている子たちが、この神浜にはたくさんいるんだから。

## Side. 胡桃まなか 神浜最強のウワサ

いつの間にか、まなかの当たり前の中に、あの人が解け込んでいました。

魔法少女になってすっかり変わったまなかの日常。

そして、立地と時代が悪いだけで、中身は一級品のはずなのにすっかり閑古鳥が鳴くお店になってしまっていたウォールナッツ。

まなかが魔法少女になってから仕事は増えたものの中々ウォールナッツにお客様が直接いらっしやることはなく、まなかが本当に叶えたかった願いは依然として叶わないまま。

それでも、まなかは嬉しかったんです。

まなかが魔法少女にならなければ、ウォールナッツは間違いなく、潰れてしまっていました。

誰にもその味を味わってもらおうことも、広げていくことも、伝わっていくことさえなく、潰れてしまったことすらも知られないまま、消えてしまっていたことでしょう。

でも、魔法少女になって、少なくともそれはなくなりました。

ウォールナッツというお店が死んだままでも、ウォールナッツという味が生き返ってくれたのなら、ずっと守って磨いてきたこの料理たちを世界に広めることができます。

お父さんが、まなかが作る料理で、たくさんの人を笑顔にすることができるのなら、料理人としてこんな嬉しいことはありません。

「頂きます」と「ご馳走様」の言葉を聞いて、そして空っぽになった食器たちを見る。

それだけでまなかは満足なんです。

そこに「美味しかった」の感想が添えられていたなら、とんだ幸せ者です。

ですから、魔法少女が魔女になるという話を聞いても、まなかは後悔をしませんでした。

まなかが魔女になったとしても、ウォールナッツは残ってくれる。ウォールナッツさえ残ってくれば、料理という形でまなかは生き

続けていくことができる。

だから魔女になるかもしれないという恐怖がほんの少し感じたとしても、魔法少女になった後悔はしませんでした。

ですが……その後の話は、まなかにとつてとても受け入れられない話でした。

星奈百恵さんの命が尽きようとしている。

それを聞いた時、頭が真っ白になりました。

『神浜最強』の肩書きを持ち、神浜の魔法少女全員から尊敬されるよ  
うな、一介の魔法少女であるまなかにとつてはまさしく雲の上の存  
在。

まなかは百恵さんを傭兵として雇ったことは一回もないので、彼女の戦いぶりは全部人伝であり実感は湧きませんでした。それでも  
凄い人であるということだけは分かっていました。

そんな百恵さんは、初めてウォールナッツにご来店されてからずっと  
と鼻屑にしてくれました。

事あるごとに魔法少女の皆さんを連れてきてくれていましたし、傭  
兵として活動している際に宣伝までしてくれました。

その結果……まなかの願いが本当の意味で叶ったんです。

少しづつ、本当に少しづつですが客足が伸びてきたんです。

ほとんどが百恵さんに宣伝されてやってきた魔法少女の皆さんで  
したが、ご家族の皆さんと一緒にご来店されたお客様もいましたし、  
魔法少女でない普通の学生のグループの皆さんだつて来ていただけ  
ました。

ひとりで来店されて勉強しながらたまに注文して寛ぐ学生さんや、  
リピーターになってくれるお客様もいました。

そして、お父さんやまながが腕に縊りを掛けて作った料理たちを笑  
顔で召し上がってくれて、そして空になった食器だけが机に残る。

ずっと、ずっとまながが見たかった夢の景色がそこにあったんで  
す。

嬉しすぎて十分くらい泣いてしまいうくらいに、幸せな光景でした。  
上手く行ったらいい程度の浅はかなまなかの打算を、百恵さんは



現実のものにしてくれました。

「私は別に大したことはしていないぞ？　ほんのちよつと、おしゃべりしただけじゃ。チャンスをものにして、夢を叶えたのは先生自身の力じゃよ」

ある日の料理教室でまなかが改めて百恵さんに感謝の気持ちを伝えた時に、返ってきたこの言葉を聞いて、完全にまなかは百恵さんに頭が上がらなくなってしまいました。

なんとしてでも、まなか自身の力を使ってウォールナッツを立て直す。

そう決めていたまなかは、チャンスを作ってもらおうようにだけキユウベえにお願いをして魔法少女になりました。魔法の力で夢を叶えるのは違うと思っただからです。

ですから……百恵さんのその言葉は、まなかがずっと誰かに認めてほしくて、言っただけだった言葉だったんです。

なにか恩返しをしたい。

ですが、まなかには料理しかありません。

だったらまなかが持っている全部の料理の知識を、技術を百恵さんに渡したいと思いました。

毎回毎回、課題料理の内容を変えていたのは、少しずつ百恵さんにまなかの技を身につけてもらいたかったからなんです。

内容自体は料理教室向けの簡単で基本的なものばかりでしたが、その基本さえできればあとは応用するだけです。そしてその基本が奥深いのが料理の面白いところ。

ですからまなかが教える基本が全部できるようになったということとは、まなかの技術を全部取得したのと同義。

百恵さんは恩を売ることがあってもそれをせがむことはしない人でしたので、それとなく、ひっそりと恩返しするのに、この方法はぴったりでした。

幸い百恵さんは料理をすることが大好きらしく、料理教室を開く度に当たり前のように出席して楽しそうに料理をしてくれました。分からないところがあれば積極的に質問してくれましたし、細かい確認

も怠らない、料理人顔負けの熱心さで取り組んでいた。た。

あと一回。

あともう一回で、まなかの知識が、技術が、全部百恵さんのものになる。

そうしたら改めて感謝の気持ちを伝えよう。

そう思って……まだまだ続くとはいえ、まなかにとってはある意味最後の料理教室の日、百恵さんは初めて欠席しました。

またその次も、その次も……百恵さんは料理教室に来ることはありませんでした。電話にも出ていただけなく、ウォールナツを訪ねてきた七海やちよさんも目の色を変えて探していたことから、失踪してしまっただけがわかりました。

それでも、留守番電話にメッセージを残して、百恵さん専用の踏み台も用意して待っていました。来ることはありませんでした。

「百恵先生……どうしちゃったのかしらね」

百恵さんと並んで料理教室の常連になった静海このはさんも寂しそうに、誰も使われていない調理台を見つめていました。

本当にどこに行ってしまったのか……。

あと少しでまなかの恩返しが完成するというタイミングで消えてしまった百恵さんが、まさか死にかけているなんて夢にも思っていないで。

みたまさんから聞いた百恵さんの身に起こっている不幸。

残り僅かな寿命を削ってまで、成し遂げようとしていた魔法少女の解放。

でもそこで考えの違いが起きた結果、囚われてもはや兵器のような扱いを受けていること。

もう頭がキャパオーバーしそうになりましたよ。

「まなかさん……」

「ごめんなさい、阿見先輩。少し、ひとりにさせていただけませんか？」

「……私でよろしければ、いつでも声をかけてくださいね」

がくりと崩れ落ちて、ショックで泣きました。

阿見先輩も気を遣ってくれて、帆奈さんと一緒に他の偉い人たちの所に行ってくれました。

「私としては、彼女たちは道を最初から踏み外していたと結論付けます。七海やちよさんを支持し、百恵さんを救出し、『マジウス』の計画を止めるということを宣言いたしましょう。私の大切なものを、ワルプルギスの夜によって失うのは御免被りますから」「というわけで、私たちも七海やちよさんを支持するわ」

前に出て、おそらく魔法少女の真実を聞いてショックを受けている皆さんの代表をしていた常盤ななかと、そんな彼女に続いたこのはさんが揃って七海やちよさんを支持し始めたのは少し経ってからでした。

この時にはある程度落ちつけて、彼女たちの話を聞いていました。強力なチームを率いているふたりが立ち上がったことで調整屋の空気は一変、今起こっている事件を解決し、百恵さんを助けようと皆さんが奮起しています。

そんな皆さんを見て、そして冷静に今起こっている事件を思い返して、まなかの中にも悲しみ以上の感情が芽生えてきました。

それは怒り。

百恵さんを酷い目に遭わせて、利用しようとしている『マジウス』とかいう組織。そして……まなかからの恩返しを寸前で受け取らずに死のうとしている百恵さんに向けて。

「あたしだって、まだあいつに何にも返しちやいねーんだ。こんなつまんねーくたばり方をされてたまるかよ」

「わたしだって、先生と先輩に一言くらい文句を言ってやりたいのー！」すぐ近くで聞こえてきた帆奈さんと、百恵さんの弟子の御園さんの言葉がまんま、まながが言いたかったことを代弁してくれている。

「まなかも連れて行ってください」

まなかとひとつしか違わないような子たちが百恵さんを助けるべく動こうとしているのを見て、まなかも我慢が出来なくなってしまうました。

本当なら、まなかは戦力的にも能力的にも、ヘリポートに向かった方がいいのは重々承知です。ですがそれ以上に、まなかだって百恵さんを助けたいんです。一言言ってやりたいんです。

「いいわあ。わたしが口添えしてあげる」

まなかの我儘を聞いて一瞬困った顔をして何かを考えていた様子のみたまさんですが、その口から出てきたのは色よい返事でした。

そのすぐ後には一応この場の総責任者のような扱いのやちよさんと、その後ろから相変わらずやちよさんに対抗心を燃やしている阿見先輩が来ました。

「あなたは強いですわ。私、いつも助けられていますもの……ですから！ 必ず、必ず私の分まで目立って、大活躍をして、そして無事に百恵さんを連れて帰ってくることに！ よろしいですわね!?!」

いつもはお笑い芸人みたいなオーバーなノリなのに、いざつとときは面倒見が良くて、こうして気遣ってくれる、優しい先輩のらしい激励をもらってもう完全に吹っ切れました。

実力の差なんて、知ったことありません。まなかだって、たまには阿見先輩や帆奈さんのようにまなかのやりたいように振舞いたいです。

だから百恵さんを助けに行きます。

「それでは……案内します。ホテルフエントホープの入り口、『万年桜のウワサ』の元に」

チーム分けが終わって、そして戦場に向かう時がやってきました。

まなかの住む北養区の山の中にある『万年桜のウワサ』という、説明の中にあつた『マジウス』が生み出した怪物がそのまま本拠地に繋がるワープポイントになっているらしいです。

「雫さん、転移を」

「はい。気をつけて……」

梓みふゆさんとは違う形で『マジウス』から脱走して逃げてきた保澄雫さんは、一度行ったことのある場所の空間を繋げることができる『空間結合』の魔法の使い手。

それでも『マジウス』の本拠地にはその『万年桜のウワサ』を経由

しないと行くことができないらしいので、入り口である『万年桜のウワサ』までメンバー全員を送り届けてくれました。

「……」

もうすっかり日が沈み切っているというのに青空が続く、一面に広がる草原。そこに一本だけある枯れた桜の大木には花はおろか、葉っぱすら一枚も生えていません。にもかかわらず、桜の花びらのような桃色の花弁は延々と降り続けています。

これがウワサ、ですか。

初めて見ましたが、これだけ見ればどこにも危険があるようには思えませんね。

—待っていた—

ここにいる誰のものでもない声が聞こえました。

それぞれ武器を構えて警戒していますと、大きな桜の木の元にワンピースの女性が佇んでいました。

—見すると普通の人間に見えますが、人間のものではない耳がちよこんとついています。

「もしかして、あなたが……」

—はい。私が『万年桜のウワサ』。ずっと会いたかったわ、いろは—  
環さんを見て嬉しそうに笑う彼女はやはりウワサでした。

—そういえば二葉さんと長い間一緒にいたウワサは意思疎通が可能—  
なタイプだったらしいですし、それと同系統のウワサなのでしょう。

—時間がないから用件だけを伝えに来た。これを—

「これって……」

—私の枝。今はまだ蕾だけど、四人が揃った時に花を咲かせる—  
「……どうしてこれを？」

—昨日、ねむが新しく生み出したウワサから連絡が来た。……ういが危ない—

「えっ？」

環さんの顔から血の気が引いていきました。

—うい……というのは確か、行方不明になったという環さんの妹さん—  
でしたね。

「少し訊いてもいいかしら？」

—なに？—

「新しいウワサってなに？ 詳細は分かるのかしら？」

—知っている。聞いたから—

「誰に？」

—そのウワサのもうひとりの生みの親……『マジウス』のひとり、アリナ・グレイ—

「アリナ先輩が!？」

その人は確か、話を聞く限り百恵さんに加担していた唯一の『マジウス』でしたね。

かなりクセの強い性格をしているらしく、味方なのか敵なのかわからないグレーゾーンの要注意人物。

「……そのウワサの詳細を教えてくださいわ」

—いいよ—

アラもう聞いた？ 誰から聞いた？

神浜最強のそのウワサ。

絶対無敵の正義の味方、魔法少女のためならなんでもしちやう希望の星！

助けがいるならお任せあれ！

あなたの元にひとつ飛び！ どんな敵もスパツと一撃！ 邪魔するやつは命の業火で焼き尽くす！

でもでも拒んだりするのは絶対ダメ！

寂しがって、助けるまで絶対に帰ってくれないとつても困ったかまっっちゃん！

どんな手段を使っても必ず自分が役に立って魔法少女を救うって、星奈百恵の間ではもっぱらのウワサ！

アリガタメイワカー！

「ふっげけないでくださいー!」

思わず、声を出して悪態を吐いてしまいました。

あまりにも、あまりにもピンポイント過ぎて、そして明らかに百恵さんを馬鹿にしている皮肉で溢れたふげけた内容のそのウワサを聞いて我慢が出来なくなってしまうたからです。

「まなかさん、落ち着いてください」

まなかの背中に手を添えて宥めてくれているまなかさんですが、そう言うあなただつて能面のような顔をしているじゃないですか。

理性的な人ほど怒れば怒るほど無表情に近づくと聞いたことはありますが、それは本当だったみたいです。だって今のまなかさん、ずっとウワサの方を見たままびくりとも顔のパーツが動いていませんから。

「……わかっています。だから今叫んだんです」

「それは英断ですね」

「まなかさんも少しは発散させたらどうですか?」

「そうですね。それもいいかもしれませんが、今はやめておきましょう。あとでたつぷりと、ぶつけることにします」

そう言うのにこつと笑ったと同時に猛烈な寒気がして鳥肌が立ちました。

決してまなかに向いたわけじゃないのに、震え上がってしまうほどのこの静かすぎる怒気……。

分かつてはいましたが、この人は絶対に、絶対に怒らせてはいけな  
い類の人です。

この人の本気の殺意をその身で浴びたらしい帆奈さんはよく五体満足で生きて帰ってくるのができましたね。

「……まあいいわ。じゃあ次に、それにどうしてあなたとそのウワサは連絡が取り合えるの?」

――全てのウワサは繋がっている。距離が近ければ意思疎通もやろうと思えばできる。彼女は消される寸前で、私に連絡をくれた――

ちよつと待つてください? 今なんて言いました?

消された……ですって!?

「待ちなさい！ そのウワサは百恵に憑依しているんでしよう!? 百恵は無事なの!？」

—それは知らない。けど、消されたときは生み出された直後だった。だからその時点では、その百恵という子は無事だと思う—

それなら……良くはないですね。

でもそれでも、百恵さんもろとも消されたわけではないようなのでまだ良かった方ですか。

「でもどうして生み出した瞬間に消したりしたのかしらあ？」

「確かに妙ね。わざわざ作っておいて……なにがあつたのかわかる？」

—詳しくは知らない。けれど、彼女は激しい怒りを露わにしていた。たぶん『マジウス』の誰かが、生み出して早々にそのウワサのルールを破った—

ウワサは定められたルールを破った時、攻撃的になる性質を持っていたんでしたっけ？

ということは……さつきの忌々しいウワサが持つルールと、それに反する内容を考えないといけないということですね。

皮肉だらけでしたが、『神浜最強のウワサ』の性質は非常に百恵さんに近いものでした。

魔法少女を救うためには何でもして、拒むものや邪魔するものには容赦はしない。

そんなウワサのルールを破るということは、ウワサの助けを拒んだか……ウワサの目の前で他の魔法少女を傷付けるような真似をしたのかの二択です。

そして先程のこの万年桜のウワサさんの話からして……。

「そんな……灯花ちゃんたちがういを……」

その答えを悟った環さんがショックを受けていました。

まあ、そうなるでしょうね。環さんの妹さんが『マジウス』に酷いことをされていると言われたようなものですから。

なぜか環さんだけが覚えている環さんの妹さんは、『マジウス』のふたりと親しい間柄だったみたいですし、そのふたりに忘れられたばかり



りか、あんまりな仕打ちをされていると知ってしまったって心が痛まないはずがありません。

第三者のまなかだって物凄く嫌な気持ちになってるんです。環さんの悲しみはかなり深いものだったことでしょう。

「色んな意味で時間が無くなってきたわ。とにかく本拠地に向かいましょう。みふゆ、案内して！」

「わかりました！」

聞き出せることを全て聞き出したまなかたちは万年桜のウワサさんを通り抜けて、桜の近くにある広間に足を踏み入れました。

そして、次の瞬間には景色が変わりました。

辺り一面、薄い霧に包まれた不気味な世界。そしてその先にあるのは巨大な建物。

この建物こそ『マジウス』の本拠地、ホテル『フェントホープ』なのでしよう……って！

微かな音が聞こえたので反射的に反応して真横に飛ぶと、さっきまでまなかがいたところに大砲の弾のようなものが通過し、後方で激しい爆発を起こしました。

あつぶないですね！

さすがは本拠地です、入った瞬間から戦いが始まっていたということでしょう。いつの間にか、まなかたちを囲うようにちらほらと羽根が集結してきていました。

その中でローブを着ていないふたりの魔法少女がいました。

ひとりはメイド服のような服装をした箒を構えている人。もうひとりはバズーカ砲のようなものを構えている人。きつとあの人やさっきの攻撃をしてきた人なのでしょう。

「ググ……ガア……」

「グギギ……」

目の焦点が合っていませんし、明らかに様子がおかしいです。

あの方たりも外で暴れている羽根たち同様、操られてしまっているようです。

「そんな……郁美さんに令さん……！」

「知り合いのようね」

「はい、ワタシに情報をくれた協力者です。多分、ここにいる子たちもみんな……」

最初のお出迎えが洗脳したみふゆさんの協力者とは……本当にいい性格をしていますね。

「仕方がない。こいつらの相手は自分がしよう」

前に出たのは和泉十七夜さんでした。

「こいつらのほとんどが東の魔法少女たちだ。勝手に自分の下から離れて行ったことに仕置きをしてやろう」

「ですがおひとりでは厳しいでしょう。……あきらさん、かこさん、お願いできますか?」

「いいよ! 任せておいて!」

「はい! 回復は任せてください!」

それに続くようにななかさんのチームから志伸あきらさんと夏目かこさんが。

「かこが残るならオレも残るぜ!」

「わたしも残るよ!」

「あちしも残る!」

「あ、あやめ!? あやめが残るなら……」

「ダメだよ! このはと葉月は行って! あちしは大丈夫だから!」

フェリシアとかこと、みんなで道を作るからね!」

さらに深月フェリシアさん由比鶴乃さん、三栗あやめさんが残るところを決意。

あやめさんがかこさんを守るように位置取り、フェリシアさんが前に出て巨大なハンマーを構え、鶴乃さんはフェリシアさんとは逆の方向にいる羽根たちに向けて構えています。

「ここは自分たちで受け持つ。だから早く行け!」

「……っ。行きましよう、みんな!」

やちよさんにつき、残ると決意した六人を除いた全員が駆け出す。

当然この先へ行かせまいと洗脳された羽根たちが立ちほだかりますが。

「ちゃーらあーっ！」

鶴乃さんが次々と飛ばしてくる炎を受けて、まともにななかたちに近づくことができせん。

「オラア！　ズガーソン！」

その隙にフェリシアさんが豪快な一振りで多くの羽根たちを吹き飛ばし、

「はい！　これでオツケーだね！」

「うむ。深月君たちのおかげでこちらは楽ができるな」

あきらさんと十七夜さんが仕留めそなった羽根を着実に倒していきます。

「怪我をしたら来てください！　治療します！」

「あちしが守るから安心してよね！」

　　どうやらかこさんは回復要員だったらしいです。

　　そういうことですか。だからあやめさんが彼女を守るように陣取っているんですね、この戦いにおいてかこさんは生命線のようなものですから。

　　鶴乃さんが器用に立ち回って翻弄して、フェリシアさんが必殺級の攻撃を繰り出して、あきらさんと十七夜さんがフェリシアさんを補助、かこさんが皆さんを回復させて、そのかこさんをあやめさんが守る。

　　とても即席で作ったとは思えないチームワークを發揮した六人によつて道は開かれ……まなかたちはフェントホープ内に足を踏み入れました。

Side. 遊佐葉月 地下聖堂に続く階段

神浜に戻ってきてから、アタシたちは変わった。

「このはと葉月は行って！ あちしは大丈夫だから！ フェリシアとかこと、みんなで道を作るからね！」

あやめは友達ができた。

ずっとずっと、アタシたちの後ろをついてくるのでいっぱいはいだったあのあやめが、自分だけの力で友達を作った。

「おう、あやめ！ かこは任せた！ 前はオレに任せとけ！」

「うん！ あちしに任せておいて！」

「怪我をしたらすぐに戻ってきてくださいね！」

「おうよ！ オラア！ ズガンン！」

「うひょー、ドツ派手えー！ って、こつちにくんなし！ ここには指一本触れさせないもんね！」

その友達と力を合わせて、うまく連携を取ってしつかりと戦っている。

ずっと前ならアタシたちについてきていたはずなのに、あやめは自分の意思でアタシたちと別れて、友達たちと一緒に戦う決断をした。迷いなんてなくて生き生きと、そして的確に状況を見極めて自分の役割を全うしている。

こんな勇ましいあやめを見られるなんて、神浜に来るまでは思いもしなかった。

「葉月、行きましょう！」

そしてこのはがアタシと先に進む。

ずっと前なら、このははあやめを置いて行こうとはしなかった。無理矢理にでもあやめを連れて行こうとしていたと思う。

あやめをひとりにするのが心配なのもそうだし、なによりこのははアタシたち以外に心を開こうとしていなかったから。

でもこのははあの事件以降ガラツと変わった。

「ただ問題を先送りにするわけじゃなくて、それを目標にして私たちが進むべき道とその姿勢を見せてくれた」

ななかさんの答えに対するこのこの言葉が、まさにその証とも言える。

ずっと前なら、このはの言う「私たち」はこのはを除くとアタシとあやめのふたりだけだった。

でも今は違う。

あの時調整屋にいたすべての神浜の魔法少女と、そんな彼女たちやアタシたちを今まで守ってきたあの人をみんなひっくるめて、このはは「私たち」と言ったとすぐにわかった。

誰も信じられなくて、周りの変化に消極的で、アタシとあやめしかない小さな世界を必死で守ろうとしていたあのこのはが、この神浜という街を守ろうと積極的に自分から立ち上がって介入することを決めた。

あやめを置いていく決断ができたのも、強く成長したあやめだけじゃなくて、あやめの友達や他に残って戦ってくれているみんなを信じることでできたからに違いない。

「私は……私はただ、あなたとあやめと……！」

三人で……いつも三人で、三人だけで！

ただ、それだけで！ それだけで、いいのに……。

院長先生もいなくなつて、つつじの家からも出て！

もう私には、あなたたちしかいないのに！」

更紗さんが起こした事件の時にこんなことを言っていたこのはが、ここまで変わることができたのは凄いことだと思う。

「うん！ 行こう、このは！」

そんなことを言っているアタシだつて変わったんだ。

社会的に見えるかもしれないけど、それは上っ面だけ。本当は臆病な性格のアタシ。

だけどアタシが言うのもアレだけど頭の回転はそこそこ良かったし、世渡りも昔色々あったせいで上手くなっている自信もあったから、このはたちにも悟られることはなかった。

そんなアタシだからさ、最初はこのはとほとんど同じ考えだったんだ。

このはとあやめがいればそれでいい。

このふたりを守ることを考えるためだけに頭を使うし、有利になるような交渉だつて受け持とうってね。

でも、それは神浜に来てから変わった。

さつきも言ったけどアタシは世渡り上手だからさ、自然と自分がどう動けば一番良い結果になるのかは分かるんだよ。

本当はアタシだつて、このはと同じで周りの人達と深く接するのは怖かった。だけどそれ以上に、たくさんの人たちがアタシたちの味方に付いてくれたことが嬉しかった。

だからアタシは思い出すことができたんだ。

すっかり周りを見れば、アタシたちを受け入れてくれる人たちがたくさんいることを。そんな人たちが与えてくれる温もりを。

それを思い出させてくれたのは、三人の大物魔法少女。

真つ先にアタシたちに接触してきて、あの事件以降もよく交流させてもらつて情報共有をしてきているチームのリーダー、常盤ななさん。

アタシたちの無実をあつかりと証明してくれて、その後始末からフォローまでしてくれた西のリーダー、七海やちよさん。

そして……最後のひとり。

アタシたちを神浜に受け入れるための下準備をしてくれた、神浜最強の魔法少女、星奈百恵さん。

彼女たちのうち誰かひとりでも欠けていたら、アタシたちはここまですぐ前向きに変わることにはできなかった。ここまで積極的に神浜の魔法少女たちに関わることはなかったと思う。

だから本当にこの人たちには感謝しているし、いつかは恩を返そうと思つていた。

そしてそのいつかが、今。

調整屋で話を聞いていて、まあ色々と言いたいことはあつたよ。

でもアタシのやることは何も変わらない。

確かに『マギウス』が掲げる魔法少女の解放は魅力的だった。

アタシも真実を知った時は、後悔はしなかつたけれど暗い気持ちに

はなった。落ち込みもした。

でも落ち込んでばかりじゃ何も解決しないから、少しでも魔女になる運命から逃れるには戦い続けてずっと魔法少女として生きていくしかないと思っただから、今日まで頑張っただけだ。

だから……そんな戦いの中でしか生きられないアタシたち魔法少女を、その残酷な運命から解放することができる『マギウス』の計画は確かに魅力的ではあった。

でも、それ以上に譲れないものがアタシにはあった。

ひとつは『つつじの家』。

アタシたち三人が魔法少女になってまでして守りたかった、かつての居場所。

アタシたちが魔法少女の運命から解放されても、肝心の『つつじの家』がワルプルギスの夜に滅茶苦茶にされたら本末転倒。それだけはないがなんでも阻止しなければいけない。

そしてもうひとつは、百恵さんだ。

ずっとずっとアタシたちに手を差し伸べ続けてくれた、あの優しい百恵さんが囚われたと聞いた瞬間、もうアタシの中で『マギウス』は明確な敵になった。魔法少女の解放なんかどうでも良くなった。

ななかさんとやちよさんにはある程度の恩返しは出来ている。

ななかさんとは協力関係にあるし、やちよさんからくる協力要請もすべて応じている。だから少しずつだけど、返しているつもりはある。

でも百恵さんには何も返していない。

だって百恵さんはアタシたちを特に頼りにしてくれたことがないから。

要領がいいから大抵のことはひとりで熟こなしてしまうし、通常業務以外で助けた相手には見返りをなにも求めてこない。しかもこちらがなにかしようとしても、遠慮してやんわりと断られてしまう。

だからアタシは、ここで立ち上がると決めた。

アタシたちに良くしてくれているこの神浜と言う名の『つつじの家』をワルプルギスの夜から守って、百恵さんを助け出して少しでも

恩を返すために。

ななかさんがやちよさんたちの行動に対して否定的な意見を述べていたけど、すぐに狙ってわざとやっていることに気が付いた。

百恵さんを交えて人狼やらトランプやらで言葉遊びをしている仲だし、何よりななかさんが百恵さんを助けられないという選択肢を取るはずがない。

だから結論は既に決まっっていて、調整屋に集まっているみんなを団結するように上手く運んでいこうとしているのがわかった。

そこからは流れるようなこのはの援護射撃があつて、無事に全員が『マギウス』と戦う覚悟を決めてくれた。

それでもダメそうだったらアタシもワンプッシュするつもりだったけど、ななかさんのお芝居がうまくいったのもさることながら、アタシたちに続いてれいらちゃんたちのチームも立ち上がってくれたおかげで出しゃばらずに済んだ。

正直に言っただけのタイミングでアタシが出るのはちよつと変だったから、出る幕がなくて本当に良かったと思う。

さて、こうして行動を始めて、あやめたちの奮闘もあつてアタシたちは敵の本拠地であるホテルフロントホープの潜入に成功した。

「こつちです！ おそらく『マギウス』たちは地下聖堂……イブの所にいます！」

百恵さんの副官をしていた梓みふゆさんにアタシたちは続く。

彼女は百恵さん以上にこのフロントホープに精通しているから、ここに入る際の注意事項から敵の居場所まですべて把握そそのかしていた。

このフロントホープを破壊すること、そして破壊をそそのか唆すことを言うのは絶対のNG。どちらかを感じた途端にウワサが出現して襲い掛かってくるらしいから、本当に梓さんがこちら側に付いていてくれてよかった。

もし彼女がいなかったらアタシたちはこの広大な敷地内で迷い続けていただろうし、最終手段としてホテルを破壊しようと動いていた可能性もある。そうならもつと大変だったね。

これで黒幕である『マギウス』のところまですぐに行ける……と、



思ったんだけどさ。

「いたぞー！」

「やっぱりあの裏切り者たちじゃ、ダメだったみたいだ」

まあ、こうなるよねえ……。

アタシたちの行く手を羽根たちが阻んでくる。後ろからも騒ぎを聞きつけた羽根たちが来ている。あつらら、囲まれちゃったね。

それにしてもこの羽根たちは操られていないみたいだね。

『裏切り者』……って言うていたけど、それって今あやめたちが相手している外で暴れている羽根たちのことかな？

梓さんの協力者や、百恵さんを支持していた羽根たちが軒並み洗脳されていて、そんな羽根たちを裏切り者って蔑さげすんでいるってことは……この羽根たちは、梓さんが言う旧過激派、現マジウス派の羽根たち。

百恵さんに黒い感情を持っていて、そして『マジウス』に百恵さんを売った……。

「みふゆさん、あなたまで……どうして」

「ずっと一緒に、解放を目指していたじゃないですか……！」

「……確かに、ワタシはずっと自分が助かりたいと思っていました。今だって、この魔法少女の運命から解放されたいと思ってますよ」

「だったら……！」

「ですが！ このやり方を許容するかは話が別です！

ワタシはあくまでも、みんなと一緒に解放されて幸せになることを目標に頑張ってきました。

あなたたちに真実を伝えて、半ば脅しに近いやり方をしてでも協力してもらおうように迫って、モエちゃんをも巻き込んで、ワタシは『マジウスの翼』という組織を大きくしてきました。

ですからワタシには、巻き込んでしまったあなたたち全員に対する責任があるんです！

羽根のみんなを洗脳して、魔法少女同士で殺し合いをさせて、ワルブルギスの夜を呼んで神浜を滅茶苦茶にするなんてことは、決して許すわけにはいかないんです！ あなたたちを大勢の人を不幸にし、命

を奪うこの計画に加担させるわけにはいかないんです！ あなたたちを人殺しにするわけにはいかないんです！

最後の一線だけは絶対に越させません！」  
なるほど、それが梓さんの本音か。

百恵さんを巻き込んだ張本人だからあんまり良い感情は持っていなかったけど、今の話を聞いて認識を改めないといけないね。

長い間やちよさんと一緒に西を支えてきただけあって、思った以上に責任感の強い人間みたいだった。

だから百恵さんも、梓さんを信じて『マギウスの翼』のリーダーになつて、梓さんと一緒に解放に尽力し続けてきたんだろうね。

そうじゃなかったら、いくら弱ってしまつていたとしても百恵さんは『マギウスの翼』に入るはずがない。あの人はそういう人だから。

「私たちを巻き込んでおいて今更そんなことを言うんですか……！」  
「自分から誘つておいて、私たちを裏切るんですか!？」

「どう思っていたいただいても結構です。恨み辛みは聞きます、気が済むなら殴つてくれても構いません。ですがなんとしてでも、この計画は止めます。」

これは『マギウスの翼』のリーダーであるモエちゃんの意味であり、その副官であるワタシの意味であり、『マギウスの翼』全体の決定事項です。

よつてワタシは、ワタシの仕事を全うします。

そしてあなたたちはあくまで『マギウスの翼』の構成員です。

どうすればいいのか、わかつてもらえますね?」

さて、ここで梓さんの言うことを聞いてくれるなら話は早い……と  
いうか本来なら梓さんの言うことは聞かないといけないはずだね。

だって百恵さんに仕事を依頼した時の対価は『マギウスの翼』の構成員全員の忠誠だったはずだから。

百恵さんの意思をそのまま口に出している梓さんの言うことを聞くのは、『マギウスの翼』の構成員として当然のこと。  
だけど……。

「……甘くなりましたね、みふゆさん。あなたは星奈百恵に毒されす

ぎた」

「あの女が『マギウスの翼』に来てから確かに現場の環境は改善されました。ええ、本当に。仕事が減って楽になりましたよ」

「ですが肝心の『マギウス』に嫌われてしまった。解放には『マギウス』が必要不可欠だというのに」

「『マギウス』のご機嫌を取らないと救われないのに、本当に余計なことしかない……!」

「だから私たちは『マギウス』に忠誠を誓ったんですよ」

「そもそも、星奈百恵との契約はみふゆさんの独断でしょう？ 私たちの意思じゃないし、受け入れるつもりもない。だから従う必要はない!」

あー……やっぱりこうなつちやうよねえ。

わかっていたよ、うん。わかっていたんだ。

万人に好かれるような人はいない。だから善意の塊みたいな百恵さんにだって、多少なりとも嫌う人がいるだろうなって思っただけなんだ。

更紗さんだって今は百恵さんに懐いているけど、昔はまあ色々あって嫌いだったらしいしね。

百恵さんを嫌う人の気持ちも、一応わからないこともない。

神浜全域が狩場というかなり特殊な立ち位置にいる人だし、仕事の都合上他人様の縄張りにいる魔女をなんの断りもなく狩ることが許されているから、特定の縄張りという制限がある普通の魔法少女にとってそりゃあ面白くはないだろうね。

でもそれで百恵さんを恨むのはお門違い。

文句があるならそれを許しているやちよさんたちに直接言うべきであって、百恵さんに向けるものじゃない。百恵さんは別にルールを守っていないわけじゃないんだから。

まあ、やちよさんたちに直談判したところで門前払いされるだけだろうけどさ。

それに百恵さんはしっかりとそのデリケートな問題も考慮して、狩る魔女の数にも制限を設け、それを超えるようなら別の場所に向かう

ようにしていたはず。

仕事以外で偶然居合わせた魔法少女には、困っているようななら無償でグリーンシールドを渡しているって話も聞いたことがある。

だから百恵さんは魔女を狩りつくすこともしていなければ、グリーンシールドを独占しているわけでもなかったはずだよ。

もしも百恵さんに鍛えられて一人前になった魔法少女が自分の縄張りで活動することについて不満に思っているなら、それはもう当人たちの問題。百恵さんは関係ない。

協力するなり、アタシたちやまなかさんのチームのようにルールを作るなりすればあっさりとは解決できるはずの問題。

神浜には魔女が多いんだから、誰かが乱獲しない限りは魔女がいなくなるなんてことも少ないし、困ったらその時こそ百恵さんやかりんちゃんに助けを求めればいい。彼女たちは絶対に拒むことはないんだから。

魔法少女を鍛えていることを『余計なこと』と言うのなら、それはとんでもない身勝手な話。弱い魔法少女は黙って死ねと言っていることを知っている上で言っているのならさらに質が悪い。

「そうですか……。残念です」

この梓さんの言葉がトリガーになった。

(まなか先生、行くよ)

(まっかせてください！)

アタシの固有魔法は『体のスキヤニング』。

敵さんの弱点を探ったり、電子機械を操作したりするのが主な使い方だけど、それを応用するところとして電撃として攻撃することができ

る。常人から逸脱した存在である魔法少女といえども、あくまでベースになっているのは人体。つまり電撃は通りさえすれば絶大な効力を発揮する。

アタシはそれをアタシたちの周りを囲うように発生させて、まなか先生の『伝播』の魔法で拡散させたんだ。

アタシたちを取り囲んでいた羽根たちも少し距離を取っていたか

ら安全だと思っていたんだろうね。でも残念、こつちにはまなか先生という攻撃の出力と効果を増幅させる優秀なサポーターがいるんだよ。

まなか先生とはここに来る前にアタシと手を組んでもらえるようをお願いしておいた。アタシの攻撃と相性が最高だったからね。

為す術なく、アタシたちを囲んでいた全ての羽根たちが感電して戦闘不能になった。

弱い、弱すぎる。不意打ちではあつたけどさ、アタシとまなか先生だけで制圧されるなんて無防備にもほどがあるでしょ。百恵さんが見たら呆れちゃうよ。

これなら表で正気をなくしている子たちの方が厄介だよ。アタシたちを襲うことしか考えてないから動きに乱れはないし、ダメージを受けても怯まずに襲い掛かってくるので面倒くさいから。

「上手く行ったね、まなか先生」

「はいー！」

「いえーい!!」

「あなたたち……」

「言葉が通じなさそうだったしき、梓さんがいるから案内もいらなし、問題はないですよね?」

「……あなたは手より先に口が動くタイプじゃなかったかしら?」

あつはは、違ういなね。

でもさ、アタシだって怒るときは怒るんだよ。だからつい先に手が動いちゃった。

にしても初めてかもしれないね、こんな風に先制攻撃を仕掛けたのはさ。思った以上に決まると気持ちが良いものだね。

「まあいいわ。早く行きましょう」

アタシたちは再びフェントホープを駆けだす。

向かってくる羽根たちは戸惑うことなくアタシとまなか先生のコンビが蹴散らす。交渉不能だから話すだけ無駄だし、まなか先生のおかげで今のアタシの攻撃は全体攻撃になっているから倒しちゃう方が早いんだよね。

相手は魔法少女だからソウルジェムにさえ当てなければ丸焦げにしても致命傷にならないし、ソウルジェムの位置もアタシのスキヤニングで把握できるから簡単に無力化することができる。

なんか途中でこの事件の黒幕の『マジウス』が出てきたけど、すぐに鏡の魔女の使い魔だってわかったから瞬殺しちゃった。だってスキヤンしたら体の構造が使い魔のそれだったからね。

鏡の魔女の使い魔かどうかの判定なんて一発でできる。

いやあ、我ながら手際が良くてびっくりしてるよ。

なんていうかな、頭が冴えているんだよね。『神浜最強のウワサ』の内容を聞いた時から妙に。

「葉月、ひとついいかしら？」

「なに、このは」

「その……笑いながら攻撃するのは止めて。怖いわ」  
「えっ」

アタシ笑ってたの？

そういえば口元が吊り上がっているような……。やつば……そりゃあこのはもドン引きするわけだよ。

どうも怒りすぎて笑うしかなくなっちゃったから、そのまま表情が固まっちゃっていたみたい。

うっわ、こっわ！ 自分でも引くわ！

あやめがいなくて良かったよ。こんな顔見せたくないもん。

「ここです！ この先にきつと『マジウス』がいます」

すぐにキリツとし顔を作っているうちに目的地に辿り着けたみたいだった。

廊下を曲がって直進して……えっど？

梓さんはこの先って言ったよね？ でもなぜかアタシたちの前にあるのは行き止まり。壁が一面に広がっていてこの先に進めそうもない。

まさか、袋小路にアタシたちを追い詰めるための罠？ 最初から梓

さんは演技していた？

「おかしいです……確かに、この先に階段が」

でも梓さんは困惑した様子で壁を触っている。

さっきの羽根たちへの言葉といいこのリアクションといい、演技しているとは思えない。

それに冷静に考えてみれば、ここに近くにつれて控えていた羽根たちが増えていったし『マギウス』をコピーした使い魔だった。罠にしては手が込みすぎている。

そもそも罠なら妨害しないで、ここまであたしたちが来るまで待つから背後から襲い掛かってくればいいはず。無駄に戦力を削ぐメリットはほとんどない。

ということは梓さんの言う通り、本来のこの場所には地下に続く階段があったに違いない。

それなのに閉ざされたということは……なにかの魔法がかけられている可能性が高いね。

「葉月」

「うん、やってみるよ」

念のために壁全体にスキヤニングを開始。

このホテル自体もウワサらしいけど、もし違う形式の魔法が後からかけられているのだとしたら、ここだけ反応が違うはず。

さて、結果は……。……………！

「ビンゴ。ここだけ周囲の壁と違う形式の魔法がかけられているよ」

「ということとは、この先にいるようですね。……『マギウス』が」

ななかさんの言う通り、ここが『マギウス』に繋がる鬼門と見て間違いない。

後はどうやってこの魔法を解除するか……。

「私の魔法を試してみる力？」

美雨メイユさんが壁に手を触れて目を瞑った。

えっと、たしか美雨さんの固有魔法って……『偽装』だったよね？  
近くににいる人間に嘘の情報を現実として認識させる魔法だったはずだけど……壁に対して効果はあるのかな。壁は無機物だけ……って、違う。

この壁はただの壁じゃない！

「！ 離れるネ！」

なにかを感じ取った美雨さんの言う通りに壁から距離を取ると……辺り一面の景色が変わっていく。まるで魔法の結界のように。

—フツフフフ—

そしてさつきまで壁があった場所には、ゴテゴテに飾り付けられた聖女のような衣装を身に纏った赤い人型が立っていた。明らかに人間じゃないし、魔法少女でも魔女でもない。

ということはアレが『ウワサ』ってやつだろうね。

やっぱりあの壁は魔法によって生み出されたウワサという怪物。生き物だったから美雨さんの魔法が効いて、それで姿を現したんだ。つまりこいつを倒せば先に進める！

—フツフフフ……フ……フ……フ……—

戦いは呆気なく終わり、アタシたちの前に立ち塞がっていた壁が消えて道ができた。

こっちは12人もいるし、ウワサもウワサで弱すぎた。

本当にこの先に続く道を隠すためだけに作られたような感じだった。

階段を下っていく。

果てが見えず、まるで闇に吸い込まれていくような感覚に鳥肌が立つ。

しかもこの階段……降りれば降りるほど、瘴気が強くなっていく。ということは……この瘴気の原因であるなにかがこの先にいるということ。そしてそれが、『マギウス』の計画の要であるエンブリオ・イブっていう半魔女なんだろうね。

こんな風にあタシたちに隠すということは、本当に計画に必要不可欠で、そして絶対に見られたくないものなんだろう。もし見られても平気なものなら、ななかさんが言ったように堂々と見せればいいんだし。

「来たわ……」

「来ましたね……」

ん？



「このは？ まなか先生？　なんか言った？」

「い、いいえ？」

「何も言っていないわよ」

ふたりはそう言うけど、今は明らかにこのふたりの声だった。

ということは……そうか。まだ、いたんだね。

「あつは！　みんな混乱しているみたいじゃん！」

「情けないわねえ〜」

「ほんと、自分の仲間だと思つと、見ていて情けなくなるわ。ね、いろは」

「はい、こんなの私たちらしくないです。みんな自分を忘れてしまつてます」

ああ、本当に趣味が悪いね。

仲間を洗脳して、ワルプルギスの夜を呼んで、自分たちの偽物を作つて罫に嵌めようとして……遂には……！

「リーダーとして、みんなにお願いしてもいいですか？」

「ええ、構いませんよ。ここは私もあなたに従いましょう」

「私も異論はないわ」

「じゃあこの人たちに自分が何者か、教えてあげましょう」

忌々しいこと……

「や。随分と甘くなつたね……アタシ」

アタシたちの目の前に立ちはだかつたのは、アタシたちの偽物だった。

## Side. 静海このは ウワサの神浜最強

「この人たちに自分が何者か、教えてあげましょう」

フエントホープの地下へと続く階段で待ち受けていたのは私たちのコピーだった。

「腑抜けたわね、あなた」

バカにしているような……いえ、違うわね。見損なっただよな目をした私のコピーがやってきた。

腑抜けた、か。確かにそうね。

一年前まで、私は葉月とあやめ以外を信じることができなかった。信じたかった大人……副院長先生に裏切られて、それでも『つつじの家』を守るために三人で魔法少女になって、各地を転々として、三人だけで力を合わせて生きて行こうと固く心に決めていた一年前の私。

そんな周囲がみんな敵のように感じて殺気立っていた頃の私がきつと、今の私を見たらそう言っていたことでしょう。牙が抜けたと、弱くなったと、丸くなったと。

でも……。

「それって、悪いことなのかしら？」

「なんですって？」

「だから、腑抜けて何が悪いのかを聞いているのよ」

確かに私はあの頃の私よりも弱くなった。

周囲を警戒することがほとんどなくなったから、私のことを知っている魔法少女の子たちも増えたし、隙だらけに見えると思う。

三人で生きることばかり考えていたから、実力行使をしても狩場を奪ったりして強さを見せつけていたこともあったけど、今はそんなことはしていない。

自分の住んでいる地区以外の狩りの禁止と、早い者勝ちという神浜のルールに従っているし、これからも破る気はない。余裕があるときは積極的に譲ってしまうことだってあるくらいよ。

だから私は弱くなった。

でも同時に強くもなった。

だって見つけることができたんだもの。

葉月とあやめ以外にも信じられる人たちを、『つつじの家』以外の私たちが安心して暮らすことができる場所を。

だから私は力が抜けて、少し腑抜けた。けどそれは決して悪い意味じゃない。

私の中のヒエラルキーの頂点が葉月とあやめなのは変わらない。

けどそのふたり以外はすべて底辺だった、とても小さなピラミッドはもうない。いろんな人と関わったことで、高く、高く積みあがっている。

そして今、私の中で葉月とあやめに次ぐ大切な人が酷い目に遭っている。

一年前までの強くも弱かった私から、弱くも強くなった今の私に変えてくれた恩人のひとり……星奈百恵先生をなにがなんでも助け出す。

そして、私たちの居場所を破壊しようとしている『マギウス』の計画を食い止める。

だから私は、腑抜けていたとしても強いだよ。

「本当にあなたにとつての居場所はここなの？　本当にその人は信用できるの？」

ええ、そうよ。

「即答なんて、本当に弱くなったわね。少しは疑うことをしないの？」

いちいち物事を疑ってかかるような、そんな臆病者はもういないわ。

「また、裏切られるかもしれないのよ？」

そうね。でも構わないわ。

たとえばいつか裏切られたとしても、私は今この瞬間を大切にしたいから。

それにこんな諺ことわざを知っているかしら？　来年の事を言えば鬼が笑うそうよ？

鬼を笑わせるくらいなら、今を目いっぱい楽しんで私たちが笑って

いた方が幸せだと思わない？

「それならどうしてこの戦いに参加したの？ 『マギウス』が勝つても、他の人達が『マギウス』を止めたとしてもあなたたちとっては得だったはずよ。関わらないで神浜から出て傍観していれば、葉月もあやめも危険な目に遭わせず済んだんじゃないかしら？ 各地を転々とするのは慣れっこだったはずでしょう？」

言っただけでしょう？

もうこの神浜は、そして神浜に住んでいる人たちは、私にとっても大切なものなのよ。

コピーのあなたなら分かるでしょう？

私、大切なもののためなら割とんでもしちゃう性格なのよ。

だから私は百恵先生を助けるし、ワルプルギスの夜だって倒してやる。逃げ出すくらいなら、この街で心中した方がずっといい。

「……馬鹿じゃないの？ 死ぬつもり？」

そちらこそ馬鹿じゃないの？

死ぬ気なんて毛頭ないわ。だからこうして戦っているんじゃない。生き延びた時に後悔しないように、百恵先生を助けようとしているんじゃない。

「本当に百恵先生を助けられると思っているの？ 彼女は神浜最強よ？」

出来る出来ないの話じゃないのよ。助けるの。

「……そう。そこまで言うのなら……そこまで強くなったのなら、もう私は消えた方がいいわね。さようなら、今の私」

「ええ。さようなら、一年前までの私」

でも決して、あなたのことは嫌いじゃなかったわ。

「……ふふっ」

薄く笑って、私のコピーは消滅していった。……ふう。

戦うことはなかったけれど、本当に一年前までの私なら口にしていたようなことを全部言われて色々と疲れたわ。

本当……あんなに臆病で、小さな世界だけしか見ていなかったのね。

知ってはいたけどこうして突き付けられたら精神に来るわ。でも、きちんと受け止めないといけなかったことだし、その機会をくれたことに関しては『マギウス』に感謝しないといけないわね。

「はあ……面倒くさかった」

「葉月も終わったのかしら？」

「うん、終わったよ……。コピーとはいえもうひとりのアタシとの言葉遊びなんてやるもんじゃないね」

……それは面倒くさかったでしょうね。

私のコピーはある意味直球だったからやりやすかったわ。だって今私が思っていることを偽りなく話せばいいだけだったもの。

周りを見渡せば、他にも終わった人たちがいるみたい。というかほとんども終わっているわね。

まだいないのは更紗さんだけ。

「あーったく、我ながら面倒くさいやつだったなあ」

噂をすればなんとやら。いつも通りの飄々とした様子で更紗さんが戻ってきた。

多分あの様子じゃ、過去の自分と言いつ争っていたんでしようね。バキバキと肩を鳴らしている辺り少し戦闘もしたのかも知れない。

「全員いるわね。じゃあ下りましょう。この深淵に……」

全員の無事を確認したところで、私たちはさらに階段を下つていく。

それにしても本当に酷い瘴気と邪気……。『マギウス』たちが本当にこの瘴気の下で待っているのだとしたら、その感性を疑わざるを得ない。……いえ、疑うまでもないか。

計画のために何人もの命を奪おうとして、ワルプルギスの夜を神浜に呼ぼうとしているような人たちですもの。

そしてやがて階段を下りきると……さつきまで階段に立ち込めていたものとは比べ物にならない濃度の瘴気が充満している空間に出た。

地下聖堂って梓さんは言っていたけど、どちらかといえば植物園みたいね。でもなんか、棺とそれに添えられている花々みたいで気味が

悪い。

そしてこの広間の奥の壁には、巨大な鳥のような姿をした怪物が拘束されていた。

あれが……エンブリオ・イブ？

『マジウス』の計画のカギとなる半魔女？ どこからどう見ても魔女じゃないの。しかもとても醜悪で、哀れな……。

「……どうやら私の推測は当たってしまったようです」

隣に立つななかさんが険しい顔で魔女を見る。

ええ、本当にそうね。

あんなものを利用した計画がまともなものであるはずがない。どう考えても、人として絶対にやっちゃいけない禁忌に触れる計画だったのでしょう。

だから今の今まで、私たちが強行突入して来るまでこの魔女を隠していた。

「ようやく来たみたいなんですケド。本当、待たせてくれるヨネ」  
その魔女がいる方から声が聞こえた。

よくよく見ると、魔女の真下にあるドームの中でテーブルを囲っている三つの人影があった。

「アリナ先輩！」

御園さんが叫んだ。左側の席に待ちくたびれた様子で頬杖をついている緑色の髪の毛の魔法少女に向かって。

「オールソー……まあ来るヨネ、フルガール」

「……本当に、アリナ先輩なの？」

「目が腐っているワケ？ アリナはどこからどう見てもアリナなんですケド」

あの人が……アリナ・グレイ。

他のふたりから百恵先生を守り続けていた『マジウス』。

確かにあれじゃあ、本当に百恵先生の味方をしてたのかどうか判別しにくい。かなり厄介な性格の魔法少女だと初対面ながらそう思えた。

「思ったよりも遅れての到着になったね」

「ねー。みふゆもいるんだからもっと早く来ると思ったの。まあそんなのいいや！ わたくしたちの聖堂にようこそー。みんなでイブを眺めながらお茶でもいかがかにかにやー？」

全く以ってふざけた提案をしてくる。

アリナ・グレイを除くふたりは環さんの知り合いらしいけど……こんな穢れが充満している空間で涼しい顔してお茶やお菓子を口にするあたり、私の想像以上のとんでもない感性をした子たちのようね。

「半魔女から魔女へ孵化！ 魔法少女が魔女になるときに発生させる相転移エネルギーをね、わたくしたちはずっと欲しかったんだよ。それが手に入れば、神浜の奇跡が世界に広がるからー！」

無邪気そのものの笑顔で説明してくれる『マジウス』のひとり、里見灯花。

こんな邪悪なモノのために……神浜にワルプルギスの夜を呼んだというの？

犠牲になる人たちのことをまるで電池のように適当な扱いをしているあたり、随分と傲慢で自分勝手な性格をしている。しかも当人に悪意がないのがより質が悪い。

当然のように、私たちはこのイブとやらを使った計画に真っ向から異議を唱えた。

仮に救われるのだとしても、こんな邪悪なモノの上に成り立つような奇跡なんて願い下げだし、なにより無関係の人達を大勢巻き込んでまで救われたいとは思えない。

後で絶対に後悔することが目に見える。何人も人間の命を無駄に背負ってこれからも生きていくなんて真っ平御免よ。

結局のところ、あのイブとやらを消せば『マジウス』の計画はおじやんになる。

あの三人がそれなりに強い魔法少女だとしても、こっちは12人で精鋭揃い。数でも質でもはるかに勝っている。負け筋はない……はずなのに。

なにかしら？ あの余裕の笑みは。

「くふふつ。でもねー、いくらそつちが頑張っても勝ち目なんてぜんぜんないよ。魔力的にも体力的にも、そして環境的にもねー」

どういう意味かはさっぱり分からない。

まあでもとりあえずこれ、やっちゃっていいわよね？

「全員『マギウス』に構わず、イブに向かいなさい！ 『マギウス』には攻撃が飛んできたときだけ相手するように！」

やちよさんから指令が来た。もう暴れても大丈夫なようね。

今まで葉月とまなか先生に任せっぱなしだった分、思いつきりやらせてもらおうよ！

私たちは一斉にイブの元に駆け出す。

巨大で禍々しい気を発しているけど張り付けられている以上身動きは取れない。だったらただのサンドバッグだ。適当に攻撃を当てて行けば簡単に消滅する！

「え？ え？ なんて普通に動けるの!？」

「なんでつて……それこそなんでかしら？」

「だって、この空間は穢れが充満しているんだよー!? 体が慣れてないあなたたちじゃあ、今までの戦闘で負った疲労も併せて動けなくなるはず……!ー」

ああ、なるほど。

つまりこの空間は、イブの瘴気を今まで浴びてこなかった私たちにとっては最悪のフィールド。『マギウス』の土俵だったってことね。

「確かに気持ちが悪いけど……ばつちり動けるわよ？ それに私たち、全然疲れてないし」

まともに戦っていなかったしね。

羽根たちは葉月とまなか先生のコンビネーションで簡単に撃退したし、葉月たちも特に強い大魔法を使ったわけでもないから大して疲れてもいない。梓さんのおかげでここまでまつすぐ来られたから無駄な体力だつて使っていない。

多分私たちがもつと体力を消耗した状態でここにくると思っただんでしようけど、それは残念ね。

「これは困った……まさか、全然力を消耗していなかったなんてね」



「うーん……さすがにわたくしたちじゃあ、厳しいかなあ。じゃあ、しようがないね。奥の手を使っちゃおう！」

ガコンツ……。

『マジウス』たちの後ろにある、イブの真下にある扉が開いた。  
「なっ……この魔力は……！」

やちよさんが顔色を変える。……なに？ いったい何に気が付いたって言うの？……って！

今さっき開いた扉から、火炎が私たち目掛けてまっすぐに放たれる！

いきなりすぎて驚きはしたけどなんとか反応できた私は緊急回避して火炎を避け、さらに後ろに下がって距離を取る。

あれが……里見灯花が言っていた奥の手？

迂闊に接近することができず、私たちは開かれた扉を警戒して伺っている……そこから小さな人影が出てきた。

その人はまるで血のように濃い赤色の生地に黒い蓮の花弁が散りばめられた和服の戦闘着を着ていた。

真っ白だった髪の毛は燃えるような朱色に染まり、銀色に輝く風車状のソウルジエムは黒味を帯びた蓮の花みたくに変形し、真っ赤な鱗で覆われている両腕に持っているのは、使い手以上の大きさを誇る大剣。

そんな……嘘でしょう……！

「百恵先生……！」

それは、変わり果てた私の恩人。

希望の星である神浜最強の魔法少女である星奈百恵先生が、絶望という形で私たちの前に立ち塞がった。

俯いていた顔が私たちを捉える。

優しい青色だったはずの瞳は虚ろな紫色に変色していて、顔から表情が抜け落ちて生気がない。様子がおかしいとか、そんな次元の話じゃない。明らかに何かされている！

「くっふふ。凄いでしょー？」

「全く骨が折れたよ。一度消して改めて出したせいで余計に疲れてし

まった。でもその分、いい調整ができたと思っっているよ」

あんなことを言っているということはやっぱり……！

「これが……ウワサとの融合……！」

「ピンポーン！ はなまるだよー。そう！ 最強さんにはねむの作つたウワサの依り代にしてもらっているんだよー」

「初めて出したときはイブを見たせいで暴れ始めてしまったね。本当に神浜最強はどこまでもじゃじゃ馬で扱いが難しい。だからある程度僕たちの言うことを聞いてもらうようにしてから、ウワサも再調整した上で神浜最強と融合させたんだよ」

ふざけたことを……！

何が言うことを聞いてもらうよ。無理矢理百恵先生を洗脳して取り憑かせて、利用しているだけでしょ……！

今すぐに百恵先生の頭を馴れ馴れしく撫でている里見灯花を引き？ がしてやりたい。でも近づくことができない！

百恵先生は弱体化しているらしいけど、それでもとんでもない戦闘能力を持った魔法少女。そんな彼女が向こうの駒になっちゃって、いる以上、迂闊に動けない。下手に動いた瞬間負けが確定してしまう！

それに加えて今はウワサと一体化している状態。さっきの火炎のようなウワサ特有の攻撃魔法まで使ってくるとするなら、手の内が見えないこの状況で攻撃を仕掛けるのは非常に危険。

もう少しでイブを倒して『マギウス』の計画を潰せそうだったのに、百恵先生の登場によってそれは遠いものになってしまった。こっちは12人もいるのに、百恵先生がいるだけで戦場が膠着してしまっている。『マギウス』の奥の手はこちらの行動を制限するには充分すぎるものだった。

「いいいよいよ、効果は抜群だね！ せっかくだし最強さん！ もうイブを外に出したいからフェントホープを破壊しちゃってくれるー？ イブが解き放たれば、たくさんの魔法少女が救われてハッピーだよねー！」

「……よかろう」

『マジウス』たちの前に出た百恵先生は武器を片手で振り上げる。一振り天井に亀裂ができ、二振りで亀裂が全体に広がり……つてマズい！

「全員！ 階段のところまで戻りなさい！ 崩壊するわ！」  
やちよさんに言われるまでもなく、私たちはすぐに反応して階段のところまで引き返した。

全員が逃げたところで二葉さなさんが展開した盾を構えて、さらにそれをまなか先生の魔法で伝播させることによってドーム状に広がった。

そしてそれと同じタイミングで、百恵先生が三振り目を放つ。天井全体が粉々に砕け、瓦礫が降り注ぐ。地下聖堂は崩壊した。

—!!0。\*—(●)(工)●—\*。0!!—

建物が壊されたことに反応したウワサが具現化する。

熊のぬいぐるみみたいな木の実をぶら下げた大木のウワサ。

なによこのバカでかいウワサは……！ こんな、私たちが束になつてかかっても倒しきるのにどれだけ時間がかかるか分かつたもんじゃない！ しかもぶら下がっている熊も独立型らしく、無限に湧き出て大軍を形成している！

その大軍はフェントホープを破壊した百恵先生目掛けて襲い掛かる……けれど、百恵先生が軽く横に振った一振りだけで大群は全て両断されてしまった。

……え？ 軽く50体はいた大軍勢をたったの一振りで全滅？

そして縦に一振り。

まっすぐに向かった剣圧がウワサを直撃すると、左右真つ二つに分かれて……そのまま朽ちて行った。

噂には聞いていたけど、本当に一振りで使い魔を全滅させて、返しの一振りで大本のウワサを消し去ってしまうなんて……まさに神浜最強の魔法少女ね。

冷汗が首を伝った。

「全く、相変わらず馬鹿げている威力ね……」  
「久しぶりに見たけど、本当に鮮やかよねえ」

「あれが百恵さんの力ですか。帆奈さんもできますか？」

「ふざけんな、できるわけねーじゃん」

装甲貼視孔に張り付いて外の様子を見ていた他の四人が暢気なことを言っているけど……私たち、今からあの人と戦わないといけないのよね？

コピーの私には何が何でも助けるって啖呵を切ったけど……ちよつと自信を無くすわ。まあ、それでも助けるんだけど。

さて、ウワサの本体が百恵先生によつて倒されたことで、フエントホープの結界が一気に消えていき……私たちは元の北養区の森の中に戻ってきていた。

二葉さんの盾が消えて、広がっていく光景は凄惨なものだった。

厚い黒雲に覆われて雷鳴が轟いている空と、降りしきる雨。強風に靡かれて滅茶苦茶に倒されている木々……ワルプルギスの夜が神浜のすぐ傍まで接近してきている！

「おーい、みんなー！」

「大丈夫かー!？」

「お怪我はありませんか!？」

「あやめ！ フェリシアさん！ かこさん！」

フエントホープの外で、洗脳された羽根たちと戦っていたはずの三人が来た。彼女たちに続いて十七夜さんを始めとしたほかの子たちも来る。

無事に鎮圧できたみたいね。

あやめやみんなが無事でほつと安心したのも束の間、結界がなくなった今でも囚われの身になっているイブが暴れ始めた。

多分ワルプルギスの夜に反応している！ そして……『マギウス』たちの思惑通り、捕食しようとしているのね……！

ワルプルギスの夜だけじゃなくて、あんな魔女まで神浜に放たれたらどんな被害が出るがわかったもんじゃない！ 『つつじの家』なんて睨みあっただけで吹き飛んじやうわよ！

「うんうん、いいね！」

「結構強めに設計したはずの『女王グマのウワサ』を一撃で葬り去るな

んで、さすがは神浜最強だよ。むふっ」

「イブも気が付いたみたいだよ！ ワルプルギスの夜に！ じゃあわたくしたちはイブをこれから開放するから、最強さんはみんなの相手をしていてねー！」

「……承知した」

「だけど私たちの前に、百恵先生が再び立ち塞がる。

「今すぐ、引け。そうすれば見逃してやろう」

「一方的で上から目線な要求だけど、『マギウス』に歯向かった私たちを庇おうとしてくれているのが伝わってくる。つまり……洗脳されていても、百恵先生はしっかりとここにいる。まだ手を伸ばせば届くところにいる！」

「絶対に引きませんよ、百恵先生。必ず、必ず、あなたをその呪縛から解き放ちます！」

「同意です。私もこれ以上、百恵さんが『マギウス』の操り人形になっている姿など見たくありませんから」

「そういうことよ百恵。私たちは絶対に引かないわ。あなたからウワサを引き剥がして、イブを止める！」

「……そうか。残念じゃ」

薄く笑って、百恵さんはその手に大剣を握りしめた。

……これは本気で、私たちを排除しに来ている。命懸けの戦いは日常茶飯事だけど、ここまで生命の危機を感じさせる戦いは初めてね。

「半分じゃ。半分は『マギウス』の元に行くときよ。さすがに18人は骨が折れるからの」

「……わかったわ」

百恵先生の申し出をやちよさんが受けた。

明らかに『マギウス』からの命令違反になる提案を百恵先生がしてきたということは、やっぱり百恵先生の自由意思は残っている。

ウワサの影響が強く出ているみたいだけど、洗脳は完全にかかけられていないよね。

さて、後は誰が百恵先生の相手をするかだけど……。

「鶴乃、フェリシア。私が百恵の相手をするわ。だから……」

「わかったよ、やちよ！ わたしじや百恵に勝てないからね！」

「だな。オレも百恵の相手をするとか無理だから頼んだぜ！」

「……ありがとう。いろはも『マギウス』の所に行つていいわ。二葉さんはみんなを守ってあげて」

「……わかりました！ 絶対に灯花ちゃんとねむちやんを止めます！」

「やちよさんも……絶対に無事に帰ってきてくださいね……！」  
「勿論よ」

「私は残りましょう。他の皆さんはイブの元に向かつてください」

「……悔しいけど妥当な判断ネ」

「ボクたちのチーム、みんな近接戦闘型だから百恵さんと相性最悪だからね……」

「ななかさん……よろしくお願いします」

「ええ。我々のチームの代表として、必ず百恵さんを助け出します。ですので『マギウス』はお願いします」

「ワタシは残ります。モエちゃんを巻き込んでしまった責任を取らないといけませんから」

「わたしも残るわあ。モモちゃんを助けるためにここまで来たんですもの。かりんちゃんはどうする？」

「……わたしもここに残るの。先生を助けたあとで、アリナ先輩にはたくさんお話しするの」

「……ここであたしが残んなかったらさ、何のための『上書き』の魔法だつて話だよな。で、まなかはどうすんのさ？ あのセーナ、あつきらかにやべーぞ？」

「……力量不足は承知ですが、残らせてください。まなかだつて百恵さんを助けたくてここまで来たんですし、まなかの魔法は便利なはずですから」

「あつは！ いいじゃん！ そこまで根性があんなら残つても大丈夫っしょ。ある程度はあたしがフォローするからさ、好き勝手にやりたい放題しなよ！」

「……こんな時くらいですよ、帆奈さんが頼れる先輩だつて思えるの

は」

「言ってくれんじやん！ でも好きだよ、そのちよつと生意気なところ！ かわいくってさ！ あっはー！」

……決まりつつあるわね。

それなら私たちは……。

「あやめ。あなたは向こうに行きなさい。葉月、私とあなたで百恵先生を止めるわよ」

「このはっ!？」

「えっ、なんであちしだけっ!? あちしだっておばあちゃんを助けたいよー!」

「もう七人が決まっちゃっているから、あとふたりしか残れないのよ」  
「まあ……確かに、今名乗り上げている人たちを押し退けることはできないよね。みんな百恵さんに並々ならない想いを抱いているし」

「だからあやめ、あなたは『マギウス』の相手をしてちょうだい。友達と一緒に、私たちを待っていて」

「……わかった！ じゃああちしは向こうでまた、かことフェリシアと頑張るからこのはたちはおばあちゃんを助けてね！ 絶対だよ!」

「勿論よ。また一緒に、百恵先生の家に行きましょう」

「だね！ みんなで行こう!」

これで、決まった。

ここに残る九人の魔法少女が。

「出遅れてしまったか。まあいい。また自分が監督させてもらうとしよう」

「かこー！ フェリシアー!」

「おう、あやめ！ また一緒だな!」

「よろしくお願いしますね!」

「みんなまた一緒だね！ ふんふん!」

「あっはは、そうですね。羽根を相手していたメンバーがみんなこっちに来ちゃっていますね」

「でもそのおかげで連携は取れているはずネ。私は合わせるヨ」

「助かる。環君には二葉君を付けよう。……『マギウス』が心配なのだ

ろう？　好きにしたらいい」

「ありがとうございます、十七夜さん」

「うむ。では、行くか。七海、星奈をよろしく頼む」

「十七夜もいろはたちをお願いするわ」

「うむ」

十七夜さん率いる九人の魔法少女が『マジウス』の元に向かう。

そして完全に九人が通り過ぎてから、百恵先生が笑った。

「お主らが私と遊んでくれるのかの？」

「ええ、そうよ。きつと楽しめると思うわ」

「そうか……それでは期待させてもらおうかの」

さあ……始まる。

最強の魔法少女、星奈百恵先生との決戦が。

絶対に助けるのよ。

この九人で。



## Side. 更紗帆奈 のぼしたてのひら

さてと、ようやくここまで来ることができたねえ。

ずっとずっと待っていたけどさあ。帰ってくるのを待ち続けようと頑張ってみたんだけどさあ。やっぱダメだね。そういうのはあたしには合わなかったよ。

あたしが出した問題を解いてもらうことならさ、いくらでも待つことができたよ。だっていつか、あたしの元に来てくれると思うことができたからね。

でもこりや無理だ。

だっていつまで経っても帰ってくる気がしないんだもん。

最初こそ平気だったけどさ、二ヶ月も経つと不安になってきちまったんだよね。無事なのかな、元気でやってんのかなって不安になった。あいつの命が残り僅かなのは察しがついていたし、あたしだってあいつの意思を汲んで必要以上に心配しないようにしていたよ。

でもさあ、ここまで音沙汰なしだと心配になっちまうに決まってんじゃない？　ずっとずっと神浜の表舞台で華々しい実績を積み上げてきたあいつがだよ？　いきなり引っ込んで行方知れずになつてさ、それが二ヶ月も続いたとなったら流石に心配になっちまうだろう？

しかも、しかもさ。あいつの名前を知らないって言う魔法少女に遭遇したことがあるんだよ。

ありえねーだろ、なんで神浜で活動していてあいつの名前を知らねーんだよ、モグリかなんかかかって言ってやりたくなったよ。ブチギレそうにもなったよ。

でもさ、それ以上に怖くなっちまったんだよ。いつかみんな、あいつのことを忘れちまうんじゃないのかって。

休業ってなっているみたいだけど、あいつの仕事はないに等しくなったって聞いたことがある。顧客のほとんどが弟子の御園かりんに流れたらしくって、あいつには全くと言っていいほど回ってこない。夏休みの間はあたしの監視のために仕事を休んでいたのも相

まって、あいつは引退したなんていう噂が流れるくらいだ。

ずっと前まで、あいつは神浜の顔みたいな存在だった。みんながみんな、あいつのことを知っているし頼りにもしていた。

でも今はどうだ。

みんなあいつに頼らなくなった。あいつのことを知らないやつもいるようになった。

だから怖くなったんだ。

すぐに帰ってきてきてほしいと思った。そうじゃないと取り返しのつかなくなりそうな予感がしたから。

そして……そんな不安な想いを抱き始めて一週間が経ったとき、七海やちよが来た。

あいつが帰ってきてくれたと思って舞い上がったからさ、違うと知った時はガチギレしそうになったけどどうも様子がおかしかったし、なんで今になってここに来たのかが気になって中に入れた。追い返さなくて本当に良かったと思う。だって、あいつが無事に生きることが分かったんだからさ。

おかげであたしの中の不安が一気に消えた。

死にかけているらしいけどそれは分かっていたから生きていくだけであたしは嬉しかったんだ。まだ帰ってきてくれる可能性があるがあるとわかったからね。

それで待ち続けていたんだけどさあ……なんか様子がおかしいやつらに襲われて、やちよたちに協力して調整屋に行ったらさ、あいつが捕らえられていて、なんか変な怪物に取り憑かれているって聞いた時には頭が真っ白になっちゃったよね。

ふざけんじゃねえって思ったよ。

あいつが寿命を全うして死んじまうならいい。それはあいつが望んでいたことだからさ。でもさ？ あいつを危険な目に遭わせた拳句、封じ込めるついでに利用するだつて？ 冗談じゃない。

だからあたしは決めたんだ。絶対にあいつを助けて連れ帰るってさ。

もうあいつは疲れちゃってんだ。

ずっとずっと神浜の魔法少女たちを助けるために奔走して、体に限界が来ても戦い続けて、残された時間すらも魔法少女のために割いて、普段のあいつなら絶対に負けることのないような連中にやられちまうくらいボロボロになって、それで……。

「お主らが私と遊んでくれるのかの?」

こんな姿にされても戦おうとして……!

もう、いいじゃんか。あんたは充分戦い続けてきたじゃんか。

あたしを含めたここにいる九人を、ここにいないたくさんの神浜の魔法少女をさ、ずっとずっと助け続けてきたじゃんかよ。

だから……いい加減さ。もう、休めよ。なあ? 休んでくれよ、セーナ……!

後はあたしらがなんとかするからさ。あんたがやろうとしたこともやってみっからさ。だからもうひとりで走るなよ。抱え込むなよ……!

(みんな、行くわよ!)

やちよから念話が来た。これが開戦の合図。

今、助けるからね……セーナ!

(ななかとこのはさんで牽制、私が合わせるわ!)

みたまとみふゆはふたりを、まなかさんは私のフォローを!

葉月さんは百恵の体を調べて弱点を探って!

かりんは葉月さんをフォローして!

帆奈は待機していてちようだい!)

実には的確な指示が来たね。

この戦いでセーナに勝つ必要はない。セーナからウワサを引き剥がしちまえばあたしたちの勝利。そして、セーナからウワサを引き剥がすにはセーナと心と心を通じ合わせる事が絶対条件。その条件を満たすための鍵があたしだ。

相野みとから受け取った『心を繋ぐ』魔法。こいつを発動することさえできれば、セーナからウワサを剥がしやすくなる!

けどこの魔法には発動条件がある。あたしがセーナの手を繋がないと使うことができないんだ。これが一番のネック。

本当ならあたしも突っ込んでいって無理矢理にも手を繋ぎに行つた方がいい。だけどそれをするには相手が悪すぎる。

最強の魔法少女であるセーナはオールラウンダーだけど、最も得意とするのは接近戦。あのバカでかい剣に斬られたり突かれたりしたら一巻の終わりだし、あのセーナが簡単にあたしを間合いに入らせてくれるはずがない。

下手に突っ込んであたしが戦闘不能になったらこの戦いは負けたも同然だ。だからあたしはみんながセーナの隙を作ってくれるのを待って、そのチャンスをものにしないといけない。

「久しぶりの実戦だけとお……今のわたしは冴え渡っているのよ。わたしは大丈夫だから、みふゆさんも好きに動いていいわ」

「わかりました。行きますよ！」

陽動班の八雲みたまと梓みふゆが不規則な動きでセーナに向かう。

「百恵さん、参ります！」

「今助けますよ、百恵先生！」

そしてそれに続くように常盤ななかと静海このはが駆けだした。

梓みふゆが幻惑の魔法を駆使して分身体を作り出し、その間を縫うように八雲みたまがその手に持つ布を広げてセーナの視界を奪う。常盤ななかたちが充分に近づけたことを確認すると魔法はそのままに邪魔にならない場所まで退避する。

「良いコンビネーションじゃ。じゃが甘いな」

だけど静海このはの薙刀はセーナの持つ大剣に、背後を取った常盤ななかの日本刀はセーナの左腕によって阻まれた。

「みふゆよ、私はお主と何回模擬戦をしていると思っておる。前にも話したであろう？ お主と分身体とは微妙に魔力の大きさが違うのじゃ。慣れてしまえばどれが本物かなぞ目を瞑っていても分かるぞ。

そしてみたま。お主にその技術を仕込んだのが誰か忘れたか。種が割れとる手品など披露するな。大火傷をするぞ。

お主たちもじゃ。なんじゃこの温い斬撃は。特にななか、お主はなぜ首でなく背中を狙った？ 敵を倒すなら急所を狙う。そんなのは基本的なことじゃろうて？」

……滅茶苦茶なこった。普通ならさあ、今の四人のコンビネーションが決まったらお終いなんだよ。

でもさあ、そっちばつか注目しちやあダメだよセーナ。

「ななか、このは！ 離れて！」

大魔法の発動の準備ができたやちよの言葉を受け、ななかもこのはもセーナから離れる。

「お手伝いしますよっどー！」

御園かりんと一緒に大鎌に乗ってセーナの弱点を探っていた遊佐葉月が何本もの雷をセーナ目掛けて落とす。この天候だし、こうして雷を生み出すのはいつも以上に簡単なのかもしれないね。

「ふん、そんな大技を受けるはずが……むっ？」

さらにセーナの周りに霧が立ち込める。

あれは静海このはの魔法。霧を発生させて幻覚を見せる効力がある。これでセーナはどこに雷が落ちてくるかわからないだろうし、大魔法を発動しようとしているやちよの場所さえわからなくなった。完全にセーナの視界が潰れた。

「いつきますよ！」

「アブソリュート・レイン！」

やちよの魔力によって形成された十本の槍が、ななかの伝播の魔法を受けて一気に50本近くまで複製され……それらはそれぞれ全く違う軌道を描きながらセーナに向かう。

遊佐葉月の雷が地面に落ちてスパークして間もないうちに、50本の槍が全方向からセーナが立っていた場所に突き刺さっていき砂埃を上げる。

さあ、これでどうかな？

ここまで攪乱されて幻覚も見せられている状態で、雷と槍の雨を受けたんだ。一撃くらい入ってくれていてもいいんじゃない？

攻撃力に関しては他の魔法少女の追従を許さないセーナだけど、半面防御力に関してははびっくりするほど低い。弱体化の兆しが見え始めていた時ですら、由比鶴乃の攻撃が一発あたって程度でノックダウンしてしまうほどに打たれ弱い、どこまでもアンバランスな魔法少女

なんだ。だから今の攻撃がどれかひとつでも喰らっていてくれれば充分なだけど……。

砂埃が立ち上っていく。地面が抉れ、いくつもの小さなクレーターが作られているけど……肝心のセーナがどこにもいない！

「どっ……。……っ！」

嵐による強風とは違う熱風を感じた方向……砂埃によって灰色に染まる空を見上げてみると、そこに小さい影があった。

晴れていくと……そこにいたのは異形の姿に変化したセーナだった。

炎に包まれて翼のように羽搏<sup>はばた</sup>かせている三倍以上に伸びた両腕、牙のように伸びている犬歯、簪によって尻尾へアーに纏められていた少しウエーブがかかった長い真つ赤な髪の毛は解けて風に揺れ、身長並みに長い赤い尻尾の先には武器である大剣がテラテラとした光沢を放っている。

まるで人型のドラゴンのような姿になった、セーナがあたしたちを見下ろしていた。

「なにを呆けておる。私はウワサと合体しているのじゃぞ。飛ぶことなど、造作もない」

「そうかもしれないけどさあ……こんなにあんまりすぎんだろうが……！」

バケモンみたいな強さをしているとは思っていたけどさ……何も本物のバケモンになることあねえだろうがよ……！」

「見事なものじゃな。じゃがのう、やはり甘いな。」

ひとつアドバイスしておこうか。私に勝ちたいのなら殺すつもりでかかってくることじゃ。殺意のない優しい攻撃で沈められるほど私は弱くはないぞ。

「どれ……少し危機感を抱かせてやろうか」

セーナの右腕……というより右翼が上がっていく。って、これはマズい！

「かりん！ 今すぐ着陸しなさい！ そして全員、息を吸って屈みなさい！」

言われるまでもない！

口の中に空気を目一杯含んだあたしは頭を抱えてうつ伏せに倒れる。

瞬間、鈍い風を切る音が耳に届く前に激しい熱風が通り抜け、あたしの背中を焼いた。熱い……けどこれならまだ耐えられる。

もしも起きた状態で無防備にこの熱風を喰らっていたら全身火傷以前に酸欠で戦闘不能になる。空を飛んでいた御園かりんたちはもつと悲惨な目に遭っていただろうね。

あたしたちを無力化させる一撃を、腕を振るうだけで現実にすることができるあたり、セーナを支配している『神浜最強のウワサ』とやらはセーナとの親和性が強いらしいねえ……。

「も、もう少しでも着陸が遅れていたら死んでいたかもしれない……」

「あつぶなかった……」

「……葉月、どう？ スキャン、できたかしら？」

「……そうだ、大変！ 大変なんだよ！」

セーナの弱点を探っていた遊佐葉月が慌てた様子で立ち上がった。「百恵さん、完全にウワサと一体化しているんだけどさ、あの姿になつてから見る見るうちに力が弱まっているんだよ！ さつきまでは安定していたのに！」

は？ あの姿に変化してから力が弱まっている？ って、いや、ちよつと待て。『神浜最強のウワサ』って確か……。

嫌な感じがしたあたしはセーナの方を見る。

セーナはいまだに上空を飛んでいるけど……翼の炎が小さくなつていやがる！ 三倍以上の長さだったのに今はもう倍ほどしかない！ しかもちよつとずつだけど、炎の勢いが落ちてきている！

『神浜最強のウワサ』の一説には、命の業火という単語があつた。これが本当なら、業火というのはセーナの命。それが燃え尽きるということ……。

「降りてきてよセーナ！ このままじゃおまえ、死んじまうよ！」  
あたしは叫んだ。

畜生め……『マギウス』のやつら！

セーナのことを嫌っていたとは聞いていたけどさ、まさか利用した挙句殺すつもりだったのか。ワルプルギスの夜のせいで嵐になることくらいは知っていただろうからそれすらも利用して！

セーナを倒そうとすれば怪物化したセーナの命が削られ、それを避けるために攻撃をやめれば『マギウス』の計画をあたしたちが止めることができなくなる。どっちに転んだとしても『マギウス』にとって都合がいい結果になるって仕組みだ。

やつら……セーナの命を盾にしてきやがった！

「敵の命を心配している場合か、愚か者」

返ってきたのは突き放すような罵倒の言葉。でもこれはあたしを突き放しているわけじゃない。自分を突き放しているんだ。

こんなことをしている間にも雨に打たれて風に吹かれて見る見るうちにセーナの翼が小さくなっていく！

「モモちゃんやめて！　お願いだから降りてきて！」

「断る。すべては魔法少女のためじゃ。私が犠牲になつたからなんじゃ。これからワルプルギスの夜によって量産される死者がひとり増えるだけじゃろうが」

「なぜここまでする必要があるんですか……魔法少女の解放は御自身の命を使い果たしてでも成し遂げなければならぬことなのですか！」

「そうじゃ。私が頑張れば世界中の魔法少女を救うことができるのじゃぞ。どうせ老い先短い身じゃ。ならば有効に使った方がよからうて」

なんてこと言ってるんだよ……。

セーナ、あんた……なんでそこまでして魔法少女のために戦っているんだよ……！

ウワサと融合すると心の奥底に眠っている本人の欲求が出てくるって説明を受けたけどさ……セーナの場合は魔法少女の救済が自分の命以上に大切なことってことなのかよ!?

「……ガア……」



「え？」

「百恵さん？」

「グアアア……！！ ガア……！！」

「えっ!? モモちゃん!」

「先生！」

突然セーナが頭を抱えて苦しみ始めた……。炎の翼が消えたり出てきたりして安定していない。

「ちよつと待つて……百恵さん、ウワサとの融合が不安定になつてる！」

なんだつて？

「どういうこと？ 百恵の中でなにが起こっているの!？」

「百恵さんの中にあるウワサが暴れているんだよ！」

ウワサが暴れている？ つていうことは、セーナがウワサのルールを破ろうとしているつてこと？

『神浜最強のウワサ』は魔法少女を救済するウワサのはず。だからセーナがやろうとしていることはルールに違反して……ちよつと待つて！ 違うぞ！

セーナは自分を犠牲にして魔法少女を救おうとしている！ でもそれを……魔法少女であるセーナが犠牲になることを、全ての魔法少女を救おうとしているウワサが許すはずがない！ だからウワサが暴れているんだ！

「ウワサがどんどん百恵さんの身体を侵食していつてる……！！ このままじゃ、ウワサが完全に百恵さんに成り替わっちゃう！ もう元の百恵さんに戻らないかもしれないよ！」

ふっざけんなよ！ 何もかもが矛盾していやがって！

セーナの想いも、ウワサのルールも、『マジウス』の思惑も、ワルプルギスの夜も、全部が全部、セーナを苦しめる要因になって複雑に絡まっついていやがる！

「アアアアアア—— ツツツ!!」

苦悶に歪んだ表情で怪獣のような叫び声を上げるセーナ。だけどそれは、あたしには悲鳴に聞こえた。

一刻も早く、セーナからウワサを引き剥がさないと取り返しのないことになる！

「もう待てねえ。御園かりん、あたしを連れていけ」  
「え？」

「おまえじゃねーとセーナの所にいけねーんだ。あたしの魔法でセーナとウワサを引き剥がす決定打を見つける。隙だらけになって苦しんでいる今がチャンスなんだ。だから早く。時間がねーんだ。やちよもいいよな？」

「……そうね。かりん、帆奈を連れて行きなさい」  
「待ってください！」

息を切らしたまなかが割り込んできた。

「まなかも行きます。まなかの魔法は『伝播』。帆奈さんが魔法を発動したタイミングで魔法を使えば、手を繋いでいない皆さんも一緒に百恵さんの深層世界に行くことができるかもしれません」  
「……かも？」

「はい。確証はありません。でも多分、できると思います！ だからお願いします！ 連れて行ってください！」

苦しんでいて隙だらけとはいえ、それでも暴れているセーナにあたしを乗せて接近するのは、ベテラン魔法少女の御園かりんにだって至難の業だろうさ。そこにまなかまで追加されちゃあ成功率が落ちる。しかもまなかの提案は確実なものじゃない。成功するかどうかも分からないし、もし失敗したら足を引っ張るだけ。

ただリターンは大きい。

このままあたしが魔法を発動させたところでセーナの深層世界に行けるのはあたしと御園かりんだけだ。でももしここにいる全員で行くことができたらウワサを引き剥がせる確率はグッと上がる。

まなかを連れて行くかどうかは、ハイリスクハイリターンを取るか、ローリスクローリターンを取るかの選択になる。この一刻も争う状況で選択すべきなのは、成功する確率が最も高い選択肢。

だからあたしは……。

「……御園かりん、いけるか？」

「……うん！ 大丈夫、ふたりまでならいけるの！」

「よし、それじゃあ行くか、まなか！」

まなかを連れて行くことを選んだ。

「いいんですか？」

「いーんだよ、御園かりんが問題ねーって言うんだから。それにさ、言つたら？ ある程度はあたしがフォローするからさ、好き勝手にやりたい放題しなよってさ。まなか、あたしはあんたを守る。そして役目を果たす。安心しな、あたしも御園かりんもつえーんだ。だからまなかはみんなを連れて行ってくれよ」

「……本当にできるかわからないんですよ？」

「絶対にできるのー！」

「御園さん？」

「前に先生が言っていたの！ 魔法少女は『願い』を力に変えるって！

だから……先生を助けたいって強く願えば、絶対にできるのー！」

こいつ……良いこと言うじゃんか。さすがはセーナの唯一の弟子だ。

「決まったようね」

「ああ。行こうぜ、まなか。かりん」

「はいー！」

「うんー！」

かりんの大鎌に跨ったあたしたちはセーナ目掛けてまっすぐに飛ぶ。

暴れまくっているせいで熱風が不規則に吹きすすさんでいるけど、大鎌をしっかりと握りしめてコントロールしているかりんのおかげで最短距離で向かうことができている。

「ガア……ア？」

紫色の眼光があたしたちを捉えた。お願いだからさ、今だけは大人しくしていてくれよ！

あたしは必死に手を伸ばす。お願いだ、掴んでくれよ。あたしの……あたしたちの手を、掴んでくれ！ 掴んでよ！

ドラゴンのような赤い鱗と鋭い爪が生えたセーナの右手があたし

たちを引き裂こうと振り下ろされる……その瞬間、あたしはその動きが恐ろしくゆっくりと感じた。

見える。この腕がどこに向かっているのか。

わかる。どれくらいの力で振り下ろされたのか。

だから……！

あたしの右手がセーナの振り下ろされた右手の平を掴んだ。

相つ変わらずすげー力だったけどさ、9月に貰ったセーナの魔法のおかげでさ、ちったあ力強くなっていたんだよあたしは！ だからそんな暴れるだけの適当に力が込められた攻撃なんて相殺できんだよ！

やっとだ……。やっと、掴めた。

「つうーかあーまあーえーたあああーっ！ やるぞ、まなかあああーっ！」

「はいー！」

セーナとまなかの手をしっかりと握りしめたあたしは、相野みとから受け取った『心を繋ぐ』魔法を発動させた。

視界が暗転し、気が付いたら何もない空間にあたしたちはいた。

「ここは……」

「どうやら、成功したみたいですね」

他のみんなも来ている。

ということとは常盤ななかの言った通り成功したんだ。全員でセーナの深層世界に来ることに。

「なんじゃ、こんなところにみんなして」

「！」

驚いて声がした方を見ると、そこにはセーナがいた。ウワサに取り憑かれていない状態の、いつものセーナが。

「これは相野みとの魔法じゃな。お主の仕業かの？」

「ああ、そうだよ」

「全く……手を繋がれるような隙を晒すとは、本当に老いたもんじやのう」

そんなことを言ってカラカラと笑うセーナは、本当にあたしたちが

知っているセーナだった。

「さて……まあ、こうしてきた以上、ただで帰ってもらおうわけにはいかんよな」

「当たり前じゃないの」

「何を知りたいのかの？」

「全部よ。あなたの全てを、本当の気持ちを知りたいわ百恵」

「そうか……よかろう」

やちよの答えを聞いて薄く笑ったセーナ。その笑顔は今までの諦めたようなものじゃなくて、少し嬉しそうなものだった。

「モモちゃん、いいの？」

「……ああ。もうよい。折角みんな、私の為にここまで来てくれたんじゃないからの。ずっと黙っていてくれてありがとうなのじゃ、みたま」

「……いいのよ、そんなこと」

「それじゃあ、暫くお付き合い願おうか。……私の過去への旅にな」

「ここであたしたちは知ることになる。」

セーナの過去を。

魔法少女になった理由を。

そして……今のセーナが抱えている想いを。

H u n d r e d   R e c o l l e c t i o n s (前  
篇)

そうじゃのう。

まあ、せつかく来てくれたんじやし、本当に全部を見て、聞いて、感じてもらうとするかの。

これはとある姉妹の物語じゃ。

一歳しか離れていない普通の姉妹なのじゃがの、それぞれ別の場所で育てられておったんじやよ。

姉は都会に住む母親のもとで、妹は田舎に住む母方の祖父母のもとで育てられていたのじゃ。

ああ、そうせかすでない。

そうじゃな。

もうこの時点で、普通の姉妹ではないよな……。

じゃがのう、その姉妹にとってはそれが普通じゃったんじやよ。

話を戻すでしょう。

その姉妹は定期的に会っていたのじゃ。

それは決まって、母親が姉を連れて妹が住んでいる田舎に来て、姉を置いてどこかに出かけ、三日ほど経ってから姉を迎えに来て帰るの繰り返しじゃった。

「空気がおいしいし広いね、ももえー!」

姉は都会では味わえない溢れる自然の中を、妹と一緒に体を動かして遊ぶのが好きじゃった。

「うにゃあ! なんじやその動きは! おかしいぞ、つくも! 仕返しじゃ!」

妹は田舎では入手が難しい、姉が持ってきたゲームを姉と一緒に遊ぶのが好きじゃった。

互いの、普段の生活ではなかなかできない遊びをするのが楽しくて、そして、互いに誇れるものを持っていて、それを自慢して褒め合うことが楽しくてのう。

姉は毎回違うゲームを持ってきたし、妹も姉を毎回違う場所に連れて行った。

仲良しじゃったんじゃ。

じゃがのう……その関係は少しずつ崩れ始めた。

姉が小学一年生になったころ、外で遊んでいた時に、姉が腕を木の枝にぶつけて怪我をしたのじゃ。

妹は慌てて駆け寄った。そして、怪我をしていると思った姉の腕を見ようとした。じゃがの、姉は頑なに腕を見せようとはしなかったのじゃ。

「大丈夫だって。ね？　大丈夫だから……」

笑顔を作って姉は妹に言い聞かせた。

痛そうに腕を抑えているからどう見ても大丈夫じゃないのに、姉は腕を見せてくれない。こんな風に拒絶されたのは妹にとって初めての経験じゃった。

でも妹はすぐにそれを流した。

妹にとつての姉の異変はそれだけじゃなかった。

前までは一緒にお風呂に入っていたのに、それすらも拒否してきたのじゃ。

小学生にもなつて妹と入るのが恥ずかしいと、姉は拒絶した。

妹はそれも不思議に思った。

でも深くは聞かなかつた。

妹はとても聡明な子じゃった。

じゃからのう、今までの生活の中でおかしな点がいくつもあることに気が付きはじめていたのじゃ。

会ったことがない父親。

母親と会うことはできても、父親に会ったことは一回もない。

姉たちが帰った後に祖父母に訊いてみても、知らない、会ったことがないと言う。

自分に構ってくれたことが全くない母親。

今まではずっと妹は姉とばかり遊んでいたから気が付かなかつたが、時が経つにつれ母親が自分を全く相手にしていないことに気が付

いた。自分から母親に話しかけることはあっても、母親から話しかけられることはほとんどなかったのじゃ。

そしてなぜか離れ離れに暮らす姉。

近所に住む兄弟がいる友達に、自分たちが変わっているとと言われることがあった。

妹はその時はなにが変わっていると言われたのかわからなかった。だって自分にとって、それが普通じゃったのじゃから。

じゃが時を重ねるにつれ、だんだんとその意味が分かってきた。当然じゃよな。兄弟姉妹、離れ離れで暮らす家庭なんて滅多にないのじゃから。

それでも妹は大して不幸に思ったことはなかった。

大好きな姉と会えなくて寂しくはあっても、祖父母は優しくしてくれるし、他にもいっぱい友達がいる。

母親が冷たかったとしても、その母親とまともに話したことがないせいで妹の中では『姉を連れてきてくれる人』程度の存在になり果ててしまっていた。

じゃからの、母親に構ってもらえなくても妹は全然気にしなかったのじゃ。祖父母と友達と姉さえいてくれればそれで良かった。

じゃから妹は今のこの関係が壊れるのが怖くて、姉に嫌われたくないくて、あえて踏み込まないで知らん顔をしていたのじゃ。

さらに一年が経って、妹も小学生になった。

そしてこの時から姉の妹に対する振る舞いに変化が訪れる。

妹は急にゲームで姉に勝つことができなくなった。

姉が上手すぎたせいで手も足も出なくなってしまうたのじゃ。

何度も何度も、妹は姉に負けた。じゃがそれでも、妹はやめようとしなかった。

楽しかったのじゃ。大好きな姉が遊んでくれているのじゃから。

負けて悔しく感じてても、少し腹が立っても、それらは姉が自分に構ってくれる嬉しさの前には及ばない。

妹にとって、姉と遊ぶ時間が楽しくて幸せなことじゃった。勝ち負けなんて二の次じゃった。



じゃがのう、妹は負けず嫌いでもあった。じゃから楽しみなながらも勝つ手段を模索していたんじゃ。

姉に勝てるように考えて考えて、ようやく姉に一矢報いることができた時は飛び上がって喜んだ。それで姉に褒めてほしくて甘えた。

褒められながら頭を撫でてもらうのが気持ちよくて、目を細めていた妹は、その時の姉がどんな表情をしていたのかをよく見てはいなかった。

次に姉は、外で遊ぼうとすることがなくなった。

少し前まではあんなに森の中をはしやぎまわっていたのに、行きたくないと、そんなことよりもゲームをしようとして渋りだしたのじゃ。

妹は疑問符を浮かべながらも、すんなりと外で遊ぶのを諦めた。

無理に付き合ってもらわなければならないし、姉と遊ぶのなら別に外である必要もなかった。

新しく見つけた洞窟を姉と探索できないのは残念であったが、残念であるだけ。姉の気が向いた時にまた誘えばいいかと切り替えて、姉と一緒にまたゲームをして遊んだ。

結局、姉と外で体を動かして遊ぶことは今後一切なかった。

そんな日々が続いて夏休みに入った時、勉強をしようと姉が切り出した。夏休みの宿題を手伝うと言ってきたのじゃ。

妹は勉強することを純粹に楽しんでおったし、姉に構ってもらえて嬉しかったから笑顔でふたつ返事をした。

重ねて言うが、妹は聡明な子じゃった。

それは勉強にも表れ、楽しんで進んで勉強をしていた妹はテストで悪い点を取ることになれば、特別分かららないと思うようなところもなかった。

じゃから姉に「わからないところはある？」と聞かれても正直困ってしまった。だってほとんどなかったのじゃから。

見る見るうちに宿題がなくなっていくって、結局ほとんど姉に訊かずに終わらせてしまった。

なんとなく悪い気がした妹は、まだ学校で習っていないところを姉に教えてもらうことにした。

姉はそれをすぐに受けてくれて、いろんなことを妹に教えていた。

妹は姉に勉強を教えてもらうのが楽しくて、知らなかったことを理解したときに褒めてくれるのが嬉しくて、どんだんのめり込んでしまうほど勉強することが好きになって……とうとう姉が勉強しているところまで追いついてしまった。

姉もしつかり予習をするタイプのいわゆる優等生じゃったから、学校で習っている範囲よりも少しフライングして自習をしていた。じやが妹は、この夏休みの間だけでそこまで知識を吸収してしまったのじゃ。

もう自分が教えられるところがなくて、姉は焦った。それでも姉は、頑張つて妹に教えようとした。

休憩と称して妹を休ませている間になんとか教科書を読んで、つかえながらもなんとか妹に正確に教えることができた。

姉も姉で凄い人じゃったんじゃよ。ただそれ以上に、妹が凄すぎた。

そんな姉を見て、今度は妹が焦った。

悪いことをしてしまったと思つた。夢中になってしまつて、姉できえも知らないところまで来てしまつたばかりに姉を困らせてしまったことに罪悪感を抱いた妹は、もう勉強はやめようと切り出した。

宿題はしつかりと全部終わったし、お互いに予習……妹に至っては姉と同じ二年生の中盤までの勉強をしてしまった。充分だから一緒に遊ぼうと妹は姉を誘つた。

じやがのう、姉は首を縦に振つてはくれなかつた。

教科書のページから目を離さぬまま、ちゃぶ台に齧りついて、勉強をすると頑なに譲らなかつた。

「大丈夫だよ、ももえ。私、お姉ちゃんだもん。だから……大丈夫」

どこか追い詰められている様子の姉を見て、温度の低い姉の言葉を聞いて、妹は初めて姉のことを怖いと思つた。

姉の「大丈夫」はどこか信用できなかつた。

前も腕を怪我しているのにそう言っただけで譲らなかつたし、今だって勉強が大変なのに譲ってくれない。もういいよと言っただけでも聞いてくれない。

何かに取り憑かれたように教科書に目を落とす姉を見て、だんだんと姉が自分の元から離れていくような感覚を抱き始めた妹は、なんとかしようと考えた。

勉強をするのは好きじゃったが、それ以上に大好きな姉を苦しめるのは本望ではない。そこまですて勉強をしたいというわけではなかつたのじゃ。

その結果、導き出された答えは……演技をすることじゃった。

本当は分かつているのに分からないふりをした。

自分が進まなければ、姉も必死で勉強する必要はない。今やっているのだから本当なら一年後に自分が習う場所。躓いたとしてもなんらおかしくはない。

ただ多少のバラツキは出そう。

国語と算数でちよつとずつわからなくなるタイミングをずらして、漢字も難しい字は少し間違えて書いて、似ている字はテレコに書いて、複雑な計算のミスもちよいちよいして……。

妹は自然に見えるようにわざと間違え始めた。わからないと言つて質問するようになった。

最初のうちはのう、良かったんじゃ。

じゃがのう……しばらく経つと、姉は能面のような顔になった。それで、もう勉強しないと力なく立ち上がっていつてしまった。妹は茫然とそんな姉を見るしかなかった。

知らない人には自然に見えたであろう妹の演技。じゃが、姉は妹のことをよく知っていた。じゃがから気が付いてしまったのじゃ。

問題の間違え方がどこか作為的で、わからないと言つたところは決まってる姉が時間をかけて勉強をしていたところばかりだということに。

そう。妹はのう、一周回って嘘を吐くのが苦手な子じゃったのじゃ。自分では気が付いていないがのう。

崩壊の足音が迫ってきた。

ここから先、姉は妹と勉強しようとしなくなった。

その代わりに、姉はゲームすることが圧倒的に多くなった。それもいくつも違うゲームを持ち込んで。

それらは全て対戦系で、姉妹は熱中した。でもそのほとんどが姉が勝ち、妹が慣れてくるタイムミングで、姉は違うゲームに変えてくる。でも妹は全く嫌な顔をしないで受け入れた。

……姉がわざと、有利なゲームを持ってきていることには気が付いてはいた。そしてその有利がなくなつた途端に変えてくるもの。じゃがそれでもいいと、構わないと妹は思っていたのじゃ。

夏休み以降、明らかに自分に対する姉の態度が変わつたことに気が付いていた。そしてその原因が自分にあることもわかつていた。

じゃからのう、これは妹なりの償いでもあつたのじゃ。それでまた元の姉に戻ってくれるのならいいと、大好きな姉と仲良くできるのならそれでいいと、妹はそんな姉を受け入れた。

そして……二年が経過した。

姉は相変わらず勉強を教えてくれない。

理科や社会と三年生になつて勉強する科目が増えたものの、それでも妹は勉強することは得意じゃつた。

じゃから姉に教えを請わずとも高得点は取れたし、特に躓くようなこともなかった。

じゃがのう、それはそれじゃつた。

妹は姉に勉強を教えてもらいたかつたのじゃ。姉に教えてもらおう勉強が楽しくつて好きじゃつたのじゃ。

じゃがそれでまた自分が姉を苦しませてしまうと思うと言ひ出すわけにはいかず、姉が提案してくれるのを待った。夏休みに入って、宿題がたくさんあるというさりげないアピールを試みたが、姉は妹の勉強を見ることはなかった。

それどころか、姉との距離はさらに広がつていく一方じゃつた。

姉が明らかに、妹を下に見るようになったのじゃ。

妹の懐事情は寂しいものじゃつた。

といつても、妹は特にほしいものはなかったし、あつたとしても田舎では入手することができない。祖父母の家にはパソコンなんてものはなかったからインターネットで購入することすらできなかったのじゃ。

じゃからのう、妹は流行というものを知らなかったのじゃ。

テレビでやっていても、いまいちピンと来ていなかった。ファッション誌なんてものも買わなかったからの。

姉はそれを妹に見せてくるようになったのじゃ。

久しぶりに会った姉が華やかな格好をしていることに妹は驚いた。綺麗だと思つたし、妹だつて女の子じゃ。かわいくおしゃれな服への憧れは人並みにある。

じゃから、小学生とはいえまさにイマドキな感じな服を着た姉は眩しく見えた。姉は容姿も優れていたし、センスも良かったから服だつてばつちり着こなしていて、なおさら輝いて見えた。

「ちよつと高かつたけどこのページのものは抑えられたのよ。都会じゃこういう服が流行つているんだ。ももえにも教えてあげる」

ファッション誌を片手に笑顔で言う姉のこの言葉を聞いて、妹は悲しくなつた。

頭が良かったばかりに、このセリフの裏側にある姉の心の声が聞こえてしまったのじゃ。

田舎に住んでいるお前には無理だろうけど、自分にはできる。都会に住んでいるから、お金があるから、流行にも詳しいから。

明らかに上から目線で自分を下に見ている言葉で翻訳された。

輝いている姉から発せられる自分に対する黒い感情のこもつた言葉を受けた妹は顔を青くした。

ついに、この日が来てしまったのじゃと。

薄々わかつてはいたんじゃ。

いつかこの日が来ると、もう自分と姉の関係が元に戻ることができないと、戻れないところまで来てしまったということを妹はわかつていた。

でも認めたくなくて、なんとかして姉の気を引こうとした。

言葉にも気を付けていたし、なるべく不快にさせないようにちよつと気が利くことをしてみたりと細かい配慮もしてきたんじや。聡明で臆病な妹にはそれができた。

でも……それらが実ることはなかった。

ちよつと前までならともかく、あんな見た目重視な格好をしていたらもう外で遊ぶことはできない。

いつか姉と仲直りできたときに一緒に見たいと思っていた、山の中にあるちよつとした絶景スポットに連れて行くことは叶わない。

笑顔を作つていても全然笑つていない姉のその目を見て、妹は全てを察したのじや。

「姉は自分のことを嫌いになったのじや、と。」

「本当か!? 楽しみじやのう! いっぱい教えてほしいのじや!」

じやがのう、妹は諦めなかった。

顔を青くしたのは一瞬だけで、すぐにいつもの笑顔を作った。

これは妹の最後の抵抗じやった。

姉の自分に対する感情に気が付いていないふりをしていれば、もしかしたら姉の方から歩み寄ってくれる日が来るんじやないかと考えたのじや。その日が来るまで我慢すればいいと思つたのじや。

それほどまでに、妹は姉のことが大好きじやった。嫌いになることができなかったのじや。

「そ、そう? じゃあ教えてあげるね……」

思つていた反応と違つたんじやろうな。

姉はあからさまに顔を引き攣らせた。

じやが姉も自分が言い出した手前、ちゃんと妹に流行やその傾向を教えたのじや。ちよいちよい嫌みを言つてはくるが、本当のことを話してくれていることは妹にはしつかりと伝わつた。

流行に疎いと言つても女の子なのじや。どんな格好が良くてどんな格好がダメなのかくらいは、田舎暮らしの妹にだつて理解できる。

そしてそれが、妹にとつての希望になつたのじや。

どんな形であれまだ姉は自分に構つてくれている、嫌いになられても見捨てられたわけじやないと妹は思つた。

どうして姉が自分のことを嫌いになったのかはわからない。じゃがこうして姉に合わせていれば、いつか、きつと……。そんな思いを胸に妹は待ち続けた。

そして……三年が経過した。

妹は小学六年生に、姉は中学生になった。

妹の切なる思いは成就されようとしていた。

徐々に徐々にじゃが、姉と妹との距離が縮んできたのじゃ。

まだぎこちないものではあったが、姉が妹に嫌みを言うことはほとんどなくなつたし、昔のような優しい笑顔を見せてくれた。

ああ、もう少しで、もう少し耐えれば大好きな姉が戻ってきてくれると、妹は喜んだ。

じゃがのう、現実はどこまでもその姉妹に厳しかった。

「君がももえだね」

妹が小学校を卒業した日、家に続く一本道に知らない男がいた。

その隣には姉が立っていて、男はその姉の背中に手を回している。

姉の表情は暗く、俯かせて拳を強く握っていた。

「なんじゃお主は。何者じゃ？」

「はっはは、そうだね知るはずがないね。私は君たちの父親さ」

「なんじゃと？」

笑いながら男は自分たちの父親であることを明かした。

今まで一回も会ったことがなかった父親のいきなりすぎる訪問に、妹は呆ける。姉が否定しないあたり、この男が自分たちの父親であることは間違いないのじゃろう。

じゃがなぜこのタイミングで自分の前に姿を現したのか、そしてなぜ姉があんな表情をしているのかが分からずに妹は父親を警戒する。

「ももえ。私は君を迎えに来たんだよ。もうここにいる必要はない。

私と共に来よう」

「寝言は寝て言え」

妹は吐き捨てた。

あんな胡散臭い笑顔をしながら一体何を言っているんだと、妹は父親を拒絶する。

「冷たいなあ、実の父親なのに」

「実の子を今まで放置する父親の方が、数倍冷たいと思うのじゃがの？」

「はっはっはー。 やっぱり君はいい！ なにもしていないのにここまです育ってくれるとは、さすがは『ハンドレッド』だ！」

「……なに？」

男の言葉の意味が分からずに妹は眉を顰めたが、妹のやることは変わらない。

とにかく自分は男に付いて行く気はないということ伝えるのみ。最悪姉を連れて逃げてしまえばいい。

何年も走り回ってきたここら一帯の山と森は妹の庭じやった。隠れるところも知っておるし、体力だつて自信がある。追いかけてられてもうまく巻きながら少し離れたところにある交番まで行けばいい。

「ますます連れて行きたくなつたよ。 だから来い。 私の所に戻ってこい」

「断る。 行こう、つくも」

姉を連れて家に帰ろうと歩き出した途端、姉の背中にあつて隠れていた男の右手が明かされる。そこには黒光りする物体が握られていた。

それはテレビドラマで見たことがある。

持てばどんな人間であろうとも最強になれる武器……拳銃じゃつた。

「なっ!? つくもー!」

「動くなよ。 動いたら撃つ。 お姉ちゃんの命、惜しいだろう? だつたらわかつてくれるね、ももえ」

「っ。 わかった」

姉を人質に取られた妹はなにもできなくなつてしまった。

変に動くことができなくなつた妹は男の言うことに従つて、手錠をはめられて……運転席に女性が座っている車の中に乗り込んだ。

「君は本当にいい目をしているよ。 隙を見て、私を殺すつもりだつたんだろう? 君のポケットの中にある家の鍵を使つてね」



「……そうじゃよ」

「素直でよろしい。そして素晴らしい。私を殺すことは正解だよ。なにせ私は、殺されても仕方のないことをやっているような極悪人なんだからね」

同じように手錠をはめた姉を助手席に乗せた男は、嫌な笑みを浮かべながら妹の隣に座って車を発進させた。

妹はドライブの最中に男にいくつか質問した。

自分たちをどうするのか、どうして拳銃を持っているのか、正体はなんなのか、『ハンドレッド』とはどういう意味なのか、大まかにいえばこの四つを聞いた。

じゃが男は到着すればわかるの一点張り。なにを聞いてもダメじゃと判断した妹は黙って目的地に到着するのを待つことにした。

車はやがて港に到着し、そこから男が所有しているクルーザーに乗り込んで海に出る。

手錠をはめられて、ポケットの中を調べられて荷物を全部没収されて、小さな部屋に入れられた姉妹はようやくふたりきりになることができた。

「つくも、平気か?」

「……………」

「大丈夫じゃ、この船の操作方法はさつき見たから覚えた。じゃから脱出することはできる。隙を見て逃げよう」

「……………」

「つくも?」

安心させようと思って話しかけた妹であったが、姉からは返事がない。それどころか、なにか怖いものを見るような目を向けてきた。

妹はなぜそんな目を向けられているのか分からず困惑した。

そんな微妙な雰囲気の中、クルーザーが止まる。

到着したのはどこにあるかもわからない無人島じゃった。

自然の中をしばらく歩くと、そこにあったのはコンクリートでできたなにかの施設。この男の根城のようじゃった。

男は姉妹に目隠しをしてから姉妹を連れて建物に入る。そして十

分ほど階段を下つたり上つたりあちこちを歩いたところで、目隠しを外した。

「さあ、着いたよ。君たちが本来帰るべき場所だ。しばらくは自由にしていたまえ、悪いようにはしない」

そう言つて男が部屋に入ると、今まで運転手をしていたスーツ姿の女性が姉妹に向き合う。

「おふたりのお世話はこのクズハが承ります。つくも様、ももえ様、どうぞ」

クズハと名乗つた女性は姉妹をそれぞれ別の部屋に案内し、そして立ち去つた。

妹はすぐに部屋を調べる。なにか武器として使えそうなものはないか、いざというときに役に立ちそうなものはないかを探す。わかっていたことじゃつたが、そんなものはない。

仕方ないと思つた妹は、この施設を調べることにした。逃げ道を確認するのが一番の理由じゃつたが、できるものなら脱走してしまおうと画策したのじゃ。

手錠も外された今、妹を縛るものは何もない。

妹は姉のいる向かいの部屋に入った。

「つくも、行こう。久しぶりに探検でもしよう」

不安にさせないように笑顔を作つて妹は軽く誘う。じゃが、姉は首を横に振つた。

「いいわよ別に。どうせ、逃げられないわ」

「そう言うでない。確かに今は無理じやろうが、いつかは出られるチャンスが来る。その時のために、今のこの時間を有効に使おう。じゃから」

「無駄だつて言ってるのよー！」

「つくも……」

姉は妹が差し伸べた手を叩いて拒絶した。

姉に怒鳴られるのは初めてじゃつたから、妹は少しびっくりした。そして目尻に熱いものが込み上げてきた……が、妹はそれをこらえた。

「わかった。無理に誘ってすまんかったのう。……心配するな。絶対に逃げよう、一緒にの」

妹はそう言つて部屋を出た。

きつと姉は怖がつて心細くなっているだけじゃ。じゃから自分が頑張つて逃げる方法を考えて、そして見つけければ、きつと姉は安心してくれる。頑張ろうと心に決めて、妹はひとりで施設内を歩き回つた。

ほとんどの部屋には鍵がかかっていたし、突き当りにある扉も開かない。どこを探しても窓がないからどうすれば外に出られるかもわからない。

妹は山や森で遭難しないように一定の場所まで行つたら元の場所まで戻るように動く癖がついていた。じゃから道に迷うことなく、少しずつ施設内を調べて行つた。

「おや、ももえ様。どうされましたか?」

やがて、厨房と思わしき場所まで来ると、そこには料理をしているクズハがいた。

これはいい場所を見つけたと思った。

ここには食料も刃物もある。脱出の際にはここで物資を調達すればいい。そんなことを考えながら、妹はクズハと話をすることにした。

「私たちの父親は何者なのじゃ?」

「お答えできません」

「ふむ。それなら私たちを連れてきた理由は?」

「お答えできません」

ああ、これはダメじゃ。すぐに妹は察した。

上手く行けばこの人を味方に落とし込めることができかもしれないと考えておつた妹じゃつたが、今の事務的なやり取りで不可能であると判断した。なにせこの女性の目には光がなかったのじゃから。収穫はこの建物の構造と、厨房がある場所、そして自分たちが入つて来た建物の入り口の場所を把握したくらいじゃつた。

目隠しをされて適当に歩かされたが、妹は自分がどの方向に何歩進

んだのか、何回階段を上り下りしたのかを覚えていたから、そこから逆算してこの迷路のような施設の出口を突き止めた。

じゃが鍵はかかっていたし、仮に外に出られたとしても天気が最悪なら脱出しても無事に帰れるかは怪しい。船の操縦の仕方は見て覚えることができても、どの方向に船を進めれば帰れるのかまではわからない。

「さて、どうしたものかの」

ベッドに寝転んで思索していると……。

「やあ、キミが星奈ももえだね」

「うにゃあっ!？」

得体のしれない生物が枕元にいることに気が付いた妹は飛び上がって驚いた。

気配もなく妹に近づいて無機質な赤い目を向けるその生き物はこう続けた。

「ボクはキュウベえ。星奈ももえ、ボクと契約して魔法少女になつてよー!」

# Hundred Recollections (一篇)

「ボクはキュウベえ。星奈ももえ、ボクと契約して魔法少女になってよー!」

「……お主は一体何を言っておるのじゃ?」

妹は困惑した。

自分の知識外の生物がいきなり現れて、言葉を発して、しかも魔法少女なるものにならないかと誘っているのじゃからの。

とりあえず話を聞いてみることにした。

なにも知らないまま首を縦に振るわけにはいかないが、もしかしたらその魔法少女とやらの力を使えば、ここから逃げ出すことができるのかもしれないのじゃから。

その生物……キュウベえの話を聞いているうちに、妹は魔法少女になる気になっていた。

魔女という怪物がどれほどのものかは知らないけど、少なくとも弱くはないのじゃろう。そして魔法少女はその魔女と戦う存在。ならばそれなりに強い力を得るということ。

その力があれば、鍵がかかっている扉も力尽くで破って姉を連れて逃げることもできる。

それならば迷うことはない。妹は魔法少女になろうとした。

「魔法少女になってくれるなら、なんでもひとつだけ願いを叶えてあげよう」

じゃが、この言葉を聞いて妹は冷や水を浴びせられた気分になった。

「なんでも願いを叶えるじゃと?」

「そうだよ、なんでもさ。ここから逃げることも、キミたち姉妹の仲を戻すことだってできるよ」

その言葉で確定した。

「そうか。それなら断る。私は魔法少女にはならん」

なんでも願いが叶う。

その言葉を耳にした途端に、妹は魔法少女になることをやめた。そんなうまい話があつてたまるかと憤りすら覚えた。

自分たち姉妹の関係まで知っているみたいで気味が悪いし、魔法を使つて仲直りするなんて考えただけでも鳥肌が立った。しかもどんな形で願いが叶うのかもわからない。

仲直りしたいと願つて、もし姉が自分の言うことを聞くだけのイエスマンになったらどうする？ そんなことを妹は望んでいない。

仮に自分の思うように仲直りができたとして、また仲が悪くなつたらどうする？ もう奇跡は起こせない。

魔法なんてものを使つて仲直りしたことが姉にバレたらどうする？ 想像もしたくないわ。

なんでも願いが叶うというキュウベエの言葉があまりにも軽々しく、そして無責任に感じた妹は魔法少女になることを拒絶した。

「素晴らしい。素晴らしいよ、ももえ」

「！」

部屋の扉が開いていて、そこで拍手をしている男がいた。

男はキュウベエを驚掴みにする。

「まったく、勝手なことをされたら困るんだよ君イ。ももえが賢かったから良かったけど、もし今契約しちやったらどうするつもりだったんだい？ うん？」

「それはボクの知ったことじゃないよ」

「そんなことを言つてもいいのかい？ 私たちは互いに良い関係を築けているはずだよ。これからもそれを維持したいなら、君たちにも協力してもらわないと困るんだよ。わかってくれないかな？」

「……そうだね、わかつたよ。ボクたちとしても、キミたちの活動には期待しているからね」

「そう言つてもらおうと助かるよ」

男はそう言つてキュウベエを解放すると、キュウベエはどこかに行ってしまった。

「なんなのじゃお主らは……何を企んでおる？」

「それは今の君が知ることじゃないよ。もう少しで面白いものが見られるから、その時になったら呼びに来よう。楽しみに待っていたまえよ。ああ、そうだ。ここを探検するのは楽しかったかね？」

「……それなりにの」

「そうかい。それなら良かったよ」

それから妹は男の言うことを聞いておとなしく待つことにした。

一応考えてはいたが、やっぱり監視カメラがどこかしらに仕掛けられていたらしく、男に自分の行動が筒抜けじゃった。

それもどうにかしないとなあと、脱走に向けてやるべきことを考えながら待つこと半日が経過して、ようやく男がやってきた。

妹は男の指示に従って部屋を出て、階段を下った先にある部屋に向かう……が。

少し近づいたところで立ち止まった。嫌な気がしたのじゃ。

山の中で熊がいるところに近づいてしまった時と同じような、何か恐ろしいものがこの先の部屋にいるような、そんな気配を感じ取ったのじゃ。

これ以上進んだら命に関わる。じゃから引き返せと本能が告げていた。

「さすがだ、素晴らしいね。だが大丈夫だよ」

男はそんな妹を見て笑いながら、強引に背中を押して部屋の中に入る。

扉を開けた先には、この世のものとは思えない景色が広がっていて、その中心には異形の存在が鎮座していた。

それは置物のような生物じゃった。

動いていないように見えるが、僅かではあるが動いている。その動きは機械的なものではなく、生き物のように複雑なものじゃったから、辛うじてアレが何かの生物であることが分かった。動いていなかったらきつと、だいぶ大きな彫刻じゃと思っていたことじゃろう。

家の隅に置かれていても特段気にしないような、まるで量産品のような、ありふれたもの過ぎて逆に目に入らないような、そんな地味ながらも禍々しい気を放っている存在がいた。

「あれは……魔女？」

「正解だよ」

こんな生物を妹は知らない。だけど、知らないからこそ分かった。あれがキュウベえが言っていた、世の中に災いを齎す魔女という怪物なのじゃと。

確かに直接何かされているわけではないのに気分が悪くなるというか、本能的に受け入れられないなにかを放っている。

間違いない、あれは良くない存在なのじゃろうということはひしひしと肌で感じた。

「つくも、おいで」

「！…つくも？」

一体いつからいたのか、自分たちの後ろに立っていた姉が男に呼ばれて前に出た。

その顔は表情が抜けている。目の周りが真っ赤に腫れていることからきつとさつきまでずっと泣いていたのじゃろう。そして、この世の全てを諦めてしまっているような虚無にも等しい顔になっていた。

妹にはその顔に心当たりがあった。

目に力がなくて、感情が抜け落ちてしまったかのようなこの表情は、厨房にいたクズハと全く同じものじゃった。

「貴様……つくもになにをした？」

「私は本当のことを教えてあげただけさ」

「本当のことじゃと？」

「そうさ。まあ、それはともかくだ。つくも、妹に君の力を見せてやるがいい。そして、アレを倒してこい。アレはもう用済みだ」

「……はい」

男に促された姉が一瞬だけ閃光を放つと、浮世離れた姿に変身していた。

ここに来るまでのおしゃれ重視の服はどこへやら。とても動きやすそうな黒い和服の戦闘着に黒い鎧を装着し、両拳には金色に輝く鉤爪が伸びている。

「まさか……契約したのか、魔法少女に」



「ああそうだ。つくもはしっかりと願いを叶えて魔法少女になった。よく見ておくといい、君の姉の晴れ舞台をな。つくも、行け」

「……はい」

低い姉の声が耳に入った途端、妹のすぐ隣に強い風が吹きすさぶ。隣を見るとそこには姉の姿はもうなく、巨大な魔法の周りに人影が縦横無尽に動き回っているのが見えた。

悲鳴のような声にならない声はおそらく魔法の声じやろう。魔法の体が光るたびに、それはこの趣味の悪い空間内に響き渡る。姉が攻撃しているのじゃ。魔法の体をあの鉤爪で引き裂いて。

「どうだいももえ。凄いだらう君の姉は。あの魔法は結構な大物のはずなのにまるで手も足も出ていない。如何せん攻撃力が足りないせいで時間はかかりそうだが、無事に処理してくれるだろうさ」

「……色々聞きたいことがある」

「ああ、いいよ。なんでも答えてあげるよ。どうせまだ時間がかかりそうだしね。なんだい、ももえ」

妹は最初にこの質問をした。

「つくもは……何を願ったのじゃ？」

「はははっ！なるほど、最初の質問がそれか！よっぽど君は、あの愚かな姉のことを大切にしているみたいだね！」

「御託はいい、答えろ」

キュウベえはなんでも願いを叶えると言った。その言葉に嘘偽りはないように妹は思った。

そして男の様子からして、キュウベえを意図的に姉に会わせて契約させたみたいじゃった。

ならば一体、姉は何を願って魔法少女になったのかが気になった。

「この世界には今でも戦争が起き続けていることは知っているね？」

「……ニュースで見る程度なら」

「それで充分だよ。私はね、その戦争をコントロールする仕事をしているのさ」

「なに？」

そこから男は自分の仕事について語り始めた。

戦争をしても得るものは少ないというのに、やたらと戦争をしたがる。そういう馬鹿な人間というのは一定以上いるということ。

男はそういう人間たちを操って戦争を起こさせ、そして戦争を終わらす仕事をしているらしい。

必要な時に必要な数の武器を、人が欲しければ人を、情報が欲しければその情報を、戦争をしている勢力たちに売り渡して均衡を保ち、ギリギリのところまで消耗させたのちに第三勢力を使って決定打を与える。可愛く言うなら喧嘩両成敗ってやつじゃな。

男が言うに、戦争しないと気が済まないやつらには一度戦争をさせて痛い目に遭わせないとわからないらしい。

そして、戦争を始めるにしても終わらすにしても必ず何かのきっかけを、絶妙なタイミングで戦争の起点となる双方に作らないと成立しないらしい。

第二次世界大戦で例えるなら、世界恐慌を起こし、広島と長崎に原子爆弾を落とす。それくらいの規模の始まりと終わりを用意しなければ、戦争は始まらないし終わることもないらしいのじゃ。

この男の一族は第一次世界大戦から世界の陰で暗躍し、様々な伝手を使って勢力を伸ばし、長い間戦争を管理し続けてきたと言う。

「……とりあえず、私たちの父親が碌でもないテロリストじゃというのは分かった。それで？ それがつくもの願いとなんの関係があるのじゃ？」

「君も想像できているんじゃないのかね？ まあいい。私の口から言おう。つくもはね、戦争を終わらせたんだ！ 魔法少女になるときの願いを使ってね！」

「っー」

「効果は絶大だったよ。すぐに連絡が来た。民衆たちが革命を起こして現政府とテロリストもろとも鎮圧したそうだ。素晴らしいと思わないかね？」

「馬鹿を言うな！ 小娘ひとりが願った程度で戦争が終わるようなら世の中苦労はせん！ 願いが叶うとはいえ、いくらなんでもそんな無茶苦茶が通るはずがなからう！ 偶然に決まっつとる！」

「ハハハハハッ！ やっぱり君は実に頭がいい！ そうき、その通りだよ。普通ならこんな大それたことはできない。でもね、出来るんだよ。私なら、そして私の娘である君たちならね！」

男が笑った途端、大きな音が聞こえてその方を妹は見る。

奥の方にいた魔女はボロボロになって崩れ落ち、その中からゆらりと姉が起き上がった。すると、この摩訶不思議な空間が消えて行つて、普通の窓のない空っぽな室内に変化した。魔女が滅びたことで境界が消えたのじゃ。

魔女を倒した姉はその手にグリーンフシードを持って妹たちの所に来た。

「いいタイミングだ。ふたりとも付いてきたまえ。面白いものを見せてあげよう」

ふたりは男の後に付いて行つた。

そんな中、妹は少し疑問に思った。

やろうと思えば姉なら男を無力化できるはずだ。

あんなバケモノと戦えて、それでほとんど無傷で帰ってくるほど強くなつた姉なら、この男を殺さないまでも気絶させて逃げることできるだろうにそれをしようとしない。自分なら間違ひなく男を殺して姉を連れて逃げるのにと、妹は首を傾げた。

とはいえ、男の言う面白いものというのにも興味がある。

いったいこの男は自分たちに何を見せるのだろうか、妹はそつちに関心が行つた。

辿り着いたのは、先程の地下室からはそれほど離れていない部屋。

じやが他の部屋以上に嚴重なセキュリティによつて管理されているようで、男が持つカードをスキャンしなければ絶対に入れないようになっている。重大な秘密があることをそれだけで物語っていた。

そしてその部屋の扉が開かれた。

薄暗い室内には透明な液体によつて満たされたカプセルのようなものがいくつも設置されている。

なんじゃこれはと疑問符を浮かべながら辺りを見渡すと……いくつかのカプセルの中になにかが浮かんでいることに気が付いた。

あまりにも小さかったから妹はカプセルに近づいて、その小さなものをよく見る。

「っー」

その小さなものがいったい何なのかを確認した妹は息を呑んだ。

そして理解した。理解してしまった。

これがいつたいたいなんなのか。そして……自分たち姉妹が、どういう存在なのかを。

「酷いじゃないか、ももえ。妹たちをそんなバケモノを見るような目で見るなんて」

最悪の真実が、その男の口から出た。

そう、このカプセルの中にいるのは……まだ創られて間もない小さな胎児たちじゃった。そして妹はこの男に『ハンドレッド』と呼ばれた。

それが意味するのはつまり……。

「君たち姉妹はね、ここから生まれたんだよ。この少女工房エキドナでね。

そして君はね、記念すべき百体目の個体……ワンハンドレッドナンバーなんだよ。

九十九番目のつくもできえ、戦争を終わらせることができる力を秘めていたんだ。

百番目の君なら……もしかしたら第三次世界大戦を引き起こすことだって可能かもしれない。

いや、世界をひっくり返す程の大戦争だって起こせるかもしれない！

それくらい力と因果が君には秘められているんだよ、素晴らしいと思わないかな、ももえ！」

興奮した様子の男の声は妹の耳に辛うじて届いておったが、妹は何もリアクションを返すことができなかった。

こんな真実、知りたくなかった。いくらなんでもあんまりすぎた。

この男の言うことが本当なら……自分たちはこの男の望む戦争を引き起こし、そして終わらせるためだけの……言ってしまうえば生体兵器として生まれたことになる。

「なあ……それなら、私たちの母親は、ばあちゃんとじいちゃんはなんだったのじゃ？」

「私が手配した君たちの育て役に決まっているだろう？ 君は頭が良いんだ。それくらい聞くまでもないだろう。分かりきった質問をするんじゃないよ」

どん底に叩き落された気分じゃった。

「この際だから全部教えてあげよう。君たち姉妹を離れ離れにしたのも、片方を都会に住まわせて、片方を田舎に住まわせたのも、全て私の指示だよ。」

不思議に思わなかったかい？

つくもが毎回違うゲームを持ってくることに。流行の服を買い揃えることがどうしてできたのか。どこからそんな金が湧いて出てきたのか。

全部私が金を出していたからだよ。

一時期はつくもには虐待する環境を、ももえには温かい環境を作り上げたこともある。

そうやって互いのコンプレックスを刺激させて、より強い感情と自我を持つように促したのさ」

……そうか。そうじゃったのか。妹は全て理解した。

自分たち姉妹は最初からこの男の手の中で踊らされていた、ということに。

「しかし面倒なことにね。ももえ、君を育てていた老夫婦は私が君を迎えに来た日に、素直に君を渡そうとしてはくれなかったよ。どうもね、君を育てているうちに本気になってしまったみたいだったんだ」

「！」

それを聞いた妹はほんの少しだけじゃが喜んだ。

自分が感じていたあの温もりは、全部が全部偽物ではないとわかったから。途中からとはいえ本気で自分を愛してくれていたんだと感じたから。

「だからしょうがないから、頭を吹き飛ばすしかなかったよ。全く、困るよねえ。素直に報酬を受け取っておけばいいものを。無駄に仕事

を増やした拳句、私の手を汚させるなんてさ。そうは思わないかい？」

そして再び奈落の底に突き落とされた。

……そうか。じゃからつくもはあんな暗い顔しておったのか。目の前で、この男がばあちゃんと同じいちゃんを殺したのを見たから……。

「だからねえ、もう君たちにはここしか居場所はないんだよ。

私を殺しても無駄さ。

この秘密を知っている人間は私の他にも少なからずいるんだからねえ。

ももえ、君はまだ魔法少女にさせないよ。

もつと素晴らしいタイピングで、君の力を最大限に発揮できるそのときが来るまでね。

君の力があれば世界を思うがままに出来る。最後の戦争を引き起こして平和な世が訪れれば、もう私のような碌でなしもいらなくなるんだ。

君もつくもも、決して悪いようにはしないと約束しよう。

今回つくもが頑張ってくれたおかげで向こう三十年は悠々自適な生活ができる資金を手に入れられたんだ。だから決して不便はしないよ。

これも世界のためだ。わかってくれるね？」

もはや、妹には答える気力がなかった。

ここまで残酷な真実を告げられた今、もう自分に出来ることは何もなかった。もうここしか、自分が自分でいられる場所はない。他に居場所なんかない。

完全に心が折れた妹が首を縦に振ろうとしたその時、男の首が吹き飛んだ。

「え」

その一文字が、男の遺言になった。

首がなくなつた体はなにかを思い出したようにぶるぶると震え、噴水のように血飛沫を上げながらそのまま崩れ落ちた。

呆気なく、非常に呆気なく、最悪の男はその命を刈り取られた。

「あは……は……」

「つく、も……」

黄金の鉤爪を男の血で濡らした姉が小さく笑う。

そんな姉の瞳を見た妹は背筋が凍り、そして正気に戻った。

自分と同じ色じやった、姉の青い瞳は沼の水のように濁り切って光が完全に消えていた。

「ねえ。あんた、魔法少女になりなよ」

「なに？」

「私と同じように魔法少女になれって言うてるの。いるんでしょ、キュウベえ」

「呼んだかい？」

血だまりの上にキュウベえがとことことやってくる。

協力関係だったはずの男の死体がすぐ横に転がっているというのに数時間前と全く同じ様子で来る辺り、このキュウベえはあの男と同じくらいに異常な存在じゃと妹は再度認識した。

「ほら、願ってよ。私を助けてくれるんでしょ？　ここから逃がしてくれるんでしょ？」

「つくも、もうこいつは死んだ。私が魔法少女になる必要などないのじゃよ。じゃから私は魔法少女にはならん」

「どうして？　なんでも願いが叶うんだよ？　私なんかよりも凄い願いが叶えられるんだよ？」

「そういう問題ではないのじゃ。それにな、私が今叶えたい願いはただひとつ。お主と一緒にこれからも生きていくこと。それだけじゃ。つくもがいれば、私はそれでいいのじゃ。幸せなのじゃよ」

これは妹の本心じやった。

妹がずっと大切にしようとしているモノは他でもない、姉なのじゃから。

魔法少女になっても、人殺しになっても、妹は姉のことが大好きじやった。

正直に言っつて、男の首を刎ねた姉は妹にとってヒーローじやった。

折れそうになっていた自分を助けてくれた英雄のように妹の目には見えたのじゃ。

じゃが……。

「あんたは……あんたはいつもそうだよね」

「え？」

「そうやっていつも余裕ぶっついて、なんでもできてさ……本当にムカつくんだよ！」

妹の気持ちは姉に届くことはなかった。

無防備な妹の腹を、姉は蹴り飛ばした。魔法少女になったせいで、しかも九十九回分の因果を経た結果、強力な魔法少女に仕上がっている姉の蹴りを受けた妹の小さな体はボールのように飛ばされてカプセルに激突する。

「かつ……はっ。ゲホッ、ゲホッ」

一気に空気を吐き出され、蹴られた腹を抑えながら妹は咳をする。今まで感じたこともないような痛みと衝撃で吐き気もするし、力が入らず立ち上がることもすらできない。

妹の頭の中はぐちゃぐちゃじゃった。

なぜ姉が怒っているのかわからなかった。なぜ自分を嫌っているのかもわからなかった。熱い、苦しい、痛い。理不尽じゃとも思っただ。じゃがそれ以上に……悲しかった。

初めて大好きな姉に暴力を振られたのじゃから。

「私はずっと羨ましかったんだ。なんでもできて、なんでも持つてるあんたのことがさ。ずっとずっと、私はね、お母さんに虐待されてたんだよ。碌にご飯も作ってくれないから自分で用意したし、ゲームをかうだけで構ってもくれなかった。それなのに、あんたはおばあちゃんたちに優しくされてさ。そんなのずるいじゃん！　なんであんたばっかり良い思いしているのよ！」

「……！　……あうー！」

妹はなんとか声を出そうとする。

じゃが腹にダメージを受けたせいで声が出ない。口をパクパクさせるだけで、妹の本心は姉に伝わらない。



「それだけじゃない！ あんたは私より、いっぱいいろんなものを持つてる！ ゲームだつてすぐに上手くなるし、勉強だつて平気で私を抜いて……！ どれだけ努力しても、あんたはいつも私を簡単に超えていく！ 気付かれていないと思つたの!? あんたがわざと問題を間違えて、理解していないふりをしているってこと！ そうやって私を上から見て、笑っていたんでしょ!」

違う！ 私は決してそんなことは思っていない！ 私はただ……無理をしてほしくなかっただけなのじゃ！

「それなのに勉強してくれつてアピツてきてさあつ、また私を馬鹿にするつもりだつたんでしょ!」

違う！ 私はただ、一緒に勉強をしたかっただけなのじゃ！ それでただ……頭を撫でて褒めてほしかった。本当にそれだけだったのじゃ！

「私も受け入れようと思つたわよ、あんたが私よりも優れているって！ しょうがないって！ でもさ、おかしすぎるでしょ! なんて平気でこいつを殺そうと思えるのよ! なんて一回見ただけで船の操縦の仕方がわかるのよ! なんてここに連れてこられて探検しようなんて暢気でいられるのよ!」

それ、は……だつてそうしないと、逃げられないから……。

武器を持った大人から逃げるためには全部やるしかなかったから……！ 全部ギリギリじゃつた、余裕なんてなかった、他の選択肢すらもなかった！ ただつくもを怖がらせないように、ちよつとでも安心できるように強く見せていただけなのじゃよ……！

「それに……それにさあ……」

ヒートアップしていた姉は顔を地面に落として、蚊が鳴くような声で妹に問いかけた。

「ねえ、知ってる？ 私の名前、漢字で書くとき、『九十九』つて書くんだよ」

え？

「クズハさんつて、いたでしょ？ あの人も私たちと同じ境遇でさ、それで名前はね、漢字で書くと『九十八』つて書くんだよ」

なにを言おうとしとるんじゃ？

「だけどね……あんたの名前を漢字で書くかね……百に恵まれるって書くんだってさッ！」

ま、まさか……違う！ 違うんじゃ、つくも！

「なんであんただけ、数字じゃなくて名前をもらっているのよ!? なんであんただけ、人間扱いされているのよ!? 百番目に生まれたから!? それまでに生まれた私たちは量産品にすぎないって言いたいもの!? あんたもあんたですつとずつと、全部知った今でも私のことをお姉ちゃんとか姉貴とかじゃなくて九十九つくもって呼んでさあ！ 百番だからって調子に乗ってんじやないわよ！」

違う……違う、違うのじゃ！ 私は決してそんなつもりでお主の名前を呼んでいたわけではないのじゃ！

だつてお主は『つくも』じゃろう!? 『九十九』なんかじゃない！ 必死で妹は口を動かした。じゃが……それらは全部、言葉にならない。出来ない。

じゃから決して、伝わることはない。

「許せない許せない！ あんたよりも少しでも遅く生まれていたら私が百番ももえだったのに……！ 許せない許せない！ あんたなんか……あんななんか……！」

殺してやる

それが決定打じゃった。

なにかが割れるような音がしたかと思うと、姉の体からどす黒い何かが立ち上り……それはまるで虎のようなシルエツトを有した怪物となつて咆哮を上げる。

その雄叫びは大好きじゃった姉の、悲しみに塗れた叫び声のようじゃった。

「なつ、なつ……くつ、そ……」

その怪物の出現に今まで感じていた痛みは一瞬で消し飛び、脱兎のごとく妹は逃げ出した。火事場の馬鹿力を深刻なダメージを受けた腹にこれでもかと込めて、全速力で逃げた。

階段を駆け上り、何回も角を曲がると……気が付けば、自分の部屋

として用意されていた部屋まで戻ってきていた。

とりあえずここまでくれば大丈夫と思つた妹は鍵をかけると一気に力が抜けて倒れる。肉体的にも精神的にもダメージを受けた妹の体はボロボロじゃつた。しかし、それでも冷静じゃつた。

「キュウベえ……いるか？」

「呼んだかい？」

姉に呼ばれた時と全く同じように表れたキュウベえを見て、妹は力なく笑つた。

「なあ、頼む。教えておくれ。魔法少女とは、いったいなんなのじゃ？  
なぜ……つくもは魔女になつてしまうたんじゃ？ お願いじゃから……どうか私に教えてくれんかの？」

妹は、キュウベえからすべての真実を聞いた。

魔法少女たちが辿る残酷な未来も、キュウベえたちの目的も、つくもが倒した魔女の正体がクズハの成れの果てじゃつたことも、そして……つくもが、もう二度と元のつくもに戻ることがないということも、全部。

「そうか……のう、キュウベえ」

「なんだい？」

「私が今、魔法少女になれば、このダメージは回復するのかの？」

「もちろんさ。すぐに癒えて自由に動くことができる。やろうと思えば、今後受ける痛みも全部遮断することだってできるよ」

「……それは結構じゃが、そうか。治るのか……」

目を閉じた妹は、決意した。

「キュウベえ。私はお主と契約しよう。魔法少女になるぞ」

「そうかい。それじゃあ星奈ももえ、キミは、この運命と引き換えにして何を願う？」

「力を……力を寄越せ。魔法少女としての最高の力を、今を生きるための力を寄越せ！」

「……おめでとう。キミの祈りはエントロピーを凌駕した」

契約は成立した。

百回という膨大な因果を纏つた、最強の戦闘能力を誇る魔法少女が

誕生したのじや。

体が軽くなった。

さつきまでの鈍い痛みがすべて消え、あり得ないくらいに体が動く。

「よし……行くか」

白を基調として青と紫の模様が散りばめられた和服の戦闘着を青い帯で縛り、銀色の小さな鎧を装着した魔法少女の姿に変身した妹は拳を握りしめ……かつての姉が待つ場所に引き返した。

地下に続く階段を下りる。すると、もう魔女の結界の中に入ってしまったのじや。あの部屋までまだ少し距離があるというのに。

結界の中にはいろんなもので満ち溢れていた。

美しい彫刻に絵画、写真、グラフィック、衣装、アクセサリー、インテリア、料理や建物までありとあらゆるものが飾られ、並べられている。

じやがのう、それらにはなにかがひとつだけ足りないのじや。どれも美しいはずなのにどこか物足りない。言葉にするのは難しいが、その何かが足りないせいでせつかくの美しさが却ってわざとらしく、とても陳腐なものに見えてしまう。

大量に並べられているからこそ一見すると豪華じやが、しつかりと見てしまうとそれらは烏合の衆のようで、見ていてとつても虚しい気分になる。

姉は秀才じやった。なにかも人並み以上に優れておった。

じやがそんな姉の優秀さは天才である妹の前では霞んでしまう。比較対象が悪すぎたせいで、姉の魅力のなにかもが、妹の隣に立てば凡庸なものへと成り下がる。

姉が抱いていたコンプレックスが色濃く反映された結界であった。

「そうか……つくも、お主はずっと、こんな貧乏くじばかり引かされている気分じやったのか」

悲しく笑う妹はゆっくりと結界の中を歩く。

姉が感じていた悲しさを、怒りを、あらゆる感情を受け止めるために、結界内にあるすべてのものを見て、感じて心に刻みつけていた。

そして……結界の最深部。

例のおぞましい部屋の扉を開く。

そこにはほんの数分前に討伐されたクズハが変化した魔女以上の、全長十メートルはある巨大な虎の姿をした魔女がいた。

じゃが悲しいかな。

力強い虎は頭とガワだけで、胴体は別の四足生物のものじゃった。

巨体じゃからこそ迫力はあるものの、もしこの姿のまま本来の虎と同じ大きさまで縮小されたら、どれだけ滑稽に見えることじゃろうか。

「もうよい。もう見栄を張ろうとしなくてもよいのじゃ。私と張り合おうとするな。なあ？ お主よ」

妹は姉の名前を呼ぶことをやめた。

呼べば姉が悲しむから、苦しめてしまうから。

妹を捉えた魔女はすかさず攻撃してきた。黄金に光る爪で妹を引き裂こうと振り下ろす。

とても速いし、威力だつて充分。並の魔法少女なら即死ものの攻撃じゃ。加えて夥しい濃度の穢れを振りまいているから、戦い慣れていない新米魔法少女ならば、満足に体を動かせず一方的に蹂躪されてしまうじゃろう。

間違いなく、この魔女は世界中にいる魔女たちの中でもトップクラスに強い魔女じゃった。

じゃが……そんな魔女の妹は別格じゃった。

二匹の竜の紋様が刻み込まれた大剣を片手で掲げるだけで、魔女の攻撃を受け止め完全に静止させる。

「すまないな。私はな、どこまでもお主が嫌いな私なのじゃ。許してくれなくて結構じゃ。恨んでくれて結構じゃ」

受け止めていた金の爪を、妹は弾いた。

それによってバランスを崩し、明確な隙と弱点の腹部を晒した魔女に向けて、妹は横に剣を一薙ぎ。

「なあ、お主は私のことが嫌いなんじゃろうな。憎いんじゃろうな。じゃがのう」

さらに返しに一太刀浴びせた。

「私はもう、そんな姿になった今でも、お主のことが大好きなのじやよ」

体の中心から、綺麗に四等分された魔女は斬られた箇所から塵になつていき、グリーンフシードだけが妹の掌の上に落ちた。

「さようならじゃ、つくも」

ソウルジエムを綺麗にして、そのグリーンフシードを投げ捨てるキユウベえがそれを回収した。

魔女の結界がなくなり、元の研究室に戻る。

カプセルの中にいる、将来の自分の妹達。そんな彼女たちにも、妹は引導を渡す。

「私はこれからお主たちを殺す。じゃが殺したお主ら以上の数の魔法少女をこれから救うと誓おう。こんな残酷な運命を背負わされるのは私たちだけで充分じゃからな。……なにか文句はあると思う。じゃがもう、すまんが聞いてやれそうにない。生きている今も……死んだ後もな。私は死んだら、お主たちとは違う場所に行くのじやろうからの」

そう言つて、妹は研究室を破壊した。

全てのカプセルを壊し、機械も滅茶苦茶にして、もう二度と使えなくなるまで破壊し尽くした。

男のパソコンと携帯電話、そして金庫の中に入っていた金に通帳、財布を持ち出した妹は研究所を出ると、今度は研究所自体を跡形もなく破壊して瓦礫の山に変えた。

パソコンや携帯電話の情報を、金を積んで雇ったハッカーたちに解析させ、それをもとに妹はこのおぞましい計画を知りうる人物たちを調べ上げ、そいつらのいると思われる国に乗り込んで組織ごと血祭りにあげた。

「これで私も立派な人殺しじやな。あの男の娘だけあつて、なんにも抵抗を感じなかったのう。つくもよ、お主も地獄で待つとれ。数年もしないうちに、私も向かうからの」

最後のひとりの首を取り、建物を半壊にした妹は小さく笑った。

「さて、殺しは終わりじゃ。今度は救いに行こう。久々に、日本に帰るとするか。星奈ももえの名はここでお別れじゃ。これからは星奈百恵と名乗ることにしよう」

そうして妹は……もうよいか。

私は日本に帰ってきたのじゃよ。

それからは各地を転々として、道中で出会った魔法少女たちと協力したり強くなるように特訓したりしているうちに、魔法少女が大勢いるという新興都市のことを耳にしたのじゃ。

その新興都市というのが神戸市じゃった。

ここまですが私の過去じゃ。長くなってしまうのう。

じゃがの、もう少しだけお付き合いを願うのじゃ。

次は……神戸に来てからの私の話をしよう。

# Hundred Recollections (後篇)

よく整備されておる。

神浜に到着して、最初の感想がそれじゃった。

九つの区に分かれておるが、どこに行っても一定数の魔法少女がいて、しっかり縄張りを守って行動していた。

新西区から始まって東に向かって見物しながら魔女狩りをしていった私は、神浜の現状を見て感心した。

魔女が多いとは聞いてはいたが、確かに他の地域に比べれば圧倒的じゃった。大都市ほど、たくさんの魔女が集まるという話は本当じゃったらしい。

チームを組んでいる子たちもおったし、東西の昔からある諍い<sup>いさか</sup>さえ目を瞑れば治安が良く、魔法少女たちが活動しやすい素晴らしい都市じゃった。

じゃがやはり、一部の魔法少女たちは相当危なっかしい。

魔法少女になる覚悟が足りないまま契約してしまった弱い魔法少女たちはいたし、同じ縄張り内でグリーンシードの取り合いをしている現場にも遭遇したこともあった。

決めた。私はここで活動することにしよう。

この神浜をもっと魔法少女たちの住みやすい地域に改善して、死ぬまで救いの手を差し伸べ続けよう。

まずは西と東、どちらを拠点にするかじゃが、迷わず西を選んだ。

西にはリーダー格がふたりもいるらしいから、取り入ってしまうえば私の好き勝手に動けそうじゃ。なに、決して悪いことをしようとしてゐるわけではないのじゃから問題はなからうて。

色々調べた結果、西のナンバーワンは七海やちよという神浜市立大附属学校に通う中学三年生。奇しくも私と同一年じゃし、少し愛想良くすれば受け入れてくれるじゃろう。

そんな軽い気持ちを抱きつつ地盤を固めるために魔女狩り<sup>コネ作リ</sup>をして



おったのじやが、巷の噂でその七海やちよがナンバーツの梓みふゆと一緒に私のことを調べていることを耳にして認識を改めることにした。

どうも伊達に西のリーダーとして魔法少女たちを纏め上げているわけではなさそうじゃった。神浜に起きている異変に敏感で、リーダー自ら積極的に動くとはなるほど、なかなか優秀な人物のようじゃった。

なおさら仲良くせにやいかんくなった。じゃから私はそれなりの対応をさせてもらったのじや。

すっかりと私は優秀なんじゃぞと、味方につけた方がお得じゃぞというアピールをこれでもかとしたし、それに加えて言葉遊びもできた。とても満足な結果に終わったわい。

初めての中学生生活が三年生から始まってしまったのは残念じゃが、やちよが一緒のクラスじゃったし、一年と二年の内容は夏休み中に頭に叩き込んだから授業には普通に付いて行ける。

契約したあの日から身長が伸びなかつたせいで不本意ながらマスコットか珍獣、妹扱いとはいえクラスに馴染むことができ、久しぶりに普通の学校生活というものを送ることができて嬉しかった。

それから私は地道に成果を上げ続けることに専念した。

今以上に有名になれば、今まで助けることができなかつた魔法少女たちを助けることができるし、高い地位に着くことができれば発言力が増してコントロールすることだってできるのじやから。

時には過激なこともやった。

私のことを受け入れれない魔法少女もいることは知っておったが、かかってこないならそれでいいと放置した。そういった子たちが出てくることは予想していたことじゃし、仕方のないことじゃったからの。

とはいえ、面と向かって盾突いてきたおいたが過ぎる子たちには容赦なく制裁を下した。もちろん手加減はしたがの。

でもそのおかげで、みんな私を丁度良い感じで恐れてくれた。

優しさを振りまいて人望を集めるだけでは人の上には立てない。

ある程度の恐怖を植え付ける必要もあつたんじゃ。

こうして私は、『神浜の傭兵』という地位を築き上げて今に至つたというわけじゃ。

善意百パーセントで活動しているかと思つていたかの？ 違ふのじゃよ。私は、下心百パーセントで活動していたのじゃ。

ずっとずっと頭の中で色んなことを計算して、そしてしつかり自分が望む展開になるように狙つて行動していたんじゃ。

だつてそれしか、私が生きる意味がなかつたのじゃから。

生体兵器として生み出された私は、理由はどうあれ望んではいなかったとはいえ結果的に姉を殺し、妹達を殺し、たくさんの人を私は殺した。結局父を語る男の言う通り、私はひとりで戦争を起こしてひとりで終わらせたんじゃ。

殺して殺して、もう殺すものがなくなつてしまつた今、私ができることは自分が手を掛けた命と同じ分だけの罪を一生かけて償い続けることだけじゃつた。

それが魔法少女の救済じゃつた。

私が生み出された最大の要因である魔法少女というシステム。その残酷な運命から出来る限りの魔法少女を助け、私と同じような目に遭わせないこと。それが私の最後に残つた道しるべじゃつた。

じゃが私ひとりの手で助けられる魔法少女には限度がある。せいぜいひとつの街くらいで精一杯じゃ。じゃから多くの魔法少女がいる神浜に来た。

神浜の魔法少女たちが魔女にならないように、そして魔女と戦つても戦死しないようにする。そんな独りよがりな義務感だけで私は手を差し伸べ続けた。

これでわかつたじゃろう？

私はな、みんなの為に戦つてきたのではない。

他でもない、私自身のために、戦い続けてきたのじゃよ。

そうして戦い続けていくうちにの……だんだんと私は神浜の傭兵として働くことが楽しくなつていつてしまった。

たくさんの魔法少女とかかわりを持ち、季節がうつろいでいくうち

にの、ごまかしが利かなくなつたのじゃ。

これしか自分出来ることはないと思つていた生き様が、自分にぴったりと合っていることに。いつの間にか本気になつてしまつていた。

本当はダメじゃと思つた。

これは罰なのじゃから苦しまないといけな思つた。じゃからわざとオーバーワークに近い量の仕事を受け持つてもみた。じゃがなんの苦もなくこなしてしまつた。むしろ楽しいと思つてしまつた。命を奪い続けていた自分が人を助けることができ嬉しく感じてしまつた。

同時に、神浜の魔法少女たちのことも好きになつていた。

こんな外面だけの醜い私を頼つてくれて、慕つてくれて、好いてくれて……そんな彼女たちを好きにならないはずがなからう。

私を嫌う子たちも含めてみんなかわいく見えたし、仕事とは別に色々してあげたいと思つた。余計かもしれないがお節介も焼きたいと思つた。心の底から、愛おしく思つていたんじゃ。

死と隣り合わせの過酷な日々じゃつたが、同時にそれは幸せな時間でもあつた。

守りたいと思える子たちと触れ合えて、笑い合つて、やちよがいる学校に通うのも楽しくて……。

ずっと続けばいいなど、不覚ながらも思つてしまつたのじゃ。

じゃが、運命は私に牙を剥いた。

私自らの魔法が私を蝕み始めたのじゃ。

私の願いは『力が欲しい』。

じゃが本当はその前に『今を生きる』の文字が付く。この五文字が致命的じゃつた。

私がこんな馬鹿みたいに強くて、そして日々力が上がつていったのは、未来に割くはずじゃつたりリソースを前借りしてしまつていたからなのじゃ。

私の命はもう長くない。力もどんどんと衰えて行くせいで、二十歳になつたときには魔法少女として戦うことすらできない体になつて

いる可能性がある。

キユウベえにその宣告をされたとき……私はな、少し喜んだのじゃ。

ああ、やつと裁かれる時が来たんじやなって。

一気に心が軽くなったんじや。

おかしいじやろう？

死刑宣告をされたのに、私は喜んだんじや。

ああ、そうじや。

もう私はな、だいぶ前からおかしくなってしまうていたんじやよ。

そして十九歳の誕生日を皮切りに、私の力の上昇はなくなった。

未来という薪がなくなれば力という炎は燃え上がらない。薪がな  
いまま燃え続け、いつ鎮火するかもわからない不安定な炎。それが私  
の命じやった。

さらに弱体化は目に見える形で顕現し始めた。

髪の毛は真っ白になった。体を思うように動かせなくなった。少  
しずつじやが皴が増えて、今はもう両腕、それから見えなかつたと思  
うが両足が完全にばあちゃんのそれになってしまった。戦う度に老  
化が進む体になってしまったんじや。

じやがの、弱体化はそれだけに留まらなかったのじや。

最初はささやかなものじやった。

楽しそうに話をしている子たちがいたから混ざりたくなつたの  
じや。

幸いにも神浜の魔法少女の子たちは私を受け入れてくれていたか  
ら、すんなりとその子たちに混ざることができた。なんでもないお  
しやべりをした。

いつもの私ならなにか目的がないとこういう時間を取ることはな  
かつた。勉強やら仕事やら家事やらで忙しかつたからのう、これでも  
時間に追われていたんじや。じやから、こんななんでもないおしやべ  
りばかりをして時間を潰すことは、実は初めてじやった。

楽しかつた。

恋愛の話やら学校の話やら将来の話やら新しいスイーツの話やら

の、いわゆるガールズトークというやつをするのは。

そして……帰らないといけない時間になったときに、こんなに寂しく感じてしまうなんて思いもしなかった。

もう四年も住んでいるはずの私の家。

ひとり暮らしには慣れていないはずなのに、ふいに寂しくなってしまうのじゃ。

そして思い出すようになった。運命に引き裂かれる前までの、楽しかった姉との記憶を。

でも思い出す度に余計に寂しくなってしまうて……。

仕事も少なくなった。

キユウベえに言われる前から私の後継として育てていた愛弟子のかりんのおかげで、より多くの魔法少女を助けることができた。ふたりになったおかげで私の負担も減った。それに加えて、私たちを頼ってきた子たちもどんどん自立していった。じゃから相対的に、私の仕事は減った。

良いことじゃった。

残り寿命僅かな私にやれることは少ない。じゃから、こうなってくれて私は嬉しかった。

これで安心して引退することができる。私がいなくとも、神浜の魔法少女たちは救われる。私の役目は終わった。やり遂げられた。そう思った。

じゃがのう……そう思えたのは最初だけじゃった。

私は自分の寿命が尽きて魔女になる前にソウルジェムを砕くつもりじゃったが、もしもその前に魔女になってしまったら？

自分が強い自覚はあるし、魔女になったつくも以上に強い魔女なんてこれまで遭遇したことがないのじゃ。

じゃから百番目の私が魔女になったら間違いなくつくも以上、ワルプルギスの夜には及ばずとも紛れもない災禍となる。神浜の魔法少女総出でかからないといけないほどのとんでもない魔女になるじゃろうな。

私に頼ることをやめて、そして、魔女になった私を殺しに来るであ

ろう……私が愛した魔法少女たち。

それらをな、重ねてしまったのじゃ。

あの男に必要なと言われて、つくもの手にかかったクズハの成れの果てに。

そうしたら怖くなった。

もう私は神浜に必要なない。

必要なくなつて……害悪にしかならなくなつたとき、クズハと同じように処分されるかと思うと背筋が凍った。

わかつておるのじゃ。

みんなそんなことしないと。私が愛した神浜の魔法少女たちはあの男と違ふと。そんなことはわかつてはおるのじゃ。頭では理解しているのじゃ。

じゃがのう……それでも怖くなつてしまう。一度重ねてしまったら、もうそれを払拭することができなくなつてしまったのじゃ。

じゃからな……私は誰かに必要とされなくなつてしまったのじゃ。お払い箱にするにはまだ早いと、限界が来てもまだ私はやれるぞというところを見せたかつた。私は必死じゃつたのじゃ。

じゃから、やちよやななから連絡が来たときは嬉しかった。

まだ私は必要なんじやと奮い立たせられたから。

帆奈が私の家に来てくれて嬉しかった。

楽しかつたし、なにより寂しくなくなつたから。

一時はの、帆奈を甘やかして私に依存させようと考えたこともある。そうすればもう寂しくない。監視が終わつてもここにいてくれると思つたから。まあでも、そんなバカな考えはすぐに消えたがの。

私の勝手に帆奈を巻き込むわけにはいかんかつたし、私がつとしっかりしていればあんな事件を起こすこともなかつたのじゃから。私には帆奈を無事に外の世界に送り出す責任があつたし、それが私の帆奈のためにしてあげられることじゃつた。

立派になつた帆奈が出て行って、また寂しいひとり暮らしの日々が戻ってくるかと思うと心が重くなつた。あの寂しい家に帰りたくないと思つてしまった。そんなときのみふゆ、お主は私を『マギウスの

翼』に誘ってくれた。

本当はの、内心舞い上がっていたんじゃない。たくさんの魔法少女たちを連れて、私を頼ってきてくれたのじゃから。そしてその目的が、魔法少女の解放という私の生き甲斐そのものじゃったのじゃから。これが本当に、私の最後の仕事になると思った。身を粉にしても実現させて、そして誇り高く死のうと思った。

じゃがそれでも、一度は断る必要があった。

飛びつきたい気持ちはあったが私にも立場がある。完全中立を謳っている手前、たとえ高尚な理念を掲げている組織に属することはできなかったからの。

それに雰囲気からして交渉してでも私を雇おうとしてくるじゃろうなと予想していた。じゃから敢えて一度断ったのじゃ。羽根たちの忠誠など、どうでも良かった。ただ私が『マギウスの翼』に協力する理由が欲しかったただけなのじゃよ。まったく、自分本位の嫌なやつじゃよな。

そうして私は、『マギウスの翼』の頭になったのじゃ。

私の人生最後の大事な仕事、必ずこなしで見せると意気込んで組織改革を行い、なんとか私が動けるうちに実現させようと思った。

じゃが……『マギウス』たちのやり方は、私の許容できる範疇を越していた。

魔女を育てるのはいい。ウワサで人々を不幸にするのも……まだ許せる。じゃがアレだけは……エンブリオ・イブを見た時は理性が飛びそうになった。

魔法少女を半魔女にして、それを利用して自らの目的を果たそうとしているじゃと？ 冗談じゃない。

我慢できなくなつて、思わず『マギウス』のひとりの首を刎ねそうになつてしもうた。彼女が神浜の魔法少女でなければ、そして仕事でなければ、きつと吹き飛ばしていたじゃろうな。

結局私は、全てを聞き出した上でその計画に乗ることにした。それしか魔法少女を救う手立てがなかったからの。

そして思ったのじゃ。ああ、私はやっぱりあの男の娘なのじゃな、

と。

なにかを救うためには多少の犠牲を厭わない。それが例え、外法なものであったとしても。今になって、私は自分にそんな考えができることに気付いてしまうたんじや。私も『マギウス』たちのことを強く責められんな。

じやがそれでもな、私は非情になり切ることはできなかつた。

鶴乃たちを洗脳して利用しようという『マギウス』の計画を耳にしたとき、何が何でも止めようと思つたのじや。イブのほかに犠牲者を出すわけにはいかんかつたし、鶴乃を人殺しにしたくなかつた。じやから私は『マギウス』に盾突いた。その結果がこれじや。

見事に『マギウス』たちに私の弱点を突かれて、ウワサを憑依させられてしもうた。そして今、お主たちに迷惑を掛けさせてしまつていゝる。情けない限りじやな。

さて、これで全部じや。全部話した。

どうじやつたかな。きつと失望したじやろうな。自分でもな、嫌なやつじやと思つているのじや。きつとお主らはそれ以上じやと思つ。じやがこれで心置きなく私と戦えるじやろう。もはや今の私は害悪でしかないのじやから。

最後に、な。

ここまで来てくれたお主たちに感謝の気持ち伝えたいと思つ。

まず、みたま。

本当はな、お主の調整を初めて受けた時、私は神浜を追われる覚悟をしておつたのじやよ。

このままじやダメじやとは思つておつたが、私はこの生活に満足してしまつて手放したくないと思つてしまつていたのじや。じやからなにかのきつかけで自分を戒めようと思つた。そんな時じや、お主の話十七夜から聞いたのは。渡りに船じやと思つた。お主は神浜を滅ぼす存在になりたいと願つたらしいからの。私の弱みを見せれば、私を利用して神浜を滅茶苦茶にしようと思つてくれるかもしれない。そう思つたから私はお主に自分の過去を見せたのじや。

じやがお主は私の全てを知つた上で受け入れてくれたな。私を利



用すれば願いを成就させられるのに踏ん張って、そして誰にも話さないとずっと秘密にしてくれた。私の苦しみを一緒に背負うと言ってくれた。それが私にとつて、どれだけ救いになったことか……。

ずっとずっと、私のために気を遣ってくれてありがとうな。

みふゆ。

こんな私に頼ってくれてありがとうな。お主があの日、『マギウスの翼』に誘ってくれていなかったら、きっと私は今日までまともに生きていけなかったと思う。

そしてお主の望む形の解放を実現させられなくてすまなかったの。結局、私は自分の仕事を全うすることはできなかった。私に付いてきてくれた羽根たちの期待も裏切ってしまった。ずっとずっと私のフォローをしてくれて、私の意思を尊重してくれて、『マギウス』に目を付けられても私の味方をしてくれたのに本当にすまなかった。

帆奈もすまなかったな、私はお主の大切な友達を助けることができなかった。しかもお主に言われなければ、瀬奈みことという魔法少女の存在すらも気付くことはなかった。本当に情けなく思っておるよ。私にはお主の気持ちが届いてくれないに分かる。

つらかったよな、大切なものが壊れる瞬間を目の前で見るのは。死んだり狂ったりした方がマシじゃと思えるくらいにつらくて、悲しくて、身が引き裂かれるように痛くて、自分が許せなくて、己の無力さを呪ったことじゃろう。

じゃがお主は頑張ったな。ありのままの自分を出して前に進んでいくお主の姿は見ていて眩しかった。今の今まで、自分の罪を隠していた私とは大違いじゃよ。

二ヶ月の間、一緒に過ごしてくれてありがとうな。お主と過ごした時間は心の底から楽しいものじゃったよ。

かりんよ。

前にも言ったが、お主は私の誇りじゃよ。よくぞ、ここまで自分を磨き上げることができたのう。お主が成長していく姿を見るのは私の楽しみじゃった。そしてそんなお主がいるからこそ、私は心置きなく旅立てるのじゃよ。

それから、の。

ほんの少しとはいえ、私はお主に嫉妬していたのじゃよ。引っ張りだこになっているお主を見て、羨ましいなと思ってしもうたのじゃ。これじゃあ師匠失格じゃな。喜ばないといけないのに、こんな浅ましい感情を抱いてしまったのじゃから。

こんな私を慕ってくれて、こんなところまで来てくれてありがとうな。

ななか。

お主は強い理性の持ち主じゃ。私が知る限り、神浜で一番理性的な魔法少女じゃと思う。そんなお主が激昂したときは正直言って驚いたぞ。

復讐の邪魔をしてしまったてすまなかつたな。邪魔する資格など、人殺しの私になかったのにな。

じゃがのう、どうしてもお主を人殺しにだけはしたくなかつたんじゃ。私と同じ苦しみを味合わせたくなかつた。後ろ暗い人生を歩いてほしくなかつた。復讐を果たした後に待っている空しいだけで、死ぬまで淡々と過ごすような日々を送ってほしくなかつたんじゃよ。

それから……お主は凄いな。

復讐するために魔法少女になったのに、それが終わってもずっと戦い続けている。常人なら燃え尽き症候群になってもおかしくないのに、お主は今も変わらない自分であり続けられている。凄いことじゃと私は思うぞ。

お主はまだ若い魔法少女じゃが持っている器は充分大きいし、持っている人脈だつて広い。そのリーダーシップを発揮してこれからも神浜を引っ張って行ってほしいのじゃ。

最後に、こんな私と協力関係を結んでくれてありがとうな。

まなか先生。

お主に料理を教わっていた時間はとっても楽しいものじゃつた。

そしてな、懐かしくも感じたんじゃ。つくもに勉強を教えてもらっていたあの頃を思い出してな。

この歳になつて誰かに物事を教わつて褒められるなんてことはな

かったし、もう二度とそんな体験はできないじゃろうなと思っておつた。じゃがなあ、お主の料理教室に行つたときはあの頃に戻ることができた。楽しくて、嬉しくて、童心に戻ることができたとっても素敵な時間じゃった。

お主の料理もおいしくてなあ……魔法少女になつたあの日から碌な食事をとつていなかったから、気まぐれから始まつた料理を本格的に勉強し始めて、自分で料理を作るようになって、唯一ともいえる趣味に出会えることができた。私の人生に彩が戻つたんじゃ。幸せじゃった。

貴重な体験と楽しい時間をくれて、そして丁寧に指導してくれて、本当にありがとう。

このは、そして葉月よ。

最初に会つた時のお主らは見ていて危なっかしかつたのう。なにせ自分たち以外を一切信用していない目をしていたのじゃから。

つらい思いをしながら今日まで生きてきたのは当然として、それに加えて信じていた誰かに裏切られてしまったかのような、そんな悲しい瞳をしていたんじゃ。

じゃが今はどうじゃ。

私や他の神浜の魔法少女たちを信じて、自分たちを罫に嵌めた帆奈も受け入れて、お主たちは前に進んだ。勇気を出して、自分の殻を破つたんじゃ。凄いことじゃと思う。

私が愛した神浜を、神浜の魔法少女たちを信じて、受け入れてくれてありがとうな。

それからお主たちはよく私の家に遊びに来てくれたな。とっても嬉しかった。お主たちからの連絡を待つてしまうほど、お主たちが来てくれる休日は私の楽しみになっていった。……あやめにおばあちゃん扱いされるのは複雑じゃつたがの。

とはいえ、お主たちは私に元気をくれた。

このはと一緒に料理をするのも、葉月と言葉遊びをするのも、あやめと特訓するのも楽しかった。あんまりこうして家に人を招き入れることはなかったからの。新鮮じゃつたよ。

そして……やちよ。

お主には色々と言いたいことがあるのう。

そうじゃな……まずは、余所者の私を西の魔法少女として受け入れずつと助けてくれてありがとうな。

それから、真つ黒な私の本性も見たことがあるのに仲間じゃとも言ってくれてありがとう。近くも遠くもない適切な距離を保ってくれるお主がいてくれたから、私は自分のやりたいようにできた。お主が協力してくれたから、そして神浜での最初に出来た友がお主であったから、私はこの神浜を好きになることができたんじゃ。

安名メルを助けることができなかつたのは今でも死ぬほど後悔しておるよ。自分の都合を優先してしまつて、本来の自分のやるべきことを怠つた結果じゃ。本当にすまなかつたな。

じゃがそれでも、こんな私を頼つてきてくれてありがとうな。お主が私を必要としてくれたから私は救われていたんじゃよ。いつも頼つてきてくれて、本当に嬉しかった。

さて、もうこれで言いたいことは全部言つた。もう言い残すことはない。ここまで付き合つてくれてありがとうなのじゃ。

「さあ、これは私の最後のお願いじゃ。どうか、どうか私を……」

## S i d e . 常盤ななか 再起の鼓動

気が付けば、私たちは戦場に戻ってきていました。

降りしきる雨の中、北養区にある森の中に。

時間としては数分ほどしか経過していないのでしようが、数日に渡る長い旅をしていたような感覚がします。

帆奈さんの『上書きの魔法』によってコピーされ、発動した『心を繋ぐ魔法』。そしてそれはまなかさんの『伝播の魔法』の効果によって拡散され、この場で戦っていた九人を巻き込んで私たちは彼女の全てを知りました。

いつも穏やかな笑顔で私たちを癒して、ずっと手を差し伸べ続けて、数多くの神浜の魔法少女たちを救ってきた神浜最強の魔法少女、星奈百恵さん。

彼女がどんな人生を歩んできたのか、そしてどんな思いをしながら神浜で活動してきたのか。その全てを私たちは知ってしまいました。

百恵さんが抱えている闇は私の、いえ、この場にいる全員の想定以上のものでした。

彼女がなにか闇を抱えていることにずっと前から察しはついていましたが、まさかこれほどのものとは思いませんでした。

犯罪者の掌の上で何も知らないまま過ごしてきた幼少期。

最初から魔法少女にするためだけに生み出され、初めて手に掛けた魔法が大好きだったお姉さんで、まだ生まれてもない妹さん達の命を摘み取って、世界中に散らばっているこの恐ろしい計画を知る者たちを粛正して……ずっと罪の意識に囚われながらもそれを隠して強く振舞って、我々魔法少女を助けることだけに自分の生きる意味を見出していた百恵さん。

優しくして温かい百恵さんにこんな過去があっただなんて誰が想像することができたでしょうか。

「はあ、はあ……全部、見られてしもうたのう……」

少し離れたところにある倒れた木の上に、肩で息をしている百恵さんが立っていました。

龍のような姿ではなく元の人型の姿になって、正気に戻っている様子ですが、いまだにウワサとの融合は解けてはいません。

やはりまだ、百恵さんをウワサの呪縛から解放するには決定打が足りないみたいですね。

その決定打が一体なんなのかは大方予想はついています。が、我々にはその決定打を打つことはできません。なぜならそれを打つことが出来るのは、百恵さんご自身なのですから。

「これで……わかったじやろう？ 私はな、救いようのない人間……いや、人間と呼ぶのも烏滸がましい存在なのじやよ」

弱々しい声色で、自嘲の言葉を声に出す百恵さんは……笑っていました。

今までも何度か見た、なにかに諦めてしまっているかのような、力のない笑顔を浮かべていました。

「騙っていて、すまなかったの。そして殺人鬼で、生体兵器の私なんかのために、ここまで来てくれてありがとう。お主たちが来てくれただけで、私は幸せ者じやよ。じやからのう……お願いがあるのじや。どうか、どうか私を……」

……………。

「私を、殺してくれないかの？」

それは、百恵さんの深層世界から戻ってくる前にも聞いた彼女の願い事。

「出来ることならな、私はこのことを隠したまま死にたかった。良くないことじやとわかっていたのじやが……せめてお主たちの前でくらい、ずっと格好良い私を見せていたかったのじや。誇り高い傭兵として、往生したかった」

……………。

「じやが……結果はこの様じや。無様でみつともない姿を晒して、知られたくなかった秘密を知られてしもうた」

……………。

「もう耐えられないのじや。罪を償い続けるのも、隠し続けるのも、な。じやがそんな理由で自ら命を絶つのも嫌で……面倒くさいやつ

じやよな。じやから……お主たちの手で、終わりにさせてくれないかの？ 私を倒して……『マジウス』の暴走を止めておくれ。私にこれ以上、人を殺させないでおくれ」

そこまで聞いて……私はずっと握りしめていた刀を手に一歩百恵さんに踏み出します。

「ななか、あなた」

「私に任せてください」

すれ違いざまにやちよさんに呼び止められますが、私は歩みを止めません。

百恵さんとの距離およそ五メートルのところで、私は立ち止まって百恵さんの変色してしまっている紫色の瞳を捉えます。

そんな私を見た百恵さんは薄く笑います。が。

それはやはり、さっきまでと同じ種類の笑顔でした。

「百恵さん。本当によろしいのですか？」

「ああ……もうよい」

「改めてお聞きします。本当に、よろしいのですか？」

二回目の私の質問を聞いた百恵さんの瞳が僅かに揺れる。

……やはり、そうなんですネ。

「私は百恵さんに止められなければ、この手を血で濡らしていた身ですから、百恵さんが心から望むのでしたら、喜んでこの手をあなたの血で染め上げましょう。ですが……本心でないのなら、話は別です」

百恵さんは、嘘を吐いている。

もしも本当に死ぬことを望んでいるのなら、私が来た時に浮かべる笑みは、あんな諦めているような笑みではありません。もっと嬉しそうに笑うはずです。

「百恵さんが仰ったものではありませんか。私は、神浜で一番理性的な魔法少女なのでしょう？ そんな私があなたを感情のままに、あなたに言われるがままに、あなたを手に掛けると本気で思っていましたか？」

私は刀を鞘に戻して、百恵さんに問いかけを続けます。

「百恵さん、あなたは……ご自身の本当の気持ちと向き合えますか？」  
「……っ！」

百恵さんの顔から笑みが消えました。

そして何かに耐えているかのように口を固く閉ざして私を睨みつけてきます。が、今の彼女に睨まれても何も怖く感じません。むしろこちらが耐えられなくなりそうなくらいに痛ましい。

「ずっとずっと、不思議に思っていたんです。百恵さん、あなたは どうしてさつきから一言も『あの言葉』を口にしないんですか？ 私たちのために使い続けてきた『あの言葉』を、どうしてご自身のために使おうとしないのですか？」

「それ、は……」

「百恵さん」

おそらく弁明の言葉を口にするか、話を逸らそうとしている百恵さんを遮って、私は続けます。

「確かに百恵さん、あなたはとても普通ではない方法でこの世に生を受けました。人として許されないこともしました。ですがそれがなんだというのですか？ そんなことで私たちがあなたのことを嫌いになると、失望すると本気でお思いでしょうか？……神浜の魔法少女たちを舐めないでください」

「っ」

「あなたがお姉さんのつくもさんを、つくもさんが魔女になったとしても好きであり続けたように、私たちもまた、あなたの正体や過去を知ったとしても、あなたのことが大好きなのですよ百恵さん」

これは紛れもない私の本心。

たとえ百恵さん、あなたが殺人鬼だったとしても、私のあなたに対する気持ち、尊敬の念が揺るぐことはありません。ですから……！「あなたが愛した神浜の魔法少女たちを……私たちを信じてください。そして、信じていただけるのでしたら……言ってください。たった一言だけでいいんです。『あの言葉』を私たちに言ってください」  
「っ！」

百恵さんの口元が動き出します。



「そうですよ、百恵さん！」

私に続いて、まなかさんがこちらに歩を進めます。武器は手に持つておらず、素の状態で。

「騙していたって言っていましたけど……まなかたちに見せていた百恵さんは全部嘘だったんですか？」

「それは……」

「違いますよね。まなかたちが知っている、あの優しく、力強く、手料理をすることが大好きな百恵さんだって本物の百恵さんのはずです。まなかたちは騙されてなんかいません！ まなかたちはそんな百恵さんのことが大好きなんです！ 過去とか正体とかどうでもいいんですよ！ ですから、もう帰りましょう。美味しい料理、いっぱいご馳走しますから。教えたいことだってまだまだいっぱいあるんです！ ですから……お願いします。お代である『あの言葉』をまなかたちにください！」

固く閉ざした百恵さんの唇が開き始めます。

「色々計算しながら狙い通りになるように行動してたって言うけどさ、それって人間なら誰でもやって当たり前なことだとアタシは思うんですよね」

「全くよ。むしろ下心なしの善意百パーセントで行動できる人間なんていないと思うわ、百恵先生」

続いてこちらに向かってきたのは葉月さんとのこと。やはりこのふたりも武器は持っていません。わかっているみたいですね。

もう百恵さんと戦う必要なんてないことに。

武器なんて必要ありません。

必要なのは、私たちの心からの声だけ。

「みんなも言っているけどさ、アタシたちも百恵さんの正体とか過去とかどうでもいいんですよね。知りたいのは他でもない百恵さんの本当の気持ち。それだけなんです。論点を逸らそうとしても無駄ですよ。どれだけ一緒に言葉遊びをしたと思っっているんですか」

「ええ。百恵先生は私たちに失望されたくて自分の過去を見せたんで

しようけど残念。私たちはそんなことで百恵先生のことを嫌いにならないくらい、百恵先生のごことが大好きなのよ」

「あやめをつれてさ、また遊びに行くからさ、戻ってきてくださいよ百恵さん！」

「また一緒に料理をしましょう？　だから……言ってください、『あの言葉』を！」

「言つてよ百恵さん！　『あの言葉』を！」

「っ!!!」

口角が上がり、食い縛っている白い歯が？き出しになりました。

「先生！」

大鎌に乗って飛んできたかりんさんは、私たちに並ぶと大鎌を消して着地します。

「わたしにとつて先生は、ずっとずっとわたしの憧れで、目指さないといけない誇れる先生なの！　先生がわたしを誇りに思ってくれているように、わたしだって先生のことを誇りに思っているの！」

「かりん……」

「だから！　先生が本当にわたしのことを誇りに思ってくれているのなら！　頼りになると思ってくれているのなら！　言つてほしいの

『あの言葉』を！」

「っ!!!」

下顎が少し動き始めました。

「モエちゃんはワタシを逃がしてくれた時に言つてくれましたね、『よかった』つて」

音もなく、梓みふゆさんが私たちの所に降り立ちました。

「ワタシ、悔しかったんですよ。いつもいつも、ワタシはモエちゃんに頼りっぱなしだったのに、あんな場面でもワタシの事だけを気にして、全くよくないのに『よかった』つて言つて……！　こんな時くらいワタシを頼つてくださいよ！　同い年の親友じゃないですか！」

「みふゆ……」

「だから言つてください！　今度こそ、『あの言葉』を！　あの四文字を！」

「っ!!!」

大きく口角が上がりました。

あと、少し。

「あんたは謝っていたけどさあ、あたしだってあんたに謝らないといけないよね、セーナ」

姿が見えないと思っていました。まさかそんなところにいたとは……。

木の枝に座っていた帆奈さんが器用に私たちのいるところに飛び降りてきました。

「悪かったよ、八つ当たりだったとはいえあんたのこと『才能にも仲間にも恵まれてる』って言ってさ。ふざけんなって思ったよな。本当にごめん」

「帆、奈……」

「でもさ……あたしがあんたの家から出て行ったあの日。あたし言っただよな、なにがあってもあんたの味方だつてさ。少しは頼ってくれよつてさ。あの言葉は嘘でも社交辞令でもない。あたしの本心なんだ。それは今も変わらない。だからさあ……言ってくれよ、なあ。

『あの言葉』を、さ」

「っ!!!」

小さくですが口が震え始めました。

……もう少し。

「モモちゃん、わたしは今モモちゃんが暴露したこと、全部知っていたわ」

百恵さんから常に名前を呼ばれていた唯一の人物……百恵さんの全てを最初から知っていたみたまさんが小さく笑う。

「ごめんね、モモちゃん。モモちゃんの仕事ね、本当はあったのよ」

「な、に……?」

「でもね、わたしが断っていたの。モモちゃんの体を優先して意図的にね」

……それは初耳です。

一瞬なぜ百恵さんに説明しなかったのかと問い詰めたくなりまし

だが、みたまさんが百恵さんをかなり大切にしていたことを思い出して改めて冷静に考えた結果、百恵さんに隠すのは苦渋の決断だったことに気が付きました。

百恵さんの苦しみを一緒に背負うというみたまさんの誓いは本物だったみたいです。

「だからね、モモちゃん。モモちゃんを必要としている子たちはまだまだ大勢いるの！ モモちゃんが良いっていう子も、モモちゃんが復帰するのを待っている子だっているの！ わたしたちだって、モモちゃんを必要にしているわ！ この神浜は、ずっとモモちゃんを必要としているのよ！ モモちゃんが要らなくなる時なんて来るはずがないのよ！」

「…………ぐ、ぐ…………」

「だからお願い…………言つて。言つてちょうだい、モモちゃん！ 『あの言葉』を！ 言いたいことはいっぱいあると思うけど、今は『あの言葉』だけ言つてほしいのよ！ 愚痴なら後でいっぱい聞かから！」

「っ!!!」  
口の震えに合わせて、百恵さんの眉間にしわが寄せられ、きつく目が閉じる。

あと…………一押し。

「まったく、ずるいのよあなたはいつもいつも！」

最後に百恵さんに語り掛けるのは、やちよさん。

一番百恵さんの近くにいて、対等な親友同士だった存在。

「私たちにさんざん恩を売っておいて、恩返しもさせずに死のうとするなんて。そんなずるい真似をしようだなんて、絶対に許さないわよ百恵！」

「…………やちよお」

「変なプライドなんて捨てなさいよ！ 無様でもいいじゃない、みつともなくてもいいじゃない！ 周りに迷惑をかけたつていいじゃないのよ！ 私たちの情けない姿なんて、全部あなたに見られているのよ！」

恥ずかしながらその通りです。

ですから……百恵さん。あなたが感じているのは……。

「あなたは生体兵器なんかじゃない！ 人間なのよ、百恵！ あなたは人間として当たり前のことをしているの！ なにも恥ずかしがることなんてないのよ！ それにさんざん自分のことを人殺しつて言っているけどなに!? 私たちはみんなあなたに助けられた！ 救われたの！ あなたに殺された碌でなしの事なんて心の底からどうでもいいわ！ 私は！ 私たちは！ 私たちを助けてくれた百恵、あなたのことが大好きなのよ！ 私たちがあなたを、用済みだなんて思うことは永遠にないのよ！」

「やち、よお……」

「さあ、言いなさい！ あなたの本当の気持ちを！ 『あの言葉』を！そして泣きなさい！ 無様に、みつともなく、今まで溜めていた分思いつきり泣きなさい！ もう我慢する必要なんかないのよ！」

「……けて……」

微かな声と同時に……百恵さんの口が小さく、動きました。

「……聞えないわよ百恵！ もつと、大きな声で言いなさい！」

やちよさんのその叫びが引き金となった。

「たすけて!!!」

決して雨の雫じゃない大粒の涙を目から零して、ついに百恵さんがその平仮名四文字をはつきりと声にして口に出した。

ようやく、本音を聞かせてくれましたね。

「まだ死にたくないのじゃ、こんな終わりなぞあんまりじゃ！ もつともつと、私は生きていたいんじゃ！ やりたいこともたくさんあるんじゃ！ 遊びたいし、おしゃべりもしたいし、料理だっしたい！ おしゃれだっやってみたい！ 他にも興味があること、全部やってみたいんじゃあッ！」

今まで溜め込んでいたのでしよう、百恵さんの本音が涙と一緒に口から溢れ出す。

誰にも弱みを見せられなくて、頼ることができなくて、どこか私た

ちと距離を置いていた百恵さんの内に秘めていた本当の気持ちは、年頃の女の子……私たちが抱いているものと全く同じものでした。

「いいじゃないの、全部やれば！ おしゃれなら任せておきなさいよ、現役モデルよ私は！」

「阿見先輩だつて嬉々として教えてくれますよおしゃれなら！ それに料理だつたらまながいくらでも付き合いますよ！ というか正社員でもいいですからうちで働いてくださいよ、あなたが他の店で働くのが怖いんですよまなかは！」

「良いのか？……私なんか、普通の女の子らしいこと……やっても、良いのか……？」

そんなの……！

「当たり前です！ 百恵さんだつて普通の女の子ではありませんか！」

「……そうか。良いのか……」

私の肯定の言葉を聞いた百恵さんが……柔らかに笑いました。

涙で顔がくしゃくしゃになっていますが、とても幸せそうで、嬉しそうな……年相応の女の子のように笑いました。

そして……ここまでの一連の流れが、決定打になりました。

百恵さんの体が赤く発光すると、百恵さんの体の中から真っ赤に燃える炎が立ち上り、天を焼きます。

まるで百恵さんの体から出て行くように天高く昇っていく炎。やがてそれがすべて抜けると……百恵さんの体に変化が訪れます。

赤い髪の毛と着物が白くなり、両腕を覆っていた鱗が剥がれ落ちて、私たちの知っている魔法少女の姿に戻りました。つまり……ウワサと百恵さんの融合が解けた。

「ふ、あ……」

力が抜けた百恵さんの体が傾きますが、いち早くそれに気付いたやちよさんが抱えて事なきを得ました。本当に、百恵さん関連ではやちよさんが最強ですね。

さて……あとは。

百恵さんから出て行った炎は渦を巻き、再び百恵さん目掛けて急降

下。

しかし、やちよさんが百恵さんを抱えたまま我々がいるところまで退避したため、その炎は百恵さんが立っていた倒れた大木を焼くのみ。

そしてその炎は少しずつ集約して……さつきまでのウワサに憑依された状態の百恵さんと同じ人型になりました。しかしその身は炎で燃えていて、どう見ても人間のそれではありません。

アレが……『神浜最強のウワサ』の正体！

「——ッ!!」

言葉にならない叫び声をあげたウワサはこちらに向かって……いえ、これは！

「みたまは百恵の治療を！ 葉月さんとまなかは護衛して！ それ以外はあのウワサの相手よ！ 絶対に突破させないで！ ウワサの狙いは百恵よ！」

やちよさんも私と同じ考えのようです。

もう百恵さんを苦しませはしません。ですから我々の手で、このウワサを消す！

見たところ、あのウワサは炎属性。つまり水属性の攻撃が有効でしょう。こうなるとさつきまで我々の敵だった天候も味方になります。

加えて、ここに残っているのは全員ベテランクラスの猛者ばかり。さつきまでの戦いと違って、ウワサ相手に容赦する必要はありませんので倒すことに全力を出すことができます。……と、意気込んだのはよかつたのですが。

私たちは『神浜最強のウワサ』を侮っていたようです。

こちらの攻撃が掠りもしません。動きが速すぎて捉えられないんです。

それに加えて、ウワサにはこのはさんや梓みふゆさんの幻覚が全く効果を発揮しないらしく寸分も狂わぬ動きで我々を圧倒してきます。

百恵さんをベースに作られたウワサだけあって、その強さも特級品ということですか……！

「厄介ですね」

「ええ。今はなんとかついて行けるけど……」

「ジリ貧でやられちまうぞこれじゃあ……」

誰よりも長く魔法少女をやっているやちよさんも、近接戦闘を実は得意としている帆奈さんも息が上がっています。

さて、どうしたものでしょうか。

「……よい。私に任せるがよい」

困って思案していますと、私たちとウワサの間に白い小さな影が落ち立ちました。……つて。

「百恵さん!」

「百恵! どうして出てきたの!」

「助けてくれた礼じゃよ。皆疲れているじゃろう? じゃから休め。後は私がやる」

「でもあなた体が……」

「ふむ、その体なんじゃがな。妙に調子が良いのじゃよ。じゃから少しくらい無理をしても問題なからう」

「でも!」

「私が蒔いた種じゃ、ケジメくらいつけさせておくれ。もうこれ以上、無茶はせんと約束するから」

……。

「わかりました。ですが、危険と判断した場合すぐにでも止めに入ります。よろしいですね?」

「うむ、それでよい」

「まったく……わかったわよ」

いち早く私が折れて話を進めたことで折れるしかなかったやちよさんが引きました。

悔しいですが私たちではあのウワサには敵いません。ですが百恵さんなら、必ず勝てるかと判断しました。

言い切ることができる理由ですか? そうですね。

そんなの……百恵さんが神浜最強だから、ではダメでしょうか。

神浜最強の魔法少女が、神浜最強のウワサに負けるはずがありません



んから。

さつて、どうしたもんかのう。

私は自身に取り憑いていたウワサと剣を交えながら困ってしまつて笑みが零れる。

いやあな。私がやるつて大口叩いたのは良いのじゃがの……。

こやつ、結構強いぞ？

私の動きについていけておる。今日の私は結構思うように体を動かせていて絶好調じゃのに大したもんじゃ。これはやちよたちには荷が重い相手じゃ。じゃからなんとしてでも私が倒さないといけないのじゃが……決定打がどうしてもなあ。

的が小さいせいで全然狙いが定まらんし、向こうも向こうで容赦なく向かってくるから変に近づくこともできん。我ながら面倒くさい相手じゃな。一発でも斬りつければ勝てるのに、当たらんし通らんし厄介なもんじゃ。

じゃが不思議に思うこともある。どうも奴の攻撃には敵意が感じられないのじゃ。

殺意だけでなく敵意すら感じない。奴から私に危害を加えようとしている感じが一切しないのじゃ。そんな敵と戦ったことなんてないから余計にやりにくい。知らない相手との戦闘ほど怖いものはないから、消極的にならざるを得なくて、ますます決着を付けられん。とはいえ、早く決着を付けなければ体を壊してしまうし、どうしたもののかのう……つとと。ウワサが大剣を斬りつけてきおった。

全く、いい攻撃じゃ。私じゃなければ真つ二つじゃったぞ？ 両手で剣を構えてウワサの剣を受け止めた。じゃがその剣からは相変わ

らず私に対する害意を感じ取れない。むしろ……なんじゃ？　これは……。

弾き返して、私は構えた。少しだけじゃが、感じるものがあつたんじゃ。

吹っ飛ばされたウワサはすぐに体勢を整えてまっすぐに私の元に来る。そして私が剣を掲げると、ウワサもまた剣を振り下ろしてきて私の剣と交差させる。……やはり、そうか。

「なあ、お主はなにを悲しんでおるのじゃ？」

剣を通じてわかった。このウワサはなにかを悲しんでおる。なんじゃ？　なにをそんなに悲しんでおる。

ウワサの真意を理解しなくなった私は、しばらくウワサの剣を受け続けた。全部動きが直線的で読みやすい。じゃがこんなものじゃなかったはずじゃ。仮にも私をベースにしておるのじゃぞ？　こんな分かりやすい攻撃しかできないはずがなからう。なのになぜ……。

—……じゃ—

「む？」

誰かの声が聞こえた。じゃがみんなの声とは違う。むしろ私に似ているような……。

—なぜじゃ！—

ウワサの剣が私の剣と交差した時、小さいながらもはっきりと聞こえた。

間違いない、これはウワサの声！

—なぜお主は私を拒む！　私はただ——

「！」

ウワサを弾き返す瞬間に聞こえた、その言葉を聞いたとき、私は分かった。理解した。

「そうか……お主は……」

変わらず、まっすぐに私に向かってくるウワサ。そんな彼女を見た私は……。

剣を捨てた。

百恵さんとウワサの戦いは熾烈なものでした。

譲ることなく、隙を見せずに何度も斬り合うことの繰り返し。

互いに相性が悪いのでしょうか。どちらも攻撃が当たらないし届かない。このままでは……百恵さんの体調が崩れる方が早い。そしてその兆候が見え始めていました。

いつの間にか防戦一方になってしまっています。ウワサの攻撃を受け止め、返すだけに留めている百恵さん。

限界が近いのでは？ そう思いましたがどうも様子がおかしい。まだ百恵さんには余力が残っているように見えます。それなのに攻撃を受け続けている？ いったい何のために……。

百恵さんが本当に危険な状況に陥った時のためにスタンバイしている我々は、いつ均衡が崩れるか注意深く見守っていました。そしてそれは、唐突に訪れました。

ウワサが百恵さんに向かっていつて、あと少しで届くというところ……百恵さんが武器の大剣を手放したのですから。

「なっ!?!」

「うそ、百恵!?!」

まさかこんなタイミングで限界が!?! この最悪のタイミングで!

間に合わないことは百も承知ですがそれでも何とか百恵さんを助け出そうと動く私たち。ですが……肝心の、ピンチに陥っている百恵さんを見て、私は動きを止めました。

笑っていたんです。

ウワサに向かって、とても優しく、愛おしいものを見るような……我々神浜の魔法少女たちを見るような、そんな笑みを浮かべていたんです。

剣を手放した百恵さんは両手を広げると……向かってきていたウワサをふんわりと優しく抱きしめました。ウワサが持つていたはずの剣も、いつの間にか消えています。これは、いったい……。

「そうか、お主もそうじゃったんじやな。お主も、お主なりのやり方で……私を助けようとしてくれていたんじやな」

な……そ、そういうことですか。

思えばウワサは百恵さんに向かっていくだけで、剣を向けるのは百恵さんが剣で応戦した時だけでした。つまりウワサは百恵さんを傷付けようとしていたわけではなかった。

ウワサに取り憑かれていて苦しんでいたはずの百恵さんが無傷で帰ってきて、おまけに体の調子が良くなっていたのはウワサが百恵さんの体に負担をかけないようにしていたから。

そして……『神浜最強のウワサ』は全ての魔法少女を救済するウワサ。

つまりウワサが百恵さんに憑依していたのは、百恵さんとの相性が最高だったわけではなく、百恵さんの体に入ることによって百恵さんの体を安定化させて救おうとしていたから。しかし事情を知らない百恵さんはそれを拒んでしまって、助けを拒まれたことに反応したウワサが暴走してしまった、ということなのでしょう。

「なあ、お主よ。噂のままでは、悲しくないか？ どうせならば……本物の神浜最強になりたくはないか？」

——……？——

「今、神浜にワルプルギスの夜が迫ってきておる。このままでは神浜は壊滅的な被害を受け……何人もの神浜の魔法少女たちが犠牲になる」

——…………——

「私ひとりではワルプルギスの夜には勝てん。じゃが……お主とならばどうじゃ？」

——……！——

「私と一緒に神浜最強になろう。一緒に神浜を……神浜の魔法少女たちを助けよう。私ひとりの力ではどうにもできんのじゃ。じゃから

……」

— …… —

「お主の力が私には必要なんじゃない。なあ……私を助けてくれんかの？」

— !!! —

百恵さんに抱きしめられていたウワサは赤い光の粒子になって、百恵さんの体を包み込んでいきます。少し前までなら阻止しなければならぬ案件でしたが……今は違います。

百恵さんは光を受け入れていて、光も百恵さんを祝福しているかのようにゆつくりと百恵さんの体に馴染むような形で入っていきます。やがてすべての光が百恵さんの体の中に入ると……なにかの鼓動のような音が聞こえました。その鼓動は少しずつ早くなっていくと……赤いオーラが百恵さんの体を優しく包み込んでいきます。

……ああ、これは……。

「懐かしい……このオーラは……」

「ああ……モモちゃん……」

やちよさんとみたまさんが目を細めます。

そうです。これは私が初めて百恵さんと出会った時に確かに感じて……そして髪の毛が真っ白になってからは消えてしまった、百恵さんの力の波動。

その懐かしい静かなオーラを取り戻した百恵さんの体に変化していく。

皺くちやだった腕は元の若々しく瑞々しい綺麗なものに戻り、枯れたような白髪はかつての綺麗な濡羽色に染まっていつてそこに赤いメツシユが入りました。

青と紫の模様が散りばめられた白い和服の戦闘着には炎のような赤い模様が浮かび上がり、変わらぬ大きさの二匹の龍が描かれた大剣を軽々しく片手で担いでいます。

変化が終わった百恵さんが閉じていた瞳を開くと……青い瞳の中に赤い瞳孔が一筋入っていました。そして私たちの方を向いて、にこつと笑った百恵さんを見て、私は確信しました。

「よし……行くか」

神浜最強が、文字通り完全復活したのだと。

## RTAパート20 浅き夢の暁

ンンツ……（覚悟完了）

マッ！アッ！→（起動）

……………。

……………。

……………。

生きてる〜！（百恵ちゃんが無事に）帰ってこれたよ〜アーツハツハツハツハツハ！ 帰ってこれた〜ハツハツハツハツハ！（他のみんなも）生きてる〜！ 帰ってこれたよハツハツ生きてる！ハツハツ！ あ〜生きてるよ〜、という感じのRTAはーじまーるよー！

ハア〜〜〜（クソデカ溜め息）。

前回はとんでもないガバが起こってしまったがなんとかかなりました。なんとかなってくれました！

プレイヤーキャラがどうしようもない危機に直面した場合、好感度が高いネームドキャラたちが助けに来てくれる救出イベントが起きます。好感度トップスリーであるやつちゃん、みたまさん、帆奈ちゃんは確定で、あとは好感度が高い順で何人か来てくれるのですが……まさか合計九人も来てくれるなんてうっそだろおまえ！（大草原）おっ……すうっげ……（感心）。信じらんねえ……（素）。

「おかえりなさい、百恵」

倒れる百恵ちゃんを抱きとめてくれるやつちゃん。やつぱ……神浜魔法少女の……友情パワーを……最高やな！（助けてくれて）ありがとナス！

さてさて、ウワサとの融合を解除されたことで晴れて自由の身になりましたが、百恵ちゃんにはもう一回ウワサと融合してもらいます。

無事に『マギウス』がワルプルギスの夜を呼んでくれたのであとは倒すだけなのですが、より確実に倒せるようにするためにはウワサと融合して少しでも修正を受ける必要があります。ですので今度こそ、ウワサを屈服させて百恵ちゃんの支配下に置きます。ホーリーマミ

やホーリーアリナならぬホーリー百恵で決戦に挑みましょう。

それにしてもホーリー百恵……略してホモですか。やつぱりホモじゃないか（憤怒）。

というわけで介入しましょう！

へいへいやっちゃんたち！ あとは百恵ちゃんに任せとき！

「百恵！ どうして出てきたの!？」

出、出ますよ……出ますよ今日は。

百恵ちゃんを助けて疲れたでしょう、体力勝負やしなあ。よかつたら百恵ちゃんの後ろで休んでいてください。

「でもあなた体が……」

大丈夫だつて安心しろよ。なーんかわかりませんが、今の百恵ちゃん物凄く調子がいいですからね。弱体化が始まる前と同じくらい健康です。だからヘーキヘーキ、ヘーキだから。

「わかりました。ですが、危険と判断した場合すぐにでも止めに入ります。よろしいですね？」

もちろんSA！（DNLD）

組長が折れたおかげで渋っていたやつちゃんが引き下がってくれました。

ヨシ！（現場猫）あとはウワサを従えれば工事完了です。

さつさと百恵ちゃんに憑依させちゃいましょう。

というわけで始まりました、VSウワサ戦です。

ええーつと、『神浜最強のウワサ』というらしいですね。なんというか、最後に作られたウワサらしいビッグネームです。

百恵ちゃんをベースにしているからまあ強い強い……ってレベルじゃねえぞおまつ！

ちよつと待って！ 全然攻撃通らんやん！ どうしてくれんのかれ。

絶好調のはずの百恵ちゃんの攻撃が掠りもしません！ 動くも当たらないだろ？ 動くも当たらないだろオ!?

さすがは難易度ハード……しかも最強クラスの戦闘能力を誇る百恵ちゃんをベースにしているだけあつて、滅茶苦茶強いです。



こうなつたら……作戦プランBに移行!

ウワサを屈服させる方法は二通りありまして、ひとつは死ぬ一步手前まで痛めつけて力尽くで振じ伏せること。今まさにやろうとしていたことですが、ウワサが強すぎるからキャンセルだ。

そしてもうひとつは、ウワサの真意を汲み取って受け入れることです。

対策用のウワサはプレイヤーキャラと通じ合うものがありますので、それを見つけて受け入れることでウワサとの融合を果たすことができます。

ひとつ目のやり方に比べて比較的穏便に済ますことができ、間違えて倒してしまう必要もないというメリットがありますが、反面、時間がかかるというRTA的に厳しいデメリットを抱えています。

とはいえ、柵から牡丹餅でタイムが一気に短縮できましたし、このチャンスをふいにしたくないのでこの方法で行きたいと思います。ちよつとくらい、時間かけてもバレへんか……。

よつてここからはウワサからの攻撃を受け続けます。

互いの気持ちを理解し合うにはね、河原で殴り合いの喧嘩をするのと同じようにするのが手っ取り早いですよ!

さて、ここから選択肢が出てきますので、正解を引き当てていくだけです。だけなんです……まあうん。

正解の選択肢なんて(わから)ないです。当たり前だよなあ?

だから完全に当てずっぽうです。大丈夫です、こつちが操作をミスって戦闘終了しない限り何度でもチャレンジできますから。でもだからといって長引くとタイムが壊れちゃいますからちやつちやと正解引いてくれよな。頼むよ。

つと、お? うん?

あれ、操作が利かないんですが……つてちよ!? 百恵ちゃん!? 何してんすか、やめてくださいよ本当に!(武器を手放すのは)まずいですよ!

どつ、どどつ、どうしましょう!?! 百恵ちゃん武器を捨てちやいましたよ! 一撃でも喰らったら負け確なの! ぶざけんな!(声だ

け迫真)

せつかく掴んだチャンスなのに……百恵ちゃん、君には失望したよ。

って、うん？ あれ？

真つ二つになったと思っていた百恵ちゃんですが、五体満足で向かってきたウワサを抱きしめています。そして……ウワサが百恵ちゃんの体の中に入っていくではありませんか！

ということはさっきの武器を捨てる動きは……ウワサと融合成功の確定演出だったということですね！ どうやら正解の選択肢を一発ツモしたみたいです！

百恵ちゃん、俺は信じていたで（掌クルー）。

さてさて、ウワサと融合したことによって百恵ちゃんが色々と変化します。

まず見た目が変わりました。

弱体化の影響によって老化していた体が全て元の状態に戻って、髪の毛も元の黒髪に戻りました。瞳孔が赤く光っていたり赤いメツシユが入っていたり服に炎のような模様が浮かび上がったりと、ウワサの影響がもろに出ています。

見た目はこれだけです。他のホーリー系の魔法少女と違って聖女の格好はしていません。完全に百恵ちゃんに合わせてウワサが馴染んでくれています。

次に属性。無属性から炎属性に変わりました。

これはなんとも言えませんね。

木属性に対する有利性は付きますが水属性に弱くなりました。まあ、攻撃なんて当たらなければどうということはないので大丈夫でしよ（適当）。

そして、そしてですよ！

肝心の百恵ちゃんのステータスですがこれがエライことになっています！

弱体化の影響でマイナス補正が入っていたステータスがすべて元通りになって、そして！

なんとステータスの上限が解放されました！

どうやら百恵ちゃん、今まで☆4魔法少女だったみたいで、ウワサと融合したことで☆5魔法少女に昇格したみたいです。あの強さで☆4魔法少女だったのか……（困惑）。

ということだね、丁度みたまさんも来てくれますし、調整がてら今まで貯まる一方で使い道がなかった経験値を割り振っていきましよう！

「モモちゃん……本当に、もう大丈夫なのね……」

そうだよ（肯定）。

ウワサと融合したことで百恵ちゃんが抱えていた問題が全部解決しました。もう弱体化することもありませんし、体調を崩すこともありません。

ただし、百恵ちゃんに憑依しているウワサが剥がれたり、消されたりの瞬間に反動が来ます……というか多分氏んじやいますねこれ。明確な弱点こそできましたが、百恵ちゃんにそれ相応のダメージを与えたり、百恵ちゃんが拒絶したりしない限りはこうして融合したウワサが剥がれることはありませんので、ほとんど問題ナッシング！それに加えて百恵ちゃんの成長が復活しましたので、これからもどんどん強くなります！

貯まりつばなしだったエグいことになっている経験値を全部消費しても……いい成長っぷりでしょう？ 余裕のパワーゲージだ、伸びしろが違いますよ。

勿論ステ振りは《攻撃》に全力を注ぎます。

《速度》は充分ですので、火力だけを追求しましょう。

「……はい、調整はこれで終わりよ、モモちゃん」

ありがとナス！ これで準備万端です！

というわけでワルプルギスの夜に突撃……する前にですね！

エンブリオ・イブから環ういちゃんを引き剥がしに行きましょう！ このイブをどうにかしないとワルプルギスの夜と安全に戦えませんが。自動浄化システムを神浜に解き放って魔女にならないようにしないと、疲弊している神浜の魔法少女たちが立て続けに魔女化して

あーもうめちやくちやだよ。

ですので、イブ戦は絶対にやってからワルプルギスの夜に挑みましょう。

「モモちゃん、聞いてー!」

お、来ました来ました!

みたまさんは『マジウス』も調整しているので、三人の過去を知っています。そのおかげでイブの中に魔法少女が眠っていて、それを覆っているイブの体を壊せば中から救出できるという情報を握っています。

今回は百恵ちゃんの救出のためにこっちに来ているので、いろはちゃんはこのことを知らないのでしょうか……神浜随一の攻撃力を誇る百恵ちゃんが知ってしまったえば充分です。

これで全ての情報が集まりました。

パパパツとイブを倒してういちゃんを救出しちゃいましょう。

というわけで最終章『浅き夢の暁』にイキますよ〜イキますよ〜イクイク……ヌツ!

さあ、やってまいりました、参京区です。

最終決戦地である中央区まで行っていないあたり、少し早めに合流することができましたね!

先にイブの相手をしていたいろはちゃんたちが呼んでくれたのか、かもれトライアングル、あきらくんにかこちゃん、そしてあやめちゃんがいいます。

ももこちゃんオツスオツス! レナちゃんとかえでちゃんも元気そうで何よりだぜ!

「……うえっ!? 百恵さん!? なんですかその姿!?!」

こまけえこたあいんだよ! (AA略)

そんなことより状況はどうなっているんだい?

「なんとかイブを動かせないようにしているんだけどさ……! ああのイブの正体がいろはちゃんの妹さんみたいで困っているんだよ……」

！」

おーよしよし。

ういちゃんの助け方がわからないなりに時間稼ぎしていてくれていたみたいですね。

かえでちゃんとレナちゃんが頑張っていたみたいです。

あやめとかこちゃんのコンビによるサポートがあつたとはいえマミさんがいないのに、よく耐えていましたね。

とりあえずみたまさんはいろはちゃんの所に行ってきてね。今から百恵ちゃんがういちゃん助けるつてさ。

「わかつてるわあ、モモちゃん」

「私も行くわ。百恵、よろしくね」

おう、また後でな。

「イブの中心……あの大きな宝石が急所みたいなんです！」

「みたいだね。あの宝石からわずかだけ魔法少女の姿も見えたし、間違いないよ百恵さん。あそこに誰かいる！」

魔女を倒すための弱点がわかるあきらくんと、体をスキヤニングできる葉月ちゃんのおかげで前方確認ヨシ！（現場猫） じゃあブチ込んでやるぜ！

「星奈百恵ーっ！」

おおっと、ここで里見灯花が割り込んできました。

また君か（タイムが）壊れるなあ。

こっちの事情も考えてよ（棒読み）。

「……これはどういうことなのかな？ どうして君が無事なのか、あのウワサと完全に一体化しているのか、僕にはさっぱり見当もつかないよ」

当然のようにねむちゃんも来ましたね。

本来なら中央区で『マジウス』の妨害イベントが起こるのですが、さすがにフルパワーの百恵ちゃんが来ちゃったからには介入せざるを得なくなっちゃってきたみたいです。

ええっと、アリナ先輩は……。

「……………」

「いた！ アリナ先輩！」

あ、普通にいました。

少し離れたところで百恵ちゃんを凝視しています。

灯花ちゃんやねむちゃんと違って敵意はないみたいですが……却ってそれが恐ろしいです。ナズエミテルンデイス！

本当になんなんでしょうかね（困惑）。

「んもー！ どうなってるのこれー！ ねむ、あのウワサは最強さんを封じ込めるためのものじゃなかったのー!?!」

「そのはずだったよ。いろいろ仕込んでいたしね」

「今すぐあのウワサのページを消して！ そうすれば最強さんも一緒に！」

「気付いた瞬間に試したよ。だけど僕の指示が一切効かない」

「そんな……」

「だからこそ、僕も驚いている。いったいどうやって、君たちは神浜最強を助け出したんだい？ そして君はどうやってあのウワサを従わせて、力を取り戻したんだい？ あのウワサは創造主である僕でさえ制御が難しかったのに。状況が状況じゃなければ、ゆつくりと話を聞きたかったよ。きつと、面白い物語が書けるだろうからね」

おっ、そうだな（適当）。

さてさて、始めました。VS 『マギウス』及び『エンブリオ・イブ』戦です。ここをクリアすればあとはワルプルギスの夜を倒すだけです。

そしてそのクリア条件はイブの核である赤い宝石の中に閉じ込められたういちちゃんに小さな白いアイツを接触させる。それだけです。条件自体は簡単なのですが、『マギウス』もイブもめちゃんこ強いので、無事に辿り着けるかどうかが焦点となります。

「灯花ちゃん、ねむちゃん……星奈百恵さん！」

おっと、ここでいろはちゃんたちチームみかづき荘のみんながやってきました。

オッス、いろはちゃん。一緒にういちちゃん、助けようぜ！

「は、はい！ お願いします、百恵さん！」

ということでは戦闘開始だぜい！

☆5魔法少女に昇格した百恵ちゃんの力、見とけよ見とけよく。でも本気出すとうっかり誰かを頃してしまう可能性があるからしっかりと手加減しましょう。全力を出すのはワルプルギスの夜との決戦だけです。

え？ そんな手加減していて大丈夫かって？

「なんなのかな、その出鱈目な力は……！」

「わ、わたくしの最大出力を息を吹きかけるだけで無力化できるとかどうという理論しているのー!?」

大丈夫だ、問題ない。手加減していてもこれです。

ねむちゃんのウワサ攻撃なんて使い魔を倒す感覚で簡単に退治できますし、灯花ちゃんのエネルギー攻撃はそよ風みたいなものですよ。

一発でも攻撃を喰らったら負ける性能なのは変わりないのですが、そもそも攻撃があたりませんし、簡単に無力化できるので弱点はないに等しいです。

そしてこのふたりの攻撃をいなして隙あれば、イブに攻撃を仕掛けます。巨体ですので攻撃はよく当たりますが、やりすぎるとイブが消滅してしまうので注意が必要です。

あとういちちゃんがいる宝石に攻撃を当てるのは良いのですが、強すぎるとういちちゃんもろとも粉碎してしまうので気を付けます。

これも全部百恵ちゃんが脳筋すぎるのがいけないんや。でもこの辺がセクシー、エロいっ！

ですのでガラス細工を取り扱うように丁寧に力を抑えて攻撃していきましよう。もう弱点は判明しているので探り探り攻撃する必要ありませんからね。

武器は使いません。素手で戦います。あんなもん使ったら手加減していてもイブを真つ二つにしてしまいそうですし。

さあ、いろはちゃん、一緒に行くで！

「え、行くってどこに……！」

そら、ういちちゃんの所よ。

小さい白タヌキもしっかり持っていけよ……って、なんか百恵ちゃ

んの肩に登ってきました。ものつそい叩き潰したいのですが、そんなことしたらシナリオが壊れちゃいますのでやりません。

さあ、行くで！

「え、えっ！ きゃあああっ!?!」

ウワサとの融合によつて完全復活し、しかも武器がないため補正がかかっている《速度》をいかなく発揮して全速前進DA！（社長）

あら、いろはちゃんちよつと目を回しちゃっていますね。

おっ、大丈夫か大丈夫か。

「はい、なんとかか……。どんな速度で走っているんですか百恵さん……」

ツツコミを入れられるということは大丈夫みたいで何よりです。

さてさて、無事にイブの所に来ることができました。はえ〜すつごい大きい……。

そしてこの真つ赤な宝石に一発ぶちかましてあげましょう。すると。

「……ういー」

はい、これ中でにいるういちゃんを目視確認できました。

あとは百恵ちゃんの肩に乗っかっているこいつを接触させるだけ！

「モツキュ、モツキュッ！」

そしてこの至近距離からならこいつは自動的にイブの所に行つてくれます。工事完了です。

「そ、そんな……まさか……」

「……衝撃だよ」

小さいキュウベえに隔離していたういちゃんの魂がういちゃんの体に戻ったことによつて元の因果が修復されます。これで灯花とねむはしっかり記憶を取り戻して、味方に付けてくれます。もう邪魔してきません。

アリナ先輩は平常運転なのですが……なんか邪魔してくる気がしないので放置で大丈夫でしょう。

さあ、あとは宝石の中に閉じ込められているういちゃんを助ければ





あっ……（察し）。

「ほら、イブ……エターナルにアリナのペイントブラシにしてアゲル。魂を失って冷え切ったアナタを抱きしめて！」

ンゲーツ！

ホーリーアリナ先輩!? 何してんすか、やめてくださいよ本当に！（イブとの一体化は）まずいですよ！

最後の最後、美味しいところをアリナ先輩がかっさらっていききました！ なんにもしていないのにイブの力を手に入れやがったぞこの野郎！ 結論！ アリナはどこまで行ってもアリナでした！

「なっ!? あ、アレは……クリスマス・デス・カリブー!！」

「知っているの？ かりん」

「うん。今年ちよつと話題になっていたから……でもアリナ先輩だったの!！」

「その呼び方はやめてほしいんですケド……アンサーはイエスだヨネ」

アリナ先輩が纏っているウワサは『毛皮神のウワサ』。

凍える人を温めてその代償に寿命を奪うウワサです。あれ？ 今気が付きましたがなんだか百恵ちゃんのウワサに似ていますね。まあ、もう百恵ちゃんの命を消費することはなくなって、ただの力を高めるための燃料と化しているのですが。

そんなアリナ先輩はイブごとウワサを包み込んで完全に支配下に置いていきます。その結果、爆誕してしまったのがレインボーブラッドホーリーアリナという激ヤバ魔法少女です。

当然のように難易度ハードでこのアリナ先輩が出てきたら問答無用でリセット案件です。まあ、ほとんど勝てません。むちゃんこ強いです。

「さあ、百恵！ アリナのベストアートの力……アリナに見せてほしいワケ！」

あ、いいっすよ（快諾）。

見たけりや見せてやるよ（震え声）。

本来なら回避安定のイベントですがあくまでも戦闘ですので、百恵

ちやんの土俵です。いつくら強化されていても純粹な殴り合いで百恵ちゃんに勝てるわけがないんだよなあ。

まともにやり合いたいならワルプルギスの夜と同じくらいになつてから出直してきて、どうぞ。

—ということで今回はここまでにしませう！

次回が最終回の予定です！

アリナ先輩に勝って自動浄化システムを完成させてワルプルギスの夜を倒しちやいましょう！

それではご視聴ありがとうございました！

S i d e . 御園かりん 先輩と先生

「よし……行くか」

赤い光に包まれて変化が終わった先生は、初めてわたしが出会った時と同じ気迫のようなものを纏っていたの。

髪が真っ白になってから抜け落ちてしまったかのように感じられなくなってしまうた、覇気にも等しい先生の力強い気迫。

決して自分の力を見せびらかしているわけじゃなくて、ほんのりと力そのものが先生を包み込んでいるような、近くにいるわたしをも温かくしてくれるような、そんな安心できる先生の力の波動。

最初の、わたしたちと戦っていた時とは違う、先生自身がウワサを受け入れる形で実現した二回目のウワサとの融合で先生はそれを取り戻した。

今年の5月からずっとずっと模索していた先生の老化を食い止める方法。

それは皮肉なことに、先生を苦しめて利用しようとしていた『マジウス』が生み出したウワサによって実現した。

過去のしがらみと自身の老化から解き放たれて、ウワサとの二回目の融合とみたままさんによる最終調整によって全盛期以上の力を取り戻した先生とわたしたちは混沌とした神浜を駆け抜けていた。

『マジウス』が育てていたエンブリオ・イブが生み出した使い魔、さらに神浜に接近している最大最悪の魔女のワルプルギスの夜の使い魔があちこちで暴れまわっていて道中何回も戦闘になった。

「埒が明かないわね……」

「ですね。ここは散開しましょう」

「じゃのう」

10人で固まって移動する必要がなくなった今、イブと戦っているいろはさんに応援に向かうメンバーと使い魔たちを殲滅するメンバーに分かれた。

そしていろはさんの応援に向かうのは、わたし、先生、やちよさん、みたままさん、そして葉月さんの5人。

向かってくる使い魔たちを、先頭に走る先生が残さず駆逐しながら一際強い穢れが撒き散らされている方へ駆けること30分。

かえでちゃんと、かえでちゃんに変身したレナちゃんの拘束魔法によつて雁字搦めにされているイブのもとに辿り着いた。

イブに挑んでいたのはいろはちゃんを筆頭としたチームみかづき荘のみんな、ももこさんのチームに、あきらさんとかこさん、そしてあやめちゃんの10人。

回復役のいろはさんとかこさん、さらに盾役のさなさんとあやめちゃんがいるから目立った傷はないみたいだけど、みんな困った様子でイブに攻撃しようとしていない。

……よかつたの。

イブはアレでもまだ出来損ないの半魔女。

だからイブの元になっている魔法少女を魔女にさせずに助け出すことができるから、変に攻撃していかないみたいで安心したの。

多分様子からして、みんなもそれに気が付いて攻撃ができなくなつちやつたのかもしれない。

「心配かけた。応援に参つたぞ」

「……うえっ!?! 百恵さん!?! なんですかその姿!?!」

「細かい話は後じゃ。それよりも状況は?」

先生の姿に仰天したももこさんだけど、すぐに切り替えて状況を説明してくれた。

あのイブの正体が、いろはさんが探し続けていた実の妹さんである環ういさんだということ。

だから攻撃することができなくて、だからといって何もしないわけにもいかないから、ああやつて縛り付けて動きを封じていたらしいの。

「みたま」

「わかつてるわあ、モモちゃん」

「私も行くわ。百恵、よろしくね」

先生の意図をすぐに察したみたまさんとやちよさんがいろはさんの元に向かった。

「うむ。あきら、少し良いかの？」

「え……あれ？　今ボクを名前で……」

「それに関しては後回しじゃ。迷惑かけてすまんかったのう」

「あ、はい。それは大丈夫です。百恵さんが無事で何よりですよ。それで、なんですか？」

「ずばり聞こうか。イブの弱点、わかるかの？」

「は、はい。イブの中心……あの大きな宝石が急所みたいなんです！　中心にある大きな宝石……ということは、あの真つ赤な宝石のことなの。」

確かにあそこだけ、他の装飾と違って際立って大きく見えるし、不気味に輝いているように見えるの。

「葉月、どうじゃ？」

「みたいだね。あの宝石からわずかだけ魔法少女の姿も見えだし、間違いないよ百恵さん。あそこに誰がいる！」

弱点がわかるあきらさんと、万物をスキヤニングできる葉月さんのダブルチェックを経てこれで確定したの。

あそこにイブを形成している元の魔法少女……環ういさんがいるの！

「そうか。わかった」

拳を握ってイブの元に向かおうとする先生。

「星奈百恵ーっ！」

に向かって火の粉のように拡散されたエネルギー波が上空から放たれた。

この攻撃は……！

上を見るとそこにはパラソルを広げて降りてくる小さい影……『マジウス』の里見灯花に柊ねむ！

今までは高みの見物をしていたのかもしれないけど、神浜最強の戦闘能力を誇る先生だけは看過できなくて出てきたみたいなの！

このふたりが来たということは……。

「いた！　アリナ先輩！」

ちようど先生たちの戦いの邪魔にならないところにいたの。

わたしの大切なもうひとりの先輩……アリナ・グレイ先輩が。すぐにアリナ先輩のところまで飛んで、その前で降り立つ。

『マジウス』の中で唯一先生を庇うような行動をしていたアリナ先輩。本当なら味方だって思いたいし、信じたい。

でも、こうしてほかの『マジウス』たちと手を組んで先生にウワサを憑依させるのを黙認したり、神浜にワルプルギスの夜を呼ぶ手伝いをしてから無条件に信じるわけにもいかない。

とりあえず先生の邪魔をさせないように立ち塞がるけど……相変わらずアリナ先輩からはわたしたちに対する敵意を感じない。

「フルルガール。邪魔なワケ。ゴーアウェイ、どいて」

「聞きたいことは山ほどあるの。答えてくれるまでどかないの」

「面倒くさ……。じゃあ、少しずれてくれる？ これじゃあよく見えないんですケド」

戦う気は一切ないらしいアリナ先輩は本当に面倒そうな顔をしながらそんなことを言う。

気怠けだるげながらもまつすぐとある一点を見ているアリナ先輩。

その視線の先にいたのは……他でもない。

「おっとお主らか。今まで随分と……いや、現在進行で世話になってるかのう？ 素敵なプレゼントをありがとうなのじゃ」

「んもー！ どうなってるのこれー！」

軽やかにさっきの攻撃を避けて、不敵に笑っている星奈百恵先生だったの。

まるで初めて触ったおもちゃを眺めている子供のような、なんとうか、純粋な緑の瞳で先生を見つめている。

「アリナ先輩、どうして先生を見ているの?」

「……………」

「アリナ先輩はなにをやりたかったの？ 先生の味方をしてきていたんじゃないの?」

「……………」

「答えてほしいの……アリナ先輩!」

「シヤラアツプツ! ギャアギャアギャアうるさいんだヨネ、

フルールガール！」

「ひっ!？」

今までダンマリだったし、全くこっちに視線を向けないまま怒鳴ったからびっくりしたの。

「黙って見ていけばいいんですケド。これから素敵な光景が見られるんだカラ。……アハッ」

見ていろって……先生を？

言われて先生たちがいる方を見ると、先生と『マギウス』のふたりによる戦闘が始まっていた。

「さて、仕置きはあとじゃ。今は彼女の命の方が優先じゃからな」

武器の大剣を片手に、にやりと笑う先生。

「くっ……ウワサよっ!」

先手必勝と言わんばかりの勢いで柵ねむの持つ本から、今まで彼女が創造したであろう大量のウワサたちが一斉に先生に襲い掛かる。

どのウワサも大きくて、力強くて、きつと面倒な能力を持っているんだと思う。

でもそんなウワサたちも先生の良く手を阻む壁になりえない。

「よっ」と

軽く片手で両刃剣を大きく横に払い発生した剣圧による衝撃波を受け、ウワサたちは先生の元まで来ることすら叶わずに真つ二つにされて消滅していく。

「ビッグクラランチからの……」

ただドウワサの軍勢を倒したのも束の間。

「ビッグバーンッ!」

さつきとは比べ物にならないほどの熱量を伴った火炎波を里見灯花が放った。

最初から柵ねむのウワサたちは陽動だったみたいで、これが本命だったらしいの。

持ち前のエネルギーを変換する能力を使って周りにあるエネルギーを可能な限り集めたんだと思う。発射まで十秒近く溜めていたし、相当な一撃に仕上がっていると見て間違いないの。



けれども、そんな恐ろしい攻撃を前にしても先生は動じない。

「フッ」

軽く息を吹きかけられた火炎波は、先生に直撃する寸前に90度直角の上に向かって進路を変え、上空を飛び回っていたワルプルギスの夜の使い魔たちを焼いた。

「なんなのかな、その出鱈目な力は……!」

「わ、わたくしの最大出力を息を吹きかけるだけで無力化できるとか  
どういう理論しているのー!?!」

それぞれ自慢の攻撃を軽くなされてしまった『マギウス』たちは信じられないものを見たかのような、驚愕に溢れた表情で、一步も動くことなく涼しい顔をして佇んでいる先生を見る。

「……すごい」

明らかに手を抜いていて全然本気じゃないのに、決して弱くない『マギウス』のふたりを圧倒しているの。

でも……そういえばこの人はずっとこんな感じだったなって懐かしくもなる。

能力を無視した純粋な戦闘だけならこの人に勝てる魔法少女なんて神浜……どころか世界中のどこにも存在しないのかもしれない。

一度その強さを目の当たりにしたら逆らう気すら失い、神浜有数の魔法少女たちが集まったとしてもたったひとりで戦況を覆させて黙らせてしまうほどの、絶対強者。

だからこそ、先生のことをみんなはこう呼ぶの。

『神浜最強』と。

「アハッ。ビューティフル。美しい……」

「アリナ先輩?」

そんな先生を見ていたアリナ先輩は……笑っていたの。それはもう、うつつとりしたような……まるで最高の芸術品を手掛けた時のように。

「アナタもそう思わない、フルルガール?」

「美しいって、先生がなの?」

「それ以外に何があるっていうワケ?」

アリナ先輩の美しいの基準はよくわからないけど……少なくとも、アリナ先輩には今のあの先生が美しく見えるらしいの。

戦い方についてなのか、単純に容姿についてなのか……はたまた生き様についてなのか。それともわたしが見えてない部分なのかどうかはわからない。

……だけど。

「うん。……先生は格好良いの。どんな時も」

最初に出会った時も、わたしが傭兵になった時も、弱体化が始まった時も、ウワサに乗っ取られていた時も……そして今、こうして完全復活した時も、ずっとずっとわたしにとって先生は格好良い存在だった。

強くて、頼りになって、優しく、ひとりで抱え込んで走りがちだからぶつかっちゃうこともあるけど、それでもまっすぐな先生がわたしは大好きなの。

「ふうん。まあ、フルガールも少しは見る目が良くなったヨネ」

「？」

「でも、まだあの美しさには先がある。最後の仕上げが残っているワケ」

仕上げ？

「仕上げって……なんなの？」

「仕上げは仕上げなワケ。手がけた作品をコンプリートさせるには……最終チェックをしないといけないんだヨネ」

最終チェック……手掛けた作品。

「……まさか」

今までのアリナ先輩が手掛けてきた作品たちが頭に浮かんで……背筋が凍った。

アリナ先輩は芸術家として二回ブレイクしている。

一回目はごく普通の、絵画としての芸術品。

卓越した技術と感性をこれでもかと詰め込んだ、極めて王道の作品で。

でも……二回目は違う。

これまでの作風と一変した、生と死をテーマにした……狂気にも近いアリナ先輩ならではの発想を全面的に押し出した『死者蘇生』シリーズとも呼ばれる極めて異質な作品。

『死者蘇生』シリーズと先生……似ているの。

アリナ先輩が目指している……芸術のあり方そのものに！

じゃあアリナ先輩が先生を匿いながらも『神浜最強のウワサ』を憑依させることは黙認して、それなのに『神浜最強のウワサ』の情報を意図的に流していた本当の理由は……！

「さて、もう茶番は終わったみたいなのワケ」

アリナ先輩の指さす先には……誰かを大事そうに抱きかかえているいろはさん、武器を片手にイブに引導を渡そうとしている先生、そしてそれを止めようとしないう『マギウス』がいたの。

ということは、無事に妹さんであるういさんを助けられて……『マギウス』たちは元の記憶を取り戻したみたいなの。

あとは……抜け殻となったイブを消滅させれば、ワルプルギスの夜を残すのみ。

「そろそろ……コンプリートさせてもいいヨネ？」

アリナ史上最高の作品を。

アリナ先輩が話したと思った時には……すでにわたしの隣じゃない、  
く、

「はいはい、ストップストップ」

イブにとどめを刺そうとしている先生たちの前に移動していた。

……全然反応できなかった。

急いでわたしもみんながいるところに向かう。

「む、アリナか。すまんがそこをどいてくれんかの？」

「アハッ。それはムリな相談なワケ……。本当にサイコーだヨネ。百恵、アナタはアリナのシンキングした通りの……ベストアクトに仕上がってくれたワケ！」

……やっぱり！

アリナ先輩が先生を守り続けてきたのは、先生を作品に仕立て上げていたから！

『神浜最強のウワサ』の情報を『万本桜のウワサ』経由でわたしたちに流したのも、それをヒントにわたしたちに先生を助け出させるため！

今思い出したけど、『万本桜のウワサ』はアリナ先輩のことを『神浜最強のウワサ』のもうひとりの生みの親って言うていたの。つまり……最初から先生をウワサの呪縛から抜け出せるように、そして再度融合した際の相性が最高になるようにわざと抜け道を作っておいたんだ。

すべては……『完全復活した星奈百恵』というアリナ先輩の作品を作り出すために……！

ここまで全部、アリナ先輩の手の内だったってことなの!?

「そうか……。アリナよ、私も、やちよたちも……。他の『マジウス』たちですら、お主の思うがままに動いていたということか」

「アハッ。そういうことなワケ。でもまだ総仕上げが終わっていないんだヨネ」

「総仕上げとな?」

「アリナのベストアートの、それがどんなものなのか……。アリナ自身がテストしないと気が済まないんだヨネ!」

そう言っただけで背後で蠢いているイブに向き合ったアリナ先輩の……姿が変わった。

外国の警察官のような魔法少女衣装から一転して……。聖夜の夜に広場に現れた、聖女のような真っ白な衣装に。

「ほら、イブ……。エターナルにアリナのペイントブラシにしてアゲル。魂を失って冷え切ったアナタを抱きしめて!」

かつての先生と同じように両手を広げてイブを受け止めるアリナ先輩。だけど、先生とは違って協力というよりもイブを従属させ……。すべてを奪うかのように、強引に自分の体と融合させていく……!

あ、あの姿は……!

「なっ!? あ、アレは……。クリスマス・デス・カリブー!」

「知っているの? かりん」

「うん。今年ちよつと話題になっていたから……。でもアリナ先輩だっ

たの!？」

「その呼び方はやめてほしいんですケド……アンサーはイエスだヨネ」

完全に融合が終わって……頭から色とりどりの塗料を被って、まるで血のように流すアリナ先輩が口角を吊り上げた。

なんて禍々しくて……恐ろしい魔力なの。

ウワサに加えて出来損ないとはいえ魔女までその身に宿したアリナ先輩は、間違いなく、さつきまで拘束されていたイブ以上……もしかしたらワルプルギスの夜にすら匹敵するほどの悍ましいなにかに変貌していた。

「まったく……困ったもんじゃのう。まさか、ここにきてお主と戦うことになるとは思わなかったぞ、アリナ」

「アハツ、一皮も二皮も剥けて……ますます美しくなったヨネ、百恵！……ギャラリーは手出し無用なワケ」

「なんですって?」

「これはアリナと百恵の戦いなワケ。ちよつかいかけて来ようものなら……このあたり一帯をさらに滅茶苦茶になるようにするカラ」

「な……っ!」

「嫌だったら手出ししなければいいだけだヨネ? ワルプルギスの夜の相手でもなんでもやっていればいいよ。アリナは百恵にしか興味はないカラ」

アリナ先輩はブレなかった。

本当に先生の事しか興味がなかったんだ。

『魔法少女の解放』も、ワルプルギスの夜も、神浜すらもどうでも良くて、自分が作り上げたものになしか興味を示さないのは……本当にアリナ先輩らしい。

「……だそうじゃ。お主たちは行け。私はこやつと少し遊んでから行くでしょう」

「百恵……わかったわ」

瞳が揺れていたやちよさんだけど、アリナ先輩の誘いに完全に乗った先生を見てもう無理だと判断したみたいなの。

折れたやちよさんはみかづき荘のみんなと救出した環ういさん、さらに『マギウス』のふたりを連れて、ワルプルギスの夜から神浜を守るための防衛戦に向かった。

ももこさんのチームのみんなも、葉月さんたちも先生に一言二言話して防衛戦に向かっていく。

残ったのはわたしと、先生とアリナ先輩だけ。

「かりん、お主も……」

「ううん、わたしは見届けるの。手出しはしないし……させないから！」

こちらに向かってきていた使い魔を鎌で両断して、わたしは叫んだ。

ここにもワルプルギスの夜とイブの使い魔がわんさかいる。だったらわたしは、この使い魔たちの相手をするの。

絶対にふたりの戦いに割り込ませない。邪魔なんてさせない。

そして……この戦いに決着が付いたらわたしが連れて行くの。

先生をワルプルギスの夜のところまで、一直線に。

「そうか……感謝するぞ」

「ふん、良い心構えなワケ……」

片や薄く笑って、片や生意気なものを見るように鼻を鳴らす。

けれど……なんでかな。

どっちにも、根底には優しい何かがあるように感じられた。

「さあ、百恵！　アリナのベストアートの力……アリナに見せてほしいワケ！」

「よかろう。ただし、きつとビツクリするぞ？　腰を抜かしてギツクリ腰にならないように注意するんじゃないやな、アリナ。痛いし……クセになるからの？」

背後で……ふたりのわたしの大切な先輩がぶつかり合った。

## Side・アリナ・グレイ ベストアート

そこに、アリナが求め続けた究極の『美』があった。

アリナが魔法少女になったきっかけである、とあるジャッジの置手紙。

15歳でアリナの才能が輝きを失う。世界を変える気が無ければ作るのをやめろ。

表彰されても何も感じることなく、ただただクリエイトし続けてきたアリナにとってはもはや死刑宣告にも等しいものだったことを今でも鮮明に覚えている。それくらいこの出来事のインパクトは大きかった。

それからはなにを描いても全然エキサイトしない、セッションナルじゃなくて、アリナをサティスファクトさせることはない。手紙通り、本当にアリナの才能が枯れていくような、そんな焦燥に駆られた。それでついに至ったのは、屋上から飛び降りることだった。

作ることができなくなったアリナなんてアリナじゃない。枯れ果ててしまって、なにも作れなくなったアリナに価値はない。だったら……いっそ盛大に果ててしまおう。そしてそれがアリナのラストアートにする。

評価なんてどうでもいい。なんて言われても……それがアリナに出来る唯一かつ最大のアート。だったらそれを生涯最後の作品にしてしまおうと思った。美術館に飾られていたアリナのこれまでの作品を全部ブレイクして、そしてアリナ自身もブレイクする。

……なあってことをあの頃のアリナは考えていた。

実際に飛び降りて、生死を彷徨うまでは。

飛び降りる前にキュウベえと契約して魔法少女になった。魔法少女になってしまえば、肉体が死んでも関係ない。魔力が尽きない限りいくらでも再生する。さすがに屋上から飛び降りたから大分時間がかかったケド……アリナは生き返った。

それでようやく気付いたんだヨネ。『アリナの美』に。……その代償に、フルガールが大泣きしたせいであんなさかったケド、まあ悪く

はなかった。

しかも魔法少女になったことで、アリナの世界がガラリと変わった。

魔女。それはアリナを刺激するには充分すぎるスパイシーな生命体だった。今まで、こんなデザインの生命体が見えていなかったのかと後悔した。そして魔法少女になったことでそれに触れられるようになって歓喜した。

おまけに魔女との戦いはまさに生きるか死ぬかの瀬戸際。どんなにウィークな魔女でも気を抜けば命を持つていかれる。その緊張感がアリナに生きている実感を湧かせて、ますますアリナのアートの輝きが増した。

すべてが楽しくて、充実していたある時の事だった。アリナの耳にビリーブできないインフォメーションが飛び込んできたのは。

「は？ あのアールガールが？」

あんまりのインパクトに開いた口が塞がらなかった。

コレクションしていたけど逃げ出した魔女がハントされた現場で、偶然耳にした魔法少女同士の会話のなかに、アリナに付き纏ってくるアールガール……御園かりんの名前があった。しかも決してバッドなことじゃなくて、魔法少女として大活躍をしている、そんな話を。

詳しく話を聞いてみることにした。そして聞いてみて……またもアリナの世界が変わった。

神浜の魔法少女の希望の星である、公式の職業である『傭兵』の二代目としてセレクトされて、仕事に追われる日々を過ごしているのだと。まだ魔法少女になって日が経っていないアリナはここでようやく、神浜の魔法少女の勢力図や重要人物について知ることとなった。

思えば、アールガールのアートはある日を境に変わった。

確か……去年の6月の半ばくらいだったと記憶しているケド、まるで子供が書いたような単純で面白みのない、二番煎じのようだったアールガールのアートは、その日から一転した。

改めて描いてきたアールガールのコミックは良く言えば王道、悪く言うなら定番なストーリーだったから最初は大きくして期待はしていな



かった。……だけど、落胆するようなものでもなかった。絵は相変わらず下手くそだったせいで見るに堪えなかったケド。

フルガールはそれを連載し始めた。

主人公は変わらず、展開もほとんど同じ。……なのにどうしてだろうか。妙に引っ掛かる。自然に読み終えてしまうから問題ないはずなのに、なにかがおかしい。

そして、その引っ掛かりの正体に気が付いたのはひと月が経った頃だった。

ほんの一コマの描写を見て電流が走ったかのような感覚がしたアリナは、急いでフルガールが今まで描き続けていたものを全てチェックして、フルガールが言っていたことを繋いで行って……アリナは初めて、他人のアートの痺れた。

一々見せてくるからこそ気が付くことができた。鬱陶しくて煩わしいケド、それ以外に断る理由がなかったから仕方なく全部見てきたからこそ理解した。

フルガールのストーリーの主人公が少しずつ、本当に微々たるものだけど着実に、成長していつていっているということに。

主人公が成長していく様を描くストーリーなんて掃いて捨てるほどある。

物語が始まってから一気に年月が経っていたり、主人公がハイスペックすぎて一回で全部が出来たりするような、そんな大味なストーリーが最近の主流になりつつある。

しかしながらなかなかどうして、フルガールの作品は繊細なものだった。

不器用で弱虫な主人公が、細かいけど一話終わるごとにしっかりと成長している。

絵が下手過ぎて表現しきれていないのがもどかしいケド、セリフやフルガールのレクチャーのおかげでどこがどう変わったのか、どうしてこういう風に振舞えるのか、服装や髪形の変化まで全てにおいて極めて自然で違和感が生まれていない。そのくせ根底に関わる軸だけはブレないから一貫している。

ショートストーリーなのもいい。一話完結型のストーリーだからしつかりと読めば読むほど、主人公や他の登場人物たちの変化を楽しむことができるし、読んでいても苦痛に感じない。思えば、フルガールが描いたコミックを自然に読み終えてしまうこと自体がすでにアリエナイことだった。

フルガールにこんなストラクチャーとコンテンツを纏め上げる技術はなかったし才能もなかった。じゃあなんで、こんな繊細なストーリーを描けたのか。納得できるアンサーが思い浮かばなくて不思議だったケド、今になってようやく分かった。

アンサーは、このストーリー自体がノンフィクション、あるいは半フィクションだったから、だ。

つまり本当に起こった出来事が元になっていて、主人公はフルガールが体験したことになぞって動いている。だからリアルだしストーリーが破綻することもない。

前まで描いてきたものは全部、フルガールの空想だった。自分の理想ばかりだったからこそ稚拙で面白くなかった。

けど、これはフルガールが実際に体験して、今もお走り続けている現実だけを描いている。実体験を新鮮な状態で描いているからこそ、面白い物が作れていたんだ。そう、今のアリナのように。

そうか。全て理解した。

それならフルガールが神浜を代表する強力な魔法少女のひとりだと言われても腑に落ちる。今まで読んだフルガールのコミックの主人公と全く同じ人生を歩んで、そしてその先を走り続けているのなら確かにここまで評価されるほど強くなっているアタリマエ。

ということとは……フルガールの描いたコミックに登場するキャラクター達にはモデルがいる。つまり、フルガールを変えるきっかけになった人物もきっちり登場している。

そいつはおそらく……悩んでいた主人公に最初に手を差し伸べた人物。

頻度は低いケド、登場するときにはフルガールがまあ、あれでも一番力を入れて描いている『師匠』と呼ばれる存在。それに該当する人

物は……ただひとり。

神浜最強の魔法少女、星奈百恵。

こいつがフルガールの世界を変えて導いたんだ。  
会ってみたい。

フルガールがここまで変わるきっかけになった人物にアリナは興味を持った。んま、それから間もないうちに『マジウス』が結成したせいで会うに会えなくなったんですケド。

星奈百恵という人物を知れば知るほど、『マジウス』との相性はベリーバッドだったし、魔女をリアリングしていることに気が付かれたら面倒くさすぎる。そんなリスクを冒す必要なんてないし、会うだけなら『魔法少女の解放』が終わってからでも構わない。

だからフルガールに魔法少女のことは隠していたし、調整屋にも気を遣ってフルガールとも星奈百恵とも遭遇しないようにしてもらっていた。

「そーだ！ いいことを思いついた！ その神浜最強をこっちに引き込んじゃえばいいんだよ！」

バッドアイディアすぎることを灯花が言い出したときは本当に頭が痛くなったヨネ。しかもそれにねむまで賛同するんだから質が悪い。

アリナでさえ、自重して会わないようにしていた星奈百恵を仲間にしろとかナンセンス。みふゆの言う通り、アリナたちの障害になるのは火を見るよりも明らか。

だから普通にスルーしたケド、まさか本当にみふゆが星奈百恵を連れてくるとは思わなかったヨネ。しかも双方合意の上でなんて。

どんな交渉をすれば引き入れることができたのかを聞いてみたかったケド、嬉しい誤算だったのもまた事実。星奈百恵が来ることをひそかに楽しみにしていて……そして実際に会って、アリナは痺れた。

彼女はなにもかもが矛盾していた。

成人直前のはずなのに一部分を除いて小学生のような見た目をし  
ていて、幼い顔付きながらも纏う雰囲気はとってもアダルティ。穏や

かな笑顔を向けているケド、その奥には激しい怒りをふつつつと滾らせている。

そしてなによりも……彼女からは強烈な『死』の気配を感じ取れた。『死者蘇生』シリーズを手掛けて、そして自殺未遂をして生死を彷徨ったからこそアリナにはフィーリングすることができた。

おそらくもう、彼女に先はない。明確な『死』がもうすぐ傍まで迫ってきている。いや、もしかしたら、もう生きるためのリソースを全て使い果たしてしまっているのかもしれない。今をギリギリ生きるのて精一杯な状態に陥っている。そう思える程に星奈百恵という魔法少女は、とつても虚ろなもののように見えた。

「餓鬼が、あまり巫山戯<sup>ふざけ</sup>たことを抜かすなよ」

あまりのインパクトに言葉を失って彼女のことをガン見していたせいであんまり会話が耳に入って来ていなかったケド、灯花が星奈百恵の逆鱗に触れたことだけは分かった。

反応させることすら許さずに灯花の背後を取って首に剣を通した星奈百恵を見て、また痺れた。

こんな死に体の身のどこにこんな強大なパワーがあるのか。

どこまでもアンバランス、それでいてまっすぐな魔法少女、星奈百恵。

磁石の両端がN極になってしまっているかのような、全て「アリエナイ」という言葉でしか表現できないような彼女を見て……今までの野望の全てがどうでもよくなった。

アリナのアートワークそのものを永遠の『生』の象徴にすることも、そのついでに実現する『魔法少女の解放』も、魔女をリアリングすることも……なんなら現在進行でクリエイトしている他のアートすらもどうでもいい。

アリナのアートのテーマである『生と死』の極致と言ってもいい『死者の生』というアンチノミー。それを体現したかのような存在が、アリナの目の前にいる。そしてそんな存在があるのならば……その逆の『生ける死』だって実現することができる。アリナのベストアートの素材として、星奈百恵以上に素晴らしい逸材はないと魂が震えた。

そして理解した。あのフルガールがあそこまで成長したカラクリが。

こんなインパクトのある劇物を近くで見ても影響を受けないはずがない。どんな凡人だつてこの異常な存在を目の当たりにすれば、なにかしら変わることができると確信できる。何もフィーリングしないやつはただのバカだ。

「ねえアナタ……アリナのアートのモデルになつてほしいワケ」

だからアリナは……星奈百恵を手中に収めることに決めた。

幸い灯花もねむも星奈百恵を嫌っているし、星奈百恵もまたふたりに対して良い感情を持っていない。だからアリナが掠めとる。

最初声をかけた時は警戒していたけどアリナがただ絵を描いているだけだから拍子抜けしたのか、次第に楽になり始めた。

ああ、それにしてもなかなか絵になるヨネ。

素材が良いと椅子に座っているだけなのに顔の表情や手の位置、足の角度を少し変えたりするだけでいろんなものをエクスペレッションすることができる。

それに星奈百恵自身のボディもいい。死んでしまったかつてのみふゆのパーフェクトボディとは違う美しさがある。

「のう、お主。そろそろおしゃべりしてもいいかの？」

十分くらい経つて今まで黙つてモデルに徹してきた星奈百恵が口を開く。

「なに？」

「お主のことを知りたいのじゃ。お主は他の『マジウス』たちよりかは話が出来そうじゃからのう」

さあ、食い付いてきた。アリナの狙い通り、アリナを味方に引き入れようと動き始めた。

星奈百恵だつて『マジウスの翼』のリーダーになつた以上、アリナ達『マジウス』とのコネクションはなんとしてでも欲しかったはず。だけど結果はソーバッド。灯花とねむを味方にすることはできなかった。だからもう、残っているのはアリナしかない。

いいよ、乗つてアゲル。

そこからはまあ、軽い自己紹介やら他愛のない世間話やらが続いた。

星奈百恵はアリナのことを知っていたらしくて、アリナが手掛けてきた作品のことまできわりだけとはいえ覚えていたみたいだった。まあ、悪い気はしないヨネ。

そして30分が経って……もう少しで最初の一作品目が完成しようかというタイミングで仕事の話に切り替わった。

「それでの、すまんが魔女の捕獲作戦に関しては私に一任してはくれぬか？」

そういえばアリナが誘う前に仕事について交渉していたっけ。灯花たちは完全に腰が引けていたから全部素通りしていたケド。

「フーン。まあ、いいケド。アナタの腕なら魔女を狩らずに無効化することだつてできそうだし」

まあぶっちゃけ、魔女をリアリングすることなんてどうでもよくなったんですケド。ただまあ、ながら作業で魔女をリアリングできるならそれはそれで構わないし、アリナがなにもしなくても仕事しているように見せられる。

「うむ。それから、この仕事は秘密裏に行く。羽根たちの中にはこのやり方に疑問視している者もいるからのう」

「アリナからはもう言わないし、他のふたりにもこの件に関しては口出しさせないカラ、アナタの好きにすればいいワケ。バット、仕事はちゃんとこなしてもらおうカラ」

「問題ない。感謝するぞ」

これで、アリナは……ベストアートの原石である百恵を引き入れることに成功した。

それからは毎日が楽しかったヨネ。

日が経つごとに百恵から『死』の匂いが強くなっていった、全く同じコンポジションでも少しずつ変わっていく様を描いていくのはゾクゾクした。

「そんな同じ絵ばっかり描いて何が楽しいの？」

なんて灯花が訊いてきたときは本気でムカついたヨネ。この芸術

の素晴らしさに気付かないとか本当にセンスがないんですケド。

「ふむ……なるほどな。お主、気付いておったのか」

んま、別にいいんですケド。ちゃんとわかってほしい人には伝わったし。

二枚の絵を比較した百恵は、諦めたように笑った。

「アハッ、そうだよネ！」

「よくもまあ、こんな細かいところに気が付けるものじゃ。そして描けるものじゃの。じゃが……そうか。では知つとるのじゃな」

そう言つて、百恵は隠していた……皴塗れの左腕をアリナに見せてくれた。……アハッ。やっぱりそうだったんだア……。

百恵が少しずつ細くなつていつて、一回りずつ小さくなつていつているように見えている感覚は勘違いでもなんでもない。

どういうカラクリがあるのかはアリナの知ったことじゃないケド、百恵の老いるスピードは常人の比じゃないほどに早い。

つまり今までアリナが感じていた百恵の『死』の気配はファーストコンタクトした時の直感通り、戦死や病死の予感からくるものじゃなく……老衰からくるものだということ。19歳という若さ、それ以上に幼く見える容姿からはイメージできない死因。ああ……どこまでもアリナをエキサイトさせてくれるよねエ……。

百恵の身になが起こつているのか理解したアリナは、次のステージに移ることに決めた。

このままでは百恵は老衰で死ぬ。余命は持つて半年……ノー。魔法少女として戦う度に体調がブレイクすることも考えるなら一ヶ月もない、か。それはつまらない。

まだ百恵は完成していない。

アリナのゴールは『生ける死』。ここから百恵を復活させなければ完成しない。燃え尽きた灰の中からポツと炎が燃え上がらなければ、フェニックスのように死んだあとに息を吹き返さなければ、百恵はただのガラクタで終わってしまう。アリナのベストアートになりえない。

だからアリナは、他の『マジウス』の力を利用することにした。

灯花もねむも百恵の扱いに手を焼いていたし、隙あれば扱いやすい駒にするために色々と画策し続けていることは、あのふたりの隣にずっといたからわかる。

でも百恵は神浜最強の魔法少女。馬鹿正直に真正面からバトルを仕掛けても九十九パーセント負ける。僅かな可能性にチャレンジするようなことをあのふたりは選びやしない。より確実に、勝算があつて、なおかつスピーディーな解決法を選ぶに決まっている。

ならば弱つているところを狙えばいい。でも、それはアリナが許さない。『マギウス』の権限やアリナ自身の魔法を使つてでも百恵を守る。

バトルで倒す選択肢と百恵を暗殺する選択肢はこれで消えた。

大人数で百恵を囲つて無理矢理屈服させようにも『マギウスの翼』は既に百恵の手に堕ちている。サブリーダーにみふゆも付いているし、一部のおバカな羽根以外は百恵に従順。多数決で百恵を支配するのは不可能だし、かといつて百恵を堂々と殺してしまえば羽根たちが一斉に反旗を翻す。

それならもうブレインウォッシング……洗脳するしか方法はない。心身ともに弱らせた後にウワサを憑依させて手駒にする。現にこの方法で、バマミという切り札級の戦力を獲得することに成功している。人つていうのは非常にシンプルな生き物で、一度成功すると次にも成功した時と同じ方法を取る習性がある。味を占める、つていうやつ。案の定、それは天才のふたりにも当てはまって……アリナがシンキングした通り百恵専用のウワサをクリエイトしはじめた。

それと同時に必要以上に百恵の体に負担をかけないようにするために、魔女狩りをアリナが打ち切った。

アリエナイ数の魔女をテイクしてくれたからペットにしていた魔女もアリナが想定していた以上にリアリングした。だから大切にコレクションしていたんだけど……まさか、たったひとりの魔法少女にブレイクされるなんて思いもしなかったヨネ。あんのキンパツめ……。

ま、そんなバッドイベントもあつたけどアリナのメインプランは順



調に進んでいたワケ。

「アリナ！　いつまでも絵ばっかり描いてないでわたくしたちの手伝いをしてよね！」

「アリナはアリナの仕事をしていますはずですケド」

「もー！　本当に最低限の事しかしていないじゃない！　それにそんなに作品を作りたいならねむの手伝いでもしなさいよ！」

そのセリフを待っていたワケ。

ねむが百恵専用のウワサを作るのに四苦八苦しているのはしつかり耳にしている。ま、とーぜんだヨネ。

精神的に揺さぶった後にウワサを憑依させたバマミの時と違って百恵には隙がない。つまり、生半可なウワサ程度では百恵を支配することなんてできない。より百恵と相性が良くて、憑依させた後の百恵を都合よく操れるようなウワサを御所望だった。そんなピンポイント過ぎるウワサなんて、百恵のことを理解している人物が協力しないと到底クリエイトできない。だからアリナの協力が必要不可欠だったってワケ。

そして、完成したのが『神浜最強のウワサ』。

ねむは由比鶴乃専用のウワサである『キレートビッグフェリスのウワサ』をクリエイトするのに忙しかったから、ほぼアリナが自由にデザイン出来て、最後引き渡すときに欠陥部分を隠して、あたかもアンチ百恵に特化させたように説明したらすぐに採用が決まった。計画がとん挫しまくって、余裕がなくなっていたふたりの目を欺くのはベリリージーだったヨネ。

このウワサの情報を『万年桜のウワサ』に伝えれば仕込みは完了。

あとは百恵を助けに来たやつらに任せて、百恵を救い出させ……百恵が自分の意思で『神浜最強のウワサ』を取り込めば……アハッ。

この狭くて細い可能性と確率を越えた先に、『復活した星奈百恵』という『生ける死』が誕生する！

失敗するとは微塵も思っていない。

だってごまんという百恵を慕う魔法少女ならなにがなんでも百恵を助け出すだろうし、百恵自身だって、ああ見えて実は『生』にしが

み付こうとしているんだカラ……。

捨て身な行動や過激な発言は死に場所を求めているから。

じゃあ、なんで死に場所を求めめるのか。……誰かに殺されたいと願っているから。

じゃあ、なんで誰かに殺されたいと願うのか。……自分で命を絶つことができないから。

じゃあ、なんで自分で命を絶つことができないのか。……本当は生きたいと願っているからだ。

でも百恵にはもう時間がない。寿命は既に目の前に迫っていて、それは叶わない。だから『生』を諦めざるを得なかった。だから無理をしても『魔法少女の解放』に拘って……そして前に倒れて死のうとしました。美しいと思わない？

でもよかつたね、百恵。

その美しい強さが、そしてその美しい弱さが自分の命を繋ぐ最後の希望になったんだから。

結果は……大成功だった。

案の定、百恵は完全体となって復活した。

もう『死』の気配なんてない。圧倒的なまでの『生』。ウワサが剥がれた瞬間にそれでおしまい。けれどもウワサが剥がれなければ……おそらくウワサが朽ちるまで生き続ける。

これこそまさしく『生ける死』。

寿命はとつくに來ていて死んでいるにも拘らず、『生』にしがみ付いて命を繋いでいる極限状態の体現。それが今の百恵。

でも、まだ足りない。

ベースはアリナが作りはしたけどそれを積み上げたのは百恵と、七海やちよをはじめとする百恵を助け出した何人かのベテラン級の魔法少女たち。それじゃあ、アリナのアートとは呼べない。

だから最後はアリナが仕上げる。

百恵をアリナのベストアートとして相応しい、サイッコーの作品に昇華させる！

「さあ、百恵！　アリナのベストアートの力……アリナに見せてほし

「いワケ！」

「よかろう。ただし、きつとビツクリするぞ？ 腰を抜かしてギツクリ腰にならないように注意するんじゃないやな、アリナ。痛いし……クセになるからの？」

……アハツ。

S i d e . 御園かりん 似た者同士

上空でワルプルギスの夜の使い魔を薙ぎ払っているわたしの真下で、様々な高さと角度、距離から無数に放たれる七色の光線が、廃墟になりかけている参京区の闇を縦横無尽に駆け巡っていた。

「まったく……困ったものじゃのう」

「どうしたものかの」と苦笑いしながら、先生は光線を縫うように躲し続けていた。

なぜか肩には小さいキュウベえが乗っかっていて、振り落とされないように肩紐の中に器用に入っしてしがみ付いている。

先生とアリナ先輩の戦いが始まって既に十分が経過しようとしているけど……状況は硬直していたの。

先生は万能型の魔法少女。

武器を使えばなんでもあり、武器を使わなくても自慢の腕っ節があるし、魔力を使えば帯を自由自在に操ることができる。体格を活かした機動力の高さも相まってどんな状況、どんな相手にも対応できる最強の戦闘特化型魔法少女。そんな先生は、本気を出せばどんな魔法でも魔法少女でも十分もかけずに叩きのめせる力を持っていたの。

それなのに……。

「……チィー！ これもダメか！」

「アハハ！ どうしたの、百恵！ アナタの本気がそんなものなワケがないヨネエツ！」

十分経った今でも、アリナ先輩に傷ひとつ付けられていないの……！

先生は得意の接近戦を仕掛けていたの。

アリナ先輩が幾重に放つ光線を全て躲しながら近づいてその剛腕を振るっていた。まともに受けたら気絶は覚悟しないといけないよな一撃、繰り出す攻撃の全てが必殺級の先生の自慢の拳。

それをアリナ先輩は真正面から受けた。

だけど、アリナ先輩は微動だにしていけないの。

よく見ると、先生の拳はアリナ先輩に届いていなかった。ミル

フイーユ状に形成された結界が正確に先生の拳を受け止めて威力を殺しているの！

「……全く困ったもんじゃ。この私の拳を受け止めるとはの。はて、お主の防御力はそこまで高いものじゃったかの？」

「アリナの魔法くらい知っているはずだヨネ？」

結界生成。

それがアリナ先輩の固有魔法らしいの。

対象物を空間ごと覆って閉じ込めるのは勿論、単なるバリアを展開させることもできる応用も利く防御特化型の固有魔法。アリナ先輩はそれを先生の拳が来る場所だけに一点張りして、さらに重ねて展開することで先生の攻撃を相殺していたの……！ 今も先生が拳を突き出したまま力を込め続けているけどビクともしていない！

「それにさア……こんなにアリナに近づいて、いいのかなア？」

そしてアリナ先輩が先生の肩を掴んだ瞬間――

「!? ぐっ……!」

なにかを感じ取って血相を変えた先生はアリナ先輩の手を振り切って距離を取った。

え？ どうしたんだろう。あの先生があんなに焦って……。

「こいつは驚いた。アリナよ、お主、私の魔力を奪う……いや、吸い取りおったな？」

「アハッ！ イグザクトリイ、ご明察！ アリナのウワサの力でねえ……」

アリナ先輩が身に纏っているウワサは、『毛皮神のウワサ』。

凍える相手を温める代わりにその命を吸い取るウワサ。その性質は先生の助けになっている『神浜最強のウワサ』と酷似していて、平たく言うなら相手の命を自らの命に変換するウワサ。

でも使い方がまるで逆なの。

先生はウワサと同化することで、固有魔法である『身体強化』……正しくは『成長加速』によって得られるエネルギーを糧に命の炎を燃やす、言うならエネルギーを生み出すことに特化させている。

対してアリナ先輩は、固有魔法の『結界生成』で閉じ込めた相手か

らエネルギーを奪うことに特化させているみたいなの。

だから相性は最悪。

生み出す側の先生には限界がある。長期戦に持ち込まれて損をするのは明らかに先生の方なの。

「ふむ、お主に触れられただけで私は力を失うのか。ならば拳骨で置きするのは悪手じゃのう。帯を使ってもダメそうじゃ。……致し方あるまいな」

そう言った先生は……右手に武器を出して握りしめた。

今までどんな魔女も真つ二つに両断してきた、刃の部分だけでも先生と同じくらいの長さで幅を誇る、二匹の龍の紋様が描かれたあの大剣を。

「私に武器を使わせた魔法少女はお主が初めてじゃ。誇るがよいぞ、アリナ」

「アツハハ！ サイツコー！ アナタの命が吸い尽くされると、アリナの体をふたつにするの……どっちが早いカナアツ！」

再び光線の乱れ撃ちが始まった。絶え間なく先生に七色の光線たちが向かっていく。

この光線は多分、先生の動きを制限するためなの。行く手を阻むものがなければ高速で移動できる先生の足を封じるための布石。イブと融合しているから余裕があるとはいえバカにならないほどのエネルギーを消費しているだろうけど、こうでもしないと簡単に首を捉えられてしまうから必要経費と割り切ったの一手。先生を舐めていないからこそこできる攻撃。

四方八方から濁流のように迫る七色の光線。その中心にいる先生は片手で剣を振るい、綺麗に一回転。すると剣圧による衝撃波が先生に向かう光線たちを薙ぎ払っていく。

そして光線を斬り裂いても衝撃波は威力が弱まることはなく、そのままアリナ先輩を襲った。

でも、アリナ先輩はそれを見ても笑うだけ。

特に何もすることなく衝撃波を受けるも、何事もなかったかのように佇むだけ。それだけでアリナ先輩を守っている結界がいかに強固

なものなのかを物語っているの。

先生の攻めはまだ終わらない。

一回転させた勢いのままに上から縦に一振り。さらに振りかざして横に一振り。もはや伝説として語り継がれているどんな魔女も四等分にして滅ぼしてきた、先生自慢の二撃必殺の十文字斬り。本気の先生の攻撃だ。先生もアリナ先輩のことを舐めていない。武器を使って本気で応戦しているの。

『女王グマのウワサ』を一撃で倒した攻撃！ アツハハハ！』

そんな先生の本気を前にしてもアリナ先輩は楽しそうに笑った。するとアリナ先輩と一体化しているイブの翼が動いて、アリナ先輩を守るように覆う。先生の放った衝撃波はイブの翼を砕くも、その先のアリナ先輩には傷ひとつもつけられていなかった。

だけど、イブの方が先生の攻撃に耐えられなかったらしいの。

翼からどんどん亀裂が入って行って、ただでさえボロボロだったイブの体がさらに崩れ落ちていく。

「フーン潮時、か。じゃあもう、イブに用はないヨネ」

「もう良いのかの？」

「イブの魔力は全部アブソープしたカラ？ もう本当に抜け殻なんだヨネ。こんなのも壁にはなるケド？ 重くて邪魔だし、こつちの方が動きやすいし……もつと百恵を堪能できるヨネ？」

アリナ先輩の体がイブから離れて地に足を着いた。イブとの融合を解除したの。その証拠に切り離されたイブの体の崩壊が止まらない。

「モツキュ、モツキュ！」

「む、なんじゃお主」

「モツキュ！ キュー！」

「……ふむ、なんだかよくわからぬが……」

突然騒ぎ出した小さなキュウベえを先生が帯を使って持ち上げる。そしてそのまま振り上げて。

「ずっと鬱陶しかったから行ってくるがよい！」

「モツキュ……っ!!」

イブに向かつてぶん投げたの。大砲に飛ばされたような勢いのまま、まっすぐにイブに向かつていく小さなキュウベえ。アリナ先輩は全く興味を示さずガン無視。

阻むものがなくイブの元、輝が入った赤い宝石に小さなキュウベえが触れた瞬間、小さなキュウベえと崩壊していたイブの体が光り、それは虹色の光となって神浜中に拡散していった。……えっと？

「どーでもいいんですケド、今なにが起こったワケ？」

「知らん」

「あつそ」

そしてこの話題はこれで切り上げられてしまった。

なんかとても大切なことが起こった気がするけど……まあ、いいの。今はこのふたりの勝負の方が重要だから。

文字通り、それぞれ肩の荷が下りたところで第二ラウンドが始まった。

イブとの融合を解いたことで身軽になったアリナ先輩は戦い方を一変。積極的に先生に近づいて力を奪う戦い方に切り替わった。

手を触れられただけで魔力を吸収される都合上接近を許すわけにはいかない先生は遠距離・中距離からの衝撃波で対応している。けれど、それだとアリナ先輩を覆う結界を傷つけることができず、アリナ先輩の動きを封じ込めることができないでいる。

そしてとうとう目の前に迫ったアリナ先輩に、巨大な剣を縦一文字に振るった。でもそれがなんのその。アリナ先輩はいとも容易く振り下ろしてきた刃を真剣白刃取りした。

「お主、イブから吸い取ったエネルギーを全て防御に充てておるなっ!？」

「その通りだヨネ！　今のアリナは今までの何倍も強い硬度の結界をクリエイトできる！　ハーフウェイな攻撃じゃア、アリナに届くことはないんだヨネエ！」

そして剣を左手で支えたまま……右腕を先生に伸ばす。この手が触れた先から先生の力が吸収される！　武器から手を放して、先生は後ろに跳躍した。アリナ先輩の右手がさつきまで先生がいた場所の



空気を切る。

そしてしばらくすると、取り残された先生の武器が先生の元に引き寄せられるようにして戻っていく。いつの間にか柄の所に先生の着物の帯が結ばれていて、それに引つ張り出された大剣は本来あるべき場所である先生の右手に帰ってきた。

「お主は私を困らせるのが得意じゃなあ。参った参った」

攻撃が全然通らず、根本的に相性が悪い先生はやれやれとした様子だった。……だけど、なんでだろう。そう言っている割には余裕があった。困ってはいるんだろうけど……。

「生半可な攻撃では届かぬ、か。それならこれはどうかの？」

そう言って先生はアリナ先輩に斬りかかる。当然黙って斬られるわけもなく、アリナ先輩は先生の刃を受け止めた。

「ふむ、ダメか」

納得した表情を浮かべた先生はすぐにアリナ先輩から距離を取った。……剣を握りしめたままで。

「ならばこれはどうじゃ？」

全く同じように何かを試すように斬りかかる先生。それでもアリナ先輩は余裕で受け止める。

「ふむ、それではこれは？」

今度は距離を取らず、アリナ先輩の手から剣を引き剥がしたのと同じ時に斬り込む。

すると今度は今まで先生の刃を受け止め続けてきたアリナ先輩の方に異変が起きた。ほんの一步だけれど……剣を受け止めたときにアリナ先輩の体が後ろに動いた。一步後退ったの。

「……！ そんな……まさか……！」

「ふむふむ、そうか。それでは……」

驚愕に染まるアリナ先輩とは対照的に、先生は納得した様子で剣を引き上げて……。

「これくらいかの？」

振り下ろした大剣が、受け止めたアリナ先輩の体に大きな衝撃を与えた。

今までは余裕で受け止められていたはずの攻撃が受け止めきれなくなっていてアリナ先輩は驚愕している。辛うじて両手で受け止められているけど、片膝についてもう潰れるギリギリなの。さっきみたいに左手で支えて右手を出すなんて余裕はないみたいなの。

「百恵、アナタこの状況で……!」

余裕が完全に消えたアリナ先輩は控えていたキューブから光線を一気に放つ。至近距離からの光線の波を受けた先生はすぐに上に跳躍して回避、そしてそのままアリナ先輩と距離を取る。

立ち上がったアリナ先輩はさっきの攻撃が重かったのか、若干足が震えながら立ち上がる。両手の平もぱっくりと斬られて血を流している。

「やつと攻撃が届いたのう。なるほど、これくらいか。これで安心して仕置きができるというものよ」

「やっぱり……アナタ、この期に及んでまだ手加減していたワケ!？」

……先生から感じていた余裕の正体がようやくわかったの。

先生は武器を使い始めてからもなお、全力を出して戦ってはいなかったんだ。

アリナ先輩を殺さないように、それでいて勝てるように調節しながらずっと戦っていた。だから劣勢の時も慌てていなかったし、アリナ先輩に攻撃が届かなくても困るだけだった。

そして今、調整が完了したんだ。丁度良くアリナ先輩を倒せる程度の力に。

「ふぎけないでほしいワケ百恵！　アリナは全力のアナタを見たいワケ！」

「ふぎけてなどおらん。私が全力を出したらうっかり殺してしまうかもしれないじゃろうが」

「構わないから全力を出させて言ってるの。アンダースタン？」

「断る。殺す気にかかる必要がない」

「だから——」

「しつこいのう——」

「アリナを殺せと言っているのが、わからないワケッ!?」  
「お主を殺さんと言っているのが、わからんのかアツ!?」

ふたりの先輩が叫んだ。それだけで、アリナ先輩の周りには無数のキューブが出現して、先生の周りにはウワサを身に宿したことで後天的に習得した炎の魔法によって構成された無数の魔力弾が生み出される。

規格外の魔力の持ち主たちが感情が昂ってしまったばかりに、無意識のうちに魔法を発動させてしまっているらしいの。

「アナタはまだ完成してない! 最後の仕上げが残っているワケ!」  
「それがお主の命を取ることにじゃと言うのか!」

「そう! 最高の状態のアナタがアリナの血に濡れることでようやくアナタは完成する! これ以上もないアリナのベストアートの!」  
「お主は一体何を言っておるのじゃ!? 嫌に決まっているであろうが!」

「拒否する権利なんてないんですケド! アナタはアリナのアート! クリエイターの言うことを聞くのはとーぜんだヨネ!」

「仮に私がお主のアートとして、芸術家を殺すアートがあるか大バカ者が!」

「アナタがなるんだよおおおおっ!」  
「おっ断りじゃああああっ!」

……わたしの真下がとっても賑やかなの。

ふたりが声を張り上げる度に緑色と赤色が交差し、小さな火花が廃墟と化した参京区のだ真ん中で打ち上げられる。

でもメインの戦闘は、先生からエネルギーを奪いにかかるアリナ先輩と、それを躲しながらカウンターを仕掛ける先生の接近戦。光線と魔力弾の撃ち合いは本人たちもきつと意図してやっていないの。

「この期に及んでなんでアリナを殺そうとしないか理解に苦しむワケ! もう間もなくしたらこの神浜にワルプルギスの夜の本体が来るのを忘れたワケ!」

「きつちり覚えておるわ! おかげさまで一刻の猶予もない!」

「だったら手っ取り早くアリナを殺せばいいヨネ!? アナタを最高のアートにできてアリナはハッピー、アリナを倒してアナタもハッピー。win-winだと思わないのかなアツ!?!」

「……今、なんと言った?」

多分だけど今まで聞いてきた中で一番静かで、冷え切った先生の声がわたしの耳に入った。

「お主を殺して私がハッピーじゃと?」

そのアリナ先輩の言葉を反復させて……先生の火山が噴火した。

「ふざけるでないぞツ! 私はのう、自分の命の恩人を殺して幸せになる趣味なんぞ持ち合わせておらぬわ!」

「は?」

アリナ先輩がポカンとした顔をして攻撃する手を止めた。

隙だらけになっているけど先生は踏み込もうとしない。というより、この隙を突こうという考えに至っていないかった。

「なるほどな、やちよたちが怒るのも尤もじゃ。確かに許せんなあ、自分を助けた者が勝手に死のうとするのは。しかもあろうことか、助けた本人の手にかけてさせようとするとはの!」

「は? 何を言っているワケ?」

なにが先生の琴線に触れたのか、アリナ先輩はわからないみたいなの。

「アリナは別に、アナタのことを助けようとしたわけじゃないんですケド?」

「お主にその気が無かったかもしれないなあ、正真正銘、私はお主に助けられた、お主のおかげでここに立つことができているのじゃ! 生き永らえておるのじゃ! これは紛れもない、事実なのじゃよツ!」

これは先生の言う通りなの。

確かにアリナ先輩はアリナ先輩の思惑があったのかもしれないの。アリナ先輩の欲望のためだけに動いて、結果的に先生は助かったのか

もしれない。でも、それでも……。

先生の命を助けたのは……他でもない、アリナ先輩なの。

「お主が『神浜最強のウワサ』を作らなければ、お主が裏で手を回さなければ私はもう死んでいた。私はこのう、お主に感謝しているのじやよ。心の底からつ、表裏なくなあつ！ それなのになんじや！ さつきから私を完成させるやらなんやら訳の分からぬことを！」

先生は乱暴に武器を地面に突き刺してアリナ先輩に近づくと、肩を掴んでしゃがませて強引に視線を合わせた。

「お主を殺す程度で私が完成すると本気で思っておるのか！ 私はなあ、言つちやあなんじやがちつとも全力を出しておらぬぞ！ 出さずともお主を殺すことなど簡単にできるからじや。そんな私に殺される程度のお主が死んだ程度で、私が完成すると思つたか！ 思い上がるなツ！ ひとりで勝手に満足して死のうとするでないわツ！ 勝ち逃げなんて狡い真似は許さぬぞ！」

その言葉は、まるで過去の自分に言い聞かせているみたいだったので。

ひとりで勝手に自分の運命を決めつけて、全てを諦めてしまつて助けを呼ぶことをしなかった、ほんの少し前までの自分に叱りつけているみたいだったので。

先生が『マジウス』の中で唯一、名前を呼び合うほどにアリナ先輩に心を許すことができたのは、もしかしたら先生とアリナ先輩がどこか似た者同士だったからかもしれないの。

「そうなの！」

気付けば、私は地上に降りていて、アリナ先輩に頭を下げていた。

「アリナ先輩、先生を……星奈百恵先生を助けてくれてありがとうなの！」

「……フルガール」

「わたし、ずっと先生を助けたかった。自分の魔法に蝕まれていく先生を助けたくて、でも方法がわからなくて、ずっとどうすることもできなかつた。だから、先生を助けてくれて、わたしすごく嬉しかったの！ アリナ先輩が先生を助けてくれたって頭で理解してから

ずっと、ずっと、本当はお礼を言いたくて……」

あの時は余計なことを考えて、変な疑念をアリナ先輩に抱いていたから言えなかった。でも、今なら言えるの。

さつきも言ったけど、どんな理由や目的があったとはいえ、アリナ先輩が先生を助けたことには変わらなないんだから。わたしは本当に良い先輩たちに恵まれてるなって、そう思っているんだから！

「私が全力を出さねばならん相手が……間もなくこの神浜に来る」

空を覆うワルプルギスの夜の使い魔たちをちらりと見た先生が、なんかわたしたしから目を背けているアリナ先輩に真剣な声色で話しかける。

「なあ、アリナ。どうじゃ？ 見たくないか？ 全力で戦っている私を、その目に焼き付けたいと思わぬか？」

「……………」

「私はお主の作品なのじゃろう？ まだまだ成長の余地があるぞ、将来有望じゃぞ、完成には程遠いぞ？ 私が死に衰えていく様をずっと描き続けてくれるほどお主は私に夢中じゃったではないか。もう私に飽きてしまったのかの？」

「……………」

「もう、やめにしよう。これ以上私たちが争っても不毛じゃ。来い、アリナ。私は礼がしたいのじゃ。素晴らしい景色を見せると約束する」

「……………」

「死ぬな、生きろ。生きて私を描き続けておくれ。好きなのじゃ、お主の絵のモデルになるのは」

「…………ハア」

溜息を小さく吐いたアリナ先輩の姿が一瞬光ると、元の警察官のような魔法少女の姿に戻った。

「…………しようもないカットを一枚でも出したら許さないカラ」

「うむ、約束じゃー！」

…………よかった。

「よかったのおお…………ふたりとも、もう戦わないよね？」

「うむ、仲直りじゃ！ のう、恩人！」

「……暑苦しいから離れてほしいんですケド」

「照れ屋さんじゃのう！」

カラカラと笑う先生。だけど、笑っているのは先生だけじゃなかった。

——アハハハハハハッ……！

身の毛もよだつほどの怨嗟えんさの念が含まれている嗤い声が入る。

「……どうとう来よったか」

それを聞いて、先生はさつきとは別の笑みを浮かべた。

「かりん、私はちと疲れた。じゃから案内を任されてくれぬか？」

「アリナも疲れたカラ、ヨロシク」

こんな時でも、どっちの先輩も変わらないの。

「うん、しっかり掴まっついてほしいの」

だからわたしも、そんな先輩たちを送り届けるの。

決戦の地……ワルプルギスの夜が迫る戦場に。

一難去ってまた一難。

最後の戦いの火蓋が切られようとしていた。

## RTAパート21 Last Magia

最終決戦よりも最終決戦しているRTAはーじまーるよー！

奇跡が起きてガバ回避！ したと思いきや最後の最後にアリナがやらかしやがったおかげでタイムがあーもうめちやくちやだよ。タイムを壊す悪い子にはお仕置きしてやる！

「さあ、百恵ー。アリナのベストアートの力……アリナに見せてほしいワケ！」

ということが始まりましたVSレイブラホリナ戦です。

戦闘終了条件は、アリナを戦闘不能にするか、アリナの戦意を削ぐかのどちらか一方です。他に選択肢はありませんし、イレギュラーが起こったとしても変わりません。真上にワルプルギスの夜が来ようが、ビルが倒壊して崩れ落ちてこようがアリナはプレイヤーだけを狙ってきます。(執念が) やべえよ……やべえよ……。

タイムの都合上なんとかワルプルギスの夜の本体が神浜に上陸する前に決着をつけたいのですが、百恵ちゃんが本気を出すと勢い余ってアリナ先輩を頃してしまうので、しっかりと手加減しないとイケません。

それに加えてアリナの後ろでオデノカラダハボドボドダになっていくイブ。こいつも変に攻撃してはいけません。レインボーブラッドホーリーアリナのエネルギー源であるこいつを潰せば超絶強化されているアリナ先輩のバフを解くことができますが、こいつを完全に壊すと自動浄化システムを作ることができなくなってしまう。

だからアリナとイブに過剰なダメージを与えないようにする必要はあるわけなんです。かといって手加減しすぎると逆にこちらがやられてしまうのですから全く困ったもんじゃい……。

でも大丈夫！ だって百恵ちゃんには自慢の拳があるんですもの！

☆5魔法少女昇格前の頃でも素手でこの難易度ハードの神浜を蔓延る何体もの魔女をタコ殴りにしてきた経歴のある百恵ちゃんのこと



の手が真っ赤に燃えるう！ 勝利を掴めと轟き叫ぶぜ！

そのための右手！ 右手！ あとそのための拳！ 武器なんか必要ねーんだよ！ 暴力！ 暴力！ 暴力！ 暴力！ って感じで！ アリナ、おまえには……正義の鉄槌で、その腐った心を矯正してやる！

「アハハ！ どうしたの、百恵！ アナタの本気がそんなものなわけがないヨネエツ！」

あのうすいませくん、走者ですけど、まーだ時間かかりそうですかね？

ゲーム内の時間換算で十分以上殴る蹴るなどの暴行を加えているんですがちよつと待って！ 体力ゲージ全然変わってないやん！ どうしてくれんのこれ。というか百恵ちゃんの拳を受け止めやがったぞこいつ!?

これは……アリナの魔法じゃな！

アリナの固有魔法である『結界生成』は様々な結界を生み出すことができる守備寄りの魔法なのですが、器用に、そしてピンポイントに百恵ちゃんの拳が来るところを狙って作り出しているみたいです。

本当ならこんな結界は百恵ちゃんにとって紙切れのようなものなのですが、イブから吸い取ったエネルギーの大半をこの魔法の方に回しているらしく、ザブ○グル加藤もびっくりなくらいカツチカチやぞ！

「それにさア……こんなにアリナに近づいて、いいのかなア？」

ファツ!? アリナに触られた途端に百恵ちゃんの魔力ゲージがガン減っていつているんですけどー!? 回避！ 回避いいーっ！

痛いですね……これは痛い……。

これは原作だとねむとの一騎打ちがあっさり終わってしまったばかりに全然能力がわからなかった『毛皮神のウワサ』の能力ですね。ザツクリ説明すると、触れた相手からエネルギーを吸い取る激ヤバ能力です。

これによって奪われたエネルギーは回復に時間がかかるので、いくらウワサと融合して究極完全体となった百恵ちゃんいえどもダメージが来ます。というか長時間触れられたらアウトです。魔力不足で

行動不能になります。

こうなつたら……作戦プランBに移行！

あのドレイン能力を容赦なく使ってくるのが判明しましたので  
接近戦はかなり不利。よって攻撃方法を徒手格闘から武器を使った  
ものに切り替えます。

まだアリナを倒せるレベルの出力になっていないので、このまま  
突っ込んでいくとアリナのエナジードレインの方がおそらく早い  
です。ですので多少リスキーですが武器を使います。百恵ちゃんに武  
器を使わせるとか……これって、勲章ですよ……。

「アツハハ！ サイツコー！ アナタの命が吸い尽くされると、ア  
リナの体をふたつにするの……どっちが早いカナアツ！」

物騒なことをおっしゃる。

さて、高笑いしているアリナですが決して百恵ちゃんのことを舐め  
ていません。ありとあらゆる角度からビームを撃ってくるせいで全  
然思うように動かしてくれませんし、なにより一発でも攻撃を喰らっ  
たらほぼ戦闘不能になる紙装甲の百恵ちゃんにとって、こういう物量  
で圧してくる攻撃はかなり有効なんですよね。さすが難易度ハード、  
しっかりプレイヤーの嫌がることをしてくるぜ。

でも武器を手にした百恵ちゃんに常識は通用しねえ。歴代最高打  
点を叩き出している脳味噌筋肉娘の真骨頂、見とけよ見とけよ。

向かってくるビームは全部一刀両断！ スパスパスパアツと綺麗  
に斬り裂いてF○○→ 気持ちい。

攻撃の余波がアリナを襲いますがそれでもピンピンしているみた  
いなので、ちよつと威力を上げてみましょう。はい、縦に一撃、そし  
て横に一撃！ 結果はいかに!?

『女王グマのウワサ』を一撃で倒した攻撃！ アツハハハ！

ダメみたいですね（諦観）。崩れかけのイブの翼を盾にされて無力  
化されてしまいました。全力ではないとはいえ百恵ちゃんの必札技  
を防ぐとはやりますねえ！ でもイブを盾にするのはやめてくれよ

……（絶望）。

「フーン潮時、か。じゃあもう、イブに用はないヨネ。イブの魔力は全

部アブソープしたカラ？　もう本当に抜け殻なんだヨネ。こんなでも壁にはなるケド？　重くて邪魔だし、こつちの方が動きやすいし……もつと百恵を堪能できるヨネ？」  
やったぜ。

アリナ先輩が攻撃的な性格で本当に良かったです。このままイブを抱えて守りに入られたら非常に面倒でしたが、手放してくれたのでこちらも容赦なく攻めたてられます。

それにアリナからイブが解放されたことでさつきつから百恵ちゃん肩に乗つかつているアイツをようやく手放すことができます。

「モツキュ、モツキュ！　モツキュ！　キューー！」

おうおまえの唯一輝ける舞台だぞ。

おまえを自動浄化システムに仕立てや……仕立てあげてやんだよ。おまえを自動浄化ししゅ……テムにしたんだよ！　おまえを自動浄化システムにしてやるよ（小声）。

というわけで、今度こそ当たって砕けてこーい！

「モツキューーっ!!」

ふう、やれやれだぜ。

アリナに妨害されることなくチビダヌキとイブが虹になって神浜に拡散しました。（自動浄化システムの）工事完了です。

これで残すはアリナだけ！　あとは百恵ちゃんの力でアリナを振り伏せてジュージューにさせてしましましょう！

距離を取って、斬撃！　斬撃！　動く当たらないだろ？　動く当たらないだろオツ!?　ちよつ、おま、直撃したのに体力ゲージ全く減ってねーじゃねーか！　というか近い近い近い！　エナジードレインやだこわいやめてくださいアイアンマン（意味不明）。

なんなんこのかったいの!?　衝撃波じゃ全然歯が立たないんですけど！　こうなったらリアルダイレクトアタックするしかねえ！　喰らえ！　正義の刃、覚悟しろ！

アイエエエ！　ナンデ!?　真剣白刃取りナンデ!?　これがデンセツの古代ローマカラテのワザマエ!?　オミゴト！

「今のアリナは今までの何倍も強い硬度の結界をクリエイトできる！

ハーフウェイな攻撃じゃア、アリナに届くことはないんだヨネエ  
！」

ちよちよちよつ、手を伸ばしてくるなあーっ！

ええい、もうこうなったら脳筋の最終奥義を見せるしかねえな!?

本気で怒らしちゃったねえ！ 百恵ちゃんのことねえ！ 百恵ちゃんのこと本気で怒らせちゃったねえ！ もう許せるぞオイ！ もう許さねえからなあ？ (豹変)

ちよつとずつギアを上げながら攻撃を入れていくことにします！  
なるべくアリナを傷つけないように配慮していましたがこれ以上はタイムが壊れちゃうので氏なない程度までボコすことにします！  
ソウルジェムが無事なら平気だって、それ一番言われてるから。

というわけで近づいて攻撃！ これか？ これか？ こつちの方がいいかな？ これもいいなあ(恍惚)。……ヨシ！ (現場猫) 手応えあります！ ダメージこそ与えられていませんが、余裕で攻撃を止められていたアリナが揺らぎ始めました！

ということは……こうじゃ！

「百恵、アナタこの状況で……！」

やったぜ。

ようやく攻撃が通りましたよ！ 見ろよコレえ……アリナの無様な姿をよお！ もう潰れかけじゃねーか！

いやあくようやくアタリを引きました！ これくらいで攻撃する必要があったんですね！

「やつぱり……アナタ、この期に及んでまだ手加減していたワケ!？」

そうだよ(肯定)。

手加減しないとおまえが氏んじやうだルルオ!? だから火力調整するのは当たり前だよなあ？

「ふざけないでほしいワケ百恵！ アリナは全力のアナタを見たいワケ！」

嫌です(完全拒否)。全力を見せるまでもなく、これ絶対百恵ちゃんの射程圏内に入ってるよね？ だからフルパワー百恵ちゃんは(見せ)ないです。

て、あれ？　なんか百恵ちゃん熱くなってきたくない？　おーい、炎属性になったからってヒートアップしやすくなっちゃったらアカソって。おーい、おーい。

っていうかなんで百恵ちゃんこんなに怒っているんや？

「だからアリナを殺せと言っているのが、わからないワケツ！」

あつ、これかあ！（理由）

アリナ先輩百恵ちゃんの手にかかって死ぬ気満々だったと。しかもそれで百恵ちゃんをベストアートとして完成させるつもりだったと。まったく（芸術の）御曹司の考えることはワケわかんねーぜ！

そりゃあ百恵ちゃんが怒るわけですわ。今までの経歴や百恵ちゃんの性格からして、このアリナの行動は許せるものじゃないですからね。

というかコントロール奪われてやることなくて暇なんですけど……こいつらなんで意味なく魔力弾の撃ち合いなんてやってるんですかね？　魔力の無駄すぎるでしょう女子高生。

「この期に及んでなんでアリナを殺そうとしないか理解に苦しむワケ！　もう間もなくしたらこの神浜にワルプルギスの夜の本体が来るのを忘れたワケ!?　だったら手っ取り早くアリナを殺せばいいヨネ!?　アナタを最高のアートにできてアリナはハッピー、アリナを倒してアナタもハッピー。win-winだと思わないのかなアツ！」

あつ……（察し）。アリナ先輩、その言葉はまずいですよ！

あーあー百恵ちゃん激おこぶんぶん丸になっちゃって……あれ？

でも暴れていませんね。キレ散らかしていますけど。

んーと……ああ、なるほどですね。

どうやら百恵ちゃん、アリナ先輩のことを自分の命の恩人だと思っ  
ていたみたいです。だから付き合えるところまで付き合ったし、アリ  
ナが氏のうとして知っているのを知ってブチギレたと。前々から思ってい  
ましたが性格が聖人過ぎませんかね百恵ちゃん。いったいどんな人  
生送ってきたらこんな性格になるんや？

「は？　何を言っているワケ？　アリナは別に、アナタのことを助けようとしたわけじゃないんですケド？」

ですよねー。アリナは何の理由もなしに人助けをするような性格ではありませんので、百恵ちゃんがキレている理由が分からずに呆然としています。

とうかアリナ先輩が百恵ちゃんを助けたってそマ？ ウワサ創ったのねむちゃんですし、一体どこらへんにアリナが関わっているんや？

「そうなの！ アリナ先輩、先生を……星奈百恵先生を助けてくれてありがとうなの！」

おや、かりんちゃんまでお礼を言っているということは確定ですね。百恵ちゃんはアリナに助けられたみたいです。……ということ。これはもしかして……もしかするかもしれませんよ？

再走しないで最速タイムで走ることができているのはアリナ先輩のおかげ……ということ？……（アリナ）先輩！ 好きッス！（直球）これはもう流れに乗るしかねえ！ 今このタイミングで説得できなかったら、おそらくどちらかが死ぬまで戦いが続きますので、ここがラストチャンスです！ 燃え盛る百恵ちゃんのごとく熱い言葉で説得しましょう！

世間はさあ、冷てえよなあ……。みんな君の思いが、感じてくれねえんだよ。どんなに頑張ってもさあ、「なんでわかってくれねえんだよ！」って思う時あるのよね……。でも大丈夫！ 分かってくれる人はいる！ そう！ 百恵ちゃんについて来い！！

「……しようもないカットを一枚でも出したら許さないカラ」

（百恵ちゃんに）落ちたな（確信）。

ホーリーアリナの格好から普通の魔法少女の格好に戻ってくれましたので、ここで戦闘終了です。なんとかアリナに分からせることができました。

ですが本当の戦いはここからです！

——アハハハハハッ……！！

来たっ。来た。来たなあっ!?

本RTAの最終殲滅目標、『舞台装置の魔女』ことワルプルギスの夜です！

この笑い声が聞こえたということは丁度ワルプルギスの夜の本体が神浜に上陸した証拠です！ここからは姿が見えませんが間違ありません。笑い声が聞こえた方向の空がビツカビツカ光ってますもん。もう（戦闘が）始まってる!?

こちらアカン！みんな急いで向かうで！

「うん、しつかり掴まっついてほしいの」

オツス、（輸送）お願いしまーす！

なるべく体力を温存しておきたいので移動はかりんちゃんに任せてゆつくりしましょう。

「面倒くさ……邪魔だカラ来ないでほしいんだヨネ！」

そしてアリナ先輩がビームで使い魔たちを追い払ってくれていいゾゾコレ。非常に快適で……非常に美味しい空の旅です。

おっと、近づくとつれて使い魔たちも増え始めました。アリナ先輩ひとりじゃ大変なので、百恵ちゃんも魔力弾で対応します。小回りが利くので便利なんですよねこれ。

そんなこんなしているうちに……見えてきました！

歯車に人形がくつついた馬鹿みたいにでかい魔女。こいつがワルプルギスの夜です。

上陸したと言ってもまだ海沿いなのにもかかわらずその真下と周辺はまさに地獄絵図！道路は挟れて車は吹っ飛ばされて木は根元から持つてかれて建物は倒壊してあーもうめちゃくちゃだよ。

あっちこっちに疲弊していたり気絶していたりして倒れている魔法少女たちが見られるあたり、上陸して早々ともない被害が発生しているみたいです。さすが難易度ハード、ゲーム内時間換算わずか五分でこれとは……。

あつ、やつちゃんたち見つけ！行つてきまーす！

仲間たちがやられていく中で懸命に指示を出している様子のやつちゃんというはちゃんの元にレッツツダイブ！百恵ちゃん、参上！

「百恵さん!？」

「百恵！ やつと来てくれたのね……！」

おう、百恵ちゃんが来たからにはもう大丈夫やで。

百恵ちゃんの本気、見とけよ見とけよ。

とりあえず戦っている皆を下がらせて下がらせて。疲れたでしよう、体力勝負やしなあ。よかったら百恵ちゃんの後ろで休んでいてください。

「そんな……あなたひとりでワルプルギスの夜に挑むって言うの!？」  
当たり前だよなあ？

作戦としては百恵ちゃんがひとりで前線に出てワルプルギスの夜にダメージを与え、それに続く形でやっちゃんたちに大魔法を発動してもらってワルプルギスの夜を倒す！ シンプルイズベスト！

通常では無謀すぎる作戦ですが、火力と速度をこれでもかというほどに突き詰めた百恵ちゃんに不可能はねえ！ こっちゃんが操作ミスさえしなければ勝てる！ プレイヤーの腕の見せ所さん!?!だぜ！

だから大丈夫だって安心しろよ。ヘーキヘーキ、ヘーキだから。

「百恵……信じるわよ！ 必ず大魔法を完成させる！ だから……頼んだわよ、百恵！」

おう、任されたで！

というわけで始めました、VSワルプルギス戦です。

まずは前に出て戦っていた魔法少女たちを全員下がらせて、百恵ちゃんが気兼ねなく戦える戦場を作ります。今までの戦いと違って、なにも百恵ちゃんを縛るものがないので……全力全開、フルパワーで挑んでいきます！

「百恵さん！ 全力でサポートするからッ！」

「届け！ 私のエールッ！」

それに加えて、百恵ちゃんのステータスがどんどん上がっていきます！ これはももこや夏希ちゃんを筆頭とするバフを付与する魔法少女たちの力ですね！ 全体じゃなくて百恵ちゃん個人に対してのバフなのでいつもの1.5倍は強化をもらえています！

「アハッ！ いいねその魔法！ あたしも使っちゃおうっつと！」

あつ、帆奈ちゃんもコピーして使ってくれてるっぽいです！ よくやった！ そのための上書きの魔法やで君！

さあ準備は万端です。最終決戦にイクゾオー！ デッデッデッデ



デ！（カーン）

まずはマギアゲージを溜めましょう。

ワルプルギスの夜は時間が経つと本気を出して逆位置から正位置にひっくり返ってしまいます。そうなってしまうと問答無用でガメオベールですので、逆位置の状態で致命傷を与えなければいけません。だからすぐにマギアゲージを溜める必要があるんですね。

☆5魔法少女ですのでドツペルも当然使えますがドツペルを一回使うよりも、マギアを二回使った方がダメージ効率がいいのでドツペル発動寸前でマギアを使い、さらに追い打ちのマギアを使った後、やっちゃんたちの大魔法を炸裂させます！ このRTA最初で最後のマギア！ 決めたるでえ！

というわけで百恵ちゃんに向かってくる使い魔たちを一匹残らず斬って斬って斬りまくります！ 厄介な能力を持つワルプルギスの夜の使い魔たちですが如何せん速さが足りていませんので、真価を発揮する間もなく百恵ちゃんに真つ二つにされていきます。

ザックザック斬り裂くこと100体目エ！ ヨシ！（現場猫）これで準備万端です！ あとはやっちゃんたちの大魔法が完成するまで回避に専念します！

（百恵！ 行けるわ！……終わりにしましょうッ！）

よしキター！ ほら行くどく。

マギア撃って！ マギア撃って！……パパパッてマギア撃って終わり！ タイマーストップ！ この後のイベントはオールカットで強制エンディングです！

完！ マギレコ第一部、完！ 終わり！ 閉廷！ 以上！ みんな解散！

やりました！ 私史上最速のタイムが出ましたよ！ というか直前のアリナ戦の方が長かったじゃねーか！ なんだワルプルギスの夜って大したことなかったんやな（鼻ほじ）。

さて、完走した感想（激ウマギヤグ）ですが、まあうん。チャート通りに走り抜けることこそできましたが結果オーライでしたね。

途中は完全に詰んでお祈りするしかなかったですから詰めが甘い

ところはあつたのかなと思います。といつても、こんな自由度の高すぎるゲームのハードモードですので仕方ないのかなとも思いますが。

あとはそうですね、百恵ちゃんというSSRクラスの大当たり魔法少女が来てくれたのが相当大きかったです。

特に奇行に走ることもなく円滑に進めることができたのも、ワルプルギスの夜にマギアとはいえたつた二撃で致命傷を与えることができたのも、百恵ちゃんというキャラクターに恵まれたからでしょう。

この後早送りやらキンクリやらですつ飛ばしていた全てのイベントストーリーを確認して、百恵ちゃんが本当はどんな娘だったのかも見て行こうと思います。それくらい愛着のあるキャラクターでした。

さて……そろそろエンドロールに終わりが近づいてまいりました。お別れのお時間が来てしまったようです。

以上を持ちまして、本RTAを終了とさせていただきます。ここまでお付き合いしてくださったすべての皆様、長時間のご視聴、ありがとうございました！ 厚く、御礼申し上げます！

## S i d e . 七海やちよ 神浜最強

神浜市南風区みなぎの海浜公園。

沿岸部にある大きな公園は津波によってそのほとんどが浸水し、そこから離れたところにある建物も古いものから吹き飛ばされ、残骸が他の建物やモノを巻き込んでさらに被害が広がっていく。

——アハハハハハハツ……！

魔法少女である私の耳にはしつかりと聞こえた、この大災害を引き起こしている元凶の声。この世の全てを嘲るような、それでいてなにかを嘆いているかのように囁い続けるソイツは巨大な人形だった。

機械仕掛けのおもちやのように足元が歯車になっていているサカサマの状態で神浜に上陸しようとしている負の塊……それが伝説の魔女『ワルプルギスの夜』だった。

私たち神浜の魔法少女たちはこの海浜公園でワルプルギスとの防衛戦を繰り広げていた。

まだ本体が上陸していないにも関わらずにこの被害。完全に上陸してしまつたら聞いていた伝説の通り、神浜の全てを滅ぼしてしまうでしょう。そんなことは絶対にさせない。

全く以つて遺憾のだけれど、ワルプルギスを呼び寄せたのは私たち神浜の魔法少女。だから絶対に私たちがこの状況をなんとかしないとイケない。これ以上被害を増やすわけにはいかない。なんと少しでも上陸する前に撃退、或いは討伐する。

「やちよさん……あの歯車……！」

「うん……あの歯車が本体みたいだよ」

志伸あきらさんと葉月さんのおかげでワルプルギスの弱点も分かった。まさかあの歯車が本体だったとはね。

「今までは本当に申し訳ございませんでした！」

「ウチらもしっかり働くからね！」

「ええ……迷惑をかけた分、きつちり埋め合わせをさせてもらおうわよ！」

しかも幸いなことにヘリポートの決戦は既に終わっていて、洗脳が

解けた天音姉妹とバマミさん、羽根たちも防衛戦に参加してくれている。

チームプレーを重視して羽根たちを動かしていた百恵のおかげで、羽根たちはすぐに白羽根ひとりリーダーとしたチームをそれぞれ組んでワルプルギスの使い魔たちの掃討に動き始め、腕利きの魔法少女たちがワルプルギスだけに集中できるために動いてくれていた……のだけれど。

「おつかしいなあ……あたし結構攻撃には自信があっただけどなあ……！」

「嘘でしょう……ティロ・ファイナーレが全然効いていないなんて！」  
百恵の魔法を使って大幅に強化されている帆奈と、高火力な大魔法が自慢のバマミさんの攻撃がまるで効いていない。私を含め、他の魔法少女たちもそれぞれ最も強い攻撃を浴びせているのにもかかわらずビクともしていない。というか攻撃がそもそもワルプルギスに届いてすらいらない。見えない障壁か何かに阻まれてしまっ言葉通り傷ひとつ付けることができないでいる。

みんなそれぞれの大魔法を発動し続けていたせいで消耗が激しい。中には弱ったところを狙ってきた使い魔たちにやられて倒れてしまっている子までいる。

「やちよさん、大丈夫ですか」

「ええ、ありがとう、いろは」

私はなんとかいろはの回復魔法のおかげでまだ戦ってはいるけど、いろはもいろはで消耗しているから大魔法を発動できるのもあと一回が限度。でもいまだにワルプルギスを攻略する手がない。

「いったい、どうすれば……そう思っていた時だった。」

「待たせてすまなかったのう。助太刀に参ったぞ」

私の目の前に希望が降り立ってきたのは。

「百恵さん！」

「百恵！ やつと来てくれたのね……！」

「うむ、もう大丈夫じゃ。……奴さんはまだ完全には上陸してはおらんようじゃのう」

相手はある伝説の大魔女であるというのに、百恵はそいつを見ても特に動じることはなかった。その小さな背中は見えた目以上に大きく感じ、華奢なはずなのに不思議な安心感があつた。

「やちよ、今すぐすべての魔法少女を呼び戻せ」

「え？」

「前に出ている者を全員戻すのじゃ。——代わりに私が、ひとりで前に出よう」

その安心感を吹き飛ばすともない提案をしてきた。

「そんな……あなたひとりでワルプルギスの夜に挑むって言うの!？」

いくらなんでもそれは危険すぎる。

ウワサとの融合で全盛期以上の力を取り戻しているとはいえ、ワルプルギスだけじゃなく無数の使い魔も暴れまわっているあの魔境にたったひとりで飛び込むのは無謀だ。腕利きの魔法少女たちが複数人でかかってギリギリで食い止めているというのに。

「そうじゃ。これは自惚れとかじゃなくてな、本当に今の私は絶好調なのじゃよ。じゃから前線は私に任せてほしい」

「でも……!」

「それに、な。巻き込んでしまうかもしれんからの」

「巻き込む?」

「うむ。今回ばかりは久しぶりに全力でかからねばならん相手じゃからのう。周りを気にしている余裕がなさそうなのじゃ」

「!」

百恵の全力。

今の今まで全ての戦いで手を抜いていた百恵がそのリミッターを外すと言っている。手加減していても弱体化していてもなお圧倒的な力を誇っていた百恵の全力。……確かにそれじゃあ、百恵の周りで群がっていても百恵の邪魔にしかなさそうね。

だけどそれでもリスクが高すぎる。百恵は絶対強者であつても絶対無敵じゃない。全力を出したとしてもワルプルギスに勝てる保証はどこにもない。もしここで百恵を失うことになったら。そう考えるだけでもう絶望しかない。

「なーに、安心せい。できんことは言わん。必ずや、突破口を開いてチャンスを作る。そしてお主たちがとどめを刺すのじゃ」

「百恵……」

「私を信じろ」

ウワサとの融合が影響したのか、八重歯になった歯を見せてにっと百恵が笑う。それは今まで頻繁に見せていたなにかに諦めたような笑顔とは程遠い、やる気満々で勝気なものだった。

「私は……信じます！」

それに充てられたのか、私よりも先にいろはが答えた。百恵とまとも会話した数も少ないはずのいろはが。

「百恵さんが凄い人だってことは、いろんな人から聞いています。やちよさんも鶴乃ちゃんもフェリシアちゃんも、百恵さんと関わりがあんまりないさなちゃんも、それ以外の凄い魔法少女たちもみんな口を揃えて言うんです。百恵さんは最強の魔法少女だって！」

「ふむ……」

「ですから私は信じます！ こんなにみんなから信頼されている百恵さんなら、必ずチャンスを作ってくれるって！」

……まったく。本当にいろはは凄い子ね。私が言おうとしたセリフを全部言われてしまったわ。

「今すぐ、全ての魔法少女をここに集めるわ。後方支援は任せてちようだい」

「……ありがとうな、やちよ」

「これくらいなんてことないわ」

これからワルプルギスに単身で突っ込むあなたに比べたら、ね。

私はすぐにもふゆや十七夜、ななかにこのはといったリーダー格の魔法少女たちに念話を送り、そこからすべての魔法少女に対して戦闘を中止して撤退し集合するように伝達する。すると全員すぐに私の指示に従って周りで戦っていた魔法少女たちを集め、海浜公園に降り立った。

「ふう、やはり百恵さんが来たんですね」

「待っていました、百恵先生」

「モモちゃん、あそこに行く前に調整するわよお。そこに横になって楽になって頂戴♪」

神浜の最高戦力というのは存在するだけであらゆる戦場を覆す。それはたとえ、ワルプルギスの夜との決戦の場であっても変わらなない。百恵が来た以上このままの戦闘を続行するよりも一回退却して、百恵を軸にして戦略を練り直す方が得策だもの。数多くの修羅場を乗り越えて、立場が違えど必死にこの神浜を守り続けていた私の仲間たちだから、私が退却の指示を出しただけで百恵が来たことを察して素直に従ってくれたんでしよう。

そして最終チェックが終わったかりんと、見回り中ずつとかりんを結界で守り続けていたアリナ・グレイが戻ってきて、白羽根黒羽根を含めたすべての神浜の魔法少女たちが集結した。

作戦はとてもシンプル。

神浜最強の魔法少女、星奈百恵がワルプルギスを守るバリアを破壊して突破口を作り、残った私たちがワルプルギスの本体を一斉攻撃する。

味方を強化させられる魔法を使える魔法少女たちは全員百恵に対して魔法を使い、ワルプルギスの動きを制限できる魔法少女たちが百恵のフォローを、それ以外の子たちは私というにはに魔力を提供してもらう。幸いにもエネルギーの回収にはいるのは妹さんのういさんが、エネルギーの変換には里見さんといううってつけの魔法少女がいる。「でもそれって……星奈さんが一番危険なんじゃ……」

巴さんが言う通り、この作戦の成功は百恵にすべて委ねられている。そして一番負担が多いのもまた、百恵だ。

「巴さんの話は尤もですが、かといって我々が付き添うわけにもいきません」

「そうね……正直に言つて、足手纏いにしかならなさそうだわ」

「付き添いの自分たちの身を案じさせてしまうくらいなら、ついて行かない方が星奈にとっても楽だろう」

「でも本当にひとりで大丈夫なの？」

「神浜の最高戦力をこんな無茶な作戦で失う方が痛いんじゃない？」

神浜のベテラン魔法少女たちが賛成して、百恵の力を知らない見滝原の魔法少女や新参の魔法少女たちが消極的になっていくわね。まあ想像した通りだし、私が出る必要はないでしょう。ねえ、百恵？「いいや、作戦の変更はない。この方法でワルプルギスを倒す」

みたまの最終調整が終わった百恵が良く通る声で言い放った。自然と全員百恵を注目するような形になる。

「え、え？ あれが……星奈百恵さん？ 神浜最強の？」

「えつと……」

「……んまあ、そんなリアクションになるわな」

美樹さんと巴さんは知らなかったらしく困惑し、佐倉さんが苦笑していた。

「さて、手短かに話そうか。心配かけてすまなかったのう、じゃがもう大丈夫じゃ。みんなのおかげで私はこうして戦場に立てておる。じゃからのう、恩返しをしたいのじゃ。この事態を招いてしまった原因は私にあるからのう。私の蒔いた種じゃ、私が摘み取るのが筋じゃと思う。……じゃがのう、私ひとりじゃ無理じゃ。私ひとりではワルプルギスの夜は倒せん。みんなの協力が不可欠なのじゃ。じゃから……どうか、私を信じて、力を貸してはくれぬかの？」

頭を下げる百恵を見てざわついた。あまり他人を頼ろうとせずにとりで背負い込みがちだった百恵が今、私たちを頼ってきているのだから。正直、凄い成長だと思うわ。プライドが高いあの百恵が、こうしてみんなに頭を下げて助けを求めらるなんて。

「あの……星奈百恵さん」

「なにかの？」

「その、本当にできるんでしょうか。本当に、この作戦でワルプルギスの夜を倒せるんでしょうか？」

……これは驚いたわね。

見滝原組の中で一番おとなしそうだと思っていた暁美さんが、百恵のところまで来てそんな質問をするなんて。しかもどこか雰囲気が違う。言い方はおかしいけど他の誰よりも真剣で、本気でこの作戦が成功するのかわかどうかを問いただしている気がする。少しでも納得し



なければ自分ひとりでもワルプルギスに突っ込んでいつてしまいうな……少し前までの百恵と同じような危うさを感じる。

百恵もそれを感じ取ったのか、暁美さんの目を離さずに数秒見つめ合った後……にかつと笑った。

「当たり前であろう？ 私は強いんじゃない」

その言葉は、私と初めて会った時のものと全く同じ言葉だった。

短く単純ながらも力強く、自信に溢れたこのセリフ。他の人が言ったならバカバカしいと、自惚れているんじゃないかと一蹴出来たでしょう。でも百恵は違う。

誰がどう見ても分かる確かな実績と経験からくる説得力がこの言葉を強くする。そして不思議と安心してしまう。百恵に任せれば上手く行くと、そう思わせられて自然と受け入れてしまう最強の答えだった。

「……わかりました、信じます。……必ず、必ずワルプルギスの夜を倒しましょう」

「うむ！ 私に任せるがよい！」

そんな答えが返ってきて面食らった暁美さんは瞳を大きく揺らすも、すぐに結論が出たらしく百恵を信じる道を選んでくれた。

暁美ほむらさん、なんだか不思議な子だった。でも面白くて強い子ね。百恵に対してあんなにストレートに真っ向から意見を言える子もなかなかいないわよ。

百恵と暁美さんのこのやり取りのおかげで作戦に対する異論はなくなった。神浜にいる全ての魔法少女たちが今、ひとつになった。

「百恵……信じるわよ！ 必ず大魔法を完成させる！ だから……頼んだわよ、百恵！」

「私もじゃよ、やちよ。必ず突破口を開く。じゃから……倒すぞ、ワルプルギスの夜を」

こつんと軽くフィストバンプをして私は後ろに、百恵は前に進む。「さて……まさか、こいつの本来の姿を見せる日が来るとはの」

武器である巨大な剣を出して軽く撫でると……黒銀色と白銀色の龍たちがそれぞれ鈍く光り、割れた剣先から二つに分かれてそれぞれ

百恵の両手に収まる大双剣に変化した。……百恵の本当の武器って双剣だったのね。武器すらも手加減していたとか……本当に参っちゃうわ。でもこれが本当に百恵の奥の手なのでしょう。

「む？」

さらに百恵の背中から炎の翼が生えていき、腰を縛っている帯がひとりでうねうねと動いて炎に包まれた。神浜最強のウワサの力だった。百恵の様子からしてウワサが自らの意思で勝手に操作しているようだった。

「そうか、お主も手伝ってくれるのじゃな。じゃあ……行くか」

柔らかな微笑んだ百恵が少し跳躍すると炎の翼が羽搏いて熱風と共に百恵は空へ飛び立ち、手当たり次第に使い魔たちを両断していく。

豪快な衝撃波で使い魔たちを一掃していた大剣とは違い、軽やかな身のこなしとスピードで直接敵を斬り裂いていく双剣を操る百恵は向かうところ敵なしの無双状態だった。両手が塞がっているから防御に適してはいないものの使い魔たちは百恵のスピードについていけないし、背後を狙おうにも神浜最強のウワサが操る炎の帯によって撃墜される。ワルプルギスも百恵の異常さに気が付いて攻撃しているみたいだけど、百恵には当たることなく代わりに自分の使い魔たちを消滅させるだけ。空での戦いは完全に百恵が掌握していた。

一方、地上で戦う私たちも決して穏やかじゃない。

私というは最後の大魔法を発動させるための準備に追われているし、戦闘可能な魔法少女たちは私たちの護衛を、拘束魔法の使い手たちはワルプルギスの対応を、力を強める魔法の使い手たちはそれだけに集中していて、里見さんもういさんもエネルギーを集めて変換するので手一杯。このどれかが瓦解しただけでこの作戦は失敗する。

ワルプルギスは百恵を狙っている上に数多くの拘束魔法のせいで若干動きが鈍くなっているけど、無数に飛び交う使い魔たちはそうもいかない。一匹の使い魔のせいで私たちの作戦が水泡に帰す可能性がある以上、こちらも油断することができない極限状態の中にいる。

「あーっ、もう面倒くさ！ 鬱陶しいんだヨネ！ さつきから！」

その戦場の中でひととき面倒くさそうな声を上げる魔法少女がいた。みんなが戦っている中我関せず、どこから取り出したかわからない椅子に座って空を見上げながら何かを描き続けていた緑髪の魔法少女、アリナ・グレイだった。

アメリカンポリスみたいな衣装から一転して聖女のような姿になったアリナがバチンと指を鳴らすと、彼女の中心から発生した結界が徐々に膨らんでいって使い魔たちを消滅させていく。やがて大きな緑色の結界が海浜公園全体を包み込み、殺伐としていた地上は平和なものになった。使い魔たちはこの結界を破るのはおろか、触れた瞬間に結界に魔力を吸収されて消滅してしまうので近づくことすらできないでいる。

「じゃ、さっさと終わりにしてヨネ」

「もう！ アリナったらそんなことができるなら最初からやってよ！」

「は？ なんでベリービジーなアリナがこんな雑魚の相手をしないとイケないワケ？」

「絵を描いているだけでしょー!? もう！ 本当にいざというときにしか動かないんだから！」

……この里見さんのお小言には私も同意するわ。

まあでもおかげでこっちはサポートに全力を費やせる。戦闘組もエネルギーを提供してくれるようになったから回収効率も良くなる。後は私たちが大魔法を完成させるだけ。

大魔法のベースとなるのはいろはの魔法だ。私よりも一点集中な上に武器がクロスボウなおかげで飛距離もある。上空にいるワルプルギスにも届く。威力が心許ないのが難点だけれど、それを補うために私たちがいる。

「これで全部！ 回収終わったよ！」

「うん！ これをわたくしが変換して……完了！ お姉さま、受け取って！」

「ありがとう、うい！ 灯花ちゃん！」

里見さんが変換しきったエネルギーが私というはの体を包み……

そしてそれを私が纏め上げる！ ワルプルギスとの戦いの中で分かった私の本当の魔法……『引き継ぐ魔法』で！

神浜にいるすべての魔法少女からういさんへ、里見さんへと引き継ぎ、そして私たちのところまで来たみんなの魔力！ そしてそれに……かつての戦友たちであるかなえとメルの方もすべて込める！

百恵に負けていられない。こっちも全力全開、本気の中の本気の一撃をこしらえてやったわよ……！ そしてそれを、今度はいろはに引き継いでもらう！

右腕を伸ばして構えるいろはのクロスボウに巨大な矢が出来上がっていき……形が整うとこれまで以上の輝きと共に暖かな温度と色を解き放ち始めた！ 完成した。絶望を振りまく魔女の象徴であるワルプルギスを滅ぼすことができる銀の弾丸シルバーバレットを！

(百恵！ 行けるわ！)

(！ 承知した！ では……終わりにしようぞッ！)

(ええ……終わりにしましょうッ！)

この悪夢を！

ワルプルギスの攻撃を避けながら使い魔ばかりを斬り裂いていた百恵は合図を受けると真正面からワルプルギスに相対した。その手に持つ二つの剣は赤く輝いている。

「お主は結界を持たない魔女じゃったの。悲しいことじゃ。魔女にとっての結界は自分の傷を癒すことができる唯一の場所じゃというのにお主にはそれが無い。じゃからお主は世界中を回っているのじゃろうな、自分の傷を癒せる場所を見つげるために。……じゃがもう、残念じゃがそんな樂園はこの世のどこにもないのじゃ。……終わりにしよう。この無力で苦しい永遠に続くループから解き放つてやる」

赤く発光している双剣を再びくつつけていつもの大剣の姿に戻すと、刃のない中心部分から爆発的な赤いエネルギーが沸き上がってきた、それは大剣そのものを包み込んだ。

「最初に最後、私の全力にして最強の奥義をその身で受けてみよッ！

そうれんそうりゆうは  
双蓮双龍波アッ！」

真横に一薙ぎ、流れるように上段に持っていきながらの縦に一振り。それは私たちのよく知る百恵の必殺技だった。どんな魔女であつても四等分にしてきた基本にして最強の技。それは……ワルプルギスに対しても絶大な効力を齎した。

なにかが壊れたような大きな音が響いたと同時に、ワルプルギスの本体に縦に伸びる真つ赤な衝撃波が直撃する。最初の一薙ぎでワルプルギスのバリアを破つて、次の一太刀でワルプルギス本体にダメージを与えたのね……！

でもそこはやっぱり伝説の魔女。百恵の奥義をもつてしても決定打にはなりえない。だからこそ、私たちがいる。神浜の魔法少女の底力を思い知りなさい！

「環さん！ 七海さん！ 今です！」

私たちのそれぞれの肩に手を置いた暁美さんが『時間停止』の魔法を発動した。これでこの停止した世界で動けるのは暁美さんと私、そしていろはの三人だけ。神浜最強の魔法少女である百恵も、最悪の魔女であるワルプルギスの夜ですら、この魔法の前では無力。

「行くわよいろは！」

「はい、行きます！ ストラード……フトウーロツ！」

七色に輝く一本の矢がまっすぐにワルプルギスの真上に向かい弾けると、そこからはまるでシャワーのように色とりどりの光の雨が降り注ぎ、ワルプルギスの体を包み込んでいく。

百恵の二段攻撃によってバリアを破壊され、深刻なダメージを受け、そして隙だらけになつたところで放たれたシルバーバレットを受けたワルプルギスは光があたつた箇所から崩壊が始まり……終わつたところにはその姿が綺麗さっぱり消失した。

いくつもの文明を破壊しつくしてきた最悪最凶の魔女、ワルプルギスの夜が滅んだ。それを祝福するかのように厚い雲の間から日が差し、雲が晴れ、綺麗な青空が神浜を照らす。今までの攻撃の余波のせいか、神浜中に散らばっていた使い魔たちも消え去り、さっきまでの喧騒が嘘のように静まり返っている。

「……終わったのう」

そしていつの間にか、隣に立っていた私の親友が穏やかに笑う。それと同時に、別の喧騒が海浜公園内に響き渡った。現実への理解が追い付いたのでしよう。みんなそれぞれ喜びを分かち合っている。

「ええ、終わったわ。……でも、まだ続くわよ」  
「……そうじゃなあ」

全ての戦いは終わった。けれど、これは新たな日常への始まりでもある。

これからも休むことがない激動の日々を送ることでしょう。今回の事件の事後処理もしないといけないし、私たち魔法少女が抱える問題を解決する術も模索しないといけない。新しい困難がきつと待ち構えていることでしょう。

でもきつと大丈夫。

「まあ、大丈夫じゃろうて」

「ええ……そうね」

綺麗な青空の下ではしゃぎまわっている神浜の魔法少女たちを見て、百恵は愛おしそうに笑う。

今回の事件で、百恵が抱えている闇を知った。そしてどれだけ私たちを想ってくれていたのかも知った。きつと……いや、間違いなく百恵は今までのように振舞うことはできなくなるでしょう。でも、逆に今までできなかったことができるようになったでしょう。だって百恵は過去のしがらみから抜けて、老化という呪いからも解き放たれて完全復活を果たしたのだから。そしてそんな神浜最強の魔法少女である彼女も大丈夫と言ったのよ。だから大丈夫に決まっている。

……さて。

「ねえ、百恵」

「む？ なんじゃ？」

ふふつ、この百恵のリアクションもあの時と変わらないわね。癖で意図せずやっているのか、はたまた狙ってやっているのかはわからないけど……この後の返事は、あの時と同じままかしら？

ずっと断られ続けちゃっているけど、もう状況が随分と変化しているし、そろそろ色よい返事を期待してもいいんじゃないかしら？

「私とチームを組まない?」

その提案に百恵は目をぱちくりとさせて……薄く笑った。

私たちはずっと一緒に歩み続けていくでしょう。

私たちが愛したこの神浜で。

おま〇け

## ※ネタバレ注意 設定資料集※

はい、みなさんこんにちは。スパークリングです。

まずは初めに、今回は本作『マギレコRTA ワルプルギス撃破ルート脳筋傭兵チャート』を最後までご愛読していただきましてありがとうございます。御礼申し上げます。

今回は『マギレコRTA ワルプルギス撃破ルート脳筋傭兵チャート』の作成の裏話や、主人公『星奈百恵』の細かい設定、カットした没ネタ、それから今後の予定についてのお話をしていこうと思います。

本来ならこういうことは活動報告に掲載するものかと思いますが、内容が余裕で5000字を超えてしまいましたのでこちらの方に掲載します。

『ちよつと待って！ 小説じゃないやん。どうしてくれるのこれ！』とか『一般ピーポのボクの考えた最強の設定なんか気持ち悪くて興味ないよ！』とおっしゃる方！ 勿論読まなくても問題ありませんので、読みたい人だけ読んでくれると幸いです。

前置きはこれくらいにしておいて、ほんへに向かってイクゾォー！  
デッデッデデデ！(カーン)

初めに経緯から行きましょう。なぜこの小説を書くことにしたのかですが……ぶっちゃけると流行っていたからっすwww いやあ、本当にb i i m兄貴リスペクトのRTA風小説がブームになっていたんですよねあの時って。

もともと淫夢ネタが大好きだった私にはぶっ刺さりまして、ゲラゲラ笑いながら読んでいました。それと同時に執筆してみたいなと思いついて、ソシャゲのマギレコを第一部やイベントを制覇していたのもあって「これなら書ける！」と思ったからです。それだけっす。(特に大した理由は)ないです。

さて、書くことを決めて最初に設定したのは主人公でした。これを



真つ先に決めないと物語を作ることができません。魔法少女になった動機や経緯、背景にある環境こそまどマギという作品にとって最も重要な部分だと考えているからです。

ここからは主人公『星奈百恵』というキャラクターについて順番に解説していこうと思います。

◎星奈百恵というキャラクター

テーマは『意外性』と『アンバランス』、そして『ドラゴン』。

実年齢とは思えない身長、それでいて子供とは思えない雰囲気、穏やかながらも苛烈な性格、見た目からは想像できない怪力と死因などなど、どこまでも正反対になるようにデザインしました。

#### ・容姿

まんま私の好きなキャラクターがベースになっています。

ミリマスの最年長アイドルの馬場このみ姉さんと、『世話やきキツネの仙狐さん』の仙狐さんを掛け合わせています。見た目がこのみ姉さんで、喋り方が仙狐さんそのものです。

え？ ロリコンやろですと？ やっぱ（幼女が）好きなんすね〜ですと？ そうだよ（肯定）。で、でもどっちも合法やから……（震え声）。お陰様で143センチという、みゃーこ先輩どころか小学生の理子ちゃん以下の身長になってしまうことに（ちなみにこのみ姉さんと同じ身長である）。

魔法少女姿は犬夜叉の蛮骨がベースです。

大剣というより大鉾に近い武器や、それを片腕で自由自在に振り回すことのできる人間離れた腕力、終盤は熱風を活かした戦術を使う、低身長、長いしっぽヘアーというところも全部反映させています。

よもぎもぎさんが支援絵として描いてくれた星奈百恵は完全に私が思い浮かべていた彼女と同じですので、是非とも見てほしいです。あらすじにリンクを張っております。

#### ・性格

穏やかで他人の気持ちに敏感であり、それに合わせて寄り添うことができる。それでいて狡猾でキツネな性格をしていて、自分の容姿を武器にしたり、人脈や立場を利用して人心を掌握するなど、使えるものは何でも使う現実主義者。

神浜の魔法少女になら誰にでも平等に優しく扱うも線引きはしていて、ある一定の所からは踏み込ませないほどに警戒心が強いものの、一度懐に入れた人間にはべたべたに甘やかしたり尽くそうとしたり嫌われないようにしようとしたり格好いいところだけを見せようとしたりと実はとつても臆病で甘えん坊。典型的なお姉ちゃん子である。

一方でプライドが高く、敵認定した相手には容赦なく食らい付き、最悪の場合には殺害することすら厭わない苛烈で冷酷な一面があります。

嘘を吐くのが一周回って苦手であり、百恵のことを知らない相手は騙されるものの、逆に良く知る人間には作為的すぎてバレバレな演技をしてしまいます。本人も薄々自覚しているため、はぐらかしたり誤魔化したりして極力嘘を吐かないようにしています。

#### ・名前の由来

『ほしな ももえ』。略してほもです。というのは半分冗談です。

作中で何度も触れてきましたが『百に恵まれる』という意味。キラクリでも《攻撃》が百だったおかげでリセマラされる運命から逃れていたりと、なにかと百という数字と縁があるように設計しています。

じゃあ苗字の『星奈』ってなんや？ となりますが、こちらは蛮骨が出てくる犬夜叉七人隊編の時のOPの冒頭からです。『ななつのほし』転じて『ほしな』からの『星奈』になりました。

『星奈ももえ』が本来の名前であるものの、自らの運命を受け入れたことで『星奈百恵』と改名しました。

#### ・武器

大剣……と見せかけた双剣です。戦いにおいて一切の妥協を許さず、用心深い彼女は本来の武器すらも最後まで隠していました。正真正銘、これが奥の手です。

力の化身でもある龍の紋様が施された刀身だけで二メートル、全長二・三メートルある巨大な武器であり、二つ合わせた状態の大剣を使うとパワー型に、分裂させて双剣にするとスピード型にとオールラウンダーな戦い方を得意としています。ちなみに双剣はそれぞれ鎖で連結されていて、片方を手放したとしてももう片方を持っていれば引っ張り上げること回収することが可能です。これはかつて姉を救うことができなかつた時の心の表れでもあります。

初期ステータスの時点で《攻撃》だけなら大剣に、《速度》だけなら双剣になる予定だったのですが、走者が《攻撃》と《速度》の両方を極端に上げていたためにこのような仕様になりました。ほもの欲張りセツト。

#### ・願いと固有魔法

戦争を始まらせたり終わらせたりするほどの力があることを知らされていた百恵は、その素質を自分だけに向け、なおかつどう使っても悪用できないように『今を生きる力が欲しい』と願い、固有魔法からなにもまで全て自分の肉体に還元してしまいました。その結果得た固有魔法は『成長加速』であり、通常の人間の倍以上の速度で成長していく常時発動型の魔法です。

『今を生きる力が欲しい』という願いの影響で成長するのは契約時に生きるために一番必要だった魔法少女としての力だけであり、それ以外の成長は止まったまま。胸だけが成長していますが……なんでもなんでしょうかね(すつとぼけ)。やっぱ(おっぱい)好きなんすね。しかし成長はいつか止まり、そして徐々に退化していくのが世の理。一生分の成長が終わると一定期間停滞し、やがて老化という形で体に現れ、ついには魔法少女に変身する度に命を削っていくようになります。『今を生きる』という前置きのせいで未来を失ってしまうことになってしまったのです。

老化は髪が白くなったり皺が多くなったりと目に見えるものだけに留まらず、寂しがりになったり怒りやすくなったりと多少情緒不安定になりがちになってしまいます。

・『神浜最強のウワサ』との融合の影響

将来が完全に失われて無属性だった☆4魔法少女の百恵ですが、『神浜最強のウワサ』と融合して☆5魔法少女に昇格すると弱点が克服され、本来の百恵の性質である炎属性の魔法少女に生まれ変わりました。水属性や光属性も候補に挙がりましたが、『神浜最強のウワサ』がどう考えても炎属性でしたので百恵も炎属性になりました。

『神浜最強のウワサ』との融合の影響で百恵の力が復活し体が安定して元の若々しいものに戻り、事実上不死の体になりましたが、なにかの影響でウワサが剥がされたり倒されたりすると反動で一気に老化してしまい非常に危険な状態であることには変わりありません。なお、このウワサは創造主の柊ねむの支配を完全に抜け出して独立しているためねむが強制的に消去することはできません。

性格もウワサに引つ張られており、多少熱くなりがちになっていて、かつ神浜の魔法少女に対する愛情も深くなっています。そのため神浜の魔法少女には今まで以上に愛情を注ぐようになっていて、反面、危害を与えようとする外敵には一切の容赦をしないため苛烈な性格に拍車がかかるようになってしまってもいます。

・正体と過去

まどマギという作品に相応しいかなりヤバイ過去を用意しました。多分どのまどマギ作品とも被っていないと思います。被っていたらごめんなさいということ。

この部分は『Hundred Recollections』で詳しく書いていますので割愛します。

とまあ、こんな感じのキャラクターに仕上げました。

彼女の経歴に関しては小説内で纏めていますのでここではお話し

しませんが、まあ、我ながらかなり思い切ったキャラクターにしたかなと思っっています。

#### ◎裏設定

物語の設定や運びは本編を読了してここに遊びに来ているであろう皆さんに今更説明してもしょうがないので、今度は裏設定や、語られなかった真実をお話したいと思います。

・星奈つくも

百恵のひとつ上の姉であり、本作の悲劇のヒロイン。

一般的な観点から見れば彼女も充分すぎる魅力を持つハイスペックキャラクターです。勉強面だけに着目しても、予習復習するのは当たり前で、それ以上の範囲も独学で勉強してほどなくして百恵に教えることができるくらいに呑み込みが早いです。魔法少女としての戦闘能力も、普通の魔女よりも格段に強いクスハの成れの果てに初陣で勝利するという実力を持っています。

が、しかし。そんな自分よりも優秀な百恵という妹に対するコンプレックスのせいで歪んでしまった、そんなつくもに関する補足をします。

百恵はつくもに「嫌われてしまった」と思っていますが実はそれは間違いです。つくもは百恵のことが嫌いではありませんでした。

つくもが百恵に劣等感を抱き始めたのは、父親の命令で母親役から虐待を受けるようになった頃からです。

最初は自分を慕う百恵との時間が大好きだった彼女ですが、次第に自分の環境と百恵の環境の温度差を気にするようになり、時が経つにつれて百恵に対する嫉妬は募っていくばかり。しかしながらつくもは百恵を嫌うことができませんでした。百恵が妹だったからです。

自分を慕って、酷いことを言っても笑顔で流して、自分の気を引こうと合わせようと気遣ってくれる健気な妹をどうしても嫌いになることができませんでした。百恵の姉としてのプライドが妹を拒絶することを許せなかったのです。

百恵を嫌いになれなかったつくもは成長していくうちに妹に対す

る劣等感が諦めに変わり受け入れられるようになって、閉ざした心を開きかけていたときに……父親と名乗る男が現れてしまいました。

真実を聞かされ、百恵が百番で自分が九十九番であり、自分の名前すらまともな名前じゃなかったことを聞かされたつくもの感情がついに爆発します。百恵に初めて暴力を振るい、取り繕いのない罵声を浴びせます……が。それでもつくもは、百恵を嫌いになることができませんでした。

目の前で人を殺した自分を見ても、真実を聞かされたことで自分よりも格上の存在だということがわかつて、百恵の自分に対する気持ちに全く変わっていなかったからです。

百恵は自分の思いがつくもに伝わらなかつたと思っっていますがとんでもない。百恵のつくもに対する愛情はこれでもかというほどに伝わっていました。ですがそれが猛毒となり、完全につくもは壊れてしまいました。

ずっと抱いていた百恵に対する劣等感、知りたくもなかつた真実、嫌いになりたいのに嫌いにさせてくれない百恵に対する苛立ち、そして……健気な妹に対してこんな気持ちを抱いてしまう自分自身に対する嫌悪感。これらはつくもを魔女へと変貌させるのには充分すぎるものでした。

つくもの魔法少女のテーマは『虎』。『竜虎相搏』という強い者同士が激しく戦いあうという意味のある四字熟語があるように、百恵の『ドラゴン』とは対になっています。魔法少女衣装のカラーリングも銀と白の百恵に対し、つくもは金と黒で真逆です。

魔女のテーマは『張子の虎』と『虎の威を借る狐』。見た目は力強い虎ですが、よくよく見るとキツネのような足をしていたり尻尾が虎とキツネの二尾だったりしています。百恵の性格がキツネであるように、姉のつくももまた自分を化かし続けていたキツネだったのです。

#### ・星奈百恵

裏のテーマは『IF鹿目まどか』と『IF環いろは』。

主人公である星奈百恵は『もしものダブル主人公』です。髪の色は

黒(または白)ですが、名前の中にしっかりピンク色を表す『もも』が含まれています。『Hundred Recollections』は前篇と中篇を『まどマギ』、後篇は『マギレコ』として描き上げました。

つくもは『IF 暁美ほむら』です。つくもが父親を殺害したシーンは、まどマギの第8話のほむらがキュウベえをハチの巣にしたシーンのオマージュ。

いつも自分よりも先に行く妹が自分以外の人間に負かされることを認められなかったつくもは、完全に百恵の心が父親に折られてしまう前に父親を殺害することで、既のところ百恵を守りました。もしつくもが行動に至らなければ百恵は父親に言われるがままの人生を送っていたことでしょう。

さらにそこから続くつくもの百恵に対する罵倒も、ほむらがまどかに対して声を荒げるシーンのままですが、もしここで自分の正体をまどかに話してしまっていたらどうなっていたのでしょうか。

おそらく自分を制御できずに心無い言葉までまどかに浴びせてしまい、そしてそんな自分に嫌悪して魔女になってしまったのではないか？ 私はそう考えます。つくもの最期はこのIFでのほむらの最期として描きました。

では百恵はどうかというと、全ての真実を知った上に目の前で知り合いが魔女に変貌する様を目撃したIFのまどかです。

自分を救うためにいくつもの世界で戦い続け、そして守っていた大切な人を失ったまどかが一体どのように動くか……それがこの後の百恵の行動です。これ以上苦しめないように自分の手で終わりにして、そしてほむらが自分を守り続けたように、今度は自分がすべての魔法少女を救おうと動き出したのではないのでしょうか。

まどかは誰かの役に立ちたいという願いを持っていましたし、丁度同時刻には親友のさやかが魔法少女になって苦しんでいましたので、そんな風に動いてもおかしくないと思います。

まあ、これは私ごとスパークリングの勝手な妄想ですので賛否両論あると思いますが、一応こんな裏設定がありました。

次に『IF環いろは』ですが、星奈百恵は『年を取って暴走した環いろは』です。

神浜に引越してきたこと、頑固でこうと決めたら絶対に曲げない性格や、なんだかんだでやちよの隣にずっといるところ、妹（百恵の場合）に対する姉妹愛の強さなど、いくつか共通点があります。作中で百恵といろはの初めての会話シーンで、百恵はいろはに対して「些か眩しすぎる」と言っていますが、それはいろはに弱体化前の自分の姿を重ねていたからです。ですので、見ているのがつらくなって一方的に話を切り上げてしまいました。

自分が正しいと信じた道をまっすぐに走り続けてきたいろはがまっすぐに行けない道に差し掛かった時、曲がることができず、かといって止まることもできないばかりに傷つきボロボロになりながらも道なき道を進んでいってしまった結果が、老化の影響で弱体化した百恵です。

#### ・他人の名前を呼ぶことへの抵抗

姉のつくもに名前を呼ばれることを拒絶されたことがトラウマになっていく節があり、自分が名前を呼べば不快になるのではないかと考えるようになってしまった百恵は、他人の名前……特に下の名前を呼ぶことが怖くなってしまいました。

百恵が他人を名前で呼ぶときは完全に心を許しきっている相手（本作ではみたまとアリナが該当）か、感情的になっている時、そしてなにか目的がある場合のみで基本的に「お主」と呼ぶようになります。物語終盤でやちよたちに救出され、ずつと隠してきた弱さを知られてからは、自分と親しい人間には普通に名前を呼ぶことができるくらいまで克服しました。

#### ・本当の思い

百恵が心の底で望んでいたことは『普通の女の子として生まれたかった』でした。

普通じゃない生まれ方をし、普通じゃない環境で育てられ、普通



じやない家族を持ってしまった百恵は自分が最初から魔法少女になるためだけに生まれたという真実を知ると、残酷すぎる運命を背負った魔法少女のために生きなければならぬという使命感と義務感に駆られるようになり、それが原動力となって今まで生きてきました。しかし神浜を拠点にして活動していくにつれ、いつしか自分が救ってきた普通の魔法少女たちに対して憧憬を抱くようになります。帰るべき家があつて、普通の家族がいて、普通の友達と遊べる彼女たちが羨ましかったのです。

劣等感を抱きやすく、思わず嫉妬しがちなところは姉のつくもとよく似ていますが、劣等感から抜け出すために自分を磨いて百恵を追い抜こうとしたつくもとは対照的に、百恵は仕方のないことと捉え、「自分も普通に生まれていたらな」と思うだけでどうすることもできない現実に諦めてしまっていました。

ここから百恵は自分に対してのみ諦めやすくなってしまい、残り僅かな寿命を聞かされても動揺せず、また自分が障害になってしまうのなら平気でその命を差し出そうとするくらいに、自分の価値を軽く見るようになってしまっていました。

#### ・ウワサの百恵

テーマは『ブラックロータス』。

神浜最強のウワサと中途半端に融合した状態。

髪の毛は燃えるような朱色に変色し、両腕と両足は龍の鱗で覆われるなど、老化の影響が出ていた部分はウワサによって応急処置が施されています。

助けを拒絶されたウワサが暴走している状態でもあり、無理矢理百恵を押し込めて全面的に前にでることでウワサは百恵を助け出そうとしていました。

百恵のソウルジェムである銀の風車が黒い蓮の花のように変化し、血のように真っ赤になった和服の戦闘着に模様として描かれているのもやっぱり黒い蓮の花弁。

蓮の花言葉は『沈着』『雄弁』『神聖』『清らかな心』『休養』『離れ行

く愛』、そして『私を救ってください』。わかりにくいながらも助けを求めている百恵の気持ちが反映されていました。

#### ◎原作キャラクター

主人公を引き立てることができるのは原作で活躍したキャラクターが魅力的だからです。

まどマギシリーズは本当にいいキャラクターたちに恵まれており、組み合わせることによってどんなキャラクターも作成することができて大変楽しいです。

そこで今回の本作で活躍したまどマギシリーズのキャラクターたちを振り返っていきましょう。

#### ・七海やちよ

本作のもうひとりの主人公。

物凄く動かしやすく書きやすかったキャラクターで立ち位置が非常によく、仲間思いでぶれない信念を持っているので、やちよ視点で書くのが楽で安定していました。

ゲーム終了時の好感度ランキングはみたまを抜いて堂々の第一位に輝いています。

#### ・八雲みたま

こちらもまた非常に動かしやすかったキャラクター。

ゲーム開始時から百恵の抱える闇を全て知った上で百恵に悟られないように水面下でサポートし、百恵の精神のバランスを調整してくれている陰の功労者です。

ゲーム終了時の好感度ランキングではやちよに追い抜かれて第二位。

#### ・アリナ・グレイ

キャラが勝手に動くばかりに筆が進むものの非常に動かしにくく、物語だけでなく作者をも引つ掻き回した本作のトリックスター。かわいい。

誰がどうやって百恵を助けるのかを予想していた皆さんにとって、意外な結末だったのではないのでしょうか。実は最初から決めていま

した。理由はアリナのことが大好きだからです。かわいい。

どうやったらアリナらしく動くのか、そしてどうしたらアリナが百恵を助けるために動くかを考えた末に誕生したのが、他ふたりのマギウスや百恵のみならず百恵を助けに来た魔法少女全員を手玉に取って自分の目的を完遂させた孔明もびっくりな策士アリナでした。かわいい。

百恵も自分のことをしつかり見ていたアリナに心を許しており、さらに命を救ってくれた恩も感じていることからアリナのことが大好きです。かわいい。

マスクデータであるゲーム終了時の好感度ランキングは第三位。ちなみに初対面時はやちよを追い抜いて二位につけていました。かわいい。

#### ・更紗帆奈

キャラが勝手に動く割にはかなり動かしやすく筆も進むため、『散花愁章』では三万字オーバーという驚異の記録を残したキャラクター。無事に更生し社会復帰しました。

百恵と二ヶ月の間同じ屋根の下で生活した仲であり、なにがあっても百恵の味方であり続け、待ち続ける決意をするなど凄く健気。戦闘能力もピカイチで、こののはのチームやななかのチームをたつたのひとりで無力化でき、制御できていなかったとはいえ力の化身であるウワサの百恵の攻撃を相殺して手を握るといふ快拳を達成するほどの強キャラです。

ゲーム終了時の好感度ランキングは第四位。百恵が『マギウスの翼』入りした時はやちよを追い抜いて二位にまで上り詰めています。

#### ・梓みふゆ

かなり動かしやすく、第一部が始まってからは大変お世話になりました。

百恵の右腕としてかなりよく動いていました。ポンコツなみふゆさんなんておらんかったんや。尚みかづき荘ではいろはちゃん相手にマウントを取る模様。大草原不可避。やっぱみっふはみっふでし

た。

ゲーム終了時の好感度ランキングは第五位。第一部が始まってから爆発的に上がりました。

・御園かりん

大勝利キャラクター。

百恵とアリナという超絶ビッグネームない先輩たちに恵まれ本作屈指の強キャラにまで成長しました。さりげなくですが百恵と出会った影響でアリナの「こうじゃ……ないだろおおお！」を回避しています。

ゲーム終了時の好感度ランキングは第六位。

・静海このは&遊佐葉月

あやめのママと胸がでかいパパ。

それぞれアザレイイベントで百恵に恩を抱いている実力者たちで、その恩を返すために救出作戦に志願しました。現在はふたり揃って神浜の重鎮入りを果たしています。

動かしやすく、どちらも書いていて新鮮で楽しく葉月に至ってはふたつに分けなければいけないほどの文章を書いてしまいました。

ゲーム終了時の好感度ランキングはこのはが第七位、葉月が第八位です。料理教室の件が大きかったみたいです。

・胡桃まなか

個人的にマギレコのサブ魔法少女の中で一番好きな魔法少女かもしれないくらい好きなキャラクター。こんなにかわいいドヤ顔はない。魔法少女になった時の願いやその理由も大好きです。そして書きやすかったです。

帆奈と同じ学校の先輩後輩の関係、固有魔法である『伝播』と地味に必要な要素を併せ持ったキーパーソンで、まなかがいなければみんな揃って百恵の精神世界に行くことはできませんでした。

ゲーム終了時の好感度ランキングは第九位。

・常盤ななか

最も理性的な魔法少女。百恵とは良きビジネスパートナーです。

地の頭が良く、気遣いが得意で小回りが利くため、要所要所で地味

に重要な仕事を淡々とこなしていた本作の仕事人で、彼女がいたからこそ神浜の魔法少女たちが一致団結し、百恵の本当の気持ちを暴くことができました。現在は神浜重鎮入りを果たしています。

ゲーム終了時の好感度ランキングは第十位でした。

#### ◎その他まとめ

・書いていて難しかったこと

大体平均一万字を目指していたんですが、いざ書いてみると倍以上になってしまったとかうつそだろおまえ！（大草原）

物語パートだけで一万字を超えることが多々あって仕方なくRTAパートと物語パートで分けることに。RTAパートと物語パートを交互に投稿し、時に物語パートが連続するという、他のRTA風小説と比べてかなり異質な作品になったのではないのでしょうか。

ただそのせいでRTAパートも頑張って最低でも七千字を超えるように書かないとボリューム不足になってしまつてぬわああああん疲れたもおおおん！ チカレタ……。と言いつつも五千字程度の時もちよいちよいあったり。RTAパートはいわばただの実況です。ですのでここまで文字数が稼げないんですね。ですから本来分けるようなところも一気に書いたりして文字数調整をしていました。文字数稼ぎとか水増しとか言わないでくださいなんでもしますから！

あと文章の書き方、正確には読みやすくするのに本当に苦労しました。これは途中でリニューアルを行うほど問題にしています、今でも修正を繰り返しています。

一度Wordで編集してからハーメルンにコピーして掲載していただきましたので、Wordだと読みやすくてもハーメルンだと（個人的に）読みにくいなど感じてしまうことが発生して焦りました。あの時は本当にご迷惑をおかけしました。精進します。

・没ネタ

「なんで『CROSS CONNECTION』書いたん？ なんか意味あったん？」と思つたそのあなた。全く以つてその通りで、『C

ROSS CONNECTION』は結果的に物語の進行に全く影響  
しませんでした。そう結果的には。

本当はあそこでななかに「もしかして百恵さんも過去に人を殺した  
ことが？」と思わせることで、百恵の過去に関する伏線を入れようと  
思っていましたし、その物語パートも用意していました。しかし百恵  
の過去こそ本作最大のネタバレに繋がりますので、最後まで秘密にし  
て怒涛の物語パートラッシュの中で明らかにしていくほうが面白い  
と判断して没にしました。

・原作魔法少女たちの扱い

本当にちよい役としてでしか活躍させられませんでしたのでそこ  
は反省ですが、今回のチャートの的に原作組と交流することはほぼ皆無  
だったのでこうなってしまうのもしょうがなかったのかなとも思っ  
ています。

一番輝いていたのは杏子ですね。書いていて楽しかったです。最  
後にほむらもちよつとだけですが輝きました。やっぱ最後はほむら  
に決定打を作ってほしかったからです。

・今後の予定

えー第二部は（今のところやる気は）ないです。好きじゃないんで  
すよね『終結の百禍編』のシナリオが、なんとなく中途半端であやふ  
やな感じがして。どれかひとつのグループに焦点を絞って掘り進め  
た方が取っ散らからなかつたんじゃないかなって……。

おかげでRTA小説にしようとしても難易度が高く、キャラの動き  
が全く読めないため見切り発車してエタる可能性が高いので作成は  
ほぼ絶望的かと。第二部が終わるまではまあ書くことはないでしょ  
う。仮に書くとしてもRTA形式ではなく普通の実況形式になりそ  
うです。この百恵の設定でRTAをするとガツバガツバのバッドエ  
ンドルートに直行しますからね。

番外編に関しては色々考えています。時間があるときに気が向く  
ままに書こうかと思いますが、まずは『ユメミルサクラ』を書いてか

らですね。これをしつかり書かないと始まらないので、気長に待っていただけると幸いです。

#### ◎最後に

えー、まず初めにですね、ここまで読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

自分で文章を起こしてみてもまあ、自分の性癖やら妄想やらをつらつら書いてんなあと恥ずかしくなりもしましたが、書きたかったテーマや裏設定なんかを好き勝手に書くことができて楽しかったです。やっぱネタバレするときはこうパーツとやった方が面白いし気持ちいいですよ。

ということ以上を持ちまして、本稿を終了とさせていただきます。

改めましてここまでご愛読していただいた皆さま、本当にありがとうございます。感想、メッセージ、支援イラスト、誤字報告、評価をしていただけただけの皆さま、とても励みになりましたし、皆さまのおかげでしっかりと完結させることができました！ 厚く御礼申し上げます！

それではまた！

番外編 Side. 八雲みたま 怪談白物語

「はい、これで定例会議お終いわね」

これはとある日の調整屋さんでの出来事。

ワルプルギスの夜との戦いを終えたあと、月一で開かれる定例会議。

参加者は、わたしこと調整屋さんの店主である八雲みたま、西の統括のやちよさん、東の統括の十七夜、中央の相談役のひなのさん、『マジウス』の件で活躍して重鎮入りをしたななかちゃんこのはちゃん、そして神浜最強の魔法少女であるモモちゃんの計七人。

内容としては神浜の情勢や起こった出来事についての細かな報告、そして新たに起こした新組織の『神浜マジアユニオン』での活動報告の大きく分けてふたつ。

特に後者に関しての情報の開示が大きいわね。

わたしにモモちゃん、ななかちゃんとこのはちゃんは協力することは約束しているけど『神浜マジアユニオン』には加入していないから、どういう成果を上げているのかはこの会議を通さないとすっかりと耳に入っていない。

わたしやモモちゃんを始めとした、何人かの魔法少女が『神浜マジアユニオン』に参加しないことが明かされたときは一時騒然となった。

モモちゃんが入らないならと弟子であるかりんちゃんが、モモちゃんの味方で居続けると帆奈ちゃんが相次いで不参加を表明し、さらにそこにななかちゃんとこのはちゃんまで不参加の意を示したのだから。

まあでも、実際は何も問題はない。

言ってしまうえば、わたしたちは野党みたいなものだから。

与党である『神浜マジアユニオン』の動向を監視して、問題があると思ったら指摘する立場にいただけで、協力関係にはある。

中立派はいつの時代も必要なもの。

全員が同じ組織に加入すると色々と問題が起こるから、それを食い



止めるためにもストッパーは必要不可欠。

だからまずわたしとモモちゃんは『神浜マギアユニオン』に参加することを断念した。調整屋のわたしと最強の戦闘能力を誇るモモちゃんならストッパーとして充分に機能するから。

そしてそれぞれ別の思惑があるだろうけど、それでもわたしたちの意思に賛同した子たちがこちら側に入った。ただそれだけなのよ。

だからこうして定例会議をしていても全然ギスギスしていないし、全員が全員言いたい放題できるから結構碎けた感じで進んで行く。

特に変な話題もなかったからほとんどん話が逸れて行って、終わった時にはもうただの女子会になっていた。

机の上にお菓子が散乱して、雑誌やらなんやらがごちゃごちゃになっっている。

「思った以上に早く終わったし、ゲームでもやらない？」

調整屋さんが始まるまで全然時間があるし、この後もメンバーたちに予定がないことを聞いていたわたしはそんな提案をする。もはや定例会議後のお約束でもあった。

「そうだな。それで何をする？」

『パラノイア』でもします？」

「やめておきましょう……。このメンバーで『パラノイア』はやりたくないわ」

「いっつもデブリーフィングに行く前に全滅するからのう……」

「本当に、なんでそうなってしまっうんでしようね」

「大体おまえらのせいだからな？」

「ひなのさんも人のこと言えないわよお？」

うーん、『パラノイア』はダメみたいね。

わたしは結構好きなんだけど……まあ、あれはもうちよつと良心的な子が来てくれないとすぐにみんな死んじゃうからダメよねえ。

それなら……。

「じゃあ……『怪談白物語』でもする？」

知る人ぞ知るTRPG『怪談白物語』。

何回か回しているうちに、楽しいけどゲームマスターをやりたくな

いという人を続出させるゲームを提唱してみた。あと最近やっていないし。

「あれは……やってもよいが、私はゲームマスターをやらんぞ?」

「私もゲームマスターはお断りよ」

「私もちよつと……」

ゲームマスターを体験したことがあるモモちゃんとやちよさん、このはちゃんが渋る。

「大丈夫よお。わたしがやるから♪」

「本気ですか? あんなにGM泣かせなゲームはありませんよ?」

「大丈夫大丈夫♪ シナリオも……ほら、調べたら出てきたし、これを使うから♪」

pi○ivって便利よねえ。

「ふむ、八雲が大丈夫と言うなら止めないが」

「覚悟した方がいいぞ? アタシたちは結構言いたい放題言うからな?」

「というか昔散々な目に遭わされた恨みを晴らさせてもらうぞ?」

「本当よ。何度あなたのせいで酷い目に遭ったか……」

「任せてちよーだい。じゃあみんな『職業』と1〜6までの『数字』と好きな『ファ○タ』の味を決めておいてねえ。知っていると思うけどお、『職業』と『数字』は被つちやダメよお」

決まったかしらあ?

それじゃあ順番に自己紹介をどうぞ。

あ、わたしの『性格』は無しで行くわあ。だからのびのびとやっていいわよお。

『脚本家』の和泉十七夜だ。数字は1。ファ○タは……毎回困るな。あんまり飲まないからな。すまんが飲んだことのあるグレープだ」

『編集者』の星奈百恵じゃ。数字は2、ゴールデンアップルが好きじゃよ」

「結構渋いですね。『霊媒師』の常盤ななかです。数字は3、普通にオ

レンジが好きです」

『『科学者』の都ひなのだ。数字は4、メロンソーダが好きだぞ』

『呪術師』の静海このはよ。数字は5、マスカットが好きだったわ。復刻しないかしら」

「はあ……『無職』の七海やちよ。数字は6、私もグレープが好きだわ」

あ、やちよさんが『無職』なのねえ？

やーい、あなたむーしょくつ♪

「やちよむーしょくつ」

「ちゃんと働けよ無職」

「うむ。働かないのならせめてここで役に立つんだぞ、無職」

「くっ……これだから『無職』だけは嫌だったのよ……!」

恐怖耐久度が高い上にデメリットがないからいいじゃない？ それでもあなたむーしょくつ♪

「……むかつく!」

それじゃあp i o i vに投稿されているシナリオ、『蘇良』ほしとまんまる工房』様作成の『事故物件?』をお話ししていくとするわあ。頑張つて十個のキーワードを改変してねえ。

みんなで怪談を話し続けて百回目。

これまで以上に怖いやつ、とっておきのやつをトリのわたしが話しちゃうわよお？

これはわたしがひとり暮らしを始めた時の話なんだけどね。

「うん? 『ひとり暮らし』ではなくて『調整屋』を始めた時の話ではなかったかの?」

「いきなり来ましたね」

星奈百恵

1 D 6 (2以外成功) ↓ 5 成功

ああ、そうだったわ調整屋さんを始めた時だったわあ。

『ひとり暮らし』はキーワードよお。

「ほい来た」

「幸先良いですね」

魔法少女になって調整屋さんを始めた時なんだけどねえ、実は最初

にお店にするために目を付けた廃墟はこの『神浜ミレナ座』じゃなくて中央区にある廃墟だったのよ。

駅からも近いし中央区は西からも東からもアクセスが容易だったから丁度いいと思ってね。

で、そこで調整屋さんとして営業していたある日のことだったわあ。

調整屋さんに来た子たちと怪談話をする事になってねえ、とつても盛り上がったのよお。

『怪談話』ではなくて『猥談話』で盛り上がったんじゃないの？」「ちよっ」

七海やちよ

1D6 (6以外成功) ↓ 4 成功

そうだったわあ、うっかりうっかり。

「間違えんだろ」

あ、『怪談話』はキーワードよお。お見事ねえ。

まあそれでもやちよさんは無職なんだけどお。

「お主むーしよくっ！」

「なんでキーワード当てたのに煽られるのよ……」

「それが『無職』の宿命ですから」

「とうかちよと待つて。もしかして今から私たち、みたまさんの猥談話を聞かないといけないのかしら？」

「それは……嫌だな」

「別の意味で恐ろしい話を聞く羽目になってしまったな」

「恥ずかしいから端折っちゃうけどねえ、最後に『廃墟選びは慎重に』って言って話を纏めたの。」

なんでも廃墟でやることやっていたらしいのよ、その子たち。

で、なんで『廃墟選びは慎重に』って話すのかと聞いてねえ？ 廃墟になってしまうような建物は事故物件の可能性があつて、怪奇現象に悩まされることが多いんだって。

その子たちも廃墟で人目を忍んでエクスタシーしていたらしいんだけど、途中で不可解な出来事が起こって一気に熱が冷めて色々と垂

れ流しながら逃げ出したそうよ？

「やめろ八雲！ 色々と最悪だ！」

「なんでそんなノリノリで順応してんだよ！」

「やちよさんもやちよさんですよ……」

「もつと他にやりようがあったのでは？」

「困らせてやろうと思ったのに……こんなはずじゃ……」

「じゃからお主は無職なのじゃ！」

あなたむーしょくっ♪

「七海むーしょくっ」

「とりあえず十七夜は真顔で煽らないでちょうだい……。ごめんなさい、反省しているわ」

まったく、無職のせいで全然話が進まないわあ。

続けるわよお？

で、後になってその廃墟を調べてみるとねえ？

そこにかつて入居した人たちの大半が怪奇現象に悩まされて出て行ってしまったそうなのよ。

そのせいで入居希望者がいなくなっちゃって、管理人も手放してそのまま廃墟になっちゃったらしいわあ。

「私が聞いた話だと『怪奇現象』じゃなくて『露出狂』に悩まされていたらしいけれど……」

静海このは

1D6 (5以外成功) ↓ 6 成功

「あ、成功したから『呪術師』の効果で6の無職さんにダメージが入るわ」

七海やちよ

恐怖耐久度 5 ↓ 4

「天罰ですね」

「天罰じゃな」

「怪談話を猥談話にした無職に対するな」

「くっ……これだから無職は嫌なのよ！」

それでもあなたむーしょくっ♪

あ、『怪奇現象』はキーワードよお。順調ねえ。

「あとキーワードは七個だな」

で、それでね。

その話を聞いてわたしは怖くなったわあ。

ここは大丈夫よね？ 露出狂が出るなんて噂は聞いたこともないし、不審者が出るような注意喚起もされていないから大丈夫よね？  
ってね。

「それはそうなるわ」

するとその子たちは、この廃墟に関しては変な噂は流れていないよと、実際にここで営んでいても露出狂が現れることはなかったよと言ってくれた。

安心して胸を撫でおろしたわあ。

「安心するなバカ！」

「別の意味で事故物件じゃないの！」

「変なオバケよりも質が悪いですね」

それからしばらく経ってね。

「『しばらく』ではなく『七十年』経ったんじゃないか？」

常盤ななか

1 D 6 (3以外成功) ↓ 3 失敗

「あ、失敗しました」

常盤ななか

恐怖耐久度 4 ↓ 3

なに言っているのよななちやん。わたしまだ十七歳よお？

で、しばらく経ってねえ、夏休みに入ったのよ。

「『夏休み』に入ったんじゃないかって『冬休み』に入ったんじゃないの？」

七海やちよ

1 D 6 (6以外成功) ↓ 3 成功

ああ、そうだったわ冬休みだったわ。

でもキーワードじゃないわよ残念だったわね今どんな気持ち？

無職のやちよさん？

「おまえむーしよくっ！」

「これだから無職は……」

「変なところでチャレンジャーになるからいつまで経つても職が決まらないんですよ」

「辛辣すぎるでしょう!?!」

それで冬休みに入ってねえ、課題に追われたり、調整屋さんの仕事をしたり、友達と遊んだりしてね、充実したものだっただのよ。

「おいおい、『課題』じゃなくて『変質者』に追われたんだろ？ そしてアタシの職業の『科学者』の効果でさらにもうひとつ変えるぞ。遊んでいたのは『友達』とじゃなくて『セフレ』とだろ？」

都ひなの

1 D 6 (4 以外成功) ↓ 2 成功

『課題』はキーワードよお。

ああ、そうだったわ。私は変質者に追われて、セフレと遊んでいたのよ。

「怖いのがクトルが違うわね」

「どんどん八雲が痴女になっていくな」

「ていうか変質者現れているじゃないの。あなたと猥談していた子たち嘘吐いているじゃないの」

「多分冬になってから出てきたんじゃろうな」

「あの廃墟の近くで不純異性交遊が多発しているとかそんな噂が流れたのでしょね」

まあ、そんな感じで爛れた冬休みを謳歌していたある日の夜のこと。

いつものように変質者に追われて調整屋さんに逃げ込んで、もうたくさんになっちゃって窓際にあるソファに座って一息ついたのよ。

「普通に家に帰りなさいよ」

「というか警察に被害届を出せ」

「逆に補導されるからダメなんだろ」

それでちよっと休んでいるとね、ふと風が頬を撫でたのよ。

「頬を撫でたのは『風』じゃなくて『変質者』じゃろうて」

星奈百恵

1 D 6 (2 以外成功) ↓ 2 失敗

恐怖耐久度 3 ↓ 2

「むう、失敗。じゃが『編集者』の効果でキーワードをひとつ開示してくれ」

はいはい。

キーワードは(コロコロ)……残念、『課題』。もう出ちやっっているわねえ。

「無駄骨じゃったか」

それで風が頬を撫でたのを感じ取って、その方を見たのよ。

追いかけてくる変質者が行ったかどうかを確かめるために少しだけ開けていた小窓、そこから吹いてきたのね。

もう行つたかしら？

そう思つたわたしは窓の外に目を向けたわ。

するとね、真向いの建物が目に入ったの。

少し太い大通りを一本隔てた建物。ぼんやりとだけど、その建物の窓辺だけ見えたのよ。

「ん？ 確かその廃墟は『大通り』ではなくて『三途の川』を隔てていたはずだが？」

和泉十七夜

1 D 6 (1以外成功) ↓ 1 失敗

恐怖耐久度 3 ↓ 2

「む、失敗か。だが『脚本家』の効果で失敗しても書き換わるぞ」

そうだったわ三途の川を隔てていたんだったわ。

残念だけど『大通り』はキーワードじゃないわよお。

「そんなもん中央区にないぞ」

どっこいわたしが見つけた廃墟の前にはあつたのよ。

で、その三途の川を隔てた先にある建物の中にね、人影が俯いているように見えたのよ。

なんとなくだけど気になっちゃって、その人影をもっと観察してみたいと思っちゃつたの。

その人影は窓辺に佇んでじつとしていたわ。ただただじつとしていたのよ。



「その『人影』って確か『フェリシアさん』じゃなかったかしら？」  
静海「このは」

1 D 6 (5以外成功) ↓ 3 成功

「今度は私に飛び火しましたか」

常盤ななか

恐怖耐久度 3 ↓ 2

『人影』はキーワードよお。

ああ、そうだったわフェリシアちゃんがじっと俯いていたのよ。

「む？ 『じっとしていた』のではなくて『タバコを吸っていた』のではないのかの？」

星奈百恵

1 D 6 (2以外成功) ↓ 3 成功

ああ、そうそうフェリシアちゃんがタバコを吸っていたのよ。

それはもうずっとねえ？

「グレてるじゃないの」

それだけの特に変化のないつまらない光景に五分と持たずに飽きちゃってね。

「非常にショッキングな光景だと思えますが？」

いやビツクリはしたわよ？

でもそんなことよりまた変質者が来ないかどうかの方が気になっちゃってね、見張りを再開したの。

「そういえばおまえ変質者に追われていたんだったな」

「その割に随分と余裕だったな」

魔法少女だからねえ？

それにいざとなったらモモちゃんとか十七夜を呼べばいいから意外と余裕だったのよ。

「すでにそのいざという時じゃなかったのかの？」

まあまあ、そんなことはいいのよ。

でね、気が付いたことがあったのよ。

初めて見つけたあの日以降、必ずフェリシアちゃんが夜になるとあの窓辺に佇んでタバコを吸っているってね。それはもうずっとね。

だんだん気味が悪くなってきちゃったのよ。

「今更かよ」

「最初から怖いわよ」

そもそも見なければいいだけの話だからまだ良かったのよ。

それである日の午後の事なんだけどね。

『午後』ではなくて『未明』ではなかったですか？」

常盤ななか

1D6 (3以外成功) ↓ 4 成功

そうそう未明の事だったわあ。

「零時を回っているぞ」

「なんでそんな時間まで調整屋にいたのよ」

その日は家に帰りたくなくて調整屋さんに泊まることにしたのよ。

ほら、ベッドとかあるし。

それで深夜になってちよつと目が覚めちゃって……なんか物凄く

向かいの建物が気になったのよ。

「唐突ですね」

ちよつとそこに行ってみようっていう衝動に駆られたわたしはその

の建物に向かったわ。

なんでフェリシアちゃんがタバコを吸っているのかが気になって

しようがなかったのよ。

「今になって気になり始めたの？」

うん。

それに本当はフェリシアちゃんじゃないかもしれないじゃない？

よく似ている別人かもしれないし、悩みがあるなら相談に乗ろうか

なって。

なんにせよ、本当にわたしが見たのがフェリシアちゃんだったのか

確かめたくなくて、向かいの建物に向かったの。

そうしたら絶句したわ。

問題の建物はどこにもある一軒家。

でも表札がなくて庭も荒れ放題。どう見ても空き家だったのよ。

窓からだとその建物は二階の窓辺しか見えないから塀を越えた先

にある庭の様子なんて知らないし、ましてやその建物がある三途の川沿いをわたしは歩いたことがなかったから、そこがまさか空き家だなんて思いもしなかったの。

訳が分からなくなったわ。

じゃあわたしが見ていたフェリシアちゃんらしい人物は、どうしてこんな空き家にいたの？ って。

「おまえだって廃墟に住み込んでいるじゃないか」

「とういか間違えすぎだぞ八雲。その『空き家』は『みかづき荘』だっただろう?」

「ちよつとお!?」

「ふははっ」

和泉十七夜

1D6 (1以外成功) ↓ 5 成功

そうそうやあねえ、わたしってば。

無職のやちよさんの家のみかづき荘だったわあ。

『空き家』はキーワードよお。

「よし。残るキーワードは四つだな」

「なるほど。みかづき荘ならフェリシアさんがいるのも納得ね」

そうねえ。なんでわたし怖がっていたのかしらあ。

「十七夜、あなた急に喋り始めたと思ったら……!」

「いや、自分だけ出遅れてしまったからな。少し気合を入れて介入させてもらったんだ」

「気合の入れ方が違うのよ! とういかあなたの能力で失敗しても書き換わっちゃうじゃない! これじゃあ、シナリオ的にみかづき荘が事故物件になっちゃう流れじゃないの!」

「うるさいぞ、無職」

「あの、無職の方は静かにしてもらっていてもよろしいでしょうか?」

やーい無職んち、おっぱけやーしきー!

「覚えていなさいよ……!」

話を続けるわよお?

無職のやちよさんが最近中央区に引っ越してきたことを思い出し

たわたしは安心して調整屋さんに戻ったわあ。まさかご近所さんだったなんてねえ。

でもだとしたら、別の疑問が浮かんできたわあ。

なんで他のみかづき荘の子たちはフェリシアちゃんがタバコを吸っているのを止めなかったのかしらあって。

絶対に止めるでしようし、そもそもフェリシアちゃんはタバコを吸うような子じゃないのにどうしてタバコを吸うようになったらうだろうって。

そんなことを考えているとね、突然わたしの電話が鳴ったの。

こんな夜遅くに誰かしらと電話に手を伸ばして確認してみると非通知の文字。間違い電話かしらと思って放置したんだけど、一向に鳴りやむ気配がない。

「え？ ちょっと待った。『電話』じゃなくて『ポケベル』が鳴ったんじゃない？」

星奈百恵

1 D 6 (2 以外成功) ↓ 2 失敗

恐怖耐久度 2 ↓ 1

何を言っているのよ電話に決まっているじゃないのモモちゃん。

もうポケベルはほとんど意味がない世の中よお？

「ぐっ。じゃがキーワードを。キーワードを寄越すのじゃー！」

えっとねえ(コロコロ)……キーワードは『夜』よ。頑張って改変してねえ。

「！ ならば『夜遅く』に電話が来たのではなく、『朝早く』に電話が来たのでは？」

常盤ななか

1 D 6 (3 以外成功) ↓ 6 成功

ああそうだったわあ。

考えているうちに寝落ちしちゃって、気が付いたら五時半くらいになっていたのよお。それで丁度目が覚めた時に電話が来たのよ。

さつきも言ったけど『夜』はキーワードよお。

残りは三つ。頑張ってねえ。

それでね、非通知だから気持ち悪いし、こんな朝っぱらから電話なんてしたくなかったから拒否ボタンをタップして切ろうと思ったの。だけど、なぜか指はわたしの意に反して応答ボタンの方へと伸びていくの。「あれ？」って思ったけど、なぜか応答ボタンの方に向かっていく人差し指。力も込めていないのに、なにかに吸い込まれていくように手が動くの。

「いや……いやよ、やめて！」と心が叫んでいるのに、全然体が言うことを聞いてくれないの。

『叫んでいた』のではなくて『君が代を歌っていた』ではなくて?』  
静海このは

1 D 6 (5以外成功) ↓ 2 成功

「え? 2つて……」

「私じゃ。死んでしもうたぞ」

『霊媒師』の私が代わりにダメージを引き受けましょう  
常盤ななか

恐怖耐久度 2 ↓ 1

「すまんのう」

「いえいえ。百恵さんはどんどん改変してください」

「もう話が終わっちゃうから外れてくれた方が嬉しいまでであるからね」

「そうじゃな。無職の割にいいアイデアじゃな」

「やちよさん、むーしょくつ!」

「……ああ、うん。そうね」

凹まないで、きつといいことあるわよ。

それでも無職なんだけどね♪

「みたま、あなたは本当に覚えておきなさいよ。困るようなやつっこみまくって滅茶苦茶にしてやるわ……!」

はいはい無職無職。

続けるわよお。

気が動転していたのかしらねえ、なぜか『君が代』を歌いながら応答ボタンをタップしてスマホを耳に当てると、『ぎし、ぎし』というな

にかが軋むような音が聞こえてきたの。

『ぎし、ぎし』ですって？ その後に『あん、あん』が続かなかつたかしら？」

「！ ぐふっ……」

「ふははっ！」

「早速ぶっこんできましたね」

七海やちよ

1D6 (6以外成功) ↓ 4 成功

『ぎし、ぎし』はキーワードよお。

「お手柄じゃのう無職」

「うむ、よくやったな無職」

「残りふたつですね。感謝します。でも早くお仕事を見つけてくださいね」

「あなたたちもうるさいわよ！ 早く続けなさいよみたまあつ！」

はいはい無職無職。

それで、えつと？

ああ、そうそう。『ぎし、ぎし、あん、あん』っていう喘ぎ声が聞こえてきたのよ。

「最悪な朝だな」

そしてねえ、『もう見てくれないのかよ？』というどことなくフェリシアちゃんに似た声が聞こえたあと、また、『ぎし、ぎし、あん、あん』という喘ぎ声。

「自分たちは今、とてつもなく酷い話を聞かされているな」

「一番かわいそうなのはフェリシアさんね」

「お主が元凶じゃろうて」

わたしの体はまだ言うことを聞いてくれない。

ベッドから起き上がって、一步、また一步……みかづき荘が見える窓に向かって行って……見えないように閉めていたカーテンを開けて、わたしの視線は吸い寄せられた。今日はタバコを吸っていないなかったわあ。

まっすぐ、まっすぐ、フェリシアちゃんはわたしを見ていたの。目

を離すことができなかつたわあ。

フェリシアちゃんは口をにい、と三日月に裂いて笑っていたの。

「みかづき荘に住んでいるからな」

「とういか違うであろう? 『笑っていた』のではなくて、『恍惚な表情を浮かべていた』のじゃろう?」

「ちよつと、百恵さんまで!」

星奈百恵

1D6 (2以外成功) ↓ 2 失敗

「あ、死んでしまうた」

「代わりに受けます」

常盤ななか

恐怖耐久度 1 ↓ 0

「キヤラロストですね。残りのキーワード、頼みましたよ」

「うむ、任せよ。それで、キーワードはなんじゃ?」

(コロコロ) ……残念、キーワードは『人影』。もう出ちやつているわねえ。

「ぐ、ななかすまん」

それで、そんな恐ろしい表情で笑っていたフェリシアちゃんなんだけど……わたしね、気が付いちやつたの。

フェリシアちゃんの体が揺れていることに、そして首が異様に伸びているのに。

「アタシがぶっこぬくぞ。『科学者』の効果で二枚抜きだ。『揺れている』んじゃないんで『素っ裸』で、『首が異様に』じゃなくて『ベッドで』伸びていたんだろ!」

「あー……もう、めちやくちやね」

「年長者が揃いも揃って壊れてしまいましたか」

都ひなの

1D6 (4以外成功) ↓ 3 成功

そうそう、見間違えちゃったわあ。

フェリシアちゃんの体が素っ裸で、そしてベッドで伸びていたのよお。

「なにをどう見間違えたんだ？」

ちなみにふたつともキーワードじゃないわよお。残念でした♪

「ただフェリシアさんを辱めただけじゃないの」

「あなたたち謝っておきなさいよ」

「謝るときはお主も一緒じゃぞ、無職」

それでその、ベッドで伸びているフェリシアちゃんの笑みが深く  
なった瞬間、わたしは小さく悲鳴を上げて気を失ったの。

「上げたのは『悲鳴』じゃなくて『雄たけび』じゃろうて」

星奈百恵

1D6 (2以外成功) ↓ 3 成功

そうそう。雄たけびを上げて鼻血を噴き出しながら気絶しちゃっ  
たのよ。

「興奮しているんじゃないわよ」

後日、わたしはインターネットで、新しいみかづき荘について調べ  
てみたの。

『インターネット』で調べたんだっけか？」

あら、なんだったかしら？

『ニヤルラトホテプに訊いて調べた』って言っていなかったか？」

和泉十七夜

1D6 (1以外成功) ↓ 1 失敗

恐怖耐久度 2 ↓ 1

そうだったわあ。

知り合いのニヤルちゃんに訊いて調べてもらったんだったわ。

「みたまさんって何者ですか？」

「気軽に神格呼び出すなよ」

「というか普通に問い詰めればよかったんじゃないののか？」

それで話を聞くとねえ、どうもあそこは、住んだ女の子たちを痴女  
に変える家だったらしいの。

「は？」

「なんて？」

「お主は一体何を言っておるのじゃ？」



なんかの神話的な術式が仕込まれていたみたいでね、住んだ子たちをみんな痴女に変えちゃうんだって言っていたのよ。

そう、あの朝わたしが見た、わたしに見られることで興奮していたフエリシアちゃんのように。

「え？　ということはどうですか？　もしかして見えてなかっただけで、他のみかづき荘の方もそんな状態だったのでしようか？」

「酷い飛び火の仕方をしておるな」

わたしが最初、調整屋さんと使っていた廃墟は事故物件じゃなかったけど、今はみんなも知つての通り新西区の『神浜ミレナ座』に変えたわ。

「英断ですね」

「というか充分事故物件だったと思うが？」

わたしが使っていた廃墟が事故物件じゃなくても、向かいにある建物が事故物件の可能性がある。

みんなも廃墟だけじゃなくて、新しい生活を送るための家を探しているなら、自分が住もうとしている家だけじゃなくて、周りの家のことも調べることをお勧めするわ。

……はい！　これでしゅーりよー！

「あ、あれ？　終わった？」

うん、終わったわあ。

当てたキーワードは八個。残念でした♪

それじゃあ感想を聞かせてもらおうかしらあ。わたしの怪談が怖かったか、怖くなかったか。

「怖かったぞ」

「うむ、怖かった」

「怖かったです」

「怖かったな」

「ええ、怖かったわ」

「充分怖かったわよ。いろいろな意味で」

満場一致ね。

それじゃあ今日はわたしの勝ち♪

ということで、お疲れ様あ。

『お疲れ様（だな、じゃ、です）』

「さて、全員でフェリシアに謝りに行くわよ」

「お主は土下座するんじゃないぞ？」

「全部の元凶はやちよさんだからねえ」